

なか や しき に
中 屋 敷 II 遺 跡

—県営ほ場整備事業（土崎・小荒川地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

2005・3

秋田県教育委員会



空から見た中屋敷II遺跡（西→）



中屋敷Ⅱ遺跡遠景（東→）



第2次調査 コの字状調査区（南→）



第2次調査 神社北側調査区（南→）

序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものあります。

一方、農業地域においては、用排水路網の整備と水田の大区画化により、農業の大規模化と担い手の育成を目的とするほ場整備事業が行われております。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、県営ほ場整備事業に先立ち、美郷町土崎・小荒川地区において、平成14年度に第1次調査を、平成15年度に第2次調査を実施した中屋敷Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、第1次調査では、縄文時代の竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、配石遺構、捨て場などのほか、平安時代の竪穴住居跡、土坑も検出されました。第2次調査では、縄文時代の捨て場や土坑、土器埋設遺構などのほか、平安時代の竪穴住居跡、中世及び近世の掘立柱建物跡が検出されました。これらのことから、本遺跡では縄文時代に集落が営まれ始め、その後も古代から中世、近世にわたり、この地に人々が生活していたことが分かりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県仙北平野農村整備事務所、美郷町教育委員会など関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺 清

例　　言

- 1 本書は県営ほ場整備事業（土崎・小荒川地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊目である。
- 2 本書は平成14年度（第1次調査）および平成15年度（第2次調査）に発掘調査した秋田県仙北郡千畠町（現美郷町）土崎字中屋敷に所在する、中屋敷II遺跡の調査成果を収めたものである。
- 3 発掘調査の成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センターワークス』や『平成15年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』および新聞報道などで公表されているが、本報告書の記載内容がすべてに優先する。
- 4 本書に使用した地形図は、秋田県仙北平野農村整備事務所提供の1,000分の1「土崎・小荒川地区ほ場整備計画図」と国土地理院発行の50,000分の1地形図「六郷」、25,000分の1地形図「六郷」である。
- 5 平成16年11月1日に、千畠町と六郷町・仙南村の3町が合併して「美郷町」が発足した。本遺跡が所在する旧千畠町については、仙北郡「千畠町」の表記を「美郷町」と読み替える住所表示の変更となったため、例言・報告書抄録を除く本文中においても同様に読み替えていただきたい。なお、報告書抄録中の市町村コードについては、合併前の千畠町旧コードを記載した。
- 6 本書の挿図中に使用した土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版土色帖2000年版』を使用した。
- 7 本書の航空写真は、第1次調査ではシン技術コンサル株式会社、第2次調査ではデジタルビジネス秋田が撮影したもの、および昭和50年に建設省国土地理院が撮影したものを掲載した。
- 8 本書の各調査年次における自然科学的分析は、第1次調査ではパリノ・サーヴェイ株式会社に、第2次調査では株式会社パレオ・ラボに委託した分析報告を収載した。また、第2次調査の出土遺物に関する高精度年代測定は、国立歴史民俗博物館と東京大学原子力研究総合センターの協力を得て、平成16年度文部科学省科学研究費補助金学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア一炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」（研究代表：西本豊弘）の成果の一部を収載した。
- 9 本遺跡の発掘調査ならびに報告書刊行にあたり、次の方々より御指導、御教示を賜った。記して謝意を表します（敬称略）。

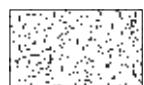
小林謙一 八重樫忠郎 富樫泰時 山形博康 榎本剛治
- 10 本書の執筆は次のように分担した。

はじめに	石澤宏基
遺跡の立地と環境	石澤宏基
中屋敷II遺跡（第1次調査）	児玉 準・伊藤伸吾・五十嵐一治
中屋敷II遺跡（第2次調査）	石澤宏基
- 11 本書の編集は、児玉準と石澤宏基が行った。

凡 例

- 1 本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。グリッドの座標原点はMA50杭で、第2次調査：X = -59852.115、Y = -22398.733、標高=50.407mである。また、座標北と磁北との偏角は西偏11'34"である。
- 2 遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

S I ……堅穴住居跡	S B ……掘立柱建物跡	S K ……土 坑
S N ……焼土遺構	S R ……土器埋設遺構	S D ……溝 跡
S T ……捨て場	S E ……井 戸 跡	S K P ……柱穴様ピット
S X ……性格不明遺構		
- 3 基本的に遺構実測図は1/20と1/10の縮尺、遺物実測図は1/2及び1/3の縮尺で掲載した。しかし、挿図割付の関係上、さらに若干の縮小を施した挿図もある。各頁に付したスケールを参照されたい。
- 4 発掘調査の結果、検出した遺構のうち、規模の小さな柱穴様ピットについては、平面配置のみを掲載した。
- 5 土層の層序に用いた数字は、基本層位にローマ数字を、遺構内層位に算用数字を用いた。
- 6 挿図中の遺物番号は、各頁ごとに付した。
- 7 挿図中に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外については個々の頁に凡例を示した場合もあるので参照されたい。



焼土範囲
(遺構挿図)



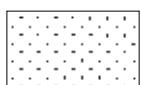
炭化物範囲
(遺構挿図)



炭化物付着部分
(遺物挿図)



内面黒色処理
(遺物挿図)



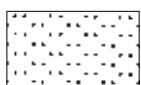
凹み
(遺物挿図)



敲き
(遺物挿図)



磨り
(遺物挿図)



研ぎ
(遺物挿図)



施釉
(遺物挿図)

目 次

卷頭図版	
序	
例 言	
凡 例	
目 次	

はじめに	
1 調査に至る経過	1
2 調査要項	2
遺跡の環境	
1 遺跡の立地	4
2 歴史的環境	6

第1次調査（平成14年度）

第1章 発掘調査の概要	15
第1節 遺跡の概観	15
第2節 調査の方法	15
第3節 調査の経過	16
第4節 整理作業の方法	17
第2章 調査の記録	24
第1節 基本層序	24
第2節 検出遺構と遺物	25
1 縄文時代	25
2 弥生時代	116
3 平安時代	116
第3節 遺構外出土遺物	125
第3章 自然科学的分析	139
第1節 中屋敷II遺跡から出土した木材の年代と樹種	139
第4章 まとめ	143

図版

第2次調査（平成15年度）

第1章 発掘調査の概要	195
第1節 遺跡の概観	195
第2節 調査の方法	195
第3節 調査の経過	196
第2章 調査の記録	196
第1節 基本層序	196
第2節 検出遺構と遺物	200
1 縄文・弥生時代	200
2 平安時代	270
3 中世	278
4 近世	286
第3節 遺構外出土遺物	288
第3章 自然科学的分析	294
第1節 中屋敷II遺跡第2次調査出土土器付着物の ¹⁴ C年代測定	294
第2節 放射性炭素年代測定	302
第3節 花粉化石群集	304
第4節 樹種同定	308
第5節 大型植物化石	309
第4章 まとめ	310

図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第51図 S K1277・1291・1317・1333・1334	84
第2図 地形区分図	2	第52図 S K1337・1347・1350・1377～1379	86
第3図 周辺遺跡位置図	7	第53図 S K1390出土遺物	87
第4図 調査範囲図	11	第54図 S K1390出土遺物	88
第1次調査		第55図 S K1392・1393・1412・1416・1418・1419・1421	90
第5図 グリッド配置図	18	第56図 S K1426～1428・1438・1442・1445・1451・1457	
第6図 遺構配置図（A区北・中央）	19	・1461	92
第7図 遺構配置図（B区）	20	第57図 S K1501・1511・1524・1526・1528・1532・1537	94
第8図 遺構配置図（C区北・中央）	21	第58図 S K1538・1539・1545・1546・1560	96
第9図 遺構配置図（C区南・中央）	22	第59図 S K1590・1593・1594	97
第10図 遺構配置図（E区）	23	第60図 S K1602・1603・2029・2046	99
第11図 E区土層模式図	25	第61図 S K2049	100
第12図 S I 1373	26	第62図 S K2056・2091・2092・2116・2118・2125	102
第13図 S I 1373出土遺物（1）	27	第63図 S K2127・2212・2213	103
第14図 S I 1373出土遺物（2）	28	第64図 S K2218・2526・2570・2577・2604・2609	105
第15図 S I 1482	30	第65図 S R01・02・98	107
第16図 S I 1488	31	第66図 S R194・301	108
第17図 S I 1488出土遺物	32	第67図 S R307・357・452	109
第18図 S I 1491	34	第68図 S R471・574	111
第19図 S I 1491出土遺物	35	第69図 S R756・1439・1476・1490	112
第20図 S I 1520	36	第70図 S R1598・2074・2084	114
第21図 S I 1520出土遺物	37	第71図 S R2155・2600	115
第22図 S I 1604	39	第72図 S T36・2090土層	117
第23図 S I 1604出土遺物	40	第73図 S T36出土遺物（1）	118
第24図 S I 2013	41	第74図 S T36出土遺物（2）	119
第25図 S I 2016	43	第75図 S T2090出土遺物（1）	120
第26図 S I 2016出土遺物	44	第76図 S T2090出土遺物（2）	121
第27図 S I 2023	45	第77図 S T2090出土遺物（3）	122
第28図 S I 2023出土遺物	46	第78図 S I 1034	123
第29図 S I 2089	48	第79図 S I 1034出土遺物	124
第30図 S I 2117	30	第80図 S K365・367	126
第31図 S I 2578	51	第81図 遺構外出土遺物（1）	127
第32図 S I 2089・2117・2578出土遺物	52	第82図 遺構外出土遺物（2）	128
第33図 S N2231・2505	53	第83図 遺構外出土遺物（3）	129
第34図 S N2505出土遺物・S Q2517	54	第84図 遺構外出土遺物（4）	131
第35図 S K18・38・64・78・83	56	第85図 遺構外出土遺物（5）	132
第36図 S K92・94・95・97	58	第86図 遺構外出土遺物（6）	133
第37図 S K99・119・131・148・186・193	59	第87図 遺構外出土遺物（7）	134
第38図 S K225・303・304・308	61	第88図 遺構外出土遺物（8）	135
第39図 S K310・345・349・360	63	第89図 遺構外出土遺物（9）	137
第40図 S K362～364・366・369・371	64	第90図 遺構外出土遺物（10）	138
第41図 S K372・379・382・390・393	66	第91図 放射線炭素年代測定結果	141
第42図 S K394・401・402・408・409・451	68		
第43図 S K460・461・594・607・615・726・753・762	69		
第44図 S K785・919・931・948・954～956・958	71		
第45図 S K976・983・994・1004・1007・1497	72		
第46図 S K1031・1032・1050・1055・1100～1102	75		
第47図 S K1103～1105・1124・1125・1207	77		
第48図 S K1147・1148・1161・1205・1207	79		
第49図 S K1222・1223・1228・1229	81		
第50図 S K1230・1231・1260・1271・1275	82		

第100図	S K24・25・29・31・35・36土坑	210	第134図	S K205・253土坑・S X245その他の遺構	257
第101図	S K38・39・41・47・162土坑	212	第135図	S K I 414～416堅穴状遺構	259
第102図	S K58・65・69・573土坑	214	第136図	S K I 441・442堅穴状遺構・出土遺物	261
第103図	S K94・96・100・102・103・525・532土坑	216	第137図	S K370・372・373・395土坑・出土遺物	262
第104図	S K110・121・124土坑	217	第138図	S K396・398・399土坑・出土遺物	264
第105図	S K140・141・152土坑	219	第139図	S K400土坑・出土遺物	266
第106図	S K224・243・393・409土坑	221	第140図	S K400～403・420～422土坑・出土遺物	267
第107図	S K419土坑・S R20土器埋設遺構・S D54	223	第141図	S K428土坑・出土遺物	268
第108図	S D166溝跡・S K P柱穴様ピット(1)	225	第142図	S K429土坑・出土遺物	270
第109図	S K P柱穴様ピット(2)	227	第143図	S K430・438土坑・出土遺物	271
第110図	S K P柱穴様ピット(3)	229	第144図	S K431・432・580土坑・出土遺物	272
第111図	S K P柱穴様ピット(4)	231	第145図	S K433～436土坑・出土遺物	274
第112図	S K P柱穴様ピット(5)	233	第146図	S K435・437・439土坑・出土遺物	276
第113図	S T37捨て場出土遺物(1)	235	第147図	S K443土坑・S E423井戸跡・S N440焼土遺構・ 出土遺物	277
第114図	S T37捨て場出土遺物(2)	236	第148図	S B308掘立柱建物跡・S K I 265堅穴状遺構・ S K350・363・411土坑	279
第115図	S T37捨て場出土遺物(3)	237	第149図	S K303・304・363土坑	281
第116図	S T37捨て場出土遺物(4)	238	第150図	S B209掘立柱建物跡・S X305その他の遺構	283
第117図	S T37捨て場出土遺物(5)	239	第151図	遺構外出土遺物(1)	285
第118図	S T37捨て場出土遺物(6)	240	第152図	遺構外出土遺物(2)	286
第119図	S T37捨て場出土遺物(7)	241	第153図	遺構外出土遺物(3)	287
第120図	S T37捨て場出土遺物(8)	242	第154図	遺構外出土遺物(4)	288
第121図	S T37捨て場出土遺物(9)	243	第155図	遺構外出土遺物(5)	289
第122図	S T37捨て場出土遺物(10)	244	第156図	遺構外出土遺物(6)	290
第123図	S T37捨て場出土遺物(11)	245	第157図	遺構外出土遺物(7)	291
第124図	S T37捨て場出土遺物(12)	246	第158図	遺構外出土遺物(8)	292
第125図	S T37捨て場出土遺物(13)	247	第159図	遺構外出土遺物(9)	293
第126図	S T37捨て場出土遺物(14)	248	第160図	中屋敷II遺跡(第2次調査) ¹⁴ C年代測定 土器	298
第127図	S T37捨て場出土遺物(15)	249	第161図	暦年代較正の確率分布(1)	299
第128図	S T37捨て場出土遺物(16)	250	第162図	暦年代較正の確率分布(2)	300
第129図	S T37捨て場出土遺物(17)	251	第163図	暦年代較正の確率分布(3)	301
第130図	S T37捨て場出土遺物(18)	252			
第131図	S T37捨て場出土遺物(19)	253			
第132図	S T37捨て場出土遺物(20)	254			
第133図	S K01・02・187土坑・S K P07・11柱穴様ピット	255			

表 目 次

第1次調査

第1表	周辺遺跡一覧	第6表	測定結果及び較正年代
第2表	放射線炭素年代測定および樹種同定結果	第7表	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果
第3表	第2次調査の検出遺構一覧	第8表	花粉化石産出一覧表
第4表	測定資料一覧	第9表	樹種同定結果
第5表	試料の重量と炭素含有率	第10表	出土した大型植物化石

図版目次

卷頭図版1	空から見た中屋敷II遺跡	卷頭図版3	第2次調査コの字状調査区
卷頭図版2	中屋敷II遺跡遠景	卷頭図版4	第2次調査神社北側調査区

第1次調査

- 図版1 空から見た中屋敷II遺跡
図版2 空から見た中屋敷II遺跡
図版3 1 S I 1373 2 S I 1373炉
図版4 1 S I 1482 2 S I 1482炉
図版5 1 S I 1488 2 S I 1488炉
図版6 1 S I 1491炉 2 S I 1520
図版7 1 S I 1604 2 S I 1604炉
図版8 1 S I 2013炉 2 S I 2016
図版9 1 S I 2023炉 2 S I 2089炉
図版10 1 S I 2117 2 S I 2578炉
図版11 1 S N2505 2 S N2505
図版12 1 S Q2517 2 S K18遺物出土状況
図版13 1 S K148 2 S K255 3 S K310
図版14 1 S K349 2 S K363 3 S K390
図版15 1 S K394 2 S K461 3 S K615
図版16 1 S K919 2 S K948 3 S K1004
図版17 1 S K1007 2 S K1050 3 S K1100
図版18 1 S K1101・1102 2 S K1105
3 S K1124
図版19 1 S K1155・1125 2 S K1145
3 S K1161
図版20 1 S K1207 2 S K1223 3 S K1229
図版21 1 S K1231 2 S K1277 3 S K1333
図版22 1 S K1334 2 S K1377 3 S K1378
図版23 1 S K1379 2 S K1392 3 S K1416

- 図版24 1 S K1426 2 S K1451 3 S K1457
図版25 1 S K1526 2 S K1532 3 S K1539
図版26 1 S K1560 2 S K2116 3 S K2570
図版27 1 S R01 2 S R98 3 S R194
図版28 1 S R307 2 S R452 3 S R471
図版29 1 S R1476 2 S R1490 3 S R2084
図版30 1 S R2155 2 S R2600 3 S R2600
図版31 1 S T36 2 S T36
図版32 1 S T36 2 S T2090
図版33 1 S I 1034 2 S K364・365
図版34 遺構内出土土器
図版35 遺構内出土土器
図版36 遺構内出土土器
図版37 遺構内出土土器
図版38 遺構内出土土器
図版39 遺構内出土土器
図版40 遺構内出土土器
図版41 遺構外出出土土器
図版42 1・2 遺構外出出土石器
図版43 1・2 遺構外出出土石器
図版44 1・2 遺構外出出土石器
図版45 1・2 遺構外出出土石器
図版46 1 遺構外出出土石器 2 遺構外出出土土製品・石製品
図版47 1 遺構外出出土石製品 2 遺構外出出土錢貨
図版48 樹種同定顕微鏡写真

第2次調査

- 図版1 ヲの字状調査区（1）
図版2 ヲの字状調査区（2）
図版3 ヲの字状調査区（3）
図版4 ヲの字状調査区（4）
図版5 ヲの字状調査区（5）
図版6 ヲの字状調査区（6）
図版7 ヲの字状調査区（7）
図版8 ヲの字状調査区（8）
図版9 ヲの字状調査区（9）
図版10 ヲの字状調査区（10）
図版11 ヲの字状調査区（11）
図版12 ヲの字状調査区（12）
図版13 ヲの字状調査区（13）
図版14 ヲの字状・神社北側・北東調査区外の区域（1）
図版15 ヲの字状・神社北側・北東調査区外の区域（2）
図版16 神社北側調査区（1）
図版17 神社北側調査区（2）
図版18 神社北側調査区（3）
図版19 神社北側調査区（4）
図版20 神社北側調査区（5）

- 図版21 神社北側調査区（6）
図版22 神社北側調査区（7）
図版23 神社北側調査区（8）
図版24 神社北側調査区（9）
図版25 神社北側調査区（10）
図版26 神社北側調査区（11）
図版27 神社北側調査区（12）
図版28 神社北側調査区（13）
図版29 神社北側調査区（14）
図版30 神社北側調査区（15）
図版31 北東調査区（1）
図版32 北東調査区（2）
図版33 北東調査区（3）
図版34 北東調査区（4）
図版35 ヲの字状調査区出土遺物（1）
図版36 ヲの字状調査区出土遺物（2）
図版37 ヲの字状調査区出土遺物（3）
図版38 ヲの字状調査区出土遺物（4）
図版39 炭化物付着土器年代測定（1）
図版40 炭化物付着土器年代測定（2）

図版41 炭化物付着土器年代測定（3）

図版42 炭化物付着土器年代測定（4）

図版43 炭化物付着土器年代測定（5）

図版44 産出花粉化石

図版45 樹種同定顕微鏡写真

図版46 大型植物化石

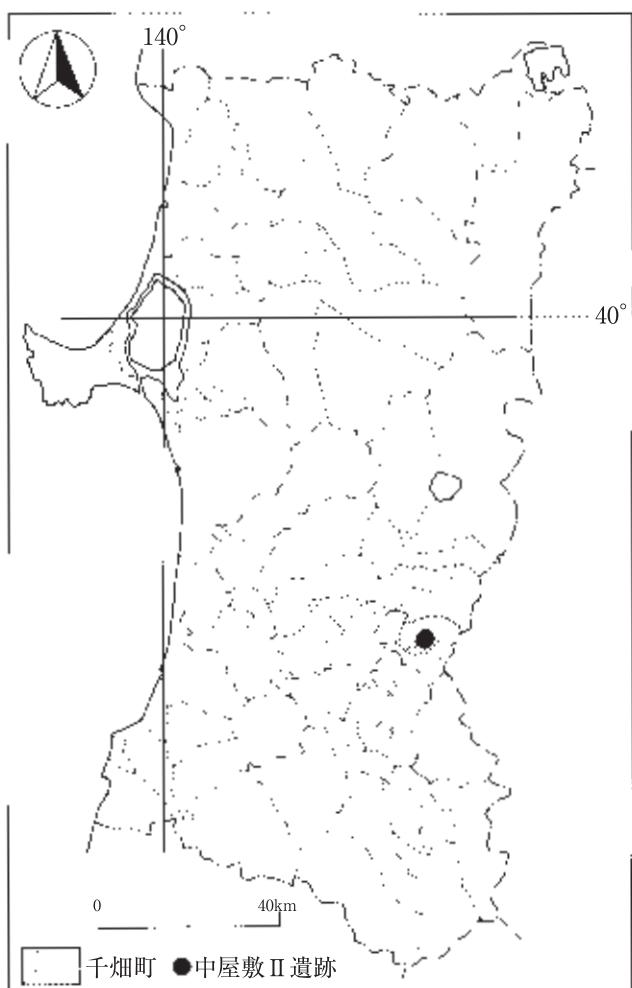
はじめに

1 調査に至る経過

秋田県農林水産部は、農業の近代化と大規模経営をいっそう推進するため、県営ほ場整備事業を実施している。本事業は農地の大区画化および農道・用排水路網の整備を行い、農業経営環境の改善と安定を図ることによって、新たな農業の担い手を育成することを目的としている。

千畠町土崎・小荒川地区の県営ほ場整備工事区域は『秋田県遺跡地図（県南版）』（1989年、秋田県教育委員会刊）の記載にあるように、埋蔵文化財が包蔵されていることが判明していた。このため、本事業を計画・実施する秋田県仙北平野農村整備事務所は、文化財保護法に基づき、工事に先立って事実確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査と指導を依頼した。これを受け秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室は、踏査・試掘および確認調査の結果、記録保存の必要な遺跡がある場合は、発掘調査を実施すべきことを回答した。

平成12年12月19日、文化財保護室と千畠町教育委員会が土崎・小荒川地区の踏査・試掘を行った結果、事業予定地内に中屋敷Ⅰ遺跡（54-4）、中屋敷Ⅱ遺跡（54-5）の周知の遺跡2箇所が存在していた。このうち、中屋敷Ⅱ遺跡については、確認調査（平成13年10月17日～11月2日および11月26日～12月7日）を実施し、工事区域内に54,500m²の遺跡面積が含まれることが判明した。そのうち、施工上破壊を免れない10,000m²分の発掘調査を秋田県埋蔵文化財センターが担当した（第1次調査：平成14年5月13日～10月7日）。続く平成14年11月18日～12月6日、同遺跡の事業予定地内で2回目の確認調査を実施し、工事区域内に22,000m²の遺跡面積が含まれることが判明した。そのうち、施工上破壊を免れない3,800m²分の発掘調査を秋田県埋蔵文化財センターが担当した（第2次調査：平成15年5月13日～7月29日）。以上の経緯に基づき、秋田県埋蔵文化財センターは、平成14・15年度の第1次・第2次に渡って、合計面積13,800m²の中屋敷Ⅱ遺跡発掘調査を実施するに至った。



第1図 遺跡の位置

2 調査要項

遺 跡 名	中屋敷Ⅱ遺跡（なかやしきにいせき）：遺跡略号 7 N Y S Ⅱ		
遺 跡 所 在 地	第1次調査：秋田県仙北郡千畠町土崎字中屋敷25外 第2次調査：秋田県仙北郡千畠町土崎字中屋敷180-1外		
調 査 期 間	第1次調査：平成14年5月13日～10月7日 第2次調査：平成15年5月13日～7月29日		
調 査 目 的	県営ほ場整備事業（土崎・小荒川地区）に係る埋蔵文化財事前発掘調査		
調査対象面積	第1次調査：10,000m ² 第2次調査：3,800m ²		
調 査 面 積	第1次調査：10,000m ² 第2次調査：3,800m ²		
調査主体者	秋田県教育委員会		
調査担当者	秋田県埋蔵文化財センター（所属と職名は当該年度） 第1次調査：平成14～15年度 発掘・整理担当者 斎藤 重隆 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 学芸主事 伊藤 伸吾 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 学芸主事 五十嵐一治 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 学芸主事 高安 直美 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 非常勤職員 本間 輿和 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 非常勤職員 第2次調査：平成15年度 発掘・整理担当者 石澤 宏基 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 学芸主事 打矢 泰之 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 調査・研究員 千葉 史宏 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 調査・研究員 第1～2次調査：平成16年度 整理担当者 児玉 準 秋田県埋蔵文化財センター南調査課 調査課長 石澤 宏基 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 学芸主事		
総務担当者	平成14年度 総務担当者 佐藤 悟 秋田県埋蔵文化財センター総務課 総務課長 高橋 修 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主任 成田 誠 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事 平成15年度 総務担当者 金 義晃 秋田県埋蔵文化財センター総務課 総務課長 高橋 修 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主任 田口 旭 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事		

平成16年度 総務担当者

渡辺 憲	秋田県埋蔵文化財センター総務課	総務課長
高橋 修	秋田県埋蔵文化財センター総務課	主任
田口 旭	秋田県埋蔵文化財センター総務課	主事

調査協力機関 秋田県仙北平野農村整備事務所 千畳町教育委員会

《参考文献》

秋田県『秋田県史考古編』 1960（昭和35）年

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』 1987（昭和62）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第324集 2001（平成13）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第342集 2002（平成14）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集 2003（平成15）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第380集 2004（平成16）年

千畳村『千畳村郷土誌』千畳村郷土誌編纂委員会 1986（昭和61）年

千畳町教育委員会『中屋敷Ⅱ遺跡』千畳町埋蔵文化財調査報告書第6集 2004（平成16）年

遺跡の環境

1 遺跡の立地

中屋敷Ⅱ遺跡は秋田県の東部、仙北郡千畠町にある。千畠町は、仙北平野北東部と真昼山地が含まれる奥羽山脈の西麓に位置しており、北は太田町、南は六郷町、西は仙北町と大曲市、東は奥羽山脈を挟んで岩手県の沢内村と湯田町と境を接する。町の規模は東西約14.3km、南北約8.9kmにおよび、総面積は86.33km²、人口8,629人（平成16年3月末現在）の町である。

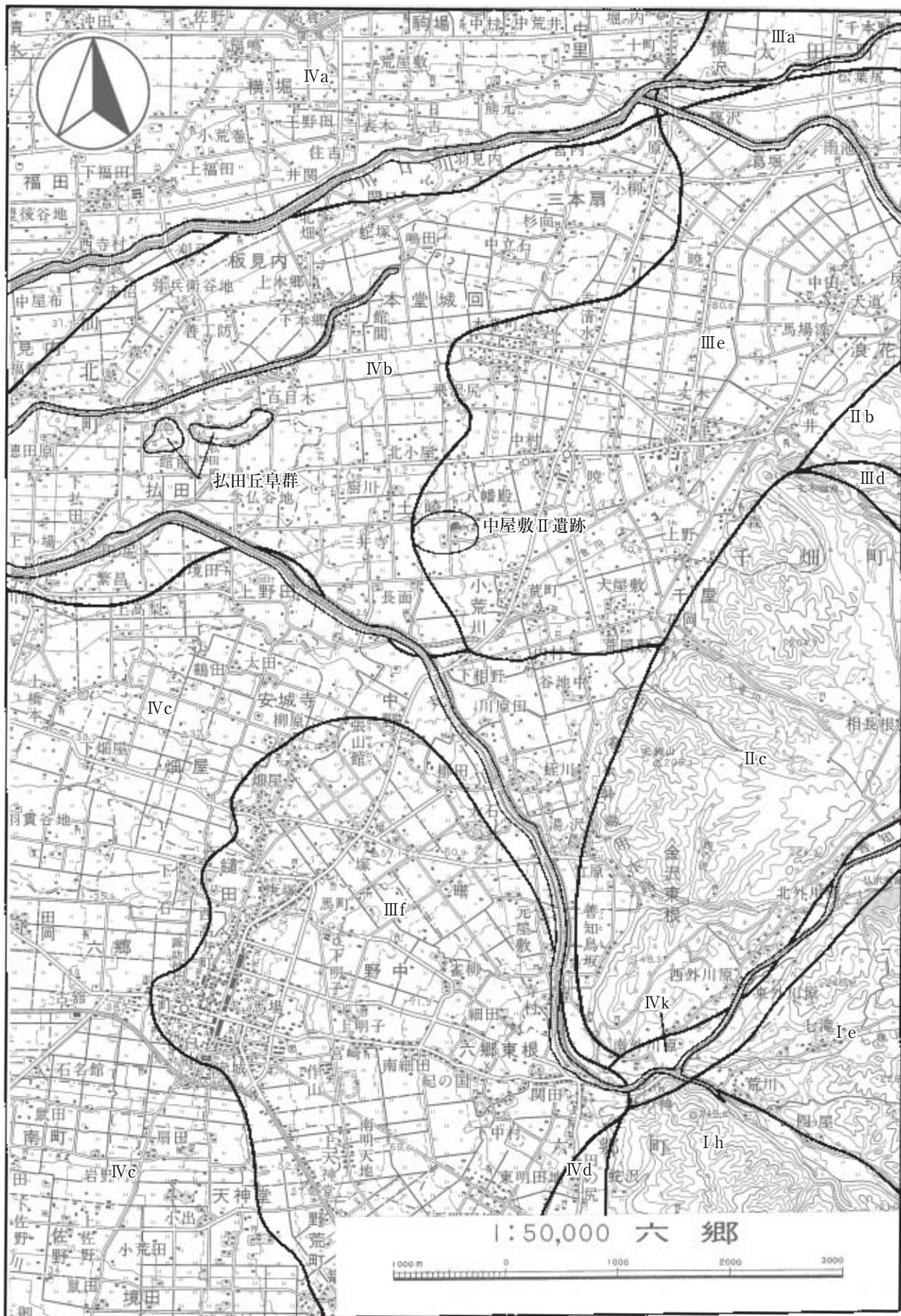
町域東部には真昼岳（1,059.9m）を主峰とし、南の女神山（955.8m）、北の黒沢大台山（832.9m）が連なる真昼山地がある。この真昼山地は、東側に比べて西側が急な斜面であり、断層崖が浸食を受けた地形となっている。その下の町域中部は丘陵地となっており、天狗山（205.3m）を頂点とする天狗山丘陵（Ⅱ c）などの丘陵地群がある。これら丘陵地は元は扇状地であったが、天狗山丘陵の西側に発達した断層群の活動によって隆起し、高くなった地形である。この断層群の一つである千屋断層は、1896（明治29）年8月31日に真昼山地を震央とした陸羽大地震を起こした活断層として知られている。

町域西部は真昼山地を源流とした諸河川（大台川、真昼川、釜淵川、赤倉川、丸子川など）が断層崖を浸食して土砂を運搬し、各々扇状地を形成している。このような扇状地では、粘土層や岩盤などの不透水層に達した地下水が低地側に流れ、扇端で清水となって地表に湧き出る場所がある。それが千畠町本堂城廻から土崎、小荒川、安城寺、上畠屋、六郷町六郷に至る一帯で、標高50m前後の真昼川・釜淵川合成扇状地（Ⅲ e）と丸子川扇状地（Ⅲ f）の扇端を成す湧水地帯である。本遺跡は、真昼川と釜淵川が運ぶ河成堆積物によって形成された真昼川・釜淵川合成扇状地（Ⅲ e）の扇端部にあり、湧水線より下流域に位置している。

この豊かな水源は古くから知られており、菅江真澄の地誌『月の出羽路』廿卷ノ下、仙北ノ郡、板見内之部の中の「諏方田のはつほ 土崎邑」にある「林の腰の寒泉 此清水を水上として一村のいな田を作るといふ」という記述からも、農業用水・生活用水として利用されていたことが窺える。本遺跡に最も近接する湧水地点は、第2次発掘調査区の東端に位置する「弥之助清水」や、その北側に位置する「大清水」がある。なお、これらの清水には秋田県版絶滅危惧種ⅠA類に分類されているイバラトミヨ（地元では通称ハリザッコと呼称）が生息している。

町域の西端から仙北町、太田町、大曲市にかけては扇状地から低地となり、現在は平坦肥沃な水田地帯である。地形区分上は齊内川、真昼川、丸子川扇状地前延扇状構造低地（IV a・b・c）だが、国指定史跡払田柵跡がある真山・長森部分のみ丘陵地（払田丘阜群）となる。

本遺跡の表層地質は、第四紀洪積世の未固結堆積物（段丘堆積物）である。この付近の第四紀の堆積物は、泥・砂・礫の他に植物片・炭質物・泥炭を含んでいる。このような構成内容からも河成堆積物であると言える。土壤区分上は扇央側が細粒質のグライ土壤である浅津統で、扇端側が微粒質のグライ土壤である幡野統に属する。



第2図 地形区分図

2 歴史的環境

中屋敷Ⅱ遺跡の周辺には多数の遺跡が存在する。昭和62年12月刊行の『秋田県遺跡地図（県南版）』によると、千畠町内に26か所の埋蔵文化財包蔵地が周知の遺跡として記載されている。さらに平成13年度以降、県営ほ場整備事業を推進するため、秋田県教育委員会と千畠町教育委員会が町内の遺跡分布調査（踏査・試掘）を行った結果、新発見の遺跡が多数確認され、周知の遺跡についても既存の範囲を見直さねばならない事実が判明している。以後は調査が本格化し、平成13年に厨川谷地遺跡(9,100m²)、平成14年に中屋敷Ⅱ遺跡（第1次調査=10,000m²、千畠町調査=3,515m²）、平成15年には中屋敷Ⅱ遺跡（第2次調査=3,800m²）および十二遺跡（m²）と上飛沢遺跡（m²）の計4遺跡が発掘調査されている。これらのうち、中屋敷Ⅱ遺跡の周辺遺跡を第3図に掲載した。以下、時代および時期ごとに当該地域の主要な遺跡について述べる。

旧石器時代の遺跡は、現在のところ千畠町内およびその周辺では確認されていない。県南部の雄物川流域では、協和町米ヶ森遺跡、南外村小出I・IV遺跡、雄物川町新道I遺跡、横手市大乗院塚遺跡、山内村小田V遺跡、羽後町新成遺跡などがある。このうち協和町米ヶ森遺跡は、県内で初めて発掘調査が行われた旧石器時代の遺跡であり、米ヶ森型台形石器の標識遺跡としても著名である。

縄文時代草創期の遺跡は、県南全体でも横手川上流の山内村岩瀬遺跡があるのみで、千畠町内およびその周辺では確認されていない。

縄文時代早期の遺跡は、雄物川上流にある国指定史跡雄勝町岩井堂岩陰遺跡（昭和53年、国指定）や、中仙町野口遺跡などがある。中屋敷Ⅱ遺跡に比較的近い中仙町野口遺跡（49-21・22）は、1973年（昭和48年）に中仙町教育委員会によって発掘調査され、縄文早期の爪形文土器約80片が出土した。野口遺跡の主な時期は縄文中期であるが仙北郡内でまとまって早期の遺物が出土した貴重な事例である。

縄文時代前期の遺跡は、仙北郡内においては協和町上ノ山II遺跡など著名な遺跡も複数あるが、本遺跡の近隣では確認されていない。

縄文時代中期の遺跡は、考古学研究家武藤鉄城が1952（昭和27）年に調査し、14基の配石遺構を検出した雲穂野遺跡（54-7）や、千畠村教育委員会（当時）が1965（昭和40）年から4次に渡る発掘調査を実施し、計35軒の竪穴住居跡が検出され、大木8b式期の土器が出土した一丈木遺跡（54-9）がある。一丈木遺跡には、二回建て替えられ、二回とも規模が縮小されている竪穴住居跡が検出されており、規模が拡大するものや増築される例は多いが、この時期の縮小する住居跡は少なく、貴重な例である。また住居軒数の多さから、この地域の中心的集落であったと考えられ、1976（昭和51）年に県史跡に指定された。現在、公園内に竪穴住居跡が一軒復元されている。このほか、秋田県教育委員会が1980（昭和55）年に発掘調査し、複式炉を伴う竪穴住居跡15軒が確認された内村遺跡（54-14）がある。内村遺跡は、住居跡の配置とその内部の複式炉の軸線方向に一定の相互関係が見られ、県内縄文中期集落の様相を示す代表的な遺跡であり、出土した大木式土器も県内の縄文中期土器編年の一指標となっている。

本遺跡（54-5）と中屋敷I遺跡（54-4）も、この地域の縄文時代中期・後期・晩期を代表する遺跡である。中屋敷は、古くは土崎村時代から土器・石器が出土する地として知られ、真昼川・釜淵川合



第3図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧

※下記の番号は、秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）で付された遺跡番号である。

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
52-15	野沢遺跡	太田町三本肩字野沢16~18	縄文時代	遺物包含地
53-1	払田柵跡	仙北町払田	古代城柵	柵跡
53-2	繁昌Ⅰ遺跡	仙北町高梨字繁昌269	平安時代	遺物包含地
53-3	繁昌Ⅱ遺跡	仙北町高梨字繁昌32	平安時代	遺物包含地
53-4	上高梨遺跡	仙北町高梨字上高梨136	平安時代	遺物包含地
53-5	払田城跡	仙北町払田字真山	中世	遺物包含地
53-6	境田城跡	仙北町払田字堺田167外	中世	遺物包含地
53-9	鍛冶屋敷遺跡	仙北町板見内字鍛冶屋敷	平安時代	遺物包含地
53-10	西一つ森遺跡	仙北町堀見内字一つ森139	縄文中期	遺物包含地
53-13	四十八遺跡	仙北町上野田字四十八44	平安時代	遺物包含地
53-14	中村遺跡	仙北町上野田字中村45	平安時代	遺物包含地
53-15	百目木遺跡	仙北町板見内字百目木117	中世	遺物包含地
53-18	弥兵谷地遺跡	仙北町板見内字弥兵谷地93	平安時代	遺物包含地
53-19	一つ森遺跡	仙北町板見内字一つ森139	中世	遺物包含地
53-25	田ノ尻遺跡	仙北町払田字田ノ尻	平安時代	遺物包含地
54-1	払田柵跡	千畠町本堂城回森崎33、148のうち百目木54、239のうち	平安時代	柵跡
54-2	本堂城跡	千畠町本堂城回字館間123外	中世	城館城跡
54-3	厨川谷地遺跡	千畠町土崎字厨川谷地1-6	平安時代	古代祭祀遺跡
54-4	中屋敷Ⅰ遺跡	千畠町土崎字中屋敷42外	中世	寺跡
54-5	中屋敷Ⅱ遺跡	千畠町土崎字中屋敷27-29	縄文・平安・中世	遺物包含地
54-14	内村遺跡	千畠町千屋字内村45	縄文中期・平安時代	竪穴住居跡・和鏡等
54-15	御堰跡	千畠町金沢東根字湯ノ沢141-188	江戸時代	堰跡
54-16	川端山館跡	千畠町金沢東根字川端山	縄文時代・中世城館	館跡（山城）
54-23	砂館跡	千畠町千畠町中野字砂館1外	中世城館	館跡（平城）
54-24	張山館跡	千畠町安城寺字張山館45-2外	中世城館	館跡（平城）
54-25	幡江館跡	千畠町畠屋字外館	中世城館	館跡（平城）
54-26	神尾町館跡	千畠町畠屋字神尾町11-1	中世城館	館跡（詳細不明）

千畠町文化調査報告書第X集『十二遺跡・上飛沢遺跡』（平成16年刊行）に記載された周知の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
54-27	厨川谷地Ⅱ遺跡	千畠町土崎字厨川谷地	平安時代	散布地・土坑等
54-28	厨川谷地Ⅲ遺跡	千畠町土崎字厨川谷地	平安時代	散布地・須恵器甕等
54-29	下中村遺跡	千畠町土崎字下中村	平安時代	散布地・墨書き土器等
54-30	飛沢尻遺跡	千畠町土崎字飛沢尻	平安時代	散布地・墨書き土器等
54-31	下飛沢遺跡	千畠町土崎字下飛沢	平安時代	散布地・土坑・柱穴等
54-32	上飛沢遺跡	千畠町土崎字上飛沢89-1外	縄文・平安時代	散布地・土坑
54-33	上館跡	千畠町土崎字上館	中世・近世	散布地・柱石・縁石等
54-34	十二遺跡	千畠町小荒川字十二101-1	縄文時代	散布地・土坑
54-35	松ノ木遺跡	千畠町土崎字松ノ木	近世	散布地・柱穴様ピット
54-36	八幡殿遺跡	千畠町土崎字八幡殿	平安・中世・近世	散布地・土坑等
54-37	上宿遺跡	千畠町土崎字上宿145-1	縄文時代後期	散布地・縄文土器片

成扇状地（III e）の扇端部に位置することから、湧水線に隣接して縄文中期から晩期にかけての遺構・遺物が一定の距離を置いて検出・出土している。1987（昭和62）年刊行の『秋田県遺跡地図（県南版）』では、遺物所有者の千馬甚堀氏宅から西側を中屋敷Ⅰ遺跡（54-4）、東側を中屋敷Ⅱ遺跡（54-5）と区分していたが、現状では2001（平成13）年に秋田県教育委員会が行った遺跡範囲確認調査によって中屋敷Ⅱ遺跡の範囲が拡大し、中屋敷Ⅰ遺跡を包括している。2002（平成14）年に千畠町教育委員会が行った発掘調査では、中屋敷Ⅱ遺跡北側範囲の農道沿いに、縄文時代中期後葉の大木式土器が逆さになつた状態で出土し、掘建柱建物跡も検出された（一部は柱穴様ピットとして検出）。本報告書の調査区は、第1次調査が千畠町教育委員会調査区の南側に位置し、第2次調査が東側に位置する。

縄文時代後期の遺跡は、本遺跡の近隣に明瞭なものが確認されておらず、縄文時代晩期の遺跡には内村遺跡（54-14）や星宮遺跡（53-21・22・23）、野口遺跡（49-21・22）、及び本遺跡などがあげられる。

弥生時代の遺跡は発掘調査された事例が少ない。当該地域では、代表的なものに仙北町星宮遺跡（53-21・22・23）、大曲市宇津台遺跡（8-18）、そして今回の調査で弥生時代の土器が出土した本遺跡（54-5）がある。本遺跡に比較的近い仙北町星宮遺跡は、縄文晩期の遺跡としても知られているが、1996～98（平成8～10）年に行われた仙北町教育委員会の発掘調査で、秋田県内では初めて弥生時代の水田跡が検出された。水田の平面形はほぼ長方形で、計16面確認され、幅30～50cmの畦に区切られていた。当時の稲作の規模・形態を知るうえで貴重な発見となった。

古墳時代の遺跡は、秋田県で確認されているものが非常に少ない。県南では横手市オホン清水遺跡と田久保下遺跡の2遺跡しか発掘調査されていない。田久保下遺跡では土坑墓8基が検出され、6世紀代の土師器・須恵器（壺・蓋・甕・壺など）が出土している。

奈良・平安時代の遺跡は、仙北町と千畠町に跨る払田柵跡（千畠町54-1、仙北町53-1）がある。1906（明治39）年から始まった耕地整理の際に埋木が出土し、これを地元出身の後藤宙外氏と藤井東一氏が調べた結果、真山・長森の二つの丘陵を取り巻くように柵列が存在することが判明した。彼らと地域住民の努力によって、1930（昭和5）年には、文部省の上田三平氏が発掘調査を実施することとなり、遺跡としての全体像が明らかになった。その後、1974（昭和49）年に秋田県教育委員会が仙北町に払田柵跡調査事務所を設置し、継続的な学術調査が行われている。この払田柵跡に隣接する厨川谷地遺跡（54-3）は、秋田県教育委員会が2001（平成13）年に発掘調査した結果、河川跡に近接して多数の土坑が検出されたほか、約400点に及ぶ墨書き土器や灯明皿、斎串、呪符木簡などが出土し、払田柵跡と強い関係を持つ祭祀遺跡（9世紀後半から10世紀前半）であることが判明した。近年、払田柵跡周辺では墨書き土器出土遺跡が数箇所確認されており、本遺跡でも第2次調査で土師器1点ながら墨書き土器が出土した。この近隣（千畠町内）では内村遺跡、飛沢尻遺跡、下中村遺跡などでも出土が確認されている。

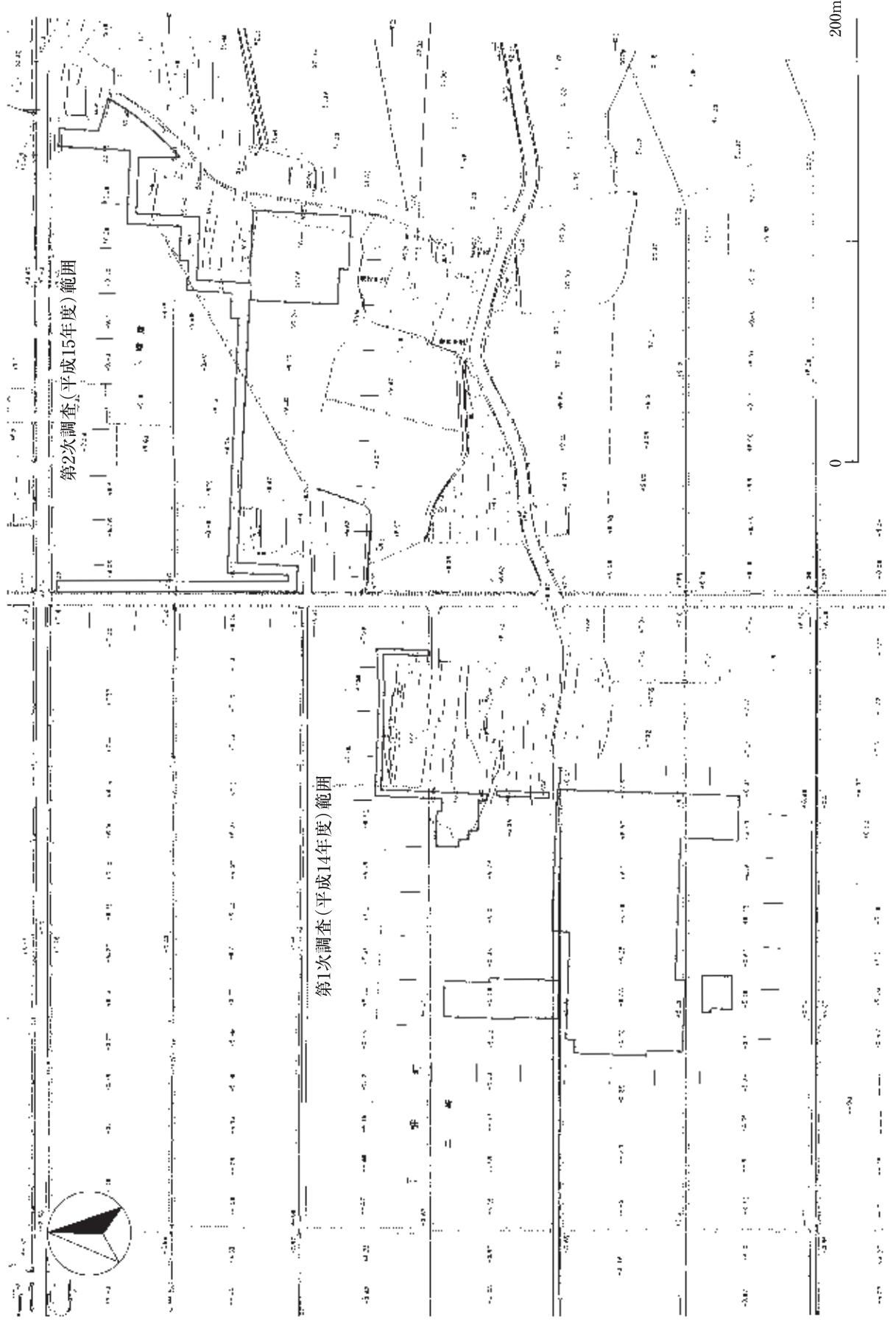
鎌倉時代から安土桃山時代の遺跡は中世城館が多い。この地域に勢力を置いたのは、鎌倉期に入部した和賀氏の一族本堂氏である。1220（承久2）年、本堂忠朝が館の沢に築いたと言われるのが元本堂城跡（54-8）で、その形態は山城である。1985（昭和60）年に千畠村指定史跡となっている。この元本堂城跡に居城してから、約315年後の1535（天文4）年に、本堂氏が構築・移城したのが本堂城跡（54-2、現在の千畠町本堂城回字館間周辺で矢嶋川左岸）で、その形態は平城である。ここを中心と

遺跡の環境

して戦国時代の本堂氏は仙北中郡を領有し、関ヶ原の戦いの後、元和年間に常陸国志筑へ転封するまでその勢力を保った。現在も東西182m、南北273mの堀に内城が囲まれ、土壘（高さ2.5m）も城の東北側に残っており、遺存状況が極めて良い平城跡である。文献史料も、1614（慶長19）年の「本堂城廻絵図」が現存しており、秋田県内の中世城館の様相を知る上で重要な遺跡である。1974（昭和49）年、本堂城跡は県史跡に指定されている。これ以外には、仙北町払田柵跡（53-1）の範囲内に含まれる真山が中世城館としての払田城跡（53-5、堀田城跡とも記される場合あり）である。

《引用・参考文献》

- 千 畑 村『千畠村郷土誌』千畠村郷土誌編纂委員会 1986（昭和61）年
千畠村教育委員会『一丈木遺跡第2次発掘調査略報』1973（昭和48）年
千畠村教育委員会『一丈木遺跡第3次発掘調査概報』1974（昭和49）年
千畠村教育委員会『一丈木遺跡第4次発掘調査概報』1975（昭和50）年
千畠町教育委員会『中屋敷II遺跡』千畠町埋蔵文化財調査報告書第6集 2004（平成16）年
千畠町教育委員会『十二遺跡・上飛沢遺跡』千畠町埋蔵文化財調査報告書第7集 2004（平成16）年
千畠町教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』千畠町埋蔵文化財調査報告書第8集 2004（平成16）年
秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62）年
秋田県教育委員会『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第82集 1981（昭和56）年
秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
秋田県教育委員会『払田柵跡I－政庁跡－』秋田県文化財調査報告書第122集 1985（昭和60）年
秋田県教育委員会『払田柵跡II－区画施設－』秋田県文化財調査報告書第289集 1999（平成11）年
秋田県教育委員会『厨川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第383集 2005（平成17）年
秋田県教育委員会『小鳥田I遺跡』秋田県文化財調査報告書第385集 2005（平成17）年
中仙町教育委員会『野口遺跡－仙北郡中仙町野口遺跡発掘調査報告書』1979（昭和54）年
仙北町教育委員会『星宮遺跡』仙北町文化財調査報告書第3集 1999（平成11）年
藤田秀司『仙北郡石器時代遺跡地名表』1948（昭和23）年
武藤鉄城『雲塙野組石群発掘報告』1952（昭和27）年
須藤 隆「秋田県大曲市宇津台遺跡の弥生式土器について」『文化』第33巻第3号 東北史学会 1970（昭和45）年
小林 克「地形の判読」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第17号 2003（平成15）年
高橋 学「大曲市和合出土の墨書き土器－使用痕跡にも注目して－」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第18号
2004（平成16）年



第4図 調査範囲図

第 1 次 調 查

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

中屋敷Ⅱ遺跡は、丸子川と釜淵川、真昼川が合流し形成する複合扇状地上に立地し、小河川や湧水池に近い微高地を利用した集落に関わる遺構が発見された遺跡である。遺跡の現況は東から西に向かって低くなる緩やかな斜面にある水田で、標高は調査区の北東端で48.0m、南西端では45.6mと約2.4mの高低差がある。

調査区は約10,000m²と広いため、現況の水田区画を利用して、調査区を便宜上A～E区の5区域に分けて調査を進めた。面的に調査を行ったのはA・C・E区で、B区は宅地回りの水路の設置によるもので細長く曲折した調査区である。D区は水路と近隣地区の旧墓地などである。

調査の結果、2つの時期の異なる遺構群から構成されることが明らかになった。遺跡の中心をなすのは、縄文時代中期の遺構が集中的に見られたE区（約3,000m²）と、A区及びB・D区（約2,800m²）に広がる縄文時代中期・晩期に属する遺構群で、竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、捨て場などから構成される。もう一つは、E区中央部西側からC区（約4,000m²）北西部に広がる遺構群である。ここでは縄文時代中期のほか、古代、中世の柱穴などが検出され、主として古代から中世に属する遺構群である。

第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用し、その設定方法は調査区内の任意の一点を原点（MA50）として、この原点から磁北に合わせた南北基線と、これに直交する東西基線を設け、4×4mのグリッドを設定した。南北方向には48, 49, 50, 51・・・の2桁の数字、東西方向にはLM, LN, MA, MB, MC・・というアルファベットを付し、各グリッドは南東隅の交点の数字・アルファベットの組み合わせで呼称した。

遺構は、確認順に番号を割り当て、精査の結果、遺構でないと判断した場合は、その番号を欠番とした。遺構覆土は、土層堆積状態の観察、実測用ベルトを設定して掘り下げ、土層断面の分層時に、野帳に堆積状況を記録して土色・土性等を注記した。小ピットを含む柱穴様土坑の必要なものについては、プラン確認面での土色・土性等を遺構カードに記載し、半截あるいは全掘した。遺物は、グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺物出土地点の記載は、メジャー及び自動レベルを使用し、部分的にトータルステーションによる光波測距を活用した。

実測図は平面図及び断面図、写真撮影は35mm判カラー・モノクロフィルム、およびカラーリバーサルフィルムを用いた。図面記録の縮尺は1/20を原則とし、微細な遺構図面を必要とする場合は、1/10で記録した。調査区内の広範囲に及ぶ柱穴様ピットや遺構内の土器出土状態の記録などはトータルステーションによる測量を活用した。

第3節 調査の経過

- 5月13日 調査開始。仙北平野土地改良事務所提供による重機を用いて、表土除去作業を開始。発掘機材・物品等の搬入と設置作業。
- 5月14日 A区(2000m²)の表土除去。水切り、ベルコン・発電機等の設置。興和測量による測量坑打設開始。
- 5月20日 A区の表土除去作業終了。
- 5月21日 秋田朝日放送が千畳町の遺跡紹介ほかを取材のため来跡。S T36捨て場で多量の土器片が出土。
- 5月27日 千畳町役場栗澤氏、大野埋蔵文化財センター副所長現場視察。A区(2,000m²)測量坑打設終了。
- 5月30日 S T36の精査。仙北平野土地改良事務所職員現場視察。
- 6月11日 千畳町役場にて仙北平野土地改良事務所との連絡協議。西側C区4000m²の表土除去開始。
- 6月19日 A区北側の実測精査。千畳町教育委員会視察。
- 6月24日 B区宅地周りの表土除去終了。この地区的調査開始。千畳町教育委員会、仙北平野土地改良事務所、県文化財保護室職員が来跡。
- 7月1日 S I 379堅穴住居跡1棟確認。土坑5基検出。C区中央水切り作業。C区西側端1,000m²の発掘作業に着手。
- 7月5日 A区南側仮排水路工事終了。測量打設坑取り外し。A区検出遺構図作成終了。
- 7月9日 県立横手養護学校高等部生徒8名発掘体験。NHK取材。
- 7月19日 農業用道路・仮排水路整備のための深掘りの立会い。
- 7月22日 E区表土除去開始。
- 7月24日 八森町立觀海小学校、三浦昭彦教諭29日までの日程で発掘調査実習開始。
- 7月26日 E区表土除去(2,000m²)終了。
- 7月29日 C区西側精査終了。北側旧河川跡へ南北と東西2本のトレンチ設定。
- 7月30日 鈴木秋田県文化財保護室長現場視察。
- 7月31日 市町村文化財担当職員発掘技術研修会。E区表土除去終了(3,000m²)、測量坑打設開始。
- 8月2日 千畳町立小学生他20名体験学習会。E区(3,000m²)の遺構確認を開始。
- 8月6日 秋田大学学生2名研修のため調査に参加。
- 8月7日 芳賀秋田県埋蔵文化財センター所長、趙・王甘肃省文化交流員現場視察。C区南、中央西側のトータルステーションでの遺構実測終了。
- 8月19日 A・B区(2,500m²)全ての調査を終了。
- 8月20日 教職10年研修で教員3名発掘体験実習。
- 8月30日 南、北、中央、各調査課合同発掘技術研修会(払田柵跡・中屋敷Ⅱ遺跡)。
- 9月6日 午前10時、仙北平野土地改良事務所へA区全域とC区4,000m²を引渡し。
- 9月18日 D区調査終了。
- 9月21日 遺跡見学会実施、参加者74名。精査完了8,700m²。

9月25日 千畳町役場、仙北平野土地改良事務所と文化財保護室を交えて担当者会議。

調査区E全体のプラン確認終了。精査9,500m² (95%) 終了。

10月4日 A～E区全区を精査終了。

10月7日 現場撤収。

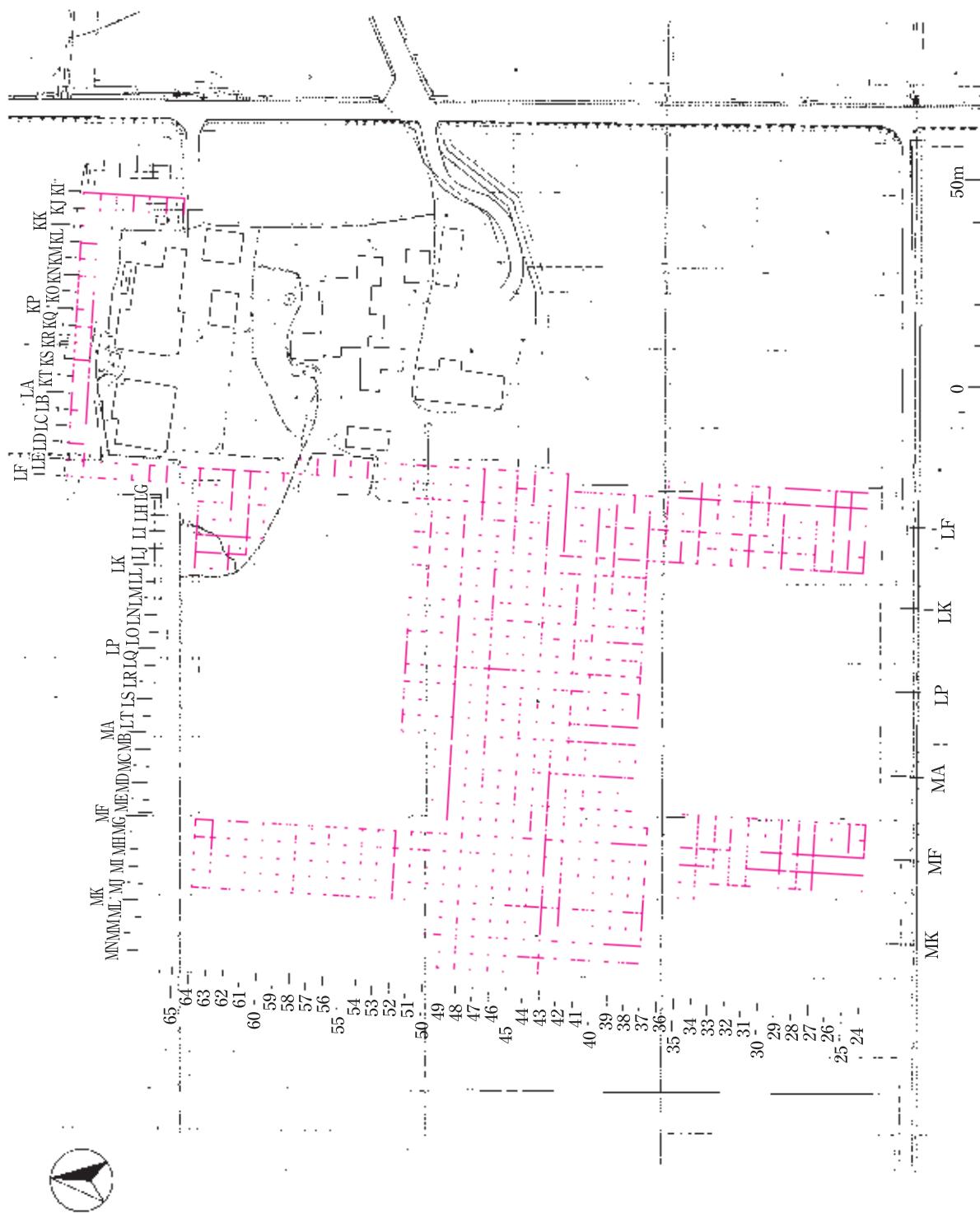
10月15日 仙北平野土地改良事務所に現地引渡し。

第4節 整理作業の方法と経過

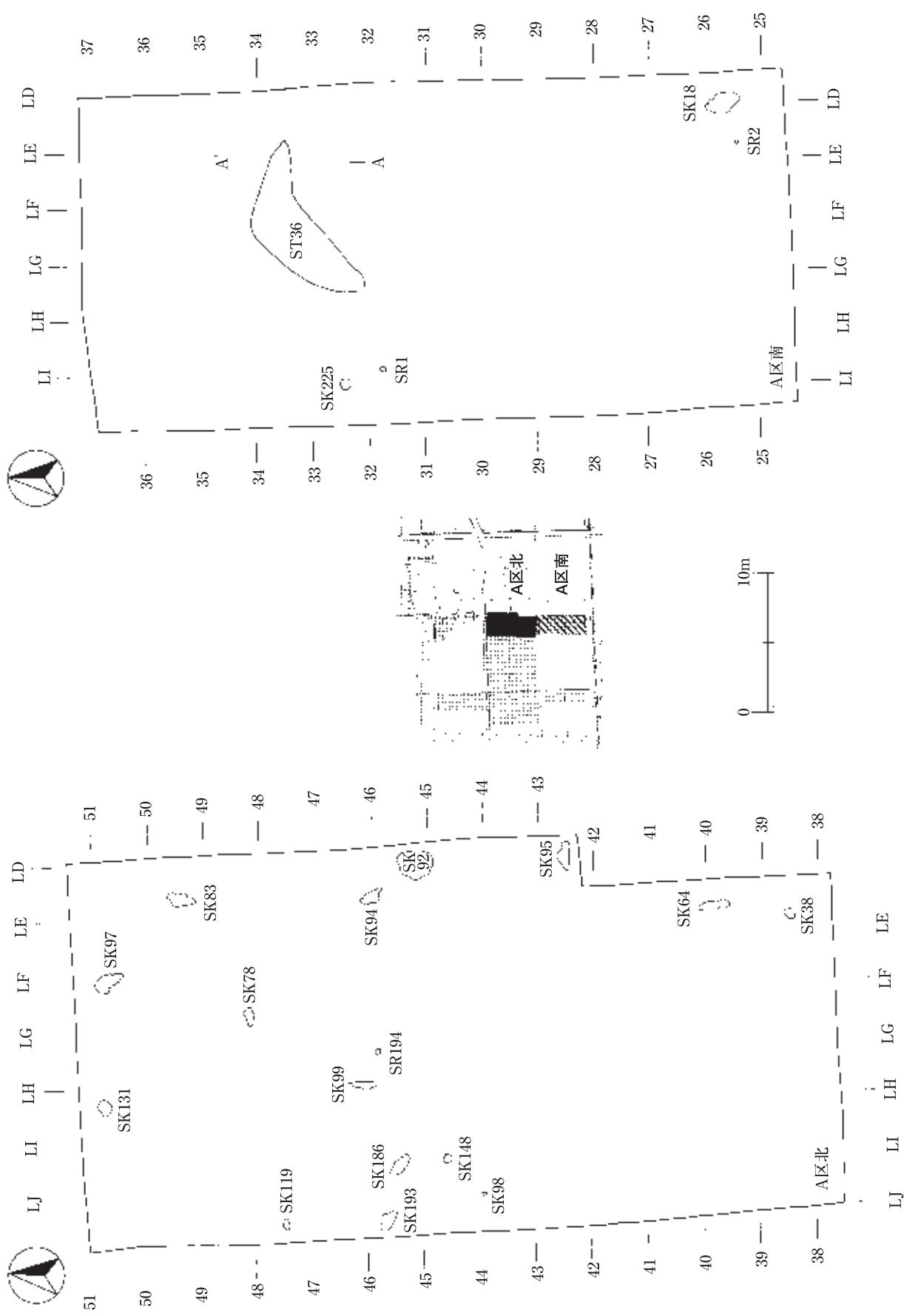
整理作業は、発掘調査終了後秋田県埋蔵文化財センター南調査課で行った。遺物は洗浄・注記・分類・接合を行い、この後実測・採拓・トレース・写真撮影などを行った。遺構図面は現場で実測した実測図をもとに第2原図を作成した。第2原図の縮尺は基本的に1/10、1/20である。自然科学的分析はパリノサーヴェイ株式会社に委託した。

平成15年2月15・16日、大曲市中央公民館を会場に開催された平成14年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会で、斎藤重隆学芸主事が調査成果を発表した。

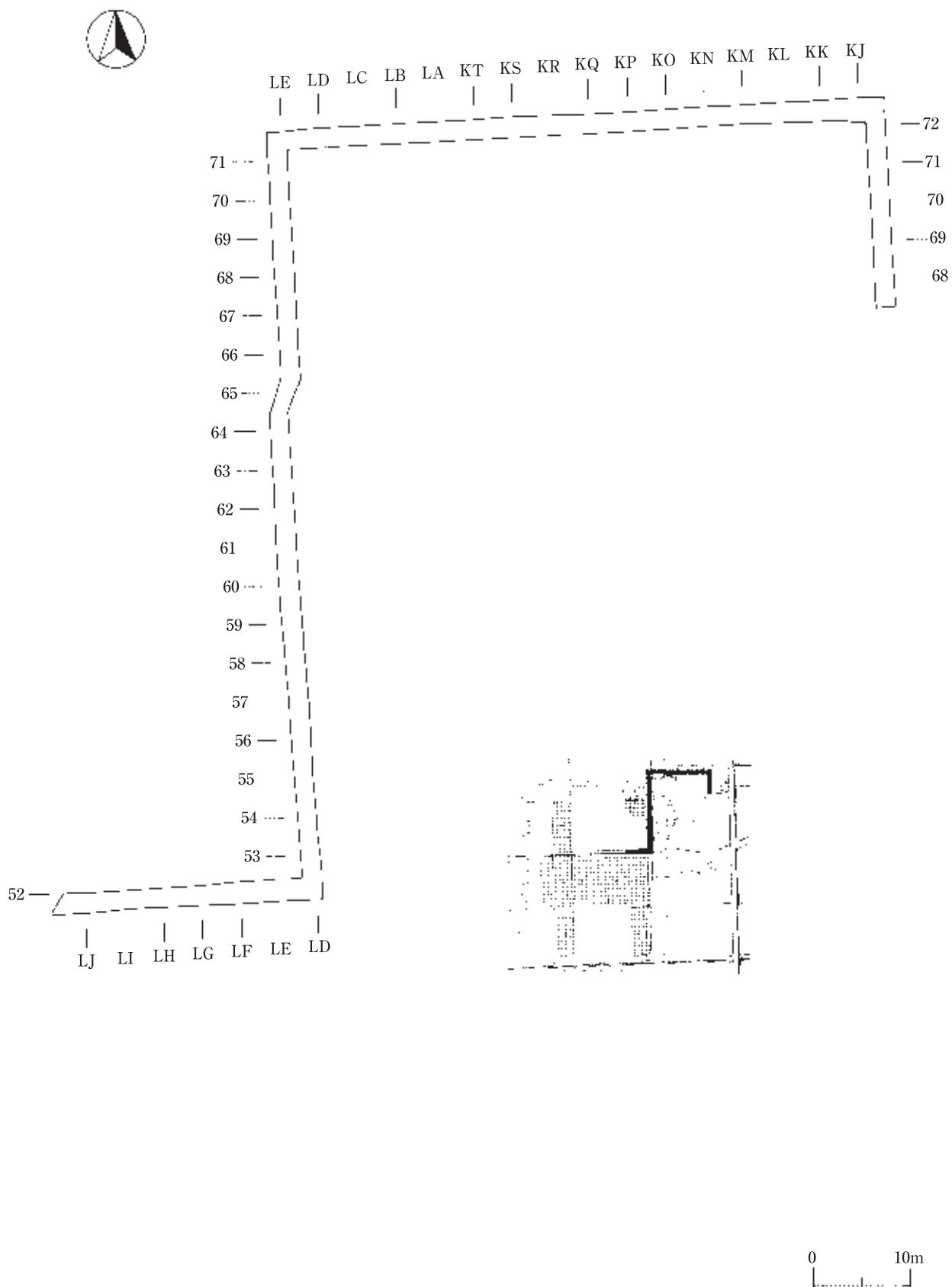
定期人事異動に伴い、平成15年4月に斎藤学芸主事が田沢湖町立生保内小学校へ、翌16年4月伊藤伸吾学芸主事が埋蔵文化財センター中央調査課へ異動した。その後は児玉が整理作業を引き継いだ。



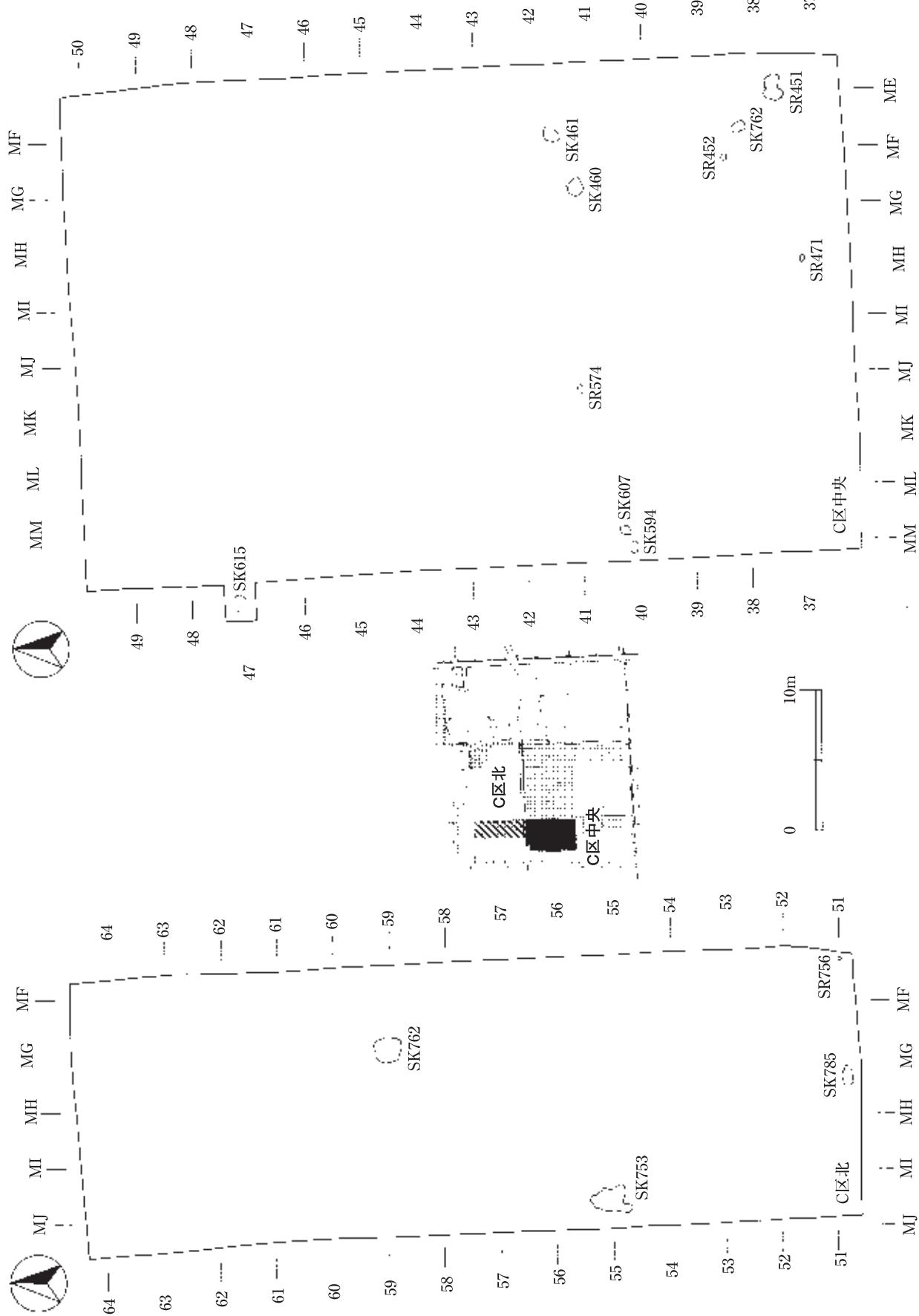
第5図 グリッド配置図



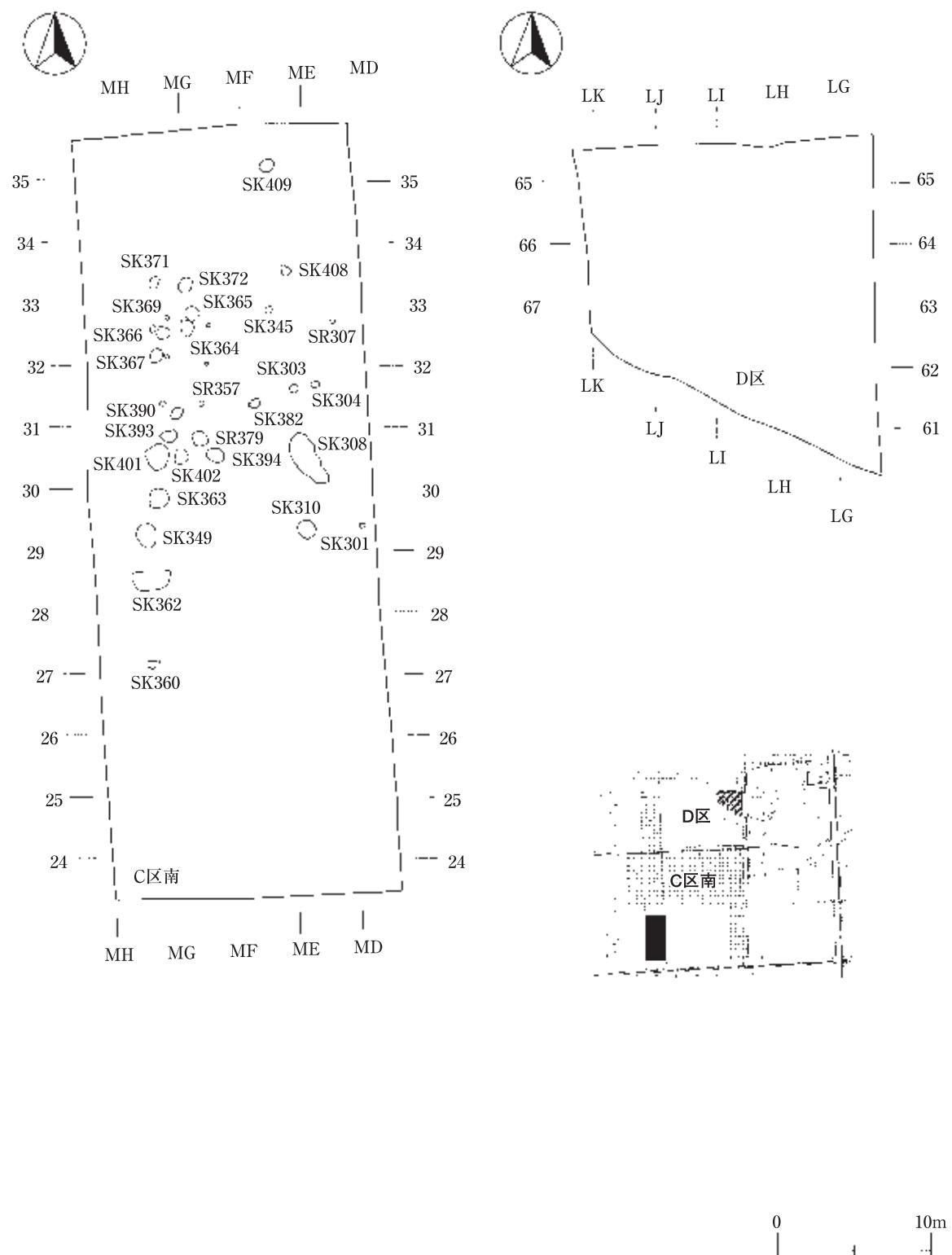
第6図 遺構配置図(A区北・南)



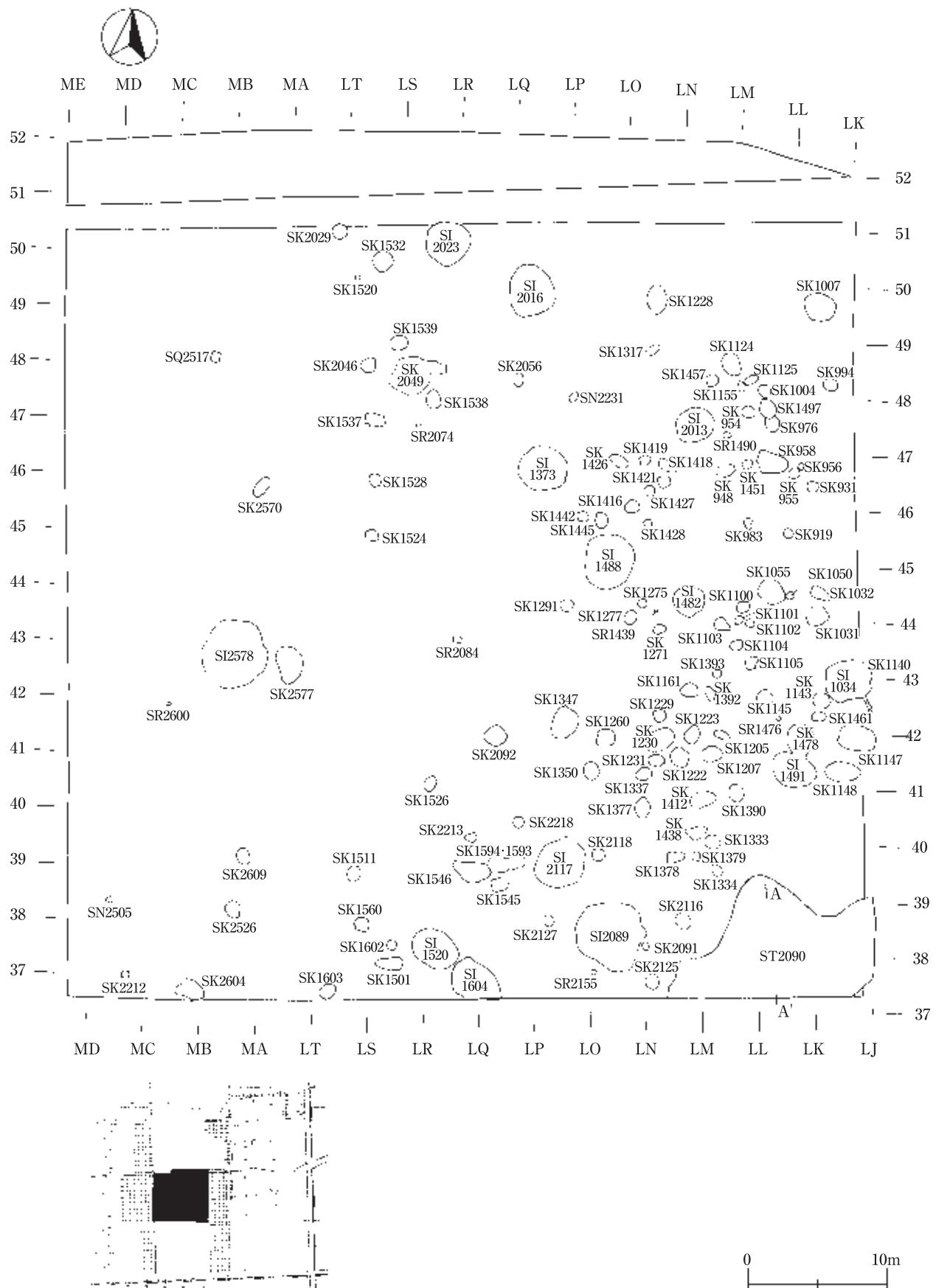
第7図 遺構配置図(B区)



第8図 遺構配置図(C区 北・中央)



第9図 遺構配置図(C区南・D区)



第10図 遺構配置図(E区)

第2章 調査の記録

第1節 基本層序

調査を開始するにあたり、調査区の東西・南北方向にトレンチを1本ずつ設定、遺物の出土状況・土層の堆積状況を確認し、基本層序を下記のようにした。

A区（調査区南及び南西部）

- I層 耕作土（現表土）層厚約30～50cm。
- II a層 暗褐色シルト、礫砂混合、遺物を包含する。
- II b層 暗褐色シルト、粘土、植物を含み、遺物少量。（河川・沼地部分）
- II c層 暗褐色シルト、遺物を包含する。（河川・沼地部分）
- III a層 黒褐色シルト、粘土、植物を多量に包む。（河川・沼地部分）
- III b層 黒褐色シルト、捨て場付近遺物多量に包含する。（河川・沼地部分）
- IV層 黒・灰褐色シルト、粘土、漸移層。
- V層 青灰色粘土層（地山）。

B区（宅地周り）

水田造成に伴う盛土層が40～60cm、用排水路等工事により搅乱が大きい。層位は省略する。

C区（南・西中央・西北・北側各域）

- I層 耕作土（現表土）、黒褐色シルト、砂礫少、層厚30～50cm
- II層 旧水田耕作土、黒褐色シルト、一部砂質層、層厚10～15cm
- III層 泥炭層、黒褐色シルト、しまり強、粘性中、植物片多量。
下部に縄文遺物含む。層厚10～15cm。
- IV層 砂礫層、暗灰褐色シルト、漸移層。しまり強、粘性中。層厚10～15cm。
- V層 地山土、青灰色粘土層（地山）。

D区

- I層 休耕田・閑地（現表土）層厚約20～30cm。
- II層 黒褐色シルト、粗粒砂多含。層厚10～15cm。
暗褐色土は、遺物多量に含む。
- III層 泥炭層、黒褐色シルト、植物を多量に包む。下部に砂礫の堆積あり。
- IV層 黒・灰褐色シルト、粘土、漸移層。
- V層 青灰色粘土層（地山）。

E区 調査区中央（東、中、西側）

I層	耕作土（現表土）層厚30～50cm。黒褐色シルトと砂礫 少量含む。	I層
II層	旧表土層、黒褐色シルト、粗粒砂多含。層厚10～15cm、 植物片、遺物を多量に包含する。	II層
III層	泥炭層、黒褐色シルト、しまり強、粘性中、植物片を 多量に包含する。下部に砂礫が堆積する。層厚15cm。	III層
IV層	砂礫層、暗灰褐色シルト、漸移層。しまり強、粘性中。 層厚10～15cm。	IV層
V層	青灰色粘土層（地山）。	V層

第11図 E区土層模式図

第2節 検出遺構と出土遺物

検出された遺構の総数は195である。時代別に見ると、縄文時代では竪穴住居跡12、土器埋設炉2、配石遺構1、土坑155、土器埋設遺構19、捨て場2、弥生時代では土坑1、平安時代では竪穴住居跡1、土坑2である。

1 縄文時代

（1）遺構と遺構内出土遺物

① 竪穴住居跡

1 S I 1373竪穴住居跡（第12図、図版3）

《位置》LO46、LP46グリッド。

《確認》地山面で確認した。住居プランの全域にわたり多量の土器片が堆積していた。

《重複》他遺構との重複はない。

《規模》長軸3.55m（東一西）、短軸3.26m（北一南）で、床面までの深さは0.22mである。

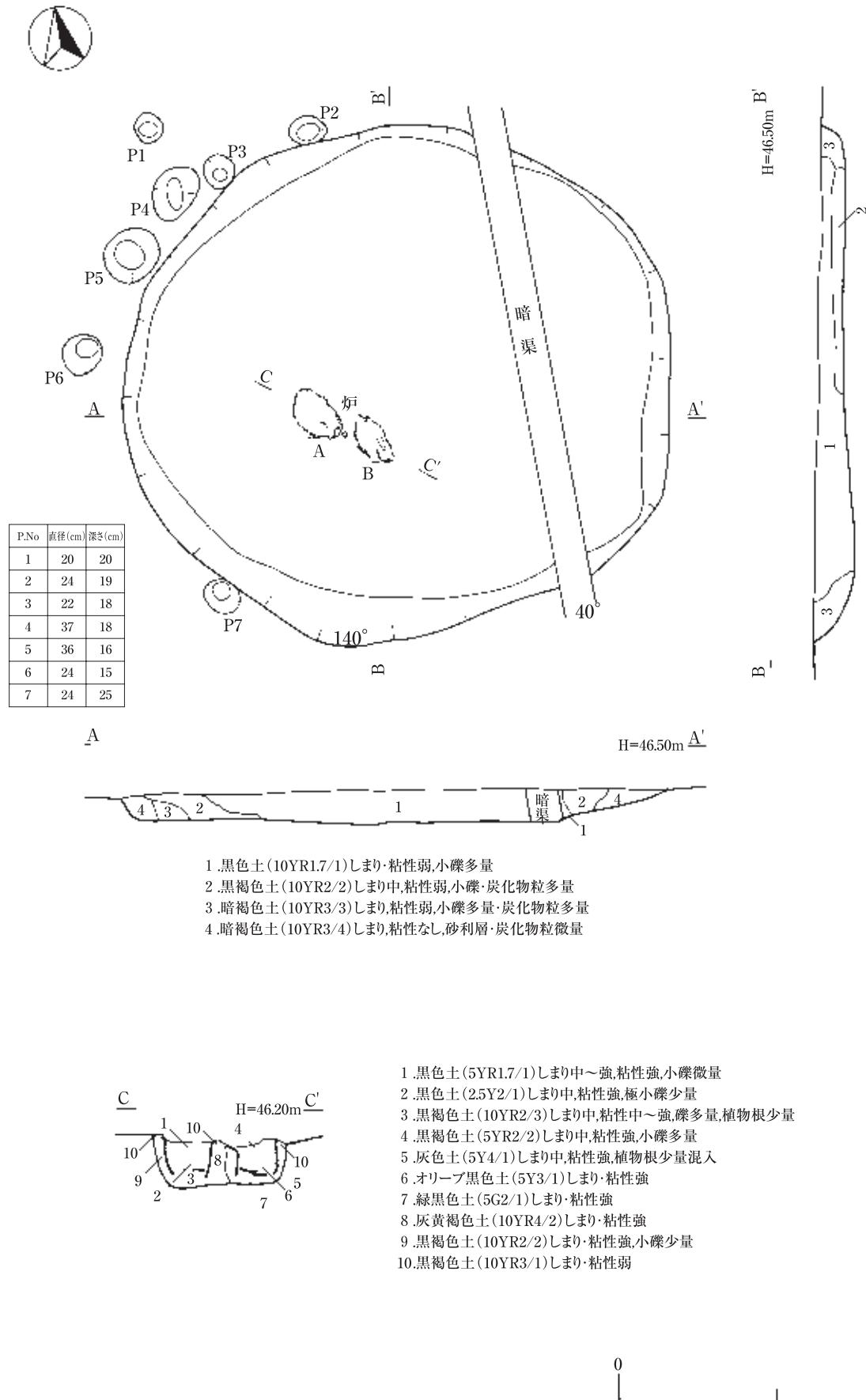
《平面形》ほぼ円形である。住居内東側に暗渠が南北に通り、床面が分断、破壊されている。

《埋土》土器片や礫が全層にわたり多量に混入する。これらは住居としての機能を終えた後、投棄されたと推定される。2層以下は人為的に埋め込んだ土と考えられる。

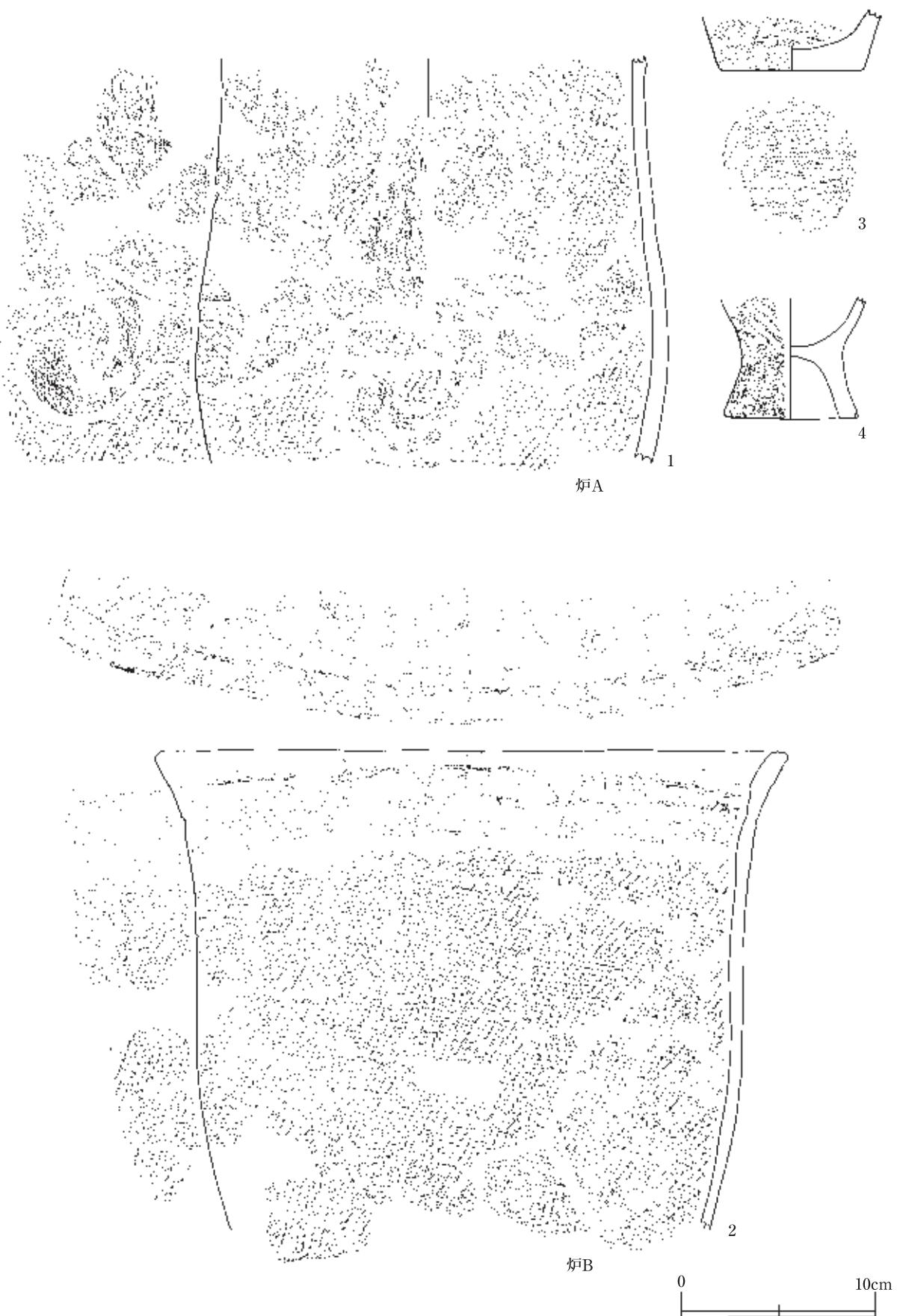
《壁》緩やかに立ち上がる。

《床面》全体に僅かな凹凸を見せるが、固く締まっている。

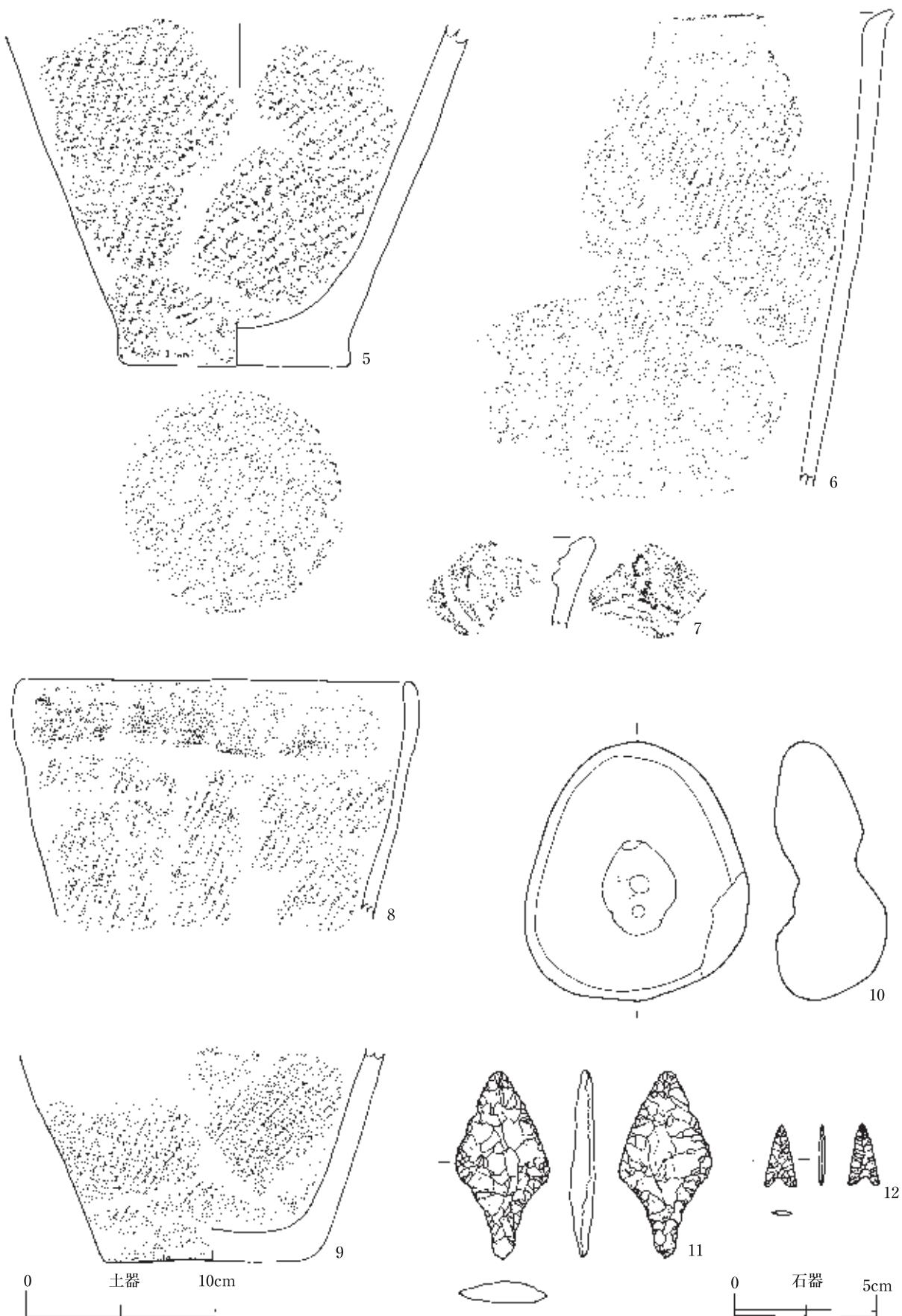
《炉》土器埋設炉である。住居中央やや南西寄りに構築されている。直径0.18～0.36m、0.24～0.38mの深鉢形土器がそれぞれ正位に埋められていた。この2つの土器が並列（土器側面が一部重複）に埋設されていた。埋設土器の周りに炭化物の広がりと焼土を確認した。新旧関係は不明である。土器底部と炉の掘り込み部下位の土層がグライ化している。土器A（第13図1、図版34-1）とB（第13図2、図版34-2）の境に小礫があり、土器Aの上位にも小礫が多数確認された。覆土はどちらも上位に小礫を含み炭化物が堆積し、粘性も強い。掘り込みの深さは0.3mである。



第12図 SI1373



第13図 SI1373出土遺物(1)



第14図 SI1373出土遺物(2)

《柱穴》住居西側の外周にピット7基を検出したが、住居に伴う柱穴か否か不明である。ほとんどが円形で長径0.2~0.37m、深さ0.15~0.25mである。

《遺物》縄文時代I群3類の土器が出土した（第13図3・4、第14図5~9）。縄文時代の石器（石鏃1・2類、凹石）が出土した（第14図10~12）。他に削器・石皿も出土した。

《時期》埋設土器から縄文中期に属すと考えられる。

2 S I 1482堅穴住居跡（第15図、図版4）

《位置》LM43・44グリッド。

《確認》地山面で確認した。

《重複》他遺構との重複はない。

《規模》長軸2.28m（北東一南西）、短軸2.1m（北西一南東）で、床面までの深さは0.24mである。

《平面形》ほぼ円形である。

《埋土》黒褐色土と褐色土で、炭化物及び礫が覆土に混入している。

《壁》全体に緩やかに立ち上がる。

《床面》固く締まっている。

《炉》土器埋設炉である。住居跡中央やや南側に構築されている。直径0.27~0.31mのほぼ円形で、掘り込みの深さは0.21mである。埋設土器は、深鉢形土器の上半部で残存器高23.7cm、口径28.2cmである（第15図4、図版34-3）。土器内の覆土は暗褐色土と褐色粘土、青灰色粘土で、それぞれに炭化物が混入している。埋設土器の内壁に焼成痕が認められた。

《柱穴》住居掘り込みの外側に、ピット7基を検出した。長径0.16~0.26m、深さ0.09~0.22mである。

《遺物》縄文時代I群3類の土器（第15図2~6、図版34-4・5）と搔器1類（第15図1）が出土した。他に石匙も出土した。

《時期》埋設土器と出土遺物から縄文中期に属すと考えられる。

3 S I 1488堅穴住居跡（第16図、図版5）

《位置》LN44・45、LO44・45グリッド。

《確認》地山面で確認した。

《重複》他遺構との重複はない。

《規模》長軸4.04m（北一南）、短軸3.42m（東一西）で、床面までの深さは最深部で0.3mである。

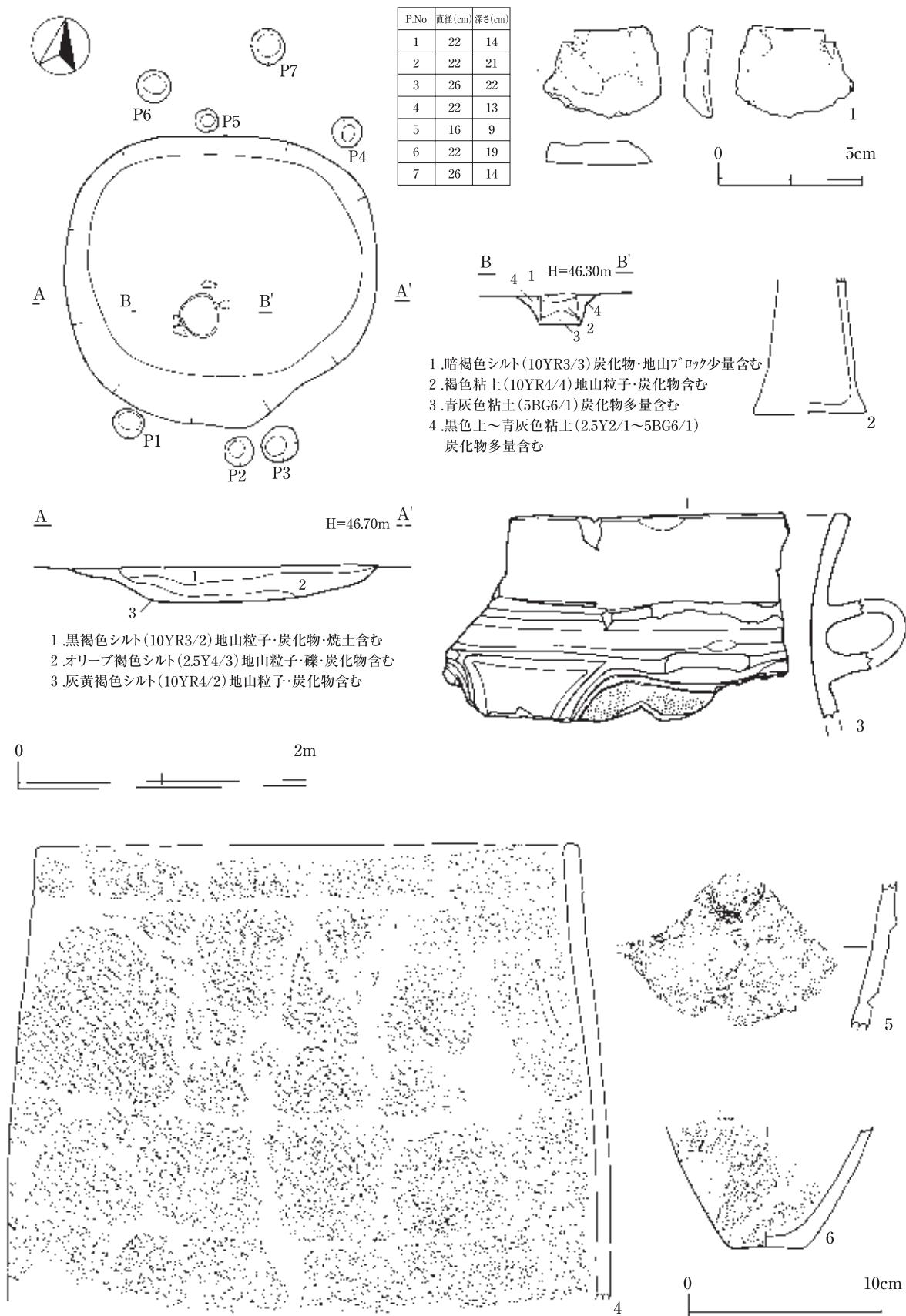
《平面形》ほぼ橢円形である。

《埋土》6層あり、炭化物と細かい礫が混入している。

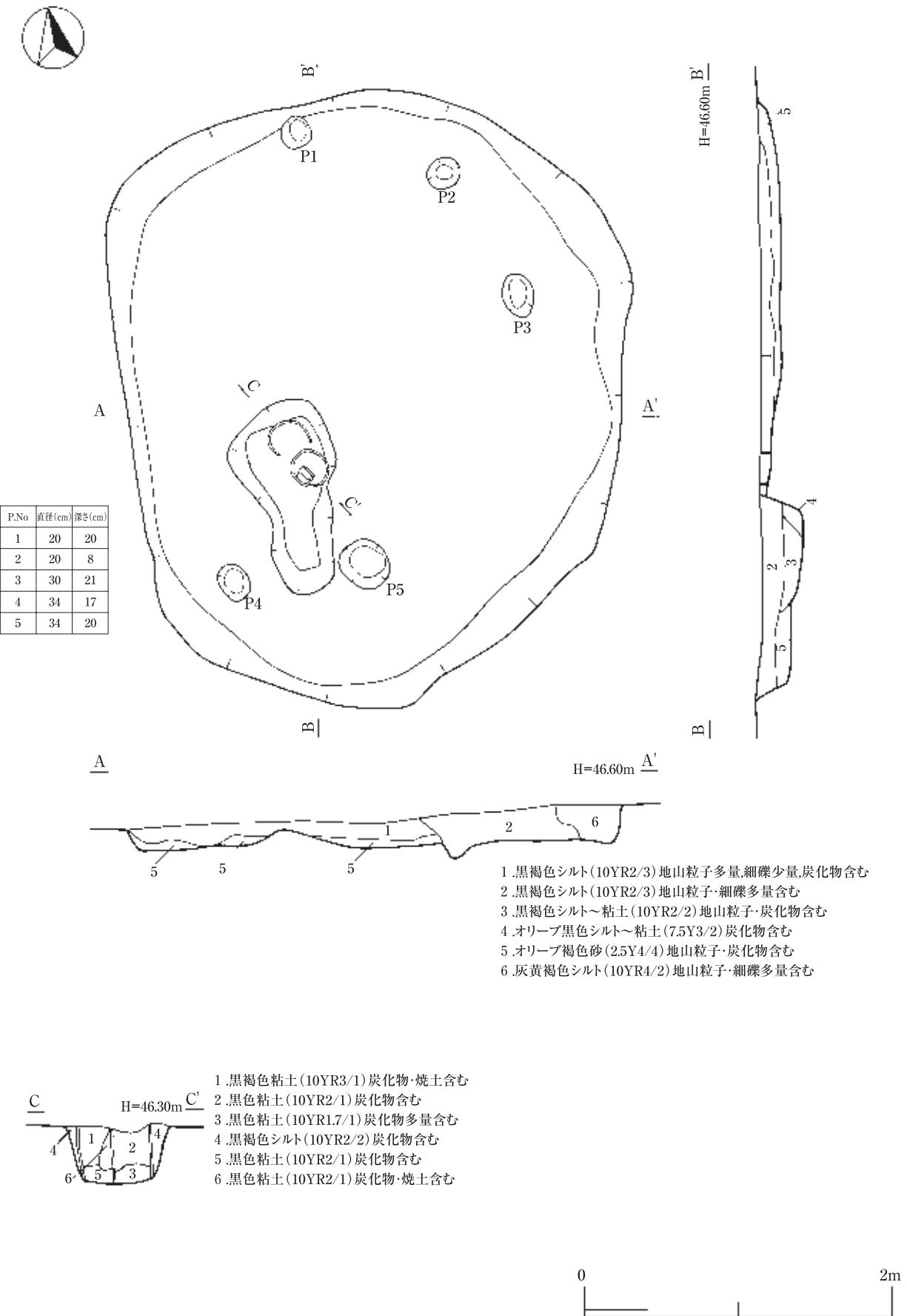
《壁》急な角度で立ち上がる。

《床面》平坦で固く締まりがある。

《炉》土器埋設炉で、住居中央やや南西寄りにある。炉は長軸0.48m、短軸0.26m、掘り込みの深さは0.38mで、土器が2個埋設されている。土器A（第17図1）は残存部器高25.2cm、底径12cmで、土器B（第17図2、図版34-6）は残存部の器高27.9cm、底径8.2cmあり、いずれも正位に埋設されて



第15図 SI1482



第16図 SI1488



第17図 SI1488出土遺物

いた。土器内埋土は5層で炭化物が混入している。

《柱穴》住居内に5基を検出した。ほとんどが円形で長径0.2~0.34m、深さ0.08~0.21mである。

位置関係よりP3~5が主柱穴と考えられる。他の柱穴に関しては判然としない。

《遺物》縄文時代I群3類の土器が出土した(第17図3~5)。

《時期》埋設土器から縄文中期に属すと考えられる。

4 S I 1491堅穴住居跡(第18図、図版6)

《位置》LK40・41グリッド。

《確認》地山面で確認した。

《重複》SK1478土坑と重複していたが、残存部が僅かで明瞭な立ち上がりは確認できなかった。

《規模》長軸3.32m(北西—南東)、短軸推定2.46m(北東—南西)で、床面までの深さは最深部で0.22mである。

《平面形》ほぼ橢円形である。

《埋土》残存部が浅く1層である。

《壁》南側壁は急な角度で立ち上がる。

《床面》底面は一部地山礫層が露出し、凹凸が床面全域に見られる。

《炉》土器埋設石囲炉で、住居中央やや南側にある。直径0.26m、掘り込みの深さは0.28mである。直径4~11cm、長さ9~20cmの角礫6個が二重の環状に配列されていた。埋設土器内から、廃絶時の混入と考えられる礫が1個出土した。炉内の西側に礫は確認できなかった。埋設土器の東側に石囲部の一部に使用したと考えられる礫4個が散乱する。深鉢形土器は正位に埋められていたと判断でき、胴部から上位のみが残る(第19図1~3)。土器内の埋土は5層で、しまり・粘性が強い。

《柱穴》確認できなかった。

《遺物》縄文時代I群3類の土器が出土した(第19図4・5)。

《時期》埋設土器から縄文中期に属すと考えられる。

5 S I 1520堅穴住居跡(第20図、図版6)

《位置》LQ37・38、LR37・38グリッド。

《確認》地山面で確認した。

《重複》他遺構との重複はない。S I 1604と隣接する。

《規模》長軸3.5m(北西—南東)、短軸2.72m(北東—南西)で、床面までの深さは0.2mである。

《平面形》橢円形である。

《埋土》2層に分層され、1層は黒褐色土で炭化物と土器片が混入している。

《壁》急な角度で立ち上がる。

《床面》平坦で固く締まりがある。

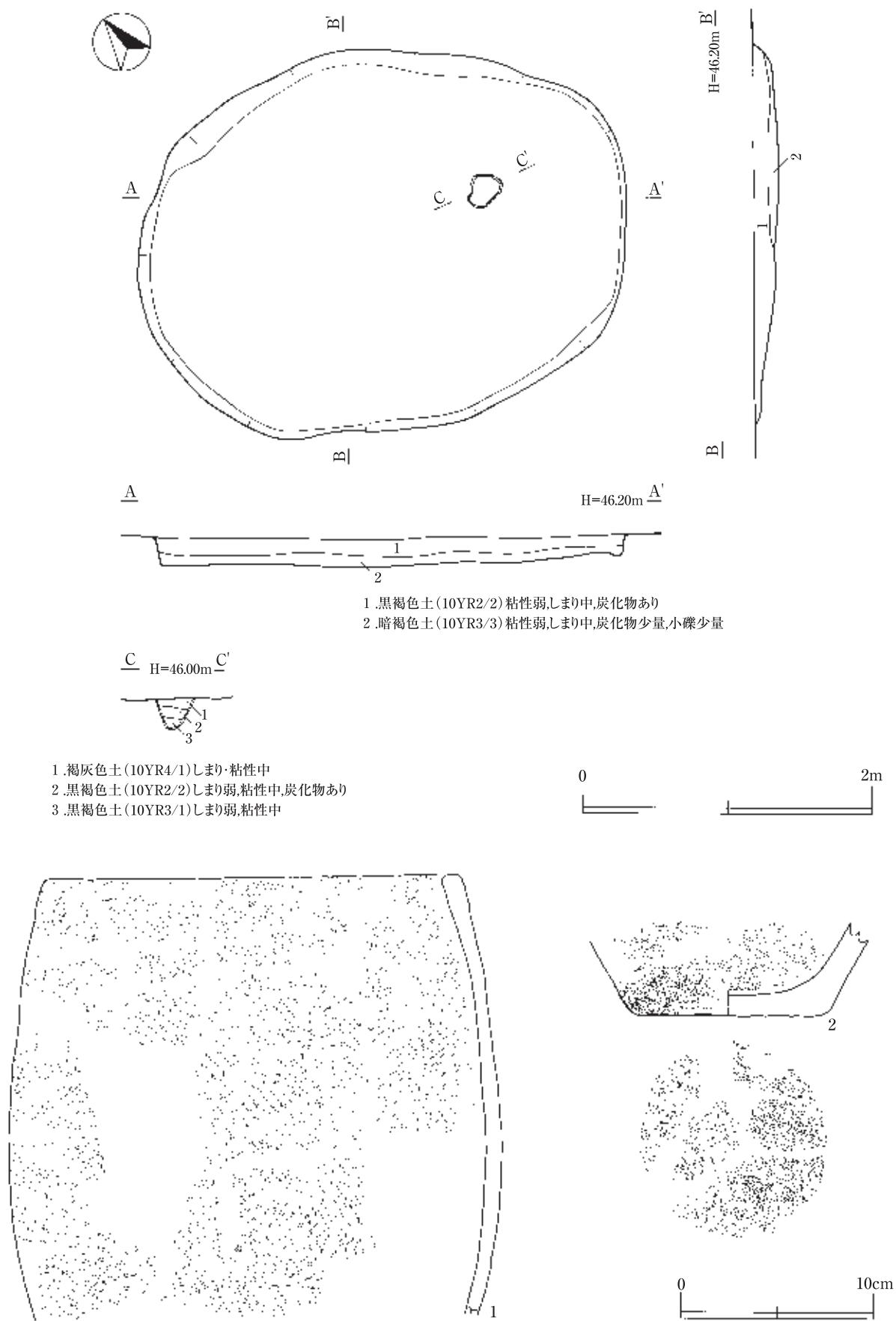
《炉》土器埋設炉で、住居中央やや南東寄りにある。直径0.22~0.26m、掘り込みの深さは0.22mである。炉の周囲と埋設土器の覆土に多量の炭化物が見られる。埋設土器は、深鉢形土器の下半部で残存部器高17.7cm、口径28.1cm、底径17.8cmで底部がある。



第18図 SI1491



第19図 SI1491出土遺物



第20図 SI1520



第21図 SI1520出土遺物

《柱 穴》確認できなかった。

《遺 物》縄文時代中期の土器が出土した（第20図1・2、21図1・2・4・5）。他に三角形の土製品が出土した（第21図3）。

《時 期》埋設土器から縄文中期に属すと考えられる。

6 S I 1604堅穴住居跡（第22図、図版7）

《位 置》L P36・37、L Q36・37グリッド。

《確 認》地山面で確認した。

《重 複》他遺構との重複はない。

《規 模》長軸4.24m（北西—南東）、短軸2.82m（北東—南西）で、床面までの深さは最深部で0.18mである。

《平面形》ほぼ橢円形である。

《埋 土》2層に分層した。

《 壁 》浅く緩やかに立ち上がる。

《床 面》固く締まっている。床面中央部に焼土と炭化物が見られる。

《 爐 》土器埋設炉で、住居中央やや南西寄りにある。直径0.24～0.34m、掘り込みの深さ0.38mである。土器口縁部及び土器内部に被熱痕が認められ、土器内の覆土に炭化物が少量あった。埋設土器は、口径33.2cm、器高は残存部21cm（第23図1、図版35-1）である。

《柱 穴》住居内に3基、住居外周に1基を検出した。住居内のものは直径0.26～0.3m、深さ0.13～0.21mで、住居外周のものは長径0.46m、深さ0.2mである。

《遺 物》縄文時代I群3類の土器が出土した（第23図2～5）。他に石鏃も出土した。

《時 期》埋設土器から縄文中期に属すと考えられる。

7 S I 2013堅穴住居跡（第24図、図版8）

《位 置》LM47グリッド。

《確 認》地山面で確認した。

《重 複》他遺構との重複はない。

《規 模》長軸2.84m（北東—南西）、短軸2.38m（北西—南東）で、床面までの深さは最深部で0.14mである。

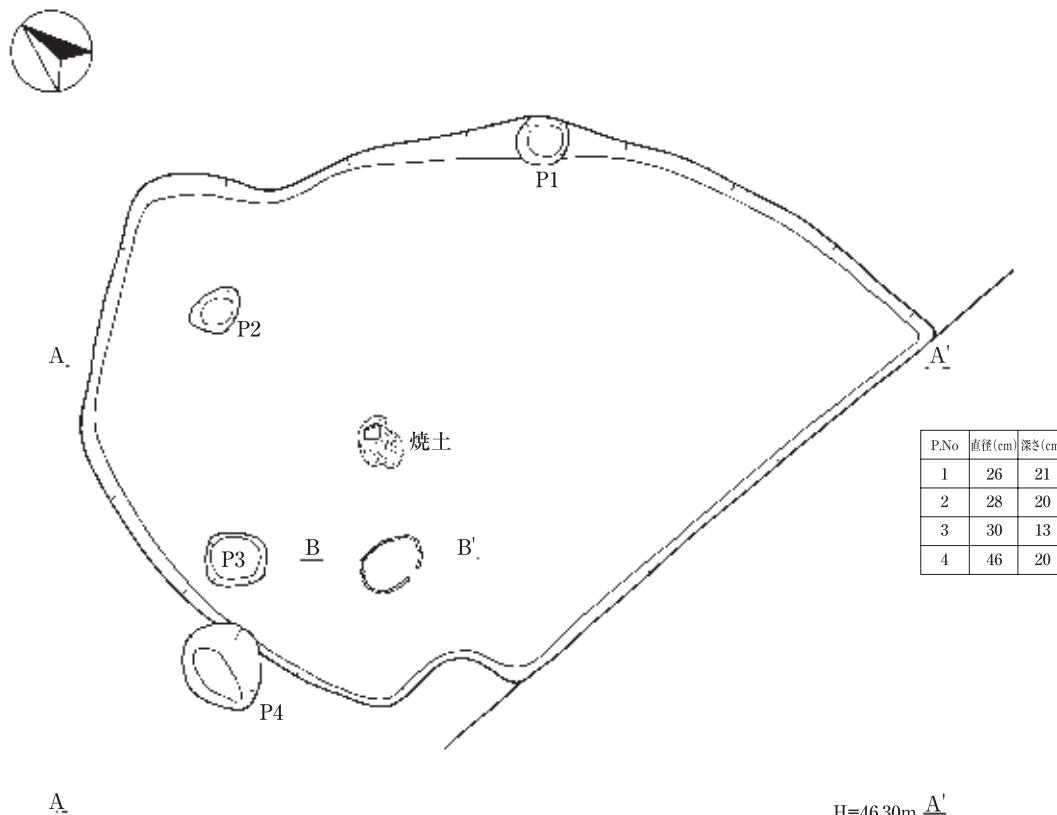
《平面形》橢円形である。

《埋 土》3層に分層した。黒褐色土が主で全層にわたり炭化物粒が混入している。壁際は砂質土を含む。

《 壁 》浅く緩やかに立ち上がる。

《床 面》床面はほぼ平坦で、固く締まっている。

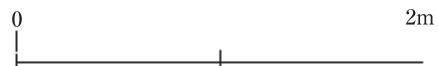
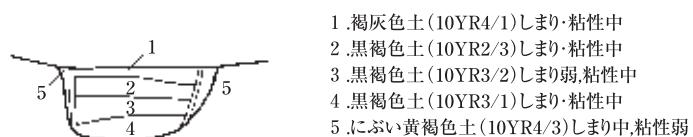
《 爐 》土器埋設炉で、住居北側にある。直径0.18～0.21m、掘り込みの深さ0.18mである。深鉢形土器の上半部が正位に埋められていた（第24図1、図版35-2）。遺存状態は不良である。土器内埋土は3層で、上位は炭化物粒を少量含んでいる。



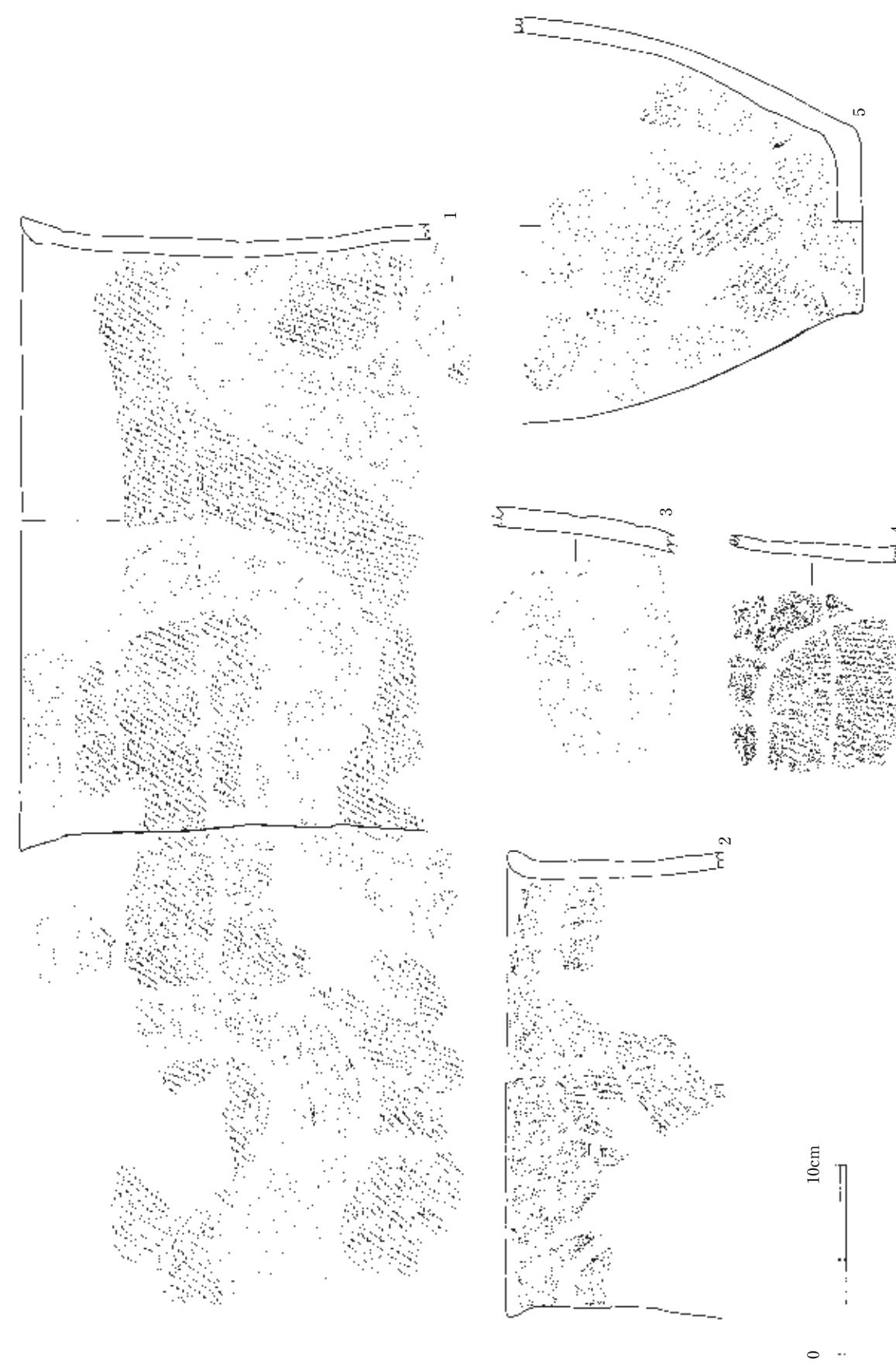
A H=46.30m A'



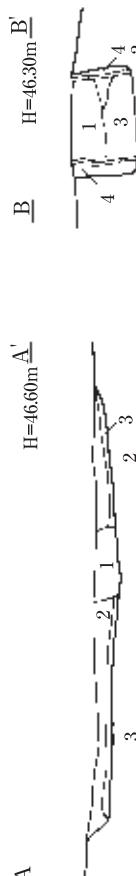
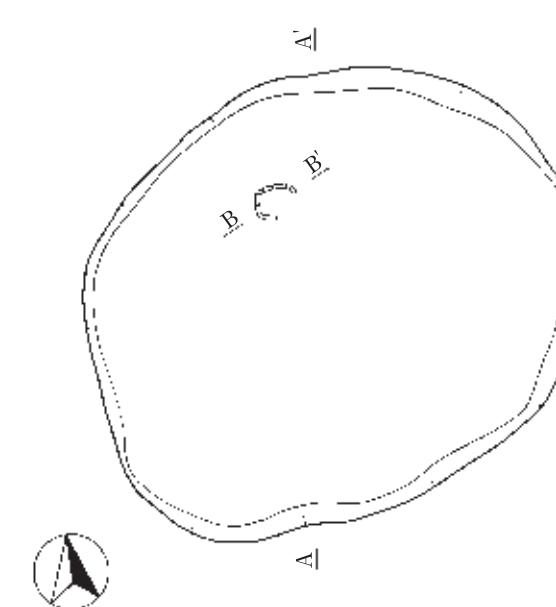
B H=46.10m B'



第22図 SI1604



第23図 S11604出土遺物



第24図 SI2013

《柱 穴》確認できなかった。

《遺 物》縄文時代I群3類の土器が出土した（第24図2）。

《時 期》埋設土器から縄文中期に属すと考えられる。

8 S I 2016堅穴住居跡（第25図、図版8）

《位 置》L P49・50、L Q49グリッド。

《確 認》地山面で確認した。

《重 複》他遺構との重複はない。

《規 模》長軸3.96m（北一南）、短軸3.33m（東一西）で、床面までの深さは最深部で0.16mである。

《平面形》ほぼ楕円形である。

《埋 土》残存部が僅かなため1層である。

《 壁 》緩やかな角度で立ち上がる。

《床 面》僅かに凹凸が見られるが、ほぼ平坦で固く締まっている。

《 炉 》土器埋設炉で、住居中央やや東側にある。埋設土器が正位に埋められていると判断できるが、胴部が土圧によって歪んだ形を成し、上位～中位を欠損して遺存状態が不良である。埋設土器の南西側に不整形で最大長1.48mの炭化面が広がる。明確な掘り込みは確認できなかった。炭化物の深さは最深部で0.22mである。土器内の覆土は5層で、埋設土器は、深鉢形土器で残存部器高38.9cm、口径24.9cm口縁一部と底部を欠く（第26図1、図版35-3）。

《柱 穴》住居内に9基を検出した。長径0.2～0.4mのほぼ円形で、深さは0.08～0.29mである。

《遺 物》縄文時代I群3類と思われる土器が出土した（第26図1・2）。他に土製品が出土した（第26図3）

《時 期》埋設土器から縄文中期に属すと考えられる。

9 S I 2023堅穴住居跡（第27図、図版9）

《位 置》L Q50、L R50グリッド。

《確 認》地山面で確認した。

《重 複》他遺構との重複はない。

《規 模》長軸3.34m（東一西）、短軸3.18m（北一南）で、床面までの深さは0.12mである。

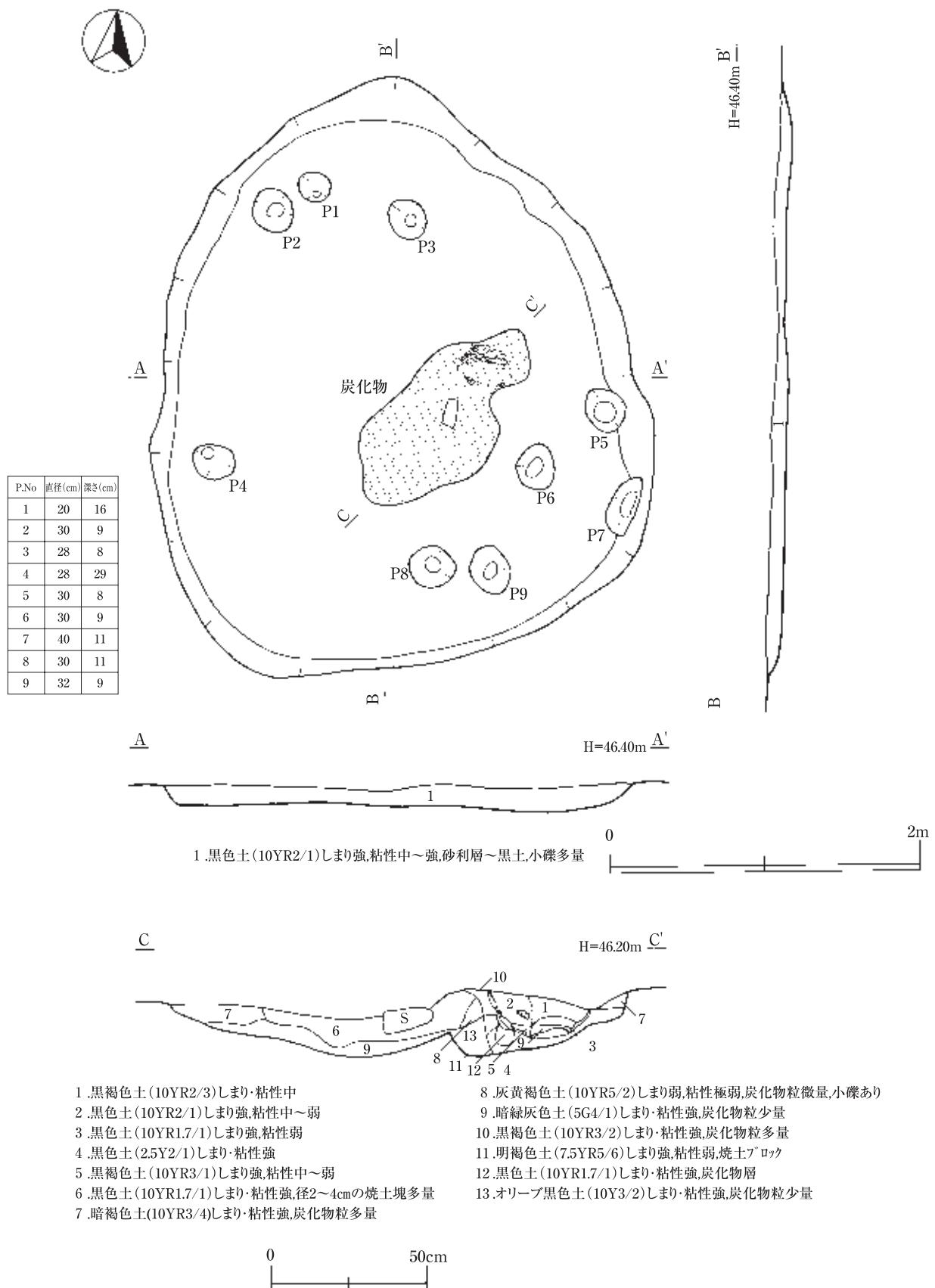
《平面形》ほぼ円形である。

《埋 土》底面付近はグライ化している。

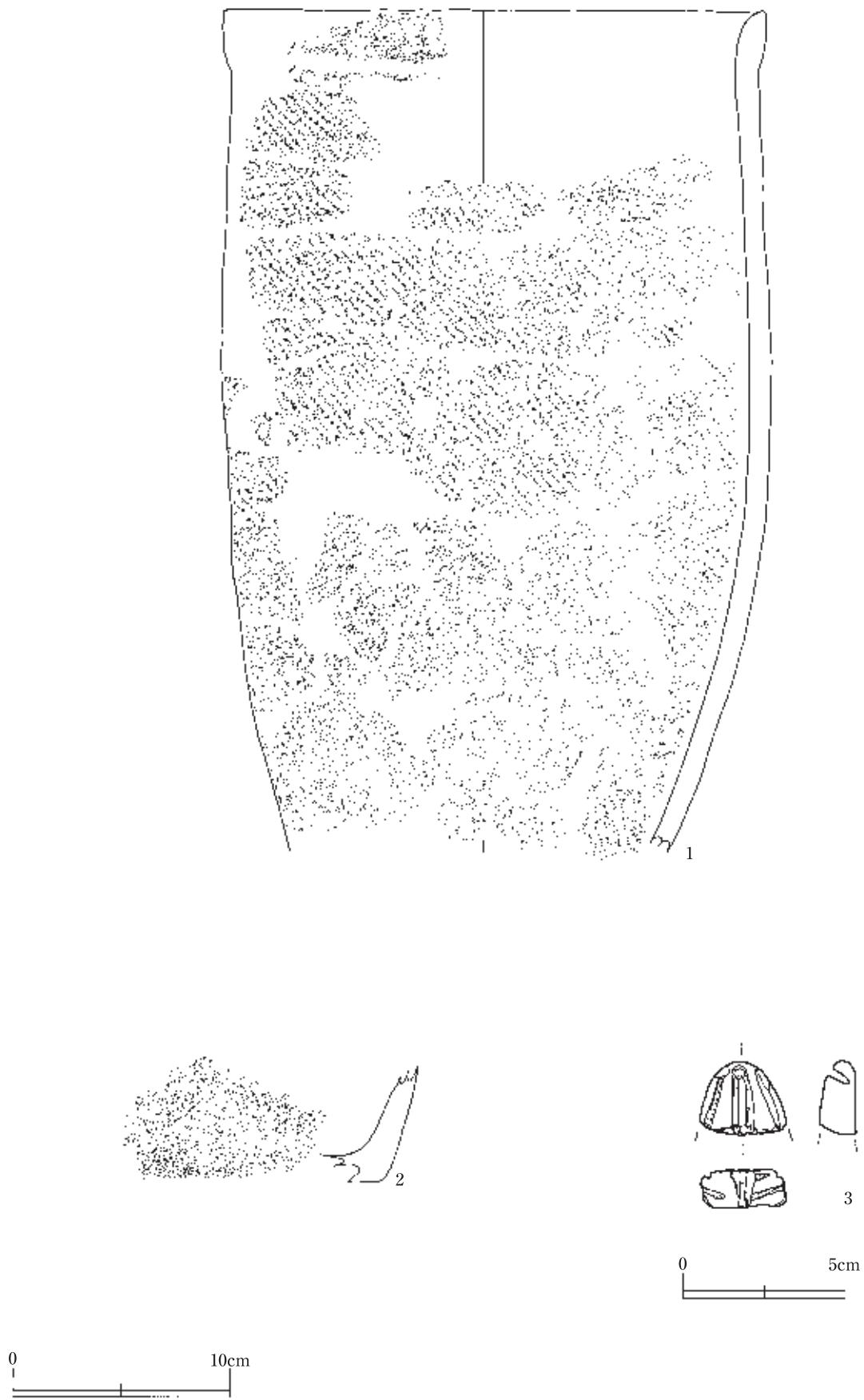
《 壁 》非常に低く、北側壁は急な角度で立ち上がる。

《床 面》住居中央部から南壁にかけて幅約0.4mの暗渠に破壊される。僅かに凹凸が見られるが、ほぼ平坦で固く締まっている。

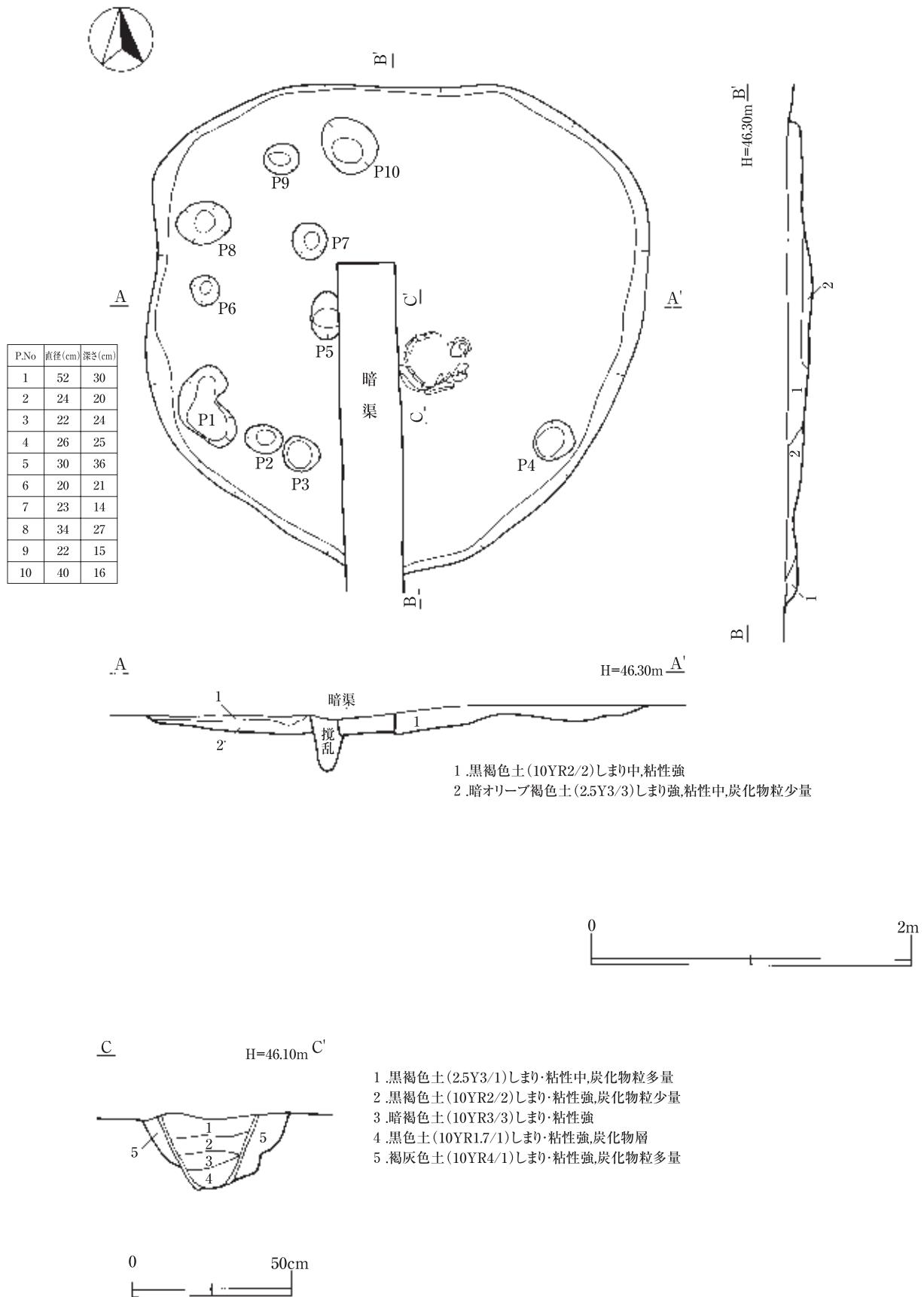
《 炉 》土器埋設石囲炉で、住居中央やや南東寄りにある。直径0.41～0.48m、掘り込みの深さは0.25mである。残存部の器高26.5cm、底径11cmの深鉢形土器（第28図1）が正位に埋められていた。口縁部は欠損し、他部位の遺存状態も良好ではない。埋設土器の一部の土器片1片が東側にある。石囲部は丸礫や角礫を環状に配置したものである。土器の北側部分は壊され存在しない。石囲部の一部



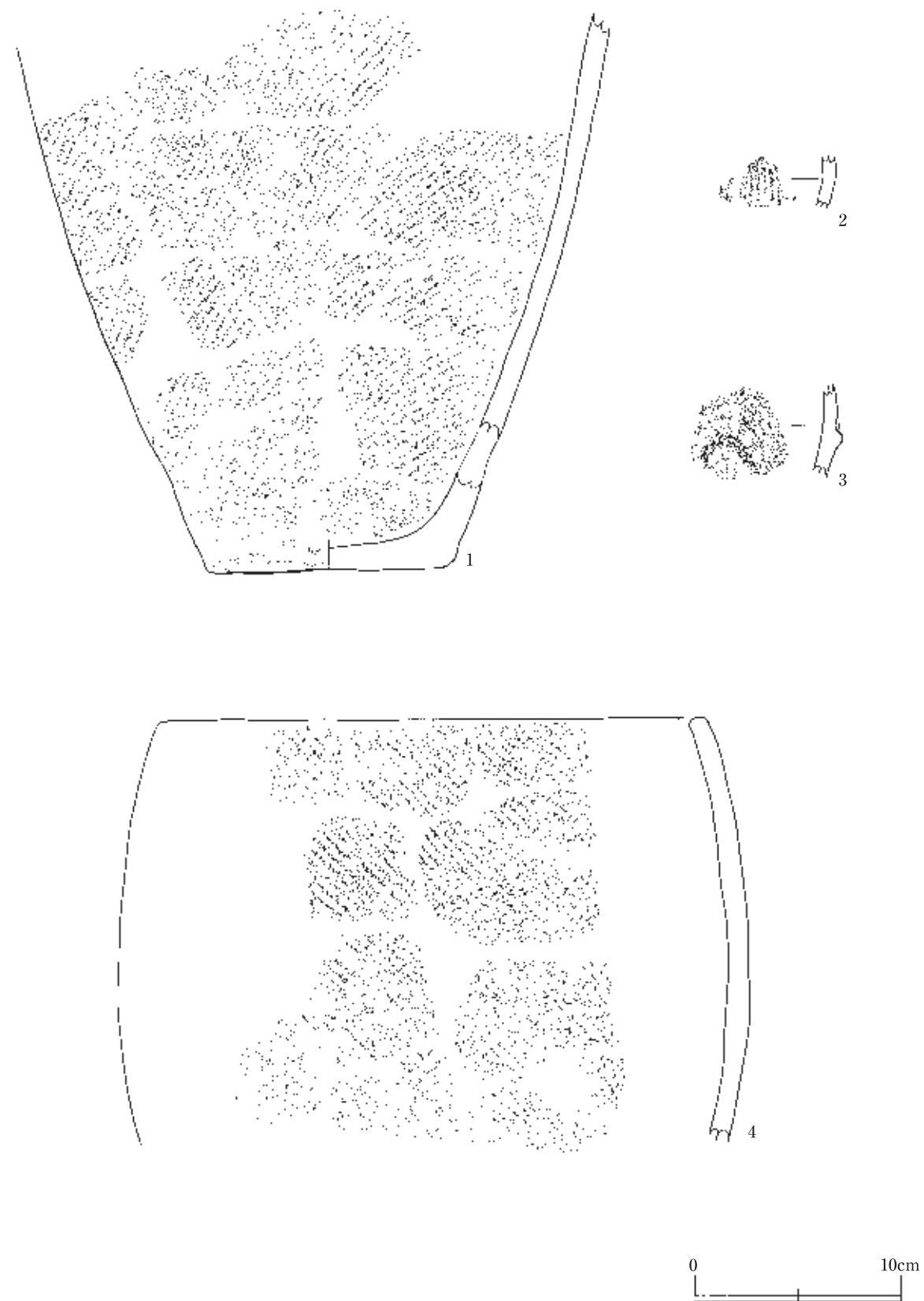
第25図 SI2016



第26図 SI2016出土遺物



第27図 SI2023



第28図 SI2023出土遺物

と考えられる礫の散乱が東側に認められた。石圓部の直下から小形の壺形土器が出土し、構築時に添えた形跡が認められる。土器内の覆土は4層に分層した。覆土1層と掘込み部には炭化物粒が多量に混入している。

《柱 穴》住居内に9基を検出した。ほとんどが円形で長径0.2~0.52m、深さ0.14~0.36mである。

《遺 物》縄文時代I群3類の土器が出土した（第28図2~4）。他に縄文時代の削器も出土した。

《時 期》埋設土器から縄文中期に属するものと考えられる。

10 S I 2089堅穴住居跡（第29図、図版9）

《位 置》L N37・38、L O37・38グリッド。

《確 認》地山面で確認した。

《重 複》他遺構との重複はない。

《規 模》長軸5.42m（北西—南東）、短軸5.03m（北東—南西）で、床面までの深さは最深部で0.26mである。

《平面形》ほぼ円形である。

《埋 土》3層に分層した。床面の住居中央に多量の炭化物を確認した。

《 壁 》緩やかに立ち上がる。

《床 面》ほぼ平坦で、黒褐色シルトで覆われ、固くしまりがある。

《 炉 》土器埋設炉で、住居のほぼ中央にある。直径0.22~0.25m、掘り込みの深さは0.2mである。土器胴部が正位に埋められていた。残存部器高17.6cm、底径6.8cm、深鉢形土器の下半部である。焼土（炭化物含む）が埋設土器から住居中央に広がり、直径約2mの範囲で確認された。

《柱 穴》住居内に4基を検出した。ほとんどが円形で長径0.22~0.54m、深さ0.18~0.37mである。

《遺 物》撚糸文の施された土器（第32図2~4）が出土したほか、縄文時代の土製品（第32図-5）、磨石が出土した。また平安時代の須恵器杯・甕、土師器杯も出土した。

《時 期》埋設土器から縄文中期に属すと考えられる。

11 S I 2117堅穴住居跡（第30図、図版10）

《位 置》L O39、L P39グリッド。（調査区E中央南西）

《確 認》地山面で薄い暗褐色土の円形プランとして確認した。

《重 複》他遺構との重複はない。

《規 模》長軸3.92m（北東—南西）、短軸3.46m（北西—南東）で、床面までの深さは0.2mである。

《平面形》住居跡中央を南北に二分するように暗渠によって破壊されているが、ほぼ円形を呈する。

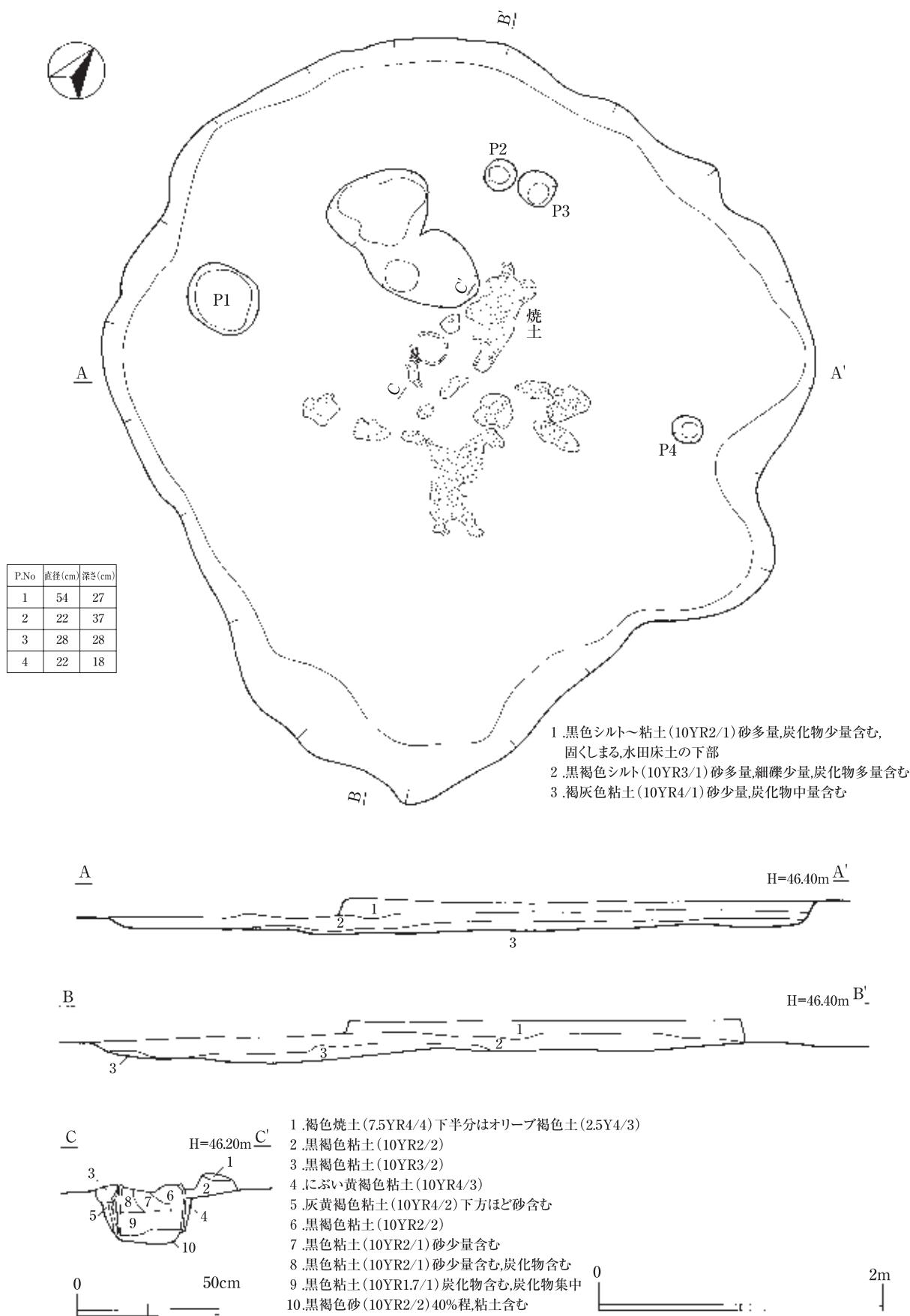
《埋 土》炭化物粒や小礫を含んだ黒土が全体に多く堆積している。

《 壁 》急な角度で立ち上がる。

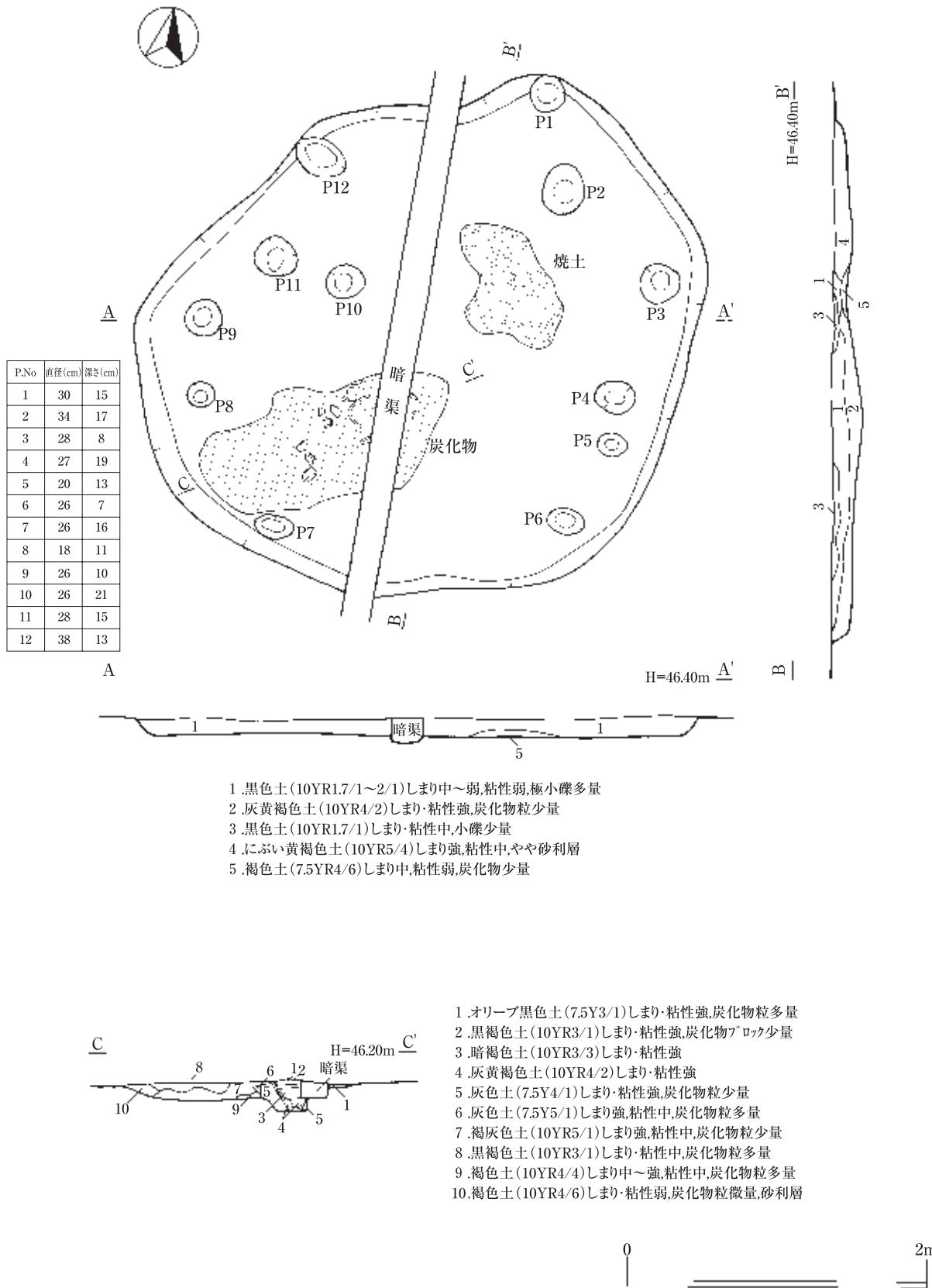
《床 面》僅かに凹凸がある。南側に地山砂礫層が露出する部分も見られるが、他は全体に固く締まっている。

《焼土》住居内中央やや東寄りに、最大長0.98m、最大厚0.06mの範囲に焼土の堆積が見られた。

《 炉 》土器埋設炉で、住居中央やや南側にある。深鉢形土器が正位に埋められていたが口縁部を



第29図 SI2089



第30図 SI2117

欠き、暗渠に壊され残存部はおよそ半分程である。埋設土器の一部と思われる土器片が埋設土器の周りに4片散乱する。また、埋設土器の周囲と土器の南西に向かって薄い焼土面が広がり、径3cm～5cmの礫が散らばっている。土器内の覆土は4層で炭化物粒が堆積する。掘り込みの深さは0.22mである。

《柱穴》住居内に12基を検出した。ほとんどがほぼ円形で長径0.18～0.38m、深さ0.07～0.21mである。

《遺物》縄文時代I群3類の土器が出土した（第32図6・7）。石錐2類、削器1類が出土した（第32図8・9）ほか、石槍、石皿、敲石も出土した。

《時期》埋設土器から縄文中期に属すと考えられる。

12 S I 2578堅穴住居跡（第31図、図版10）

《位置》MA42・43、MB42・43グリッド。

《確認》地山面で暗褐色土の円形プランとして確認した。

《重複》他遺構との重複はない。

《規模》長軸5.1m（北一南）、短軸4.68m（東一西）で、床面までの深さは0.14mである。

《平面形》ほぼ円形を呈する。

《埋土》全層に渡り炭化物粒や小礫が混入している。

《壁》緩やかに立ち上がる。削平されて北西側の壁が存在しない。

《床面》ほぼ平坦で、一部地山砂質土が露出するが全般に固く締まっている。

《炉》土器埋設炉で、住居中央やや東側にある。直径0.22～0.26mである。深鉢形土器が正位に埋められていたが、口縁部を欠失し胴部が土圧により歪曲している（図版10-2）。埋設土器の周囲から東側壁際にかけ、0.8m幅で薄い炭化面が延びる。土器内埋土は5層に分層され、黒褐色土と小礫が多量に混入している。掘り込みはグライ化し、その深さは0.32mである。

《柱穴》住居内にピット8基を検出した。ほとんどが円形で長径0.26～0.42m、深さ0.08～0.22mである。位置関係からP1・P2が柱穴と思われが他の柱穴に関しては判然としない。

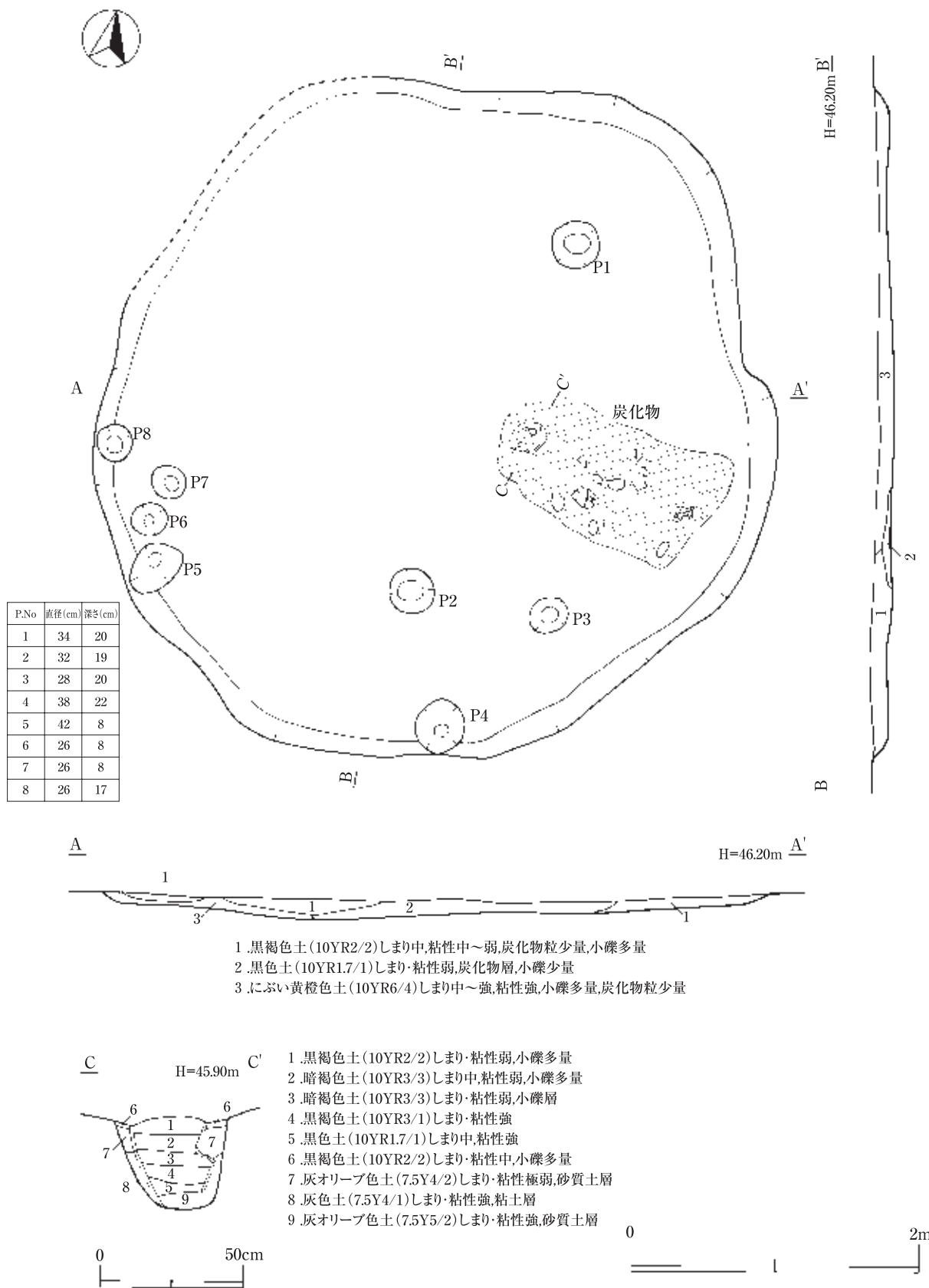
《遺物》縄文時代I群3類の土器（第32図10・11）と、搔器2類が出土した（第32図12）。他に削器も出土した。

《時期》縄文中期に属すと考えられる。

② 土器埋設炉

1 S N2231土器埋設炉（第33図）

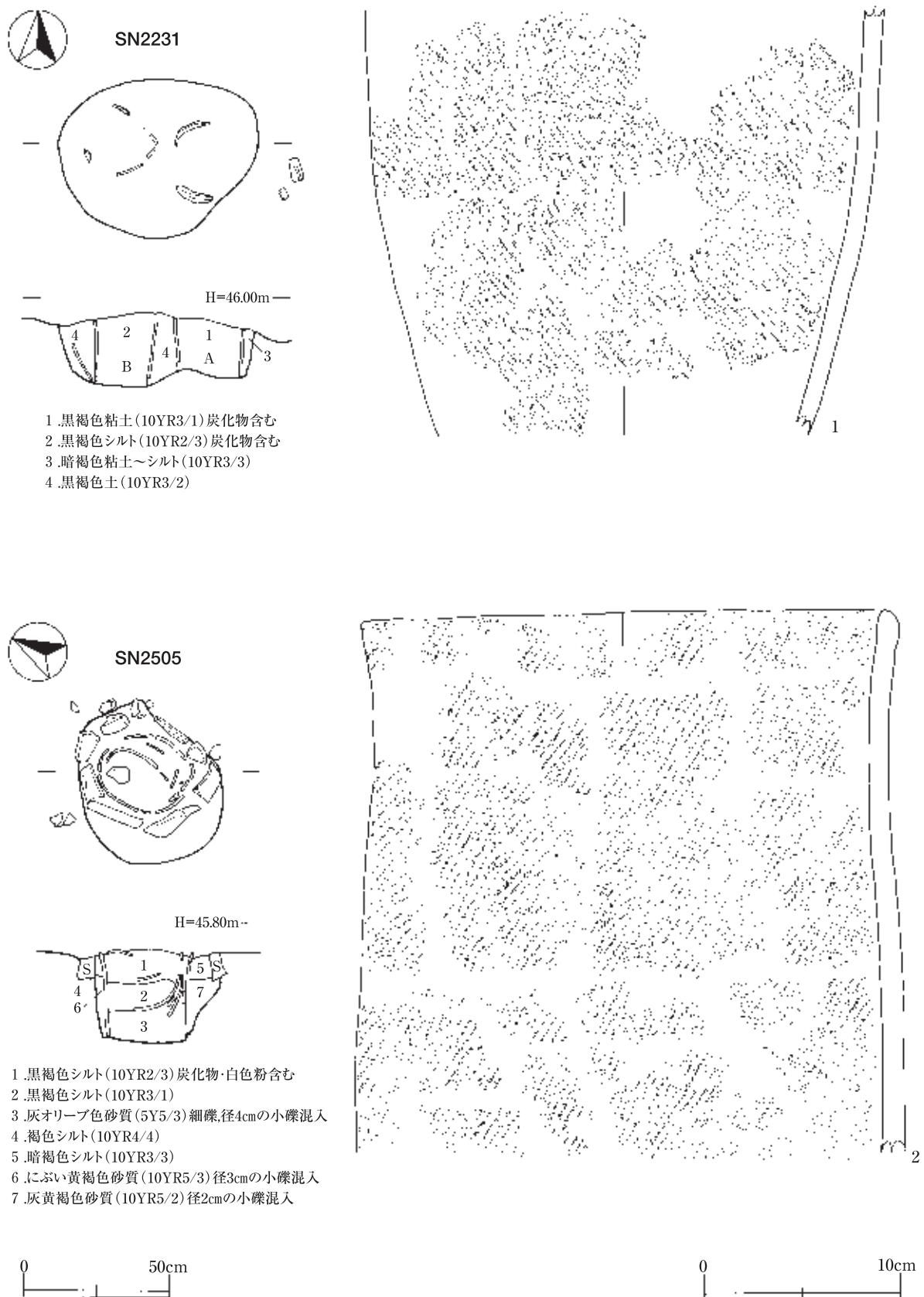
L047グリッドにあり、地山面で炉を確認した。掘り込みは直径0.55～0.68mの楕円形で、深さは0.25mである。隣り合う様に2個の深鉢形土器の胴部が正位に埋設されている。断面観察で埋設土器Bを埋めた際の粘土質土が埋設土器Aに被ることから、BがAより新しい。土器内の覆土は、A・B共に1層であり、どちらも炭化物が堆積する。掘り込みの深さは土器Bがやや深い。縄文時代I群3類と思われる土器である（第33図1）。



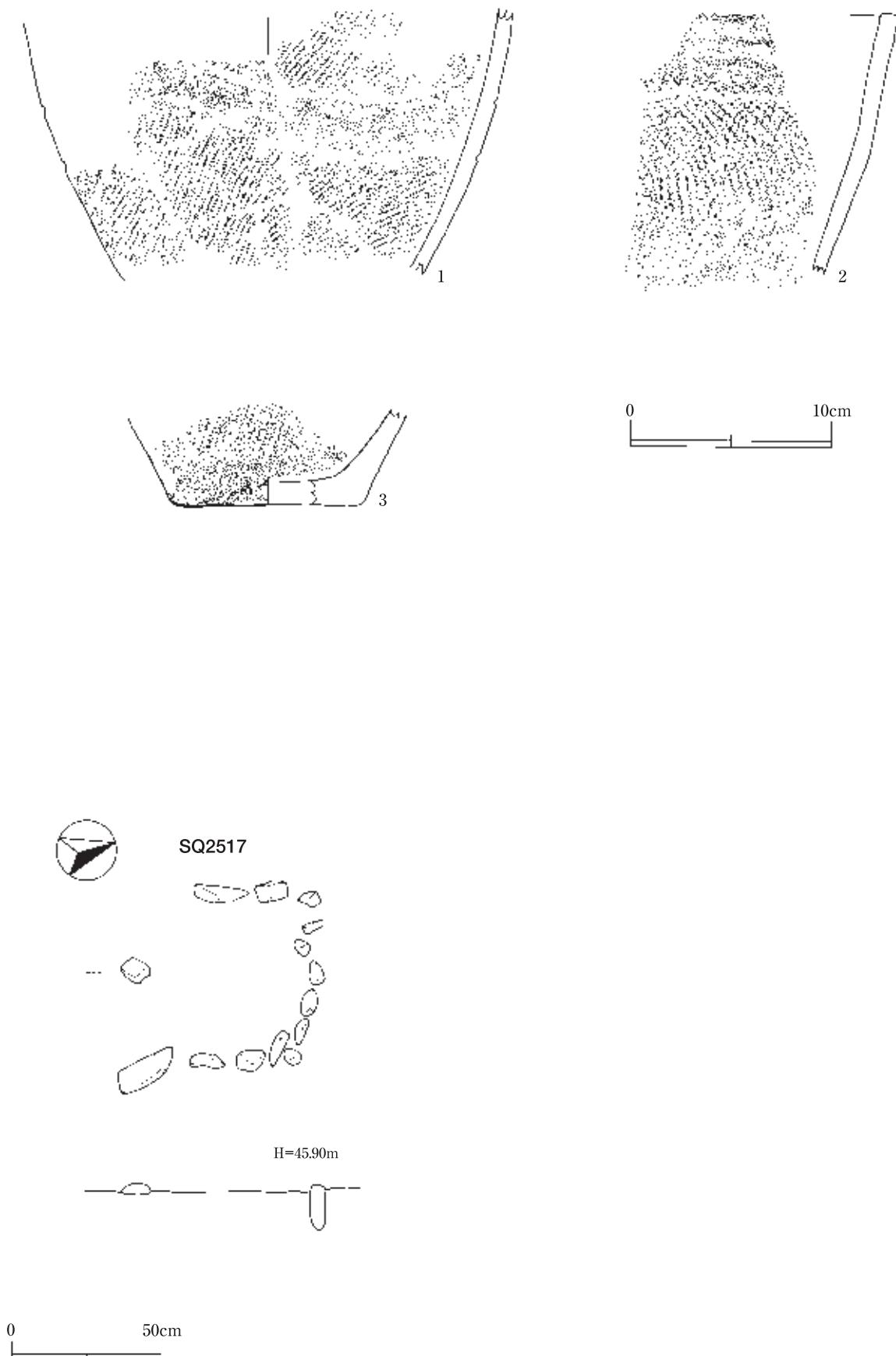
第31図 SI2578



第32図 SI2089・2117・2578出土遺物



第33図 SN2231・2505



第34図 SN2505出土遺物・SQ2517

2 S N2505土器埋設石囲炉（第33図、図版11）

MC38グリッドにあり、地山面で石囲炉を確認した。掘り込みは直径0.47～0.57mの楕円形で、深さは0.32mである。埋設土器を囲むように角礫8個を環状に配置し構築していた。小礫も見られるが、石囲部の礫が欠落したものと判断した。覆土は炭化物と砂礫を少量含む。埋設土器は、残存部器高27.6cm、口径27.4cmで、内部に被熱痕が認められた。縄文時代I群3類と思われる土器である（第33図2）。土器の内部より多数の土器が出土した（第34図1～3、図版35-6）。他に石皿が出土した。

③ 配石遺構

1 S Q2517配石遺構（第34図、図版12-1）

MB48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.93m、短軸0.66mで、7～20cm程の礫が14個「コ」の字形に配列されていた。

④ 土坑

1 SK18土坑（第35図、図版12-2）

LC25、LD25グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は、長軸2.46m（北一南）、短軸1.5m（東一西）の楕円形で、深さは0.26mである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群1～2類の土器が出土した（第35図1～4）。

2 SK38土坑（第35図）

LD38グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.83m（北東一南西）、短軸0.62m（北西一南東）の楕円形で、深さは最深部で0.14mである。底面はやや丸みを帯び、壁は南西側が緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

3 SK64土坑（第35図）

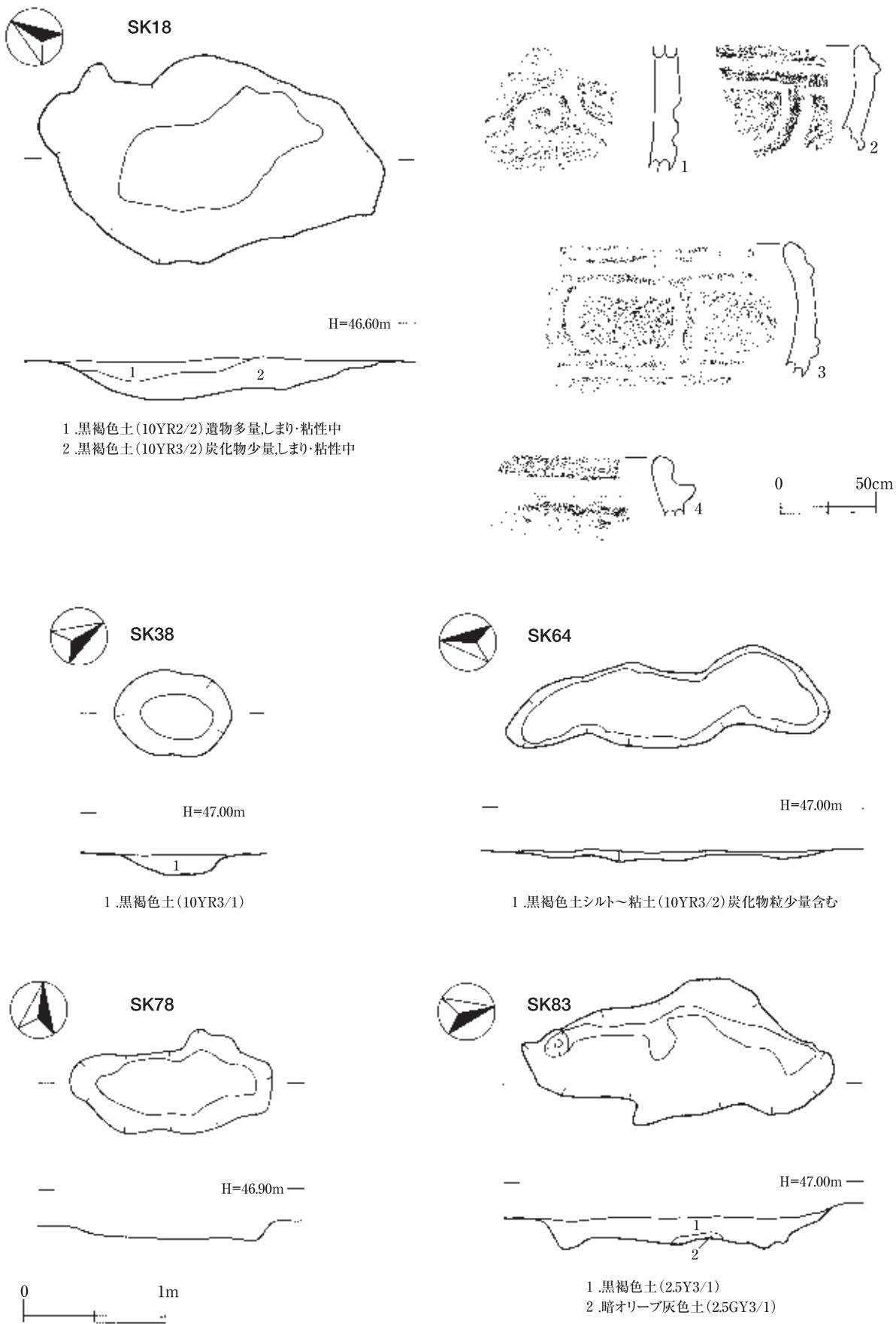
LD39・40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.28m（北一南）、短軸0.7m（東一西）の不整な楕円形で、深さは最深部で0.06mである。底面は僅かな凹凸が見られる。壁の残存部は僅かなため、立ち上がりは明瞭でない。縄文時代I群の土器が出土した。

4 SK78土坑（第35図）

LF48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.42m（東一西）、短軸0.76m（北一南）の楕円形で、深さは0.12mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

5 SK83土坑（第35図）

LD49グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.2m（北一南）、短軸1.09m（東一西）の不整な楕円形で、深さは0.22mである。底面は凹凸があり、壁は開いて立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。



第35図 SK18・38・64・78・83

6 SK94土坑（第36図）

L D45・46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.89m（北西—南東）、短軸1.01m（北東—南西）の不整形で、深さは0.26mである。底面は凹凸があり、壁は大きく開きながら立ち上がる。縄文時代Ⅰ群の土器が出土した。縄文時代の石器（削器）が出土した。

7 SK95土坑（第36図）

L C42・L D42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.08m（東—西）、短軸1.04m（北—南）の半円形で、深さは0.42mである。底面は中央が丸みを帯び西側が平坦になる。壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代Ⅲ群の土器が出土した。

8 SK97土坑（第36図）

L E50、L F50グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2m（北西—南東）、短軸1.28m（北東—南西）の不整な橈円形で、深さは0.18mである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代Ⅲ群の土器が出土した。壁際の柱穴は、中世以降のものと推察される。

9 SK99土坑（第37図）

L G45・46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.03m（北—南）、短軸0.6m（東—西）の不整な橈円形で、深さは0.08mである。底面はほぼ平坦で、壁は低く緩やかに立ち上がる。縄文時代中期の土器が出土した（第37図1）。

10 SK119土坑（第37図）

L J47グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.85m（東—西）、短軸0.5m（北—南）の橈円形で、深さは0.08mである。底面はやや丸みを帯び、壁は低く緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

11 SK131土坑（第37図）

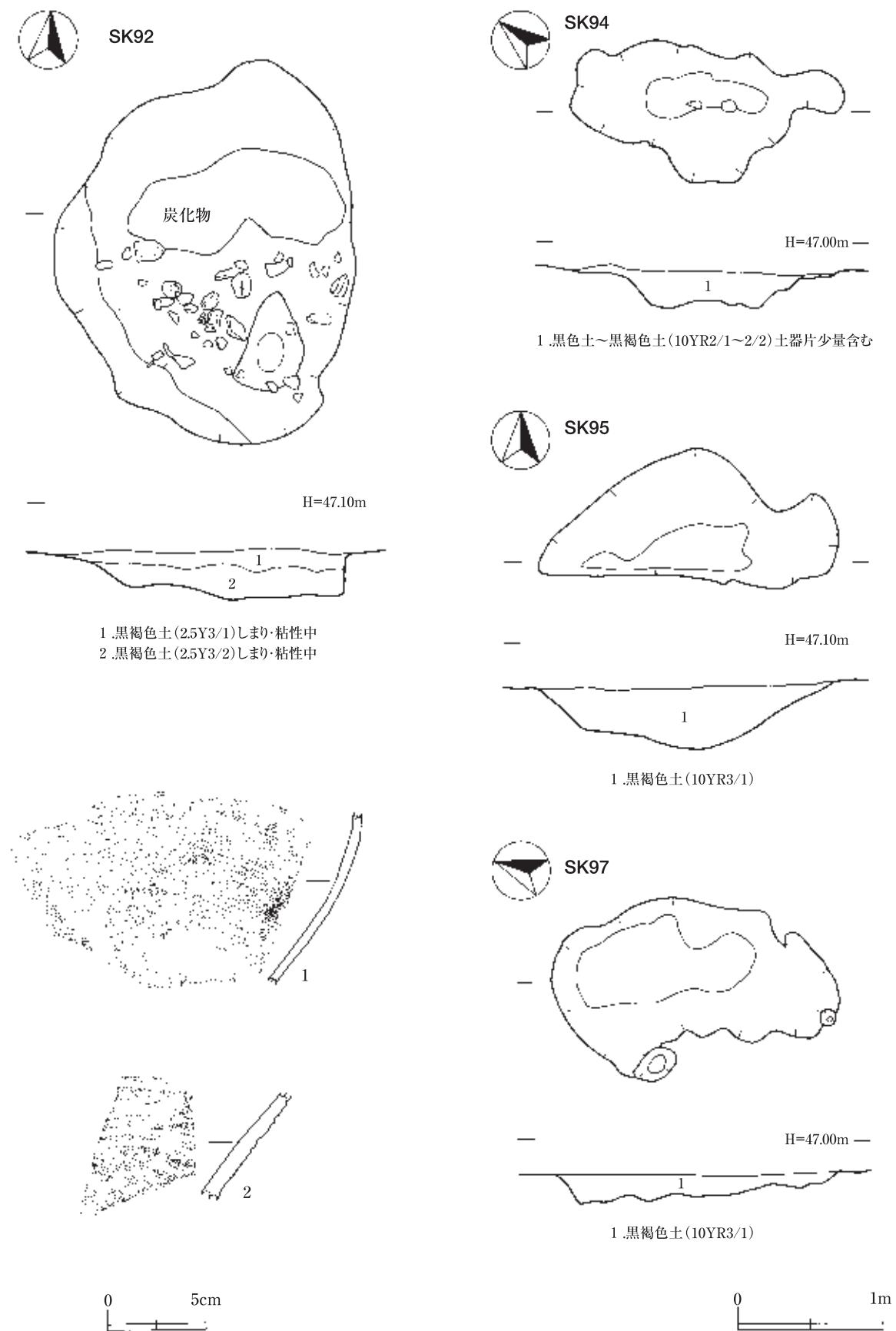
L H50グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.3m（北東—南西）、短軸0.93m（北西—南東）の橈円形で、深さは0.1mである。底面は僅かに凹凸があり、壁は低く緩やかに立ち上がる。縄文時代の削器が出土した。

12 SK148土坑（第37図、図版13-1）

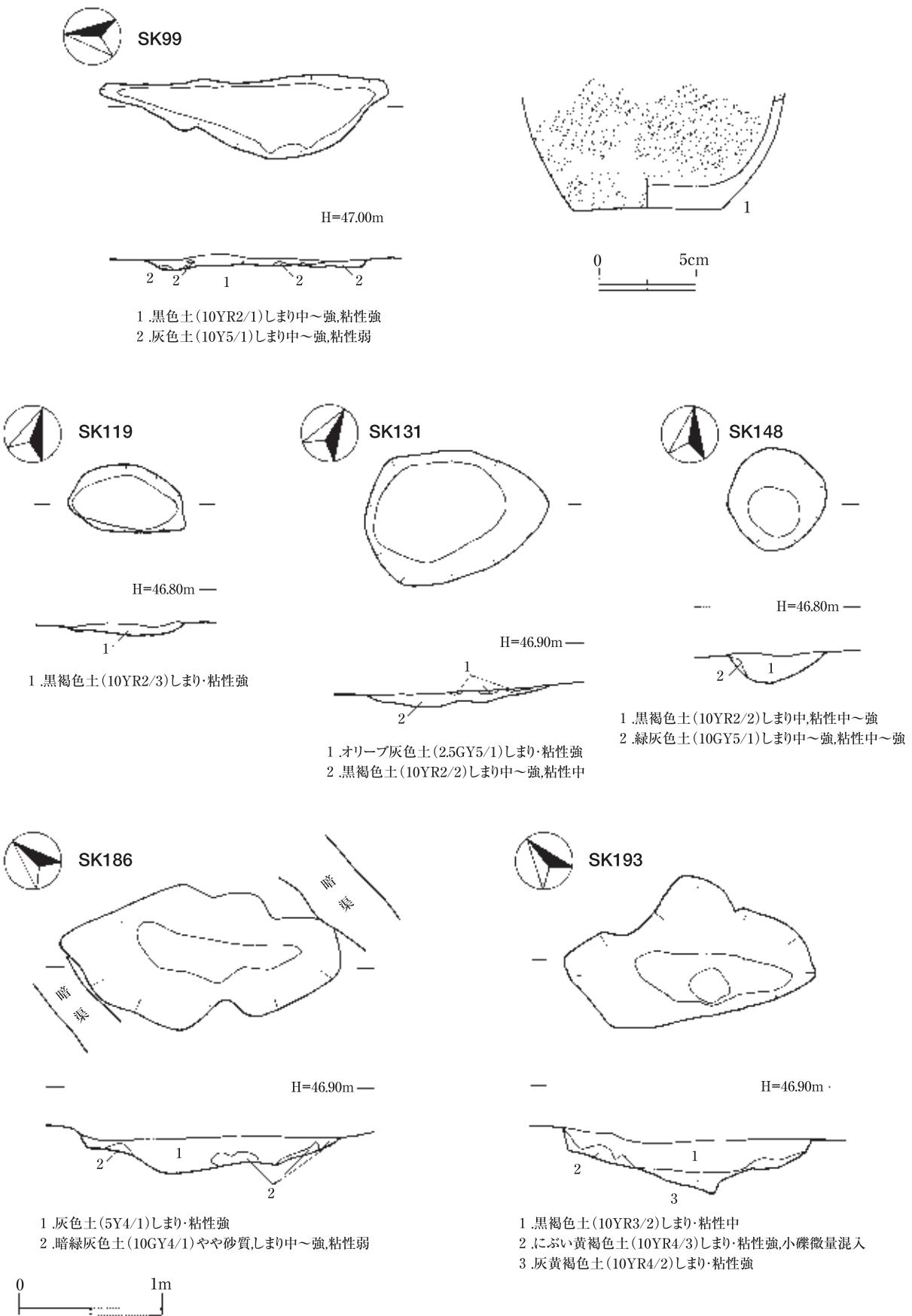
L I44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.73m（北—南）、短軸0.68m（東—西）のほぼ円形で、深さは最深部で0.2mである。底面は丸い鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

13 SK186土坑（第37図）

L I45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.98m（北西—南東）、短軸1.02m（北東—



第36図 SK92・94・95・97



第37図 SK99・119・131・148・186・193

南西) の不整な橢円形で、深さは0.22mである。底面は僅かに凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

14 SK193土坑（第37図）

LJ45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.77m（北西—南東）、短軸1.1m（北東—南西）の不整形で、深さは最深部で0.4mである。底面は中央が窪んでいる。壁の北西側はほぼ垂直に立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

15 SK225土坑（第38図、図版13-2）

LI32グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.8m～0.88mのほぼ円形で、深さは0.5mである。底面は平坦で、壁は南側が段差を持ち開きながら立ち上がる。縄文時代III群の土器が出土した（第38図1～3）。

16 SK303土坑（第38図）

ME31グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.6m～0.61mの円形で、深さは0.08mである。底面はやや丸みを帯び、壁は低いが緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

17 SK304土坑（第38図）

MD31グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.63m（東—西）、短軸0.4m（北—南）の橢円形で、深さは0.14mである。底面はやや丸みを帯びて東側に傾斜し、壁は急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

18 SK308土坑（第38図）

MD30、ME30グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸3.56m（北西—南東）、短軸1.8m（北東—南西）の不整な橢円形で、深さは0.34mである。底面は凹凸があり、壁は北西側が緩やかに立ち上がる。土坑の中央に、最大径0.34mで円形の礫が縦に置かれて出土した。礫の直下は、土坑底面より深さ12cmほどの掘り込みが確認できた。縄文時代I群1・2類の土器が出土した（第38図4）。

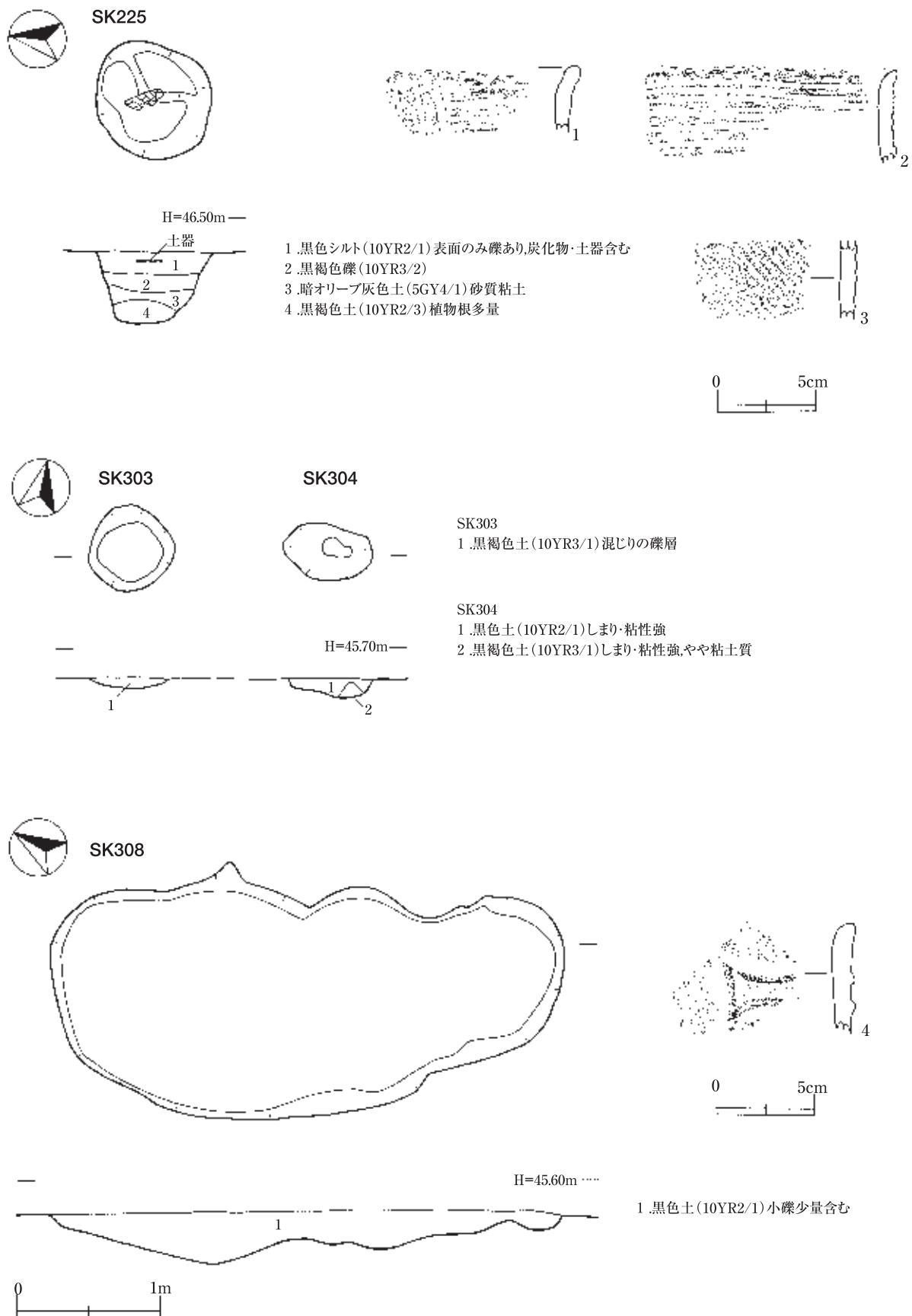
19 SK310土坑（第39図、図版13-3）

MD29、ME29グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.3m（北西—南東）、短軸1.16m（北東—南西）のほぼ円形で、深さは0.22mである。底面は平坦で、壁は北側がほぼ垂直に立ち上がる。

縄文時代I群2類および3類の土器が出土した（第39図4、図版36-1）。

20 SK345土坑（第39図）

ME32グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.5m（北—南）、短軸0.4m（東—西）の橢円形で、深さは0.18mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。



第38図 SK225・303・304・308

21 SK349土坑（第39図、図版14-1）

MG29グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.56m（北一南）、短軸1.26m（東一西）の橢円形で、深さは0.14mである。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器と磨石が出土した。

22 SK360土坑（第39図）

MG27グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は一部掘り過ぎがあるが、直径0.56mの略三角形で、深さは0.14mである。底面は丸い鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群1類の土器が出土した（第39図5・6）。

23 SK362土坑（第40図）

MG28グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.58m（東一西）、短軸1.32m（北一南）の半円形で、深さは最深部で0.15mである。土坑東側が一部暗渠によって切られている。底面は僅かに丸みを帯びるがほぼ平坦で、壁は低いが緩やかに立ち上がる。縄文時代I群1・2類の土器が出土した（第40図1、図版36-2）。

24 SK363土坑（第40図、図版14-2）

MG29グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.46m（北一南）、短軸1.3m（東一西）のほぼ円形で、深さは0.36mである。中央部を南北に暗渠に切られている。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代II群の土器が出土した（第40図2、図版36-3）。

25 SK364土坑（第40図、図版33）

MF32グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.95～0.97mの円形で、深さは0.17mである。底面は僅かに凹凸あり、壁は南側が垂直に立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した（第40図3）。

26 SK366土坑（第40図）

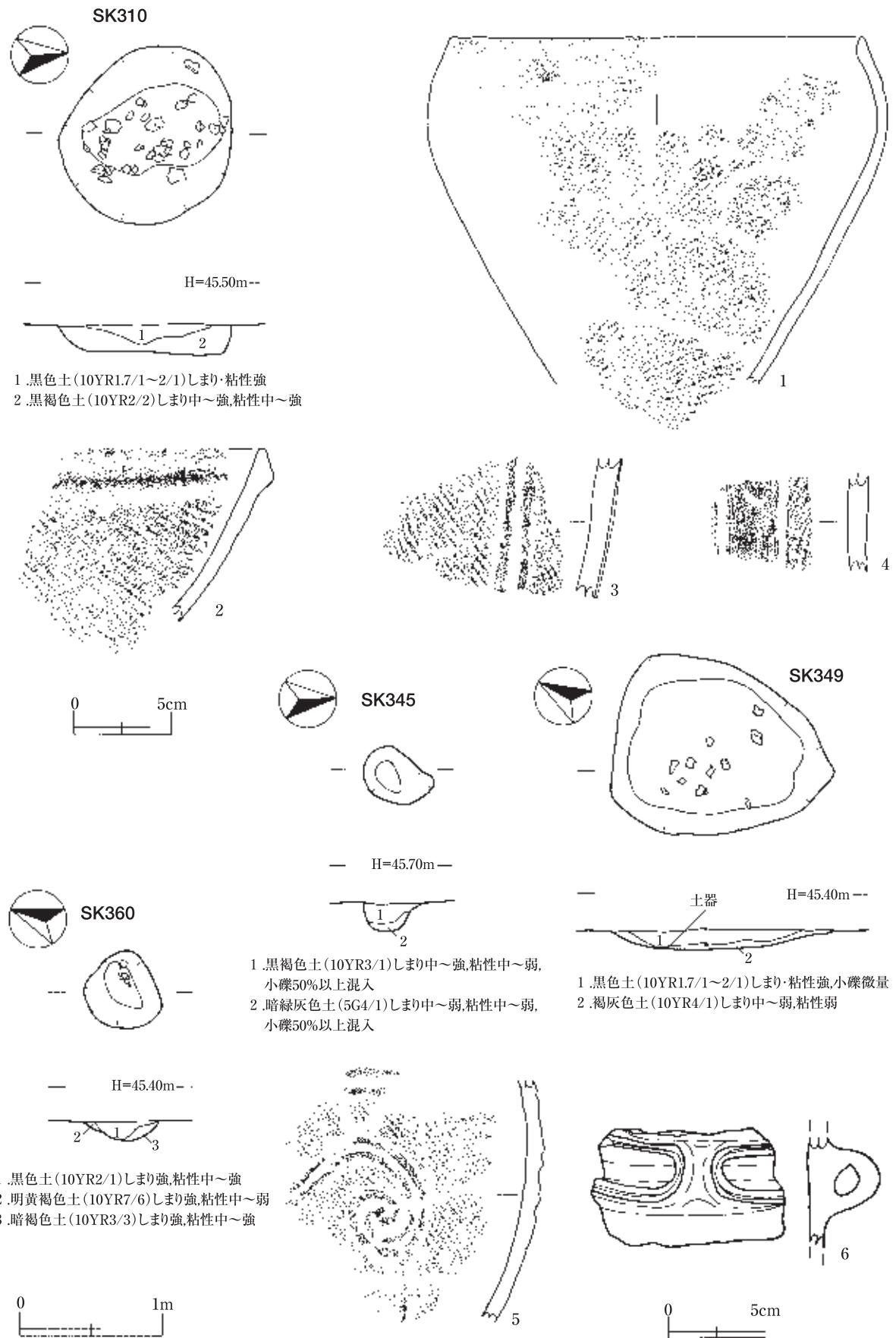
MG32グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.85～0.89mの円形で、深さは最深部で0.04mと非常に浅い。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

27 SK369土坑（第40図）

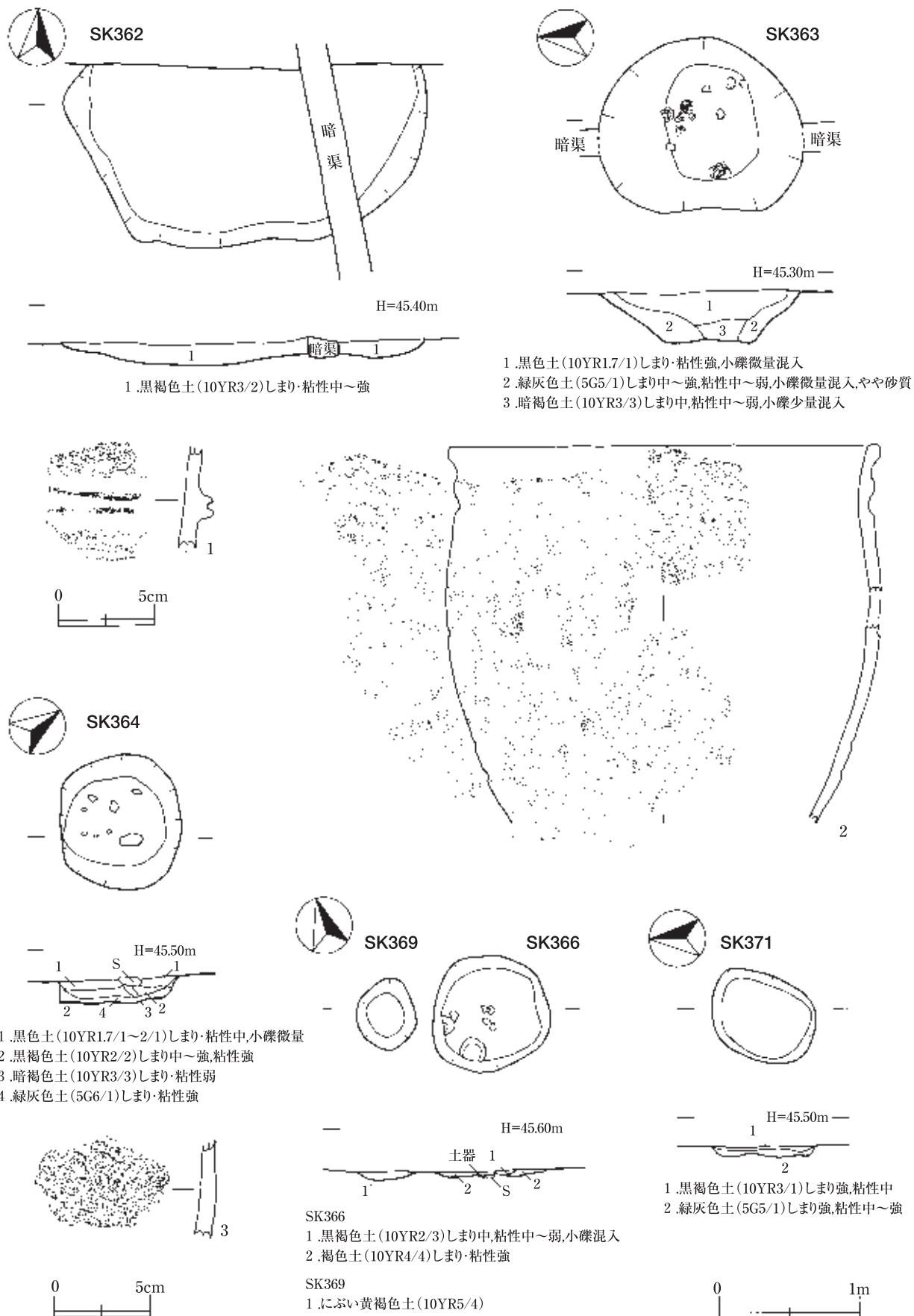
MG32グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.52m（北東一南西）、短軸0.44m（北西一南東）の円形で、深さは0.06mと極めて浅い。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

28 SK371土坑（第40図）

MG33グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.77m（北一南）、短軸0.6m（東一西）



第39図 SK310・345・349・360



第40図 SK362～364・366・369・371

の橢円形で、深さは0.08mである。底面は僅かに凹凸があり、壁は南側が急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

29 SK372土坑（第41図）

MF33グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.98m（北一南）、短軸0.82m（東一西）のほぼ円形で、深さは0.04mと非常に浅い。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代IV群の土器が出土した。

30 SK379土坑（第41図）

MF30グリッドにあり、地山面で礫で石組されたプランを確認した。平面形は長軸1.24m（北東一南西）、短軸1.08m（北西一南東）のほぼ円形で、深さは0.18mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。握り拳大の角礫12個が「コ」の字形に配列されていた。縄文時代I群2類の土器（第41図2・3）、石錐1類（第41図1）が出土した。

31 SK382土坑（第41図）

ME31グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.74m（東一西）、短軸0.72m（北一南）の不整な円形で、深さは0.2mである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

32 SK390土坑（第41図、図版14-3）

MF31、MG31グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.9m（北東一南西）、短軸0.71m（北西一南東）のほぼ橢円形で、深さは0.14mである。底面はほぼ平坦で、壁は北東側が緩やかに立ち上がる。縄文時代II群の土器が出土した（第41図4）。

33 SK393土坑（第41図）

MG30グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.14m（東一西）、短軸0.76m（北一南）の橢円形で、深さは0.3mである。底面は東側に傾斜し、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代II群の土器が出土した（第41図5・6）。

34 SK394土坑（第42図、図版15-1）

MF30グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.36m（東一西）、短軸0.92m（北一南）の橢円形で、深さは0.28mである。底面は中央が丸みを帯びて窪み、壁は大きく開いて立ち上がる。縄文時代I群2類の土器が出土した（第42図1～3）。

35 SK401土坑（第42図）

MG30グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.7m（北東一南西）、短軸1.6m（北西一南東）のほぼ円形で、深さは0.22mである。中央部を南北に暗渠が切る。底面は鍋底状で、壁は緩や



第41図 SK372・379・382・390・393

かに立ち上がる。縄文時代I群1～2類の土器が出土した（第42図4）。

36 SK402土坑（第42図）

MF30・MG30グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は、長軸1.07m（北一南）、短軸0.93m（東一西）の不整な橢円形で、深さは0.26mである。底面はほぼ平坦で、壁は南西側が緩やかに立ち上がる。縄文時代I群1～2類の土器が出土した（第42図5）。

37 SK408土坑（第42図）

ME33グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.78m（北西一南東）、短軸0.53m（北東一南西）の不整な橢円形で、深さは0.1mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

38 SK409土坑（第42図）

ME35グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.98m（東一西）、短軸0.8m（北一南）の橢円形で、深さは0.26mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代II群の土器が出土した。

39 SK451土坑（第42図）

MD37・ME37グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.72m（北東一南西）、短軸1.57m（北西一南東）の不整形で、深さは0.28mである。底面は中央が窪み、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

40 SK460土坑（第43図）

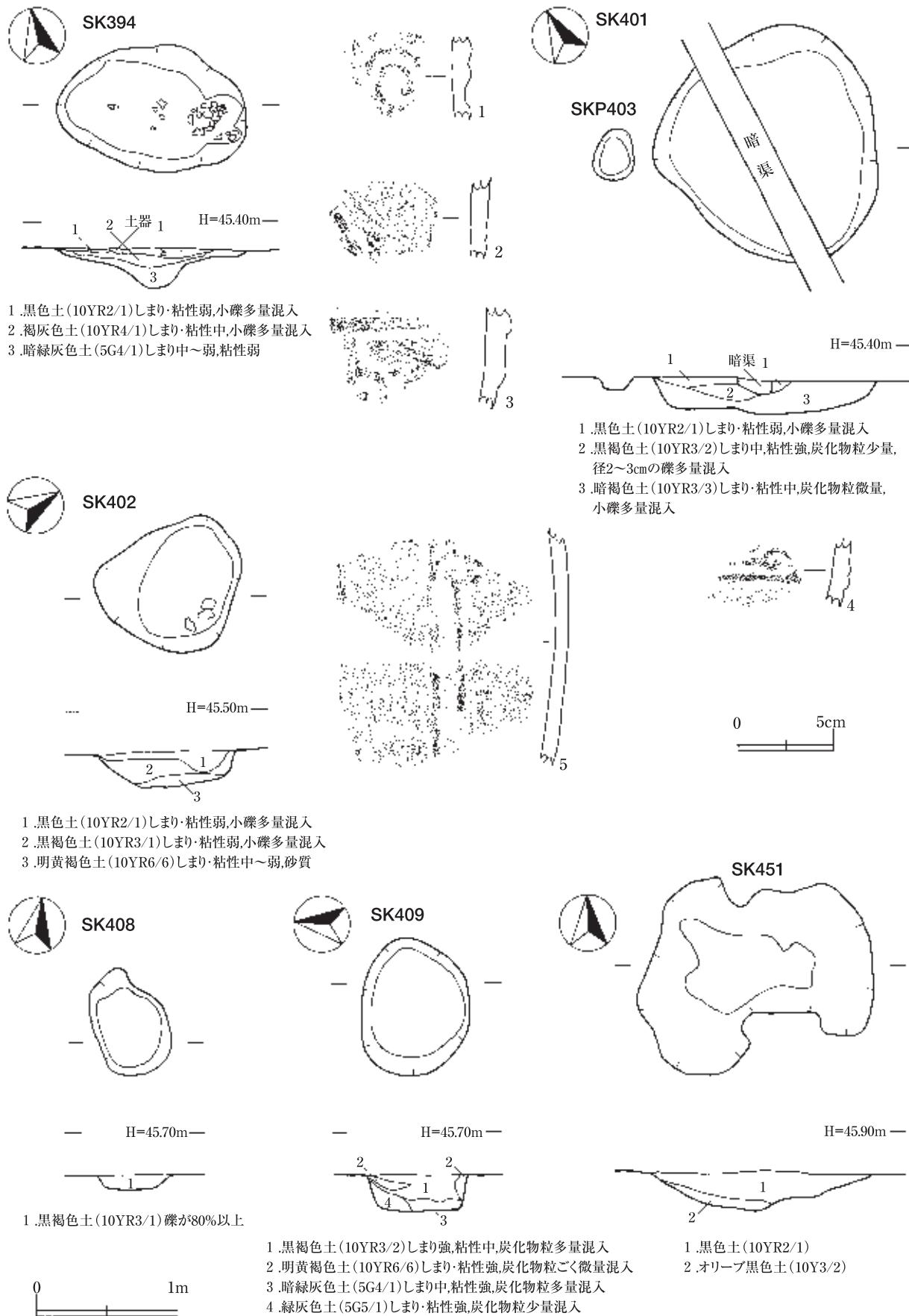
MF41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.4m（東一西）、短軸1.28m（北一南）の不整形で、深さは0.23mである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

41 SK461土坑（第43図、図版15-2）

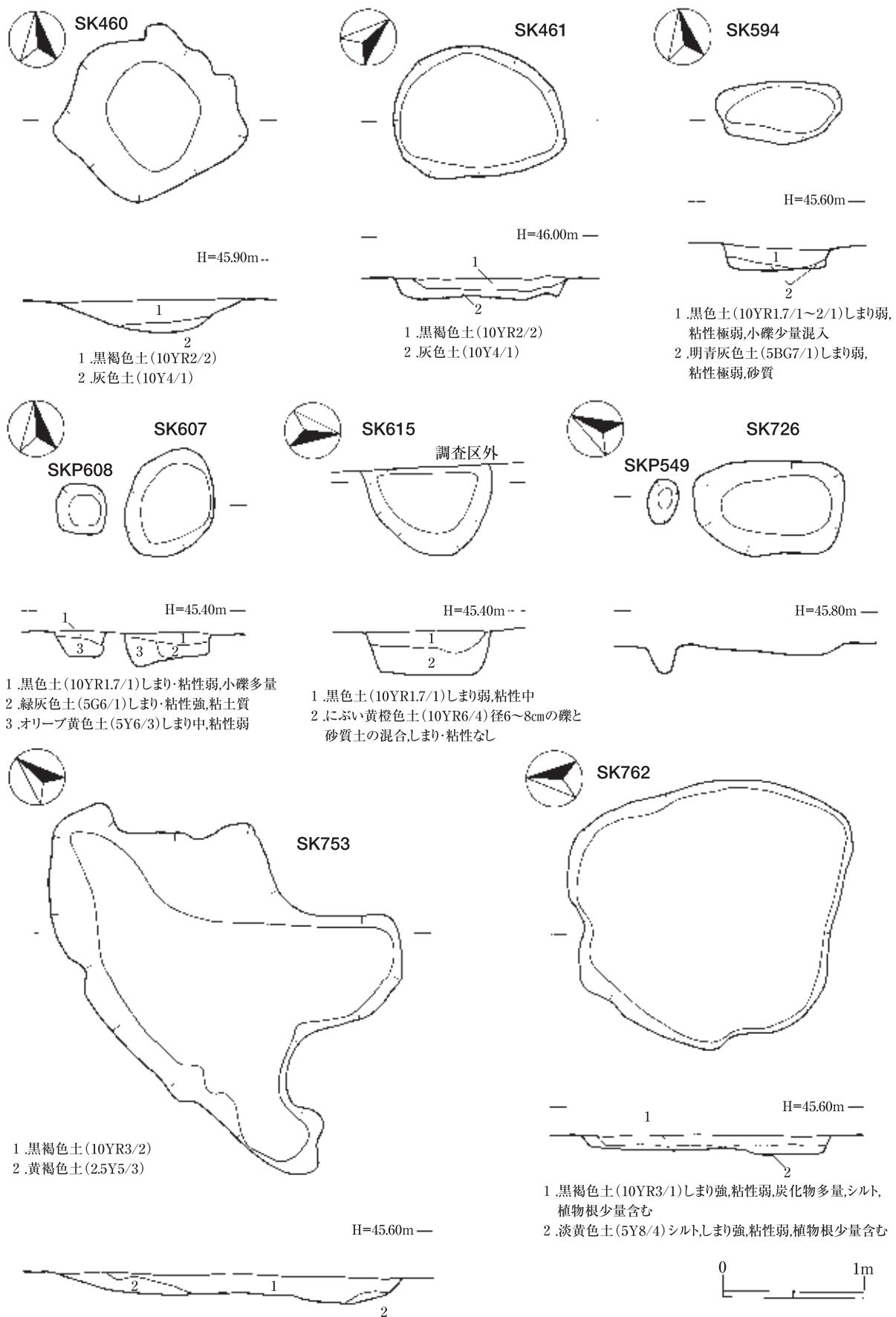
ME41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.26m（北東一南西）、短軸1m（北西一南東）の橢円形で、深さは0.14mである。底面は凹凸があり、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

42 SK594土坑（第43図）

MM40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.9m（東一西）、短軸0.46m（北一南）の橢円形で、深さは0.16mである。底面は平坦で、壁は僅かに開くがほぼ垂直に立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。



第42図 SK394・401・402・408・409・451



第43図 SK460・461・594・607・615・726・753・762

43 SK607土坑（第43図）

ML40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.84m（北東一南西）、短軸0.63m（北西一南東）の楕円形で、深さは最深部で0.24mである。底面はほぼ平坦で、西側に緩い傾斜を見せる。壁は東西とも急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

44 SK615土坑（第43図、図版15-3）

MN47グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.94m（北一南）、短軸0.64m（東一西）の半楕円形で、深さは0.32mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

45 SK726土坑（第43図）

ME38グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.08m（北西一南東）、短軸0.68m（北東一南西）の隅丸長形で、深さは0.09mである。底面は南側に傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

46 SK753土坑（第43図）

M154・55グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸3.06m（北一南）、短軸2.11m（東一西）の不整な楕円形で、深さは0.14mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

47 SK762土坑（第43図）

MF58・59、MG58・59グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.22m（北西一南東）、短軸1.98m（北東一南西）の楕円形で、深さは0.14mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

48 SK785土坑（第44図）

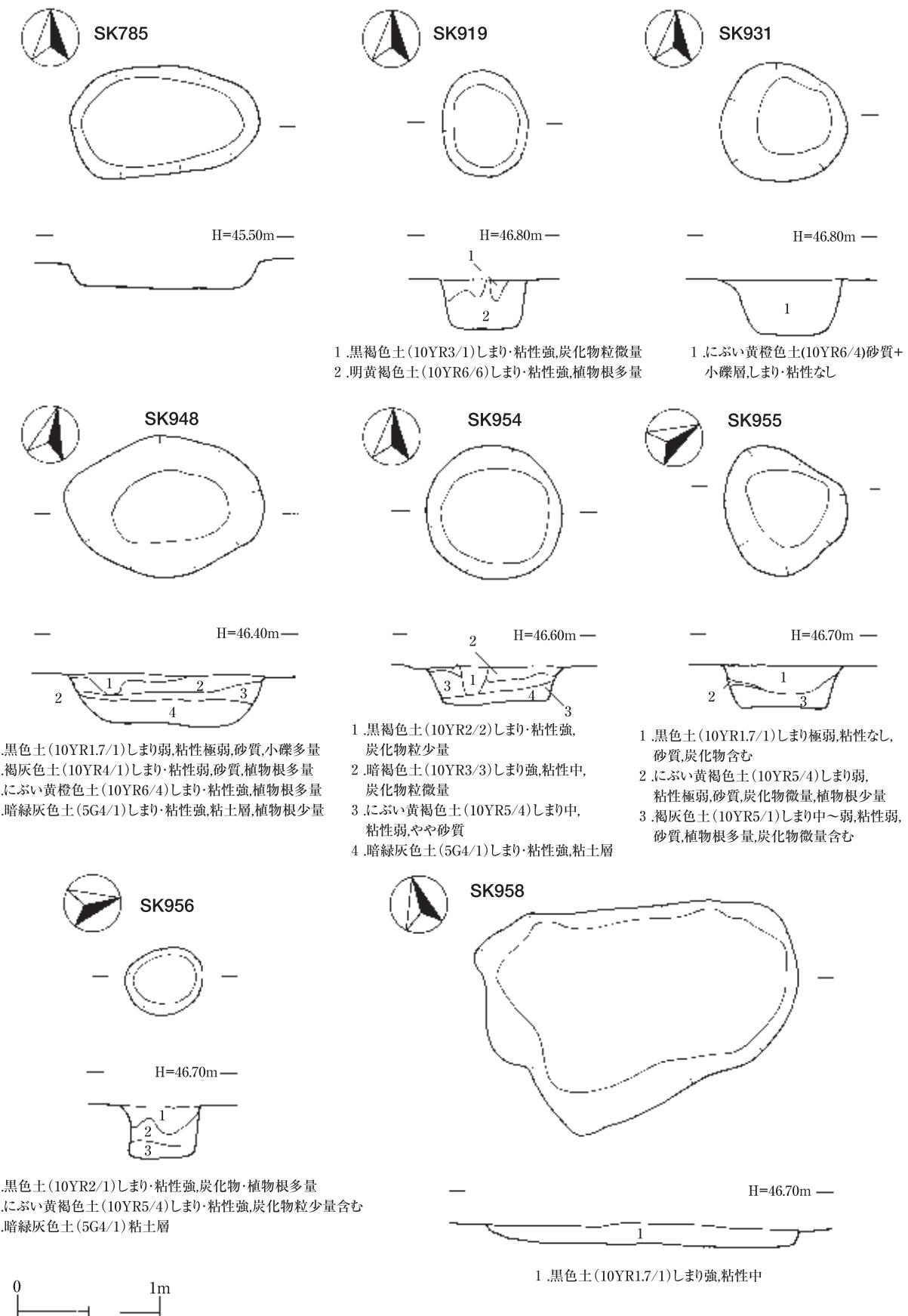
MG50グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.32m（西一東）、短軸0.8m（北一南）の楕円形で、深さは0.2mである。底面は平坦で、壁はやや急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

49 SK919土坑（第44図、図版16-1）

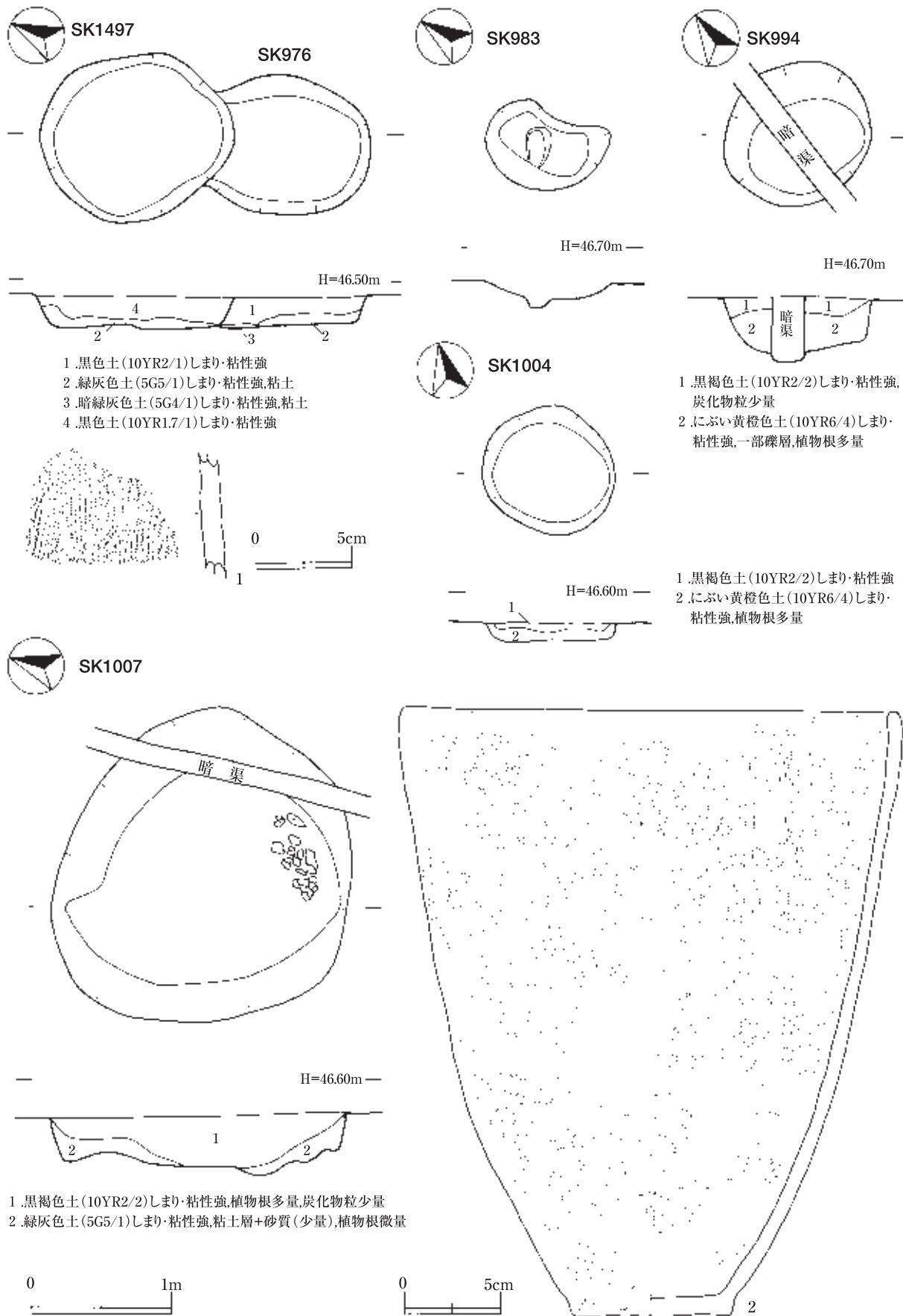
LK45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.76m（北一南）、短軸0.61m（東一西）の楕円形で、深さは0.34mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

50 SK931土坑（第44図）

LK46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.86～0.88mの円形で、深さは0.38mである。底面は平坦で、壁の西側はやや開いて立ち上がる。遺物は出土しなかった。



第44図 SK785・919・931・948・954～956・958



第45図 SK976・983・994・1004・1007・1497

51 SK948土坑（第44図、図版16-2）

L L 46、LM46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.4m（東一西）、短軸1m（北一南）の楕円形で、深さは0.36mである。底面は平坦で、壁はやや急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

52 SK954土坑（第44図）

LL47グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.94～0.96mの円形で、深さは0.27mである。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

53 SK955土坑（第44図）

L K46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.94m（東一西）、短軸0.85m（北一南）の円形で、深さは最深部で0.3mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

54 SK956土坑（第44図）

L K46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.46～0.55mの円形で、深さは0.36mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

55 SK958土坑（第44図）

L K46、L L 46・47グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.23m（東一西）、短軸1.6m（北一南）の不整な楕円形で、深さは最深部で0.15mである。底面は平坦で、壁は低いが東側は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

56 SK976土坑（第45図）

LL47グリッドにあり、地山面で確認した。SK1497土坑と重複していたが本土坑が古い。平面形は長軸推定1.28m（北一南）、短軸1m（東一西）の楕円形で、深さは0.2mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代II群の土器が出土した（第45図1）。

57 SK983土坑（第45図）

LL45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.9m（北西一南東）、短軸0.66m（北東一南西）の不整な楕円形で、深さは中央最深部で0.19mである。底面は中央部が一段窪む。壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した。

58 SK994土坑（第45図）

L K48グリッドにあり、地山上面で確認した。平面形は推定直径0.99～1.09mの円形で、深さは0.4mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。土坑中央部を幅0.18m、深さ約0.5mの暗渠が南北に切る。遺物は出土しなかった。

59 SK1004土坑 (第45図、図版16-3)

L L47・48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.88～0.96mの円形で、深さは0.14mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

60 SK1007土坑 (第45図、図版17)

L K49グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.31m（北西—南東）、短軸2.13m（北東—南西）のほぼ円形で、深さは最深部で0.43mの大型の土坑である。底面は凹凸があり、壁は東側が一部暗渠で壊れているが、ほぼ垂直に立ち上がる。縄文時代Ⅱ群の土器が出土した（第45図2、図版36-4）。

61 SK1031土坑 (第46図)

L K43・44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は南側が一部歪みながらも長軸1.7m（東—西）、短軸1.44m（北—南）のほぼ円形で、深さは最深部で0.43mである。底面は凹凸があり中央が深い。壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代Ⅰ群の土器が出土した（第46図1・2）。

62 SK1032土坑 (第46図)

L K44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.62m（北西—南東）、短軸1.02m（北東—南西）の橢円形で、深さは最深部で0.18mである。底面は僅かに凹凸が見られ、壁は南東側が垂直に立ち上がる。縄文時代Ⅰ群の土器が出土した。

63 SK1050土坑 (第46図、図版17-2)

L K44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.54～0.6mの円形で、深さは最深部で0.24mである。底面は北側が深く南側に行くにつれ階段状に浅くなる。壁は北側は大きく開いて立ち上がる。遺物は出土しなかった。

64 SK1055土坑 (第46図)

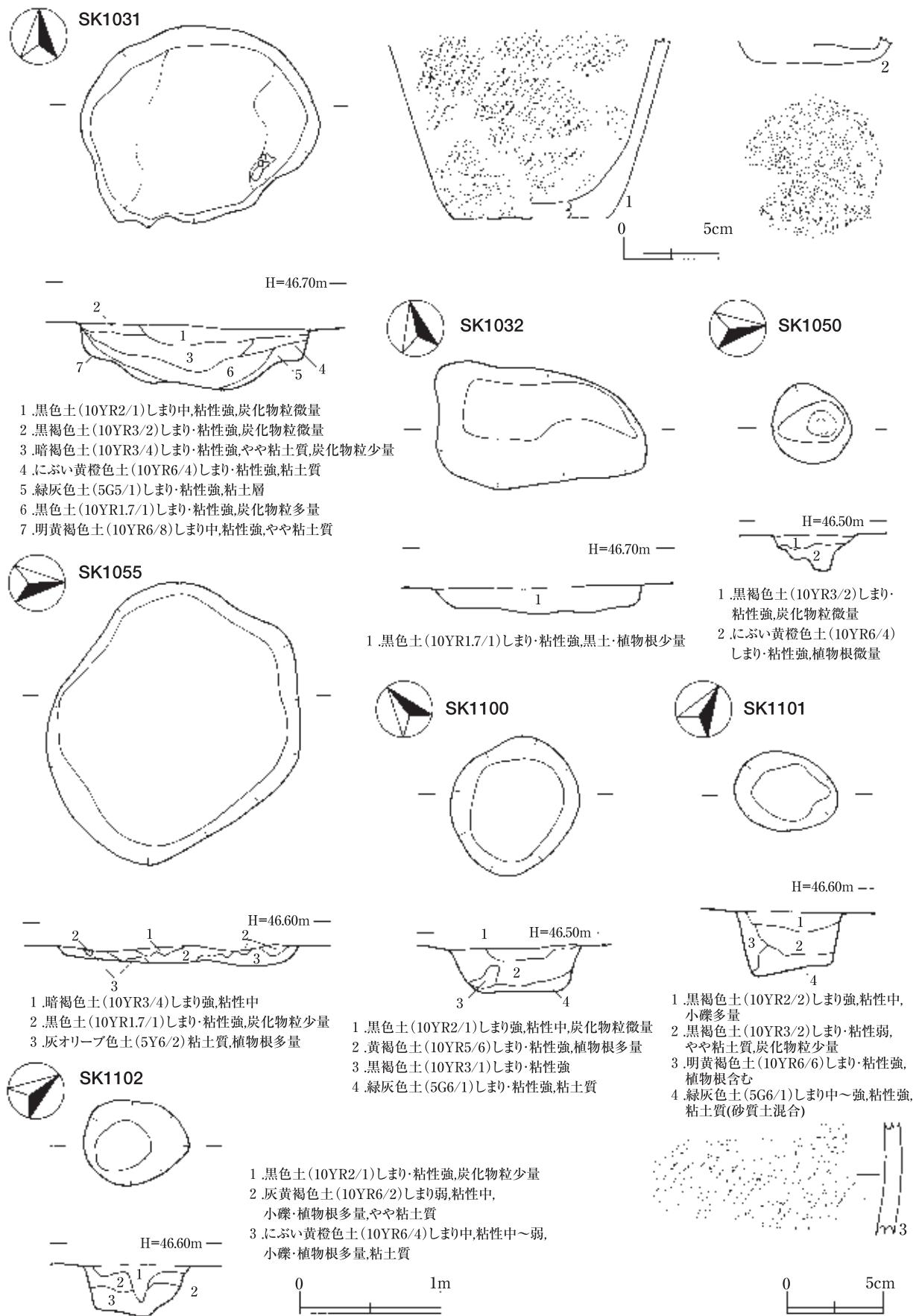
L K44、L L44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1.79～2.03mのほぼ円形で、深さは最深部で0.12mである。底面は平坦で、壁は低いが急な角度で立ち上がる。縄文時代Ⅰ群の土器が出土した。

65 SK1100土坑 (第46図、図版17-3)

L L44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.9～1.01mのほぼ円形で、深さは0.32mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代Ⅰ群の土器が出土した。

66 SK1101土坑 (第46図、図版18-1)

L L43・44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.74m（東—西）、短軸0.56m（北—南）の橢円形で、深さは最深部で0.46mである。底面は南西側にやや傾斜し、壁は急な角度で立ち上



第46図 SK1031・1032・1050・1055・1100～1102

がる。縄文時代I群3類の土器が出土した（第46図3）。

67 SK1102土坑（第46図、図版18-1）

L L43グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.75m（北東—南西）、短軸0.61m（北西—南東）の楕円形で、深さは最深部で0.36mである。底面は北東側にやや傾斜している。壁は北東側が歪みながら立ち上がり、南西側は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

68 SK1103土坑（第47図）

L L43、LM43グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.24m（北西—南東）、短軸0.94m（北東—南西）の楕円形で、深さは最深部で0.4mである。底面は北側は丸みを帯び、南側は一段浅くなっている。壁はやや急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

69 SK1104土坑（第47図）

L L43グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.24m（北東—南西）、短軸0.86m（北西—南東）の楕円形で、深さは最深部で0.38mである。底面は北東側に傾斜し、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

70 SK1105土坑（第47図、図版18-2）

L L43グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.2m（北東—南西）、短軸0.79m（北西—南東）の楕円形で、深さは最深部で0.28mである。底面は北東側に傾斜している。壁は北東側が急な角度で立ち上がり、南側は緩やかに立ち上がる。縄文時代III群の土器が出土した（第47図1）。

71 SK1124土坑（第47図、図版18-3）

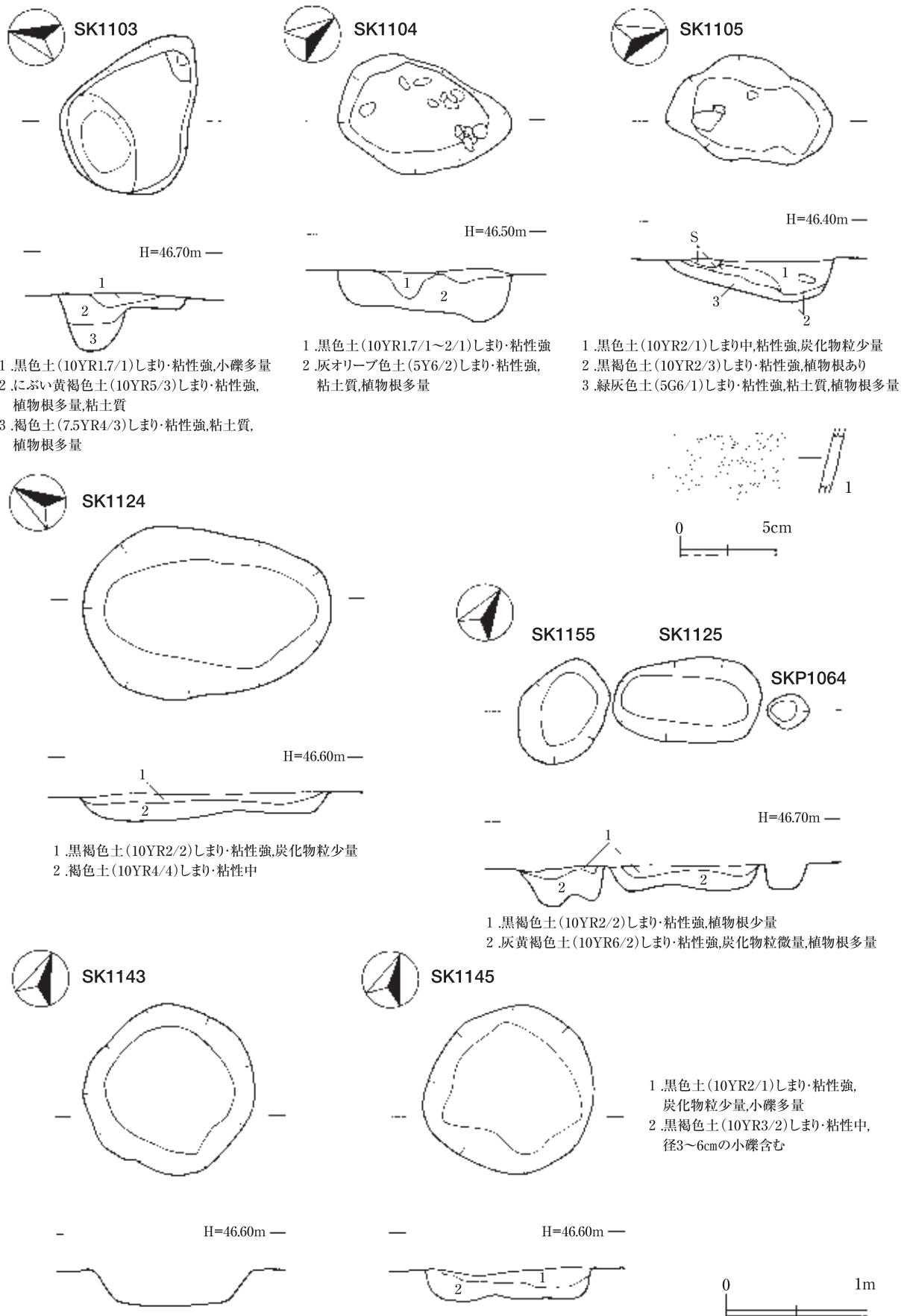
L L48、LM48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.76m（北西—南東）、短軸1.23m（北東—南西）の楕円形で、深さは最深部で0.2mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

72 SK1125土坑（第47図、図版19-1）

L L48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.07m（北東—南西）、短軸0.63m（北西—南東）の楕円形で、深さは0.18mである。底面は中央部がやや盛り上がり、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

73 SK1140土坑（第78図）

L J43グリッドにあり、平安時代のS I 1034堅穴住居跡に切られていって、その東側の床面と壁で検出した。平面形は直径1.0mの円形で、深さはS I 1034東壁から43cmである。底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。



第47図 SK1103~1105・1124・1125・1143・1145・1155

74 SK1143土坑（第47図）

L K42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1.22mの円形で、深さは0.28mである。底面は平坦で、壁はやや急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

75 SK1145土坑（第47図、図版19-2）

L L42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1.18～1.25mのほぼ円形で、深さは0.2mである。底面は僅かに凹凸が見られ、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

76 SK1147土坑（第48図）

L J41・42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.76m（東一西）、短軸推定1.87m（北一南）の楕円形で、深さは最深部で0.36mである。東側の一部が暗渠に切られている。底面は歪んだ凹凸が見られ、西壁はやや急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した（第48図1）。

77 SK1148土坑（第48図）

L J41、L K41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.43m（東一西）、短軸1.67m（北一南）の楕円形で、深さは最深部で0.24mである。西側の一部が暗渠によって切られている。底面は緩やかな凹凸が見られ、壁は東側がほぼ垂直に立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

78 SK1155土坑（第47図）

L L48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.79m（北一南）、短軸0.6m（東一西）の楕円形で、深さは最深部で0.26mである。底面は中央部に盛り上がりが見られる。壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

79 SK1161土坑（第48図）

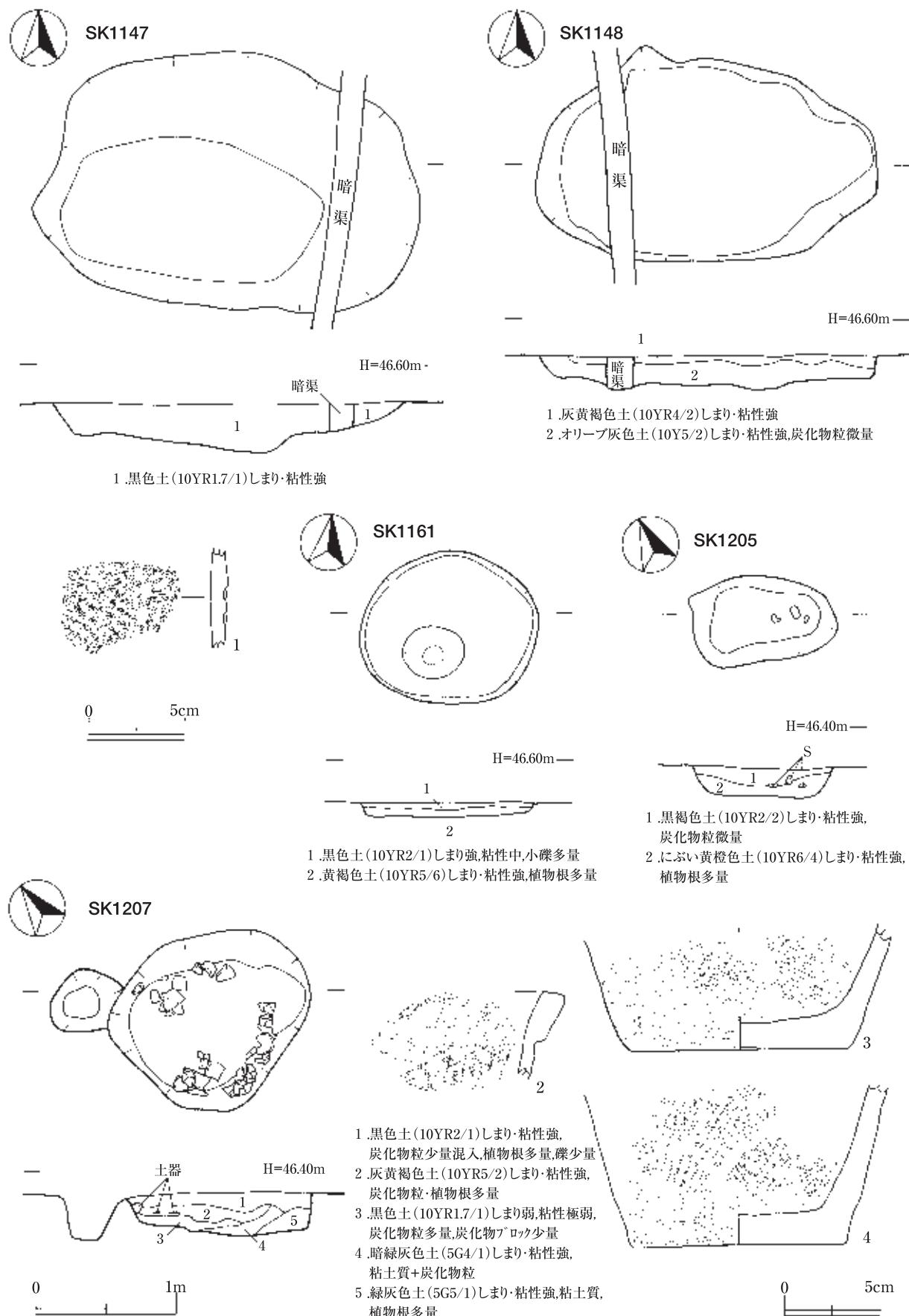
L M42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1.12～1.28mのほぼ円形で、深さは0.1mである。底面は平坦であるが底面南部に直径約0.4mの窪みが存在する。壁は低く急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

80 SK1205土坑（第48図）

L L41、LM41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.08m（北西一南東）、短軸0.71m（北東一南西）の楕円形で、深さは0.2mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

81 SK1207土坑（第48図）

L L41、LM41グリッドにあり、地山面で確認した。SKP1220と重複している。平面形は長軸1.46m（北西一南東）、短軸1.27m（北東一南西）の楕円形で、深さは0.3mである。底面はほぼ平坦で、壁は南東側が垂直に立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した（第48図2～4）。



第48図 SK1147・1148・1161・1205・1207

82 SK1222土坑（第49図）

LM41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.56m（北西—南東）、短軸1.34m（北東—南西）の橢円形で、確認面からの深さは0.4mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

83 SK1223土坑（第49図、図版20-2）

LM41・42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.4m（北—南）、短軸1.12m（東—西）の橢円形で、深さは0.22mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

84 SK1228土坑（第49図）

LN49グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.11m（北—南）、短軸1.46m（東—西）の橢円形で、深さは最深部で0.6mである。底面はやや丸みを帯びて北側が一段浅くなり、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器と縄文時代の土製品が出土した。近世の磁器も出土した。

85 SK1229土坑（第49図、図版20-3）

LM42、LN42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.96mのほぼ円形で、深さは西側最縄文時代I群の土器が出土した。深部で0.5mである。底面は南側に向かって段差を持ちながら浅くなり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

86 SK1230土坑（第50図）

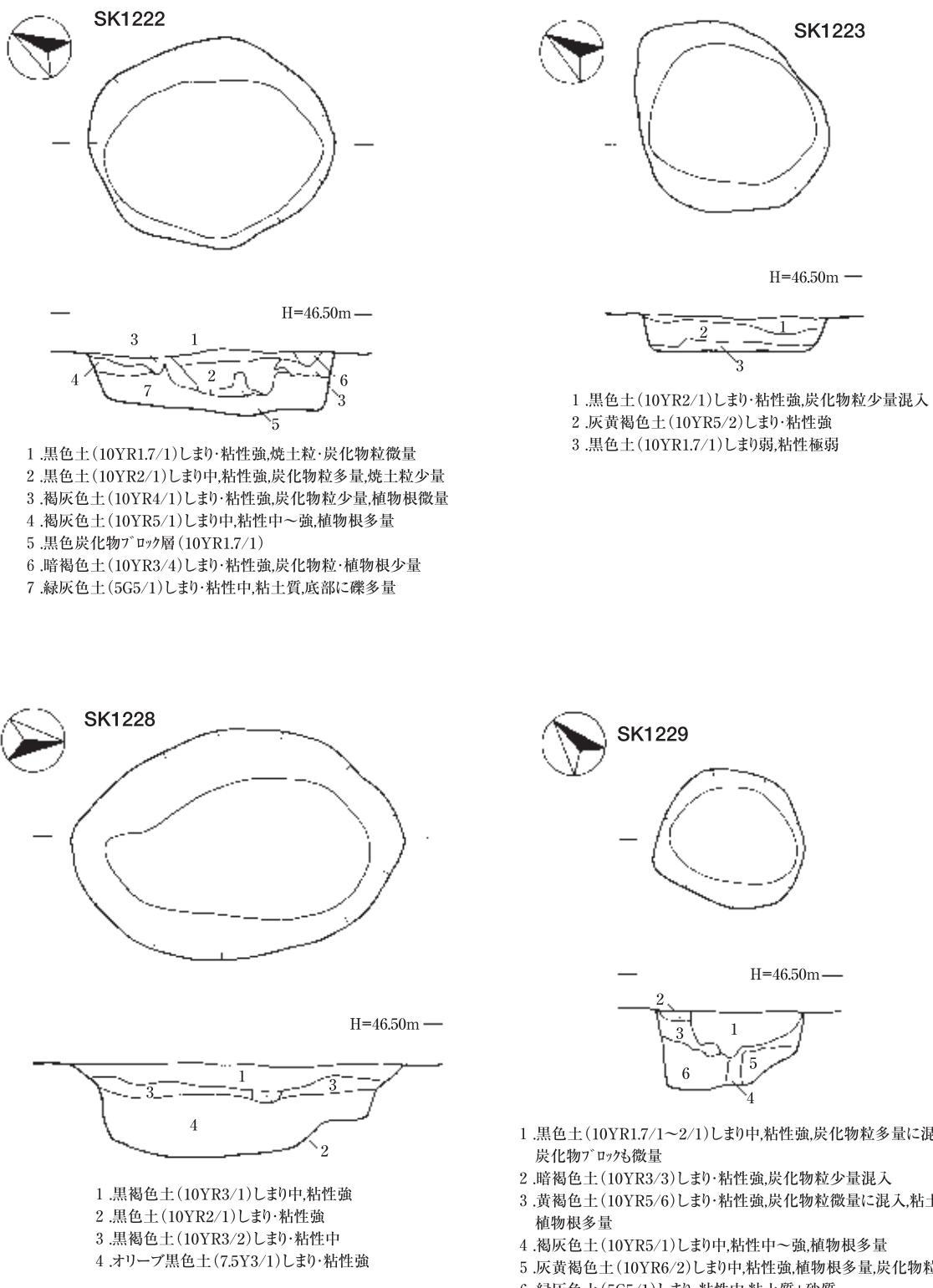
LM41、LN41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.24m（北東—南西）、短軸1.54m（北西—南東）の橢円形で、深さは0.26mである。底面はほぼ平坦で、壁は北東側が急な角度で立ち上がり、南西側は大きく開きながら立ち上がる。縄文時代I群3類大木10式の土器と黒曜石が出土した。

87 SK1231土坑（第50図、図版21-3）

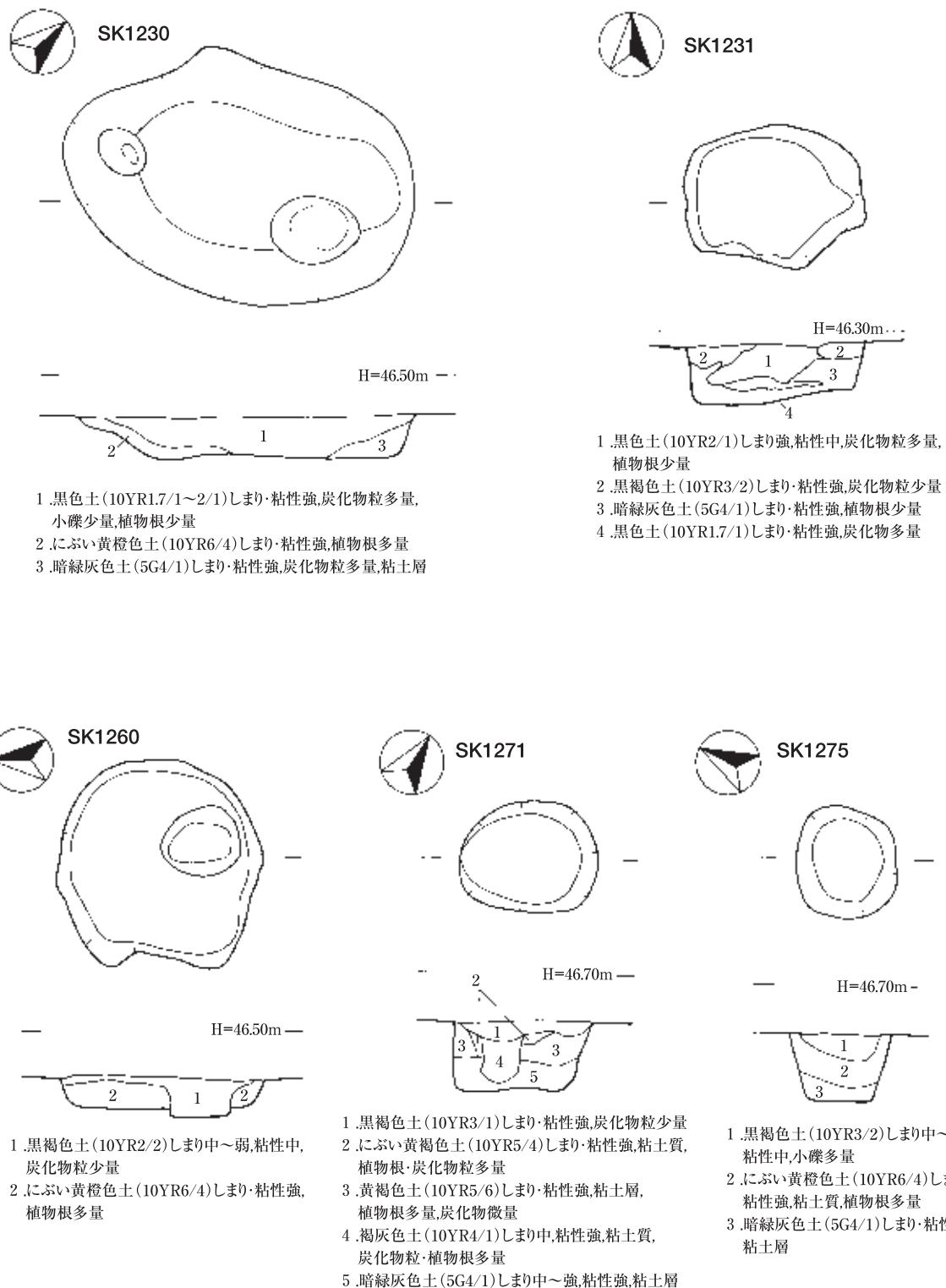
LM41、LN41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.16m（東—西）、短軸0.94m（北—南）の不整な橢円形で、深さは最深部で0.38mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

88 SK1260土坑（第50図）

LN41、LO41グリッドにあり、地山面で確認した。柱穴と重複していたが、本土坑が古い。平面形は長軸1.43m（北東—南西）、短軸1.3m（北西—南東）のほぼ円形で、深さは0.2mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。出遺物は出土しなかった。



第49図 SK1222・1223・1228・1229



第50図 SK1230・1231・1260・1271・1275

89 SK1271土坑（第50図）

LM43、LN43グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.87m（北東—南西）、短軸0.7m（北西—南東）のほぼ円形で、深さは0.42mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。土坑内中央部に、直径0.2m、深さ0.3mの掘り込みがあった。縄文時代I群の土器が出土した。

90 SK1275土坑（第50図）

LN44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.67～0.74mのほぼ円形で、深さは0.42mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

91 SK1277土坑（第51図、図版21－2）

LN43・44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1.93～1mの円形で、深さは最深部で0.45mである。底面は丸みを帯び、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

92 SK1291土坑（第51図）

LO43・44グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.14m（東—西）、短軸0.93m（北—東）の橢円形で、深さは0.54mである。底面は平坦で、壁はやや開きながら急な角度で立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した。

93 SK1317土坑（第51図）

LN48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.06m（北東—南西）、短軸0.64m（北西—南東）の橢円形で、深さは0.2mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した（第51図1）。

94 SK1333土坑（第51図、図版21－3）

LL39・40、LM39・40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1.12mの円形で、深さは0.3mである。底面は平坦で、壁は西側が大きく開きながら立ち上がり、東側は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

95 SK1334土坑（第51図、図版22－1）

LL39グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.84～0.98mの円形で、深さは0.18mである。底面は僅かに凹凸が見られ、壁は南側がほぼ垂直に立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した。

96 SK1337土坑（第51図、図版22－1）

LN40・41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.18m（東—西）、短軸1m（北—南）の橢円形で、深さは0.46mである。底面は平坦で、壁は東側が大きく開き、西側は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群2類の土器（第52図1）と搔器が出土した。



第51図 SK1277・1291・1317・1333・1334

97 SK1347土坑（第52図）

LO41・42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.39m（北一南）、短軸1.91m（東一西）の楕円形で、深さは最深部で0.4mである。底面は中央部が一段窪むが、他は平坦である。壁はやや開きながら立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した。

98 SK1350土坑（第52図）

LO40・41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1.22～1.3mの円形で縄文時代I群の土器が出土した。深さは0.3mである。底面は丸みを帯び東側が一段浅くなっている。壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

99 SK1377土坑（第52図、図版22-2）

LN40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.48m（北一南）、短軸1.14m（東一西）の楕円形で、深さは0.3mである。底面は平坦で、壁は南東側がほぼ垂直に立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

100 SK1378土坑（第52図、図版22-3）

LM39グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.42m（北東一南西）、短軸0.94m（北西一南東）の不整な楕円形で、深さは最深部で0.22mである。底面は西側は平坦であるが、東側は傾斜し丸みを帯びる。壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した（第52図2）。

101 SK1379土坑（第52図、図版23-1）

LM39グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.66m～0.68mの略三角形で、深さは0.2mである。底面は平坦で、壁はやや急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

102 SK1390土坑（第53図）

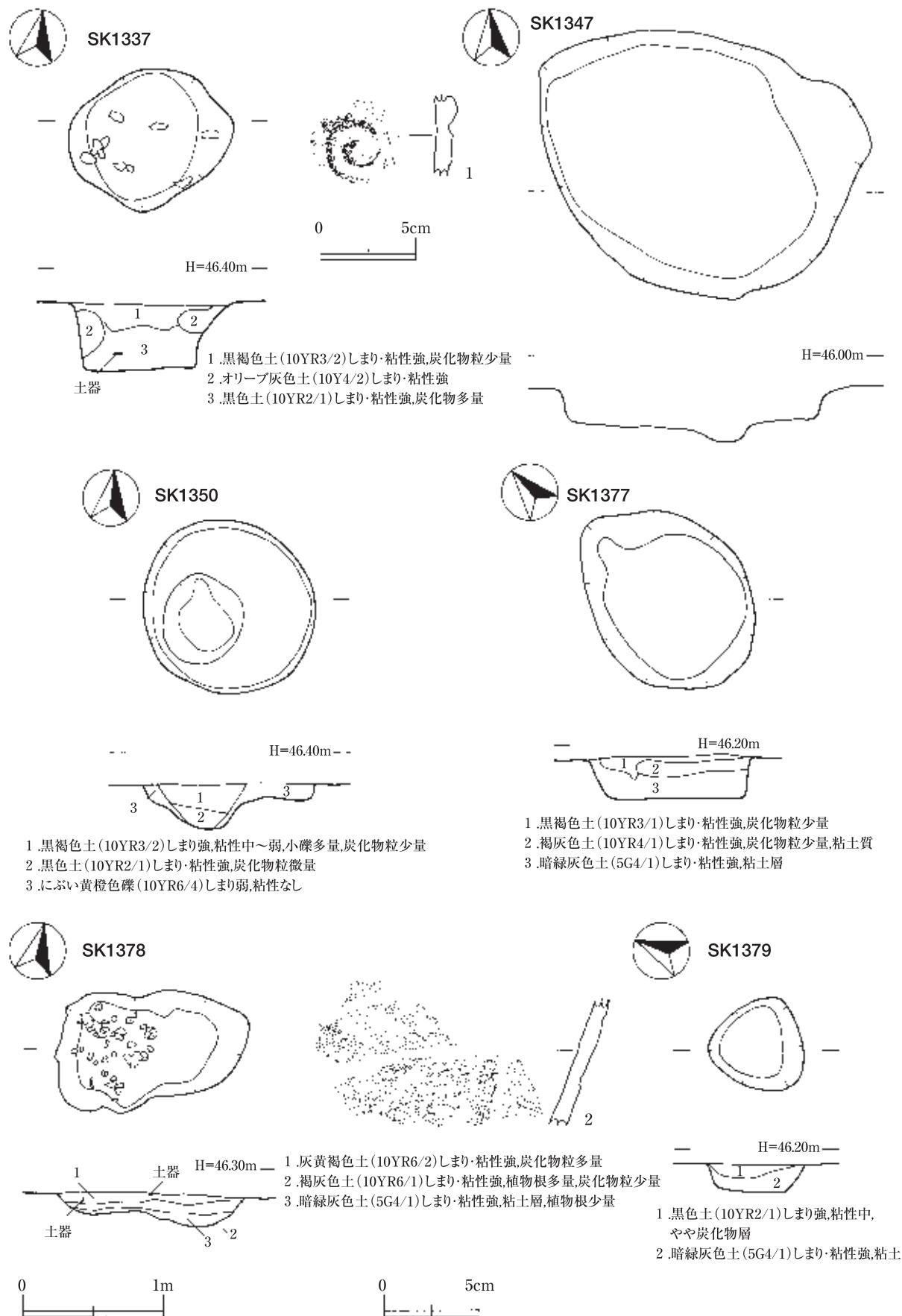
LL40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.23m（北一南）、短軸1.07m（東一西）の楕円形で、深さは0.53mである。底面は平坦で、壁はやや急な角度で立ち上がる。縄文時代I群3類の土器（第53図1・4・54図5・6、図版36-5）、ミニチュア土器（第53図2・3）、石匙が出土した。

103 SK1392土坑（第55図、図版23-2）

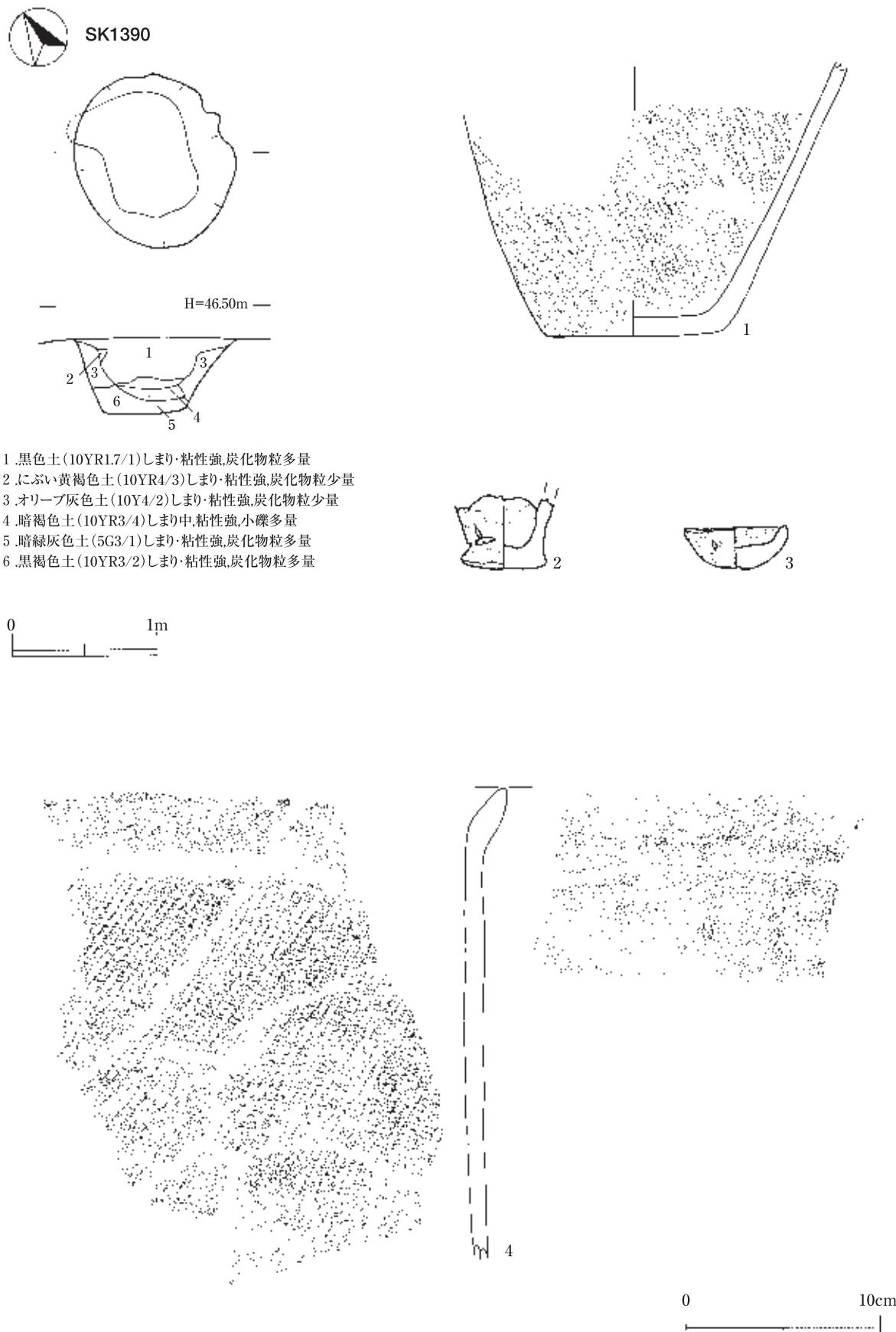
LM42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.2m（北西一南東）、短軸0.68m（北東一南西）の楕円形で、深さは0.14mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

104 SK1393土坑（第55図）

LL42・43、LM42・43グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.66～0.72mの円形で、



第52図 SK1337・1347・1350・1377～1379





第54図 SK1390出土遺物

深さは0.26mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した（第55図1）。

105 SK1412土坑（第55図）

L L40、LM40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.88m（北東—南西）、短軸1.16m（北西—南東）の楕円形で、深さは0.34mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

106 SK1416土坑（第55図、図版23-3）

LN45・46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1～1.13mのほぼ円形で、深さは0.38mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

107 SK1418土坑（第55図）

LM46、LN46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.38m（北西—南東）、短軸0.88m（北東—南西）の楕円形で、深さは0.22mである。底面ほぼ中央に直径0.28～0.34m、深さ0.43mの窪みを確認した。壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

108 SK1419土坑（第55図）

LN46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.94m（東—西）、短軸0.78m（北—南）の楕円形で、深さは最深部で0.24mである。底面は凹凸があり、中央が窪みを見せる。壁はやや急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

109 SK1421土坑（第55図）

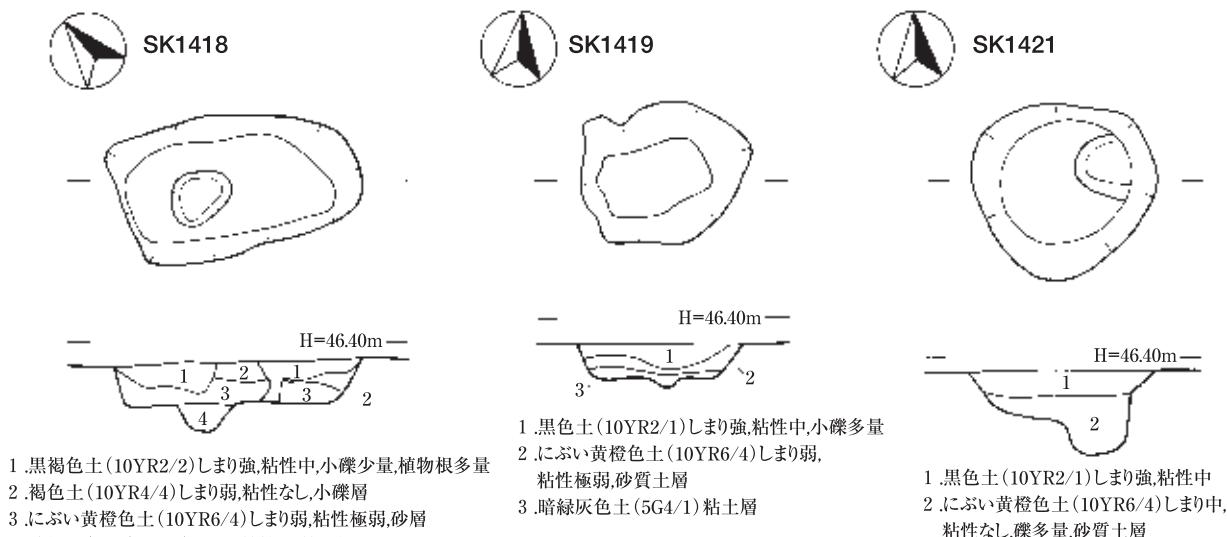
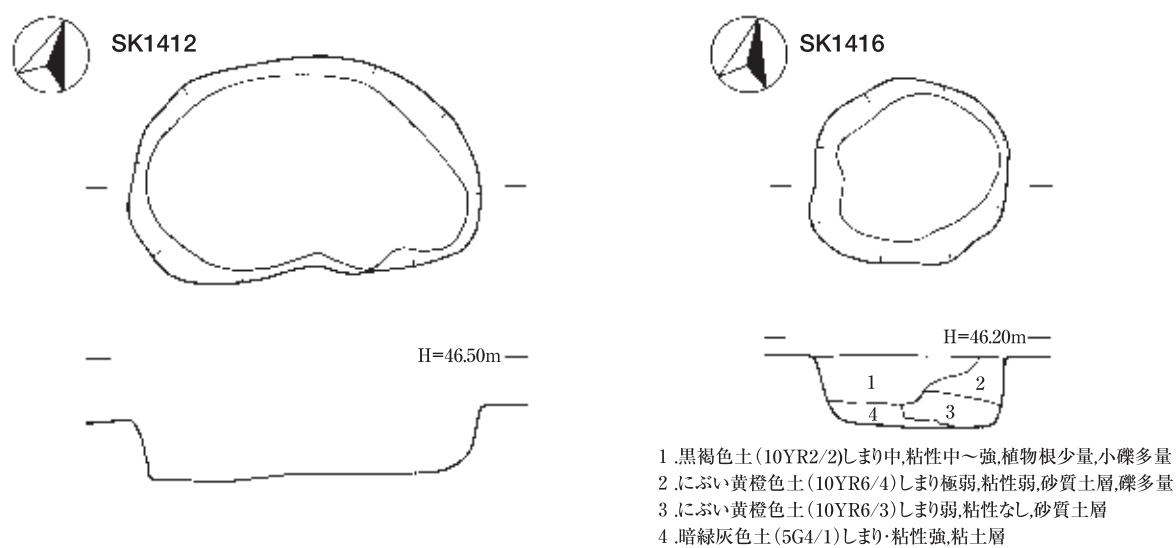
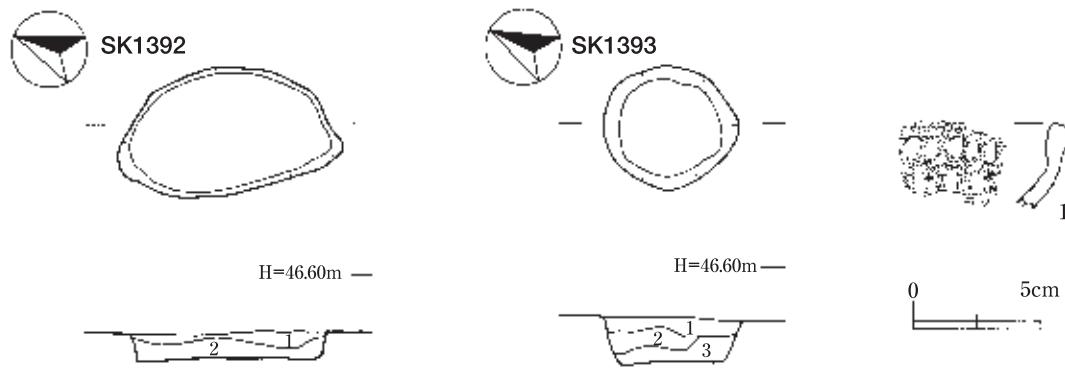
LN46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.94m～0.98mの円形で、深さは最深部で0.46mである。底面は東側に向け一段窪み、壁は緩やかに開きながら立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

110 SK1426土坑（第56図、図版24-1）

LN46、LO46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.48m（北西—南東）、短軸0.82m（北東—南西）の楕円形で、深さは0.22mである。底面は平坦で、壁はやや急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

111 SK1427土坑（第56図）

LN46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.77～0.86mの円形で、深さは0.22mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。



第55図 SK1392・1393・1412・1416・1418・1419・1421

112 SK1428土坑 (第56図)

L N45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.58~0.68mの円形で、深さは0.38mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

113 SK1438土坑 (第56図)

LM39・40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.56m(北—南)、短軸0.96m(東—西)の不整な橢円形で、深さは0.15mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

114 SK1442土坑 (第56図)

LO45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.77~0.86mのほぼ円形で、深さは0.26mである。底面は東側にやや傾斜し、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

115 SK1445土坑 (第56図)

LO45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.94~1.04mの円形で、深さは0.4mである。底面は丸みを帯び、東側が一段浅くなる。壁は急な角度に立ち上がる。土坑内の底面中央部に柱穴1基が確認された。縄文時代I群の土器が出土した。

116 SK1451土坑 (第56図、図版24-2)

LL46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.72~0.8mのほぼ円形で、深さは0.3mである。底面は平坦で、壁は北側は僅かに開きながら立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

117 SK1457土坑 (第56図、図版24-3)

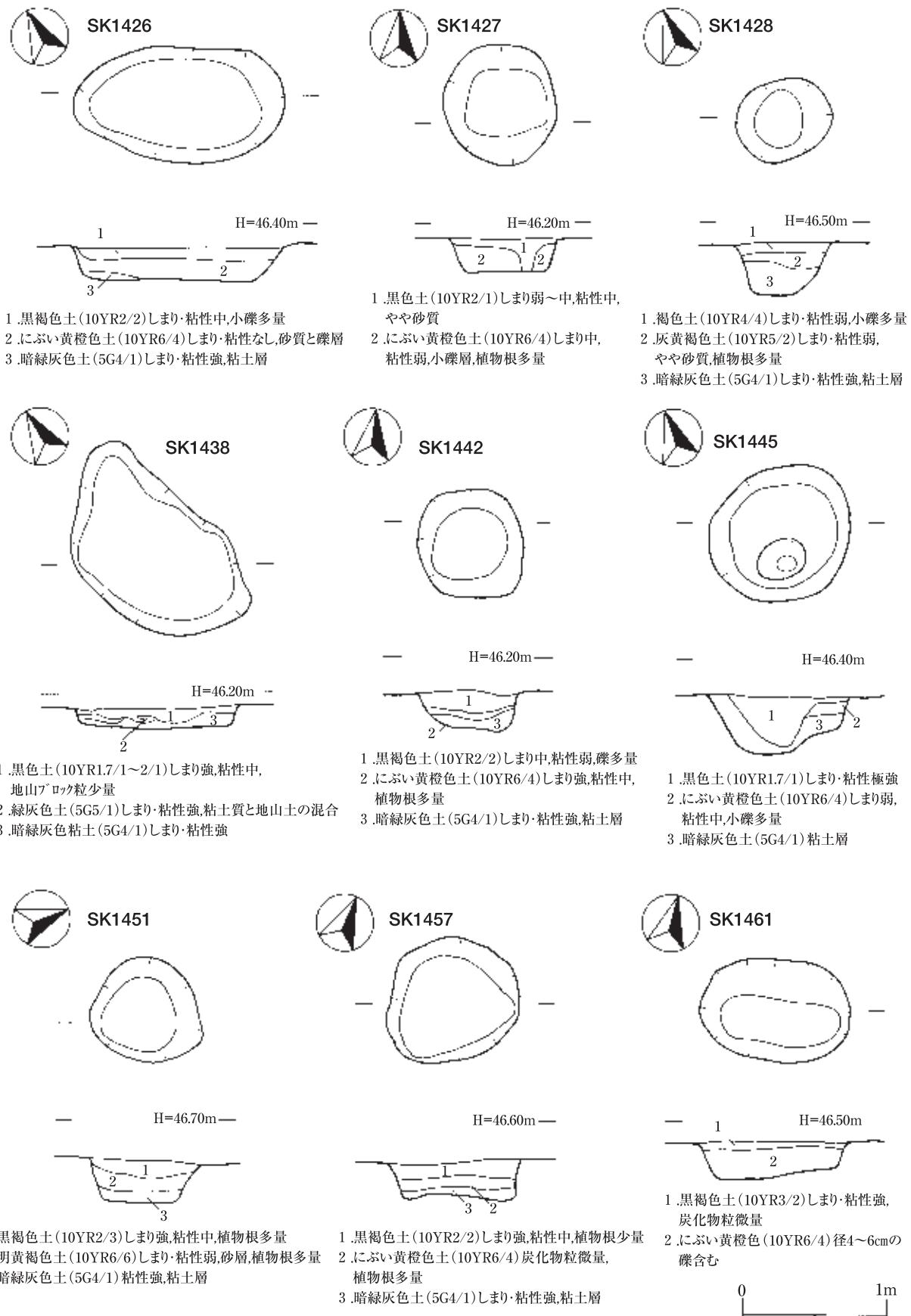
LM48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.89~0.99mのほぼ円形で、深さは最深部で0.3mである。底面は東側へ僅かに傾斜し、壁は急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

118 SK1461土坑 (第56図)

LK42グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.06m(東—西)、短軸0.72m(北—南)の橢円形で、深さは最深部で0.28mである。底面は西側へ僅かに傾斜し、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

119 SK1478土坑 (第57図)

LK41・42グリッドにあり、地山面で確認した。S I 1491竪穴住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長軸推定2.6m(北—南)、短軸2m(東—西)の橢円形で、深さは0.18mである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。



第56図 SK1426～1428・1438・1442・1445・1451・1457・1461

120 SK1497土坑（第45図）

L L 47グリッドにあり、地山面で確認した。SK976土坑と重複していたが、本土坑が新しい。平面形は直径1.2~1.38mのほぼ円形で、深さは0.22mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

121 SK1501土坑（第57図）

L R 37グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.94m（北一南）、短軸0.96m（東一西）の不整な橢円形で、深さは最深部で0.44mである。底面は東側が深く、壁は東側が急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

122 SK1511土坑（第57図）

L S 38・39グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.97~1.14mのほぼ円形で、深さは0.09mである。底面はほぼ平坦で、壁は低いが緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

123 SK1524土坑（第57図）

L S 45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.21m（東一西）、短軸0.82m（北一南）の不整な橢円形で、深さは0.34mである。底面は東側にやや傾斜し、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

124 SK1526土坑（第57図、図版25-1）

L Q40、LR40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.15m（北一南）、短軸0.78m（東一西）の橢円形で、深さは0.21mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。土坑内に、握り拳大の中型礫12個がL字状に石組されて出土した。縄文時代I群の土器が出土した。

125 SK1528土坑（第57図）

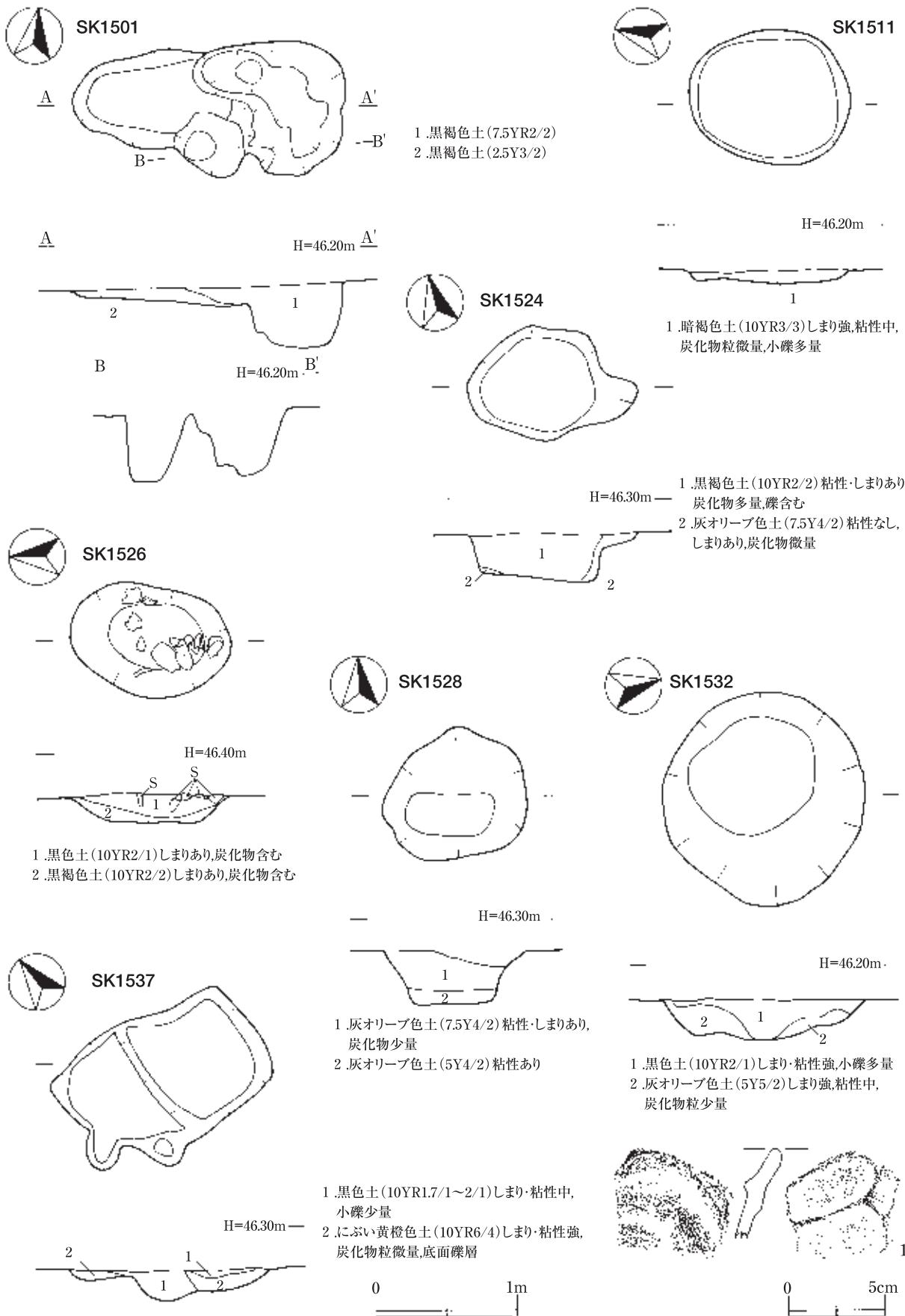
L S 46グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.94~1.02mのほぼ円形で、深さは0.4mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

126 SK1532土坑（第57図、図版25-2）

L S 49・50グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1.44~1.52mの円形で、深さは最深部で0.3mである。底面は僅かな凹凸が見えるが丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群3類の土器（第57図1）および凹石が出土した。

127 SK1537土坑（第57図）

L S 47グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.51m（西一東）、短軸1.05m（北一南）の不整形で、深さは0.22mである。底面は凹凸があり、中央が大きく窪んでいる。壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。



第57図 SK1501・1511・1524・1526・1528・1532・1537

128 SK1538土坑（第58図）

L R47グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.32m（北一南）、短軸1.08m（西一東）のほぼ円形で、深さは中央最深部で0.28mである。底面は中央部に向かって窪み、壁は緩やかなに立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した（第58図1、図版36-6）。

129 SK1539土坑（第58図、図版25-3）

L R48、L S48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は、長軸1.26（東一西）、短軸1.06m（北一南）のほぼ円形で、深さは最深部で0.14mである。底面は僅かに凹凸が見られ、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

130 SK1545土坑（第58図）

L P38・39グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は、長軸1.5m（北東一南西）、短軸1.26m（北西一南東）の不整形で、深さは0.38mである。底面は中央やや東寄りが一段窪み、壁は急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

131 SK1546土坑（第58図、図版26-1）

L P39、L Q39グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.84m（北一南）、短軸1.31m（東一西）の不整な橢円形で、深さは0.38mである。底面は北側へ傾斜し、壁は北側が垂直に立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

132 SK1560土坑（第58図、図版26-1）

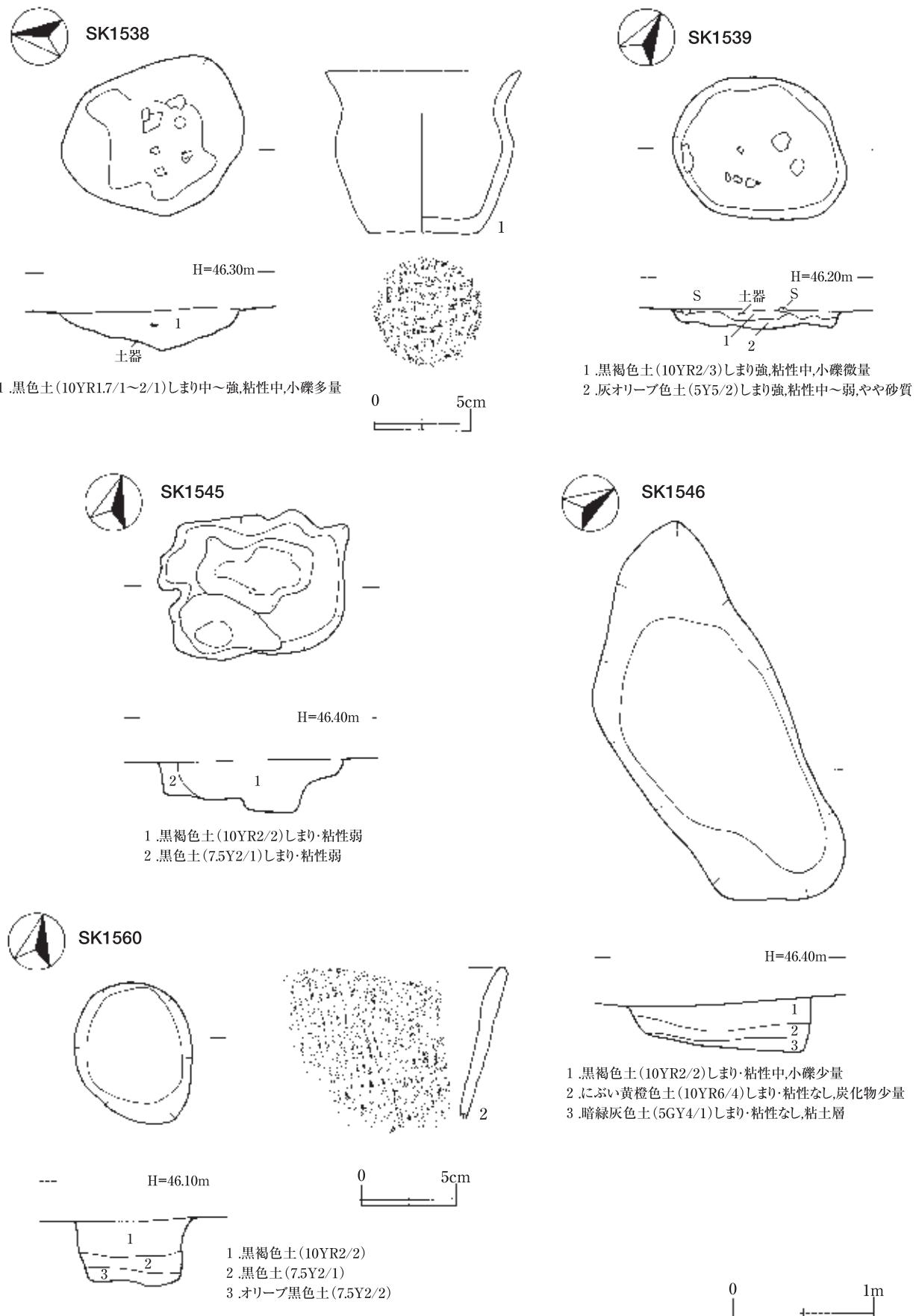
L S38グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.06m（東一西）、短軸0.86m（北一南）の橢円形で、深さは0.46mである。底面は僅かに東側が深く、丸みを帯びている。壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代II群の土器（第58図2）および削器が出土した。

133 SK1590土坑（第59図）

L S49グリッドにあり、地山面で土器片の散らばりを確認した。平面形は長軸0.36m（東一西）、短軸0.31m（北一南）の橢円形で、深さは0.22mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。土器の遺存状態は非常に不良で土器内部に破片が折り重なっていた。覆土は黒色土で締まりは弱い。縄文時代I群3類と思われる土器が出土した（第59図1・2）。

134 SK1593土坑（第59図）

L P39グリッドにあり、III層面で確認した。平面形は長軸推定1.44m（北東一南西）、短軸推定1.16m（北西一南東）の円形で、深さは0.2mである。SK1594と重複している。切り合いは明瞭でない。底面は丸みを帯びて、壁は緩やかなに立ち上がる。縄文時代I群3類と思われる土器が出土した（第59図3）。



第58図 SK1538・1539・1545・1546・1560



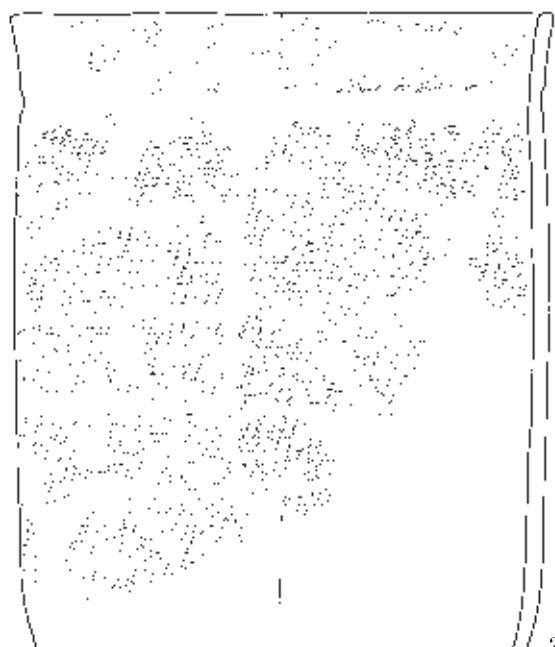
SK1590



— H=46.00m —

1

1 黒色土～黒褐色土(10YR2/1~2/2)しまり中～強,粘性中



2

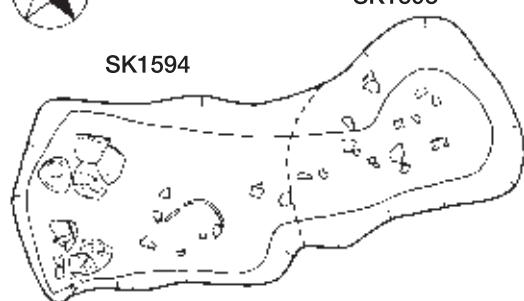


3



SK1593

SK1594



H=46.30m —

0 1m



0 5cm

第59図 SK1590・1593・1594

135 SK1594土坑（第59図）

L P39グリッドにあり、Ⅲ層面で確認した。平面形は長軸推定1.68m（東一西）、短軸1.08m（北一南）の楕円形で、深さは0.1mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。SK1593と重複している。縄文時代Ⅱ群の土器が出土した（第59図4、60図-1）。

136 SK1602土坑（第60図）

L R37グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.72～0.82mのほぼ円形で、深さは最深部で0.1mである。底面はやや丸みを帯び、壁は南側が急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

137 SK1603土坑（第60図）

L S36・37グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.24m（北西一南東）、短軸0.89m（北東一南西）の楕円形で、深さは0.26mである。底面は平坦で、壁は南側が緩やかに立ち上がり、北側はフラスコ状になっている。縄文時代Ⅰ群の土器が出土した。

138 SK2029土坑（第60図）

L S50、LT50グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径1.05～1.12mの円形で、深さは最深部で0.16mである。底面は凹凸を見せながら西側に傾斜する。壁は東側が低く急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

139 SK2046土坑（第60図）

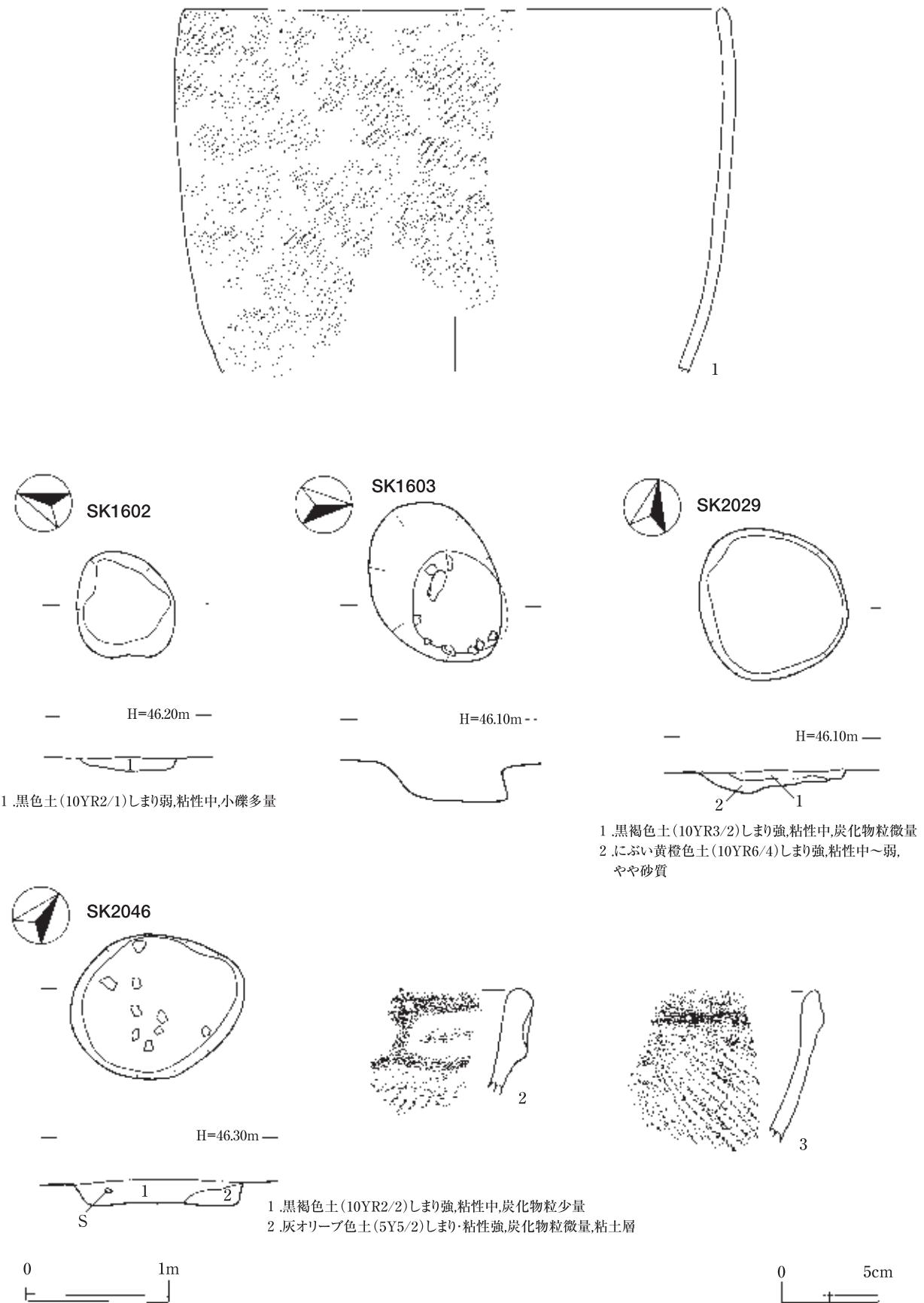
L S48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.25m（北西一南東）、短軸1.04m（北東一南西）のほぼ円形で、深さは0.16mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代Ⅰ群3類と考えられる土器が出土した（第60図2・3）。他に平安時代の砥石も出土した。

140 SK2049土坑（第61図）

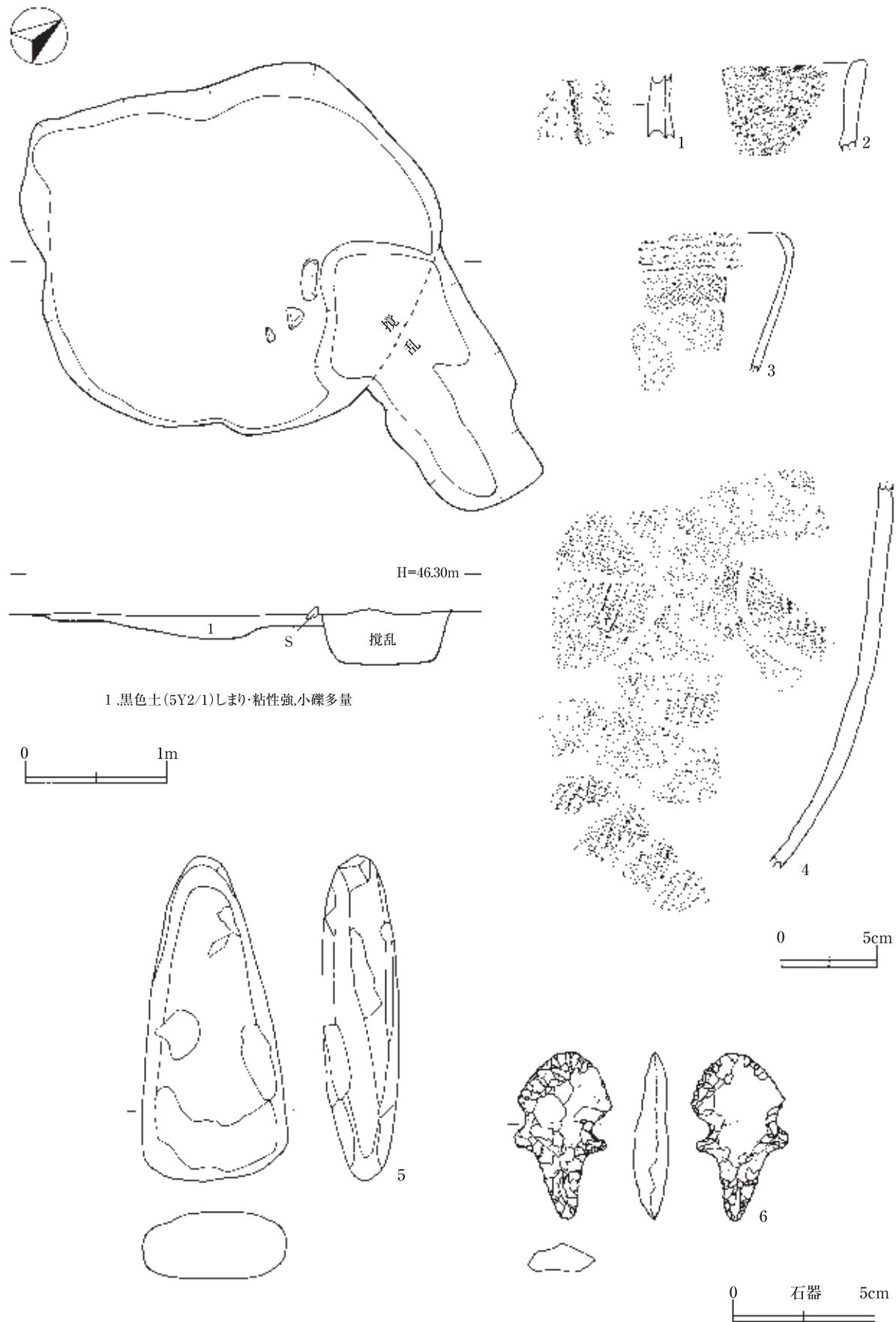
L R47・48、L S47・48グリッドにあり、地山面で黒色土のプランとして確認した。東側に攪乱がある。平面形は長軸推定2.98m（東一西）、短軸2.84m（北一南）のほぼ円形で、深さは0.17mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土はしまり、粘性も強く小礫が多量に混入している。縄文時代Ⅰ群1・2類の土器（第61図1）、縄文時代Ⅲ群の土器（第61図3）、磨製石斧、異形石器が出土した（第61図5・6）。

141 SK2056土坑（第62図）

L P47・48グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1m（北一南）、短軸0.8m（東一西）の楕円形で、深さは最深部で0.28mである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。



第60図 SK1602・1603・2029・2046



第61図 SK2049

142 SK2091土坑（第62図）

L N37・38グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.66m（北西—南東）、短軸0.51m（北東—南西）の不整な橢円形で、深さは0.22mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

143 SK2092土坑（第62図）

L P41、L Q41グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.74m（東—西）、短軸1.5m（北—南）の橢円形で、深さは0.1mである。底面はほぼ平坦で、壁は低いが緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

144 SK2116土坑（第62図、図版26－2）

LM38グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.26m（北西—南東）、短軸1.04m（北東—南西）の橢円形で、深さは0.22mである。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。縄文時代I群3類の土器（第62図1）と凹石が出土した。

145 SK2118土坑（第62図）

LN39、LO39グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.96～0.98mの円形で、深さは最深部で0.26mである。底面はほぼ平坦で、壁は東側が垂直に立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

146 SK2125土坑（第62図）

LM37、LN37グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.98～1.16mの円形で、深さは0.12mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代II群の土器が出土した。

147 SK2127土坑（第63図）

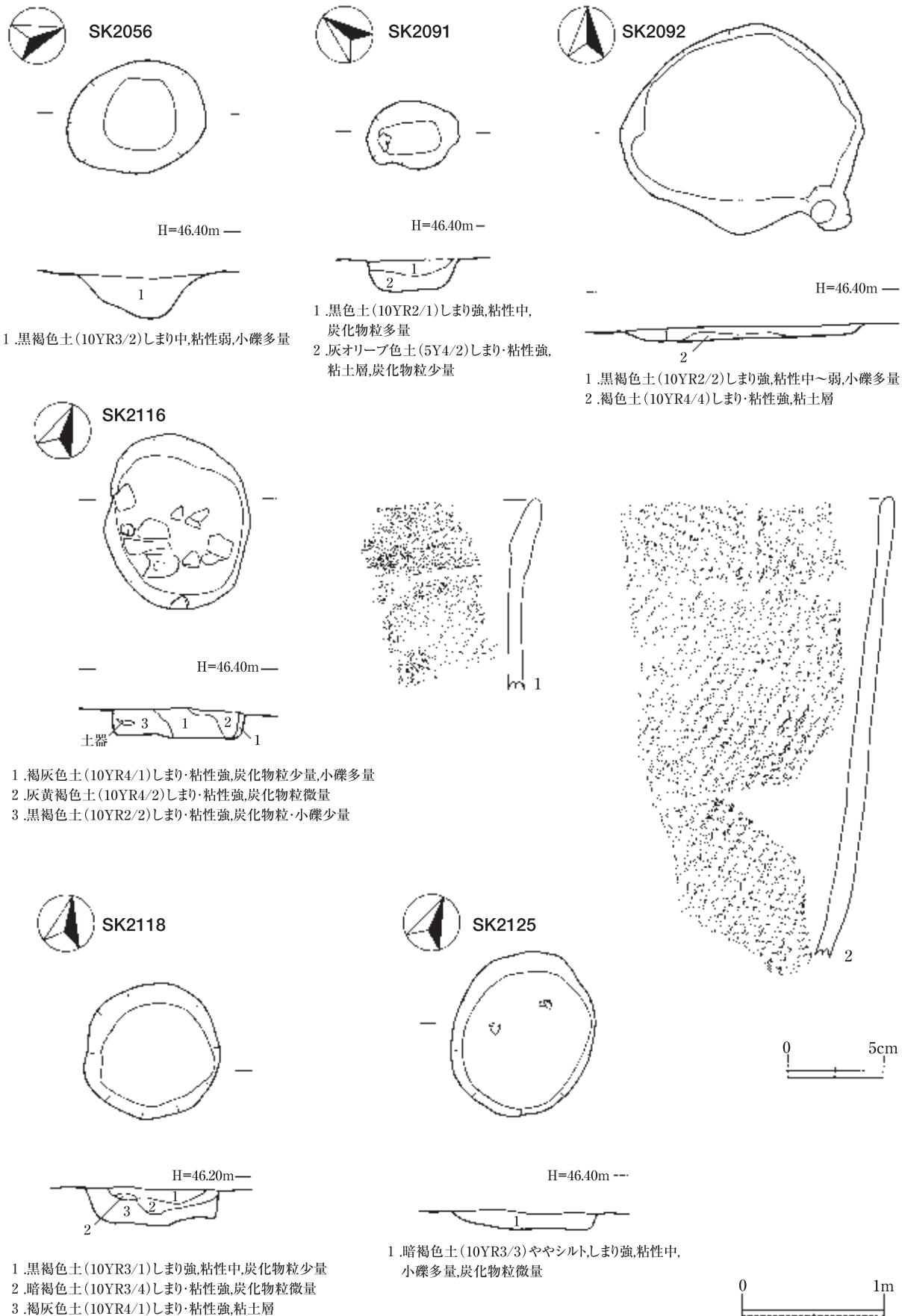
LO38グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は直径0.73～0.86mのほぼ円形で、深さは0.32mである。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した（第63図2～4）。

148 SK2212土坑（第63図）

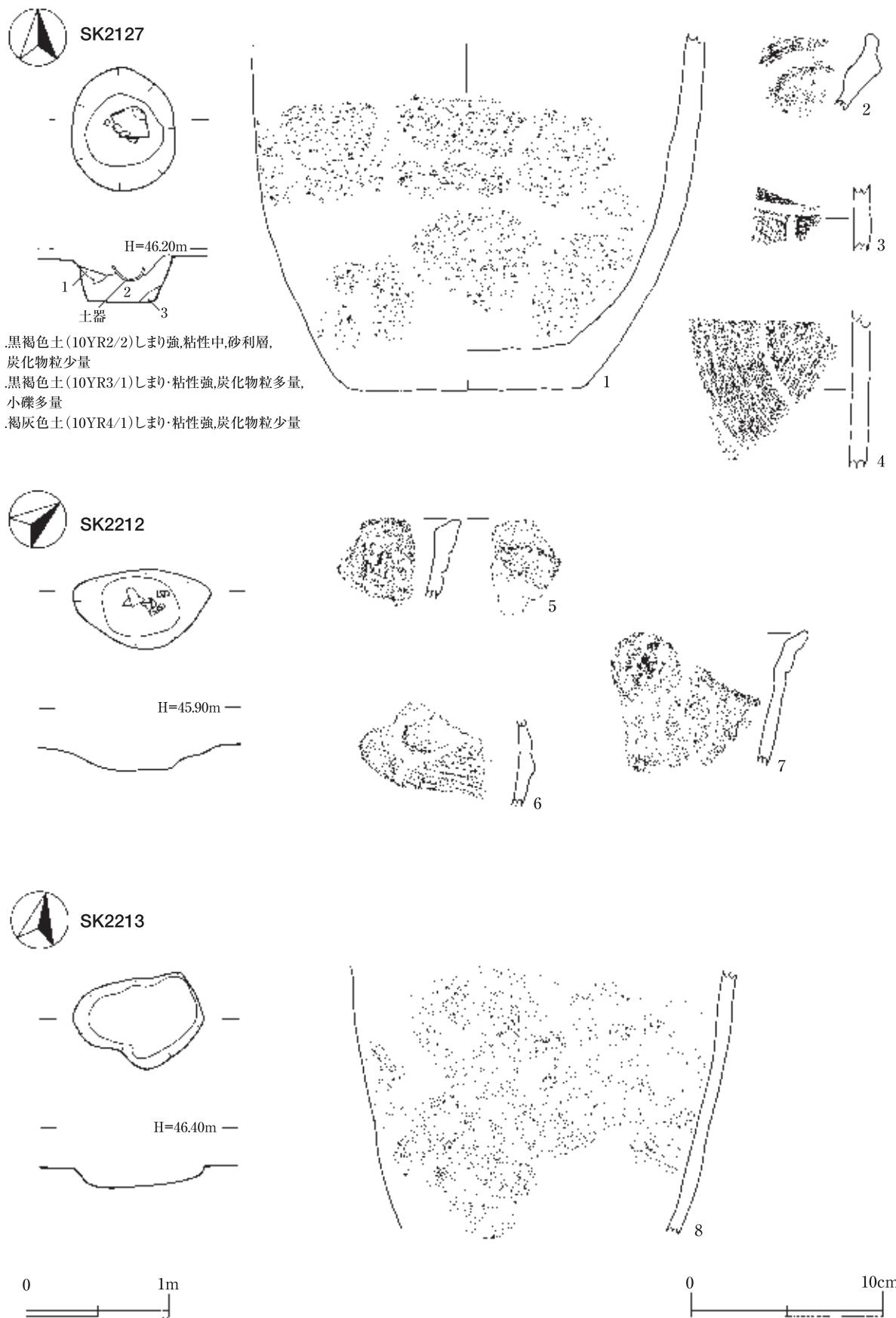
MC36・37グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.97m（北東—南西）、短軸0.56m（北西—南東）の橢円形で、深さは0.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群3類の土器が出土した（第63図5～7）。

149 SK2213土坑（第63図）

LQ39グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.92m（東—西）、短軸0.68m（北—南）の不整な橢円形で、深さは0.12mである。底面はやや西側に傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。縄文



第62図 SK2056・2091・2092・2116・2118・2125



第63図 SK2127・2212・2213

時代I群の土器が出土した（第63図8）。

150 SK2218土坑（第64図）

L P40グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸0.95m（北一南）、短軸0.87m（東一西）のほぼ円形で、深さは0.2mである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

151 SK2526土坑（第64図）

MA38グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.44m（北一南）、短軸1.02m（東一西）の楕円形で、深さは0.28mである。底面は平坦で、壁はやや急な角度で立ち上がる。遺物は出土しなかった。

152 SK2570土坑（第64図、図版26-3）

MA45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.7m（北一南）、短軸0.93m（東一西）の楕円形で、深さは0.38mである。底面は中央が丸みを帯び、壁は開きながら立ち上がる。縄文時代I群1類の土器が出土した（第64図2）。

153 SK2577土坑（第64図）

L T42・43グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.47m（北一南）、短軸2.19m（東一西）の不整形で、深さは0.24mである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。近世の磁器が出土した。

154 SK2604土坑（第64図）

MA36、MB36グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.07m（東一西）、短軸1.34m（北一南）の楕円形で、深さは0.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。縄文時代I群の土器が出土した。

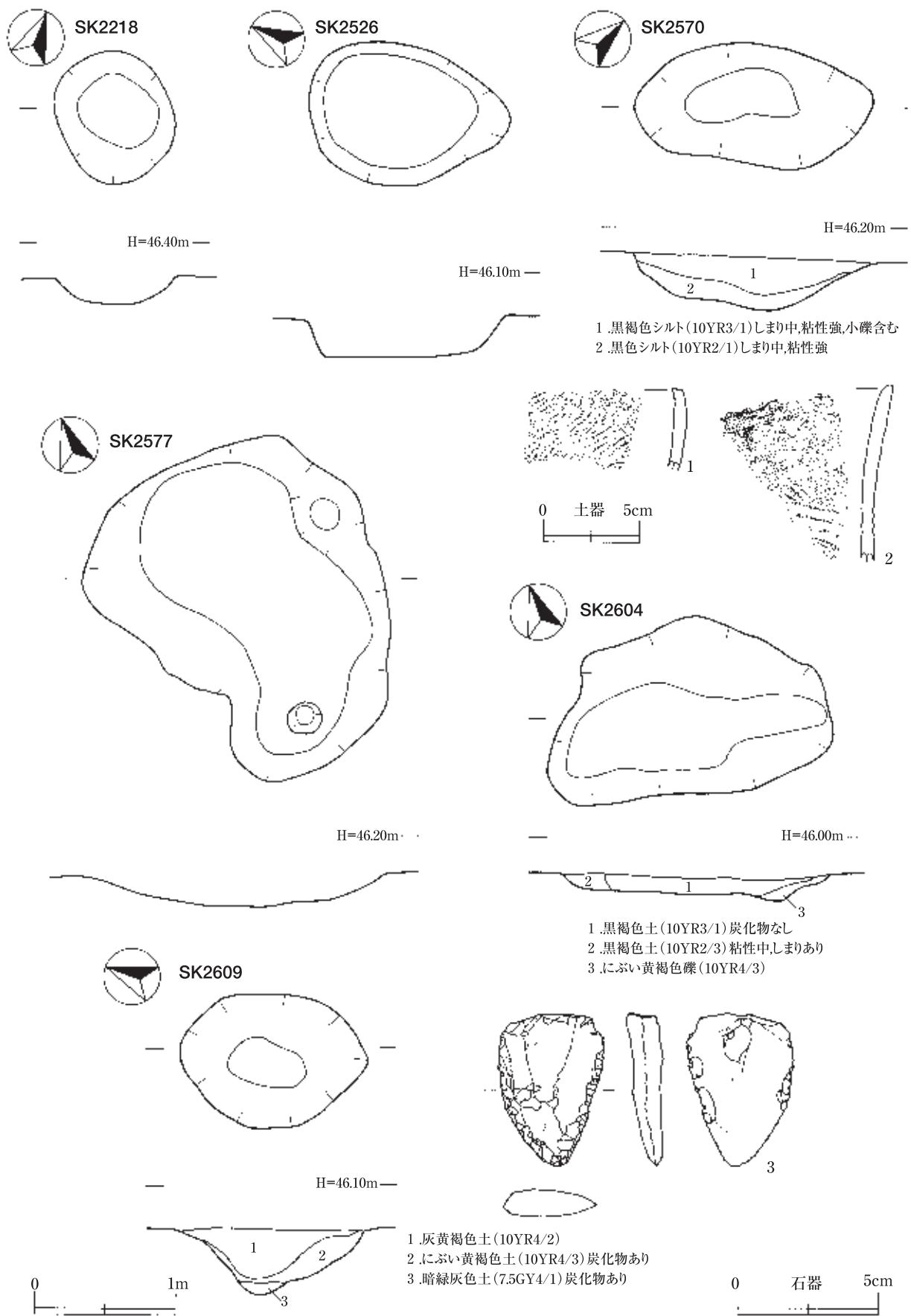
155 SK2609土坑（第64図）

MA39グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸1.34m（北一南）、短軸0.96m（東一西）の楕円形で、深さは0.48mである。底面はU字状で丸みを帯び、壁は開きながら立ち上がる。縄文時代I群の土器と石器（削器1類）が出土した（第64図3）。

⑤ 土器埋設遺構

1 SR01土器埋設遺構（第65図、図版27-1）

L H31グリッドにあり、地山面で土器の口縁部と暗褐色の掘り方を確認した。掘り込みは直径0.45～0.49mの円形で、深さは0.24mである。覆土は褐灰色土で、中型拳大の礫と土器片が出土した。土器は正位に埋設されており、土器側面及び底部の掘り込みは砂礫で隙間なく固められている。埋設土器



第64図 SK2218・2526・2570・2577・2604・2609

は残存部器高22.8cm、口径25.4cmの上半部深鉢形で、縄文時代I群3類の土器である（第65図1、図版37-1）。

2 SR02土器埋設遺構（第65図）

L D25グリッドにあり、地山面で土器の口縁部を確認した。掘り込みは直径0.26~0.28mの円形で、深さは0.07mと極めて浅い。覆土は炭化物粒が少量含まれた黒褐色土である。土器は正位に埋設されており、埋設土器上位及び底部の一部が欠損している残存部器高10.7cm、底径12cmの深鉢形で、縄文時代I群2類の土器である（第65図2、図版37-2）。

3 SR98土器埋設遺構（第65図、図版27-2）

L I 43グリッドにあり、地山面で土器の口縁の一部を確認した。掘り込みは長軸0.34m、短軸0.28mの橢円形で、深さは0.12mである。覆土は黒褐色土で、土器は正位に埋設されていたが、底径5.6cmの下部のみが残存していた。縄文時代III群の土器である（第65図3）。

4 SR194土器埋設遺構（第66図、図版27-3）

L G45グリッドにあり、地山面で土器の口縁部を確認した。掘り込みは直径0.42~0.45mの円形で、深さは0.25mである。土器内の底部から、礫1個が出土した。土器1点は正位に埋設されていたが上位は欠損していた。残存部器高26.2cm、底径8.2cmの深鉢形で、縄文時代II群の時期と考えられる土器である（第66図1、図版37-3）。

5 SR301土器埋設遺構（第66図）

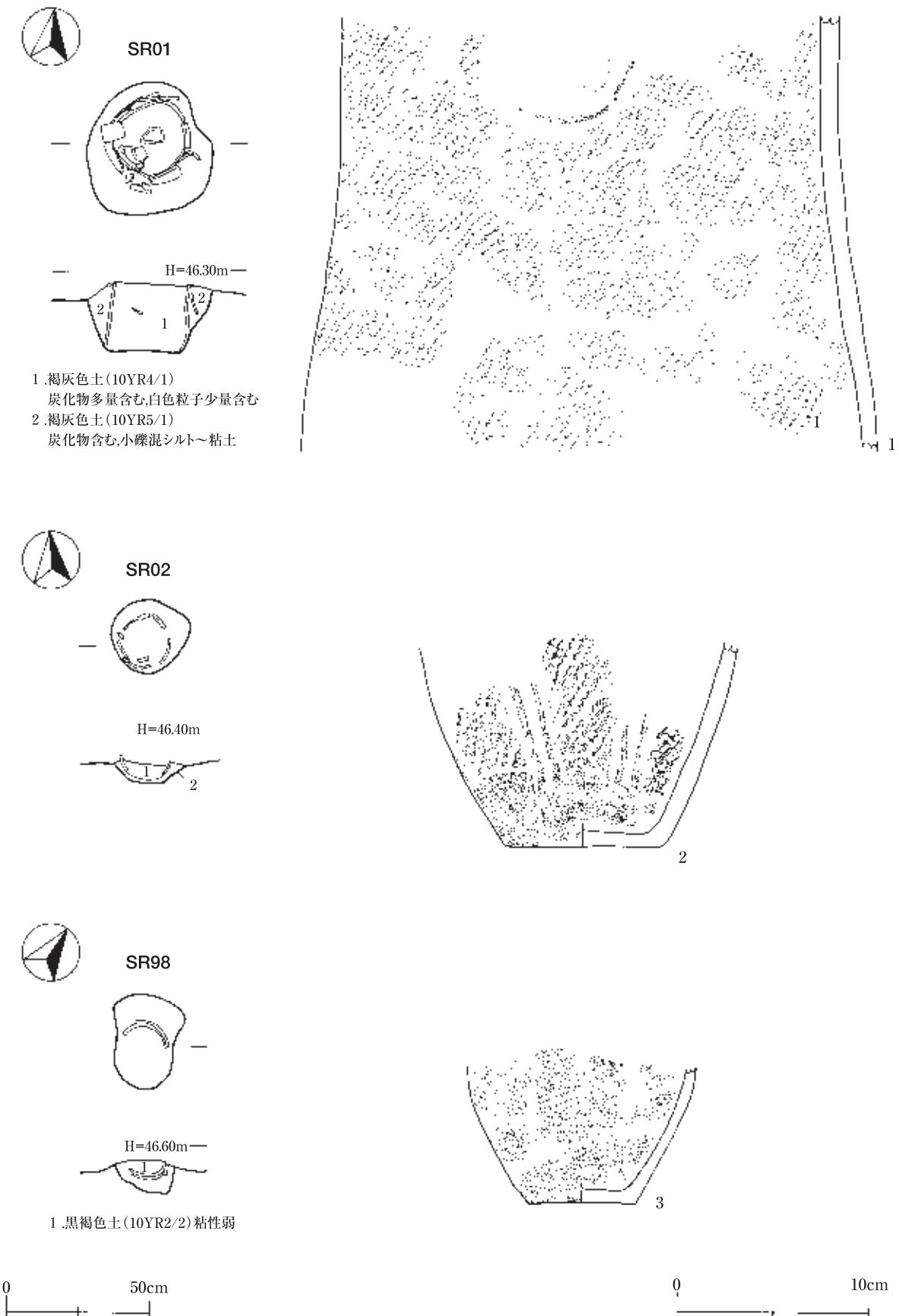
MC29、MD29グリッドにあり、地山面で土器の口縁部を確認した。掘り込みは直径0.35~0.36mの円形で、深さは0.2mである。覆土は1層が褐灰色土で、土器は正位に埋設されており、底部は欠損し、底部に土器片が折り重なっている。土器は深鉢形で、残存部器高21.4cm、口径29cmである。縄文時代I群3類の土器である（第66図2、図版37-4）。

6 SR307土器埋設遺構（第67図、図版28-1）

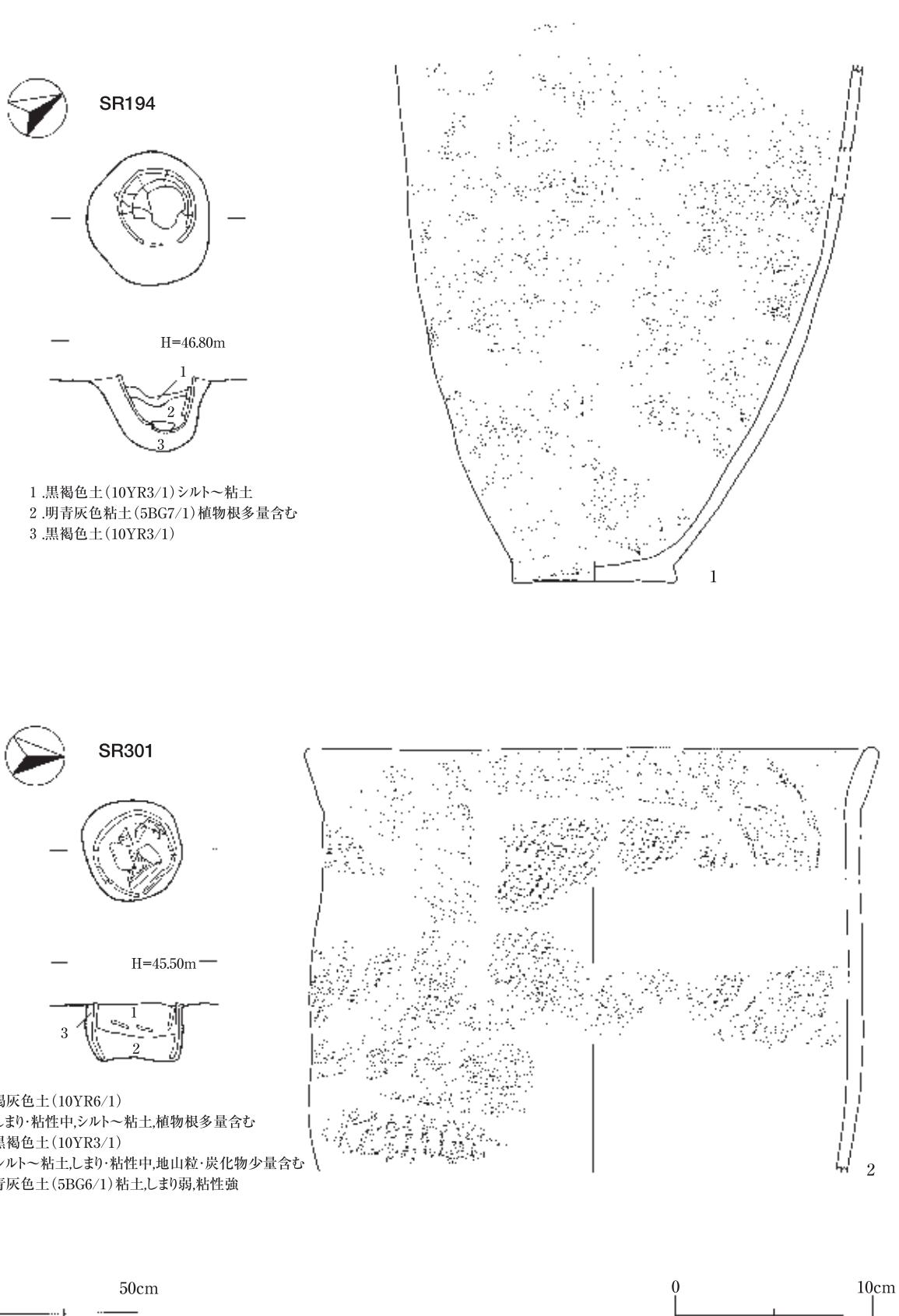
MD32グリッドにあり、地山面で土器の口縁の一部を確認した。掘り込みは直径0.4~0.41mの円形で、深さは0.23mである。覆土は粘性が非常に強くグライ化している。土器は正位に埋設されていたが下半部の深鉢形で、残存部器高20.7cm、底径15cmである。縄文時代I群の時期と思われる土器である（第67図1、図版37-5）。

7 SR357土器埋設遺構（第67図）

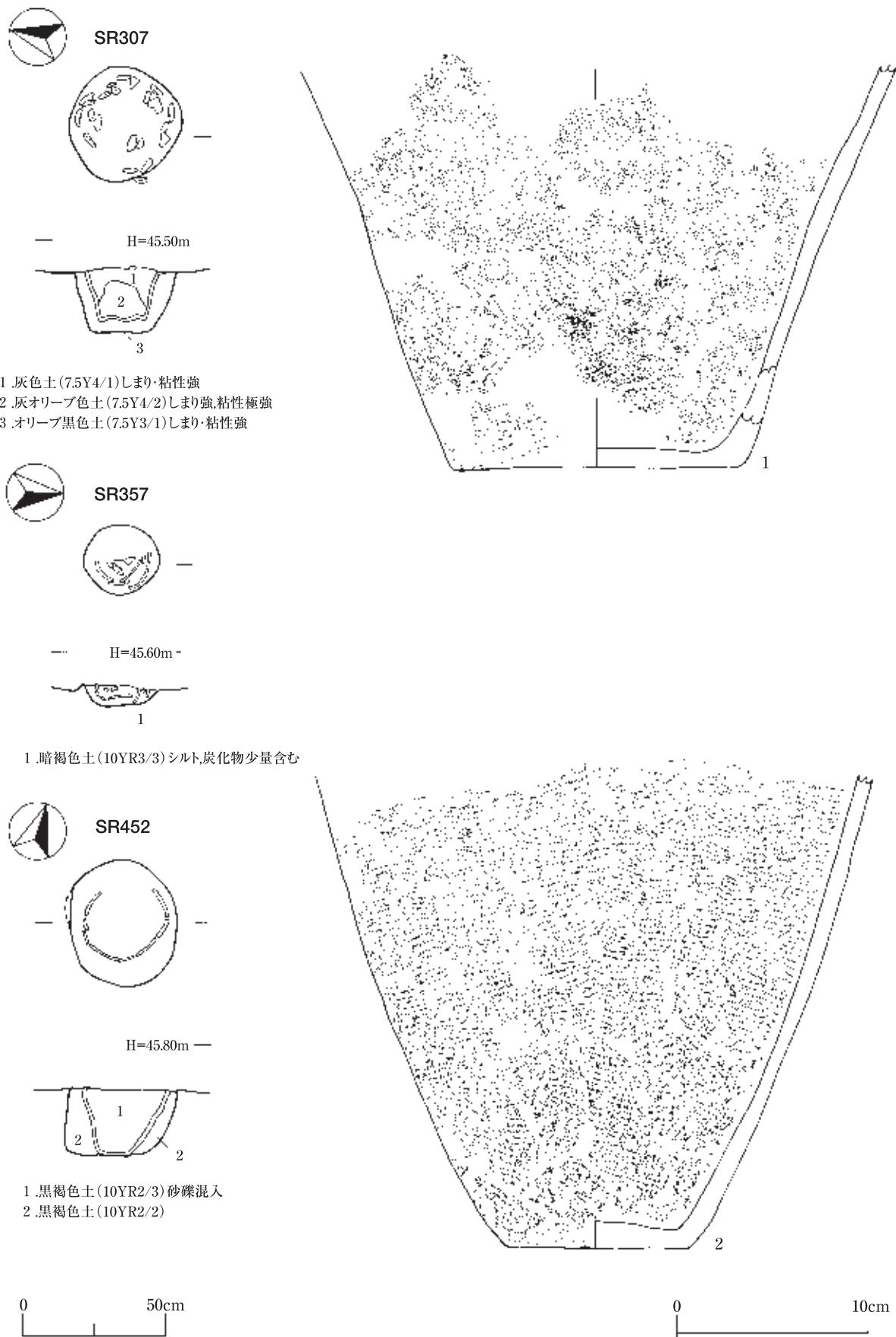
ME31グリッドにあり、地山面で土器の口縁部を確認した。掘り込みは直径0.25~0.27mの円形で、深さは0.08mと極めて浅い。覆土は、一部に黄褐色土が混じった暗褐色土である。縄文時代I群の土器が出土した。



第65図 SR01・02・98



第66図 SR194・301



第67図 SR307・357・452

8 SR452土器埋設遺構（第67図、図版28-2）

MF38グリッドにあり、地山面で土器の口縁部を確認した。掘り込みは長軸0.45m、短軸0.38mの楕円形で、深さは0.24mである。覆土は黒褐色土で砂礫が上位に一部混入している。土器は正位に埋設されており、上位が欠失している。残存部器高24.5cm、底径9.4cmで、縄文時代Ⅲ群の土器である（第67図2、図版37-6）。

9 SR471土器埋設遺構（第68図、図版28-3）

MG37、MH37グリッドにあり、地山面で土器の口縁部を確認した。掘り込みは直径0.27～0.31mのほぼ円形で、深さは0.19mである。土層中に小石と砂礫を含む。下層に黄褐色の白い微粒子が見られる。土器は正位に埋設されており、側面が二重の土器破片で囲まれている。土器は深鉢形で、器高推定41.2cm、口径24.2cm、底径11.6cmである。縄文時代Ⅰ群2類の時期と思われる土器である（第68図1、図版38-1）。

10 SR574土器埋設遺構（第68図）

MJ41グリッドにあり、地山面で土器片が集中した状態で探出された。掘り込みは削平され残存部は僅かである。長軸0.46m、短軸0.38mの楕円形で、深さは0.11mである。覆土は黒色土で、締まりも弱い。埋設土器は深鉢形で、底径8.7cmの下半部のみ残存していた。縄文時代Ⅰ群の土器である（第68図2）。

11 SR756土器埋設遺構（第69図）

ME50グリッドにあり、地山面で土器の口縁部の上位を確認した。掘り込みは直径0.19～0.2mの円形で、深さは0.17mである。覆土は灰黄褐色土でややグライ化している。土器は正位に埋設されていた。残存部器高17cm、底径7cmの深鉢形である。縄文時代Ⅰ群2類の土器である。

12 SR1439土器埋設遺構（第69図）

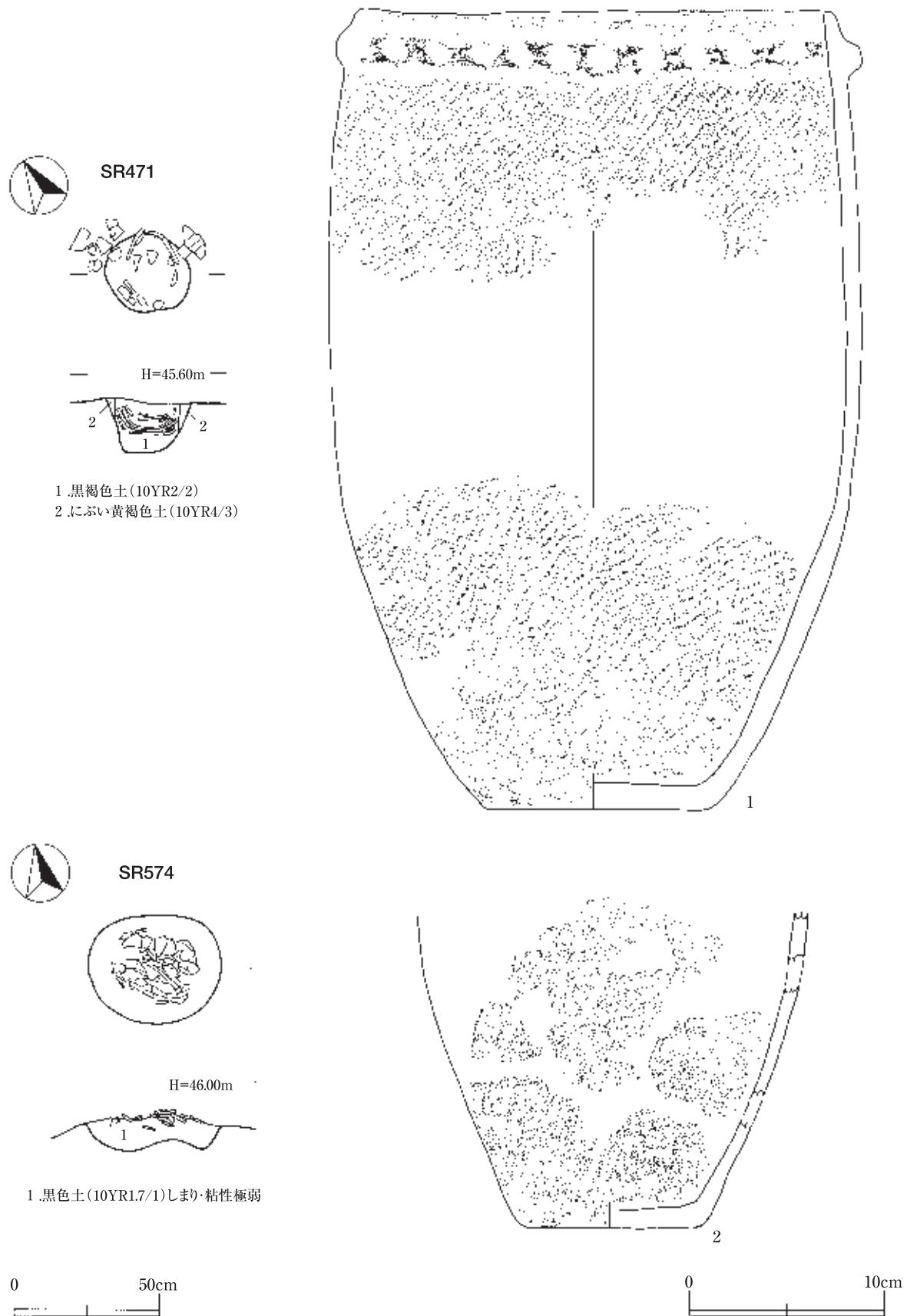
LN44グリッドにあり、地山面で土器片が集中した状態で検出された。掘り込みは長軸0.31m、短軸0.26mの不整な楕円形で、深さは0.05mと極めて浅い。覆土はややグライ化し粘性が強い。縄文時代Ⅰ群の土器が出土した。

13 SR1476土器埋設遺構（第69図、図版29-1）

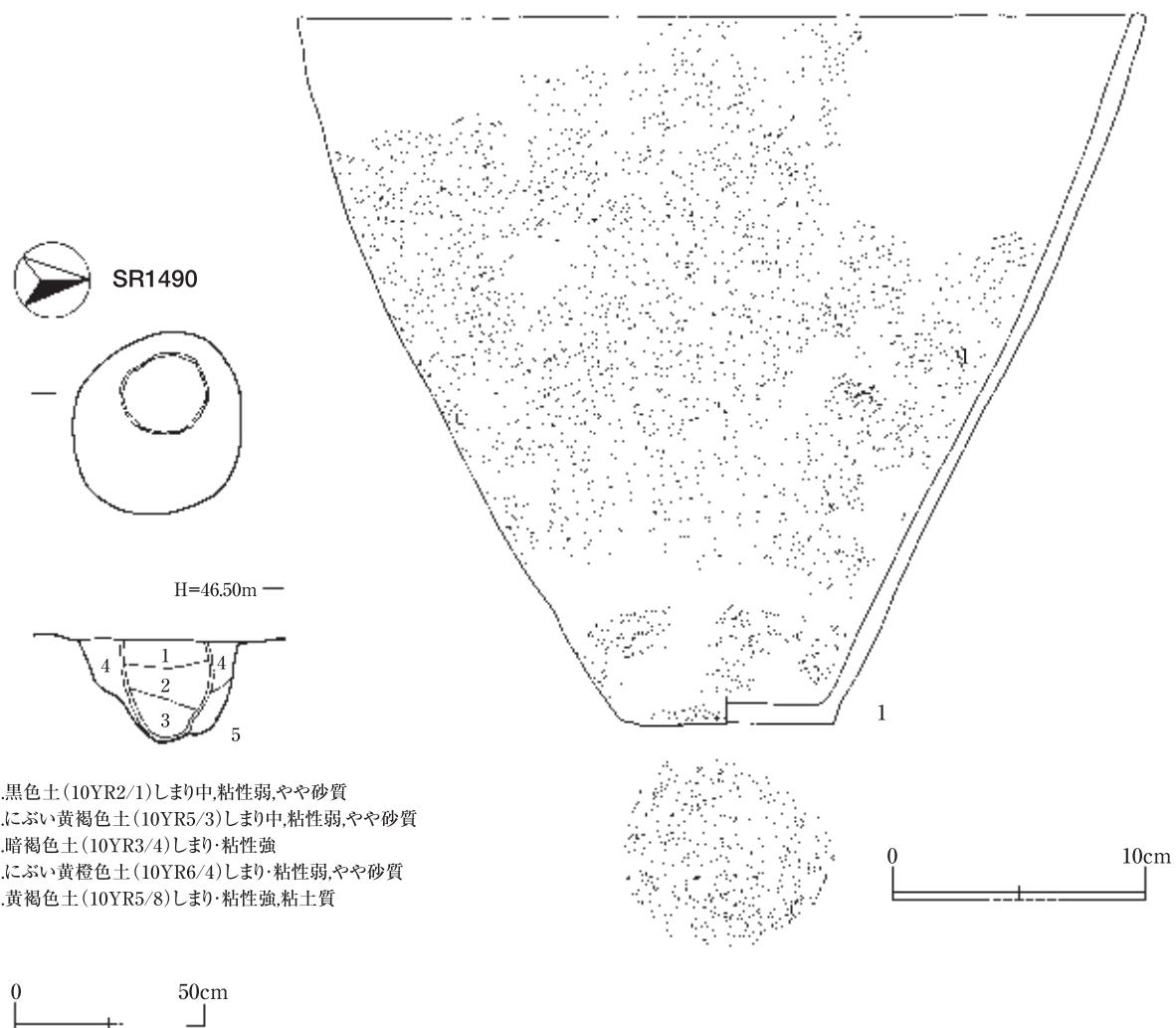
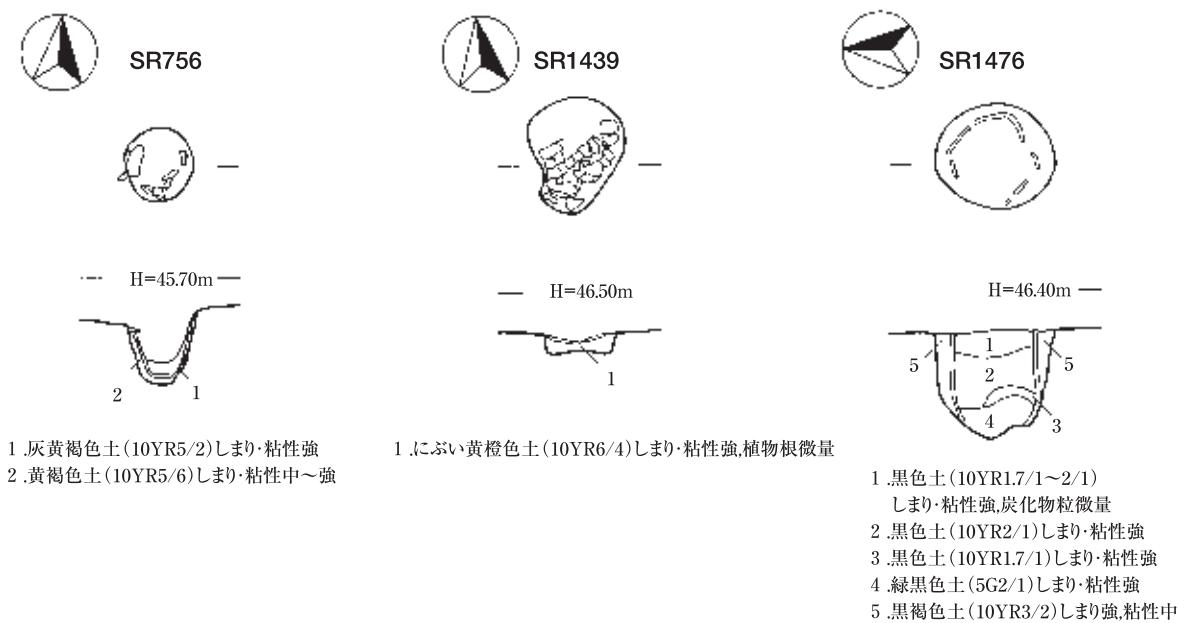
LK42グリッドにあり、地山面で土器口縁部の一部を確認した。掘り込みは直径0.28～0.32mの円形で、深さは0.29mである。1層～3層の覆土は黒色土が主で、締まりや粘性も強い。下位4層はグライ化した緑黒色土である。土器は正位に埋設されており底部は欠損している。残存部器高25cm、口径22cmの深鉢形で、縄文時代Ⅰ群の土器である。

14 SR1490土器埋設遺構（第69図、図版29-2）

LL47、LM47グリッドにあり、地山面で土器口縁部を確認した。掘り込みは長軸0.51m、短軸0.47



第68図 SR471・574



第69図 SR756・1439・1476・1490

mのほぼ円形で、深さは0.28mである。覆土の上位は黒色土でやや砂質土を含む。土器は正位に埋設されており、胴部～底部は遺存状態も良好である。器高28cm、口径33.6cm、底径8.6cmの深鉢形で、縄文時代Ⅱ群の時期と思われる土器である（第69図1、図版38-2）。

15 S R1598土器埋設遺構（第70図）

L Q47グリッドにあり、地山面で土器の口縁部を確認した。掘り込みは、長軸0.47m、短軸0.29mの不整な楕円形で、深さは0.19mである。掘り込みは、炭化物粒を僅かに含む黒色土で粘性も強い。土器は正位に埋設されているが、遺存状態は不良である。埋設土器の直下に別個体の土器底部が出土した。残存部器高14cm、底径8.6cmの深鉢形土器である。縄文時代Ⅰ群の土器である（第70図1）。

16 S R2074土器埋設遺構（第70図）

L R47グリッドにあり、地山面で土器の胴部中位と上位口縁部の土器片を確認した。掘り込みは直径0.31mの円形で、深さは0.13mである。2層は植物根（葦）を含む。土器は正位に埋設されているが、胴部～下部のみ残存していた。残存部器高10.8cm、底径12cmの深鉢形土器である。縄文時代Ⅰ群の土器である（第70図2）。

18 S R2084土器埋設遺構（第70図、図版29-3）

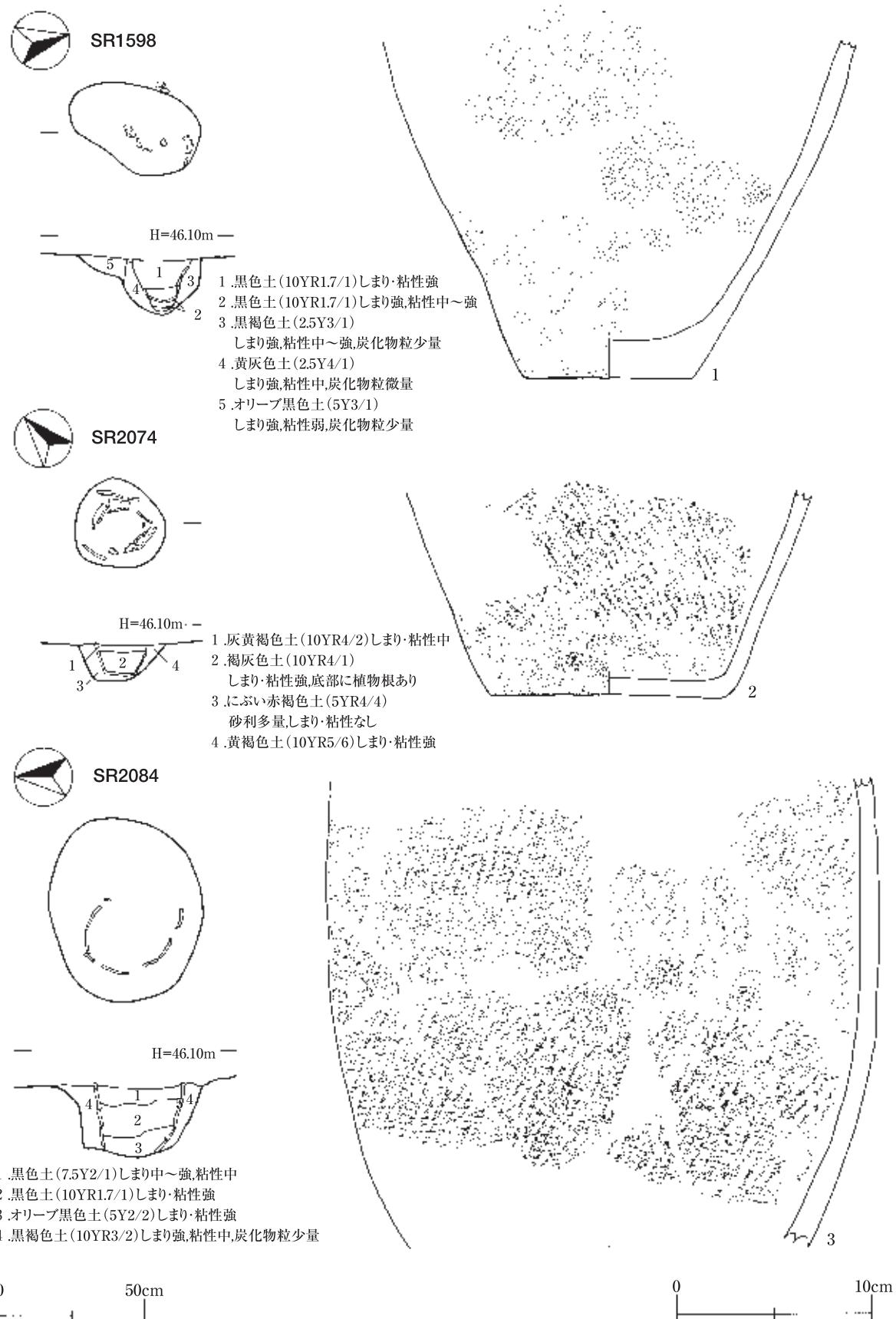
L Q43グリッドにあり、地山面で土器口縁部を欠失した上位を確認した。掘り込みは長軸0.65m、短軸0.53mの楕円形で、深さは0.24mである。覆土1～2層は黒色土で、3層下位はグライ化している。土器は正位に埋設されていたが、胴部のみ残存の深鉢形土器である。縄文時代Ⅱ群の時期と思われる土器である（第70図3）。

19 S R2155土器埋設遺構（第71図、図版30-1）

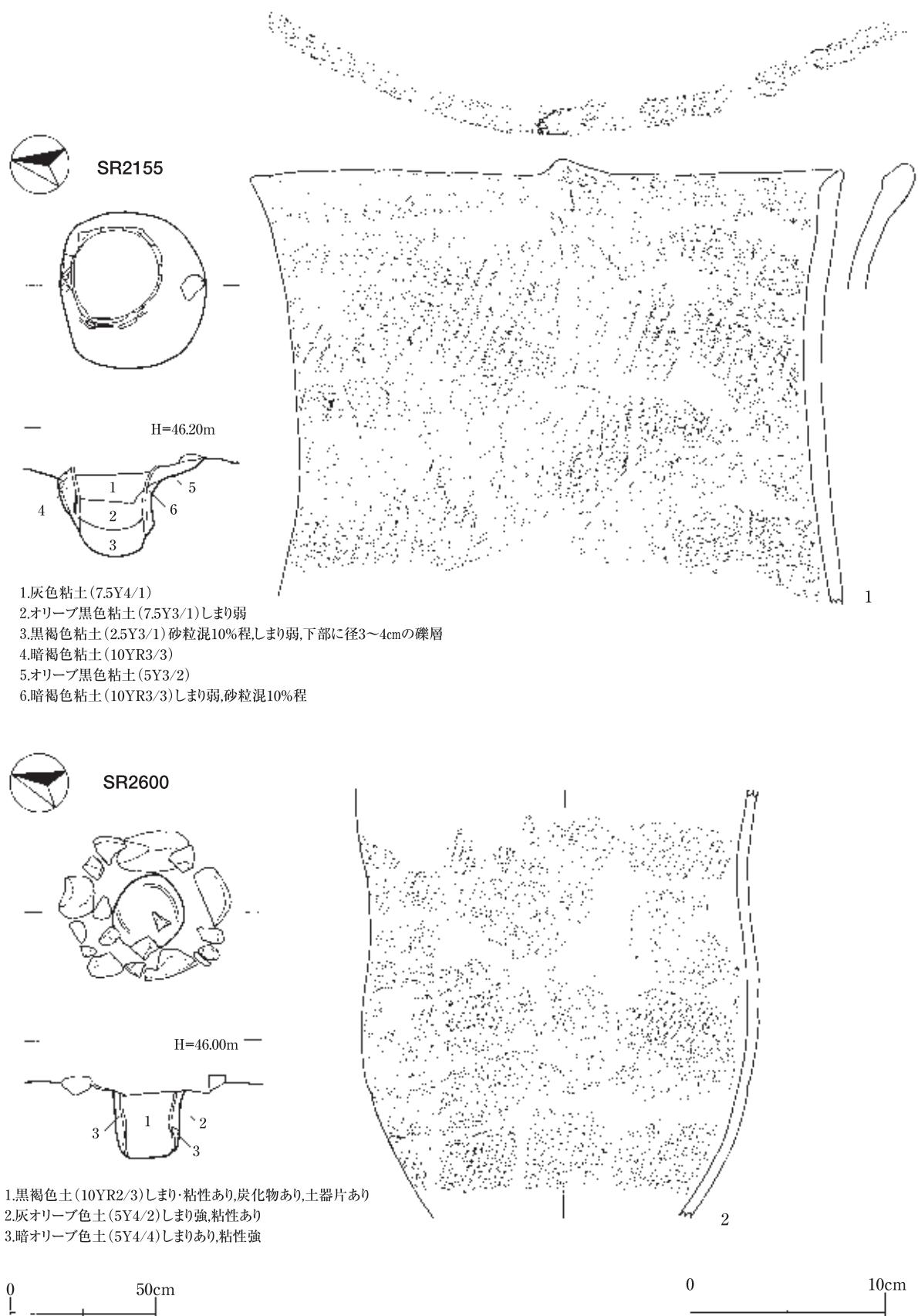
L N37、L O37グリッドにあり、地山面で土器の口縁部を確認した。掘り込みは長軸0.54m、短軸0.5mのほぼ円形で、深さは0.3mである。3層は黒褐色粘土で、砂粒が混じっている。3～4cm程の礫層も確認された。土器は上半部が正位に埋設されていた。残存部器高22.4cm、口径30.4cmの深鉢形土器で、縄文時代Ⅰ群3類の土器である（第71図1）。他に縄文時代の石錐と近世の陶器（擂鉢）が出土した。

20 S R2600土器埋設遺構（第71図、図版30-1）

MB41グリッドにあり、地山面で確認した。掘り込みは直径0.25mのほぼ円形で、深さは0.25mである。土器は正位に埋設されていたが、胴部のみ残存の深鉢形土器で、縄文時代Ⅰ群3類の土器である（第71図2）。埋設土器の外周は拳大の礫12個で囲まれていた。S I 2578竪穴住居跡が北東4mに近接する。



第70図 SR1598・2074・2084



第71図 SR2155・2600

⑥ 捨て場

1 S T 36捨て場 (第6・72図、図版31)

A区南側のL E 33～L G 32グリッドにある旧河川の岸から遺物がまとまって出土した。東西幅約10m、南北約5mの範囲で、深さは最深部で0.25cmである。遺物量はコンテナで12箱分である。土器は縄文時代中期のI群3類土器（第73図1～6・第74図、図版38-6・39-1）およびIII群土器（第73図7、図版39-2）と、石器（石鏃・削器・石匙・磨石・凹石）、黒曜石が出土した。

2 S T 2090捨て場 (第10・72図、図版32)

E区南東のL J 37～39、LM37グリッドにある旧河川跡の落ち込みから遺物がまとまって出土した。東西14.6m、南北8.8m（北西—南東）の不整形の範囲で、確認面からの深さは最深部で0.65mである。堆積土は5層あり、3～4層が遺物包含層でコンテナ6箱分の遺物が出土した。土器は縄文時代中期のI群3類土器（第75図、図版39-3・4）、晩期のIII類土器（第76図7～13、図版39-5）が出土した。第76図14（図版39-6）・第77図15は縄文、16は条痕が施されたもので、これらも晩期であろう。弥生時代の土器として、変形工字文などを施すもの（18～21、図版40-1）、鋸歯文や3条の平行沈線間に列点文を並列するもの（22）が見られる。23は縦型の石匙である。

2 弥生時代

(1) 遺構と遺構内出土遺物

① 土坑

1 SK 92土坑 (第36図)

L C 44・45、L D 44・45グリッドにあり、地山面で確認した。平面形は長軸2.65m（北—南）、短軸2.90m（東—西）の楕円形で、深さは0.34mである。底面の南側にピット状のくぼみがある。弥生時代の土器が出土した。（第36図1・2）

3 平安時代

(1) 遺構と遺構内出土遺物

① 竪穴住居跡

1 SI 1034竪穴住居跡 (第78図、図版33)

《位置》 L J 42・43、L K 42・43グリッド。

《確認》 地山面で方形の壁及びカマドの煙道上部が確認された。

《重複》 SK 1140土坑と重複し、これよりも新しい。

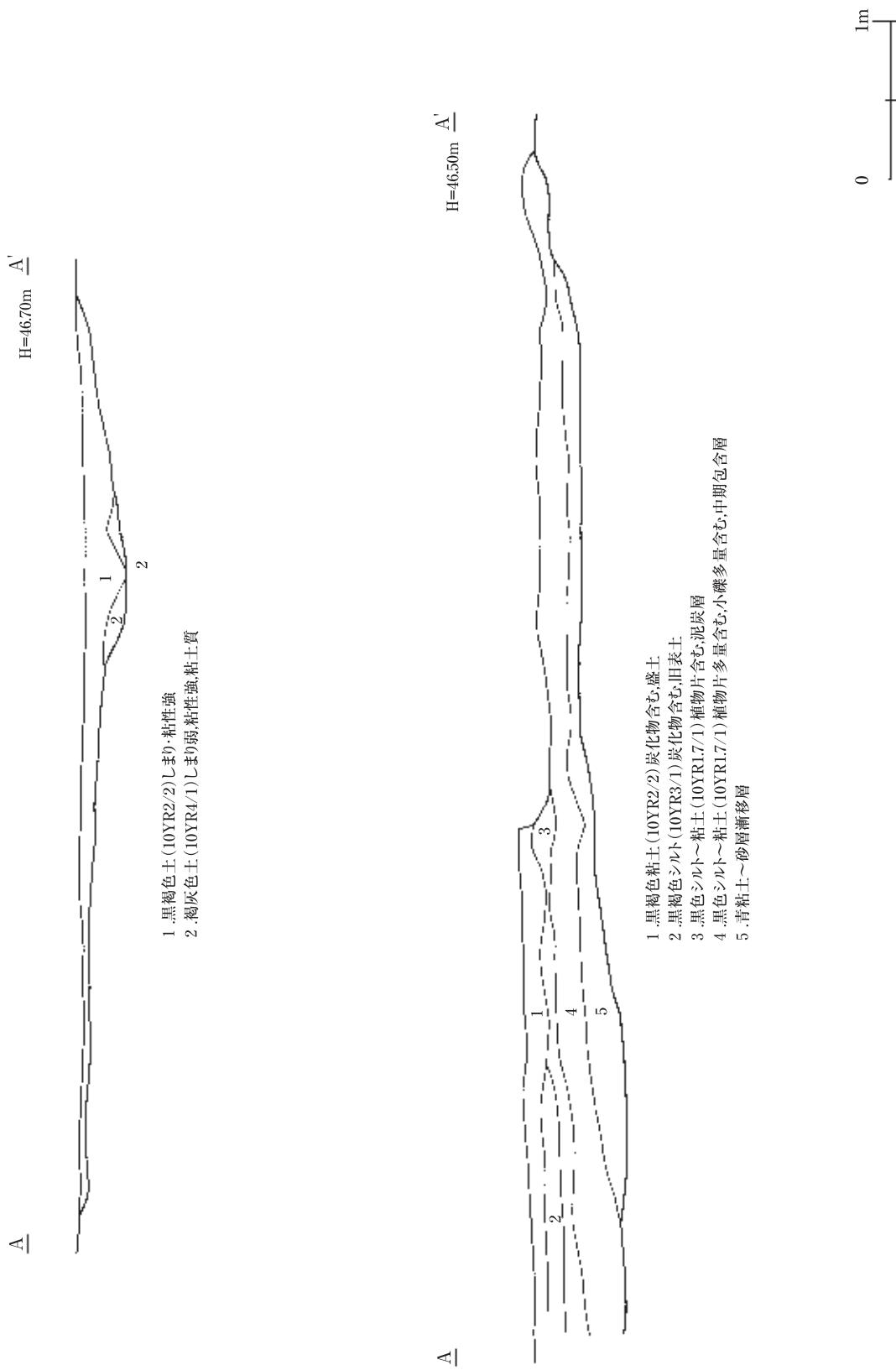
《規模》 長軸3.4m（北東—南西）、短軸2.86m（北西—南東）で、床面までの深さは0.1～0.22mである。

《平面形》 ほぼ隅丸方形である。

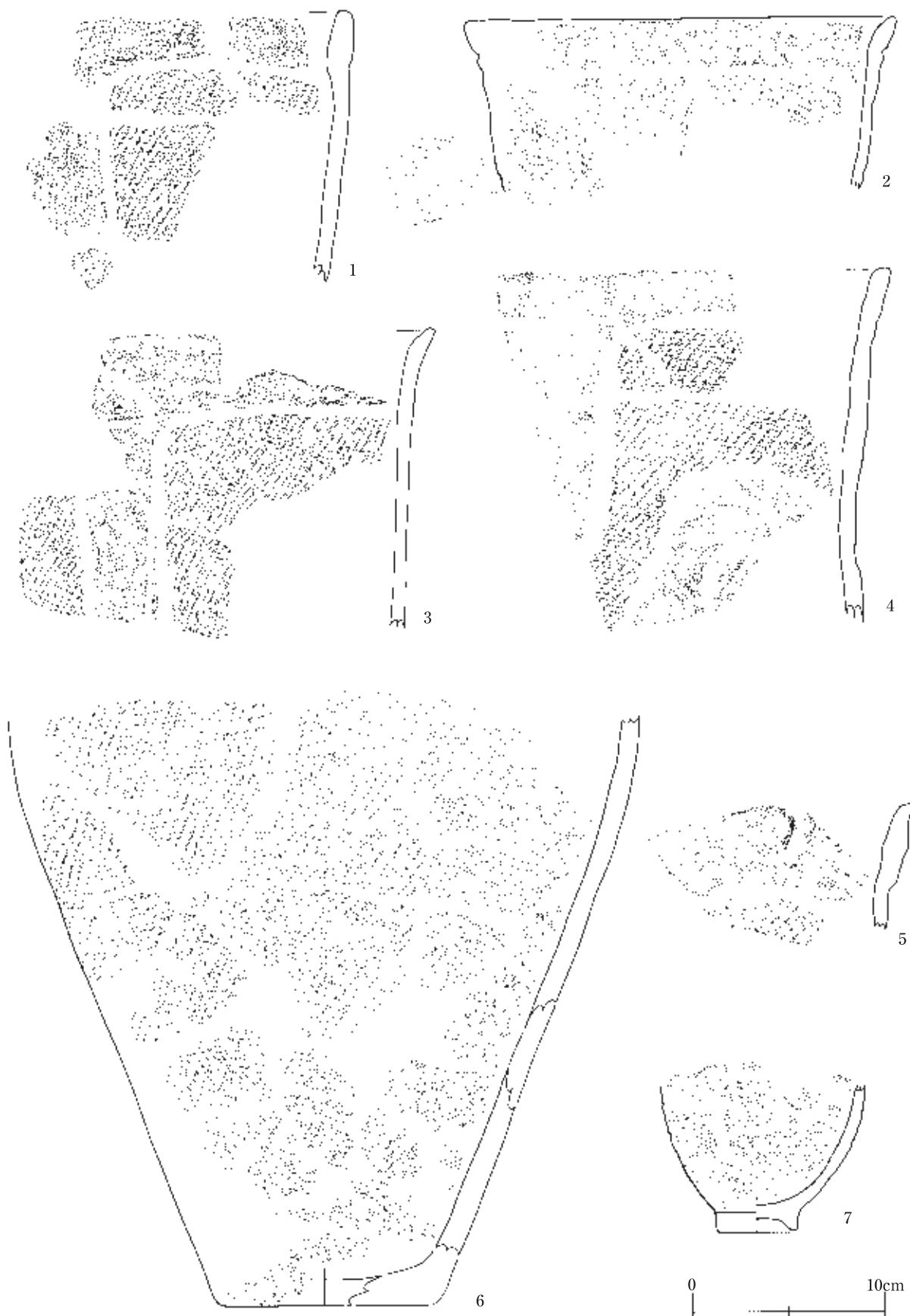
《埋土》 黒色土、黒褐色土である。床面近くから十和田a火山灰を検出した。

《壁》 急な角度で立ち上がる。

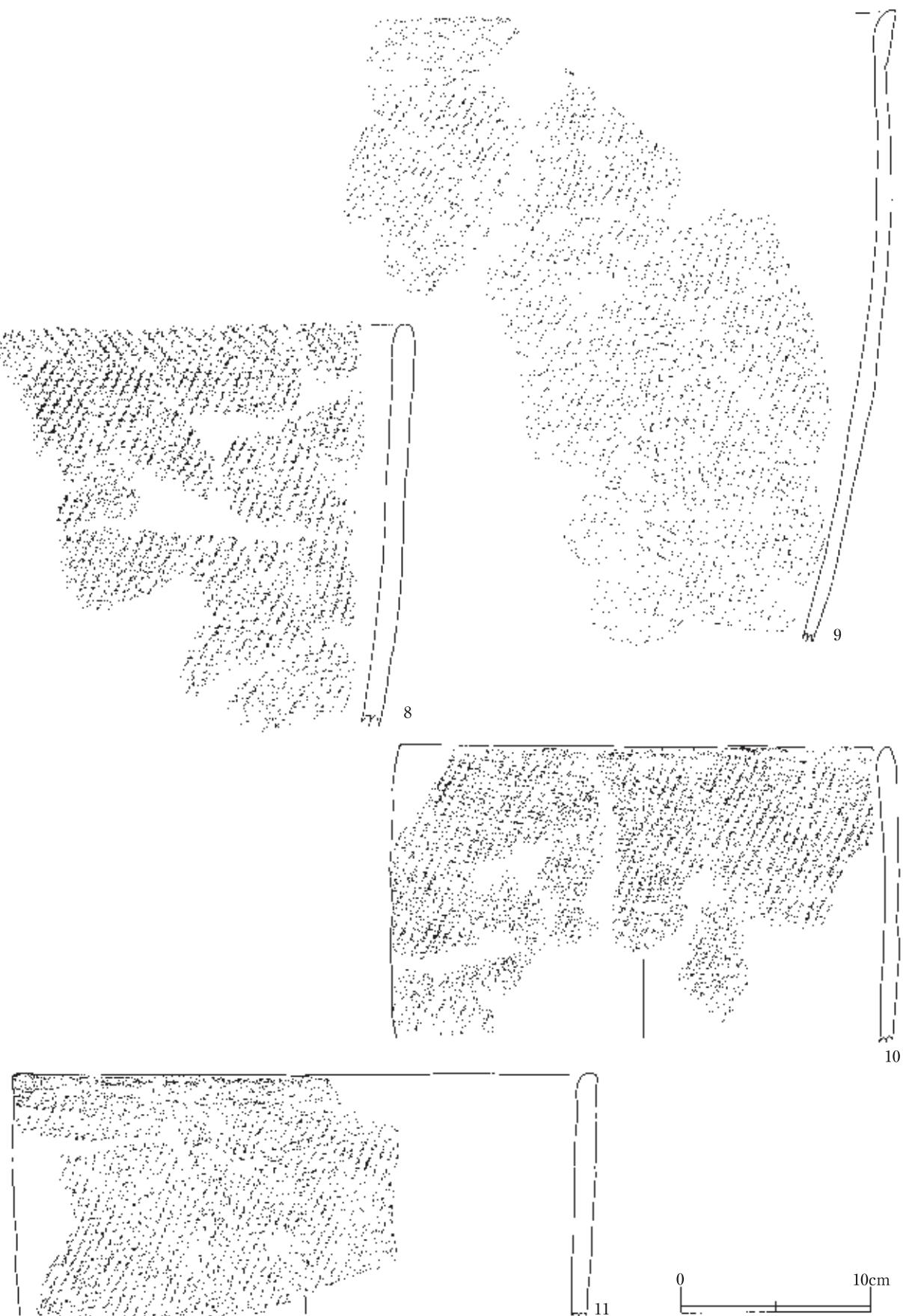
《床面》 固く締まっている。床面の南東側に炭化物を検出した。



第72図 ST36・2090土層



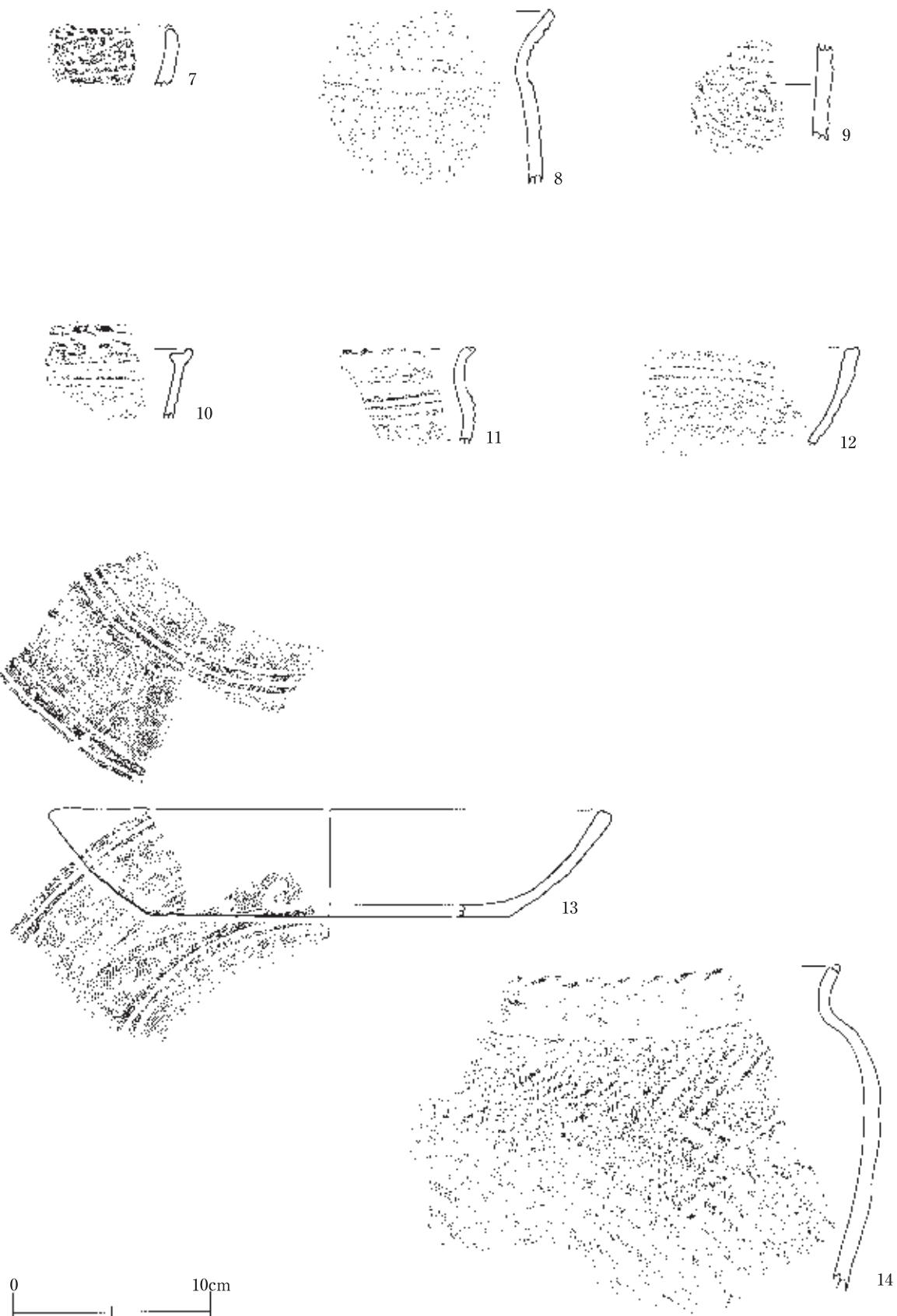
第73図 ST36出土遺物(1)



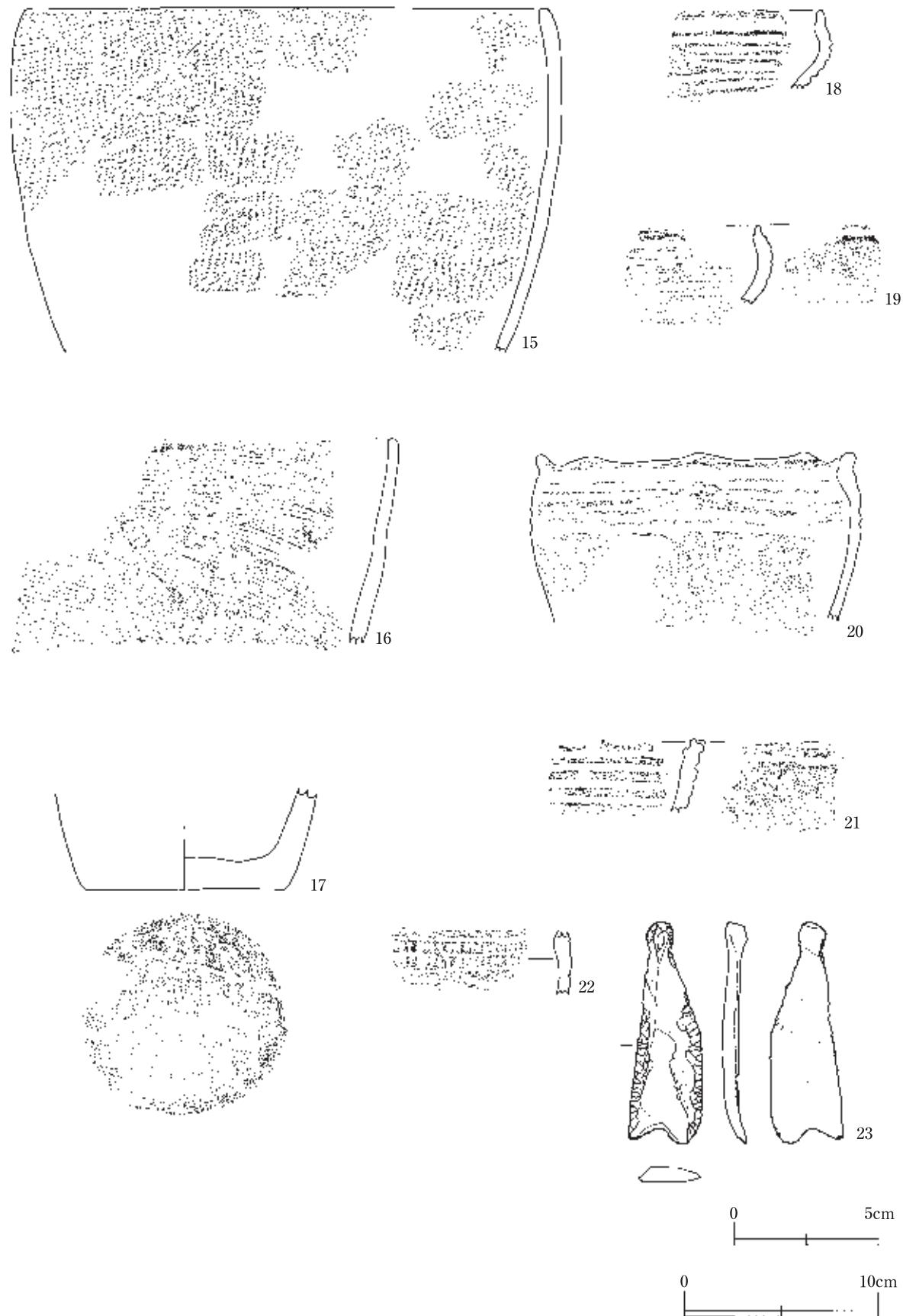
第74図 ST36出土遺物(2)



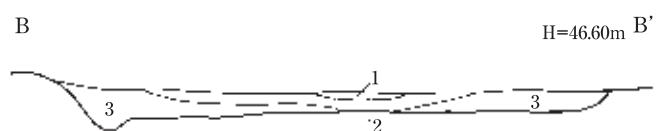
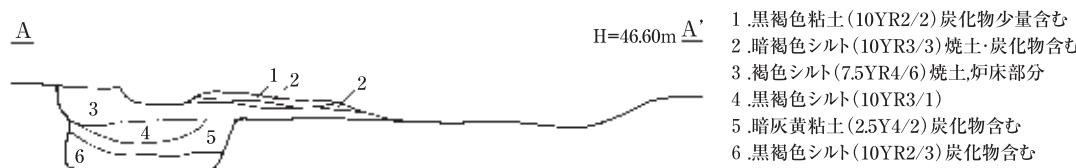
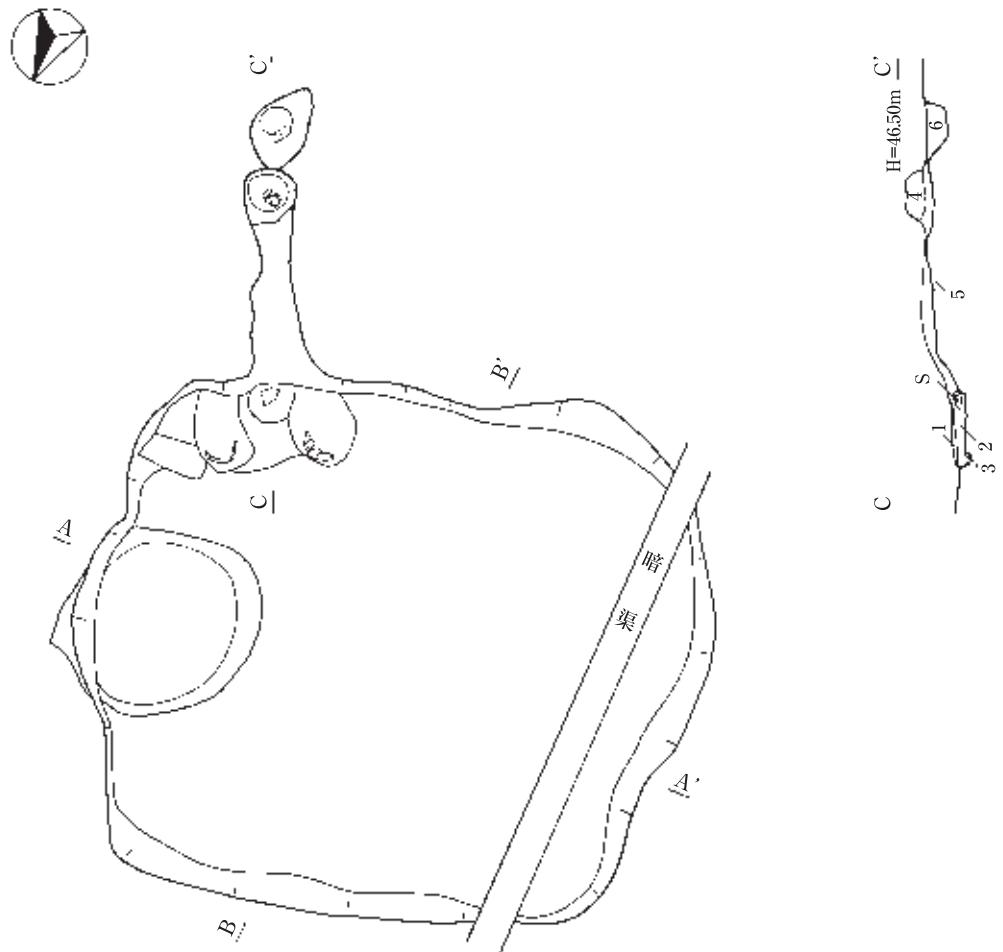
第75図 ST2090出土遺物(1)



第76図 ST2090出土遺物(2)



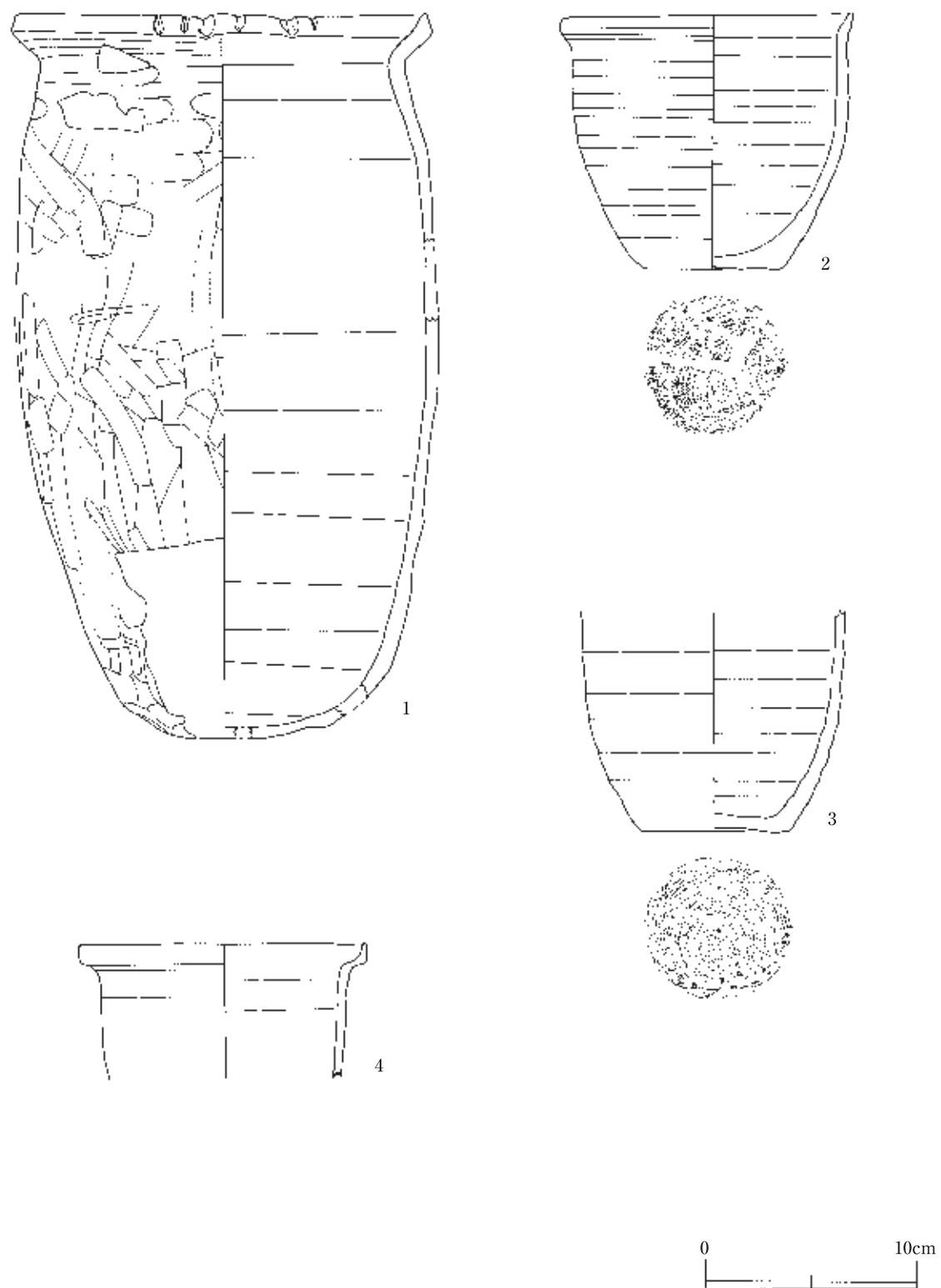
第77図 ST2090出土遺物(3)



- 1 黒色シルト(10YR2/1)地山粒子・炭化物少量含む
- 2 灰白色土(5YR8/1)火山灰小ブロック含む
- 3 黑褐色シルト(10YR2/3)地山粒子少量含む
- 4 黑褐色シルト(10YR3/1)細礫多量含む,貼床
- 5 暗褐色砂～粘土(10YR3/3)細礫含む
- 6 黑褐色粘土(10YR3/2)

0 2m

第78図 SI1034



第79図 SI1034出土遺物

《カマド》住居の南東側隅に構築されている。煙道は直線的で規模は長さ1.1m、最大幅0.4mである。カマド内は炭化物が混入していて、深さは0.25mである。

《柱 穴》確認できなかった。

《遺 物》土師器杯・甕が出土した（第79図1～4、図版41-2・3）。他に縄文時代I群の土器、石籠、近世の陶器が出土した。

《時 期》出土した遺物から平安時代と考えられる。

② 土 坑

1 SK365土坑（第80図、図版33）

MF32グリッドにあり、地山面で確認した。中世と考えられるSKP378柱穴様ピットと重複していた。土層断面での切り合い関係から本土坑が古いと考えられる。平面形は長軸1.2m（北一南）、短軸0.92m（東一西）のほぼ橢円形で、深さは最深部で0.13mである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。須恵器壺甕類が出土した（第80図1）。縄文時代I群の土器も出土した。

2 SK367土坑（第80図）

MG32グリッドにあり、地山面で確認した。SKP380柱穴様ピットと重複していたが、本土坑が新しい。平面形は長軸0.94m（北東一南西）、短軸0.85m（北西一南東）のほぼ円形で、深さは最深部で0.15mである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。須恵器壺甕類が出土した（第80図2）。縄文時代I群の土器も出土した。

第3節 遺構外出土遺物

1 縄文時代の出土遺物

（1）土器（第81～83図）

I群 縄文時代中期の土器

縄文時代中期の土器は本遺跡出土土器の大半を占める。文様構成・器形などから3類に分類した。

1類 地文が縄文で、粘土紐による2本単位の貼付文が横位、縦位に展開し、垂下する渦巻状文も描かれるもの（1）。

2類 沈線と隆帯の組み合わせにより渦巻状文・曲折区画文が描かれる土器である。

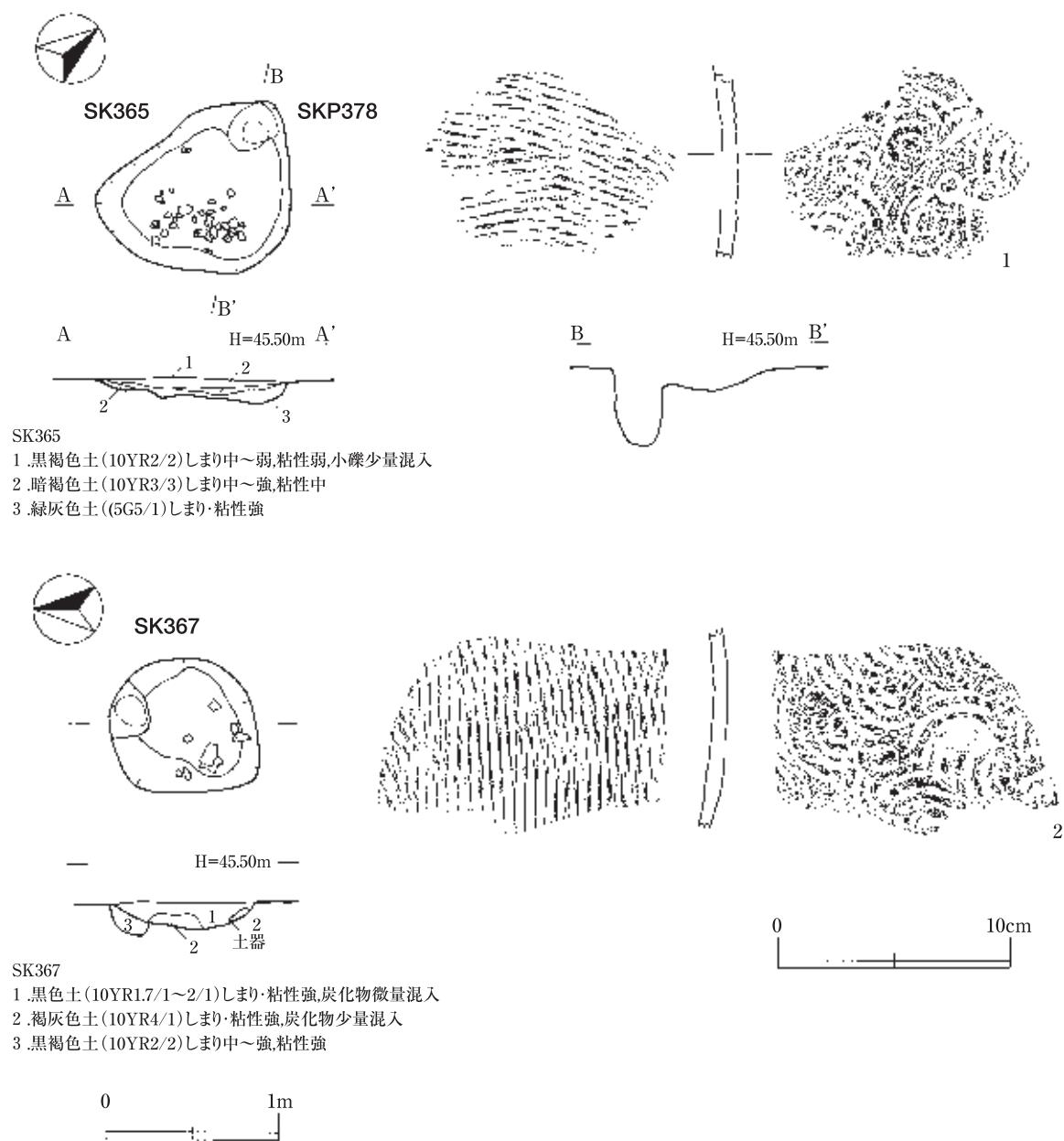
平口縁または波状口縁で、キャリパー形を呈するものもある。口唇に沈線を伴うものや、口縁部に横位の渦巻状文、刺突文が施文されるものもある（2～10）。

3類 沈線によるアルファベット状・渦巻状・矩形状の区画内に縄文が充填され、区画外は磨り消される土器である（11）。

I群の土器は1・2類が大木8a・8b式に、3類は大木10式に比定されよう。

II群 縄文時代後期の土器（12～15）

縄文時代後期の土器はごく少量のみ出土した。ほとんどは縄文時代後期初頭、あるいは中期末葉～後期初頭に位置づけられ、一括した。



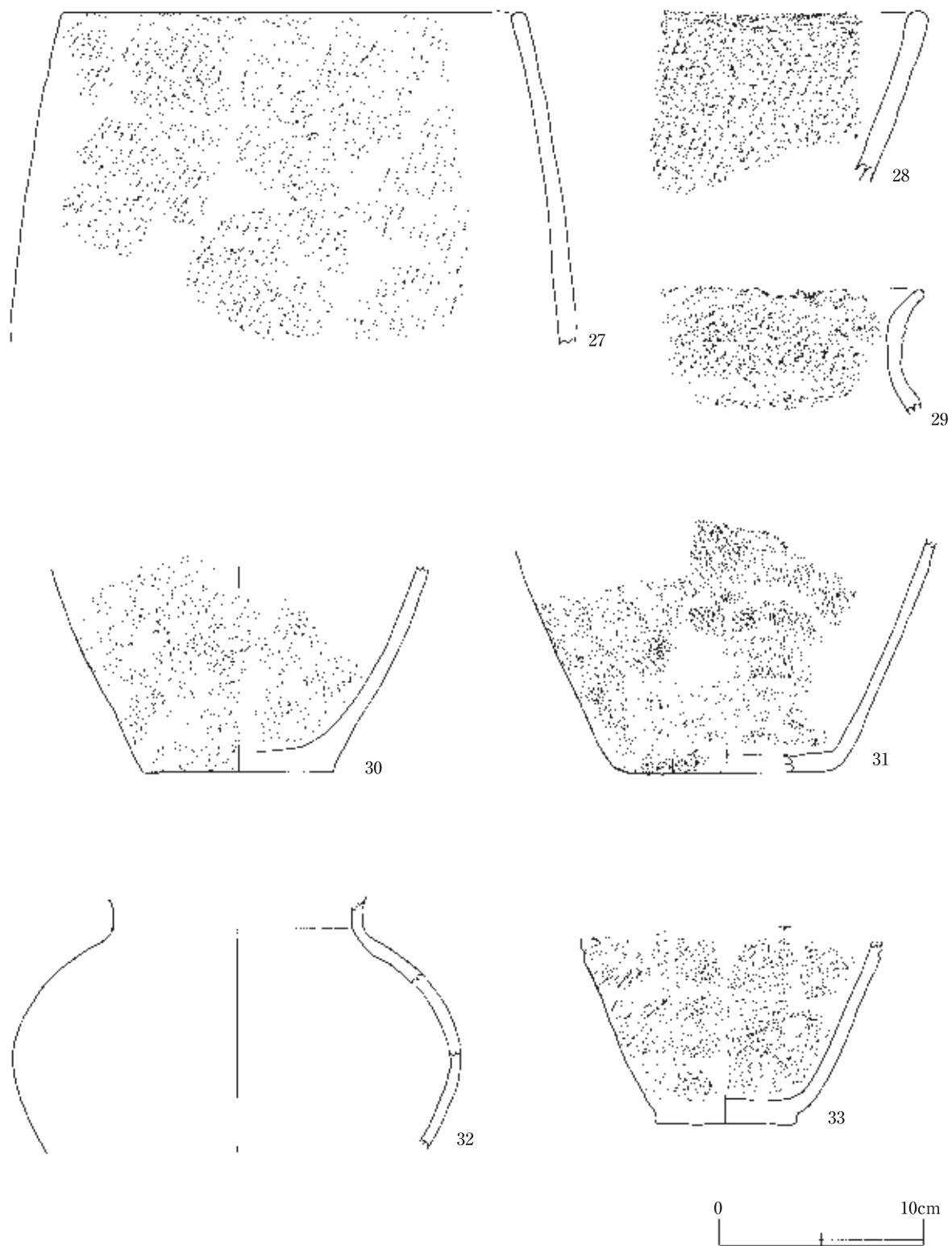
第80図 SK365・367



第81図 遺構外出土遺物(1)



第82図 遺構外出土遺物(2)



第83図 遺構外出土遺物(3)

Ⅲ群 縄文時代晚期の土器 (16~26)

口縁部に羊歯縄文やそれが列点化した文様や平行沈線が施され、体部には雲形文が施されるもの。鉢、浅鉢、壺がある。大洞B C ~ C1式に比定できる土器であるが、24・25は雲形文が簡素化されていて、26には工字文が見られ大洞C 2式に比定される。

IV群 その他の縄文土器を一括した (27~33)。多くは地文に縄文を施すのみで詳細な時期は不明であるが、厚手のものは縄文時代中期中葉、薄手のものは中期末葉～後期初頭および晚期中葉頃の土器と想定でき、これらは前記した各群に比定している。

(2) 石器 (第84~88図)

石鏸 形態から5類に分類した。1類：凹基無茎形 (34~36)、2類：凸基無茎形 (37)、3類：凸基有茎形 (38~48)、4類：柳葉形 (49~54)、5類：その他 (55) である。

石槍 篦状石器と分別が難しいが、先端部の違いにより形態から4類に分類した。

1類 尖頭部・基部とも尖り、幅が狭く断面形が凸レンズ状を呈するもの (56・57)。

2類 基部が丸みをもち、表裏とも押圧剥離が加えられ、断面形が凸レンズ状を呈するもの (58・59)。

3類 尖頭部のみ丁寧に調整し、基部は部分的な調整のもの (60・61)。

削器 大小の剥片の側縁に連続的な二次調整によって刃部を作出した石器で、二次調整は片面からだけのものが圧倒的に多いが刃部の形状などから3類に分類した。

1類 細長くて分厚い剥片の両側縁に急角度の刃部を作出したもの (62)。

2類 細長くて薄い剥片の両側縁に刃部を作出したもの (63~65)。

3類 不整な橢円形・円形を呈する剥片の側縁に弧状の刃部を作出したもの (66)。

搔器 分厚い剥片に片面調整による急角度の刃部を作出したもので2類に分類した。

1類 不整な橢円形・円形を呈する剥片の側縁に刃部を作出したもの (67)。

2類 細長い剥片の両側縁に刃部を作出したもの (68・69)。

石匙 両側縁から抉りを入れてつまみ部を作出し、片面からの加撃によって刃部が作られた石器で器中軸線あるいは刃部（側縁）と、つまみの中軸線の交わる角度によって3類に分類した。1類：縦型 (70~73)、2類：横型 (74~77) 3類：斜型 (78)。

石錐 形態と調整技法から2類に分類した。

1類 柳葉形の剥片に二次調整を両側縁の片面から施したもの (79)。

2類 一端が細くなる剥片に二次調整を両側縁の両面から施したもの (80~82)。

箒状石器 平面形が楔形あるいは短冊形・小判形などの各種のいわゆる「へら」状を呈し、刃部が作出されたもので、器中軸線で左右対称となり断面形は凸レンズ状を呈する (83)。

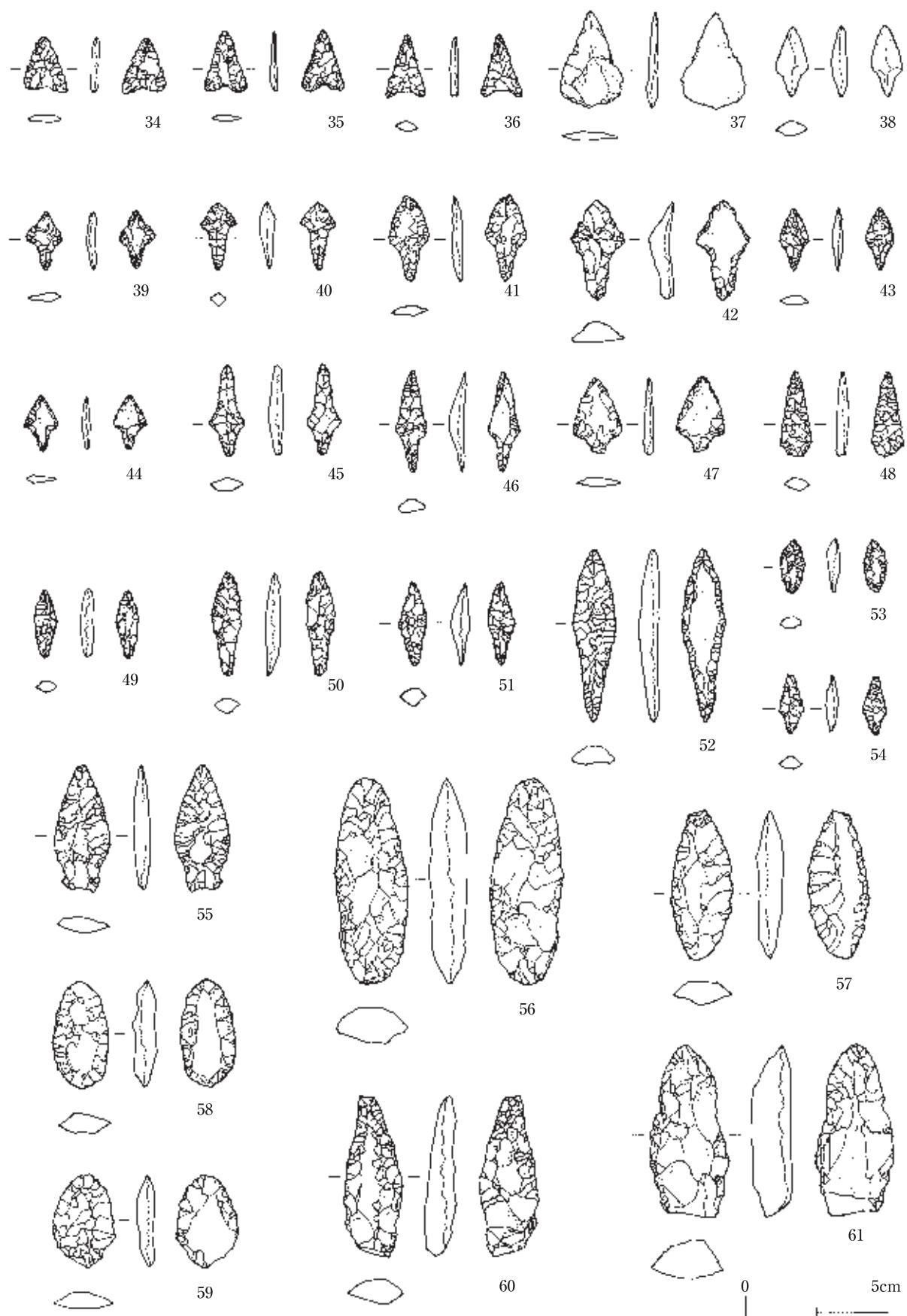
その他の剥片石器として、嘴状石器 (84) や異形石器 (85・86) が若干出土した。

打製石斧 磔あるいは大形の剥片を素材とし粗い剥離と敲打によって刃部を作出したものである (87)。

磨製石斧 磔を打撃・研磨して製作したもので、欠損品がほとんどである (88~92)。

凹石 磔材の面に敲打による凹みを有するもので、一定量出土したが磨石など他の礫石器からの転用が多い (93)。

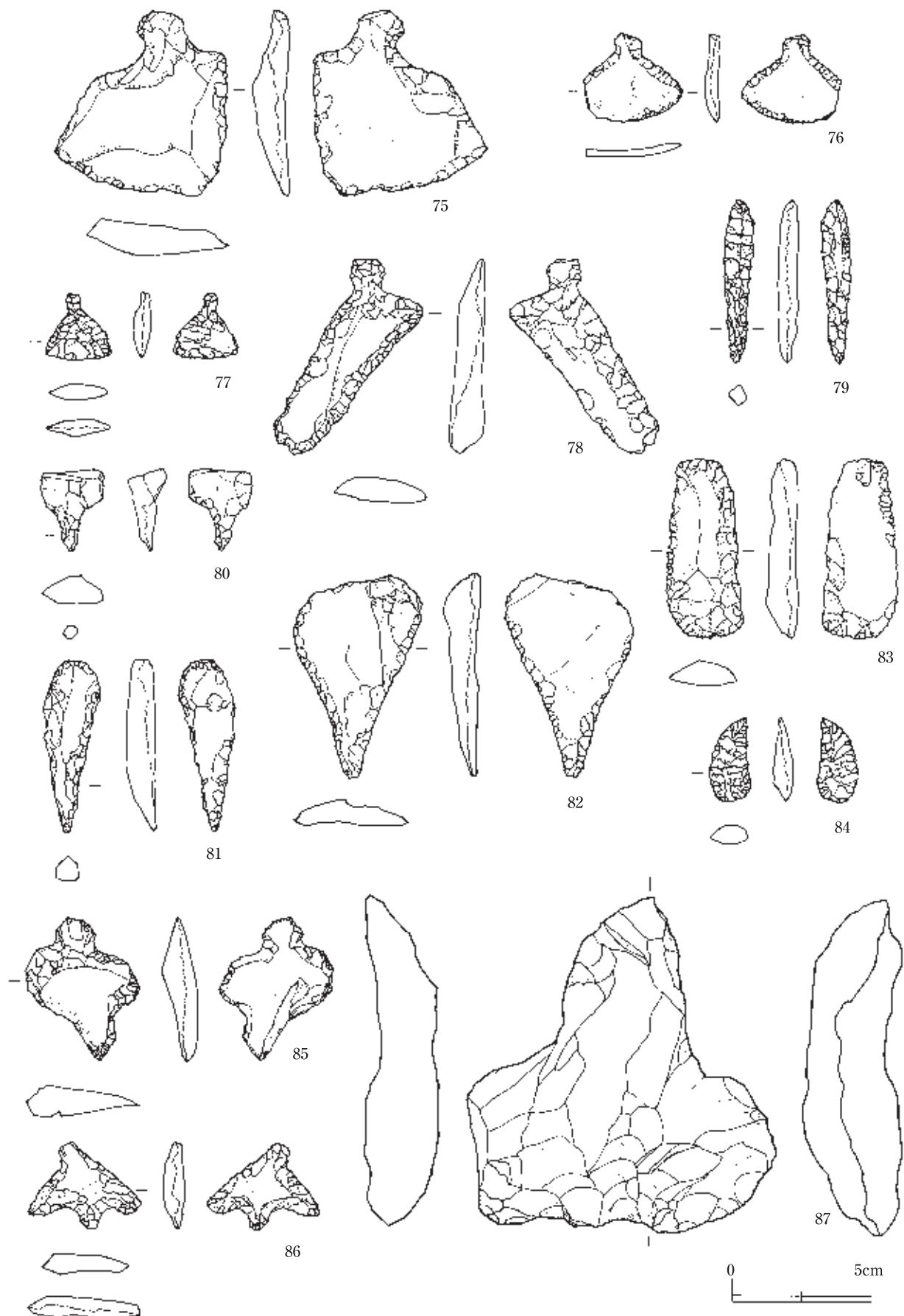
磨石 磔材の表面の全部又は一部が磨られているものである。



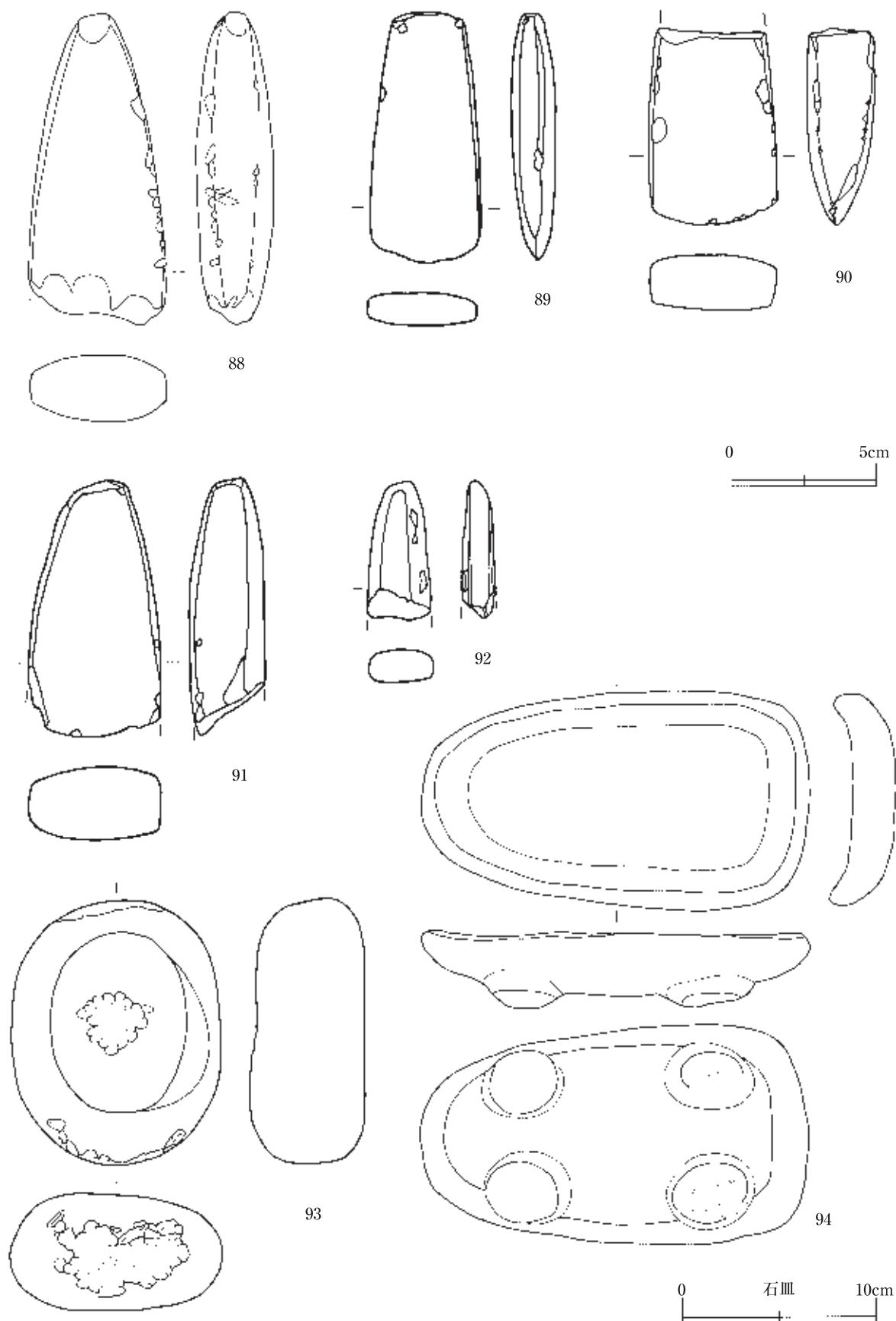
第84図 遺構外出土遺物(4)



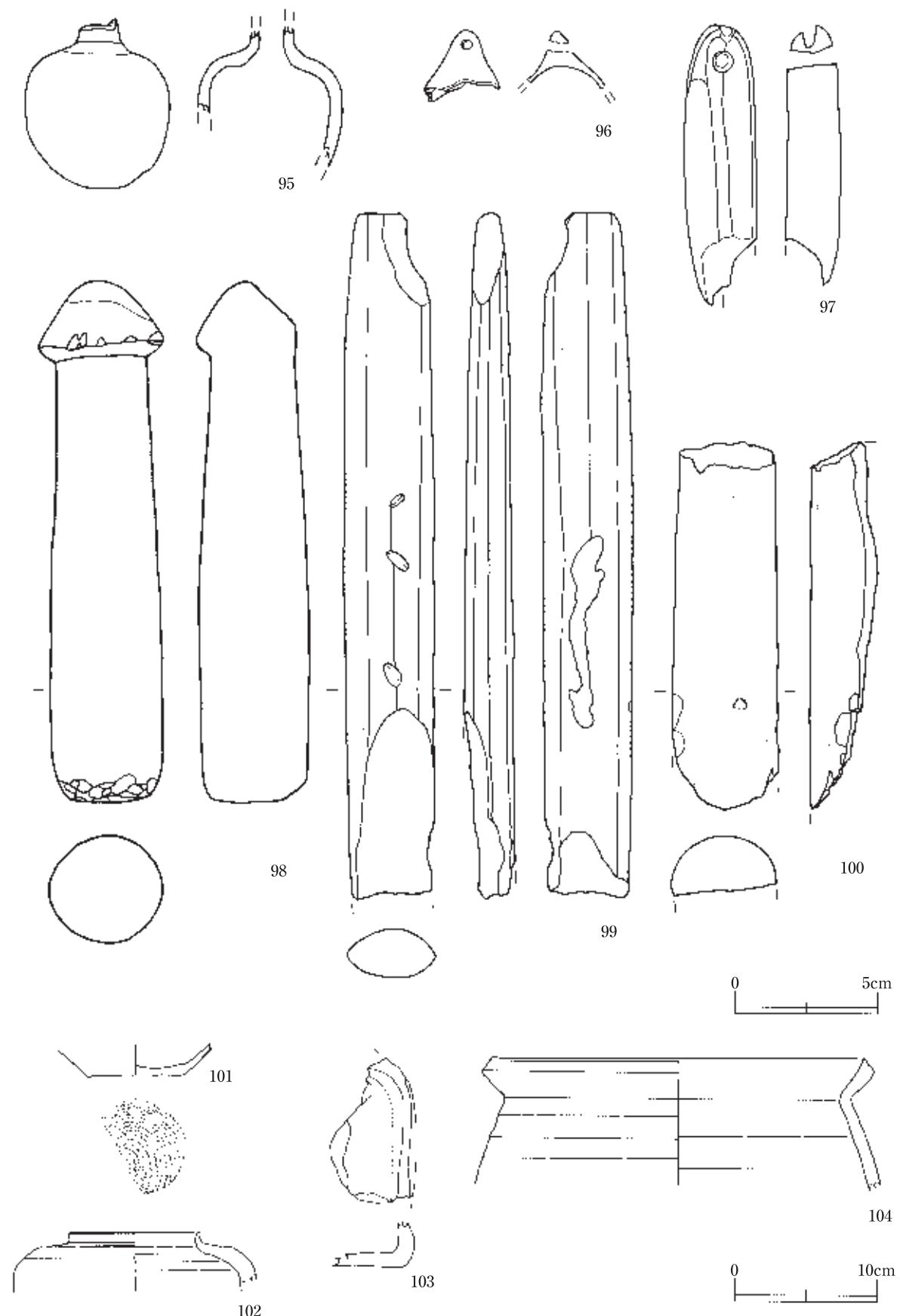
第85図 遺構外出土遺物(5)



第86図 遺構外出土遺物(6)



第87図 遺構外出土遺物(7)



第88図 遺構外出土遺物(8)

石皿 大形の板状礫の上面にきれいに使用面が縁取りされ、下面に脚がつくなっている（94）。

（3）土製品（第88図）

ミニチュア土器（95）のほか、鐸形土製品（96）・三角土製品・耳飾りが出土した。

（4）石製品（第88図）

有孔石製品（97）、石棒（98）、石刀・石剣類（99・100）が出土した。

2 平安時代の出土遺物

（1）須恵器（第88・89図）

須恵器は壺（101）・壺（102）・甕（105～109）が若干量出土した。また硯（103）も出土した。

（2）土師器（第88図）

土師器は壺・甕（104）が出土した。

3 中世以降の出土遺物

（1）輸入陶磁器（第89図）

中世初期の遺物としては福建省産の白磁碗IV類およびV類と思われる破片（111・112）が若干と、龍泉窯系青磁碗I 1類の破片が出土した。また中世後期の明代染付皿の破片（113）も出土した。

（2）国産陶磁器（第89図）

中世の遺物としては、須恵器系中世陶器の擂鉢破片（110、Ⅲ期頃か）のほか、壺甕類の破片が数点出土した。

近世初期の遺物として、鉄絵の肥前系陶器（絵唐津）の大皿（115・116）や絵志野の皿（117）が少數ながら破片で出土した。ほかに砂目積みの肥前系陶器溝縁皿（114）なども出土した。また芥子面（118）も出土した。

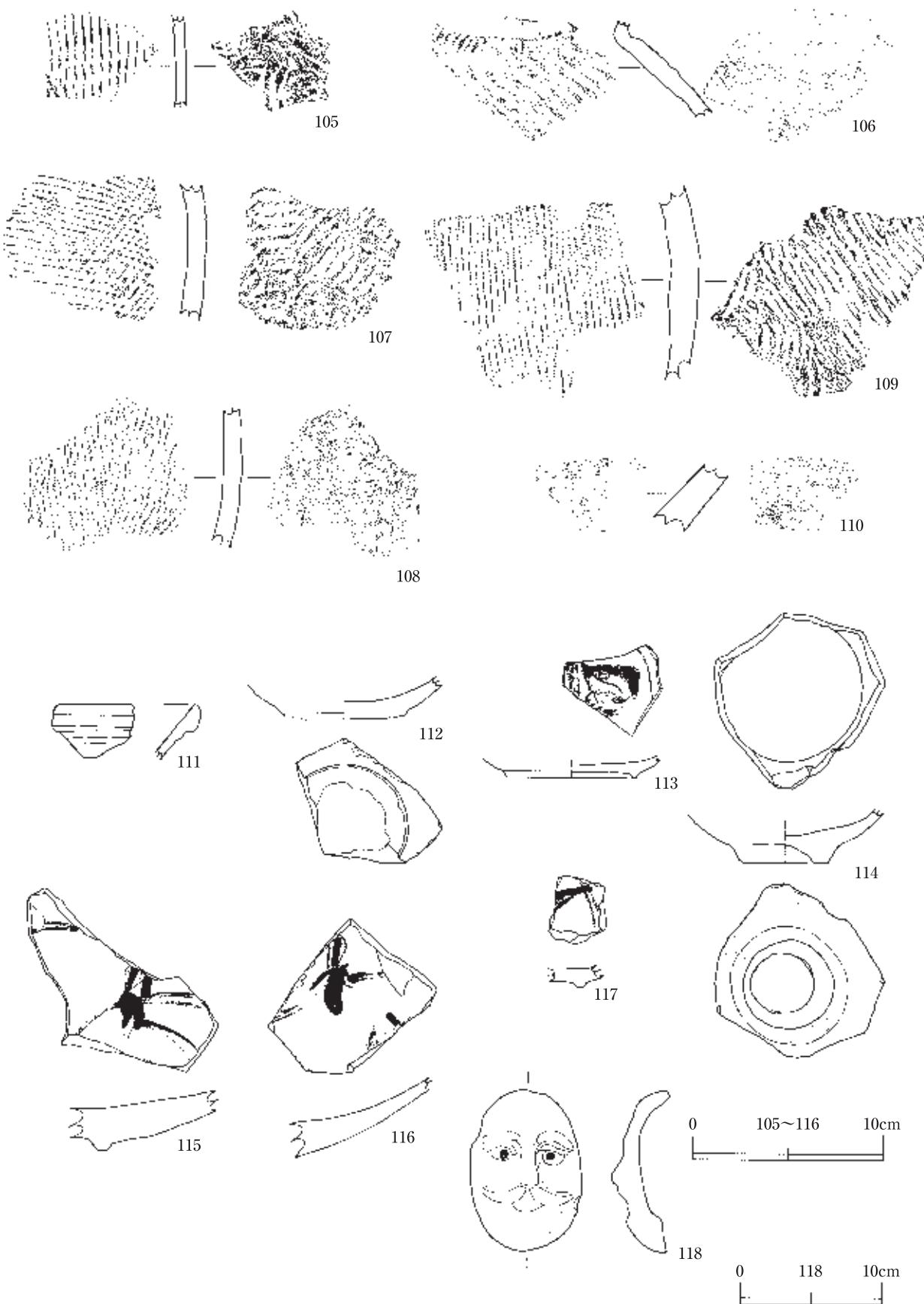
（3）金属製品（第90図）

中世渡来銭の開元通寶（119～112）・永樂通寶（123）・元豊通寶（124～126）・元祐通寶（127・128）・宣德通寶（129）および無文銭（130）が出土した。また近世の寛永通寶（131～138）が複数点出土した。

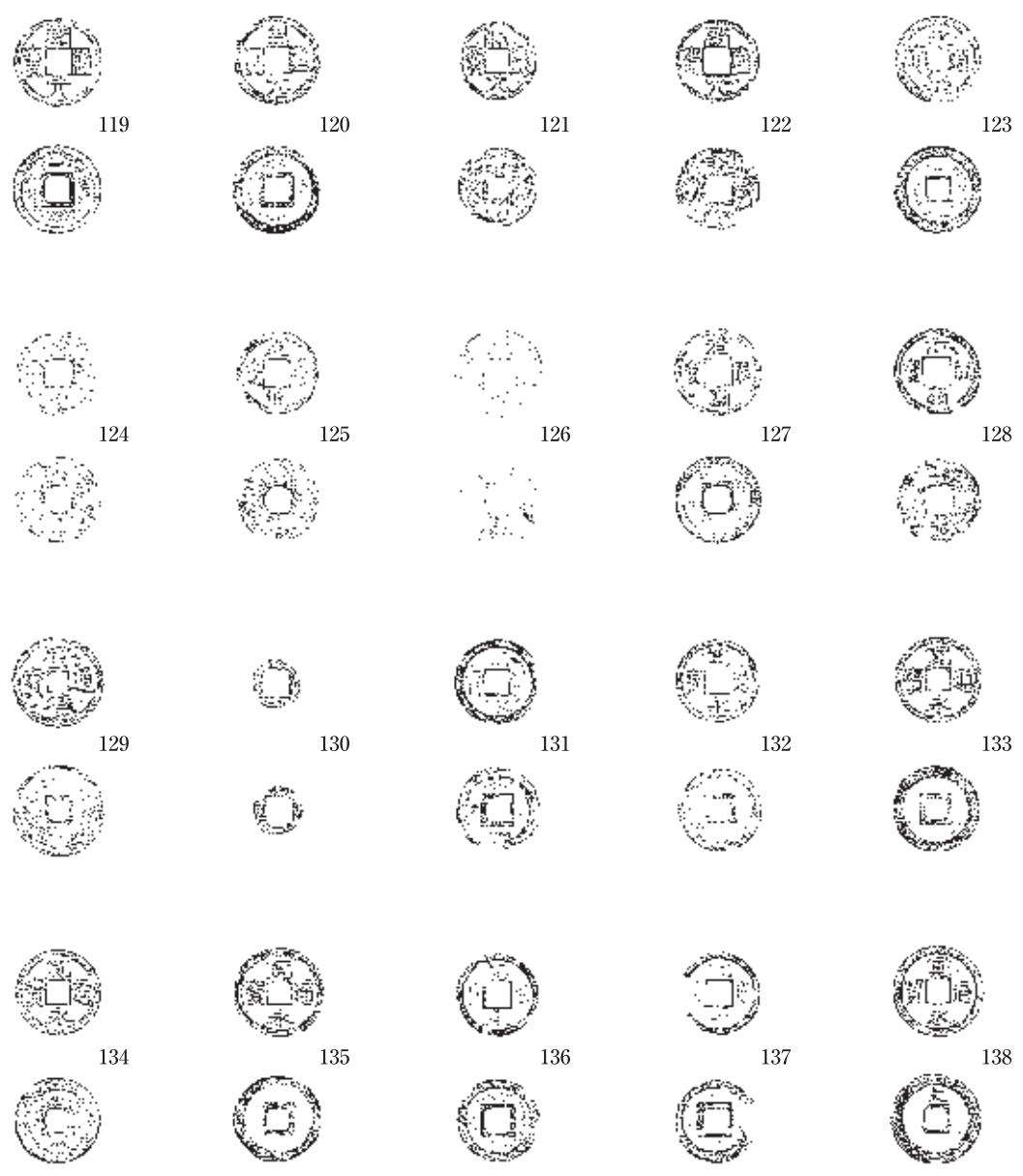
その他の金属製品として、近世と思われるキセルや鉄釘などが少量ながら出土した。また時代不詳であるが鉄滓も出土した。

（4）木製品

遺構外を中心に木製品が若干量出土したが、多くは部材片で詳細は不明である。



第89図 遺構外出土遺物(9)



0 5cm

第90図 遺構外出土遺物(10)

第3章 自然科学的分析

第1節 中屋敷II遺跡から出土した木材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田県仙北郡美郷町土崎に所在する中屋敷II遺跡は、真昼川や釜淵川の形成した複合扇状地の扇端部付近に位置する。今回の発掘調査により、縄文時代中期の竪穴住居跡、埋設遺構、土坑、平安時代と考えられる竪穴状遺構等が検出され、これらの遺構からは土器、石器等の遺物が出土している。

今回の分析調査では、出土した木材試料の放射性炭素年代測定を行い、各遺構の年代に関する資料を得る。また、樹種同定を併せて実施し、木材利用や古植生に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、各遺構から出土した木材13点（試料番号1～13）である。このうち、試料番号1,3,5～7の5点は炭化材であった。年代測定は、試料番号1～10の10点について行い、樹種同定は全点を対象とする。年代測定を行う試料については、室内作業で少量の木片を採取して樹種同定試料とし、残った全量を年代測定用試料とした。

2. 方法

（1）放射性炭素年代測定

測定は、加速器質量分析法（AMS法）で行い、放射性炭素の半減期はLIBBYの5568年を使用する。測定については、株式会社加速器分析研究所が行った。

（2）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を、第2表に示す。試料の測定年代値（補正年代値）は、SI1034出土炭化材が1290BP、SI1520出土炭化材が650BP、SI2089出土炭化材が3880BP、SKP702炭化材が2210BP、SK1050出土炭化材が4020BP、SI2117出土炭化材が3980BP、SK18出土炭化材が3490BP、RW780木材が4260BP、RW4木材が1770BP、SKP533木材が2120BPの値を示す。

一方、木材の樹種は、試料番号2が散孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、保存状態が悪く種類の同定には至らなかった。その他の試料は、いずれも落葉広葉樹で、3種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・サクラ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

第2表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

番号	遺構	出土位置・層位	質	樹種	測定年代(BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代(BP)	Code.No.
1	SI1034	かまと内 LI42	炭化材	クリ	1340±30	-31.78±1.11	1290±30	IAAA-11710
2	SI1520	炉内部 LQ37	生木	広葉樹(散孔材)	730±30	-34.95±0.87	650±30	IAAA-11711
3	SI2089	埋土中LP39	炭化材	クリ	3880±30	-25.63±0.92	3880±30	IAAA-11712
4	SKP702	(柱材) MK49	生木	コナラ属 コナラ亜属 コナラ節	2230±30	-27.95±1.04	2210±30	IAAA-11713
5	SK1050	覆土中 II層LK44	炭化材	クリ	4040±30	-27.47±1.08	4020±30	IAAA-11714
6	SI2117	焼土(底部) LQ39	炭化材	クリ	4020±30	-29.17±1.21	3980±30	IAAA-11715
7	SK18	II層(底部) LD25	炭化材	クリ	3510±30	-27.35±0.98	3490±30	IAAA-11716
8	RW780	河道跡木材MI62	生木	コナラ属 コナラ亜属 コナラ節	4280±30	-28.20±1.20	4260±30	IAAA-11717
9	RW4	河道跡木材	生木	サクラ	1800±30	-28.96±1.09	1770±30	IAAA-11718
10	SKP533	(柱材) MG49	生木	コナラ属 コナラ亜属 コナラ節	2130±30	-26.35±0.87	2120±30	IAAA-11719
11	SKP504	柱材	生木	コナラ属 コナラ亜属 コナラ節	—	—	—	—
12	SKP534	柱材	生木	コナラ属 コナラ亜属 コナラ節	—	—	—	—
13	SKP747	柱材	生木	クリ	—	—	—	—

1) 測定は、加速器質量分析法(AMS法)による。

2) 年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代は $\delta^{13}\text{C}$ の値を基に同位体効果による年代誤差を補正した値。

3) 放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科
環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。
- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属
環孔材で、孔圈部は1～4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。
- ・サクラ属 (*Prunus*) バラ科
散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った橢円形、単独または2～8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

4. 考察

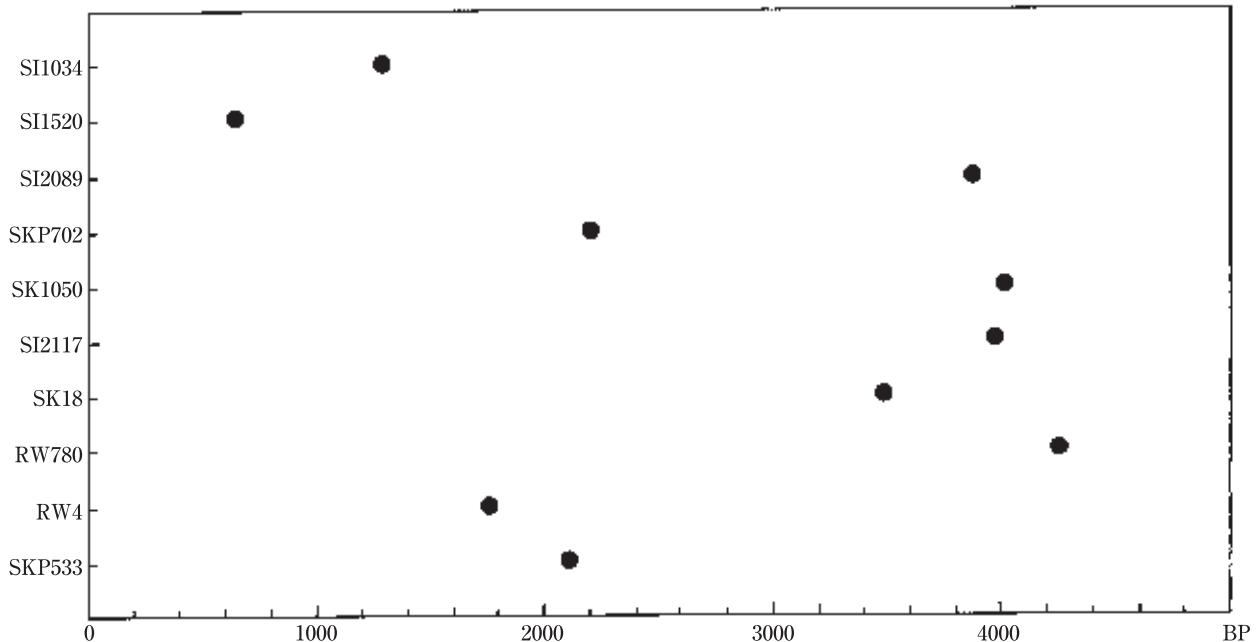
(1) 各遺構の年代

年代測定結果は、730BP(補正年代650BP)～4280BP(補正年代4260BP)であり、縄文時代～中世までの年代が得られている。各試料で得られた年代測定結果の比較を第91図に示す。

縄文時代の年代については、キーリ・武藤(1982)によって放射性炭素年代の測定値(未補正值)が集成されている。その結果では、東北地方の年代資料が少ないが、試料番号3・5・6・8は縄文時代中期～後期頃の年代に相当する。また、試料番号7は縄文時代後期、試料番号4が縄文時代晚期の年代に相当する。これらの遺構は、縄文時代中期～晚期に構築・使用された可能性があり、各遺構の出土遺物の考古学的所見ともおおむね矛盾しない。一方、試料番号10については、弥生時代前期の年代に相当するが、測定誤差も含めて考慮すれば、縄文時代晚期の可能性もある。

この他の3点(試料番号1・2・9)については、いずれも歴年代に相当する年代値を示す。これらの試料については、Stuiver, M. et al, (1998)による較正曲線を用いて、歴年較正を行った。

その結果、試料番号1は中央値がAD690～760で、誤差範囲も含めるとAD685～770となる。試料番号2は中央値がAD1300～1380で、誤差範囲ではAD1295～1385となる。試料番号9は中央値がAD245～315



第91図 放射性炭素年代測定結果

で、誤差範囲ではAD240～320となる。これらの結果から、試料番号1は7～8世紀頃、試料番号2が14世紀代、試料番号9が3世紀～4世紀前半頃と推定される。ただし、木材の場合には、古材の再利用や樹齢による誤差により、実際の推定年代とは異なる年代が得られることがある。

今後、各遺構から出土した遺物の状況等も含めて、遺構の年代について検討したい。

(2) 木材利用

各遺構から出土した木材は、試料番号1・2・6が燃料材、試料番号4・10～13が柱材と考えられる。また、試料番号3については構築材の一部の可能性もあるが、詳細は不明である。試料番号8・9については、自然木の可能性がある。

これらの木材には、合計3種類が認められ、クリとコナラ節が多い。13点中10点について年代測定を行っているが、年代による種類構成の違いなどは認められない。このうち、クリとコナラ節は、重硬で強度の高い材質を有し、クリでは耐朽性も高い。これらのことから、構築材や柱材としては適材と考えられ、材質を考慮した木材利用が推定される。これらの種類は、人里周辺の二次林等に一般的な種類であり、自然木と考えられる木材にもコナラ節が認められていることから、本遺跡周辺で入手が容易であったことが推定される。またそのことが、燃料材としても利用されている背景に考えられる。秋田県内では、これまでの調査で縄文時代の構築材にクリの多い結果が得られている（未公表資料）。また、コナラ節もクリと共によく利用されている種類であり、今回の結果と一致する。

今後、各遺構の出土遺物や木材の出土状況なども含めて、各時代時期の木材利用に関する検討をさらに行いたい。

引用文献

キーリ C. T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代、「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」，p.246-275. 雄山閣.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第4章　まとめ

調査の結果、縄文時代の遺構として竪穴住居跡12軒、土器埋設炉2基、配石遺構1基、土坑156基、土器埋設遺構19基、捨て場2か所、弥生時代の遺構として土坑1基、平安時代の遺構として竪穴住居跡1軒、土坑2基が検出された。

縄文時代の遺構のほとんどは、出土した遺物から縄文中期のもので、大半は調査区中央部のE区で検出された。12軒の竪穴住居は、炉埋設土器や住居内出土の土器から、いずれも中期末葉の大木9・10式期に属している。一方、土坑や土器埋設遺構は中期中葉の大木8a・8b式期から作られていて、後期、晩期にもわたっているが、それらの時期の竪穴住居跡は調査範囲内からは検出されていない。

中期末葉の竪穴住居跡や土坑はE区内に集中的に分布し、東西方向にもほとんど広がっていない。E区の南北両側は未調査区であるので竪穴住居の南北方向の広がりは不確かであるが、この時期の竪穴住居の広がりは、S N2505土器埋設石囲炉までを含めてもおよそ径60mの円形の範囲に収まっている。また、S I 1520とS I 1604はほぼ接しており、同時には存立し得ないが、これを除けば竪穴住居跡に重複は見られない。

竪穴住居はほぼ円形で、規模は長軸2m台がS I 1482・2013の2軒、3m台がS I 1373・1491・1520・2016・2023・2117の6軒、4m台がS I 1488・1604の2軒、5mを越すものがS I 2089・2578の2軒である。炉の特徴は、土器埋設炉が主体である。住居内からは炉の埋設土器のほかに土器及び石器類が多く出土し、中でもS I 1373竪穴住居は住居が廃絶された後の窪みに多量の土器を投棄したと考えられる。住居の部材と考えられる炭化材も覆土中に折り重なるように検出された。

住居の周辺には多くの土坑が密集して検出された。形態は円形及び橢円形が主で土坑墓と推定されるものもあるが、底部の特徴を見ると平坦なもの、摺り鉢状となるもの、凹凸があるものなどに類別できる。多くの形態が生み出された要因の一つとして考えられることに、①埋葬形態の相違 ②土坑の用途の違いが考えられる。

出土土器から構築された時期を推定すると次のようになる。

大木8a・8b式期：SK18・308・360・379・401・402・1337・2570

大木9・10式期：SK310・1207・1317・1378・1390・1393・1532・1538・1590・1593・2046・2116
・2127・2212

後期：SK363・390・393・976・1007・1560・1594

晩期：SK225・1105

弥生時代：SK92

また、土器は出土しなかったがSK1050が放射性炭素年代測定では $4,020 \pm 30$ で、中期末か後期初頭の年代である。

大木8a・8b式期の土坑は竪穴住居跡の分布域の南西側に分布する。大木9・10式期の土坑は14基のうち1基を除いて竪穴住居跡の分布とほぼ重なる位置に作られ、後期の土坑もそれら中期末葉の竪穴住居跡の分布に重なる傾向がある。

土器埋設遺構19基のうち出土土器から時期を推定できるものは11基あり、時期別に見ると次のようになる。

大木8a・8b式期：S R02・1439

大木9・10式期：S R01・301・2155・2600

後期：S R194・471・1490・2084

晩期：S R98

土器埋設遺構は多数の礫や石で固められた形状で、幼児が埋葬された墓と推定される。

これらと多数の土坑群と重ね合わせたとき、この周辺一帯は、中期中葉からの居住域であるとともに墓域となっていたと判断される。縄文時代中期中葉に比較的小規模の集落が形成され、その周辺域に墓域としての性格を有したこれらの遺構が残された。中期末葉に至って竪穴住居が増加し、墓域も形成されたと考えられる。

縄文時代にわたるその他の遺構として、捨て場がA区とE区、2か所で確認された。時期は、出土した土器からいずれも縄文中期及び晩期のものが多く、一部後期のものが少量含まれる。捨て場は、旧河川の縁辺にあり、河川の落ち込みで多量の遺物が出土した。川底から採取した材の樹種は、クリ、コナラ、サクラなど広葉樹であった。

宅地周りのB・D区は用水路部分のみが調査対象となった。攪乱を受けていて明確な遺構は検出されなかった。遺物は、晩期の土器と石器類が出土した。

平安時代には竪穴住居跡が1軒作られた。形態は長軸約4mの隅丸方形で、南東側にカマドが敷設されている。出土土器と住居床面近くから十和田a火山灰が検出されたことなどから、10世紀代に構築されたと考えられる。

近世と考えられる建物跡1棟がA区中央で検出された。柱穴周辺から肥前産唐津焼きなどの陶磁器も出土した。また、道路跡がA区1か所とE区北側1か所で確認された。いずれも絵図から近世以降（江戸末から明治）に属すると考えられ、旧土崎村野田街道と推定される。

以上のように、本遺跡は縄文時代中期中葉に人が居住を始め、中期末葉の時期に集落として最も充実した様相を示す。本遺跡の東3kmの丘陵上には一丈木遺跡、南南東1.5kmの扇状地には内村遺跡が中期の集落として存在する。中屋敷II遺跡はこれらと密接な関わりを持って営まれた。後期になると、住居は見られないが、土坑は残されているので、近隣に竪穴住居跡が作られているのであろう。晩期にはごくわずかに土坑と土器埋設遺構が残される。弥生時代にもごく短期間居住がなされたのであろうか。さらにその後、平安時代にも竪穴住居が残されている。近世には掘立柱建物を残した人々が居住して、周辺地域を結ぶ道路もこの地を通っていたことがうかがわれる。



空から見た中屋敷II遺跡（西から）



空から見た中屋敷II遺跡（真上から）



1 S I 1373 (南→)



2 S I 1373炉 (南西→)



1 S I 1482 (南→)



2 S I 1482炉 (南→)



1 S I 1488 (西→)



2 S I 1488炉 (西→)



1 S I 1491 爐（西→）



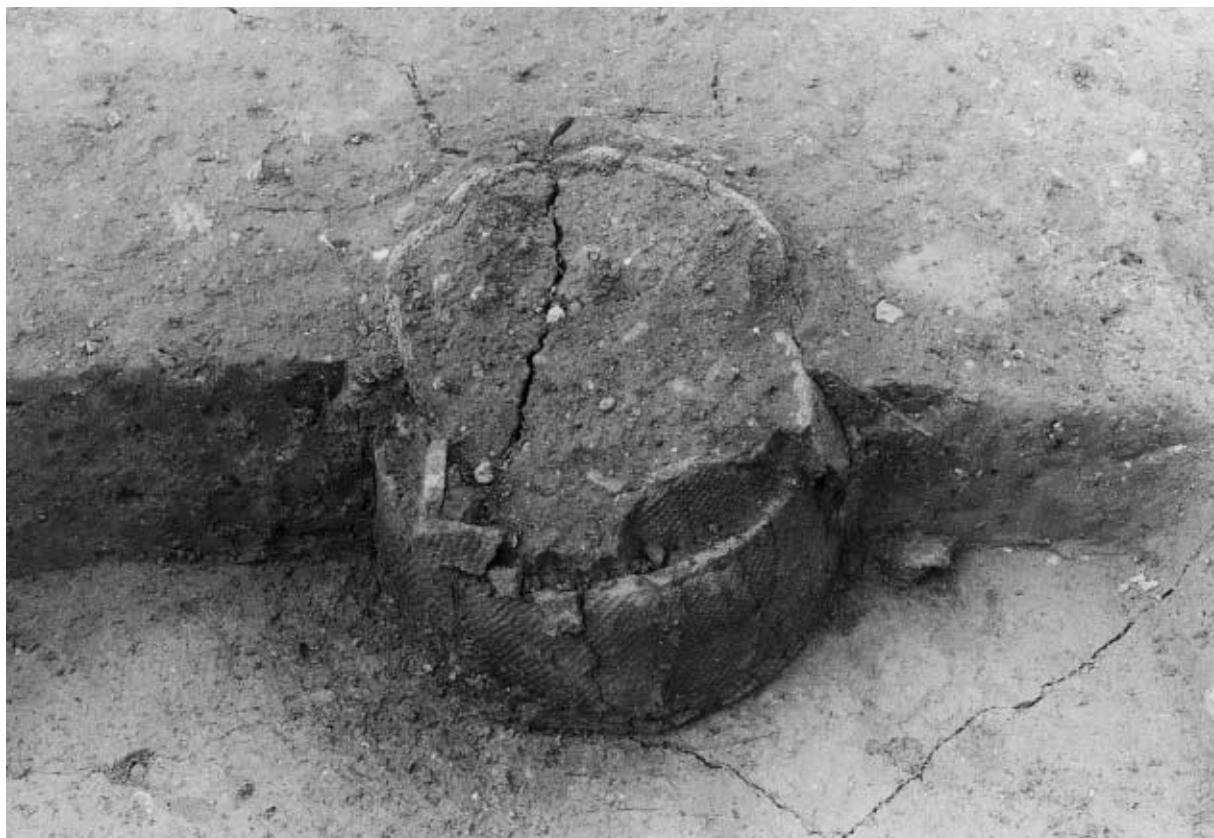
2 S I 1520 (北→)



1 S I 1604 (南→)



2 S I 1604炉 (北東→)



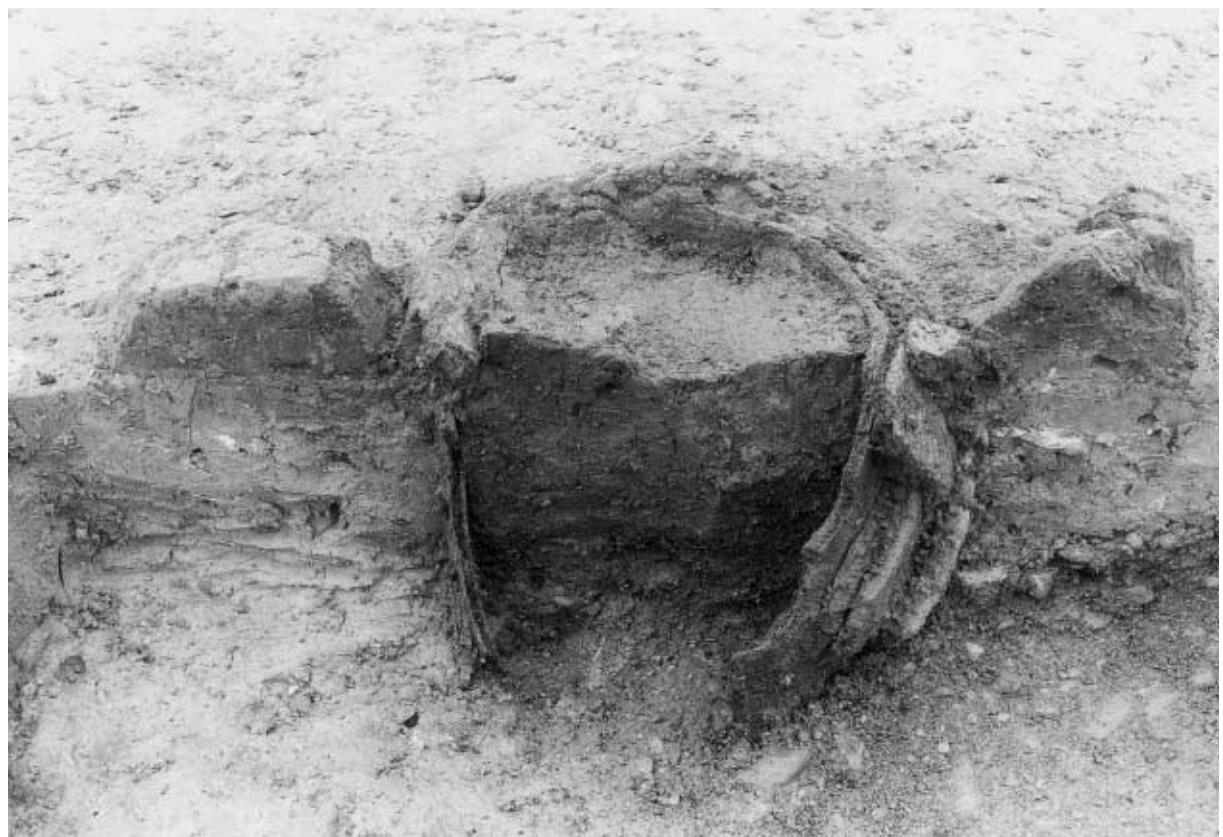
1 S I 2013炉（南東→）



2 S I 2016（南東→）



1 S I 2023 (東→)



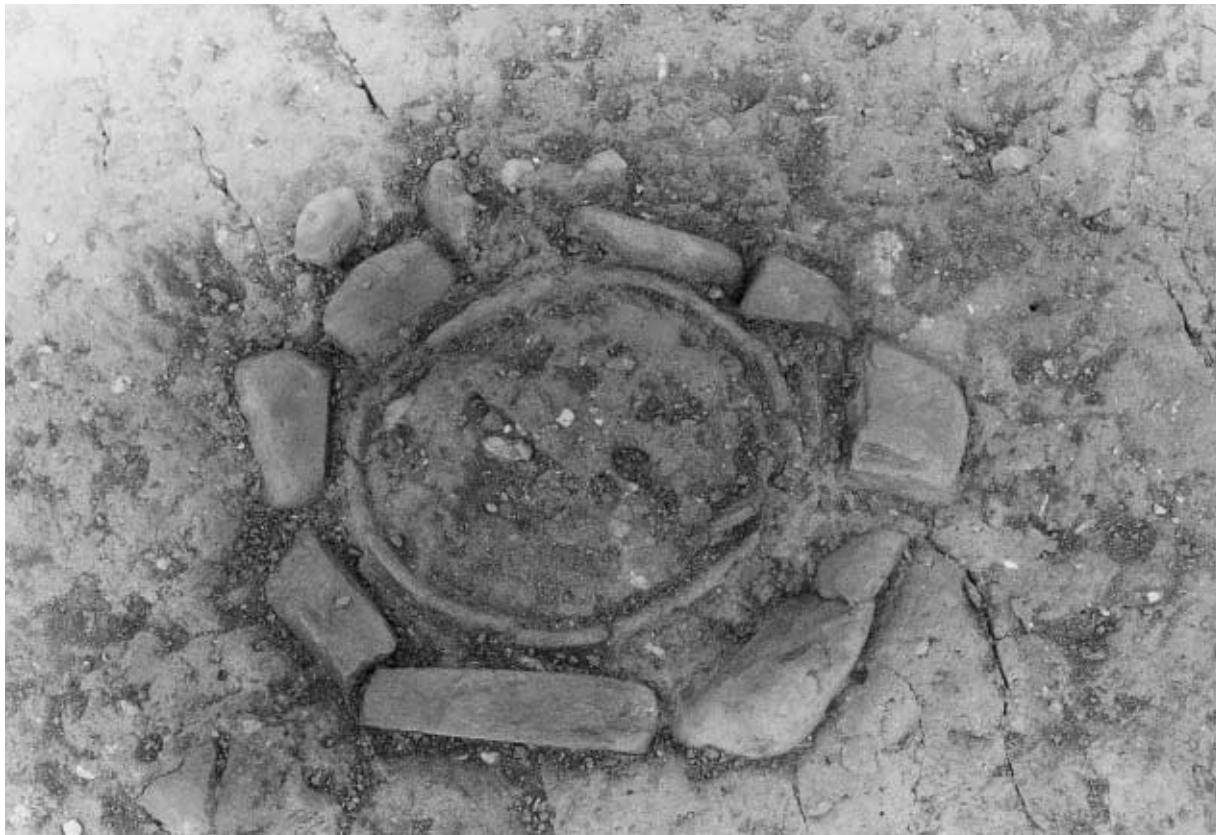
2 S I 2089 爐 (西→)



1 S I 2117 (南→)



2 S I 2578 炉 (東→)



1 S N2505 (西→)



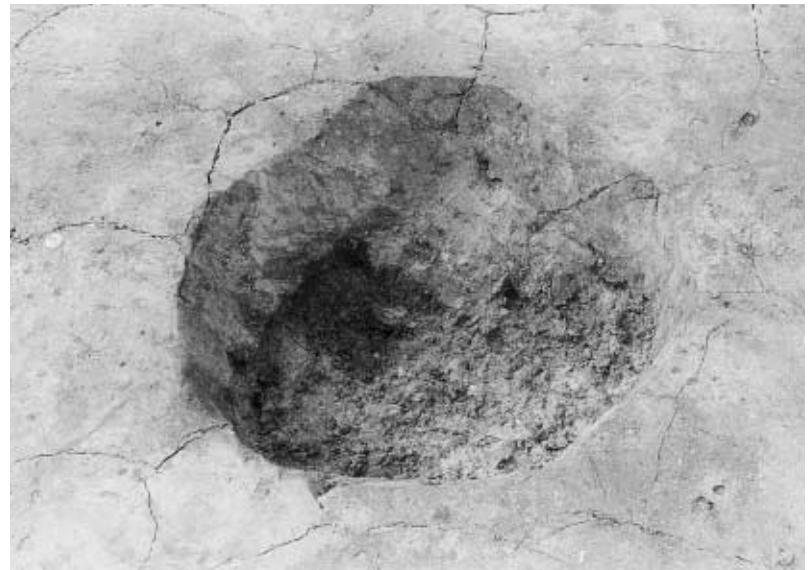
2 S N2505 (西→)



1 S Q2517 (西→)



2 SK18遺物出土狀況 (南西→)



1 SK148 (南→)



2 SK225 (西→)



3 SK310 (東→)



1 SK 349 (南西→)



2 SK 363 (西→)



3 SK 390 (南東→)



1 SK394 (北→)



2 SK461 (南東→)



3 SK615 (東→)



1 SK919 (北→)



2 SK948 (北→)



3 SK1004 (南→)

1 SK1007 (西→)

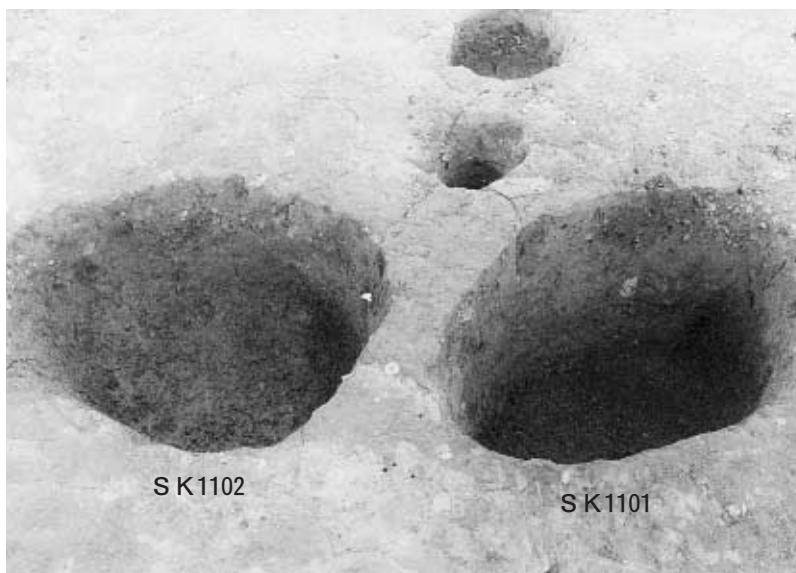


2 SK1050 (西→)



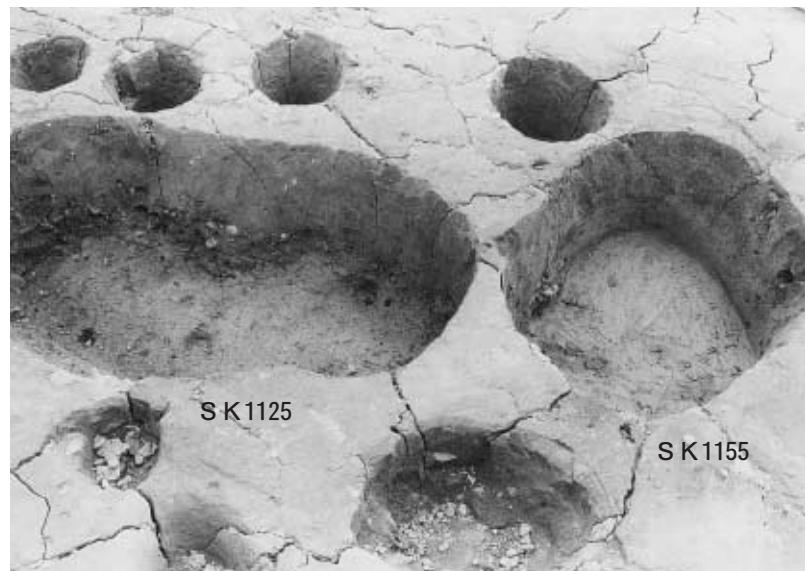
3 SK1100 (南西→)





1 SK1101・1102 (北→)





1 SK1155・1125 (北西→)



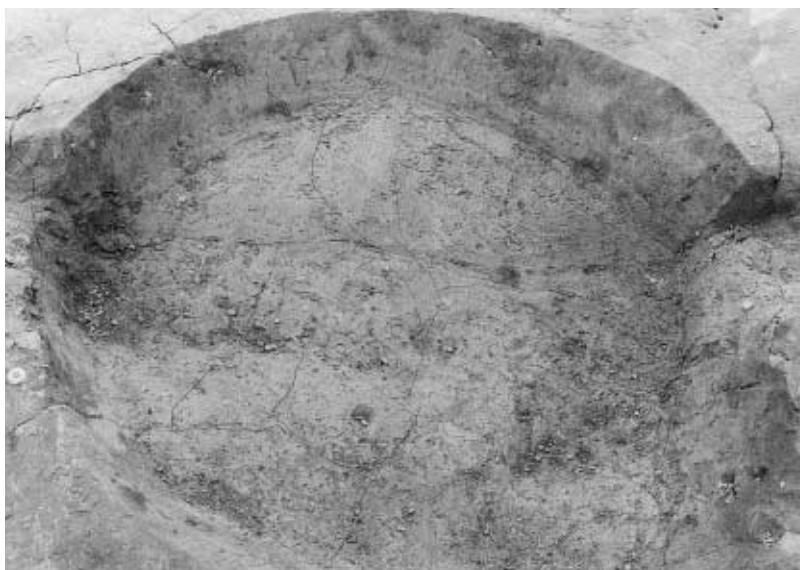
2 SK1145 (北→)



3 SK1161 (南→)



1 SK1207 (北→)



2 SK1223 (東→)



3 SK1229 (東→)

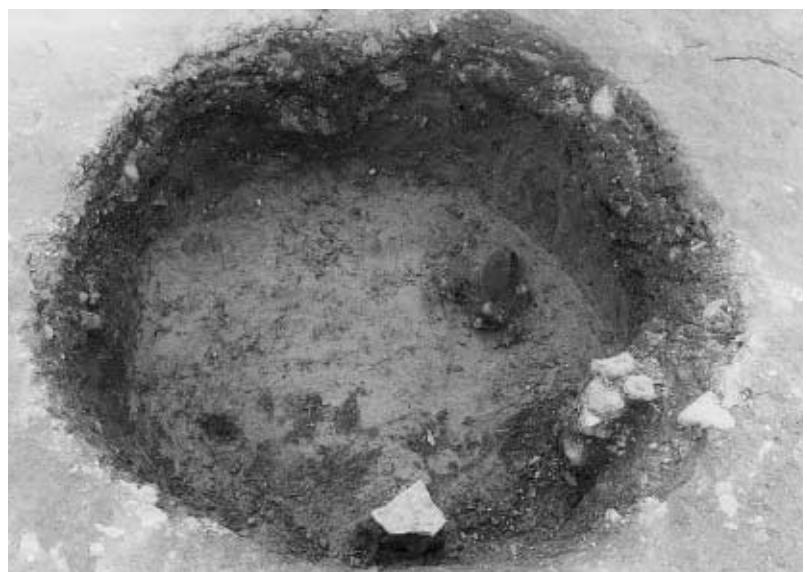
1 SK1231 (北→)

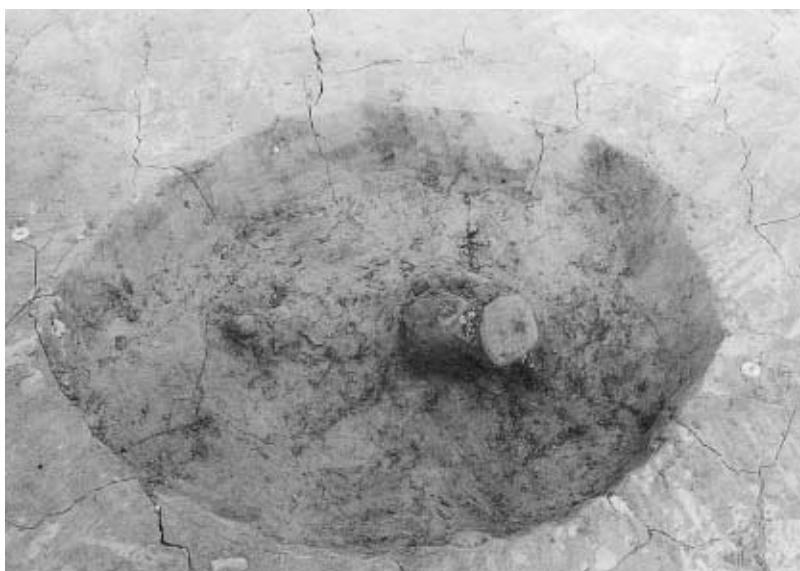


2 SK1277 (西→)



3 SK1333 (南→)





1 SK1334 (南西→)



2 SK1377 (南東→)

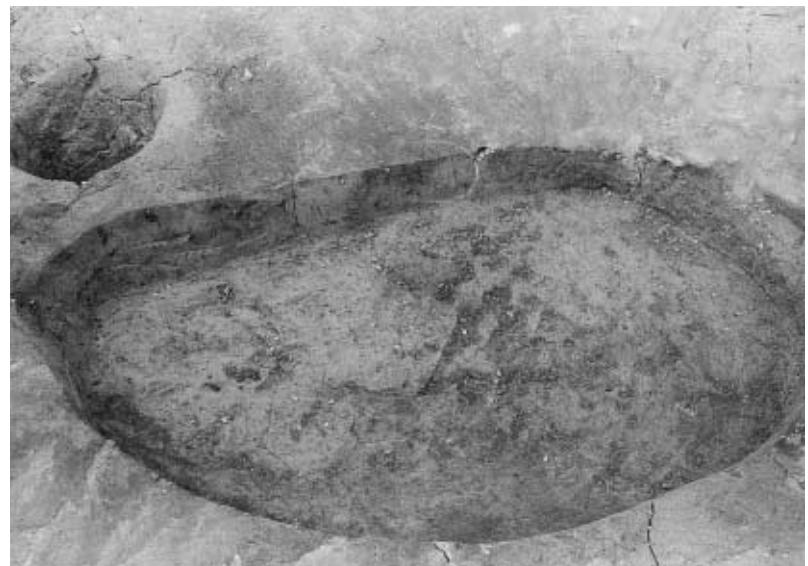


3 SK1378 (北→)

1 SK1379 (西→)



2 SK1392 (東→)



3 SK1416 (北→)





1 SK1426 (南西→)



2 SK1451 (北西→)



3 SK1457 (南東→)



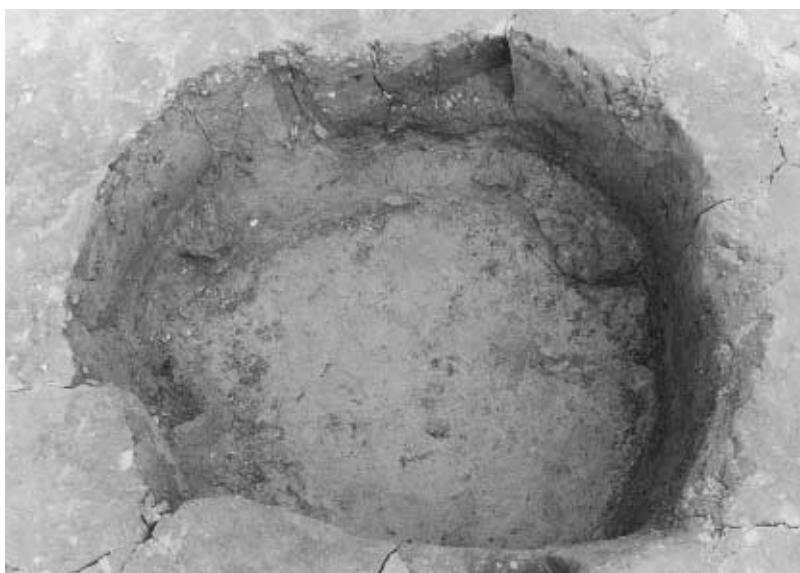
1 SK1526 (東→)



2 SK1532 (西→)



3 SK1539 (北西→)



1 SK1560 (南→)



2 SK2116 (北→)



3 SK2570 (北西→)



1 SR01 (南→)



2 SR98 (南→)



3 SR194 (南東→)



1 SR307 (西→)



2 SR452 (北→)



3 SR471 (北→)



1 SR1476 (西→)



2 SR1490 (東→)



3 SR2084 (東→)



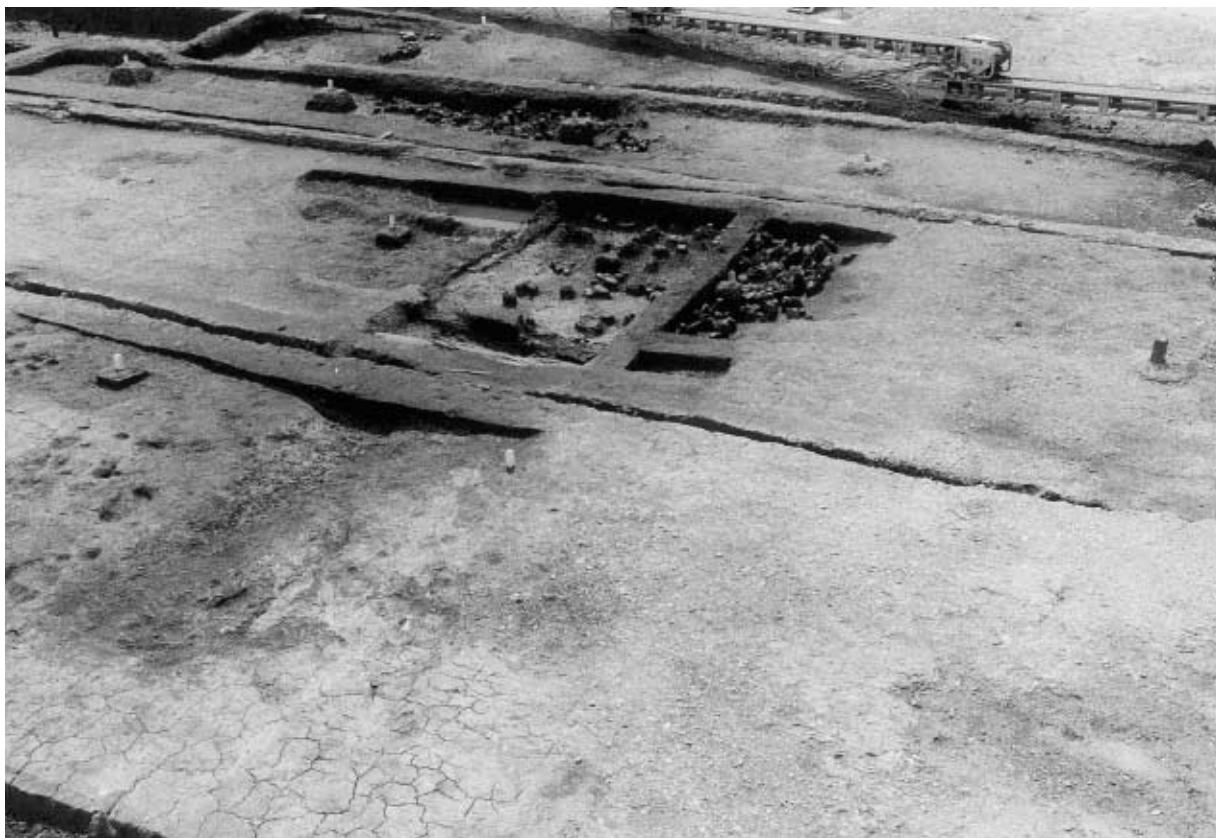
1 SR2155 (西→)



2 SR2600 (西→)



3 SR2600 (南西→)



1 ST 36 (北東→)



2 ST 36 (北→)



1 S T 36 (南西→)



2 S T 2090 (北→)



1 S I 1034 (北→)



2 SK 364・365 (西→)



S I 1373



S I 1373



S I 1482



S I 1482



S I 1482



S I 1488

遺構内出土土器



S I 1604



S I 2013



S I 2016



S I 2023



S N 2505



S N 2505

遺構内出土土器



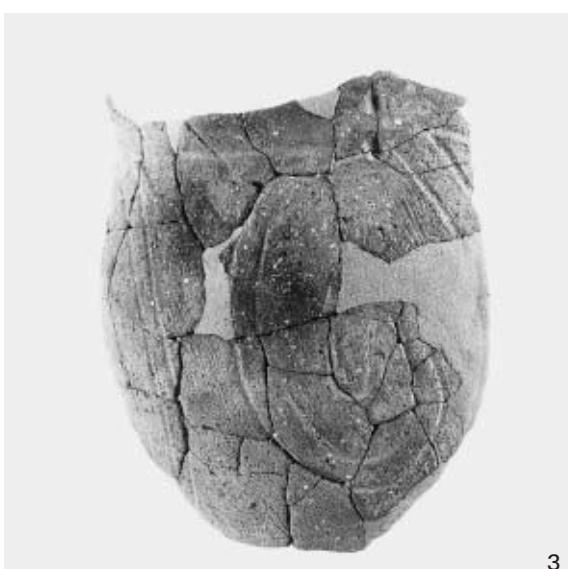
1

S K 310



2

S K 360



3

S K 363



4

S K 1007



5

S K 1390



6

S K 1538

遺構内出土土器



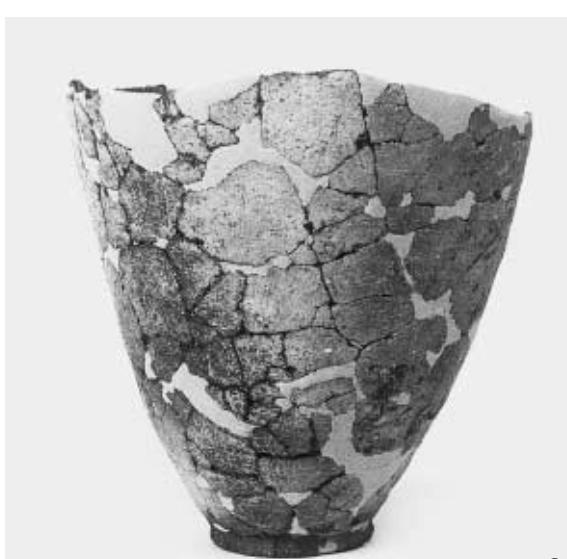
1

SR1



2

SR2



3

SR194



4

SR301



5

SR307



6

SR452

遺構内出土土器



S R471



S R1490



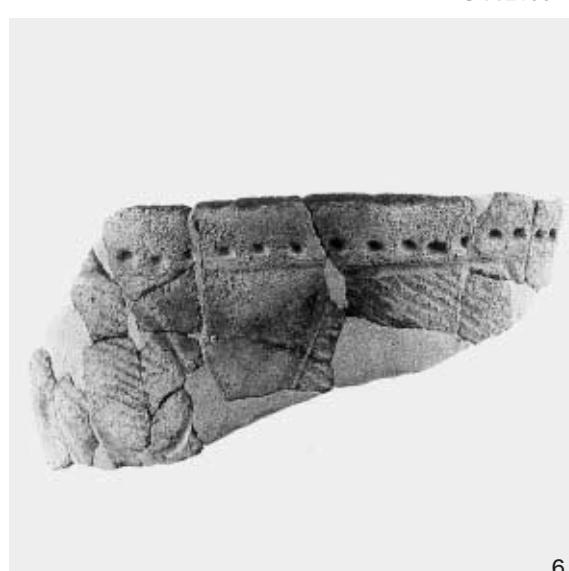
S R2084



S R2155



S R2600



S T36

遺構内出土土器



1

S T 36



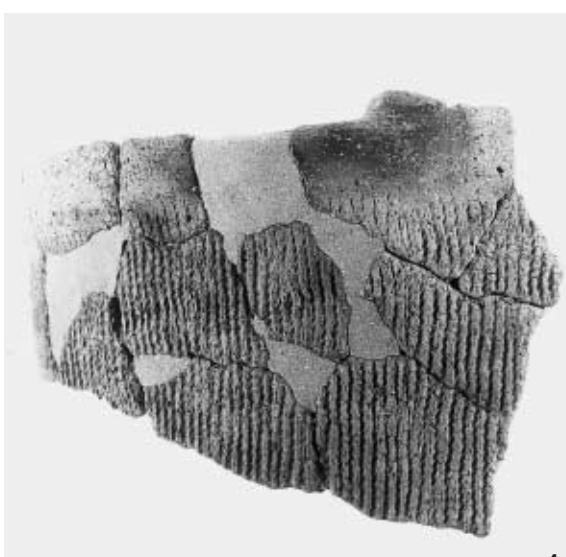
2

S T 36



3

S T 2090



4

S T 2090



5

S T 2090



6

S T 2090

遺構内出土土器



1

S T 2090



2

S I 1034



3

S I 1034

遺構内出土土器



1



2



3

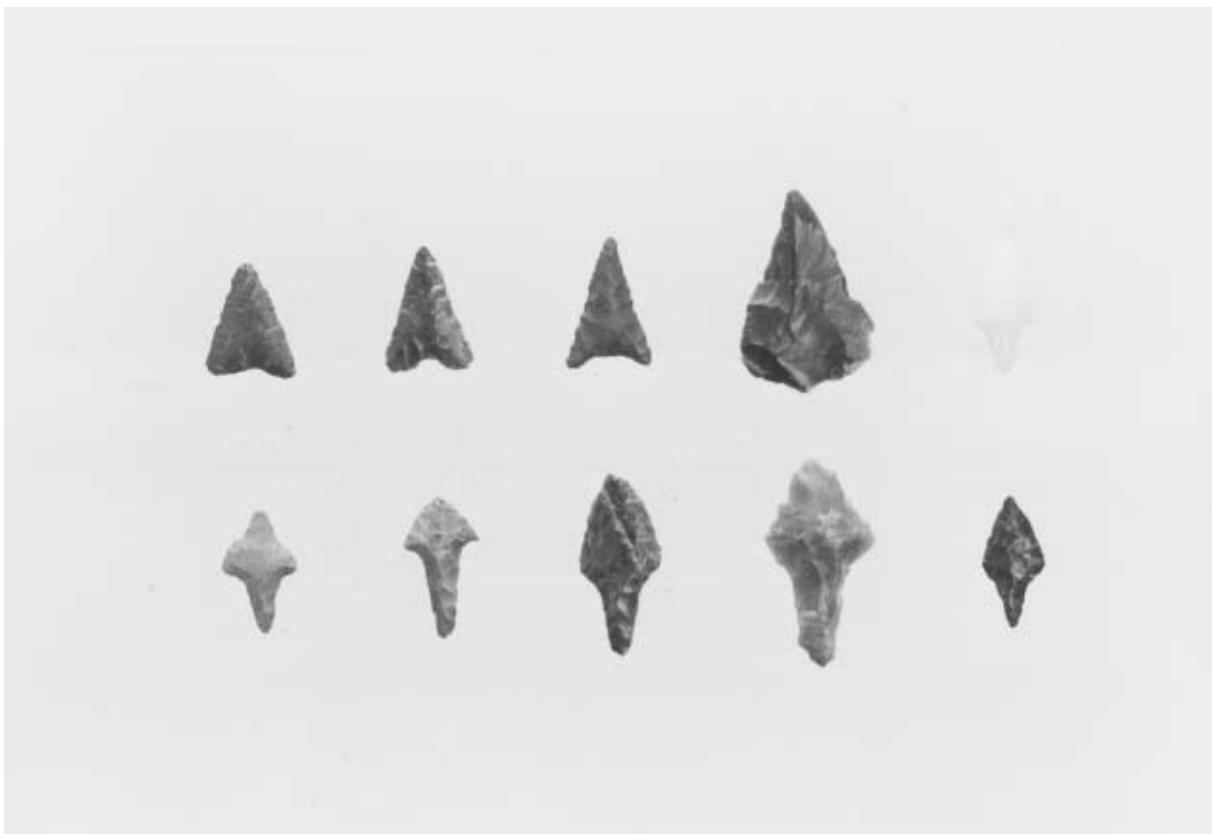


4



5

遺構外出土土器



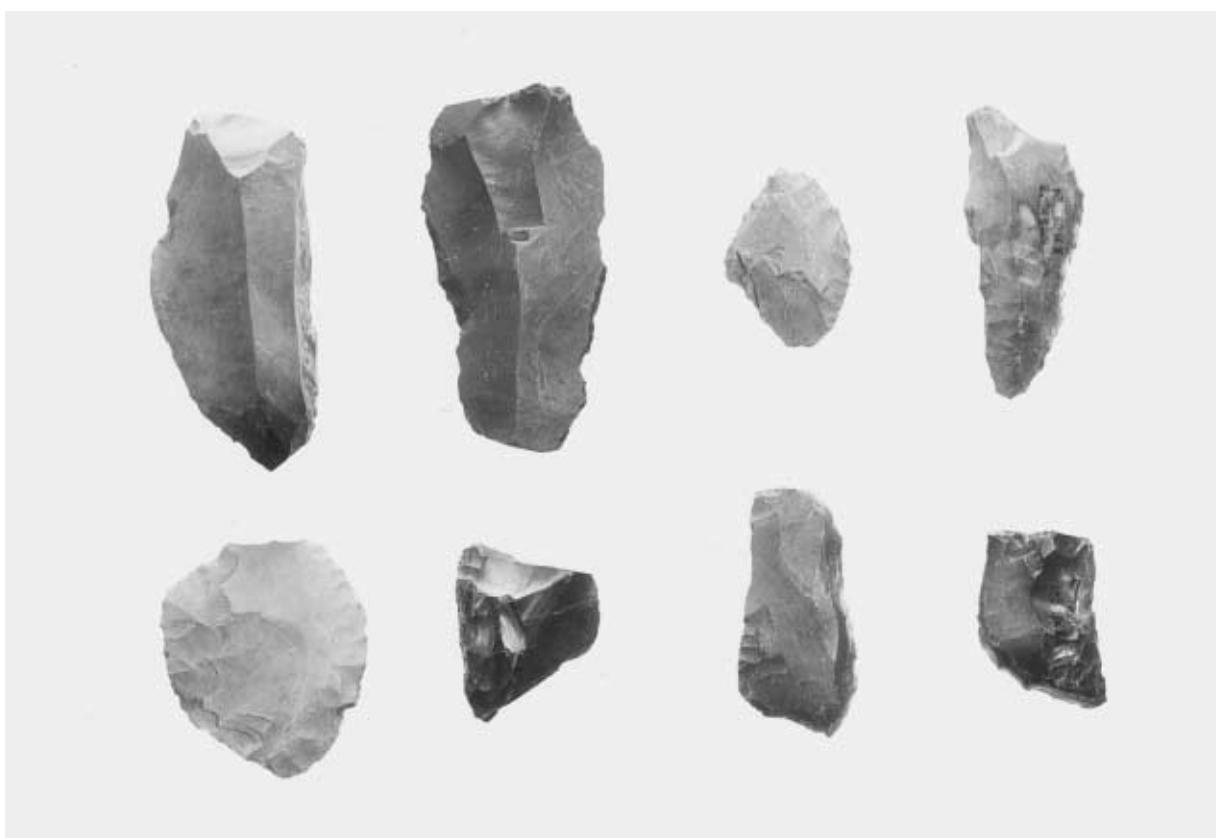
1 遺構外出土石器



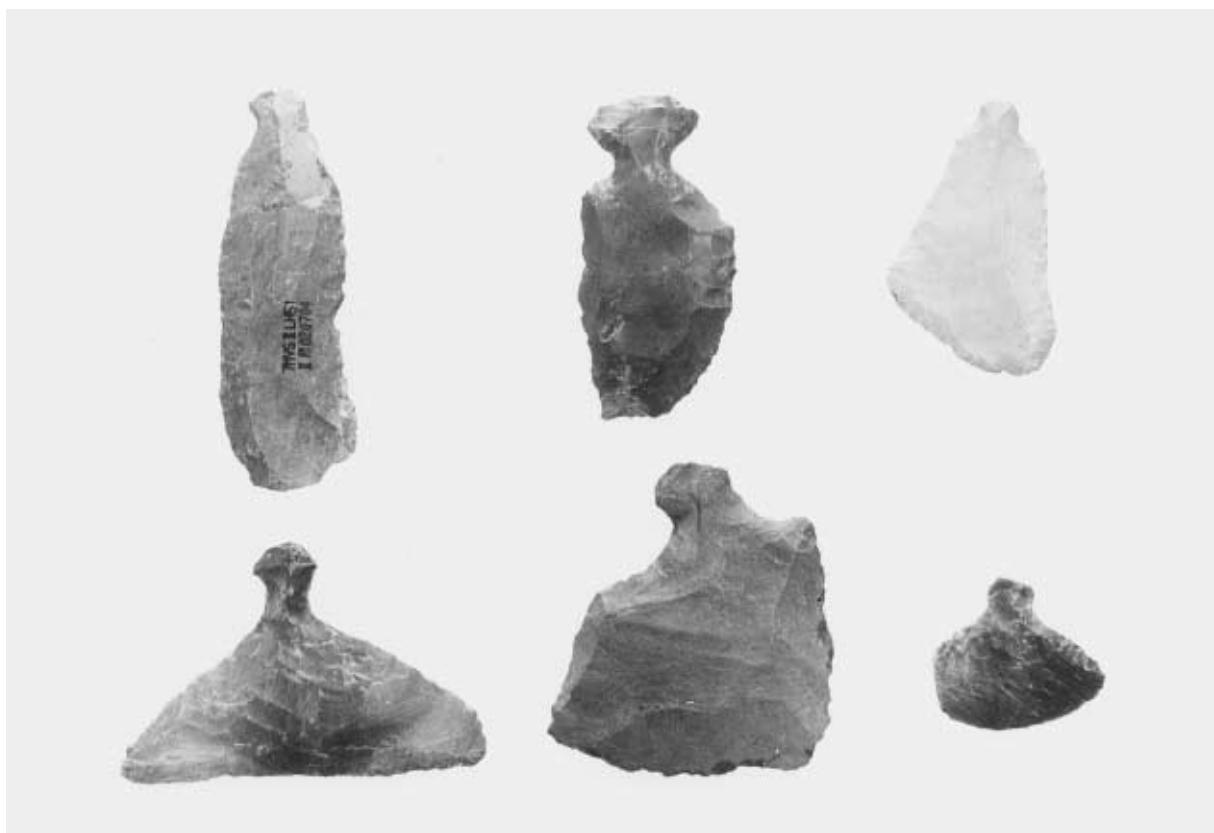
2 遺構外出土石器



1 遺構外出土石器



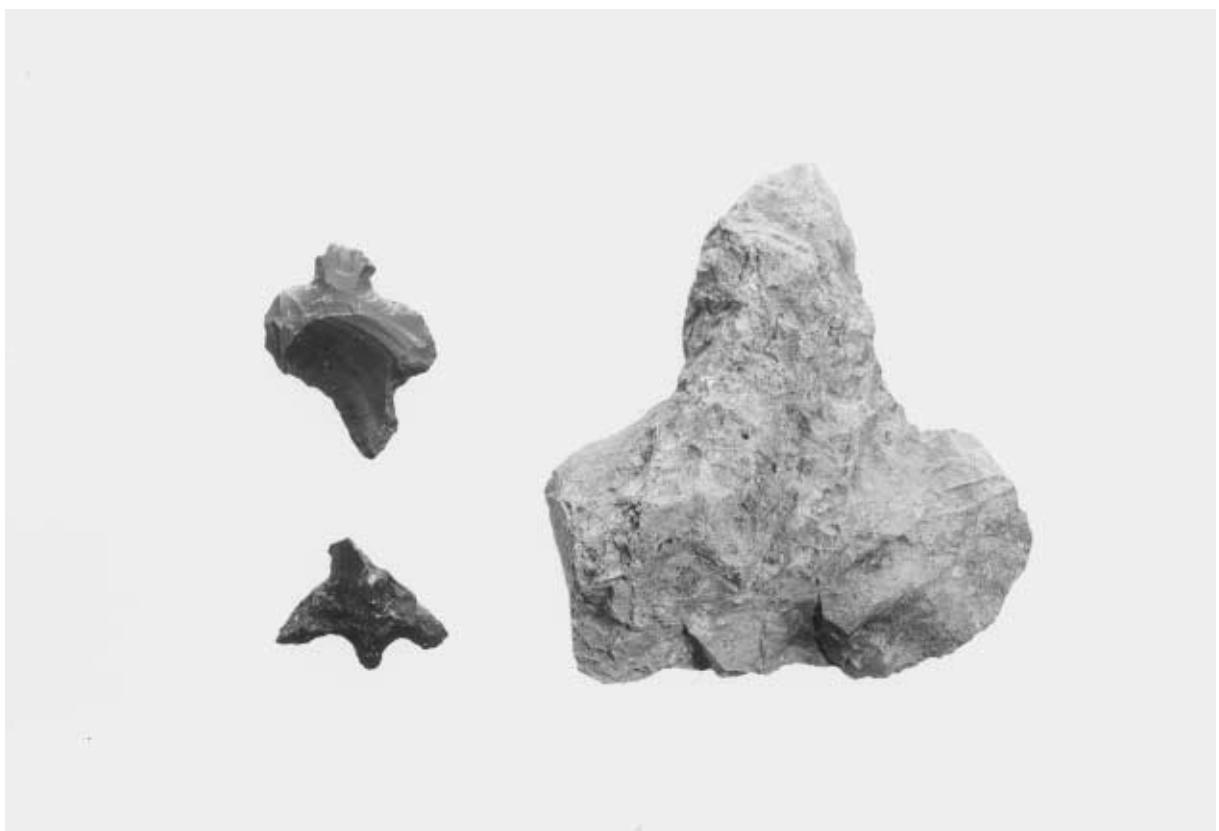
2 遺構外出土石器



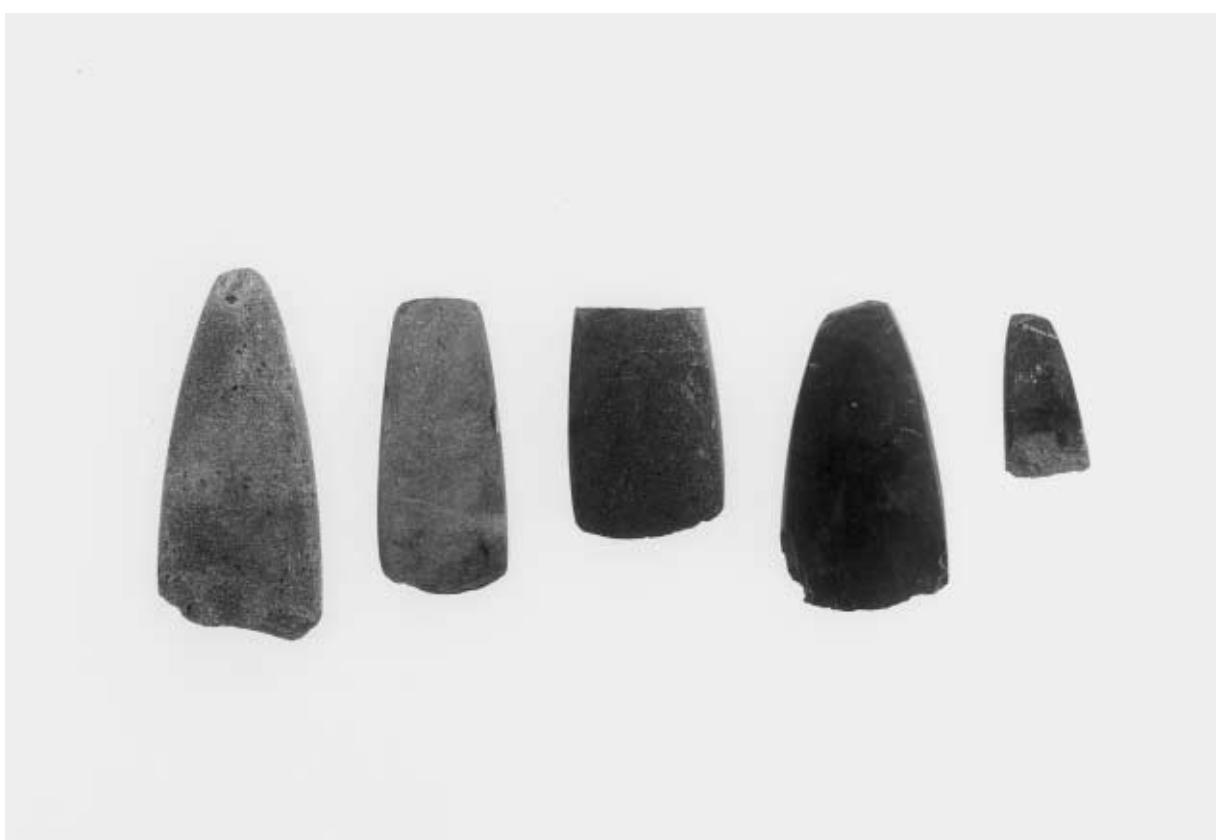
1 遺構外出土石器



2 遺構外出土石器



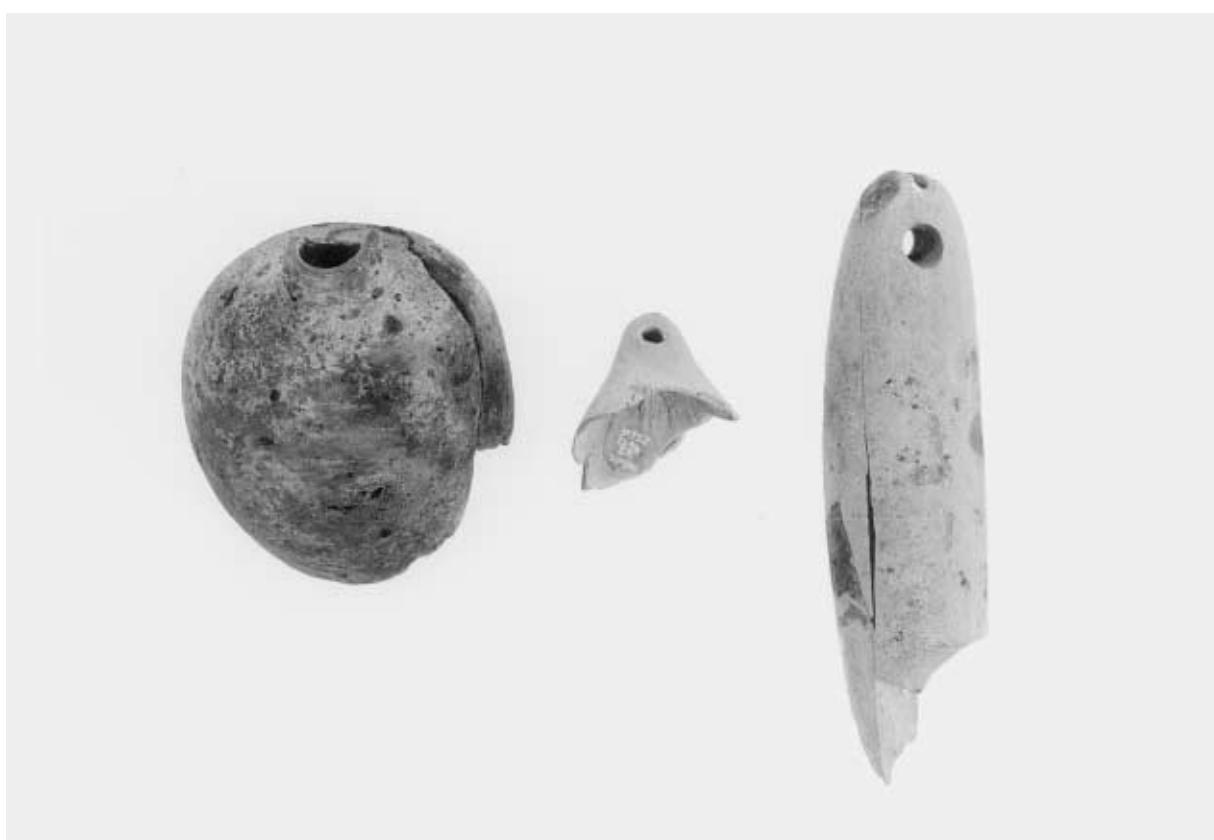
1 遺構外出土石器



2 遺構外出土石器



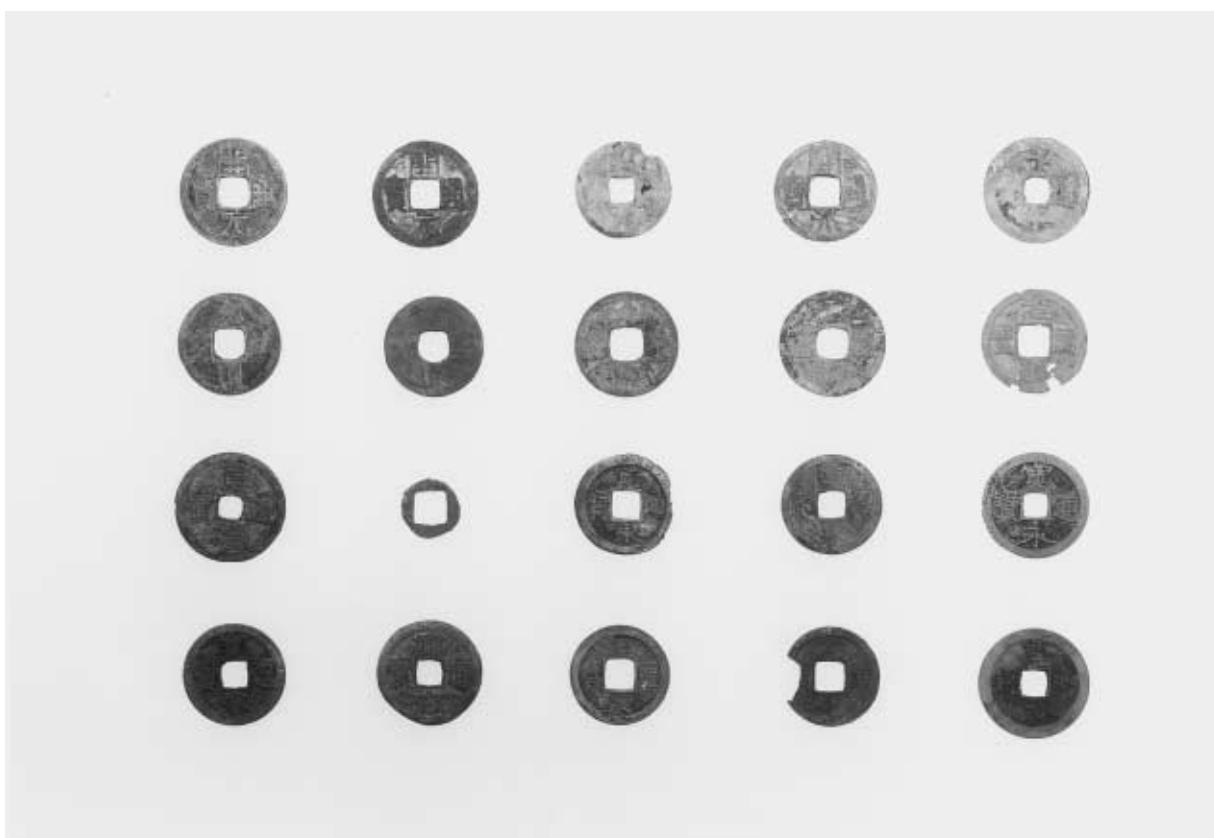
1 遺構外出土石器



2 遺構外出土土製品・石製品

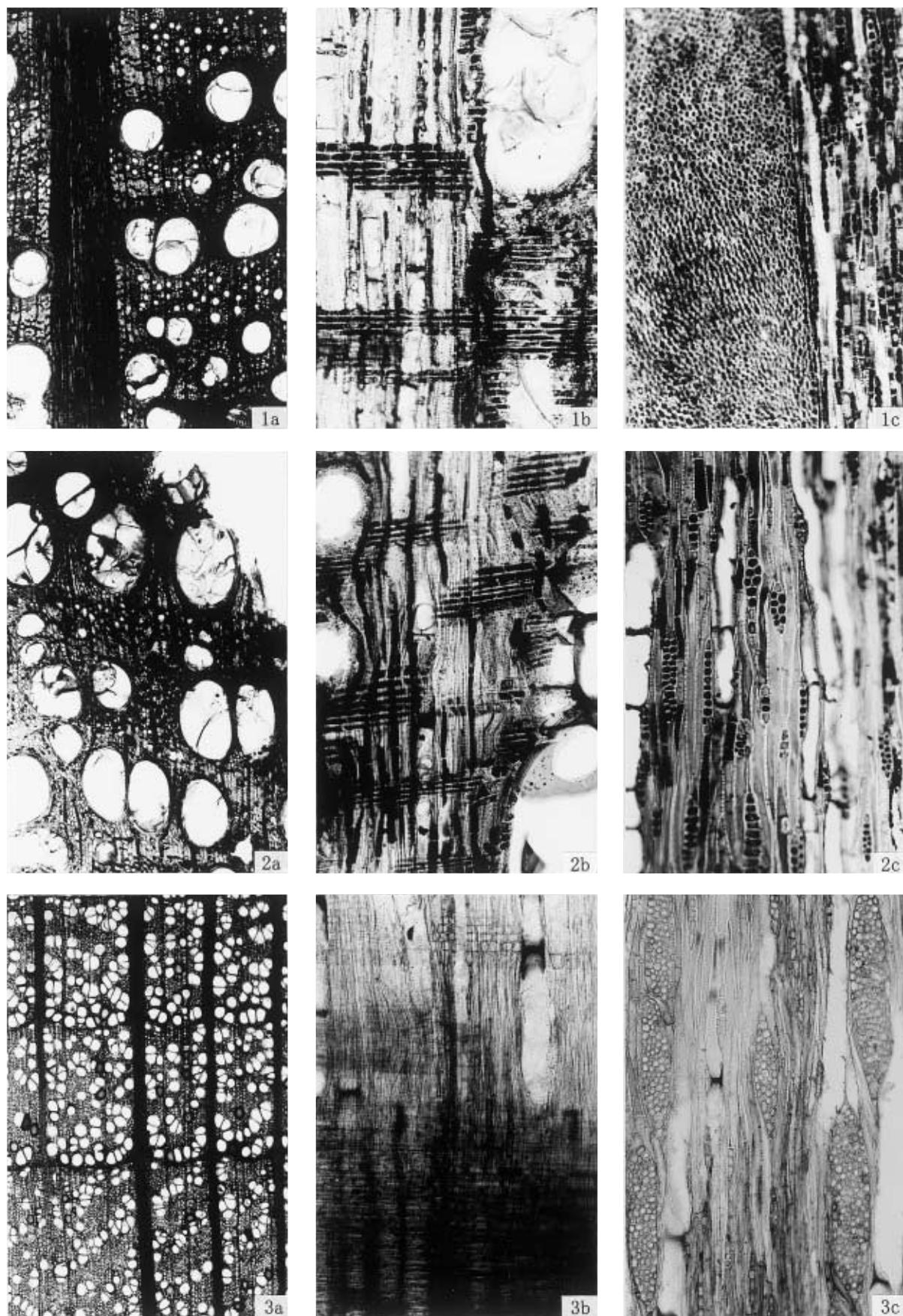


1 遺構外出土石製品



2 遺構外出土錢貨

樹種同定顕微鏡写真



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号12）
 2. クリ（試料番号13）
 3. サクラ属（試料番号9）
- a :木口, b :柾目, c :板目

■ 200 μm:a
■ 200 μm:b,c

第 2 次 調 查

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

中屋敷Ⅱ遺跡は、仙北平野の東部、奥羽山脈の真昼岳（1,060m）を源流とする真昼川と釜淵川が形成した一丈木扇状地の南西端にあり、その標高は48～50m前後である。第2次調査の遺跡範囲は、平成14年11～12月の確認調査によって括られた22,000m²全域であるが、このうち、ほ場整備事業の施工上、切土施工となる部分（面積3,800m²）の破壊が免れ得ないため、今回の発掘調査区が設定された。遺跡の現況は水田であり、前述のように藩政期から土崎村時代（明治22年まで）には水田開発が、千屋村時代（明治22年から昭和30年まで）には耕地整理が実施され、昭和30年以降、千畠村になってからは、小規模のほ場整備が行われた記録がある。水田は、県道50号大曲田沢湖線と直交する町道と概ね同軸方向（北北西）を向いて地割りされるが、扇状地の端部でもあるため、湧水地点の有無によって部分的に畦畔の方向が変わる。遺跡一帯は低く平坦な地形で、南西側には周知の遺跡である中屋敷I遺跡（54-1）、南東には十二遺跡（54-34）や上館跡（54-33）が近接し、約500m北には中村集落が、約200m東には土崎集落がある。

第2節 調査の方法

調査の方法はグリッド方式によった。秋田県仙北平野農村整備事務所が打設したベンチマークNo.5（第92図「第2次調査範囲図」記載、BM-No.5：標高51.391m、諏訪神社南東端）からスタティック測量方式（GPS併用）を用いて国家座標X・Yを導き出し、神社北側調査区の中央に原点杭（杭記号：MA50、X=-59852.115、Y=-22398.733、標高=50.407m、北緯39度27分38秒、東経140度34分22秒）を打設した。これを通る座標北ラインを南北基線とし、同じく原点杭を通り南北基線と直交するラインを東西基線とした。この東西南北の基線に沿って4m×4mの方眼（以下、グリッドと略記する）を組み、その交点に杭を打設した。各グリッドを呼称するために、基線の交点には、西に行くに従いMA・MB・MC・MD……、東に行くに従いLT・LS・LR・LQ……、北に行くに従い50・51・52・53……、南に行くに従い49・48・47・46……と、アルファベットおよび算用数字を組み合わせた番号を4m置きの各杭に明記した。方眼に囲まれた区域を呼称する場合は、その区域の南東隅の杭番号を用いた。

各調査区を掘り進む方法は、基本層位I層（表土・水田耕作土）の上面のみ、重機を用いて表土を除去し、これ以外は機械を用いず、すべて人力によって掘り下げた。これは、前年度の確認調査の結果から、I層表土の下がすぐ遺物包含層・遺構確認面であることが判明していたことと、現地形が水田および畦畔だったからである。ただし、確認調査後のトレンチ埋め戻し土がある場所については、平成14年度に重機で試掘された箇所であるため、表土除去の際に人力と重機を併用した。

遺構名は、全調査区を通じて検出した順に連番を付し、凡例にあげた遺構略号をつけた。ただし精査の過程で欠番となった遺構もある。遺構の記録については、実測図・写真・筆記によって行った。

実測図は平面図・断面図とも基本的に20分の1縮尺で作成した（遺構規模の大小により適宜縮尺を変更）。写真は基本的に35mm判のモノクロ・カラーリバーサル・ネガカラーの3種類のフィルムを用いて撮影したが、部分的にデジタルカメラでも撮影した。調査の終盤、各調査区をほぼ直上から記録するためバルーンによる空中写真撮影を行った。また、本遺跡全体を航空機から撮影した空中写真が、国土地理院に存在する（写真番号CTO-76-8-C4D-9、昭和51年撮影）のを確認し、許可を得てこれを掲載した。

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成15年（2003年）5月13日から7月29日までの延べ54日間実施した。以下、調査日誌を基に調査の経過を記述する。

5月13日：発掘調査を開始した。同時に方眼杭の打設作業も開始した。この日から、高橋佐登志安全管理指導員による発掘現場の安全管理指導が開始された。

5月14日：前年度確認調査トレーナーを精査中、遺物が出土し始める。発掘調査前の遺跡近景写真撮影を行った。

6月1日：S D02溝跡およびS N03・04・05・06焼土遺構を検出した。溝跡は両端が途切れている。焼土遺構4基は比較的近接した場所で確認した。

6月2日：SK07土坑を検出した。堆積土中から平安時代の土師器が出土した。

6月4日：L Q50～54グリッドライン以東で、多数のSKP柱穴様ピットを検出した。また、調査区の北東端に近いSX10は、住居の壁は削平されているものの、カマド跡の可能性がある焼土と炭化物の範囲を確認したことからSI10堅穴住居跡とした。

6月8日：SI01堅穴住居跡を検出した。千畠町文化財保護審議委員（代表：藤田秀司氏）10名が来跡し、調査状況を見学した。その際、鑓見内地区および周辺の遺跡について様々な御教示を得た。

6月10日：千畠町立千屋小学校6年生45名が発掘調査体験学習（総合的学習の一環）した。児童の引率は吉川寿朗教諭と鈴木清穂教諭が担当し、藤井誠子校長も来跡した。この千屋小学校生たちによる発掘中に土偶が出土した。

6月12日：検出したSX91は住居跡であることが判明し、SI91堅穴住居跡とした。

6月16日：SD112溝跡を検出した。これを精査した際、やや東側に浅い凹みが数十基、北東～南西方向に連続することが判明した（後にこれをSM198道路状遺構とした）。

6月26日：SI199堅穴住居跡と重複して、SK201土坑とSE207井戸跡を検出した。

6月29日：千畠町立豊川小学校6年生13名が発掘調査を体験学習（総合的学習）した。

7月1日：SE207井戸跡から大型の曲物が出土した。

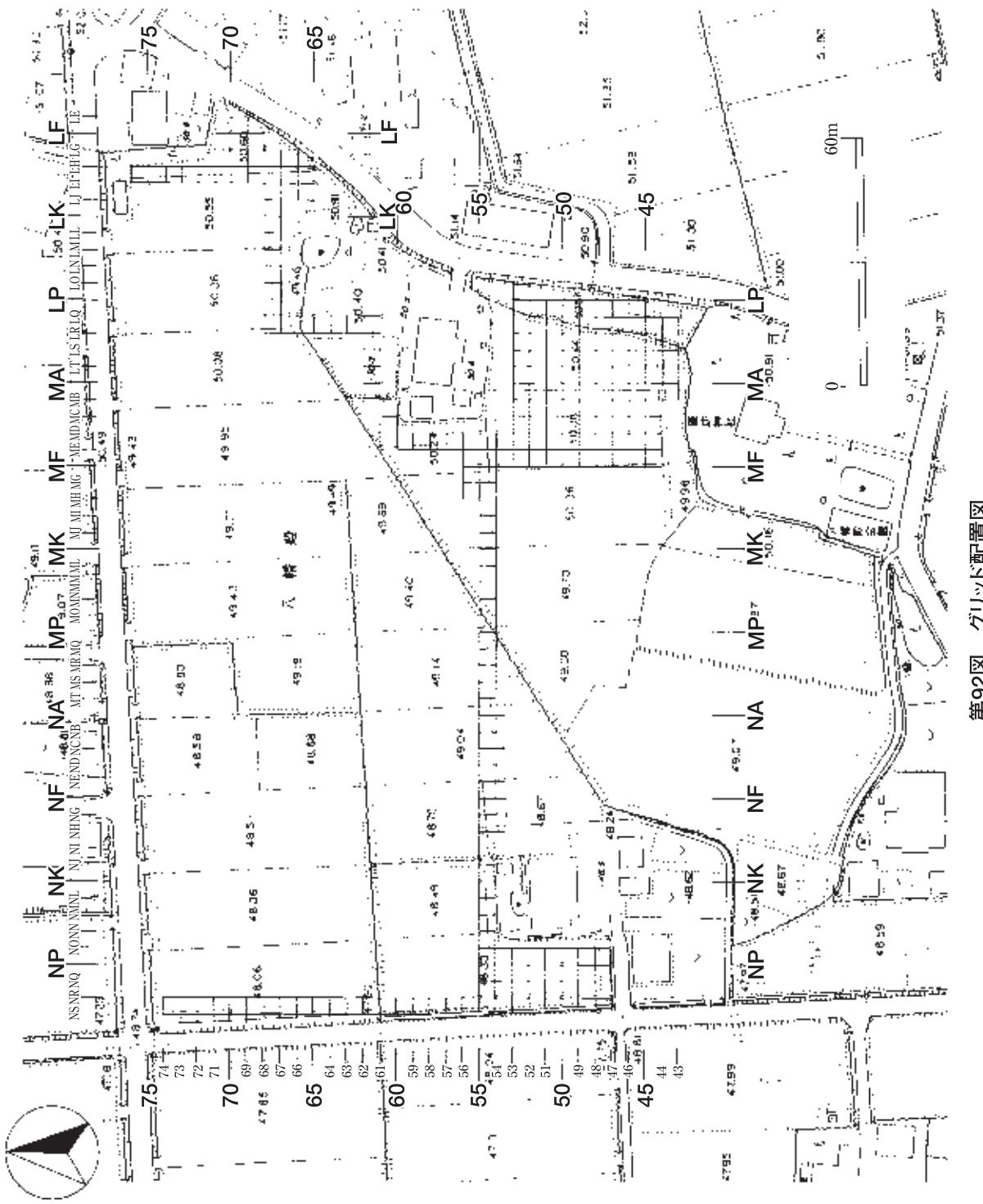
7月3日：SKP群の一部が掘立柱建物跡となることを確認し、SB208掘立柱建物跡とした。調査区全体の地山レベリング（センター図作成作業）を行った。

7月6日：千畠町立豊成中学校3年生1名、2年生2名が発掘体験学習した。発掘調査終了前の遺跡遠景写真を撮影した。SI199堅穴住居跡のカマドから土製支脚が出土した。

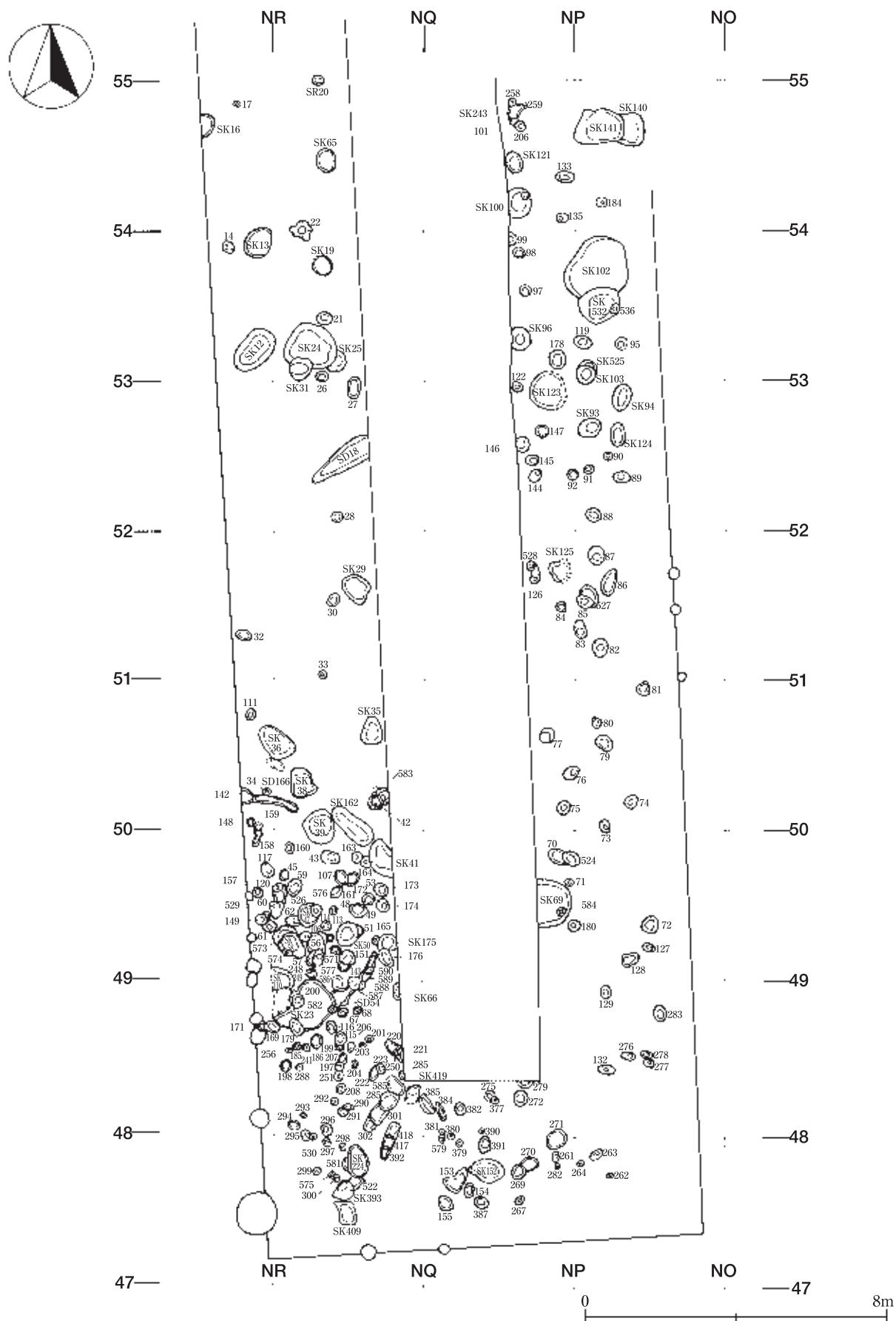
7月12日：遺跡見学会を開催した。125名の参加者があった。

7月28日：バルーンによる遺跡空中写真撮影をデジタルビジネス秋田（委託業者）が実施した（～29日まで）。

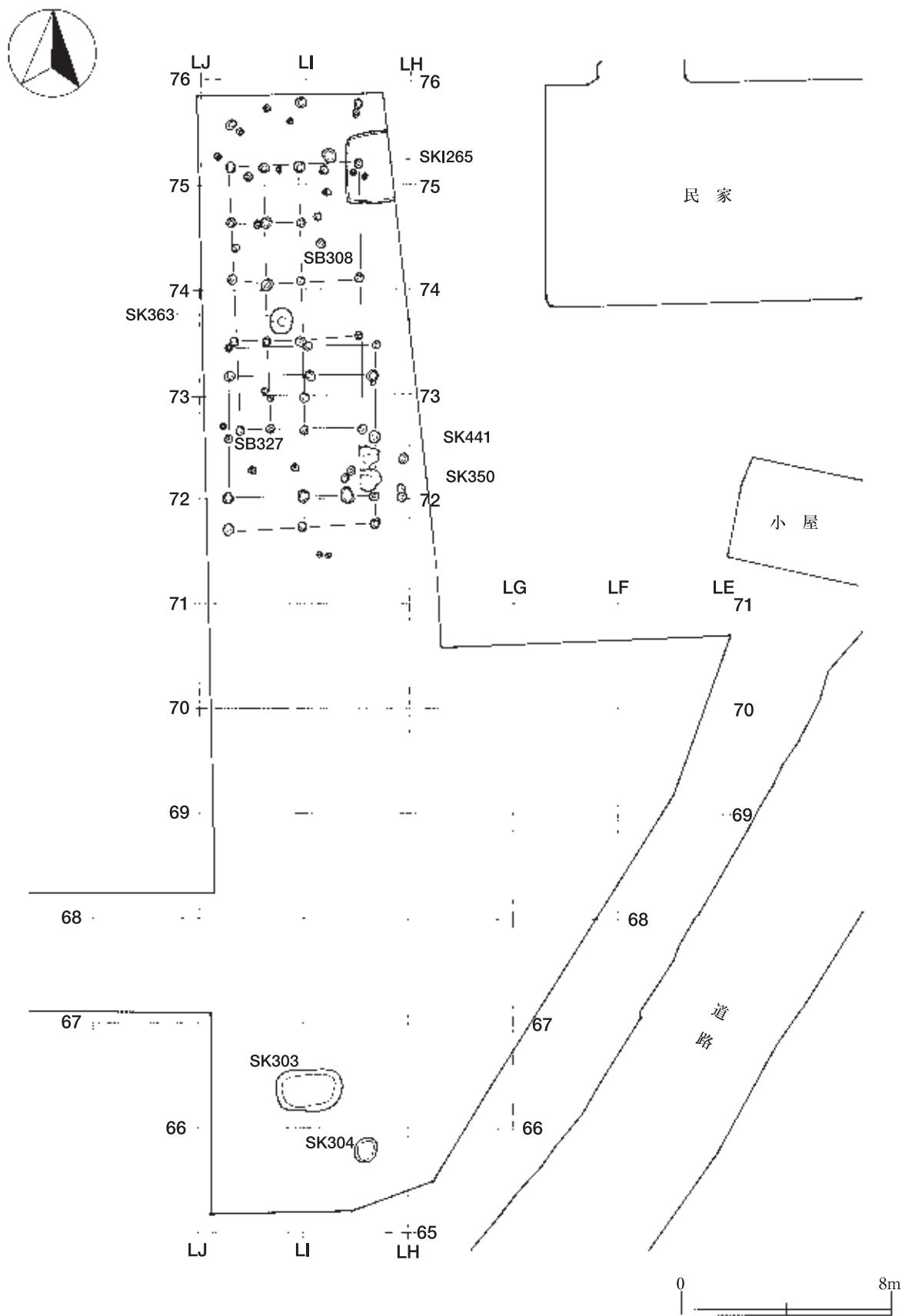
7月29日：神社北側調査区の遺構精査を終え、発掘調査を完了。現場を撤収した。高橋佐登志安全管理指導員による安全点検を受けたのち、発掘調査区（3,800m²）の全てを秋田県仙北平野農村整備事務所に引き渡した。



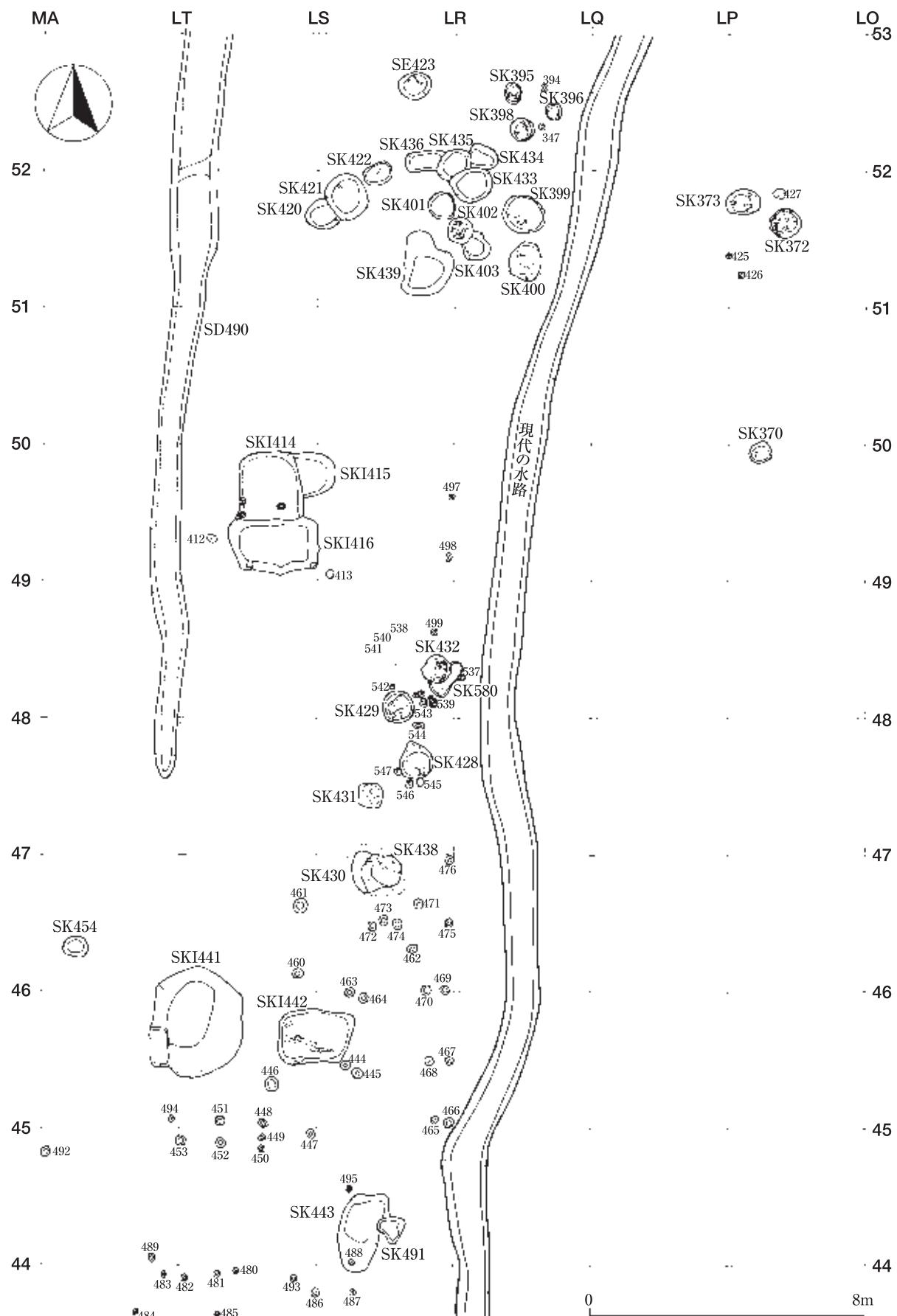
第92図 グリッド配置図



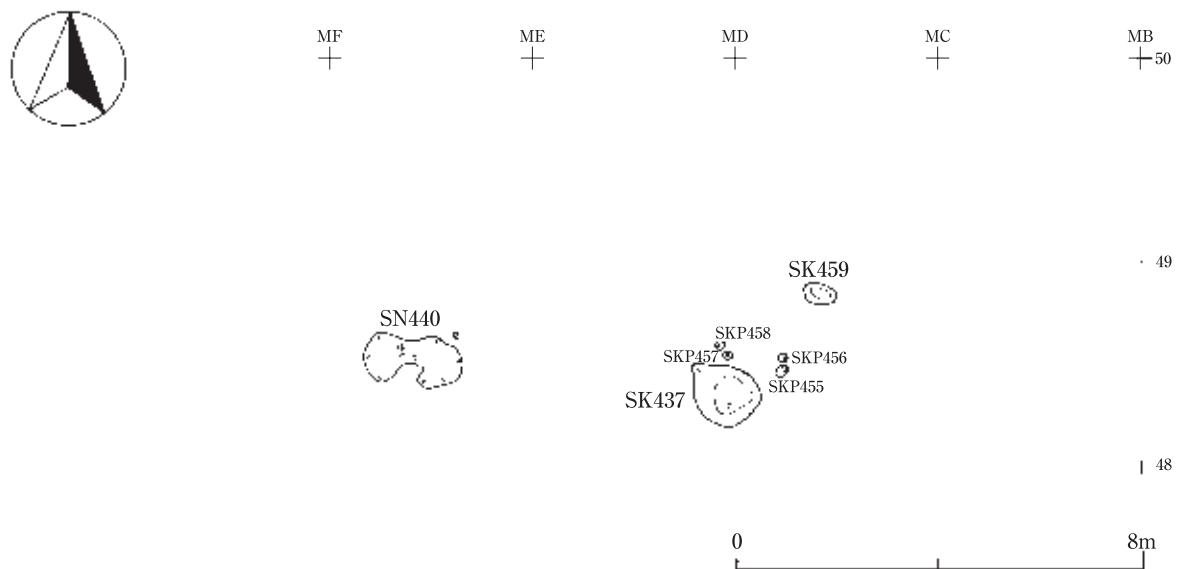
第93図 遺構配置図(1)コの字状調査区



第94図 遺構配置図(2)北東調査区



第95図 遺構配置図(3)神社北側調査区一東半部



第96図 遺構配置図(4)神社北側調査区—西半部

第2章 調査の記録

第1節 基本層序

中屋敷II遺跡第2次調査の基本層位は、平成14年11～12月実施の確認調査トレンチ（埋め戻し済み）を再度掘り上げ、精査・観察した。検出した遺構のほとんどがⅡ層上面で確認され、遺構外遺物もⅡ層以下で出土している。なお、発掘調査前の現況は水田であったため、土壤中には酸化・沈殿した赤褐色の鉄分層が斑入り、地山粘土層には暗青緑色にグライ化した場所も認められた。耕作による攪乱や削平が著しい場所では、土器片などの遺物がⅠ層で多数表採された。また、第2章第1節で述べたように、本遺跡が立地する東部扇状地前延扇状構造低地〔Ⅲe〕は、第四紀完新世の未固結堆積物（扇状地前延扇状構造低地堆積物）が表層地質となっているため、土壤は細粒質のグライ土が主体となっている。基本層位の特徴は次の通りである。

〔基本層位東西基線ライン〕

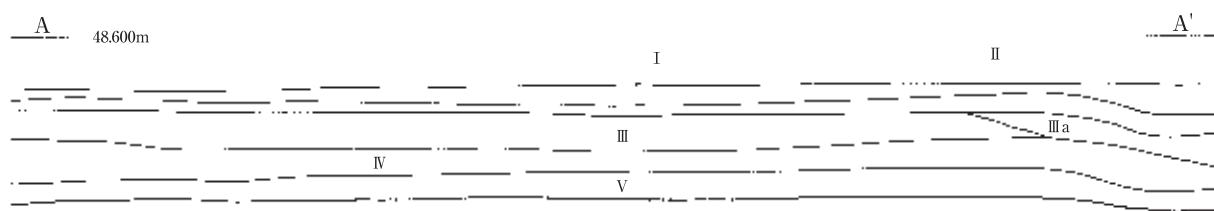
- I層：灰黄褐色土（10YR 4/2） 締まり強・粘性中、表土、耕作土。層厚10～20cm
- II層：黒褐色土（10YR 3/2） 締まり中・粘性中、遺物包含層、遺構確認面。層厚10～25cm
- III層：暗褐色土（10YR 3/3） 締まり中・粘性中、遺物包含層。層厚5～10cm
- IV層：暗灰黃褐色土（2.5Y 5/2） 締まり中・粘性強、遺物包含層、地山漸移層。層厚10～20cm
- V層：灰黄褐色土（10YR 5/2） 締まり中・粘性強、粘土層（部分的に砂礫層あり）、地山。

〔基本層位南北基線ライン〕

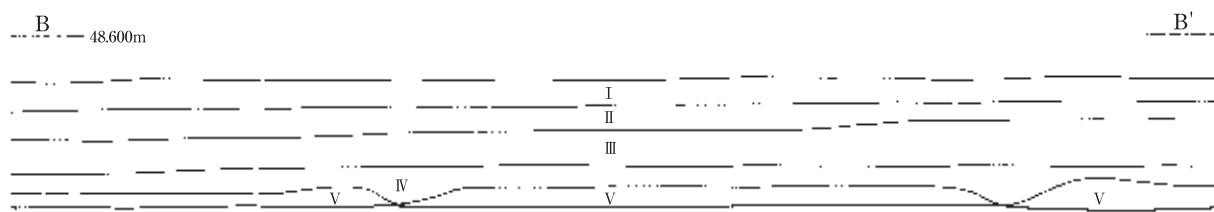
- I層：灰黄褐色土（10YR 4/2） 締まり中・粘性中、表土、耕作土。層厚10～25cm
- II層：黒褐色土（10YR 3/2） 締まり強・粘性中、遺物包含層、遺構確認面。層厚10～30cm
- III層：暗褐色土（10YR 3/3） 締まり中・粘性中、遺物包含層。層厚5～15cm
- IV層：暗灰黃褐色土（2.5Y 5/2） 締まり強・粘性中、遺物包含層、地山漸移層。層厚15～25cm
- V層：灰黄褐色土（10YR 5/2） 締まり中・粘性強、粘土層（部分的に砂礫層あり）、地山。

本遺跡の周辺は玉川左岸まで一面に低く平坦な地形であるが、基本土層を観察した結果、表土から地山までの深さは、最も浅いところで20cm、最も深いところでは80cmである。これは遺跡全体の原地形に若干の高低差があったことを示している。特に調査区西側の北川寄りの方が東側よりも深くなる傾向が見られる。現在では護岸整備された玉川支流の小河川も、過去には幾度となく蛇行し、地形の起伏を作っていたものと考えられる。

コの字状調査区南端基本土層（1）



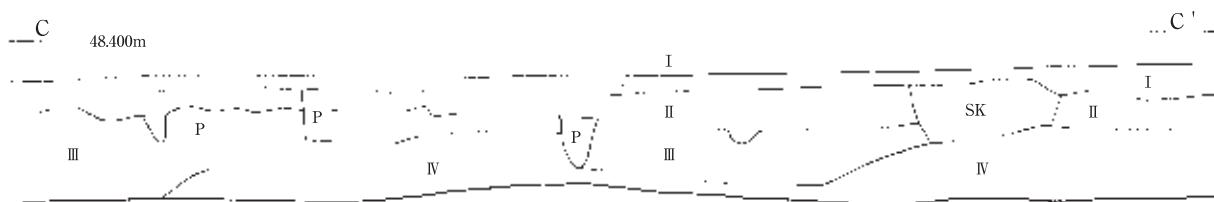
コの字状調査区南端基本土層（2）



(A-A'・B-B')

- I. 暗褐色土(10YR3/3)しまり中・粘性中、表土、耕作土。
- II. 黒褐色土(10YR2/3)しまり中・粘性中、表土直下、礫少量混入。
- III. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性弱、砂質土、炭化物少量・礫少量混入。
- IIIa. 客土:礫層を含まない。
- IV. 極暗褐色土(7.5YR2/3)しまり弱・粘性弱、砂質土、植物枝葉多量・礫多量混入。
- V. 緑灰色土(10GY5/1)しまり中・粘性弱、礫多量混入。

コの字状調査区西側基本土層



(C-C')

- I. 黒褐色土(10YR3/2)しまり強・粘性中。
- II. 黒褐色土(10YR3/1～2/2)しまり強・粘性中、礫少量混入。
- III. オリーブ灰色土(5GY5/1)しまり中・粘性中、青粘土層、礫少量混入。
- IV. 黒褐色土(10YR3/2)しまり中・粘性弱、砂質土、礫多量混入。



第97図 基本土層図

第2節 検出遺構と遺物

発掘調査の結果、中屋敷Ⅱ遺跡第2次調査で検出した遺構は合計遺構である。出土した遺物は、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器や木製品、中世陶器、江戸時代の陶磁器など整理用コンテナで125箱分（中コンテナ換算）である。また、発掘調査区（3,800m²）内で検出した遺構数の内訳は、次の通りである。

第3表 第2次調査の検出遺構一覧

発掘調査区	遺構の種類	検出数	遺構番号
コの字状調査区	土 坑	38	S K12、13、16、19、23、24、25、29、31、35、36、38、39、41、47、58、65、69、94、96、100、102、103、110、121、124、140、141、152、162、224、243、393、409、419、525、532、573
	土器埋設遺構	1	S R20
	溝 跡	2	S D54、166
神社北側調査区	豎穴状遺構	5	S K I 414、415、416、441、442
	土 坑	29	S K370、372、373、395、396、398、399、400、401、402、403、420、421、422、428、429、430、431、432、433、434、435、436、437、438、439、443、491、580
	井 戸 跡	1	S E423
	焼 土 遺 構	1	S N440
北東調査区	掘立柱建物跡	2	S B308、327
	豎穴状遺構	1	S K I 265
	土 坑	5	S K303、304、350、363、411
その他の調査区	掘立柱建物跡	1	S B209
	土 坑	5	S K01、02、187、205、253
	その他の遺構	2	S X245、305

これら調査によって検出した遺構は、発見順に一連の番号を付したものであるが、精査の過程で欠番となったものもある。検出遺構の時期は古代（平安時代）である。遺構外出土の遺物には、縄文時代、中世陶器、近世陶磁器などがある。

1 繩文・弥生時代

(1) コの字状調査区の検出遺構と遺物

① 土坑

S K12土坑 (第98図、図版1)

《位置と確認》N R53グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.30m×短軸0.82m、深さ0.22mで、平面形は橢円形である。

《土層》3層に分層した。一部攪乱を受けている。2層中から遺物が出土した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》石鏃1点を図示した(第98図1)。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K13土坑 (第98図、図版1)

《位置と確認》N R53・54グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.90m×短軸0.70m、深さ0.30mで、平面形は略円形である。

《土層》単層である。堆積土中に礫が含まれる。

《壁・底面》壁は北東側が急な角度で立ち上がり南西側は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

《出土遺物》5点を図示した(第98図2～6)。いずれも縄文土器片で鉢である。2～5には炭化物が付着していた。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K16土坑 (第98図、図版1)

《位置と確認》N R54グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》遺構の半分が調査区外にあるが、規模は長軸0.58m×短軸0.30m、深さ0.30mで、平面形は半円形である。

《土層》2層に分層した。1層・2層とも自然堆積と考えられる。

《壁・底面》壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は若干くぼんでいる。

《時期》出土遺物はなかったが近接する遺構の状況から、縄文時代晚期と考えられる。

S K19土坑 (第98図、図版1)

《位置と確認》N Q53グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.56m×短軸0.50m、深さ0.18mで、平面形は円形である。

《土層》単層である。堆積土中に礫が含まれる。

《壁・底面》壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》1点を図示した(第98図7)。縄文土器片で浅鉢の口縁部である。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K23土坑 (第99図、図版2)

《位置と確認》N Q48グリッドのII層で確認した。

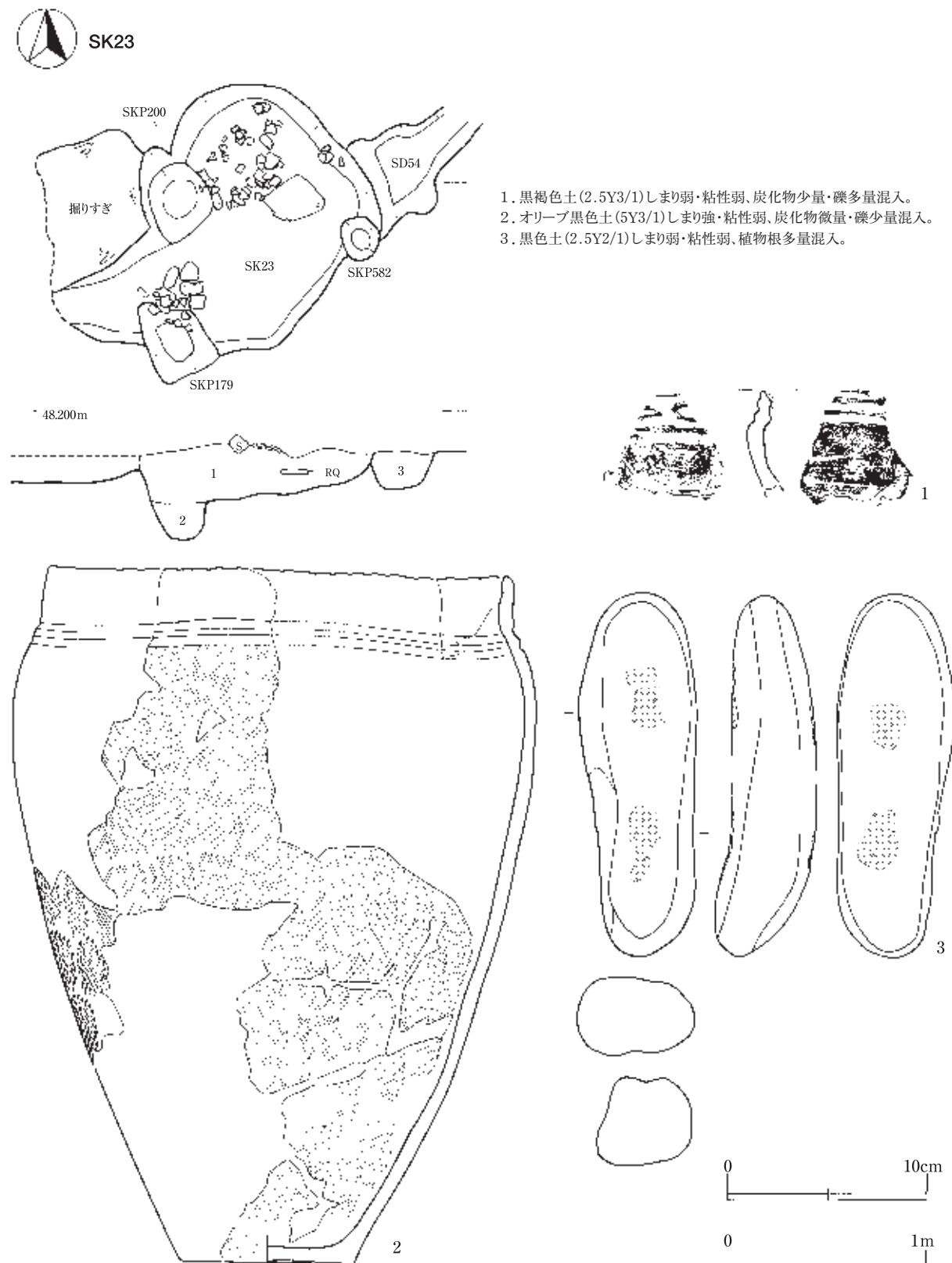
《規模と平面形》規模は長軸1.69m×短軸1.25m、深さ0.28mで、平面形は不整形である。西側の一部が現代の攪乱を受けている。

《重複》S D54溝跡とS K P200柱穴様ピットを切り、S K P179・582柱穴様ピットに切られ



番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	剥片石器	石鏃		SK12 RQ13	最大長3.0	最大幅0.9	最大厚0.4		
2	縄文土器	鉢	口縁部	SK13 1層 RP1	—	—	—	炭化物付着	(科析-2) バリノサーウェイ①
3	縄文土器	鉢	口縁部	SK13 RP26	—	—	—	炭化物付着	(科析-3)
4	縄文土器	不明	胴部	SK13 RP40	—	—	—	炭化物付着	(科析-4)
5	縄文土器	鉢	口縁部	SK13	—	—	—	内外:炭化物付着	
6	縄文土器	鉢	口縁部	SK13 RP20	—	—	—	波状口縁	
7	縄文土器	鉢	口縁部	SK19 RP49	—	—	—	内外:炭化物付着	

第98図 SK12・13・16・19土坑



番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	壺	口縁部	SK23	—	—	—		
2	縄文土器	深鉢	ほぼ完形	SK23 RP5	—	8.8	35.0	頸部磨り消し	
3	礫石器	凹石		SK23 RQ	最大長18.25	最大幅6.0	最大厚5.05		

第99図 SK23土坑

る。

《 土層 》 各遺構とも単層である。1層はSK23土坑、2層はSKP200柱穴様ピット、3層はSD54溝跡となる。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は傾斜して西側が深くなる。

《 出土遺物 》 繩文土器2点と石器1点の計3点を図示した（第99図1～3）。深鉢形土器1点、壺の口縁部1点、凹石1点である。

《 時期 》 繩文時代晩期と考えられる。

SK24・25・31土坑（第100図、図版3）

《 位置と確認 》 NQ53グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 SK24の規模は長軸1.36m×短軸1.20m、深さ0.18mで、平面形は略円形である。SK25の規模は長軸0.60m×短軸0.28m（残存値）、深さ0.08mで、平面形は円形である。SK31の規模は長軸0.60m×短軸0.60mで、平面形は略円形である。

《 重複 》 SK24がSK25を切り、SK31に切られる。

《 土層 》 SK24は2層に分層し、SK25は単層である。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は中央がやや高くなる。

《 出土遺物 》 繩文土器3点を図示した（第100図1～3）。1はほぼ完形の台付浅鉢である（図版37-2）。頸部から胴部上半に多量の炭化物が付着していた。2と3は破片だが浅鉢の口縁部と鉢の口縁部である。

《 時期 》 繩文時代晩期と考えられる。

SK29土坑（第100図、図版3）

《 位置と確認 》 NQ51グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.84m×短軸0.68m、深さ0.08mで、平面形は略円形である。

《 土層 》 単層である。確認段階で耕作による攪乱を受けていたため浅い。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は北東側へ傾斜して深くなる。

《 出土遺物 》 繩文土器1点と石器1点を図示した（第100図4・5）。鉢の口縁部破片1点、石鏃1点である。

《 時期 》 繩文時代晩期と考えられる。

SK35土坑（第100図、図版3）

《 位置と確認 》 NQ50グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.84m×短軸0.68m、深さ0.16mで、平面形は略円形である。

《 土層 》 単層である。堆積土中に礫が含まれる。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

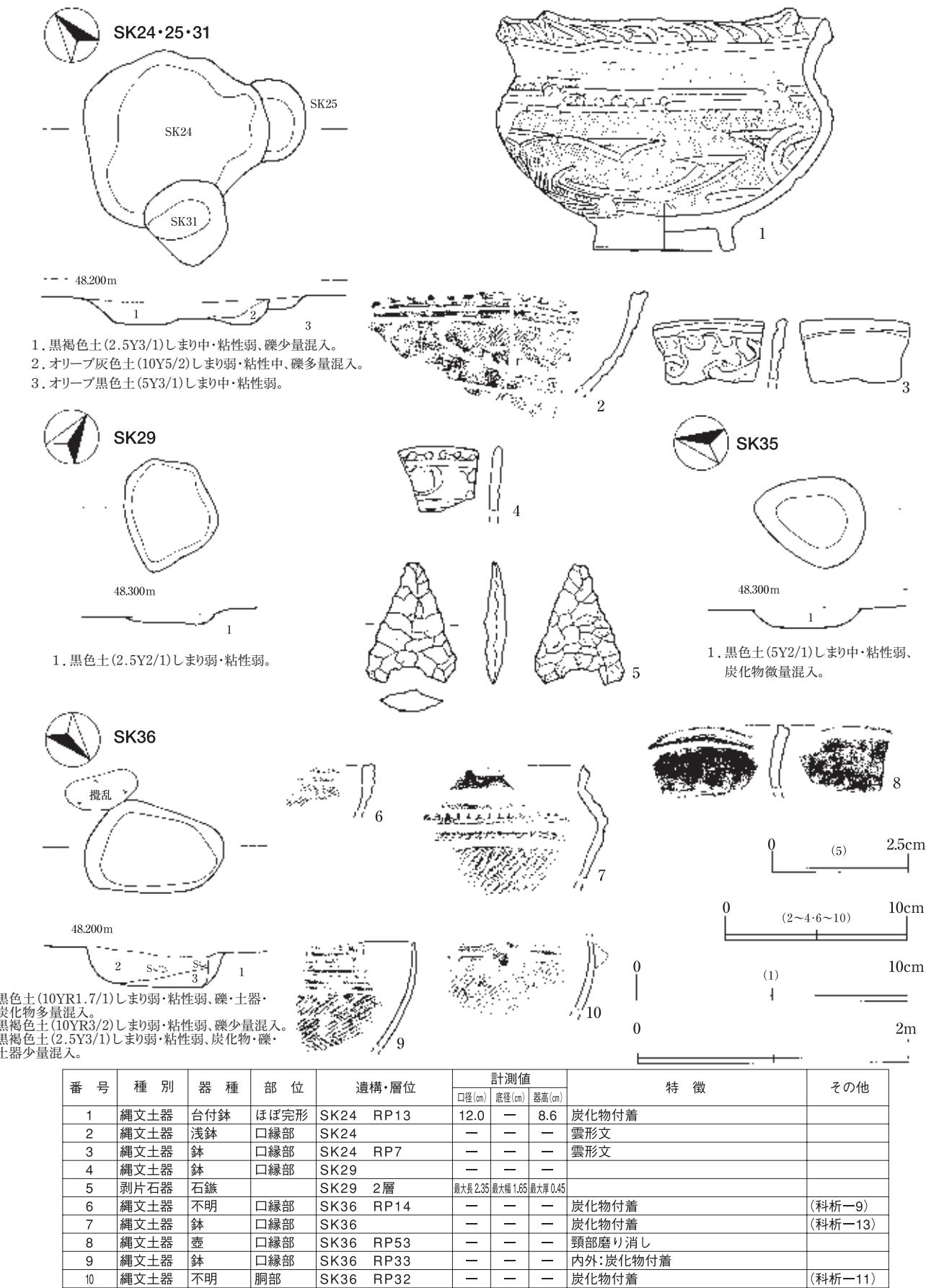
《 時期 》 出土遺物はなかったが近接する遺構の状況から、繩文時代晩期と考えられる。

SK36土坑（第100図、図版3）

《 位置と確認 》 NQ50・NR50グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.04m×短軸0.78m、深さ0.26mで、平面形は略円形である。

《 土層 》 3層に分層した。堆積土中に礫が含まれる。



第100図 SK24・25・29・31・35・36土坑

《 壁・底面 》 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《 出土遺物 》 縄文土器5点を図示した（第100図6～10）。いずれも破片だが、6・7・10は鉢の口縁部破片、9は浅鉢の口縁部破片、8は壺の口縁部破片である。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K38土坑（第101図、図版4）

《 位置と確認 》 N Q50グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.77m×短軸0.67m、深さ0.07mで、平面形は略円形である。

《 土層 》 単層である。確認段階で耕作による攪乱を受けていたため浅い。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《 時期 》 出土遺物はなかったが近接する遺構の状況から、縄文時代晚期と考えられる。

S K39土坑（第101図、図版4）

《 位置と確認 》 N Q49・50グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.95m×短軸0.86m、深さ0.17mで、平面形は略円形である。

《 土層 》 単層であり、自然堆積によるものと考えられる。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 縄文土器2点を図示した（第101図1・2）。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K41・162土坑およびS K P163・164柱穴様ピット（第101図、図版4）

《 位置と確認 》 N Q49・50グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 遺構の一部は調査区外にあるが、SK41の規模は長軸0.84m×短軸0.65m（確認部）、深さ0.17mで、平面形は略円形である。SK162の規模は長軸1.35m×短軸0.58m、深さ0.14mで、平面形は長楕円形である。SK P163の規模は長軸0.29m×短軸0.26m（残存値）で、平面形は円形である。SK P164の規模は長軸0.29m×短軸0.23m（残存値）で、平面形は円形である。

《 重複 》 SK41がSK P164を切り、そのSK P164はSK P163を切る。

《 土層 》 SK41・162いずれも単層である。1層はSK41、2層はSK162である。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面はSK41がやや傾き、SK162はほぼ平坦である。

《 出土遺物 》 SK41は1点、SK162は4点を図示した（第101図3～7）。いずれも破片だが、3・4は鉢の口縁部、5は鉢の口縁部突起（装飾部破片か）、6は鉢の口縁部、7は底部である。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K47土坑およびS K P62・576柱穴様ピット（第101図、図版4）

《 位置と確認 》 N Q49グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 SK47の規模は長軸0.52m×短軸0.62m、深さ0.08mで、平面形は円形である。

SK P62の規模は長軸0.40m×短軸0.25mで、平面形は楕円形である。SK P576の規模は長軸0.32m×短軸0.25m、深さ0.22mで、平面形は円形である。

《 重複 》 SK47がSK P576に切られ、SK P62を切る。

《 土層 》 SK47は単層であり、SK P576は2層に分層した。

《 壁・底面 》 SK47の壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。



番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	深鉢	胴部	SK39	—	—	—		
2	縄文土器	鉢	口縁部	SK39	—	—	—		
3	縄文土器	鉢	口縁部	SK41	—	—	—	羊歯状文	
4	縄文土器	鉢	口縁部	SK162	—	—	—	炭化物付着	(科析-37)パリ/サーグイ(6)
5	縄文土器	不明	口縁部	SK162	—	—	—	口縁部の飾り	
6	縄文土器	鉢	口縁部	SK162 1層 PR1	—	—	—	炭化物付着	(科析-36)
7	縄文土器	不明	底部	SK162 PR1	—	—	—	底面に縄痕	
8	縄文土器	不明	胴部～底部	SK47 RP3	—	—	—	内外:炭化物付着	(科析-88)
9	剥片石器	石錐		SKP164	最大長2.8	最大幅0.7	最大厚0.4	基部破損	

第101図 SK38・39・41・47・162土坑

《出土遺物》SK47は縄文土器1点、SKP164は石器1点を図示した(第101図8・9)。8は鉢の底部破片で炭化物が付着していた。9は石錐であり、基部が欠損している。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。

SK58・573土坑およびSKP574柱穴様ピット(第102図)

《位置と確認》NQ49グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》SK58の規模は長軸0.79m×短軸0.60m、深さ0.19mで、平面形は略円形である。SK573の規模は長軸0.65m×短軸0.26m(残存値)、深さ0.13mで、平面形は略円形である。SKP574の規模は長軸0.30m×短軸0.15mで、平面形は橢円形である。

《重複》SK58がSK573・574を切る。

《土層》SK58・578は各々単層である。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》1点を図示した(第102図1)。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。

SK65土坑(第102図、図版4)

《位置と確認》NQ54グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.61m×短軸0.50m、深さ0.23mで、平面形は橢円形である。

《土層》2層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》1点を図示した(第102図2)。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。

SK69土坑およびSKP584柱穴様ピット(第102図、図版5)

《位置と確認》NP49グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》遺構の一部は調査区外にあるが、SK69の規模は長軸1.30m×短軸0.90m、深さ0.17mで、平面形は半円形である。SKP584の規模は長軸0.25m×短軸0.23m、深さ0.11mで、平面形は円形である。

《重複》SK69がSKP584を切る。

《土層》SK69は2層に分層し、SKP584は単層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》2点を図示した(第102図3・4)。

《時期》縄文時代後期と考えられる。

SK94土坑(第103図)

《位置と確認》NO52グリッドのII層で確認した。

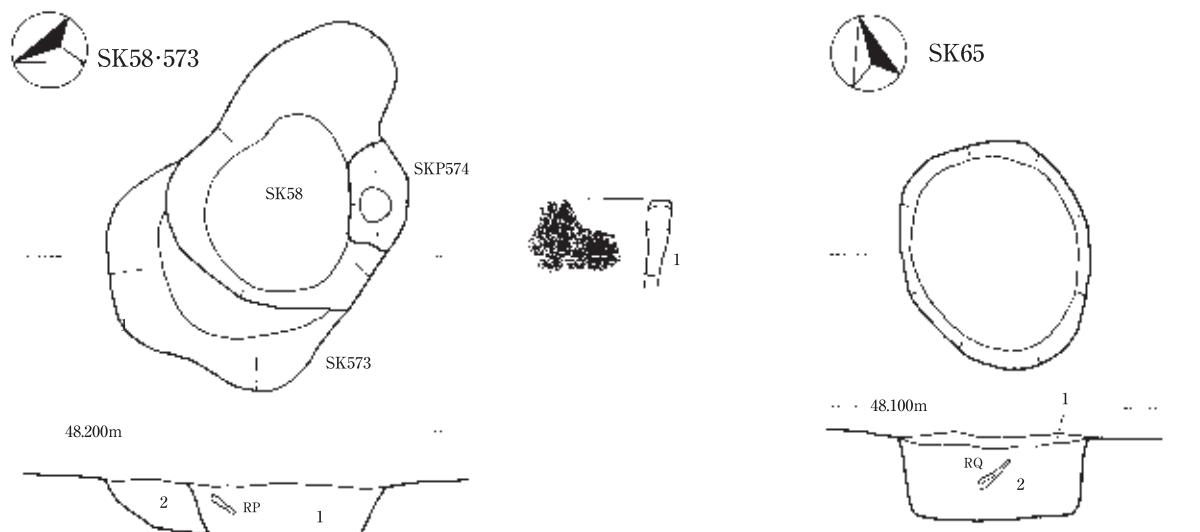
《規模と平面形》規模は長軸0.70m×短軸0.48m、深さ0.24mで、平面形は橢円形である。

《土層》単層である。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

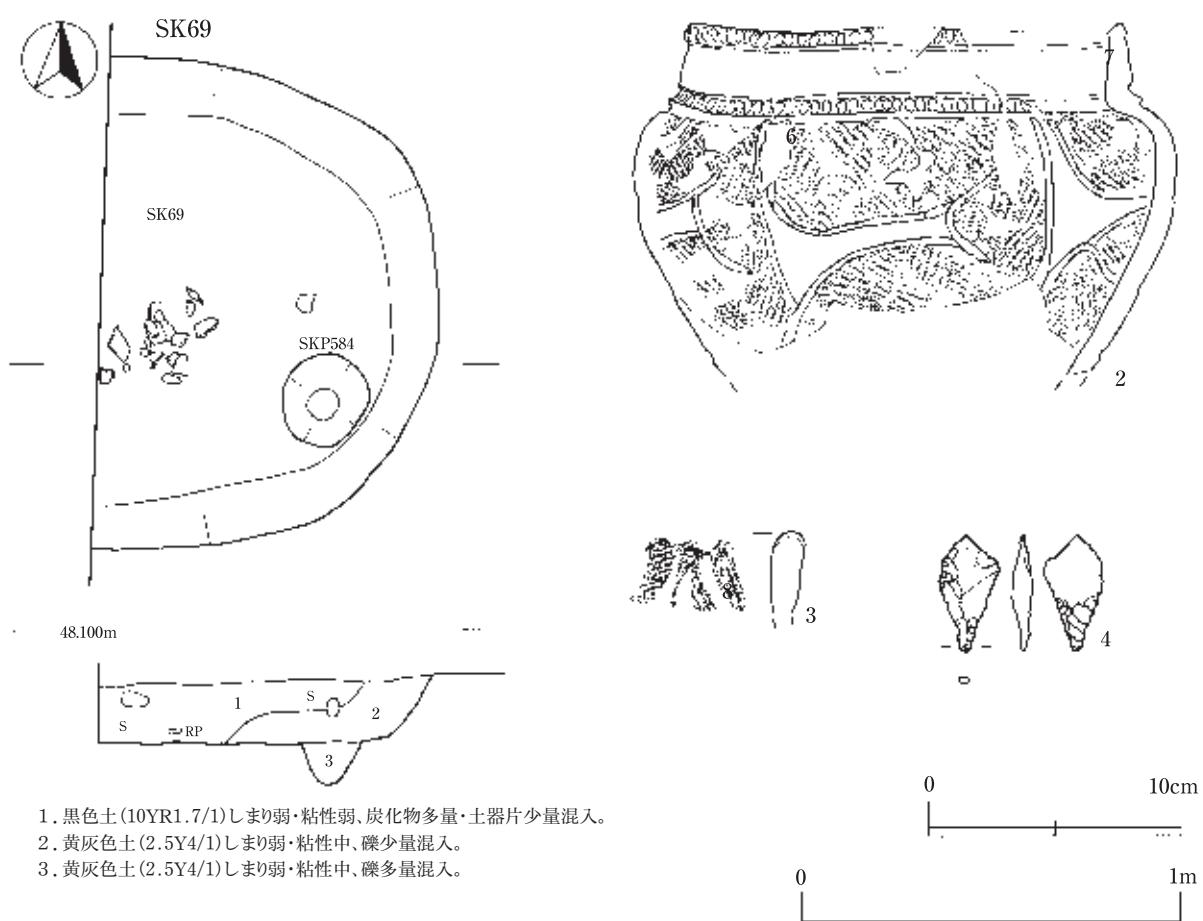
《出土遺物》2点を図示した(第103図1・2)。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。



1. 黒褐色土(10YR3/1)しまり弱・粘性弱、炭化物微量混入。
2. 黒色土(2.5Y2/1)しまり中・粘性弱、炭化物多量混入。

1. 黒褐色土(10YR2/2)しまり中・粘性中、礫微量混入。
2. 緑黒色土(7.5GY2/1)粘性中・しまり弱、礫少量混入。



1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性弱、炭化物多量・土器片少量混入。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1)しまり弱・粘性中、礫少量混入。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1)しまり弱・粘性中、礫多量混入。

番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	鉢	口縁部	SK58	—	—	—		
2	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	SK65 RP NQ54 II b層 (16.9)	—	—	—	内外：炭化物付着 磨り消し縄文	
3	縄文土器	深鉢	口縁部	SK69 覆土	—	—	—	波状口縁	
4	剥片石器	石錐		SK69 覆土南	最大長4.6	最大幅2.3	最大厚0.8		

第102図 SK58・65・69・573土坑

S K96土坑（第103図）

《位置と確認》N P53グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》遺構の一部は調査区外にあるが、規模は長軸0.64m×短軸0.52m、深さ0.22mで、平面形は略円形である。

《土層》単層である。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》1点を図示した（第103図3）。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。

S K100土坑（第103図、図版5）

《位置と確認》N P54グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》遺構の一部は調査区外にあるが、規模は長軸0.80m×短軸0.62m、深さ0.24mで、平面形は略円形である。

《土層》5層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》1点を図示した（第103図4）。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。

S K102・532土坑およびS K P536柱穴様ピット（第103図）

《位置と確認》NO・NP53グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》SK102の規模は長軸1.86m×短軸1.58m、深さ0.10mで、平面形は略円形である。

SK532の規模は長軸1.06m×短軸0.96m、深さ0.10mで、平面形は略円形である。SKP536の規模は長軸0.32m×短軸0.22mで、平面形は略円形である。

《重複》SK102がSK532に切られ、SK532はSKP536に切られる。

《土層》不明。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》1点を図示した（第103図5）

《時期》縄文時代晩期と考えられる。

S K103・525土坑（第103図）

《位置と確認》NO52・53グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》SK103の規模は長軸0.50m×短軸0.42m、深さ0.32mで、平面形は円形である。SK525の規模は長軸0.48m×短軸0.16m、深さ0.16mで、平面形は円形である。

《重複》SK103がSK525を切る。

《土層》各々単一の層である。

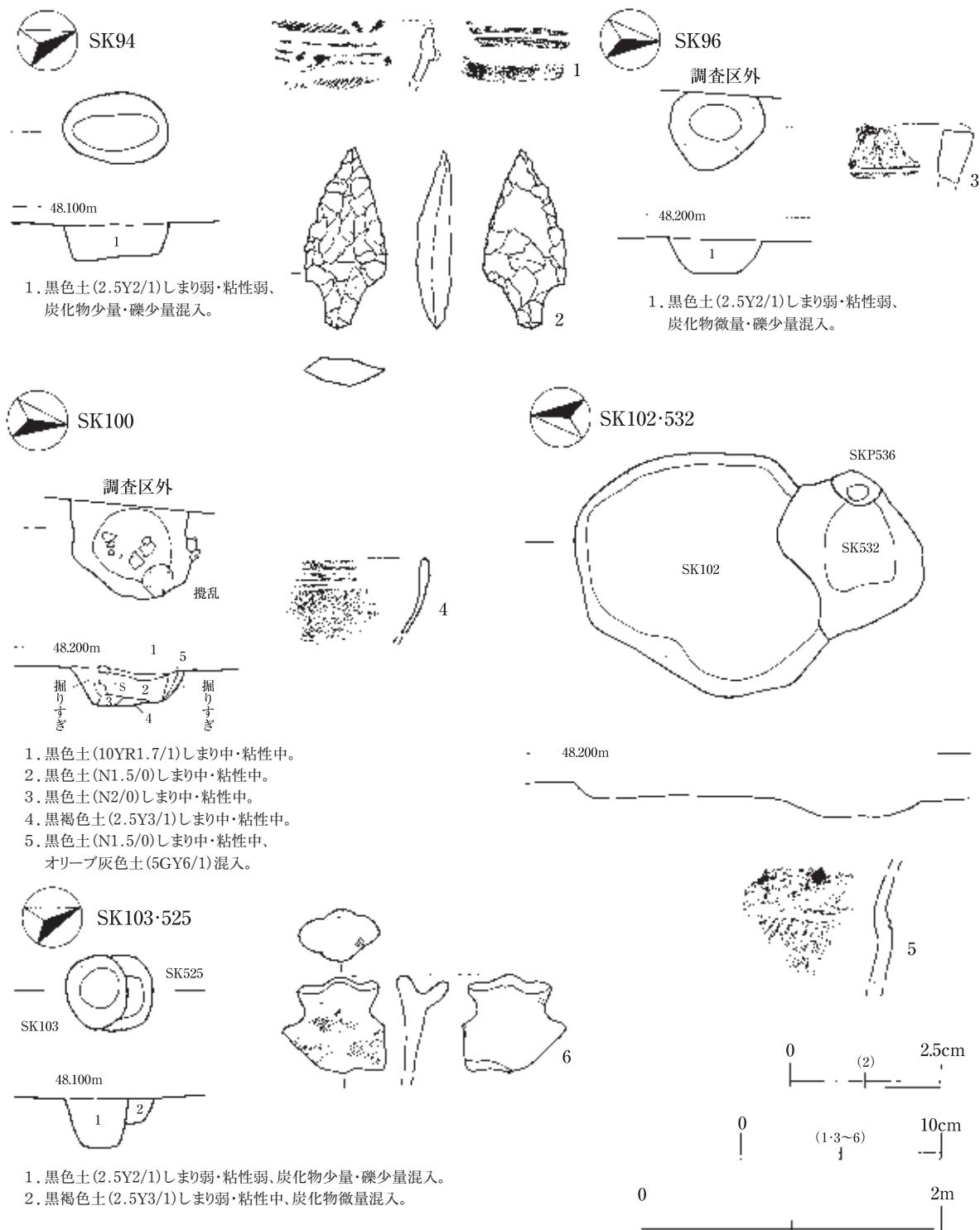
《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》1点を図示した（第103図6）。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。

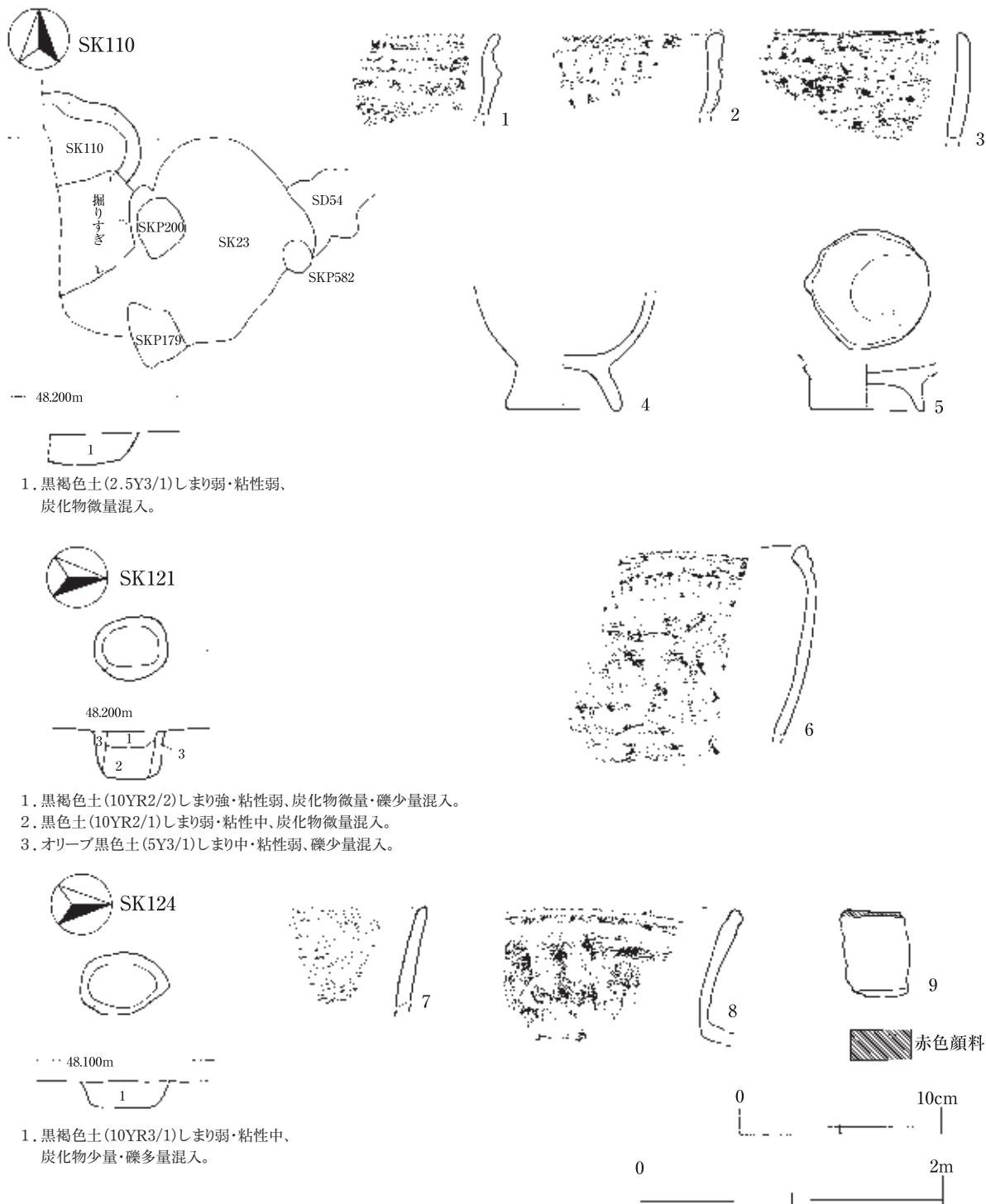
S K110土坑（第104図、図版5）

《位置と確認》N Q48・49、N R48・49グリッドのⅡ層で確認した。



番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	鉢	口縁部	SK94 覆土中	—	—	—		
2	剥片石器	石鏃		SK94 覆土中	最大長4.6	最大幅1.4	最大厚0.55	有茎鏃	
3	縄文土器	不明	口縁部	SK96 覆土中	—	—	—	波状口縁	
4	縄文土器	鉢	口縁部	SK100 RP1	—	—	—	炭化物付着	(科析-15)
5	縄文土器	鉢	胴部	SK102 覆土中	—	—	—	炭化物付着	(科析-17)
6	縄文土器	不明	口縁部の飾り	SK103 覆土中	—	—	—	波状口縁	

第103図 SK94·96·100·102·103·525·532土坑



番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	鉢	口縁部	SK110	—	—	—	内外:炭化物付着 補修孔	
2	縄文土器	鉢	口縁部	SK110	—	—	—	口縁に突起有り	
3	縄文土器	深鉢	口縁部	SK110 RP6	—	—	—	平口縁	
4	縄文土器	台付鉢	胴部～底部	SK110	—	5.4	(5.5)		
5	縄文土器	台付鉢	底部	SK110 RP1	—	—	—	内:炭化物付着 台の部分手づくね	
6	縄文土器	鉢	口縁部	SK121 覆土	—	—	—	磨り消し	
7	縄文土器	不明	口縁部	SK124 覆土	—	—	—	炭化物付着	(科析-27)
8	縄文土器	壺	口縁部	SK124 覆土	—	—	—	磨り消し	
9	縄文土器	壺	口縁部	SK124 覆土	—	—	—	磨り消し 顔料付着	

第104図 SK110・121・124土坑

《規模と平面形》遺構の一部は攪乱されているが、規模は長軸0.61m×短軸0.58m（残存値）、深さ0.18mで、平面形は略円形である。

《重複》SK23との明瞭な切り合いはないため、重複関係は不明である。

《土層》単層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》5点を図示した（第104図1～5）。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

SK121土坑（第104図、図版5）

《位置と確認》NP54グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.48m×短軸0.41m、深さ0.31mで、平面形は円形である。

《土層》3層に分層した。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》1点を図示した（第104図6）。

《時期》縄文時代後晩期と考えられる。

SK124土坑（第104図）

《位置と確認》NO52グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.58m×短軸0.40m、深さ0.15mで、平面形は橢円形である。

《土層》単層である。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》3点を図示した（第104図7～9）。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。

SK140・141土坑（第105図、図版5・7）

《位置と確認》NO54グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》SK140の規模は長軸0.89m×短軸0.56m（残存値）、深さ0.35mで、平面形は隅丸方形に近い。SK141の規模は長軸1.29m×短軸0.91m、深さ0.45mで、平面形は隅丸方形に近い。

《重複》SK140がSK141に切られる。

《土層》SK140・SK141は各々2層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》4点を図示した（第105図1～4）。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。

SK152土坑（第105図、図版6）

《位置と確認》NP47グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.96m×短軸0.63m、深さ0.38mで、平面形は橢円形である。

《土層》4層に分層した。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》4点を図示した（第105図4～8）。

《時期》縄文時代晩期と考えられる。



番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	剥片石器	石錐		SK140 覆土中 北側断面	最大長7.0	最大幅1.65	最大厚1.05		
2	縄文土器	不明	口縁部	SK141 RP11	—	—	—	炭化物付着	(科析-20)
3	縄文土器	鉢	胴部	SK141 覆土中	—	—	—	漆塗り	
4	縄文土器	壺か	胴部～底部	SK141 RP5	—	6.8	(2.6)	漆塗り	
5	縄文土器	鉢	口縁部	SK152 2層 RP7	—	—	—	炭化物付着	(科析-21)
6	縄文土器	深鉢	口縁部	SK152 覆土	—	—	—	最大厚1.05	条線文
7	縄文土器	鉢	口縁部	SK152 覆土	—	—	—	内外:漆塗り	
8	礫石器	石皿		SK152 RQ13	—	—	—	足付	

第105図 SK140・141・152土坑

S K 224・393・409土坑およびS K P 522・581柱穴様ピット（第106図、図版7）

《位置と確認》N Q47グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》S K224の規模は長軸0.84m×短軸0.56m、深さ0.20mで、平面形は橢円形である。

S K393の規模は長軸0.58m×短軸0.49m、深さ0.16mで、平面形は略円形である。S K409の規模は長軸0.64m×短軸0.41m、深さ0.16mで、平面形は歪んだ隅丸方形である。S K P 522の規模は長軸0.31m×短軸0.26m（残存値）、深さ0.38mで、平面形は略円形である。S K P 581の規模は長軸0.36m×短軸0.11m（残存値）で、平面形は円形である。

《重複》S K224がS K P 522と581を切り、S K393もS K P 522を切る。S K409のみ重複が見られない。

《土層》各々単一の層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》2点を図示した（第106図1・2、図版38-1）。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K 243土坑およびS K P 101・258・259・260柱穴様ピット（第106図）

《位置と確認》N P54・55グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》S K243の長軸0.52m（残存値）×短軸0.32m、深さ0.09mで、平面形は歪んだ橢円形である。S K P 101の規模は長軸0.20m×短軸0.14m（残存値）で、平面形は橢円形である。S K P 258の規模は長軸0.22m×短軸0.22m、深さ0.13mで、平面形は円形である。S K P 259の規模は長軸0.16m×短軸0.12m、深さ0.24mで、平面形は円形である。

S K P 260の規模は長軸0.27m×短軸0.26m、深さ0.26mで、平面形は円形である。

《重複》S K243をS K P 101・258・259がそれぞれ切り、S K P 101をS K P 260が切る。

《土層》S K243は3層に、S K P 258・260は2層に分層し、S K P 259は単層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》2点を図示した（第106図3・4）。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K 419土坑（第107図）

《位置と確認》N Q48グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》遺構の南側が一部不明瞭であるが、規模は長軸0.49m×短軸0.34m、深さ0.11mで、平面形は隅丸方形に近い。

《土層》単層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

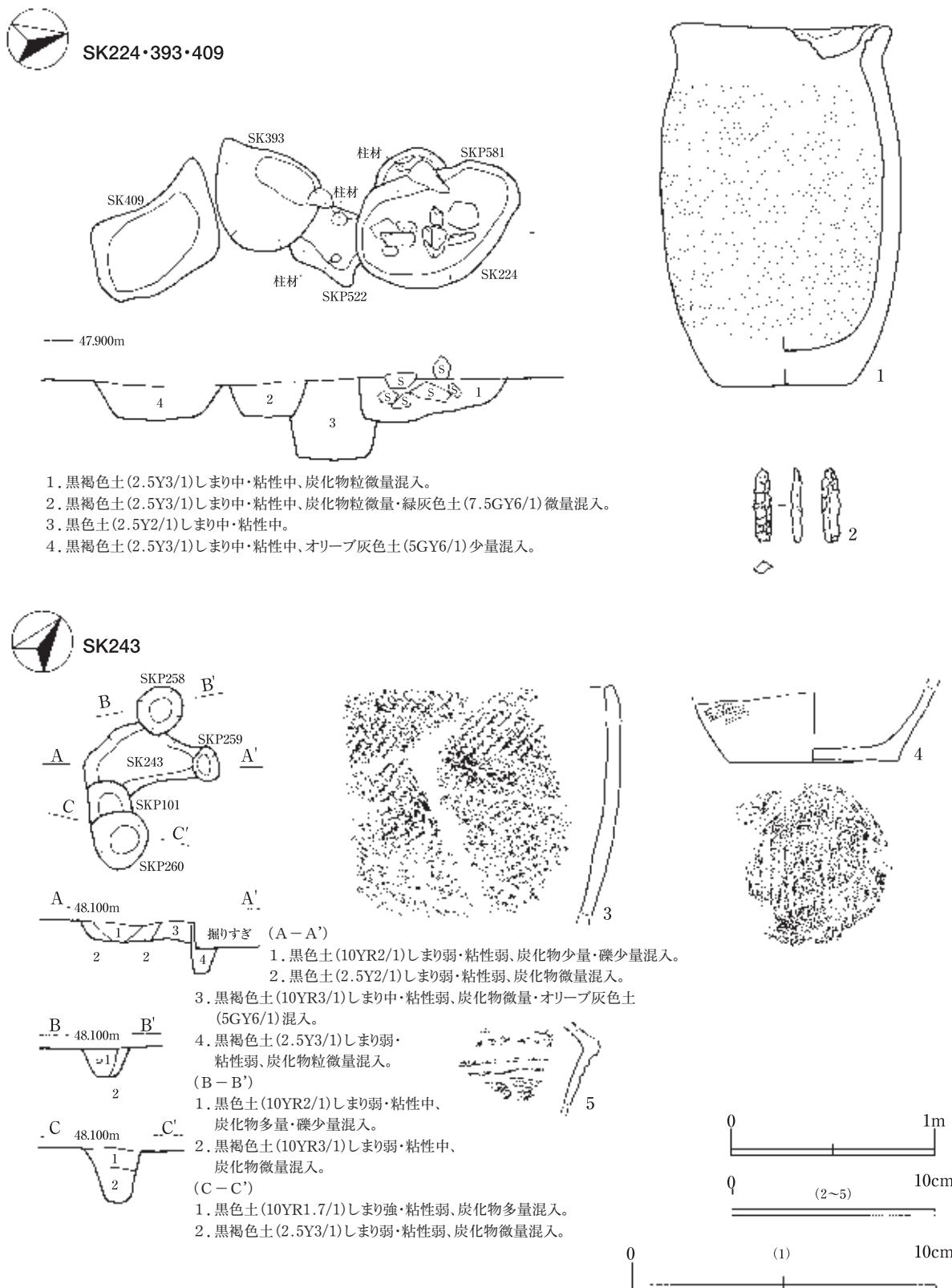
《出土遺物》1点を図示した（第107図1）。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

② 土器埋設遺構

S R20土器埋設遺構（第107図、図版8）

《位置と確認》N Q54・55グリッドのII層で確認した。



番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	深鉢	ほぼ完形	SK224 RP1	—	(4.0)	(11.8)	底部の一部が欠損 底面に縄痕	
2	剥片石器	石錐		SK224 覆土	—	—	—		
3	縄文土器	深鉢	口縁部	SK243 RP1	—	—	—	粗製土器	
4	縄文土器	深鉢	胴部～底部	SK243 RP1	—	8.3	(3.7)	底面加工痕	
5	縄文石器	壺	胴部	SKP258 覆土中	—	—	—	雲形文	

第106図 SK224・243・393・409土坑

《規模と平面形》 規模は長軸0.64m×短軸0.63m、深さ0.22mで、平面形は円形である。

《 土 層 》 3層に分層した。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 1点を図示した（第107図2）。

《 時 期 》 繩文時代晚期と考えられる。

③ 溝跡

S D54溝跡およびSK P582・586・587・588・589・590柱穴様ピット（第107図）

《 位置と確認 》 N Q48・49グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》 S D54の規模は長軸1.82m×短軸0.54m、深さ0.18mで、平面形は北東一南西方向に細長い溝状の形である。 SK P582の規模は長軸0.20m×短軸0.17mで、平面形は円形である。 SK P586の規模は長軸0.38m×短軸0.30mで、平面形は橢円形である。 SK P587の規模は長軸0.36m×短軸0.24mで、平面形は円形である。 SK P588の規模は長軸0.32m×短軸0.16m（残存値）で、平面形は略円形である。 SK P589の規模は長軸0.22m×短軸0.20mで、平面形は略円形である。 SK P590の規模は長軸0.30m×短軸0.20mで、平面形は橢円形である。

《 重複 》 S D54がSK P582・587～590それぞれに切られ、SK P586を切る。SK P587はSK P588を切る。

《 土 層 》 単層である。

《 壁・底面 》 壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 2点を図示した（第107図3・4）。

《 時 期 》 繩文時代晚期と考えられる。

S D166溝跡およびSK P34・142柱穴様ピット（第108図）

《 位置と確認 》 N R50、N Q50グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》 S D166の規模は長軸1.15m×短軸0.23m、深さ0.11mで、平面形は細長い溝状の形である。 SK P34の規模は長軸0.17m×短軸0.16mで、平面形は円形である。 SK P142の規模は長軸0.40m×短軸0.22m（残存値）で、平面形は半円形である。

《 重複 》 S D166がSK P142を切る。

《 土 層 》 単層である。

《 壁・底面 》 壁は急な角度で立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

《 出土遺物 》 1点を図示した（第108図1）。

《 時 期 》 繩文時代晚期と考えられる。

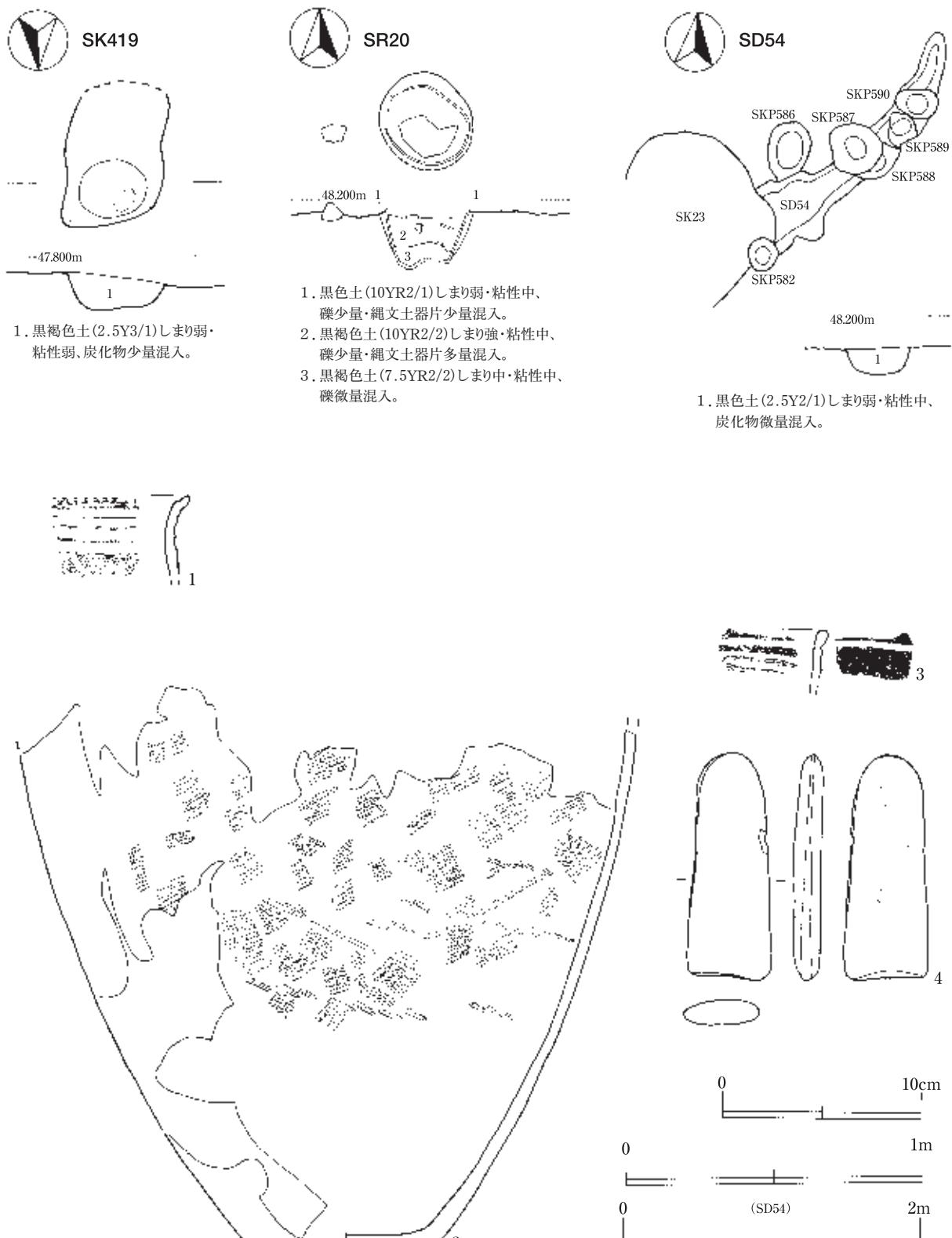
④ 柱穴様ピット

SK P14柱穴様ピット（第108図）

《 位置と確認 》 N R53グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》 規模は長軸0.29m×短軸0.29m、深さ0.07mで、平面形は略円形である。

《 土 層 》 単層である。



第107図 SK419土坑・SR20土器埋設遺構・SD54溝跡

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面はくぼんでいる。

《 出土遺物 》 なし。

《 時期 》 繩文時代晚期と考えられる。

S K P21柱穴様ピット (第108図)

《 位置と確認 》 N Q53グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.41m×短軸0.37m、深さ0.08mで、平面形は円形である。

《 土層 》 単層である。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 なし。

《 時期 》 繩文時代晚期と考えられる。

S K P22柱穴様ピット (第108図、図版9)

《 位置と確認 》 N Q53・54グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.58m×短軸0.49m、深さ0.13mで、平面形は円形に3か所の掘り形が付く。

《 土層 》 3層に分層した。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 1点を図示した(第108図2)。

《 時期 》 繩文時代晚期と考えられる。

S K P42・583柱穴様ピット (第108図、図版9)

《 位置と確認 》 N Q50グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 S K P42の規模は長軸0.38m×短軸0.34m、深さ0.27mで、平面形は円形である。

一部は調査区外にあるがS K P583の規模は長軸0.45m×短軸0.26m(残存値)、深さ0.28mで、平面形は略円形である。

《 重複 》 S K P42がS K P583を切る。

《 土層 》 各々単一の層である。

《 壁・底面 》 壁は西側が急な角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《 出土遺物 》 なし。

《 時期 》 繩文時代晚期と考えられる。

S K P45柱穴様ピット (第108図)

《 位置と確認 》 N Q49グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.32m×短軸0.27m、深さ0.16mで、平面形は円形である。

《 土層 》 単層である。

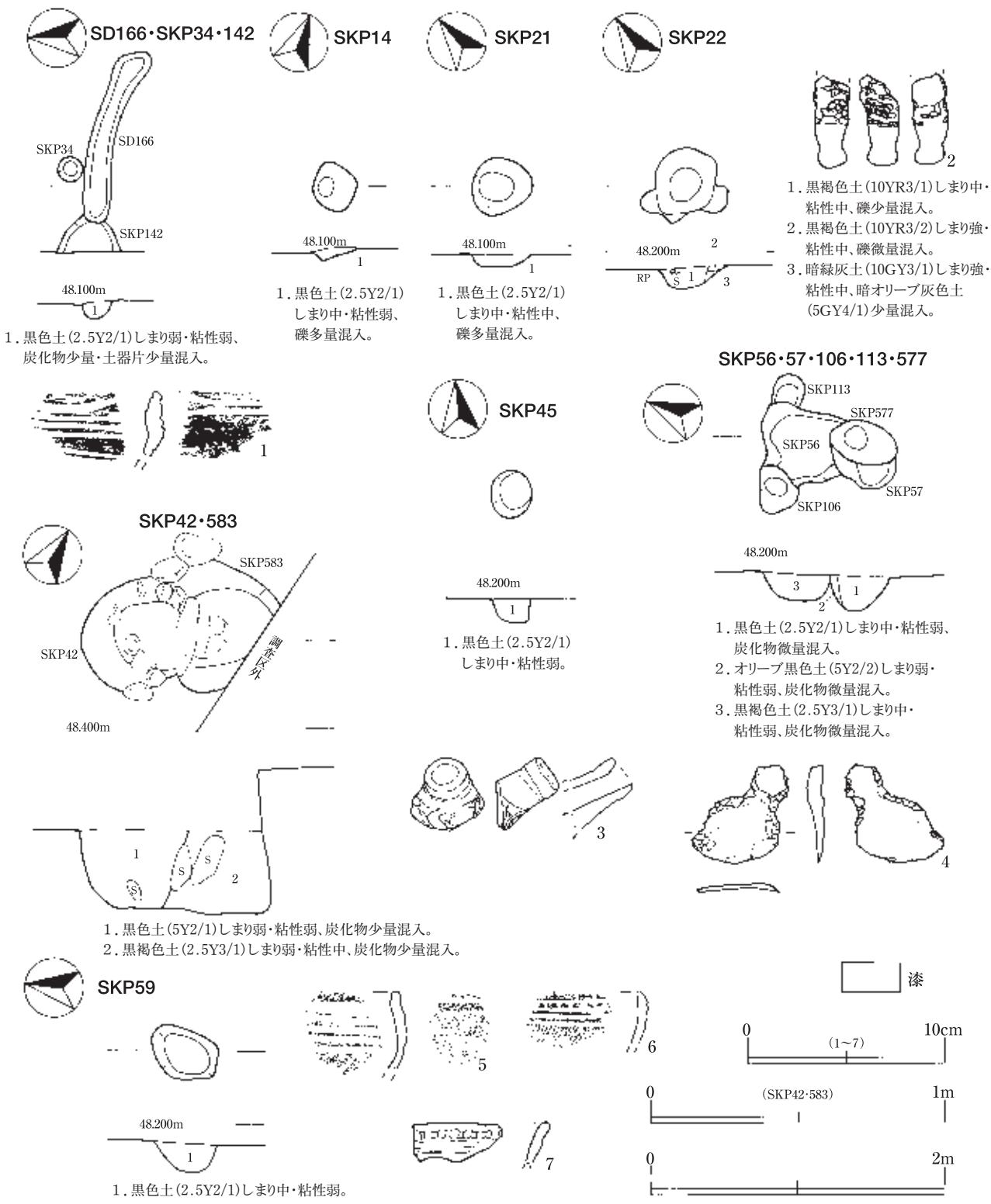
《 壁・底面 》 壁は東側が垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

《 出土遺物 》 1点を図示した(第108図3)。

《 時期 》 繩文時代晚期と考えられる。

S K P56・57・106・113・577柱穴様ピット (第108図、図版9)

《 位置と確認 》 N Q49グリッドのⅡ層で確認した。



第108図 SK166溝跡・SKP柱穴様ピット(1)

番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口徑(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	浅鉢	口縁部	SD166	—	—	—	波状口縁 炭化物付着	
2	土製品	土偶	右足	SKP22 RP3	—	—	—		
3	縄文土器	注口	注ぎ口	SKP45	—	—	—	大型注口 雲形文	
4	剥片石器	石匙		SKP57 RQ2	最大長5.0	最大幅5.0	最大厚0.9		
5	縄文土器	鉢	口縁部	SKP59	—	—	—	内外:炭化物付着	
6	縄文土器	鉢	口縁部	SKP59	—	—	—	内:炭化物付着	
7	縄文土器	鉢	口縁部	SKP59	—	—	—	漆塗り	

《規模と平面形》 S K P 56の規模は長軸0.58m×短軸0.51m（残存値）、深さ0.17mで、平面形は略円形である。S K P 57の規模は長軸0.40m×短軸0.16m（残存値）で、平面形は略円形である。S K P 106の規模は長軸0.32m×短軸0.25mで、平面形は略円形である。S K P 113の規模は長軸0.20m×短軸0.18mで、平面形は橢円形である。S K P 577の規模は長軸0.46m×短軸0.29m、深さ0.23mで、平面形は橢円形である。

《重複》 S K P 56がS K P 57・106・577に切られ、S K P 113を切る。S K P 57はS K P 577に切られる。

《土層》 S K P 577は2層に分層し、S K P 56は単層である。

《壁・底面》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》 1点を図示した（第108図4）。

《時期》 繩文時代晩期と考えられる。

S K P 59柱穴様ピット（第108図）

《位置と確認》 N Q49グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》 規模は長軸0.49m×短軸0.34m、深さ0.19mで、平面形は略円形である。

《土層》 単層である。

《壁・底面》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》 3点を図示した（第108図5～7）。

《時期》 繩文時代晩期と考えられる。

S K P 60・120・526柱穴様ピット（第109図）

《位置と確認》 N Q46、N R46グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》 S K P 60の規模は長軸0.96m×短軸0.86m、深さ0.64mで、平面形は略円形である。

S K P 120の規模は長軸0.79m×短軸0.42mで、平面形は橢円形である。S K P 526の規模は長軸0.75m×短軸0.64m、深さ0.42mで、平面形は略円形である。

《重複》 S K P 60がS K P 526を切り、S K P 526はS K P 120にも切られる。

《土層》 S K P 526は2層に分層し、S K P 60は単層である。

《壁・底面》 壁は急に立ち上がり、底面はくぼんでいる。

《出土遺物》 1点を図示した（第109図1）。

《時期》 繩文時代晩期と考えられる。

S K P 61・149・529柱穴様ピット（第109図）

《位置と確認》 N Q・N R49グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》 S K P 61の規模は長軸0.76m×短軸0.62m、深さ0.15mで、平面形は円形である。

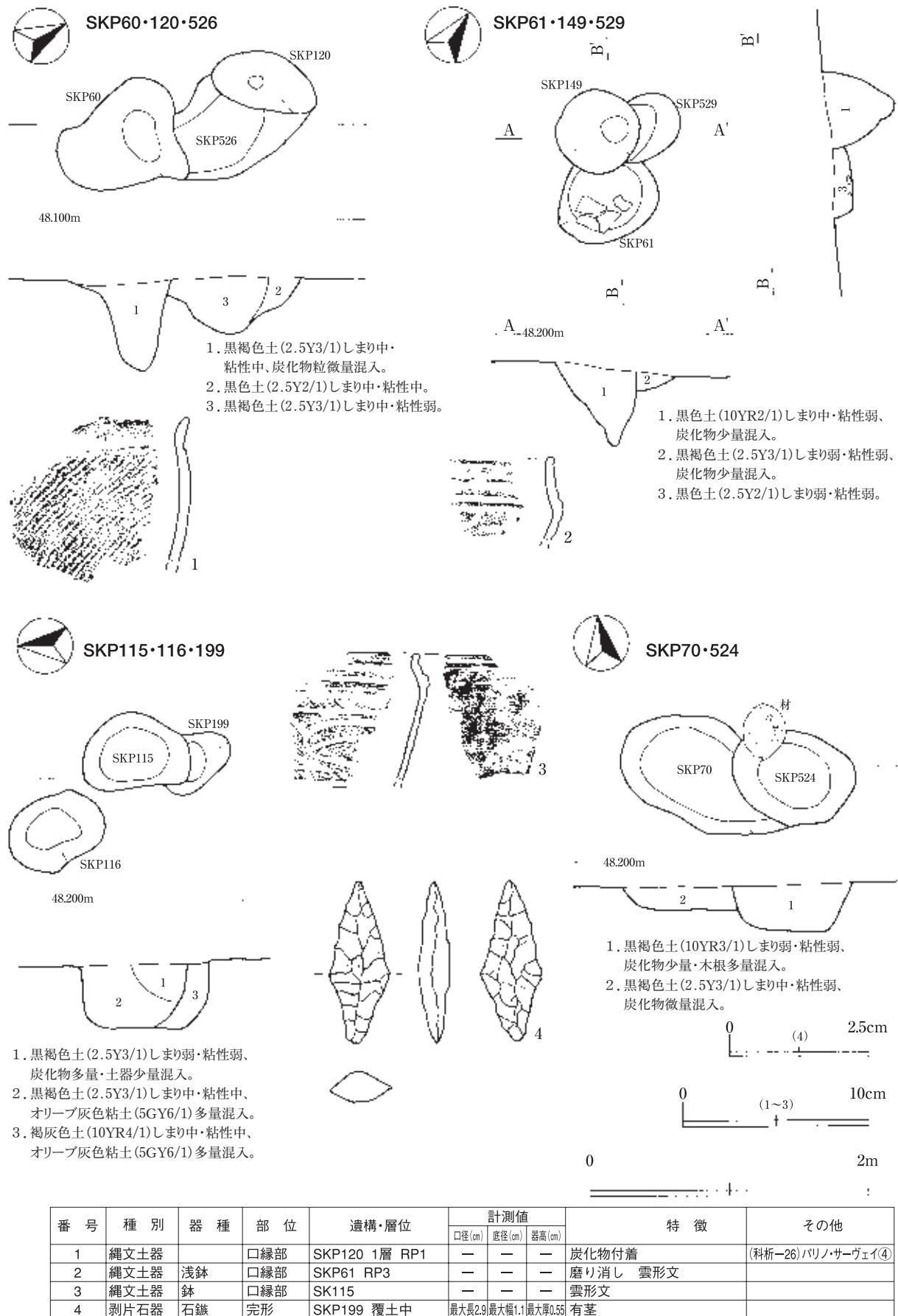
S K P 149の規模は長軸0.62m×短軸0.62m、深さ0.55mで、平面形は円形である。S K P 529の規模は長軸0.48m×短軸0.30m、深さ0.14mで、平面形は橢円形である。

《重複》 S K P 61はS K P 149と529に切られ、S K P 529は149に切られる。

《土層》 各々単一の層である。

《壁・底面》 壁は急な角度で立ち上がり、底面はくぼんでいる。

《出土遺物》 1点を図示した（第109図2）。



第109図 SKP柱穴様ピット(2)

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K P70・524柱穴様ピット (第109図、図版9)

《 位置と確認 》 N O49、N P49グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 S K P70の規模は長軸1.30m×短軸0.90m、深さ0.17mで、平面形は長楕円形である。S K P524の規模は長軸0.90m×短軸0.68m、深さ0.34mで、平面形は楕円形である。

《 重複 》 S K P70がS K P524に切られる。

《 土層 》 各々単一の層である。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 なし。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K P115・116・199柱穴様ピット (第109図、図版9)

《 位置と確認 》 N Q48グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 S K P115の規模は長軸0.78m×短軸0.56m、深さ0.46mで、平面形は略円形である。

S K P116の規模は長軸0.72m×短軸0.52mで、平面形は楕円形である。S K P199の規模は長軸0.54m×短軸0.36m、深さ0.46mで、平面形は略円形である。

《 重複 》 S K P115がS K P199を切る。S K P116は重複が見られない。

《 土層 》 S K P115は2層に分層し、S K P199は1層である。

《 壁・底面 》 壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 2点を図示した(第109図3・4)。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K P133柱穴様ピット (第110図)

《 位置と確認 》 N P54グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.47m×短軸0.24m、深さ0.24mで、平面形は楕円形である。

《 土層 》 単層である。

《 壁・底面 》 壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《 出土遺物 》 1点を図示した(第110図1)。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K P144柱穴様ピット (第110図)

《 位置と確認 》 N P52グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.35m×短軸0.25m、深さ0.12mで、平面形は楕円形である。

《 土層 》 単層である。

《 壁・底面 》 壁は西側が垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

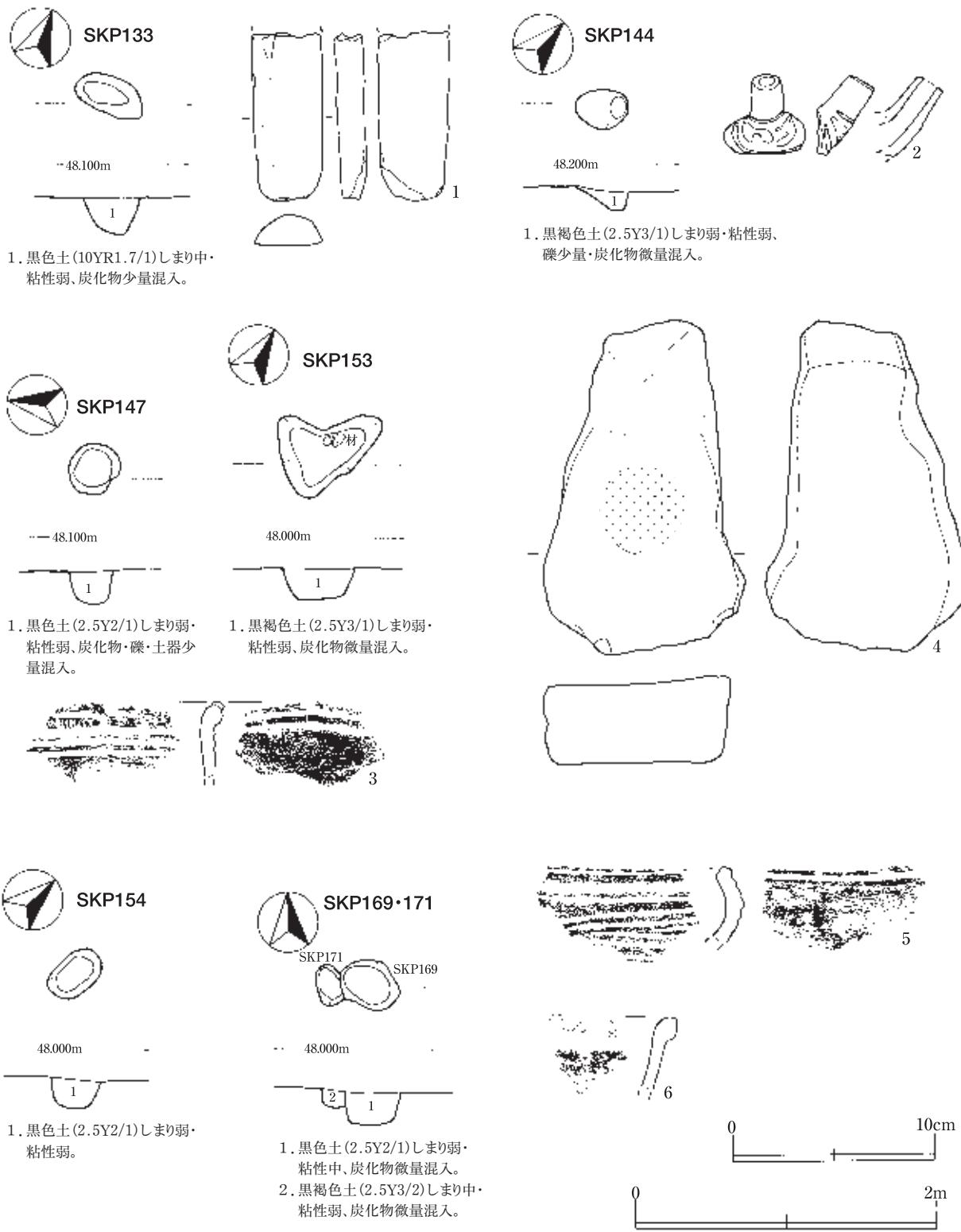
《 出土遺物 》 1点を図示した(第110図2)。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K P147柱穴様ピット (第110図)

《 位置と確認 》 N P52グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.33m×短軸0.32m、深さ0.21mで、平面形は円形である。



第110図 SKP柱穴様ピット(3)

《 土 層 》 単層である。
《 壁・底面 》 壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。
《 出土遺物 》 1点を図示した（第110図3）。
《 時 期 》 繩文時代晚期と考えられる。

S K P153柱穴様ピット（第110図）

《 位置と確認 》 N P 47グリッドのⅡ層で確認した。
《 規模と平面形 》 規模は長軸0.72m×短軸0.53m、深さ0.20mで、平面形は三角形である。
《 土 層 》 単層である。
《 壁・底面 》 壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。
《 出土遺物 》 1点を図示した（第110図4）。
《 時 期 》 繩文時代晚期と考えられる。

S K P154柱穴様ピット（第110図）

《 位置と確認 》 N P 47グリッドのⅡ層で確認した。
《 規模と平面形 》 規模は長軸0.39m×短軸0.24m、深さ0.19mで、平面形は橢円形である。
《 土 層 》 単層である。
《 壁・底面 》 壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。
《 出土遺物 》 1点を図示した（第110図5）。
《 時 期 》 繩文時代晚期と考えられる。

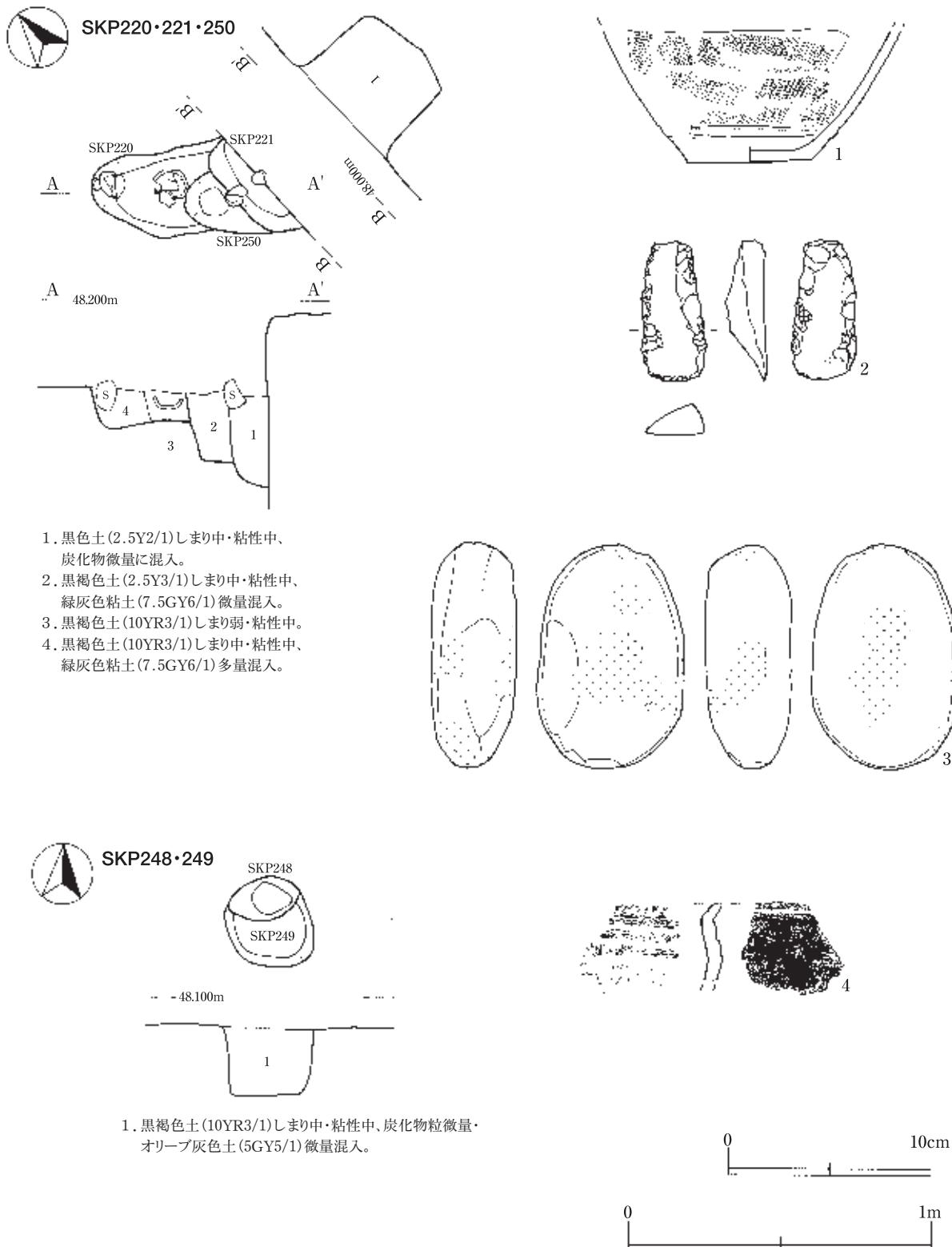
S K P169・171柱穴様ピット（第110図）

《 位置と確認 》 N Q48、N R48グリッドのⅡ層で確認した。
《 規模と平面形 》 S K P169の規模は長軸0.41m×短軸0.31m、深さ0.20mで、平面形は橢円形である。
S K P171の規模は長軸0.26m×短軸0.15m（残存値）、深さ0.10mで、平面形は橢円形である。
《 重複 》 S K P169がS K P171を切る。
《 土 層 》 各々単一の層である。
《 壁・底面 》 壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。
《 出土遺物 》 1点を図示した（第110図6）。
《 時 期 》 繩文時代晚期と考えられる。

S K P220・221・250柱穴様ピット（第111図、図版9）

《 位置と確認 》 N Q48グリッドのⅡ層で確認した。
《 規模と平面形 》 遺構の一部は調査区外にあるが、S K P220の規模は長軸0.40m（残存値）×短軸0.29m、深さ0.14mで、平面形は長橢円形である。S K P221の規模は長軸0.40m×短軸0.11m、深さ0.30mで、平面形は方形の一辺を示す。S K P250の規模は長軸0.27m（残存値）×短軸0.17m、深さ0.22mで、平面形は略円形である。

《 重複 》 S K P220がS K P250に切られ、S K P250はS K P221に切られる。
《 土 層 》 S K P220は2層に分層し、他は単層である。
《 壁・底面 》 壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。
《 出土遺物 》 3点を図示した（第111図1～3）。



番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	深鉢	胴部～底部	SKP220・221 RP2	(14.6)	6.2	—	底面ミガキ 胴部横綾線返し	
2	剥片石器	石籠		SKP221 覆土中	最大長6.9	最大幅3.2	最大厚2.1		
3	礫石器	凹石		SKP220・221 S10	最大長11.1	最大幅7.2	最大厚4.3		
4	縄文土器	鉢	口縁部	SKP249	—	—	—		

第111図 SKP柱穴様ピット(4)

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K P 248・249柱穴様ピット (第111図)

《 位置と確認 》 N Q49グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 S K P 248の規模は長軸0.25m×短軸0.15mで、平面形は橢円形である。S K P 249の規模は長軸0.28m×短軸0.25m（残存値）、深さ0.22mで、平面形は円形である。

《 重複 》 S K P 248がS K P 249を切る。

《 土層 》 単層である。

《 壁・底面 》 壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 1点を図示した（第111図4）。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K P 269・270柱穴様ピット (第112図、図版10)

《 位置と確認 》 N P47グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 S K P 269の規模は長軸0.42m×短軸0.40m、深さ0.24mで、平面形は略円形である。

S K P 270の規模は長軸0.53m×短軸0.42m、深さ0.14mで、平面形は略円形である。

《 重複 》 S K P 269がS K P 270を切る。

《 土層 》 6層に分層した。

《 壁・底面 》 壁は急な角度で立ち上がり、底面は凹凸である。

《 出土遺物 》 1点を図示した（第112図1）。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K P 271柱穴様ピット (第112図、図版10)

《 位置と確認 》 N P 47・48グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.59m×短軸0.47m、深さ0.20mで、平面形は橢円形である。

《 土層 》 S K P 269は4層に、S K P 270は2層に分層した。

《 壁・底面 》 壁は急な角度で立ち上がり、底面は南側が深くなっている。

《 出土遺物 》 1点を図示した（第112図2）。

《 時期 》 縄文時代晚期と考えられる。

S K P 285・301・302・585柱穴様ピット (第112図)

《 位置と確認 》 N Q48グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 S K P 285の規模は長軸0.58m×短軸0.46m、深さ0.22mで、平面形は略円形である。

S K P 301の規模は長軸0.44m（残存値）×短軸0.42m、深さ0.19mで、平面形は橢円形である。S K

P 302の規模は長軸0.32m×短軸0.32m（残存値）、深さ0.19mで、平面形は略円形である。S K P 585の規模は長軸0.60m×短軸0.34m、深さ0.07mで、平面形は三角形に近い。

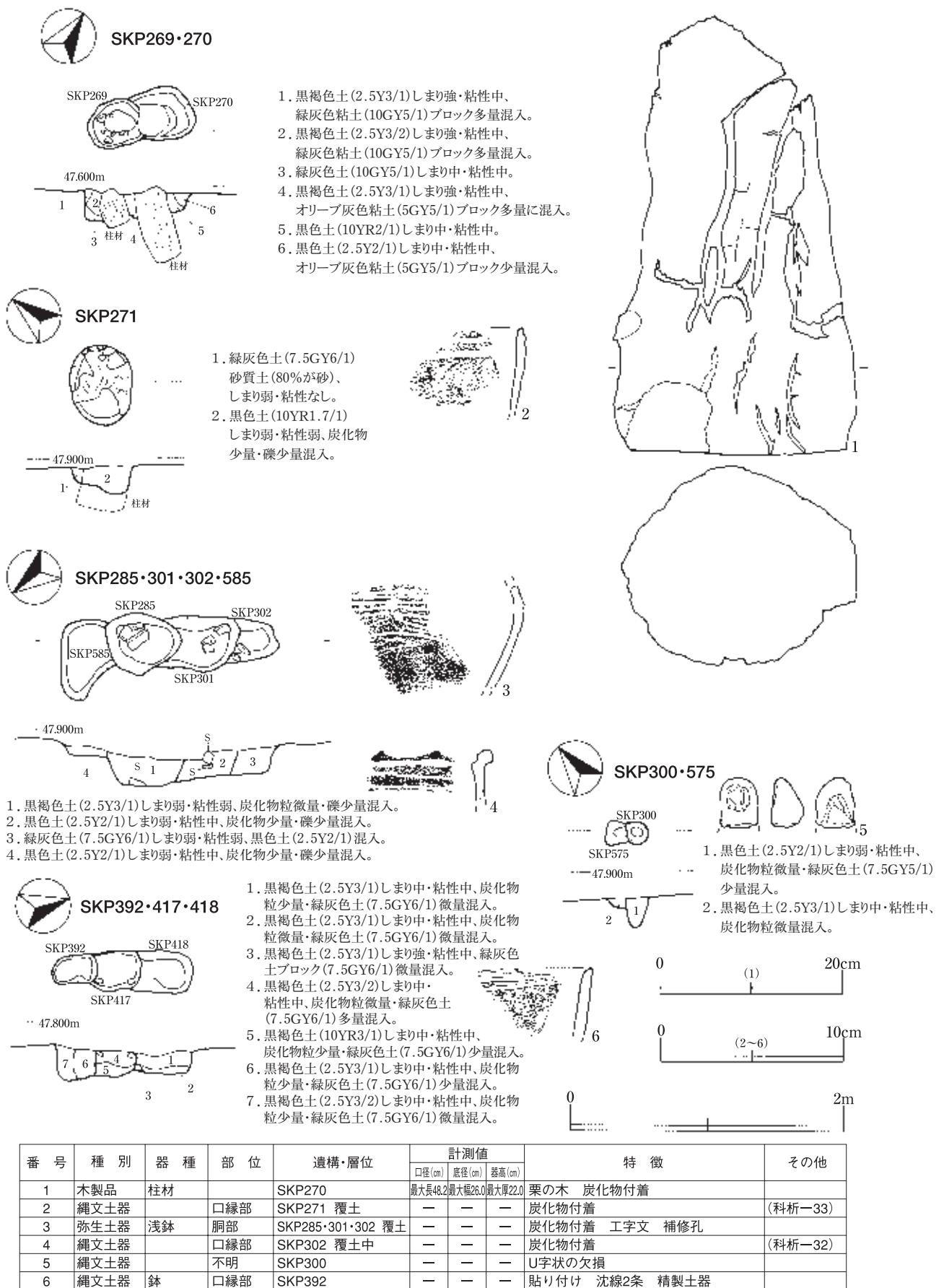
《 重複 》 S K P 285がS K P 301・585を切る。S K P 302はS K P 301に切られる。

《 土層 》 各々単一の層である。

《 壁・底面 》 壁は急に立ち上がり、底面は北側が浅くなっている。

《 出土遺物 》 2点を図示した（第112図3・4）。

《 時期 》 S K P 285は弥生時代と考えられる。



第112図 SKP柱穴様ピット(5)

S K P 300・575柱穴様ピット（第112図）

《位置と確認》N Q47グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》S K P 300の規模は長軸0.18m×短軸0.17m、深さ0.22mで、平面形は円形である。

S K P 575の規模は長軸0.18m×短軸0.15m（残存値）、深さ0.06mで、平面形は略円形である。

《重複》S K P 300がS K P 575を切る。

《土層》各々単一の層である。

《壁・底面》壁は急に立ち上がり、底面は北側が浅くなっている。

《出土遺物》1点を図示した（第112図5）。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K P 392・417・418柱穴様ピット（第112図、図版10）

《位置と確認》N Q47～48グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》S K P 392の規模は長軸0.34m×短軸0.21m、深さ0.25mで、平面形は略円形である。

S K P 417の規模は長軸0.32m（残存値）×短軸0.30m、深さ0.20mで、平面形は略円形である。S K

P 418の規模は長軸0.39m×短軸0.32m、深さ0.16mで、平面形は長方形である。

《重複》S K P 392がS K P 417を切り、S K P 417はS K P 418を切る。

《土層》S K P 392・417は2層、S K P 418は3層に分層した。

《壁・底面》壁は急に立ち上がり、底面は凹凸である。

《出土遺物》1点を図示した（第112図6）。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

⑤ 捨て場

S T 37捨て場（第113図、図版10～13）

《位置と確認》NO・N P 47～54、N Q・N R 47～55グリッドのⅡ層で確認した。第92図で示した第2次調査範囲図の南西端にあたり、水路工事のためコの字状の形になる部分が捨て場となった。

《規模と平面形》規模は長軸32.0m（南北方向）×短軸14.5m（東西方向）、確認面からの深さ0.60～0.85mである。隣接する民家側も住宅建設の際に多数の土器・石器が出土したという。よって、捨て場の規模は今回の調査で確認したグリッド範囲より、さらに東側および南側へ広がるものと考えられる。

《土層》第93図の基本土層図に示した。

《出土遺物》244点を図示した（第113～132図、図版35～38）。

《時期》縄文時代晚期から弥生時代前期と考えられる。

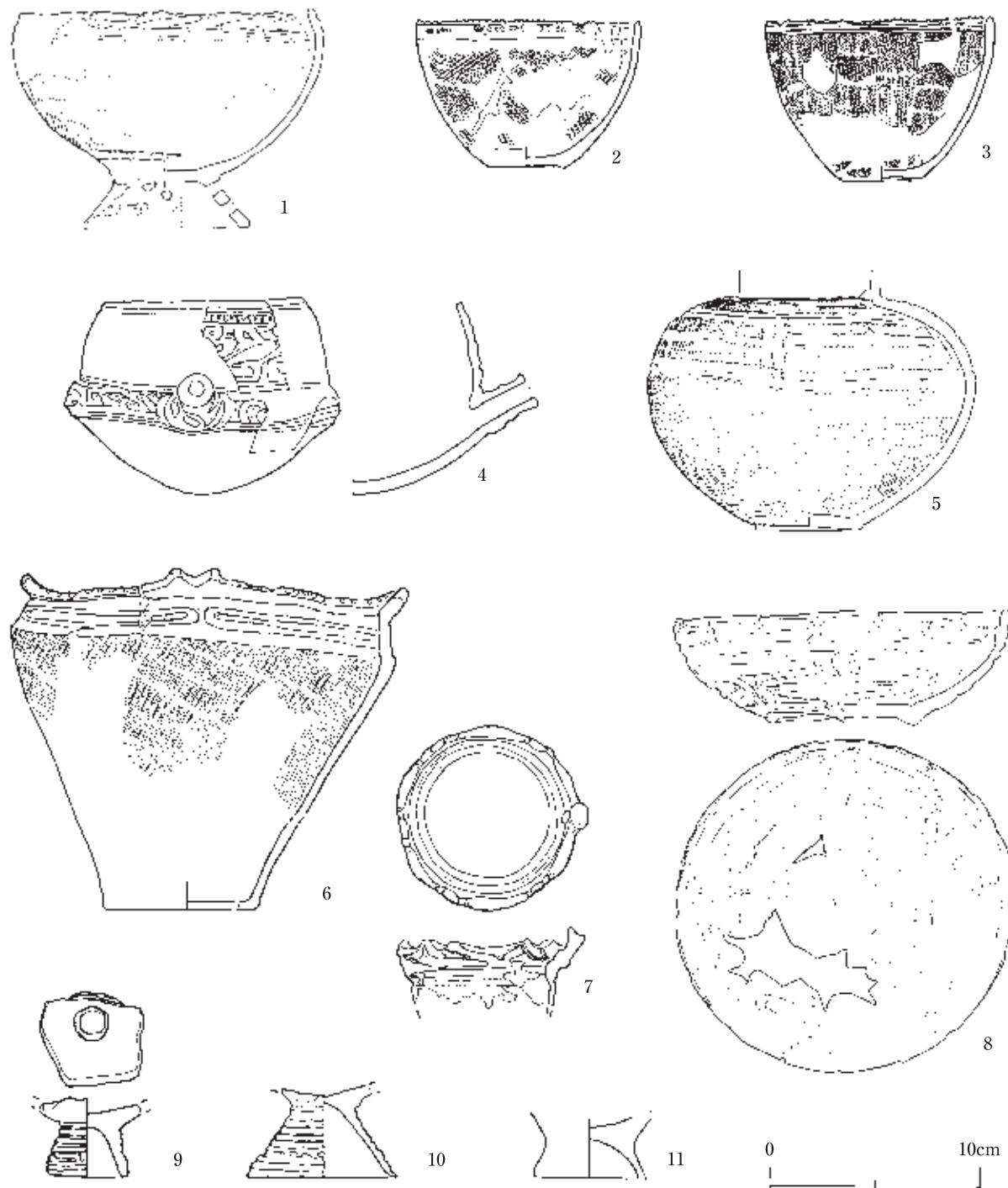
(2) その他の調査区の検出遺構と遺物

① 土坑

S K 01・02土坑（第133図、図版14）

《位置と確認》N S 72グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》S K 01の規模は長軸1.21m×短軸0.80m（残存値）、深さ0.17mで、平面形は略円形である。



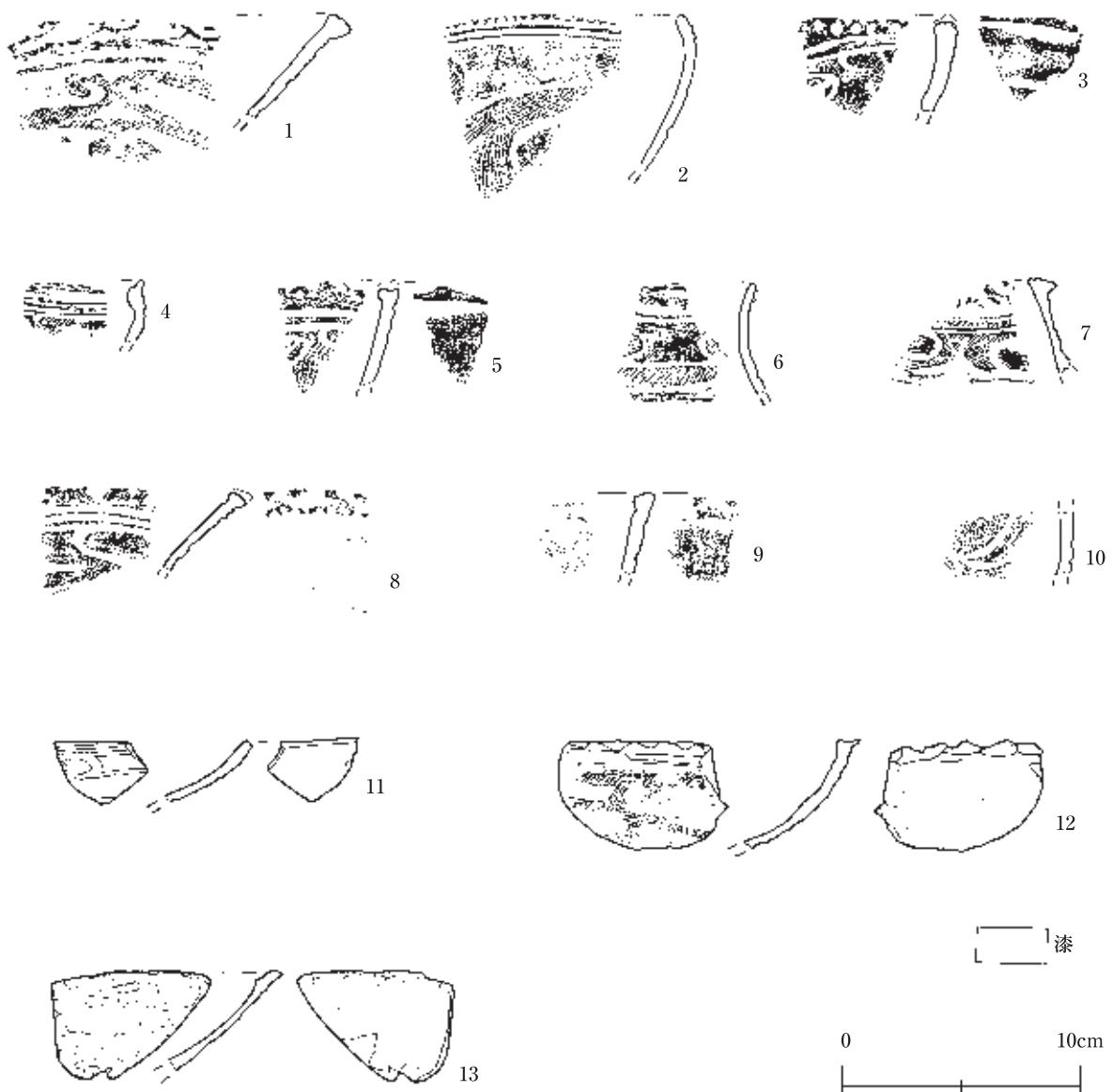
番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	台付鉢	ほぼ完形	NQ55 II b層	—	8.0	10.4		
2	縄文土器	鉢	ほぼ完形	NQ51 II 層	(10.5)	(3.6)	7.0		
3	縄文土器	鉢	ほぼ完形	NP55 II 層	(10.6)	3.6	7.7	炭化物付着	
4	縄文土器	注口	ほぼ完形	NR50・51 II 層	—	—	(9.15)	雲形文	
5	縄文土器	壺	ほぼ完形	NO54—括	—	5.0	12.65		
6	縄文土器	鉢	ほぼ完形	NO50 II b層 NP50 II b層	(17.8)	(7.0)	(16.2)	内外:炭化物付着	
7	縄文土器	壺	口縁部	NQ48 II b層	8.9	—	—		
8	縄文土器	浅鉢	ほぼ完形	NP51—括	15.8	—	5.4	底部の一部欠損	
9	縄文土器	台付鉢	台部	NP47 III 層	—	—	—	台部分 工字文 底面に円形の沈線文	
10	縄文土器	台付鉢	台部	NO47 III 層	—	7.0	—	工字文	
11	縄文土器		台部	NQ74 III 層 RP1	—	—	—		(科析-90)

第113図 ST37捨て場出土遺物(1)



番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	深鉢	口縁部	NQ48 II b下層	—	—	—		
2	縄文土器	深鉢	口縁部	NR48 II b層	—	—	—	波状口縁 沈線2条	
3	縄文土器	深鉢	口縁部	NR50 III層	—	—	—	入組文 磨り消し 口縁側羊歯状	
4	縄文土器	深鉢	口縁部	NP49 II b層	—	—	—	波状口縁 磨り消し	
5	縄文土器	鉢	口縁部	NQ49 III層	—	—	—	入組文	
6	縄文土器	鉢	口縁部	NQ55	—	—	—	雲形文	
7	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 II層	—	—	—	雲形文 内:炭化物付着 平口縁	
8	縄文土器	鉢	口縁部	NS51 一括	—	—	—		
9	縄文土器	鉢	口縁部	NO59 II b層	—	—	—	入組文	
10	縄文土器	鉢	口縁部	NS51 一括	—	—	—	入組文 磨滅が著しい	
11	縄文土器	鉢	口縁部	NO53 II層	—	—	—		
12	縄文土器	鉢	口縁部	NR52 II層	—	—	—		
13	縄文土器	鉢	口縁部	NO54	—	—	—		(科析-63)
14	縄文土器	鉢	口縁部	NO52	—	—	—		(科析-86)
15	縄文土器	鉢	口縁部	NS51	—	—	—		(科析-83)
16	縄文土器	鉢	口縁部	NQ55 II b層	—	—	—	後付突起口縁	
17	縄文土器	鉢	口縁部	NO54 II層	—	—	—	胴部に突起 口唇部入組文	
18	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 III層	—	—	—	入組文 口唇2段	
19	縄文土器	皿	口縁部	NQ55 II b層	—	—	—		
20	縄文土器	深鉢	胴部	NR52 II層	—	—	—	雲形文 突起あり	

第114図 ST37捨て場出土遺物(2)



番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	基高(cm)		
1	縄文土器	浅鉢	口縁部	NQ55	—	—	—	雲形文	
2	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 II層	—	—	—	雲形文 磨り消し	
3	縄文土器	鉢	口縁部	NR55 II層	—	—	—	雲形文	
4	縄文土器	鉢	口縁部	NP54 III層	—	—	—		(科析-96)
5	縄文土器	鉢	口縁部	NQ47 IIb層	—	—	—	雲形文	
6	縄文土器		口縁部	NP48 IIb層	—	—	—	雲形文 磨り消し	
7	縄文土器	鉢	口縁部	NO54 II層	—	—	—	雲形口縁 雲形文 磨り消し	
8	縄文土器	浅鉢	口縁部	NR59 III層	—	—	—	雲形文	
9	縄文土器	鉢	口縁部	NQ55	—	—	—	磨り消し	
10	縄文土器	鉢	胴部	NP48 IIb層	—	—	—	雲形文	
11	縄文土器	皿	口縁部	NR56 II層	—	—	—	雲形文 内外:漆塗り	
12	縄文土器	皿	口縁部	NQ55 II層	—	—	—	入組文 漆塗り	
13	縄文土器	皿	口縁部	NQ53 II層 NQ49 II層	—	—	—	入組文 漆塗り	

第115図 ST37捨て場出土遺物(3)



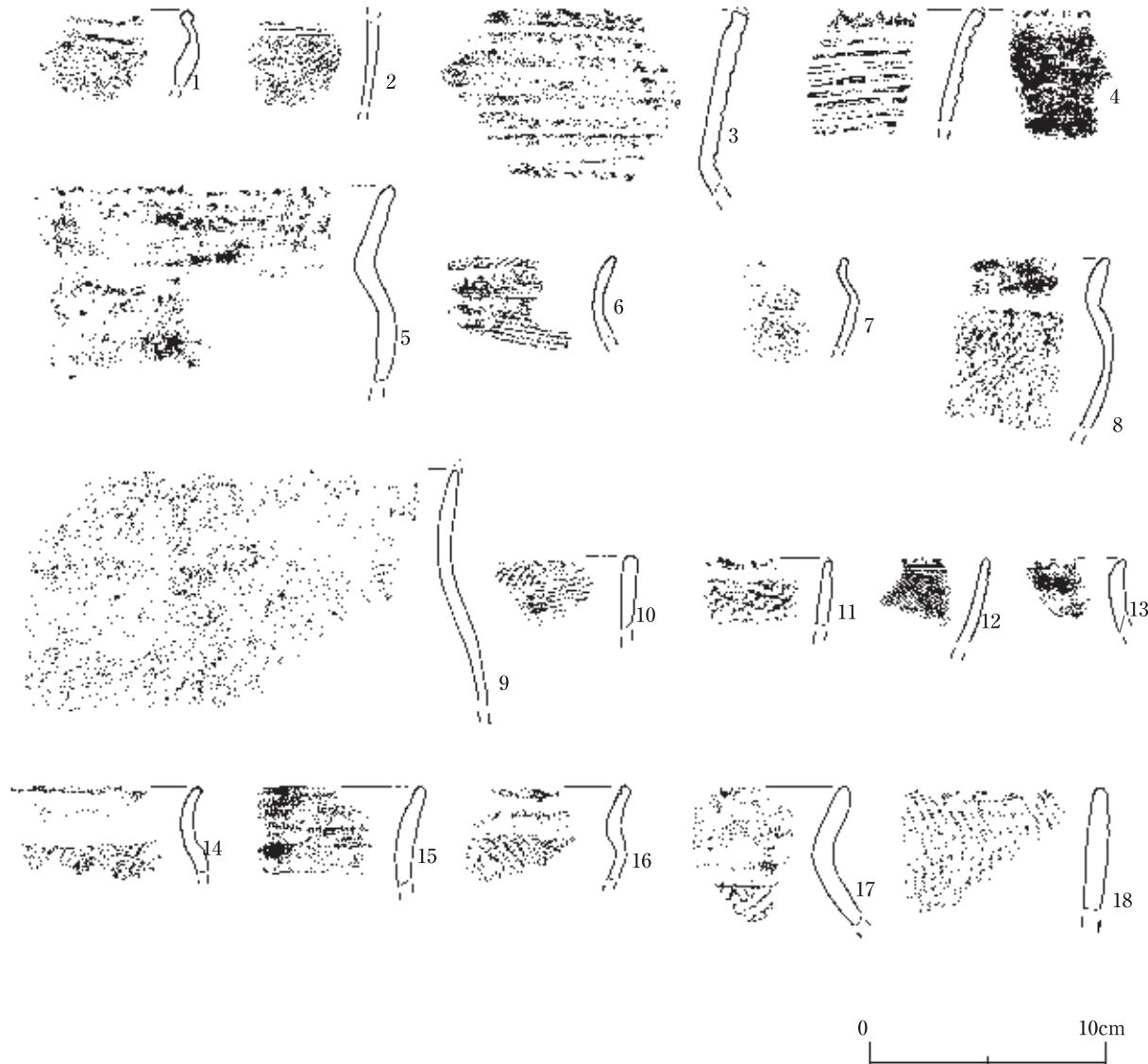
番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	鉢	口縁部	NP50 II b層	—	—	—	工字文	
2	縄文土器	鉢	口縁部	NQ57 II層	—	—	—		
3	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 II層 RP1	—	—	—		(科析-54)
4	縄文土器	鉢	口縁部	NP49	—	—	—		(科析-87)
5	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 VI層	—	—	—	口唇部に溝	
6	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 III層	—	—	—	鋸歯口縁 羊歯状文	
7	縄文土器	鉢	口縁部	NP50 II b層	—	—	—	口唇部に溝 逆くの字 内面に沈線	
8	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 II b層	—	—	—	炭化物付着 口唇部溝	
9	縄文土器	鉢	口縁部	NO50	—	—	—		(科析-85)
10	縄文土器	鉢	口縁部	NR48 II b層	—	—	—	沈線7条 鋸歯口縁	
11	縄文土器	鉢	口縁部	NO49 II層	—	—	—	外:炭化物付着 捨物有り 口唇部に溝 口縁下に3条沈線	
12	縄文土器	鉢	口縁部	NO50 II層	—	—	—	内面沈線 波状口縁	
13	縄文土器	鉢	口縁部	NQ47 II b層	—	—	—	工字文 口唇部に溝 内面に沈線	
14	縄文土器	鉢	口縁部	NO50 II b層	—	—	—		(科析-62)
15	縄文土器	鉢	口縁部	NQ47 II b層	—	—	—	工字文 口唇部に溝 炭化物付着	
16	縄文土器	鉢	口縁部	NO53 II層	—	—	—	内:付着物あり	

第116図 ST37捨て場出土遺物(4)



番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	基高(cm)		
1	縄文土器	皿	胴部	NR57 II層	—	—	—	工字文 アスファルト付着	
2	縄文土器	鉢	口縁部	NO52 II層	—	—	—	突起口縁 粘土紐貼り付け	
3	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 II層	—	—	—	口唇部に溝 内面に沈線	
4	縄文土器	鉢	口縁部	NQ55	—	—	—	内面に沈線	
5	縄文土器	浅鉢	口縁部	NQ47 II b層	—	—	—	工字文 内面に沈線	
6	縄文土器	鉢	口縁部	NQ50 II b層 RP1	—	—	—		(科析-92)
7	縄文土器	鉢	口縁部	NQ50 II 層	—	—	—	鋸歯口縁 漆付着	
8	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 II b下層	—	—	—	口唇部に溝 縦に沈線あり	
9	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48 III層	—	—	—	突起口縁 内面に沈線 口唇部に溝	
10	縄文土器	鉢	口縁部	NQ47 II b層	—	—	—	工字文 波状口縁	
11	縄文土器	浅鉢	口縁部	NQ47 III層	—	—	—	変形工字文 波状口縁	
12	縄文土器	鉢	口縁部	NQ47 III層	—	—	—	変形工字文 補修孔 精製土器 口唇部に溝	
13	縄文土器	鉢	口縁部	NQ50 II 層 RP1	—	—	—		(科析-53)
14	縄文土器	浅鉢	口縁部	NQ55	—	—	—	変形工字文 波状口縁 精製土器 口唇部に溝	
15	縄文土器	浅鉢	口縁部	NQ55	—	—	—	変形工字文	
16	縄文土器	鉢	口縁部	NO54 II層	—	—	—	変形工字文 内面に沈線	
17	縄文土器	浅鉢	口縁部	NQ47 II b層	—	—	—	変形工字文	
18	縄文土器	鉢	口縁部	NQ55	—	—	—	変形工字文 精製土器 口唇部に溝	
19	縄文土器	鉢	口縁部	NP51 II b層	—	—	—		(科析-93)
20	縄文土器	鉢	口縁部	NQ48	—	—	—		(科析-55)

第117図 ST37捨て場出土遺物(5)



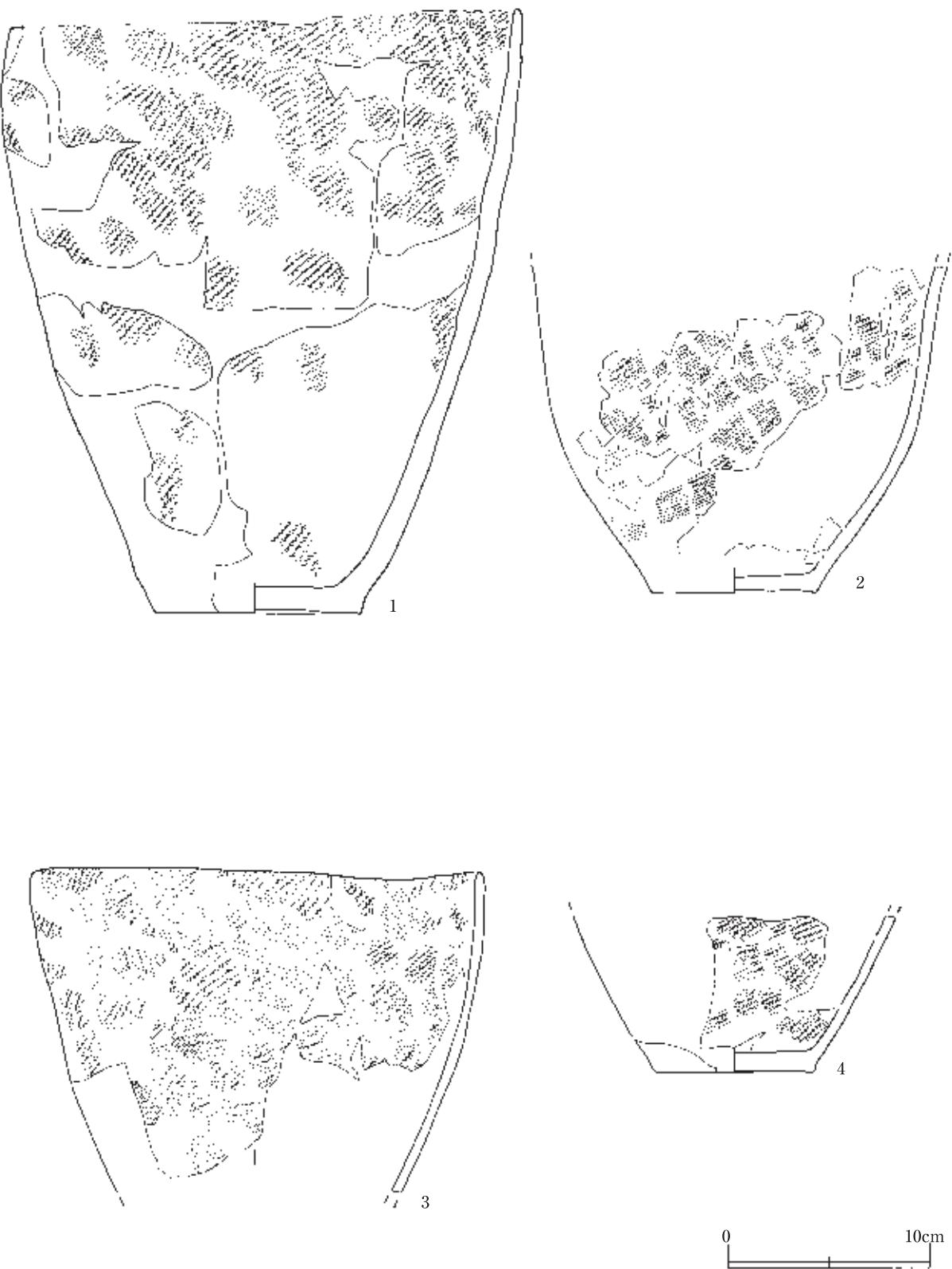
番号	種別	器形	部 位	遺構・層位	計測値			特 徴	その他の 記載
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	鉢	口縁部	NR61 II層	—	—	—		(科析-43)
2	縄文土器	鉢	胴部	NQ48 II層 RP1	—	—	—		(科析-51)
3	縄文土器	深鉢	口縁部	NP51 IIb層	—	—	—	沈線7条 鋸歎口縁	
4	縄文土器	深鉢	口縁部	NO51 IIb層	—	—	—	鋸歎口縁	
5	縄文土器	深鉢	口縁部	NP49 IIb層	—	—	—	粗製土器 粘土紐巻き上げ	
6	縄文土器	深鉢	口縁部	NQ47 IIb層	—	—	—	磨り消し 指あとあり	
7	縄文土器	深鉢	口縁部	NQ47 IIb層	—	—	—		(科析-68)
8	縄文土器	深鉢	口縁部	NQ47	—	—	—		(科析-80)
9	縄文土器	深鉢	口縁部	NO55	—	—	—	粗製土器 小波状口縁	
10	縄文土器	深鉢	口縁部	NR54 II層	—	—	—	平口縁 擦痕	
11	縄文土器	深鉢	口縁部	NO52 II層	—	—	—	口縁下に綾絡文	
12	縄文土器	深鉢	口縁部	NO52 II層	—	—	—		(科析-95)
13	縄文土器	深鉢	口縁部	NQ48 II層	—	—	—		(科析-52)
14	縄文土器	深鉢	口縁部	NQ48	—	—	—		(科析-76)
15	縄文土器	深鉢	口縁部	NQ47 V層	—	—	—		(科析-78)
16	縄文土器	深鉢	口縁部	NQ55 RP1	—	—	—		(科析-71)
17	縄文土器	深鉢	口縁部	NQ47 V層	—	—	—		(科析-79)
18	縄文土器	深鉢	口縁部	NR56 II層	—	—	—	粗製土器 鋸歎口縁	

第118図 ST37捨て場出土遺物(6)



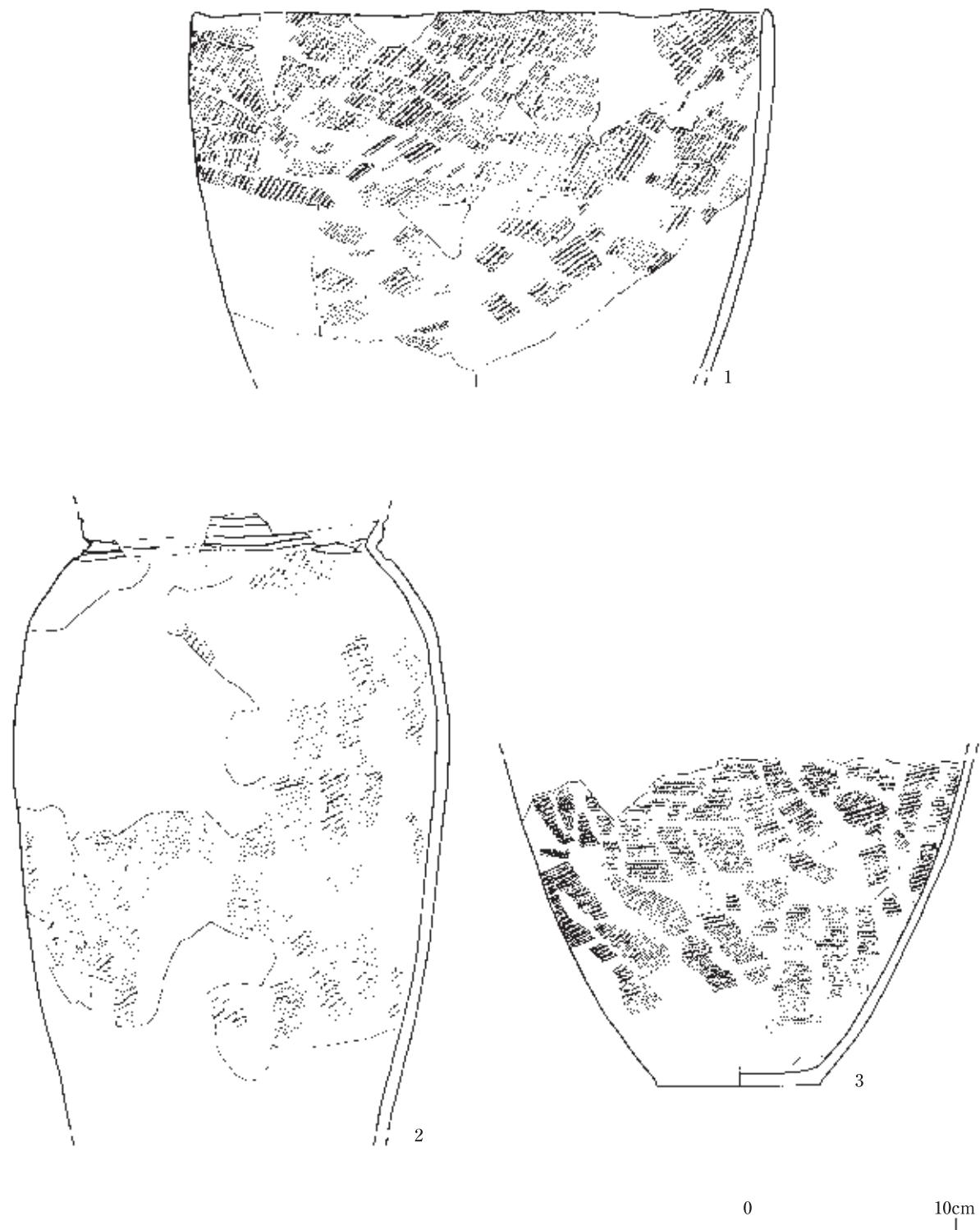
番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口徑(cm)	底径(cm)	基高(cm)		
1	縄文土器		胴部	NO47 V層	—	—	—	斜縄文 漆塗り	
2	縄文土器	鉢	胴部	NQ50 II層	—	—	—	鉗状脚部 外:漆塗り	
3	縄文土器	壺	口縁部	NO47 IIb層	—	—	—	雲形文 精製土器 内外:漆塗り	
4	縄文土器	鉢	胴部	NQ53 II層 SK24表面	—	—	—	外:漆塗り	
5	縄文土器	浅鉢	胴部	NQ54 II層	—	—	—	内面調整 漆塗り	
6	縄文土器	台付鉢	底部	NQ53 II層 SK24表面	—	(5.8)	—	底部外:漆塗り	
7	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	NS51一括	(25.0)	—	—	外:炭化物付着	
8	縄文土器	壺	胴部～底部	NQ55	(11.4)	6.0	(13.5)	口縁なし 粗製土器	

第119図 ST37捨て場出土遺物(7)



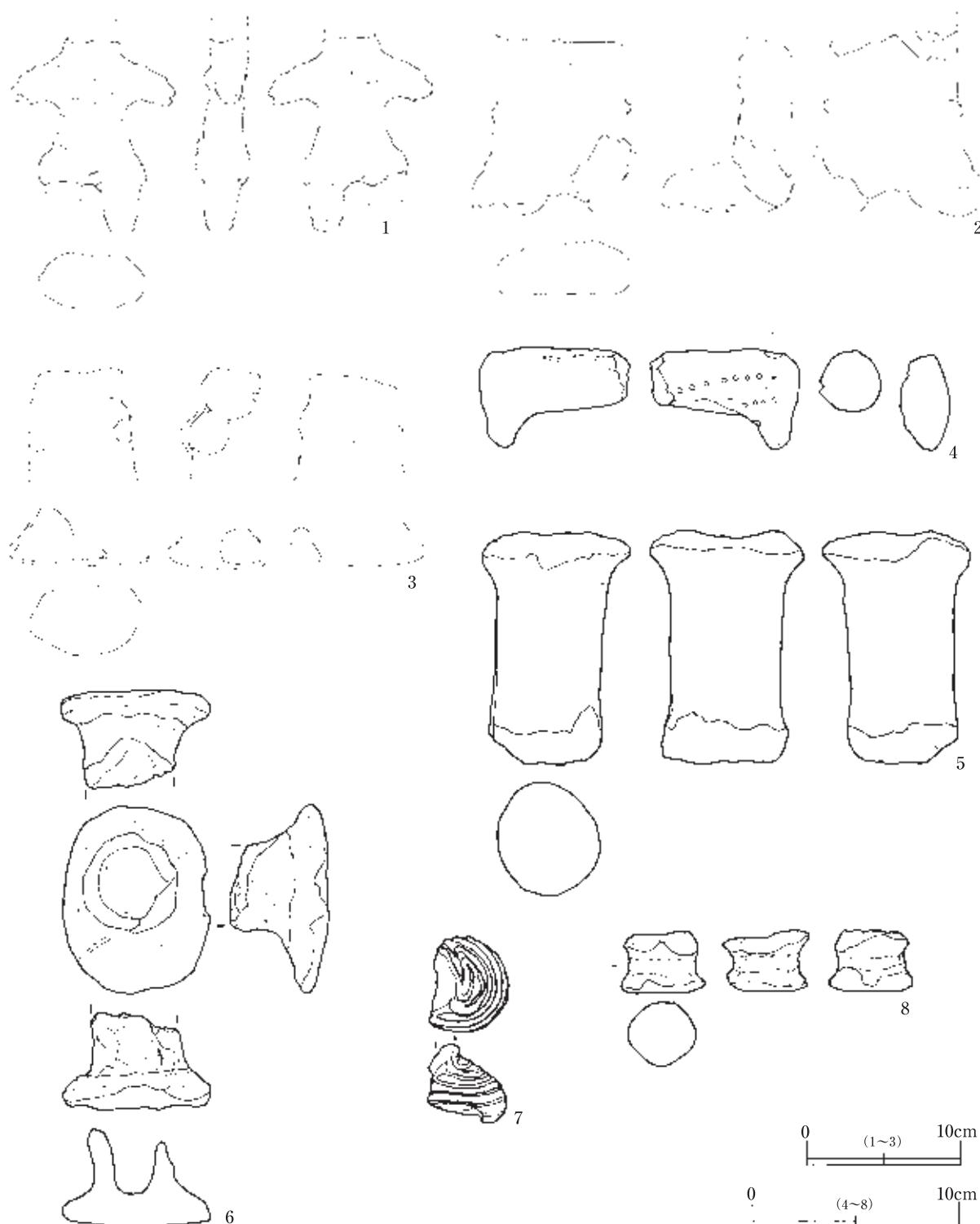
番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	深鉢	ほぼ完形	NQ51 RP1・3	25.0	12.0	30.0	内外:炭化物付着	
2	縄文土器	深鉢	胴部～底部	NQ50 II層	(20.6)	8.4	(16.2)	歪んでいる 粗製土器	
3	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	NQ51 RP2・3・5	22.1	—	(15.2)	内外:炭化物付着	
4	縄文土器	深鉢	胴部～底部	NP55 II層	15.4	7.8	(7.8)	粗製土器	

第120図 ST37捨て場出土遺物(8)



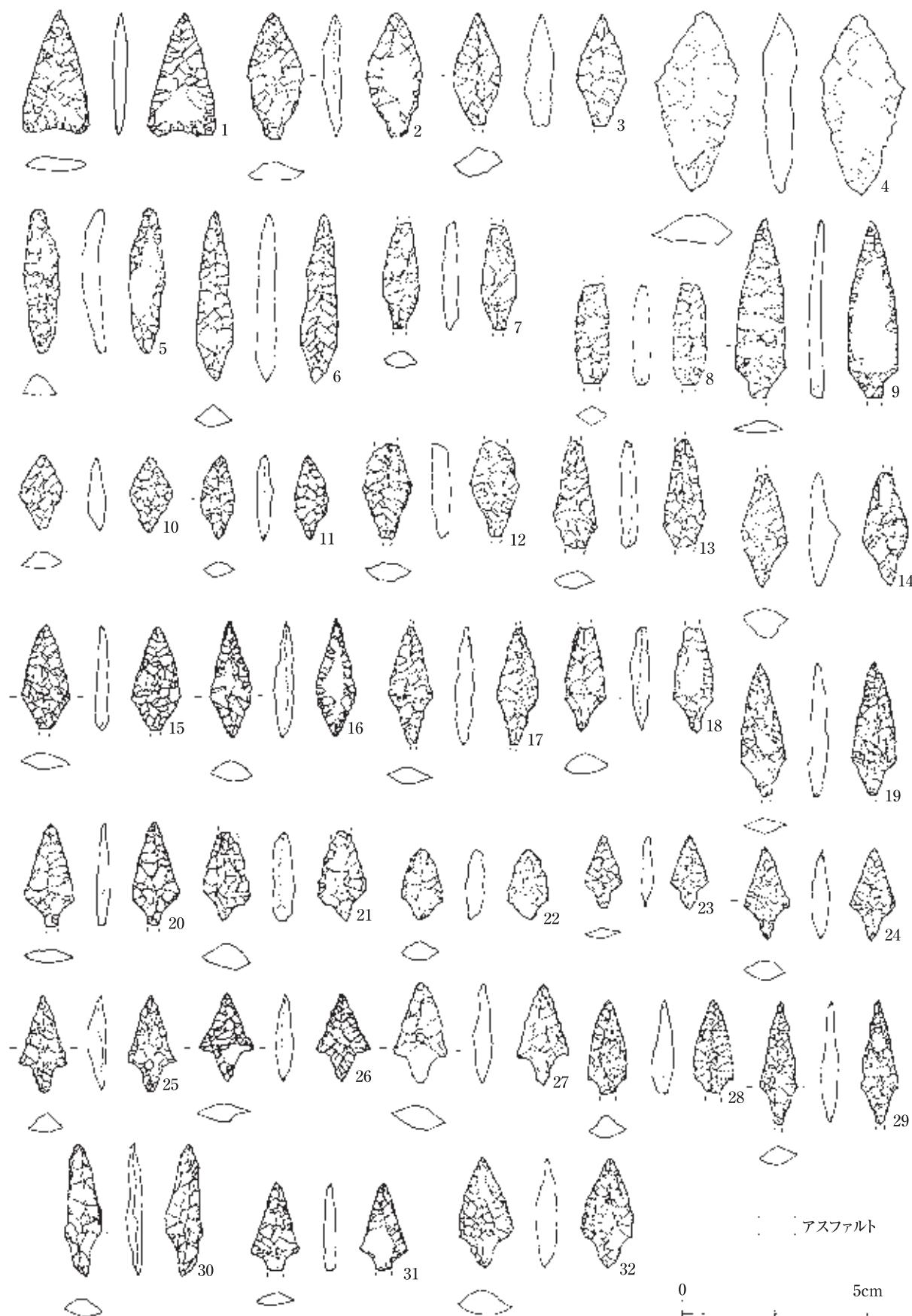
番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)		
1	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	NP50・NS51—括	(28.4)	—	—	縄文の上横位擦痕	
2	縄文土器	深鉢	頸部～胴部	NO54 II b層	—	—	—	外:炭化物付着 口縁に沈線	
3	縄文土器	鉢	胴部～底部	NS50	(22.4)	7.8	(11.7)		

第121図 ST37捨て場出土遺物(9)

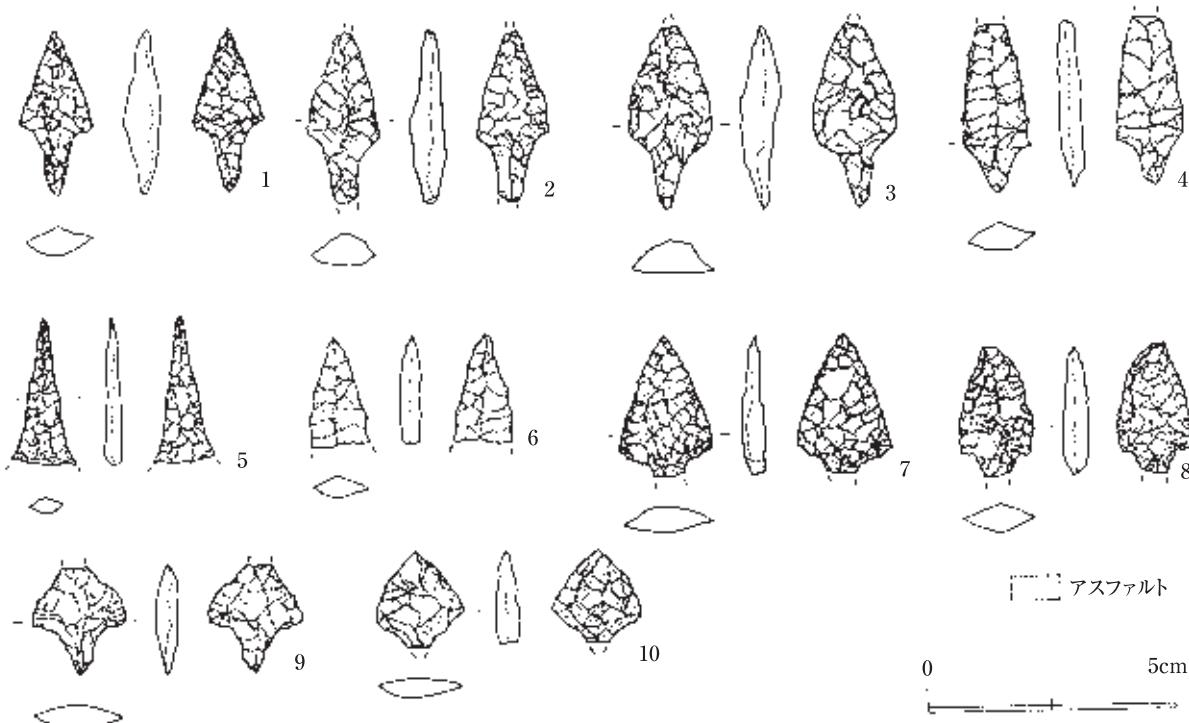


番号	種別	器形	遺構・層位	計測値			特徴	その他
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	土製品	土偶	NQ55 II b層	—	—	—	首・右足が欠損	
2	土製品	土偶	NO53 II層	—	—	—	胴部と右足のみ	
3	土製品	土偶	NP47 III層	—	—	—	胴部のみ	
4	土製品	土偶	NQ48 II層	(4.8)	3.2	1.9	左肩～左腕か？列点文有り	
5	土製品	土偶	NO47 II b層	7.5	4.8	5.0	部位不明	
6	土製品	土偶	NQ55 II層	(3.2)	4.8	4.8	足か 左右不明 中空	
7	土製品	土偶	NQ48	—	—	—	足か肩か	
8	土製品	土偶	NQ50 II層	2.0	2.7	2.8	足か 左右不明	

第122図 ST37捨て場出土遺物(10)

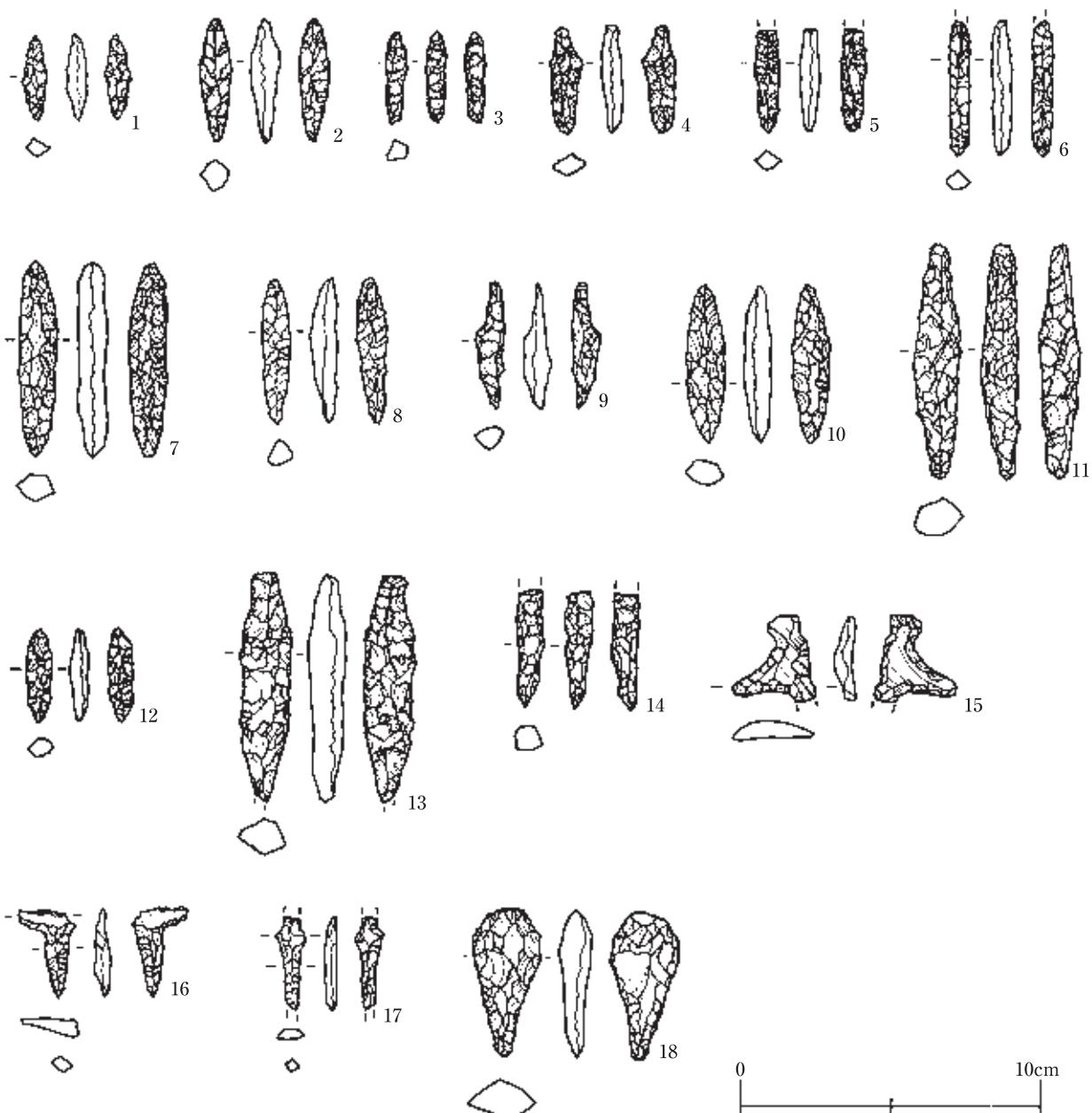


第123図 ST37捨て場出土遺物(11)



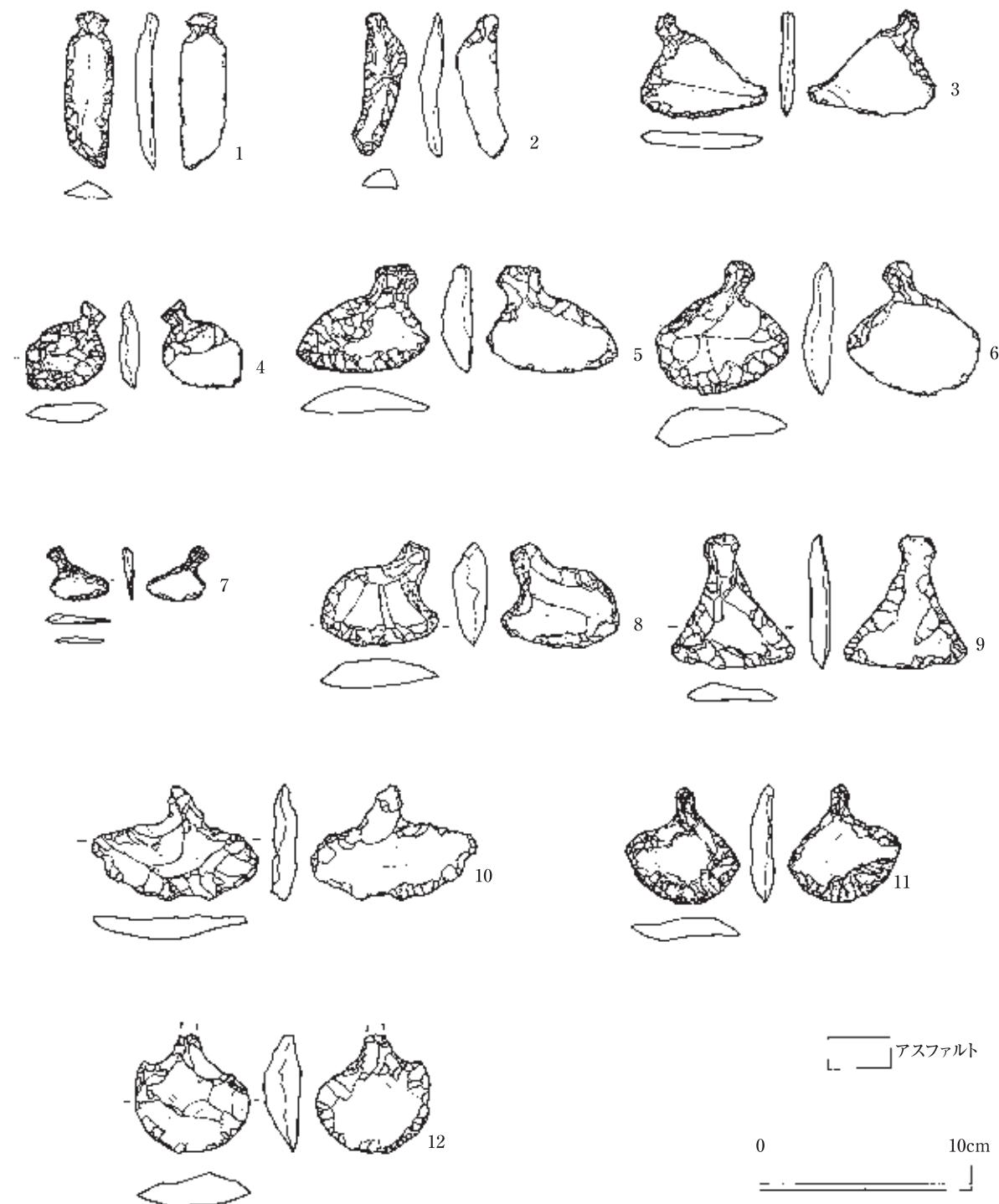
	番号	種別	器形	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第123図	1	剥片石器	石鏃	NQ55 II層	3.3	1.9	0.4	無茎	
	2	剥片石器	石鏃	NO51 II層	4.1	1.55	0.55	有茎	
	3	剥片石器	石鏃	NR50 II層	3.1	1.35	0.8	有茎	
	4	剥片石器	石鏃	NR54 II層	4.9	2.3	1.0	有茎	
	5	剥片石器	石鏃	NQ55 IIa層	3.9	1.0	0.65	有茎	
	6	剥片石器	石鏃	NR51 II層	4.6	1.05	0.55	有茎	
	7	剥片石器	石鏃	NQ49 II層	2.9	1.0	0.45	有茎 アスファルト付着	
	8	剥片石器	石鏃	NO49 II層	2.7	0.9	0.5	有茎 アスファルト付着	
	9	剥片石器	石鏃	NQ55 IIb層	4.85	1.4	0.4	有茎 アスファルト付着	
	10	剥片石器	石鏃	NQ51 II層	2.0	1.2	0.5	有茎	
	11	剥片石器	石鏃	NR54 II層	4.9	2.3	1.0	有茎	
	12	剥片石器	石鏃	NO47 II層	2.55	1.25	0.5	有茎 アスファルト付着	
	13	剥片石器	石鏃	NO49 IIb層	2.95	1.2	0.5	有茎	
	14	剥片石器	石鏃	NO49 II層	3.1	1.25	0.8	有茎	
	15	剥片石器	石鏃	NQ50 II層	2.8	1.4	0.4	有茎	
	16	剥片石器	石鏃	NO49 II層	3.2	1.1	0.55	有茎	
	17	剥片石器	石鏃	NQ55 IIb層	3.2	1.2	0.5	有茎	
	18	剥片石器	石鏃	NO53 II層	2.8	1.15	0.55	有茎	
	19	剥片石器	石鏃	NP50 IIb層	3.6	1.25	0.55	有茎 アスファルト付着	
	20	剥片石器	石鏃	NQ50 II層	2.85	1.3	0.4	有茎	
	21	剥片石器	石鏃	NQ52 II層	2.4	1.3	0.6	有茎	
	22	剥片石器	石鏃	NQ48	1.9	1.1	0.5	有茎 アスファルト付着	
	23	剥片石器	石鏃	NO49	2.0	1.0	0.3	有茎	
	24	剥片石器	石鏃	NQ48 II層	2.5	1.2	0.5	有茎	
	25	剥片石器	石鏃	NQ55 IIa層	2.6	1.25	0.5	有茎	
	26	剥片石器	石鏃	NQ49	2.4	1.5	0.5	有茎	
	27	剥片石器	石鏃	NP49 IIb層	2.75	1.5	0.6	有茎 アスファルト付着	
	28	剥片石器	石鏃	NQ55 IIb層	2.55	1.05	0.65	有茎 アスファルト付着	
	29	剥片石器	石鏃	NO52 II層	3.3	1.05	0.5	有茎	
	30	剥片石器	石鏃	NQ50 II層	3.6	1.0	0.5	有茎	
	31	剥片石器	石鏃	NQ48 II層	2.4	1.35	0.35	有茎	
	32	剥片石器	石鏃	NQ48 II層	1.4	1.95	0.6	有茎	
第124図	1	剥片石器	石鏃	NO50 II層	3.3	1.5	0.8	有茎	
	2	剥片石器	石鏃	NQ49 IIb層	3.5	1.5	0.7	有茎	
	3	剥片石器	石鏃	NQ49 II層	3.75	1.7	0.8	有茎	
	4	剥片石器	石鏃	NQ49 II層	3.4	1.4	0.5	有茎	
	5	剥片石器	石鏃	NQ47 III層	3.05	1.3	0.35	有茎	
	6	剥片石器	石鏃	NP52 II層	2.2	1.2	0.45	有茎	
	7	剥片石器	石鏃	NO52 II層	2.85	1.9	0.5	有茎 アスファルト付着	
	8	剥片石器	石鏃	NQ49 IIb下層	2.6	1.5	0.5	有茎 黒曜石	
	9	剥片石器	石鏃	NP47 II層	2.2	1.9	0.45	有茎	
	10	剥片石器	石鏃	NQ47 II層	1.9	1.8	0.55	有茎	

第124図 ST37捨て場出土遺物(12)



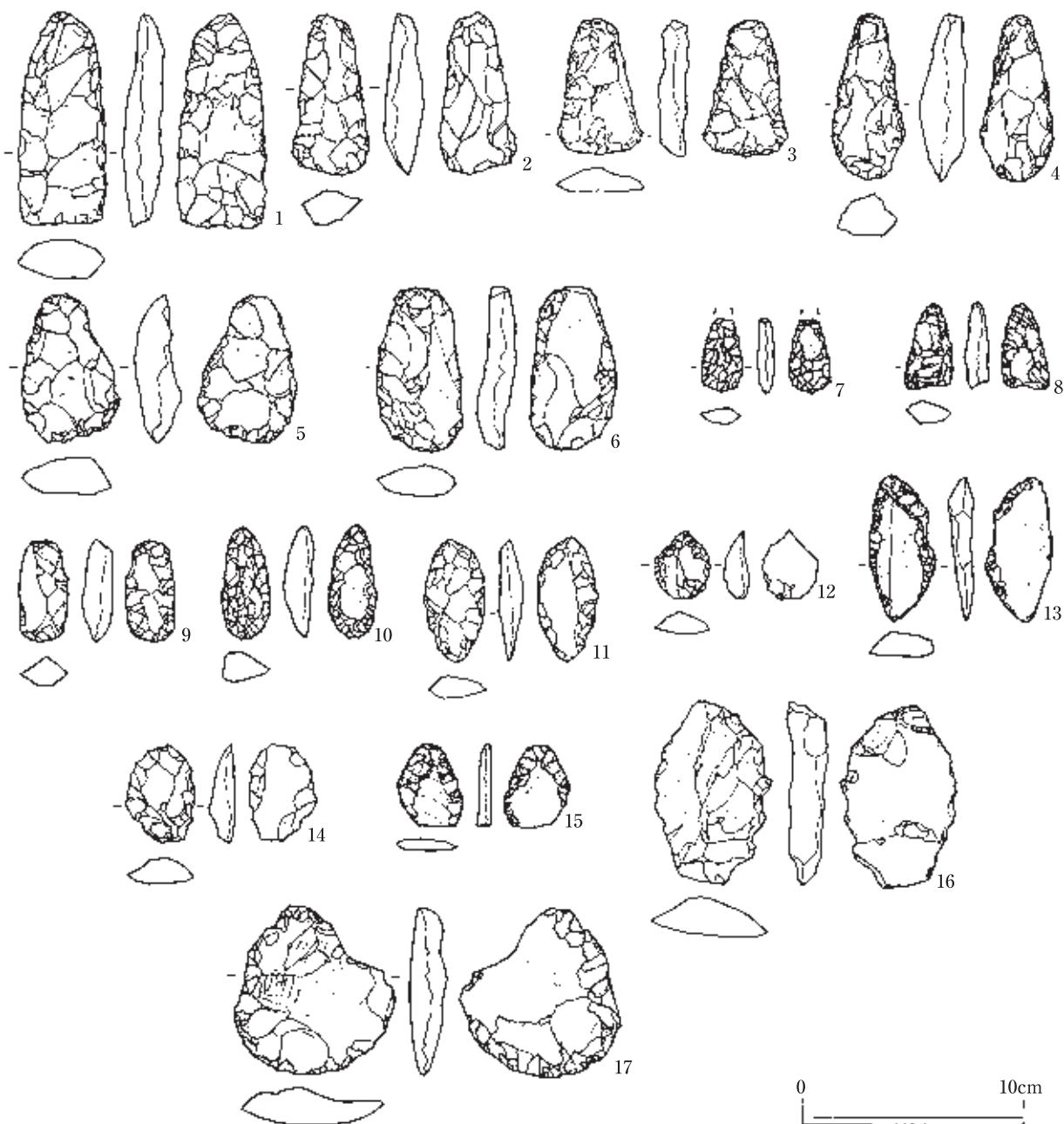
番号	種別	器形	遺構・層位	計測値			特徴	その他
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	剥片石器	尖頭器	NO49 II層	3.2	1.1	0.55		
2	剥片石器	尖頭器	NQ55 IIb層	4.15	1.05	1.0		
3	剥片石器	石錐	NQ49 II層	3.0	0.7	0.7		
4	剥片石器	石錐	NO51 III層	3.6	1.1	0.8		
5	剥片石器	石錐	NQ54 II層	3.4	0.95	0.7		
6	剥片石器	石錐	NQ47 IIb層	4.5	0.8	0.8		
7	剥片石器	石錐	NO49 II層	6.5	1.35	1.1		
8	剥片石器	尖頭器	NR51 II層	4.8	1.0	1.0		
9	剥片石器	石錐	NO47 IIb層	4.2	1.0	0.95		
10	剥片石器	尖頭器	NP53 II層	5.3	1.3	1.0		
11	剥片石器	石錐	NP55 III層	7.9	1.65	1.3		
12	剥片石器	石錐	NQ55 III層	3.1	0.85	0.65		
13	剥片石器	石錐	NQ49 II層	7.55	1.7	1.25		
14	剥片石器	石錐	NR53 II層	3.9	1.0	1.0		
15	剥片石器	石錐	NN54 II層	2.85	2.8	0.75		
16	剥片石器	石錐	NQ48 II層	3.0	1.9	0.55		
17	剥片石器	石錐	NP54 IIb層	3.15	1.0	0.4		
18	剥片石器	石錐	NR52 II層	4.9	2.3	1.1		

第125図 ST37捨て場出土遺物(13)



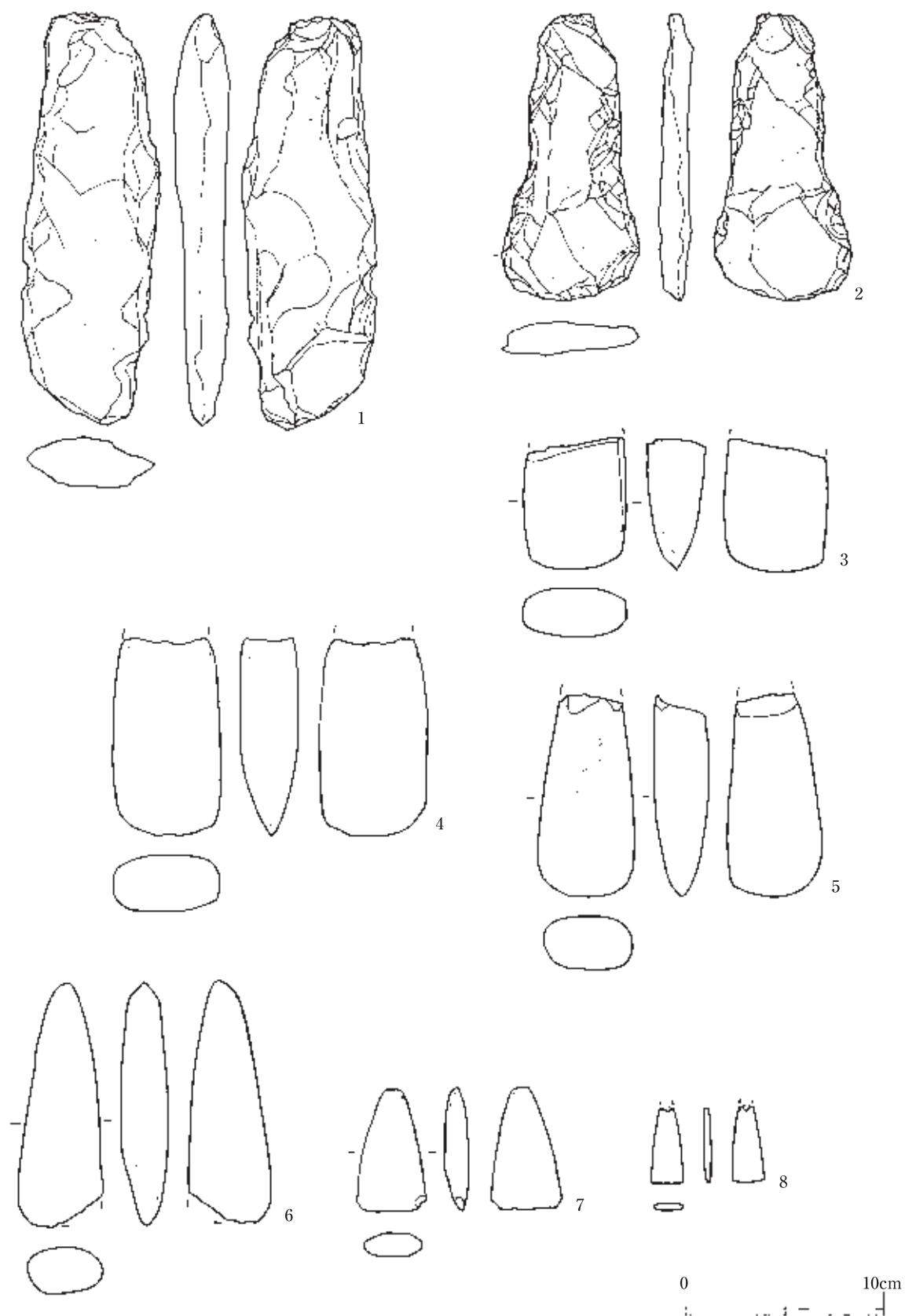
番号	種別	器形	遺構・層位	計測値			特徴	その他
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	剥片石器	石匙	NP47 III層	7.4	2.2	1.0	縦型	
2	剥片石器	石匙	NQ47 II b層	6.75	2.5	1.15	縦型	
3	剥片石器	石匙	NQ48 III層	5.5	6.0	0.7	横型	
4	剥片石器	石匙	NO47 II b層	3.4	1.4	0.5	横型	
5	剥片石器	石匙	NQ48 II b層	5.1	6.2	1.5	横型	
6	剥片石器	石匙	NO53 II 層	6.3	6.3	1.55	横型 左側欠損 裏:アスファルト付着	
7	剥片石器	石匙	NO48 II 層	2.55	3.0	0.5	横型	
8	剥片石器	石匙	NQ47 II 層	4.9	5.6	1.7	横型	
9	剥片石器	石匙	NO50 II 層	6.35	5.8	1.1	横型 表:アスファルト付着	
10	剥片石器	石匙	NQ52 II 層	5.5	7.9	1.2	横型	
11	剥片石器	石匙	NQ55 II b層	5.6	5.3	1.05	横型	
12	剥片石器	石匙	NO54 II 層	5.55	5.35	1.8	横型	

第126図 ST37捨て場出土遺物(14)

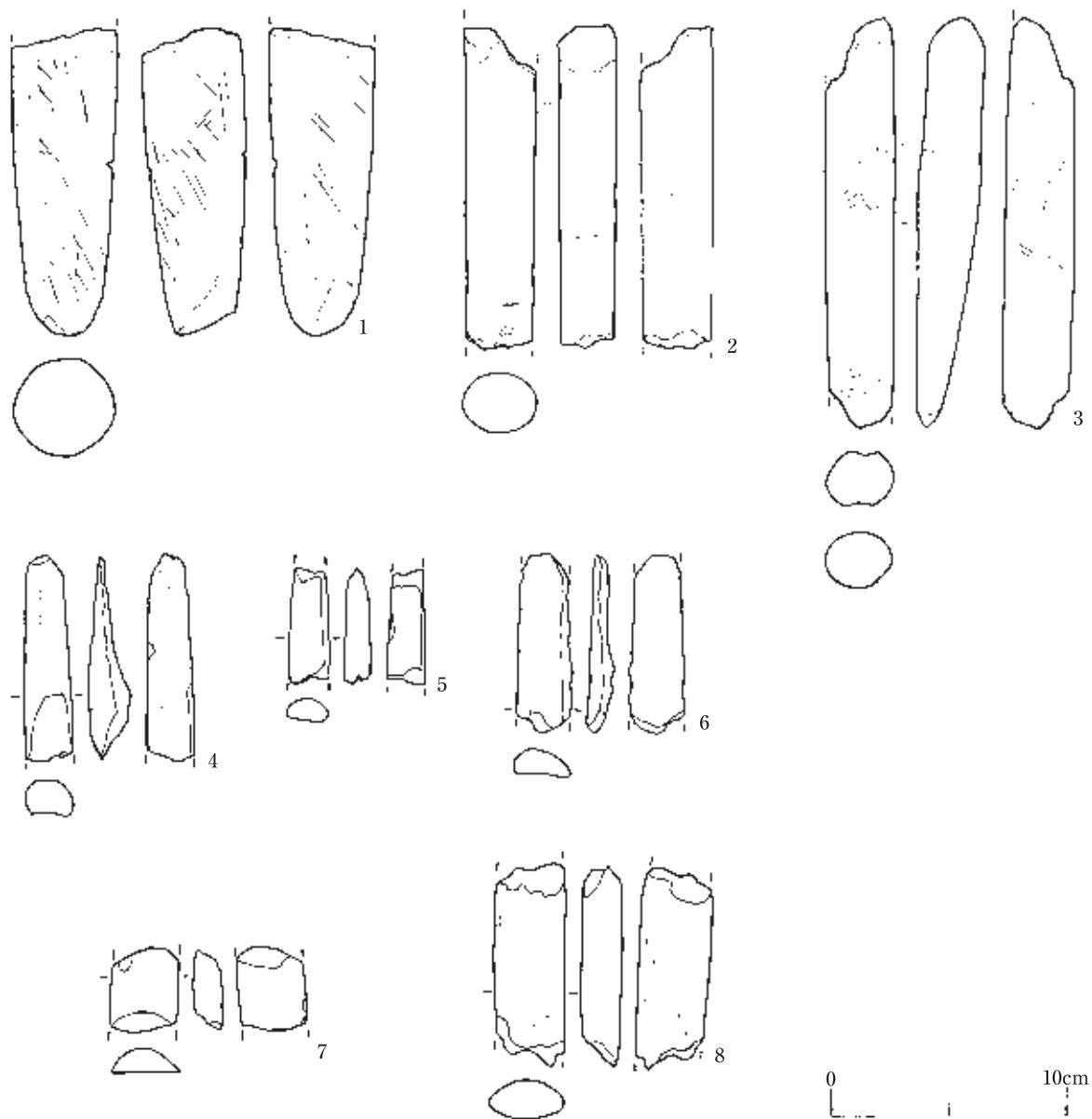


番号	種別	器形	遺構・層位	計測値			特徴	その他
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	剥片石器	石箒	NQ55 II a層	9.65	4.1	1.95	短冊形	
2	剥片石器	石箒	NP53 II層	7.4	3.5	1.9	揆形	
3	剥片石器	石箒	NO54 II層	6.2	4.0	1.4	揆形	
4	剥片石器	石箒	NN54 II b層	7.5	3.4	2.1	揆形	
5	剥片石器	石箒	NP47 II層	6.75	4.5	2.2	揆形	
6	剥片石器	石箒	NQ55 II層	7.4	3.9	1.85	揆形	
7	剥片石器	石箒	NO47 II層	3.4	1.95	0.8	揆形	
8	剥片石器	石箒	NQ47 II b層	3.9	2.2	1.0	揆形	
9	剥片石器	石箒	NQ49 II層	4.6	2.25	1.4	揆形	
10	剥片石器	石箒	NP54 II b層	5.1	2.2	1.5	揆形	
11	剥片石器	削器	NQ48 II層	5.6	2.75	1.15		
12	剥片石器	削器	NO47 III層	3.1	2.55	1.1		
13	剥片石器	削器	NQ48 II層	3.0	6.6	1.1		
14	剥片石器	削器	NO49 II b層	4.45	3.15	1.25		
15	剥片石器	削器	NQ47 II層	3.8	3.0	0.7		
16	剥片石器	削器	NQ50 II層	8.3	5.3	1.9		
17	剥片石器	削器	NO51 II層	7.65	7.3	1.75		

第127図 ST37捨て場出土遺物(15)

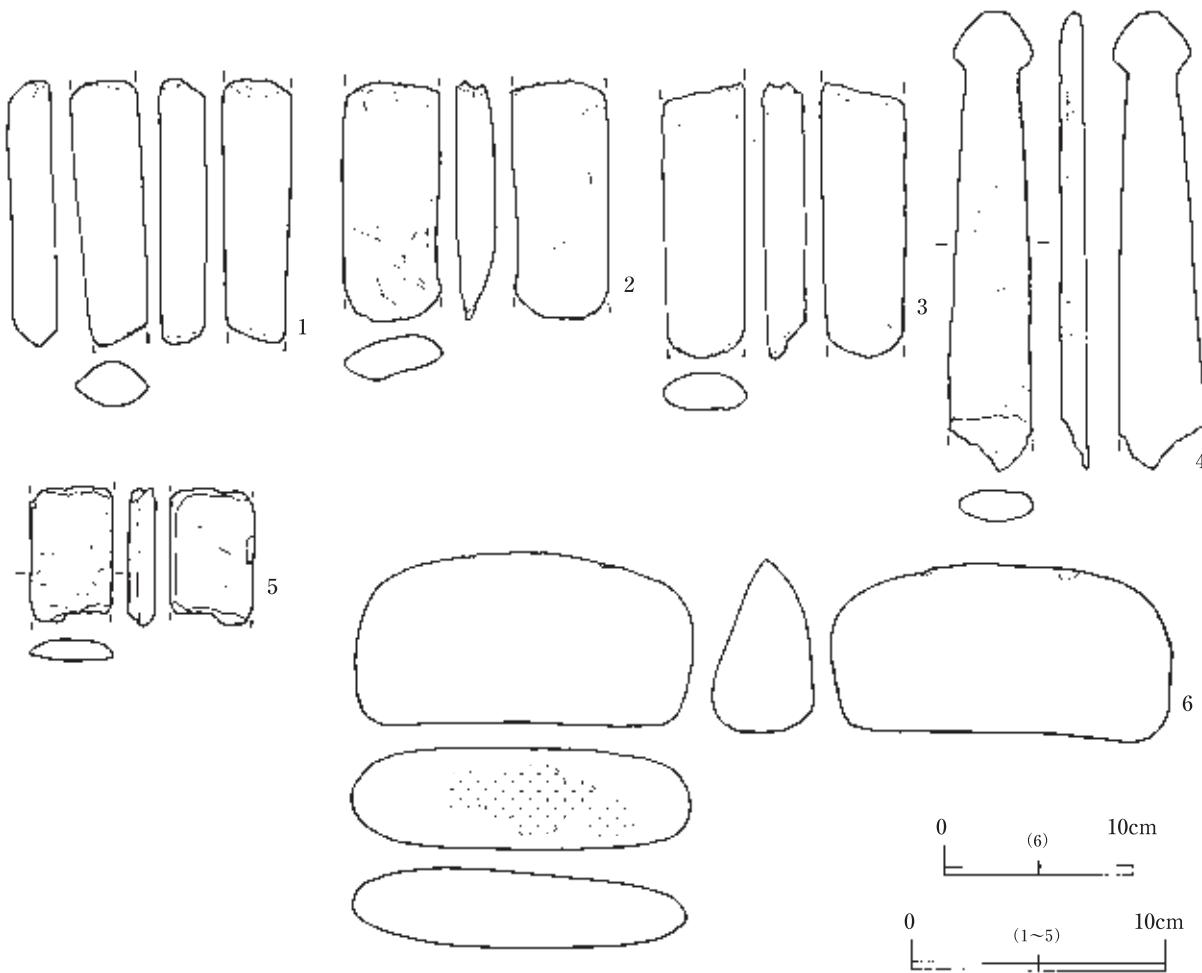


第128図 ST37捨て場出土遺物(16)



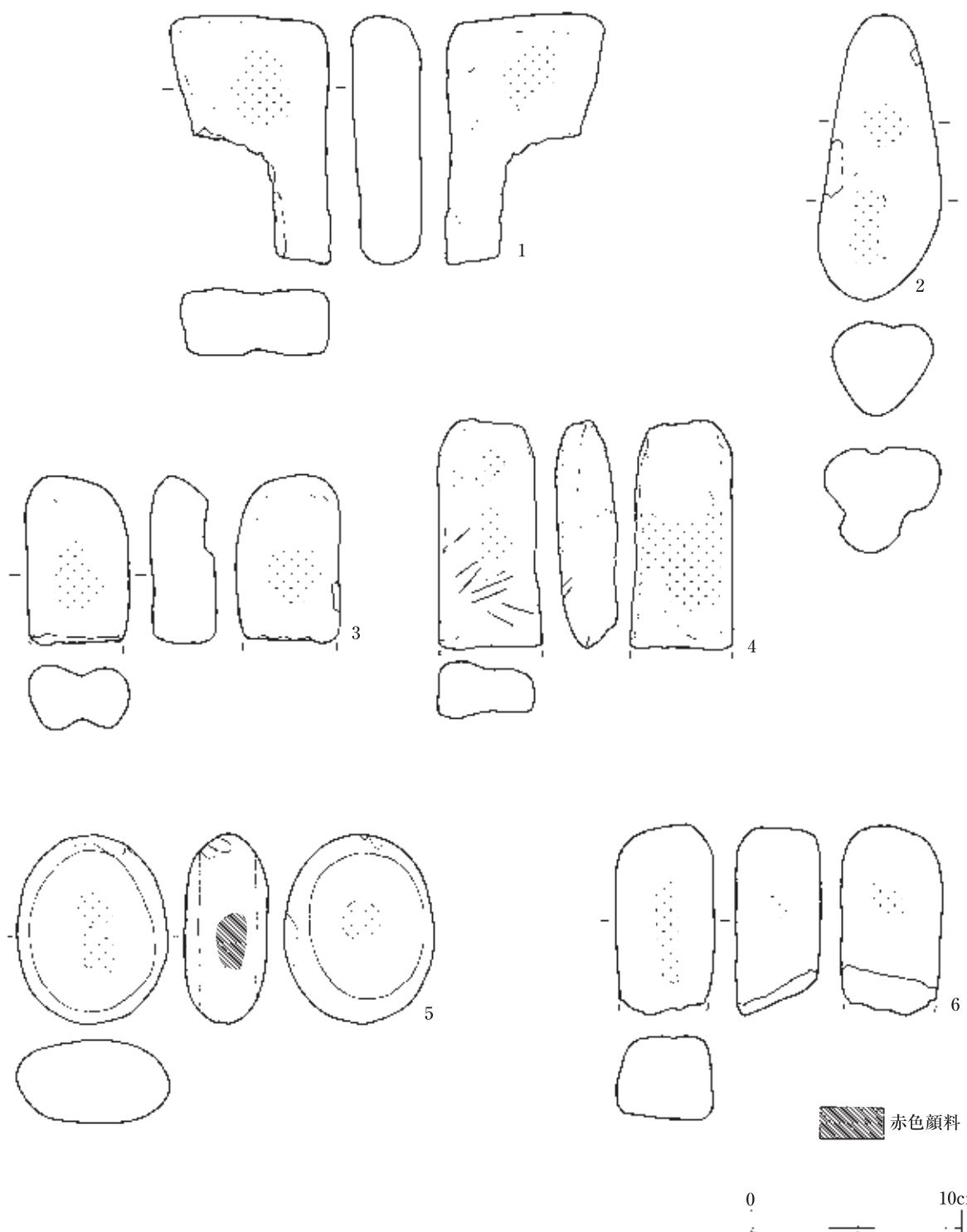
	番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第128表	1	礫石器	打製石斧		NQ48 II層	20.9	16.9	2.9		
	2	礫石器	打製石斧	ほぼ完形	NO48 II層	14.45	6.95	1.75		
	3	礫石器	磨製石斧		NO47 III層	6.7	5.2	2.9	基部欠損	
	4	礫石器	磨製石斧		NQ47 II層	9.9	5.4	2.9	基部欠損	
	5	礫石器	磨製石斧		NP47 IIb層	10.2	4.8	2.7	基部欠損	
	6	礫石器	磨製石斧		NN54 IIb層	12.2	4.3	2.3	刃部欠損	
	7	礫石器	磨製石斧		NN54 IIb層	6.25	3.55	1.25	ミニチュア	
	8	礫石器	磨製石斧		NO53 II層	3.8	1.6	0.4	ミニチュア	
第129表	1	礫石器	石棒		NO51 III層	13.0	4.5	4.4		
	2	礫石器	石棒		NQ52 II層	13.7	3.2	2.5		
	3	礫石器	石棒		NP49 IIb層	17.5	3.0	2.6	両端欠損 両面抉り	
	4	礫石器	石棒		NQ47 II層	8.8	2.1	1.85		
	5	礫石器	石棒		NQ50 II層	4.9	1.8	1.15		
	6	礫石器	石棒		NQ49 II層	7.6	2.45	1.2		
	7	礫石器	石棒		NP54 IIb層	3.6	3.0	1.2		
	8	礫石器	石棒		NO51 III層	8.6	3.15	1.75		

第129図 ST37捨て場出土遺物(17)



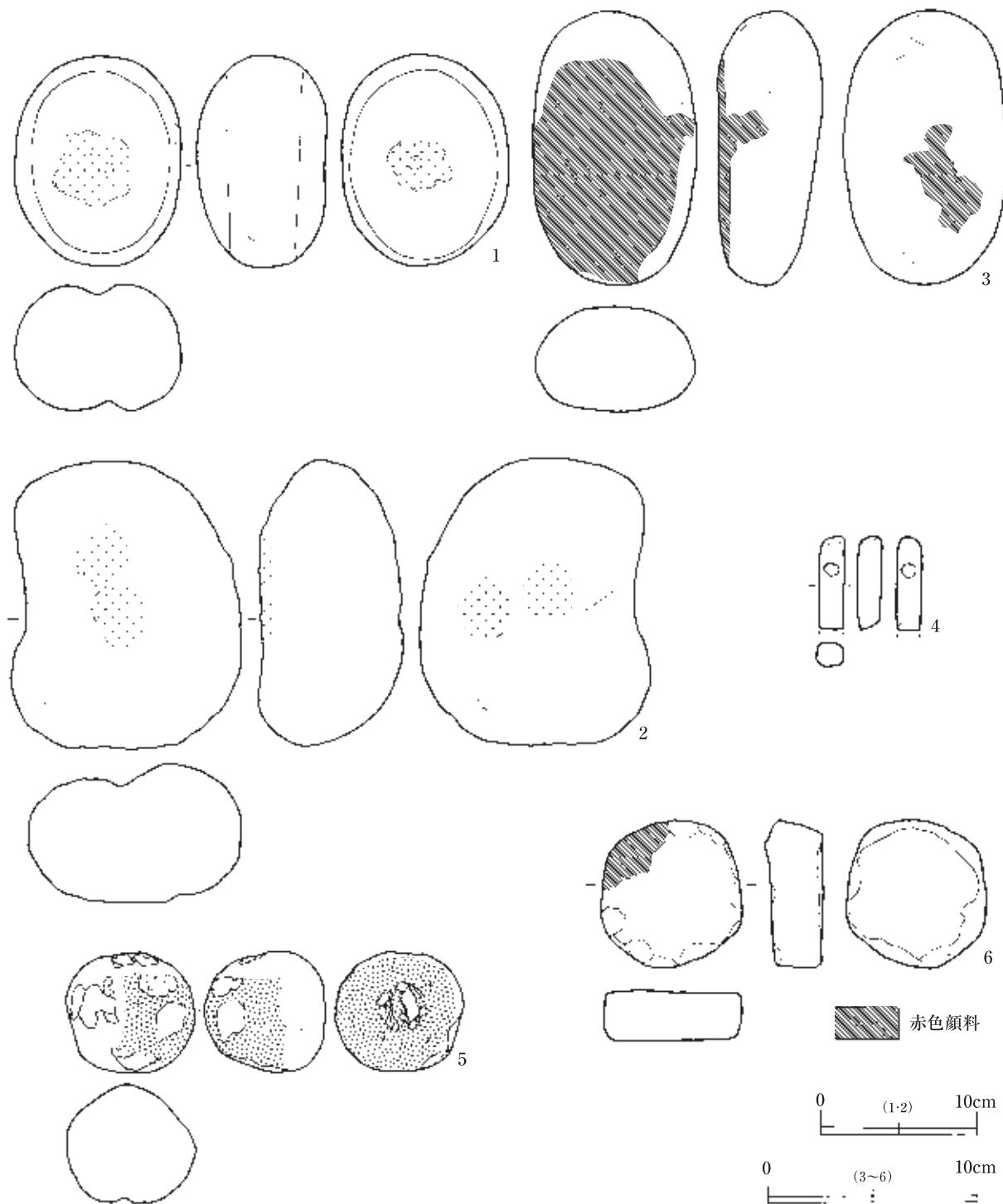
番号	種別	器形	遺構・層位	計測値			特徴	その他
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	礫石器	石劍	NP47 IIb層	10.5	2.9	1.8	両端欠損	
2	礫石器	石劍	NO50 III層	9.5	3.9	1.6	両端欠損	
3	礫石器	石劍	NO47 III層	10.9	3.4	1.7	両端欠損	
4	礫石器	石刀	NQ47 IIb層	(18.1)	3.4	1.2	端部有り 刃身欠損	
5	礫石器	石刀	NQ52 II層	5.4	3.3	1.0		
6	礫石器	石冠	NR48 II層	9.2	17.8	5.4	上面刃部 底面打痕 凹あり	

第130図 ST37捨て場出土遺物(18)



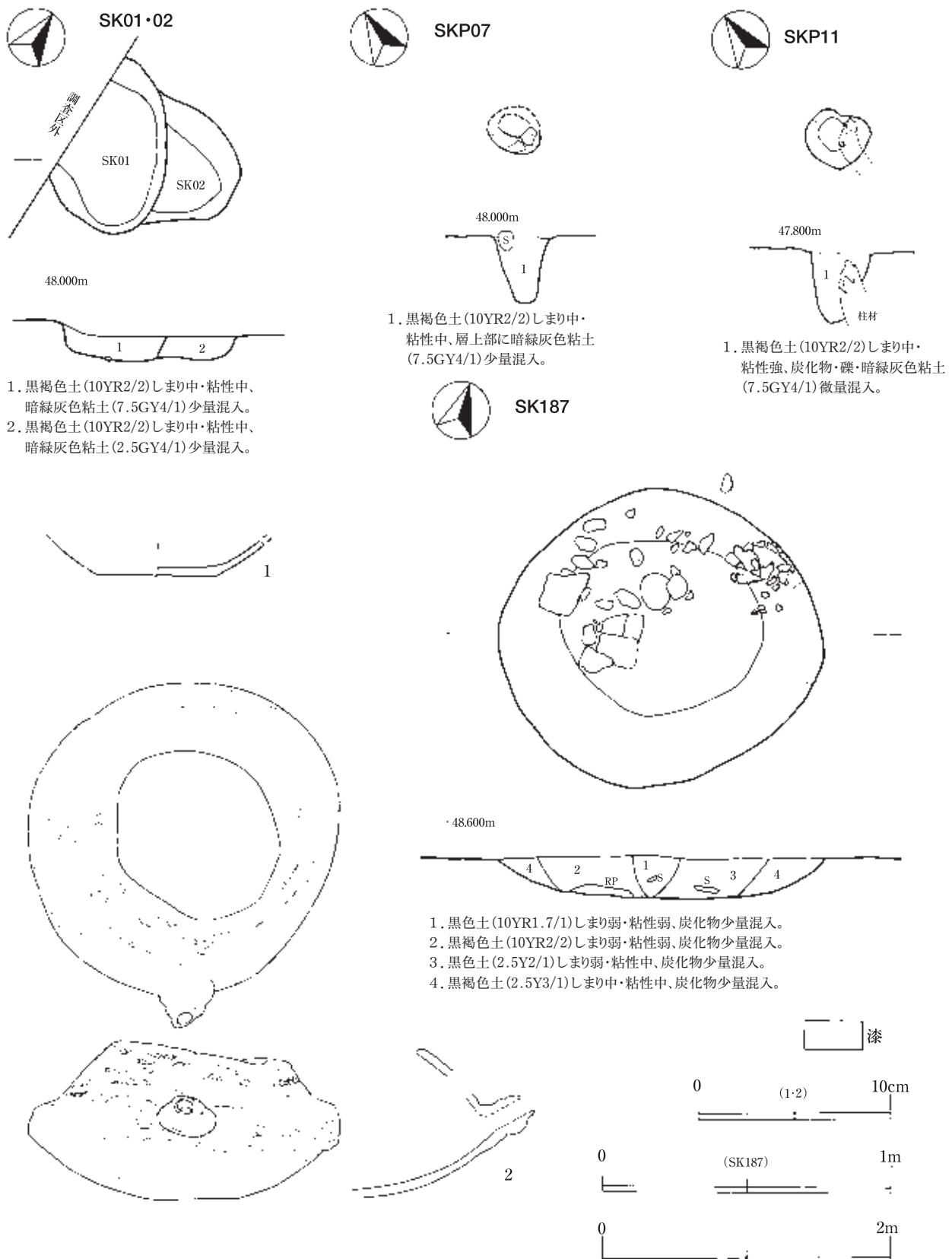
番号	種別	器形	遺構・層位	計測値			特徴	その他
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	礫石器	凹石	NP47 IIb層	11.9	7.7	3.3	磨り	
2	礫石器	凹石	NO54 II層	13.65	5.9	5.3	磨り	
3	礫石器	凹石	NQ49 II層	8.05	4.9	3.1		
4	礫石器	凹石	NQ47 II層	10.9	4.95	2.95		
5	礫石器	凹石	NO54 II層	12.15	9.7	5.3	赤色顔料付着	
6	礫石器	凹石	NQ55 RQ	9.0	4.75	4.1		

第131図 ST37捨て場出土遺物(19)



番号	種別	器形	遺構・層位	計測値			特徴	その他
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	礫石器	凹石	NQ47 III層	13.6	10.6	8.3		
2	礫石器	凹石	NP53付近 IIa層	18.35	14.75	8.9		
3	礫石器	磨石	NQ47 III層	13.1	7.8	5.0	赤色顔料付着	
4	礫石器	有孔石製品	NO54 II層	(4.4)	1.2	1.1		
5	礫石器	敲き石	NQ48 II層	5.75	6.1	5.7		
6	礫石器	円盤状石製品	NQ47 IIb層	7.1	6.8	2.7	赤色顔料付着	

第132図 ST37捨て場出土遺物(20)



番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	浅鉢	底部	SK187 RP17	—	6.2	(1.7)	外面漆塗り	
2	縄文土器	注口土器	ほぼ完形	SK187	—	—	7.2		

第133図 SK01・02・187土坑・SKP07・11柱穴様ピット

S K02の規模は長軸0.83m×短軸0.52m（残存値）、深さ0.15mで、平面形は略円形である。

《重複》S K01がS K02を切る。

《土層》各々単一の層である。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は緩やかな凹凸がある。

《出土遺物》なし。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K187土坑（第133図、図版14）

《位置と確認》NG53グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.13m×短軸1.03m、深さ0.14mで、平面形は円形である。

《重複》なし。

《土層》4層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》2点を図示した（第133図1・2）。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K205土坑およびSKP572柱穴様ピット（第134図、図版15）

《位置と確認》NA54グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》S K205の規模は長軸0.95m×短軸0.80m、深さ0.08mで、平面形は円形である。

S K572の規模は長軸0.31m×短軸0.31m、深さ0.14mで、平面形は円形である。

《重複》SKP572がS K205を切る。

《土層》SKP572は2層に分層し、S K205は単層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》なし。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K253土坑およびSKP246・247・578柱穴様ピット（第134図）

《位置と確認》NH54グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》

S K253の規模は長軸2.38m×短軸2.05m、深さ0.13mで、平面形はほぼ円形である。

SKP246の規模は長軸0.53m×短軸0.25mで、平面形は橢円形である。

SKP247の規模は長軸0.92m×短軸0.46mで、平面形は橢円形である。

SKP578の規模は長軸0.38m×短軸0.22mで、平面形は橢円形である。

《重複》SK253がSKP246に切られる。

《土層》単層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》2点を図示した（第134図5・6）。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

② 柱穴様ピット

SKP07柱穴様ピット（第133図、図版14）



第134図 SK205・253土坑・SX245その他の遺構

《位置と確認》 NS 71グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》 規模は長軸0.36m×短軸0.32m、深さ0.45mで、平面形は橢円形である。

《重複》なし。

《土層》単層である。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》なし。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

S K P11柱穴様ピット（第133図、図版14）

《位置と確認》 NS 70グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》 規模は長軸0.45m×短軸0.39m、深さ0.48mで、平面形は円形である。

《重複》なし。

《土層》単層である。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》なし。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

③ その他の遺構

S X245その他の遺構（第134図、図版15）

《位置と確認》 NI 54グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》 規模は長軸2.47m×短軸0.62m、深さ0.47mで、平面形は長橢円形である。

《重複》なし。

《土層》4層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》4点を図示した（第134図1～4）。

《時期》縄文時代晚期と考えられる。

2 古代・中世

(1) 神社北側調査区の検出遺構と遺物

① 壇穴状遺構

S K I 414・415・416壇穴状遺構（第135図、図版16）

《位置と確認》 LS 49、LR 49グリッドのⅡ層で確認した。

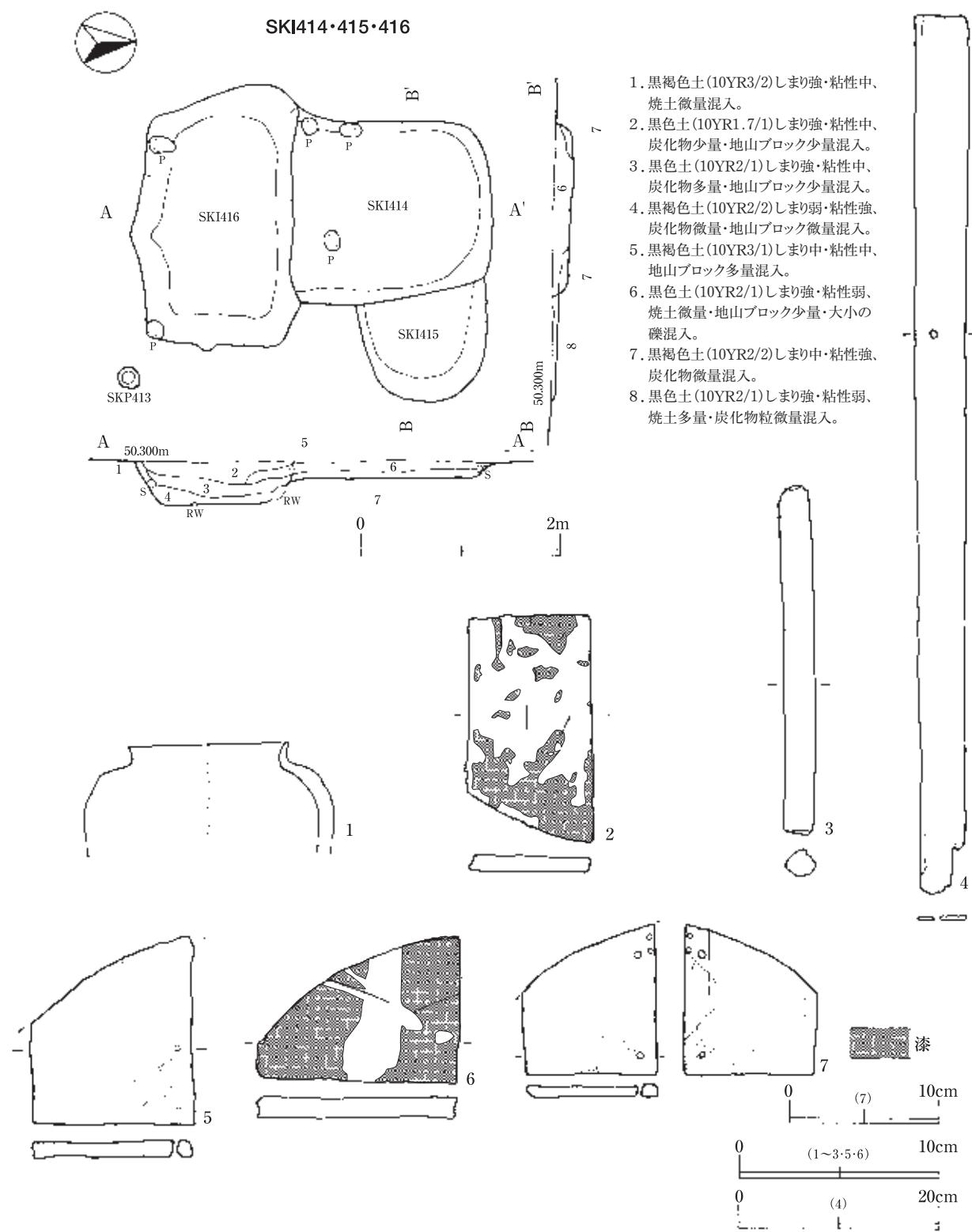
《規模と平面形》 SK I 414の規模は長軸1.98m（残存値）×短軸1.91m、深さ0.21mで、平面形は隅丸方形である。

SK I 415の規模は長軸1.31m×短軸1.10m（残存値）、深さ0.06mで、平面形は橢円形（残存）である。

SK I 416の規模は長軸2.59m×短軸1.64m、深さ0.45mで、平面形は隅丸方形である。

《重複》土層の観察からSK I 415→SK I 414→SK I 416の順序に新しくなる。

《土層》SK I 414は2層、SK I 416は5層に分層し、SK I 415は単層である。



番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
1	須恵器	短頸壺	口縁部～胴部	SKI414	口径 8.0	—	—		
2	木製品	曲物	底板	SKI416 RW 覆土中	11.3	6.5	0.95	漆付着	
3	木製品	部材		SKI416 RW 覆土中	17.3	1.6	1.4		
4	木製品	ほぞ穴		SKI416 RW2	88.6	5.7	1.7		
5	木製品	曲物	底板	SKI416 RW3	—	—	—		
6	木製品	曲物	底板	SKI416 RW4	7.4	10.15	1.1	漆付着	
7	木製品	曲物	底板	SKI416 RW1	10.1	8.9	8.5		

第135図 SKI 414・415・416竪穴住居跡・出土遺物

《 壁・床面 》 3遺構は、壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《 柱 穴 》 なし。

《 カ マ ド 》 なし。

《 出土遺物 》 7点を図示した（第135図1～7）。

《 時 期 》 平安時代と考えられる。

S K I 441堅穴状遺構（第136図、図版17）

《 位置と確認 》 L S 45・46、L T 45・46グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸3.28m×短軸2.68m、深さ0.43mで、平面形はほぼ円形である。

《 重 複 》 なし。

《 土 層 》 4層に分層した。

《 壁・床面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《 柱 穴 》 なし。

《 カ マ ド 》 なし。

《 出土遺物 》 2点を図示した（第136図1・2）。

《 時 期 》 不明。

S K I 442堅穴状遺構（第136図、図版18）

《 位置と確認 》 L S 45、L R 45グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸2.50m×短軸2.18m、深さ0.48mで、平面形は不整形である。

《 重 複 》 なし。

《 土 層 》 4層に分層した。

《 壁・床面 》 壁は両側が緩く傾斜して立ち上がり、底面はやや平坦である。

《 柱 穴 》 なし。

《 出土遺物 》 3点を図示した（第136図3～5）。

《 時 期 》 不明。

② 土坑

S K 370土坑（第137図、図版19）

《 位置と確認 》 L O 49グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.63m×短軸0.59m、深さ0.84mで、平面形は橢円形である。

《 重 複 》 なし。

《 土 層 》 3層に分層した。

《 壁・底面 》 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

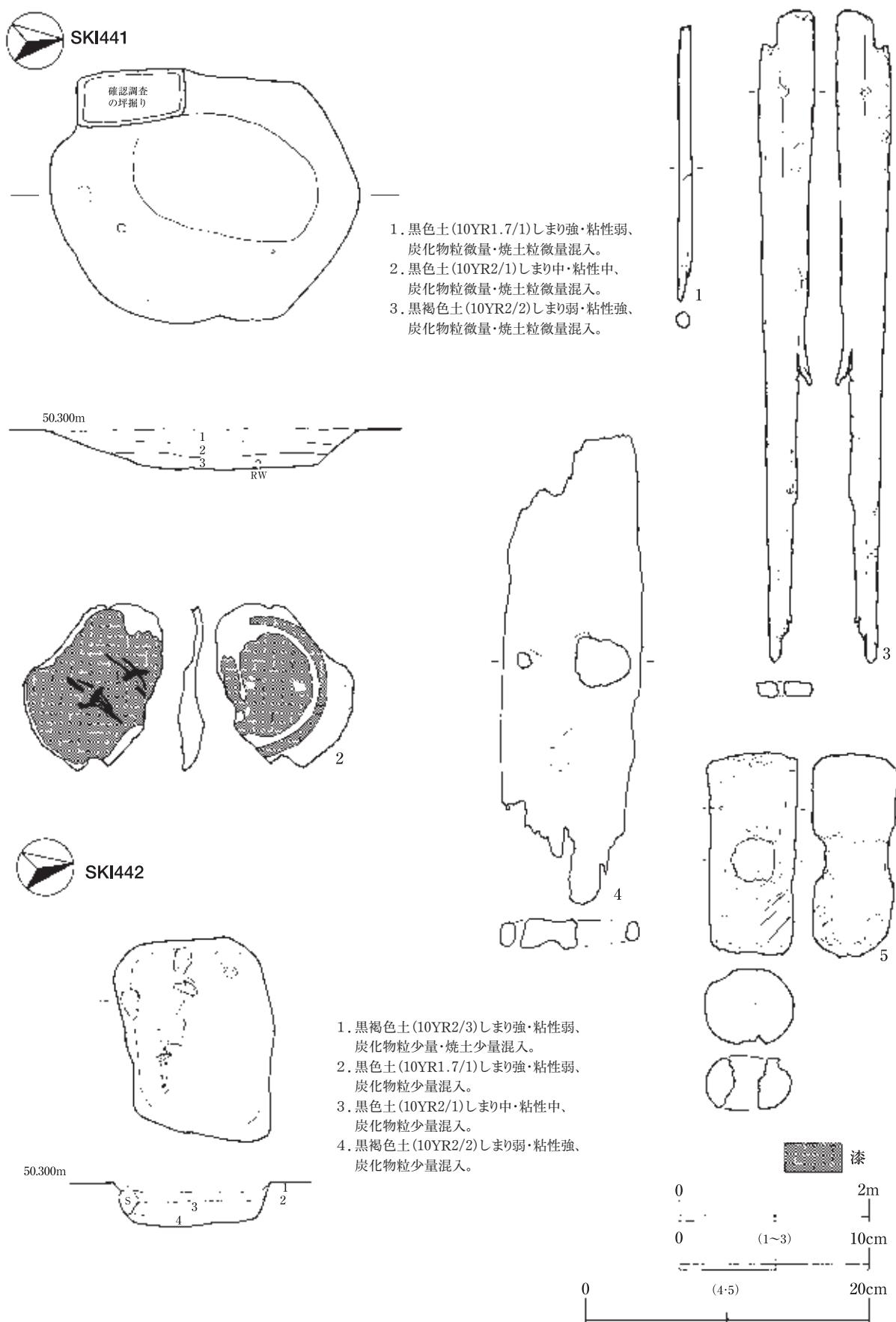
《 出土遺物 》 なし。

《 時 期 》 中世と考えられる。

S K 372土坑（第137図、図版20）

《 位置と確認 》 L O 51グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.89m×短軸0.81m、深さ0.65mで、平面形は円形である。



第136図 SKI441・442竪穴状遺構・出土遺物



	番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
第136図	1	木製品	箸		SKI441 RW	14.5	0.7	0.8		
	2	木製品	椀		SKI441 RW3	—	高径(5.7)	—	漆塗り 植物の絵入り	
	3	木製品	部材		SKI442 RW1	34.3	2.95	1.0	棒状部材	
	4	木製品	部材		SKI442 RW4	33.15	10.0	2.0	貫通穴のある部材	
	5	木製品	ほぞ穴	完形	SKI442 RW8	14.3	6.45	5.3		
第137図	1	礫石器	石皿		SK373 S5	11.65	11.45	5.55	炭化物付着	
	2	木製品	箸		SK395	11.0	0.8	0.6		
	3	木製品	箸		SK395 RW7	10.9	0.6	0.5		
	4	木製品	箸		SK395 RW9	21.6	0.7	0.5		
	5	木製品	串		SK395 RW96	24.6	1.0	0.9		
	6	木製品	椀		SK395 RW5	口径(9.2)	底径(6.5)	器高(1.0)	漆塗り	

第137図 SK370・372・373・395土坑・出土遺物

《重複》なし。

《土層》5層に分層した。

《壁・底面》壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》なし。

《時期》中世と考えられる。

S K373土坑（第137図、図版20）

《位置と確認》L O51、L P51グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.99m×短軸0.74m、深さ0.26mで、平面形は橢円形である。

《重複》なし。

《土層》2層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

《出土遺物》1点を図示した（第137図1）。

《時期》中世と考えられる。

S K395土坑（第137図、図版19）

《位置と確認》L Q52グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.59m×短軸0.49m、深さ0.52mで、平面形は橢円形である。

《重複》なし。

《土層》3層に分層した。

《壁・底面》壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》5点を図示した（第137図2～6）。

《時期》中世と考えられる。

S K396土坑（第138図、図版19）

《位置と確認》L Q52グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.47m×短軸0.46m、深さ0.35mで、平面形は円形である。

《重複》なし。

《土層》2層に分層した。

《壁・底面》壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》2点を図示した（第138図1・2）。

《時期》中世と考えられる。

S K398土坑（第138図、図版21）

《位置と確認》L Q52グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.67m×短軸0.64m、深さ0.51mで、平面形は円形である。

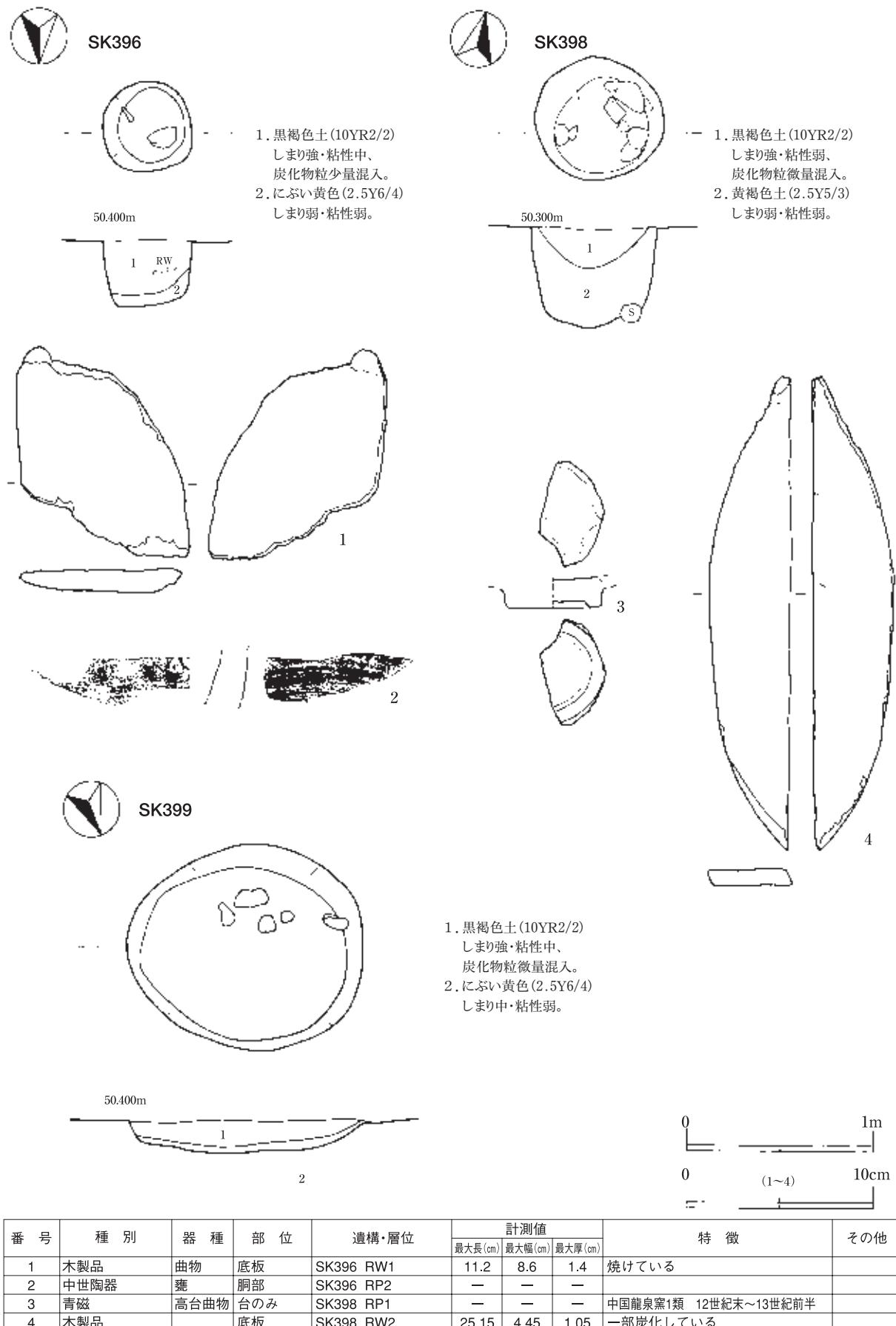
《重複》なし。

《土層》2層に分層した。

《壁・底面》壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》2点を図示した（第138図3・4）。

《時期》中世と考えられる。



第138図 SK396・398・399土坑・出土遺物

S K399土坑 (第138図、図版21)

《位置と確認》L Q51グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.25m×短軸1.10m、深さ0.17mで、平面形は円形である。

《重複》なし。

《土層》2層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》なし。

《時期》中世と考えられる。

S K400土坑 (第139図、図版22・23)

《位置と確認》L Q51グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.13m×短軸1.01m、深さ0.98mで、平面形は円形である。

《重複》なし。

《土層》4層に分層した。

《壁・底面》壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》6点を図示した(第139図1～5・第140図1)。

《時期》中世と考えられる。

S K401・402・403土坑 (第140図、図版23)

《位置と確認》L Q51、L R51グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》S K401の規模は長軸0.81m×短軸0.77m、深さ0.08mで、平面形は円形である。

S K402の規模は長軸0.77m×短軸0.74m、深さ0.16mで、平面形は円形である。

S K403の規模は長軸0.74m×短軸0.71m(残存値)、深さ0.56mで、平面形は円形である。

《重複》S K402がS K403を切る。

《土層》S K402・403は各々3層に、S K401は2層に分層した。

《壁・底面》壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩やかな凹凸がある。

《出土遺物》1点を図示した(第140図2)。

《時期》中世と考えられる。

S K420・421土坑 (第140図、図版24)

《位置と確認》L S51、L R51グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》S K420の規模は長軸0.89m×短軸0.78m(残存値)、深さ0.08mで、平面形は円形である。

S K421の規模は長軸1.29m×短軸1.16m、深さ0.11mで、平面形は円形である。

《重複》S K421がS K420を切る。

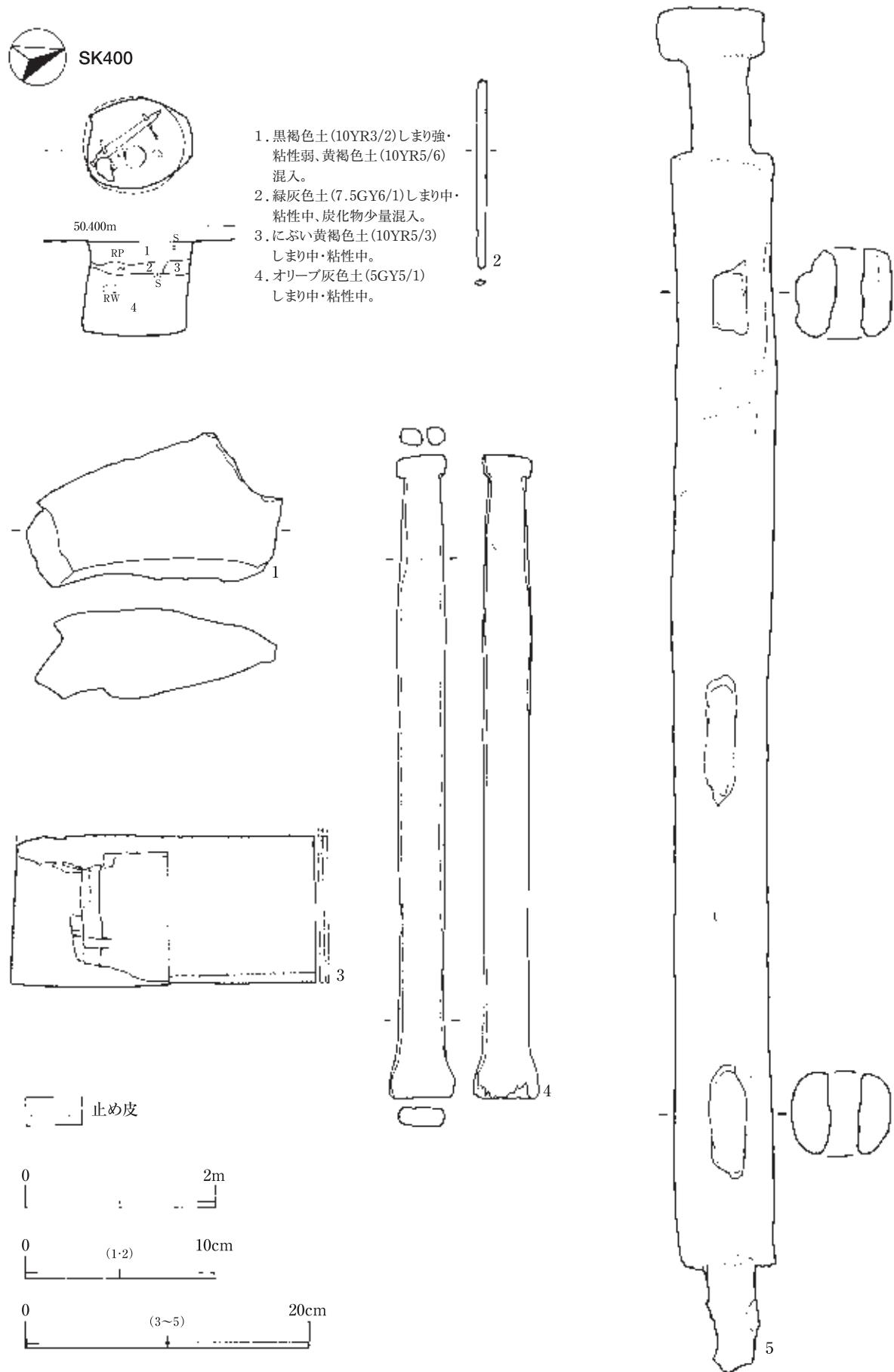
《土層》S K420は2層に分層し、S K421は単層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

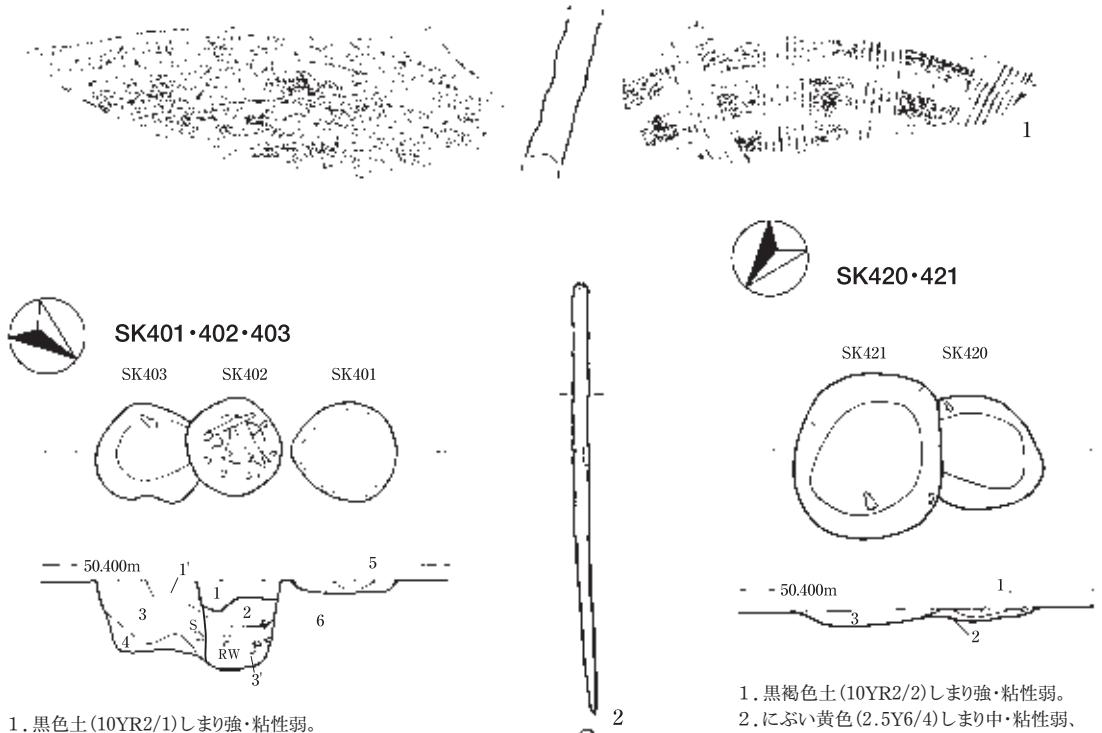
《出土遺物》なし。

《時期》中世と考えられる。

S K422土坑 (第140図、図版24)

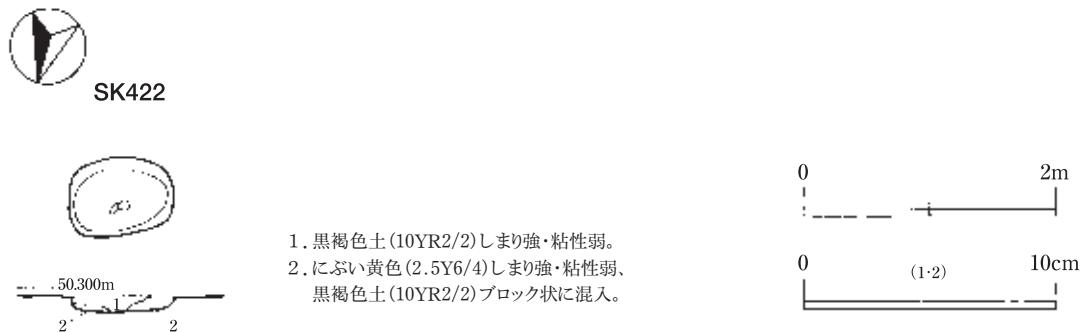


第139図 SK400土坑・出土遺物



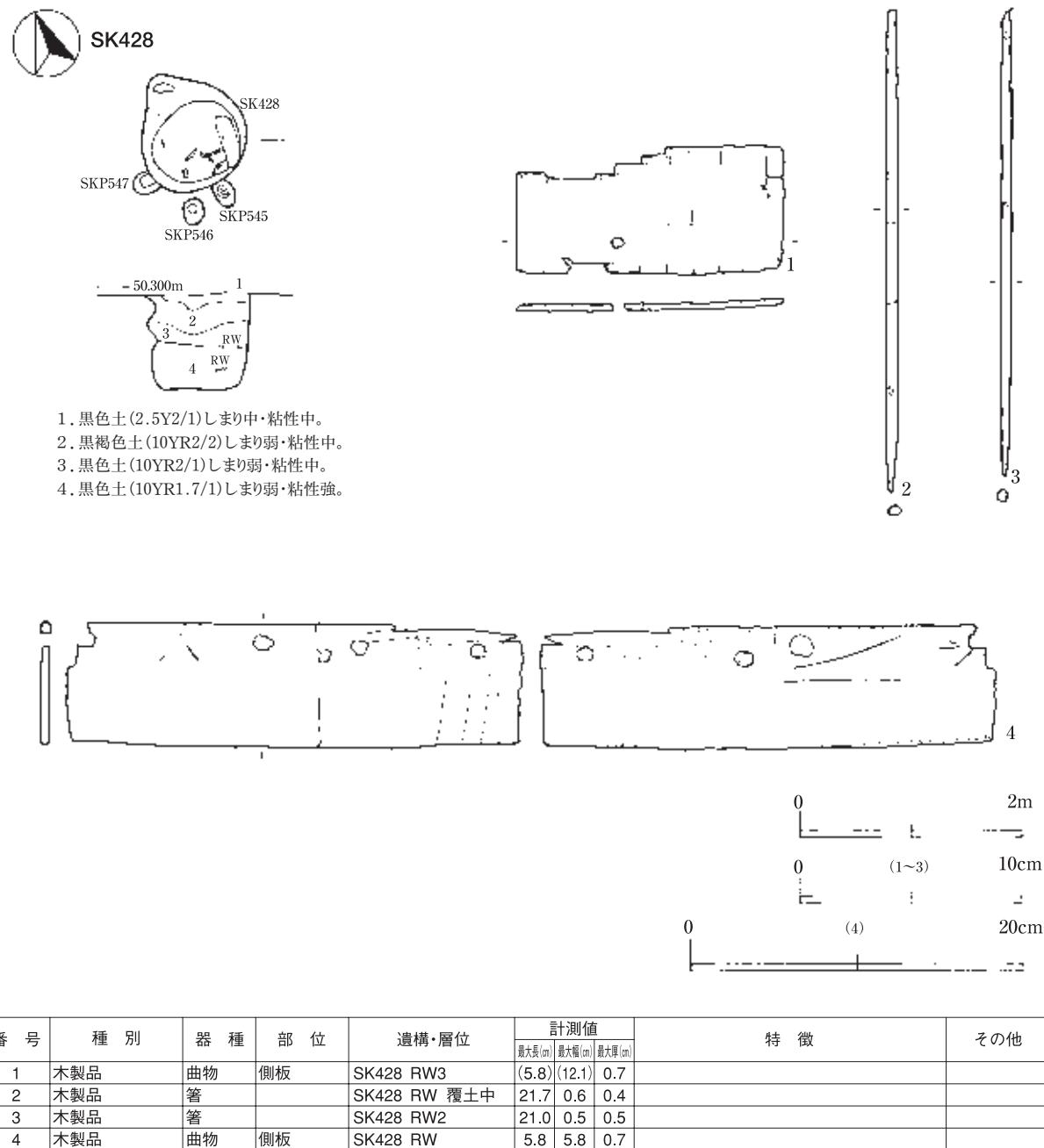
1. 黒色土(10YR2/1)しまり強・粘性弱。
- 1'. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性弱。
2. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性中。
3. 黒色土(10YR1.7/1)しまり中・粘性中。
- 3'. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性弱。
4. 緑灰色土(10GY5/1)しまり弱・粘性強。
5. 黒褐色土(10YR3/1)しまり強・粘性弱、炭化物粒微量混入。
6. にぶい黄色土(2.5Y6/4)しまり強・粘性弱。

1. 黒褐色土(10YR2/2)しまり強・粘性弱。
2. にぶい黄色(2.5Y6/4)しまり中・粘性弱、黒褐色土(10YR2/2)ブロック少量混入。
3. 黒褐色土(10YR2/2)しまり強・粘性弱、にぶい黄色土(2.5Y6/4)ブロック状に少量混入。



	番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
第139図	1	礫石器	カマド礫		SK400 覆土中	8.2	(13.5)	4.8		
	2	木製品	箸		SK400 RW	0.95	0.55	0.2		
	3	木製品	曲物	完形	SK400 RW5	口徑(21.8)	—	器高(17.5)		
	4	木製品	車軸		SK400	45.0	3.2	1.2		
	5	木製品	車軸		SK400	96.3	8.4	6.2		
第140図	1	中世陶器	擂鉢	胴部	SK400 RP3	—	—	—	口クロ 内面黒い	
	2	木製品	箸		SK403	17.0	0.6	0.5		

第140図 SK400・401・402・403・420・421・422土坑・出土遺物



第141図 SK428土坑・出土遺物

《位置と確認》L R 51・52グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.80m×短軸0.61m、深さ0.11mで、平面形は橢円形である。

《重複》なし。

《土層》2層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》なし。

《時期》中世と考えられる。

S K428土坑およびS K P 545・546・547柱穴様ピット（第141図、図版25）

《位置と確認》L R 47グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》S K428の規模は長軸1.10m×短軸0.98m、深さ0.86mで、平面形は略円形である。

《重複》なし。

《土層》4層に分層した。

《壁・底面》壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》4点を図示した（第141図1～4）。

《時期》中世と考えられる。

S K429土坑およびS K P 540・541・542・543・544柱穴様ピット（第142図、図版26）

《位置と確認》L R 47・48グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》S K429の規模は長軸0.89m×短軸0.89m、深さ0.71mで、平面形は円形である。

S K P 540の規模は長軸0.19m×短軸0.14mで、平面形は円形である。

S K P 541の規模は長軸0.14m×短軸0.11mで、平面形は橢円形である。

S K P 542の規模は長軸0.11m×短軸0.10mで、平面形は円形である。

S K P 543の規模は長軸0.23m×短軸0.20mで、平面形は円形である。

S K P 544の規模は長軸0.32m×短軸0.17mで、平面形は橢円形である。

《重複》なし。

《土層》3層に分層した。

《壁・底面》壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》4点を図示した（第142図1～4）。

《時期》中世と考えられる。

S K430・438土坑（第143図、図版26）

《位置と確認》L R 46・47グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》S K430の規模は長軸1.18m×短軸0.54m、深さ0.45mで、平面形は不整形である。

S K438の規模は長軸1.50m×短軸1.22m、深さ0.64mで、平面形は不整形である。

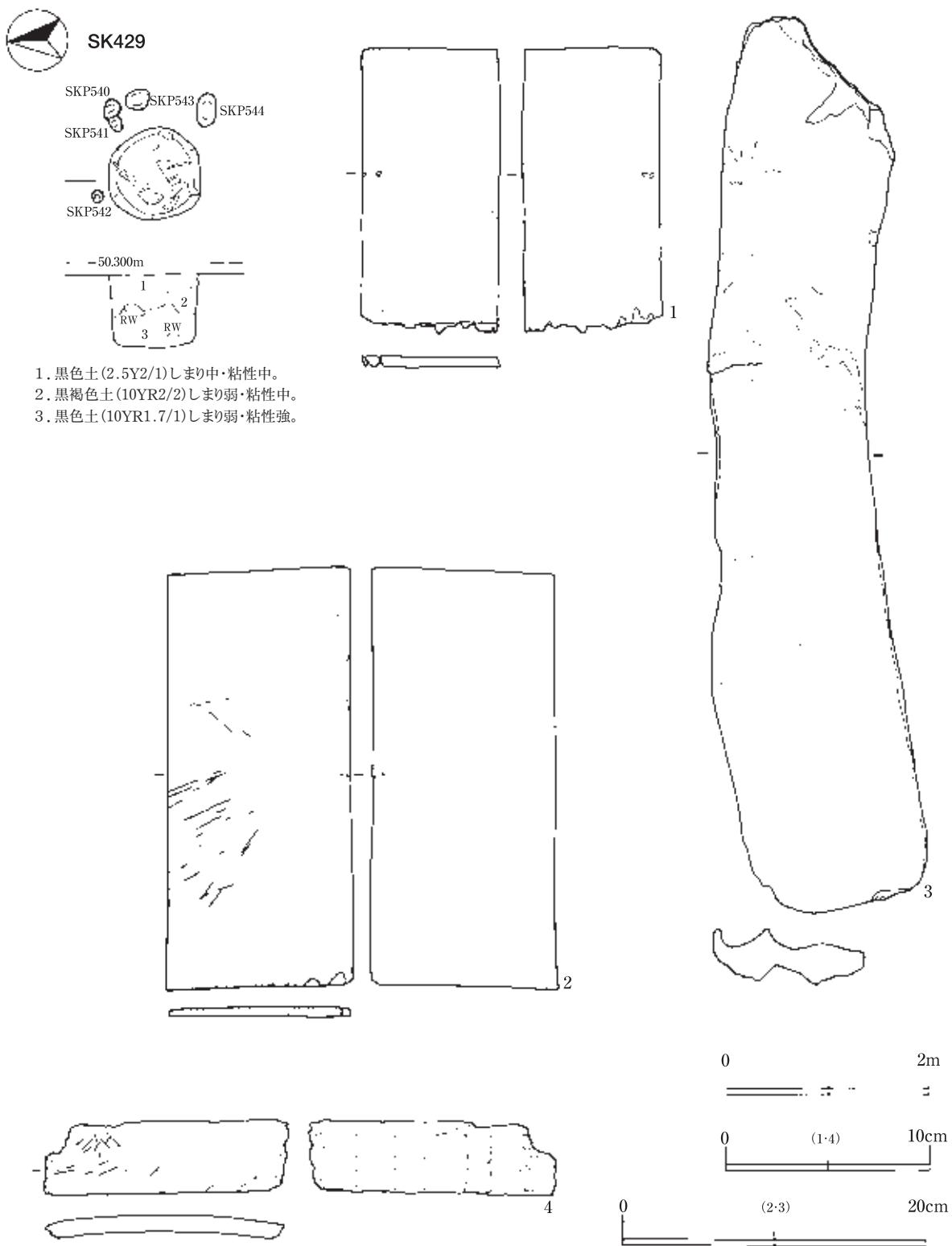
《重複》S K438がS K430を切る。

《土層》各々3層に分層した。

《壁・底面》壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

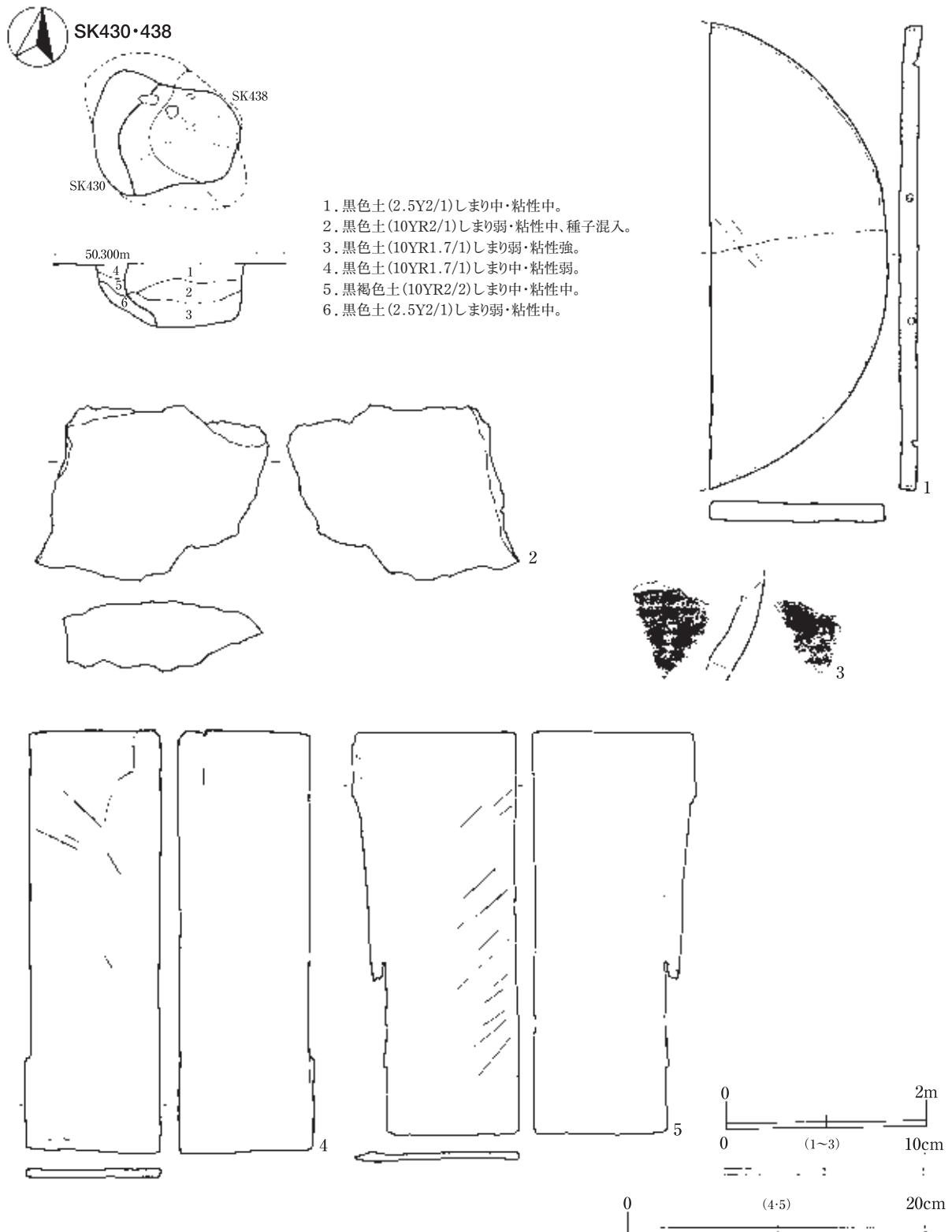
《出土遺物》5点を図示した（第143図1～5）。

《時期》中世と考えられる。



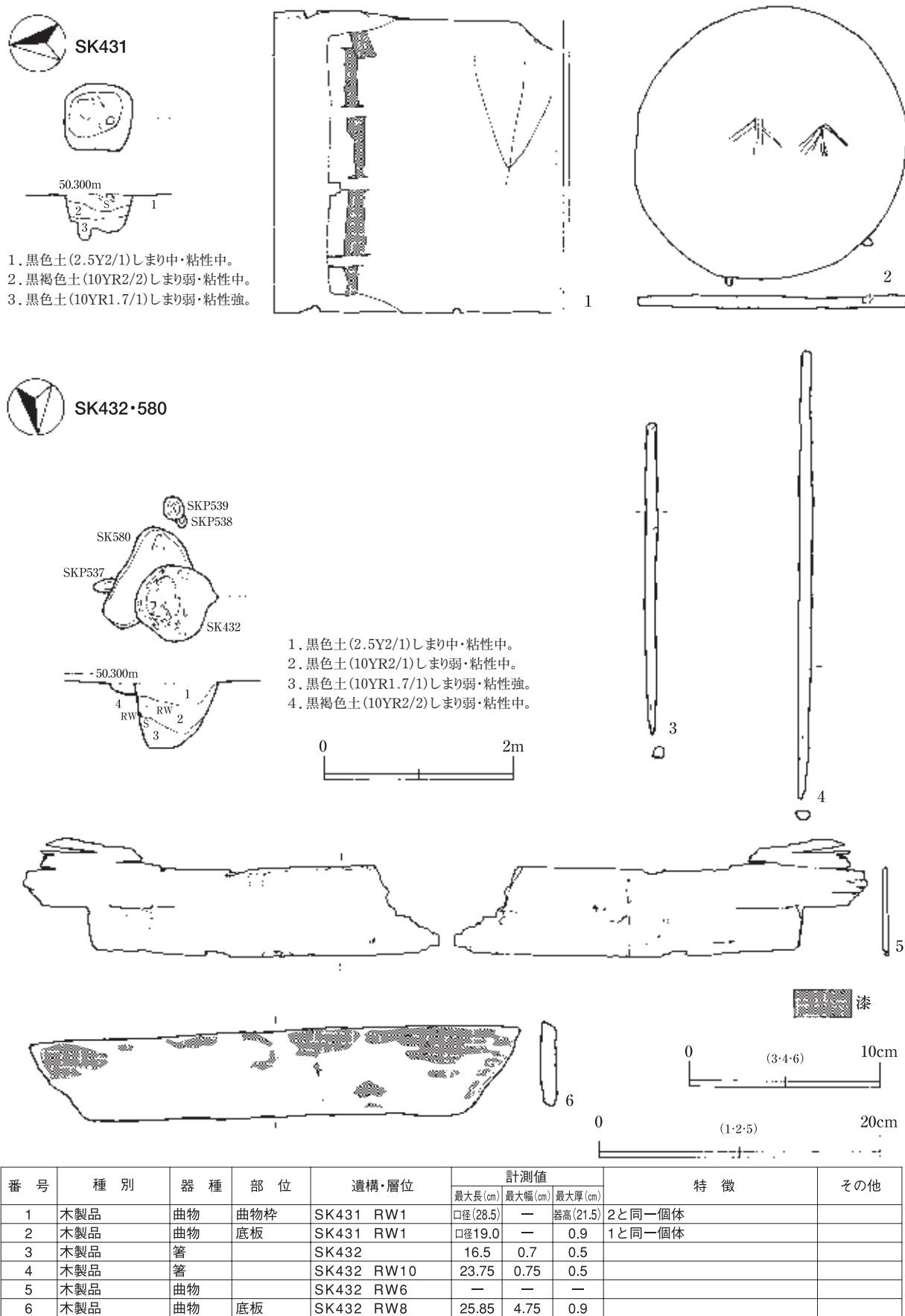
番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
1	木製品	板材		SK429 RW9	14.05	6.9	0.7		
2	木製品	板材		SK429 RW5	27.7	12.35	0.75		
3	木製品	板材		SK429 RW2	58.65	12.5	3.6		
4	木製品	曲物		SK429 RW7	—	—	—		

第142図 SK429土坑・出土遺物



番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
1	木製品	曲物	底板	SK430・438 RW7	口径23.2	—	0.9		
2	礫石器	礫		SK438	8.8	11.6	3.5	内外:炭化物付着	
3	中世陶器	甕	胴部	SK430・438 RP12	—	—	—	大烟窓跡 骨針が入る	
4	木製品	板材		SK430・438 RW16	28.3	9.0	0.6		
5	木製品	板材		SK430・438 RW15	27.0	11.1	0.7		

第143図 SK430・438土坑・出土遺物



第144図 SK431・432・580土坑・出土遺物

S K431土坑 (第144図、図版27)

《位置と確認》L R 47グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.71m×短軸0.70m、深さ0.47mで、平面形は隅丸方形である。

《重複》なし。

《土層》3層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は凹凸がある。

《出土遺物》2点を図示した(第144図1・2)。

《時期》中世と考えられる。

S K432・580土坑およびS K P537・538・539柱穴様ピット (第144図、図版28)

《位置と確認》L Q48、L R48グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》S K432の規模は長軸0.83m×短軸0.78m、深さ0.67mで、平面形は円形である。

S K580の規模は長軸0.76m×短軸0.44m、深さ0.07mで、平面形は橢円形である。

S K P537の規模は長軸0.20m×短軸0.13mで、平面形は円形である。

S K P538の規模は長軸0.10m×短軸0.08m(残存値)で、平面形は円形である。

S K P539の規模は長軸0.25m×短軸0.22mで、平面形は円形である。

《重複》S K432がS K580を切る。

《土層》S K580は単層、S K432は3層に分層した。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦で、東側が浅くなっている。

《出土遺物》4点を図示した(第144図3~6)。

《時期》中世と考えられる。

S K433・434・435・436土坑 (第145図、図版28)

《位置と確認》L Q51・52、L R 51・52グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》S K433の規模は長軸1.28m×短軸1.01m、深さ0.34mで、平面形は円形である。

S K434の規模は長軸0.83m×短軸0.83m(残存値)、深さ0.15mで、平面形は円形である。

S K435の規模は長軸1.13m×短軸0.72m(残存値)、深さ0.40mで、平面形は円形である。

S K436の規模は長軸1.07m(残存値)×短軸0.63m、深さ0.12mで、平面形は円形である。

《重複》土層の観察からS K436→S K435→S K433の順序に新しくなる。

《土層》S K433は4層、S K434・436は単層、S K435は3層に分層した。

《壁・底面》壁は浅く、緩やかに立ち上がり、底面は中央が一段深く平坦である。

《出土遺物》5点を図示した(第145図1~4、146図1)。

《時期》中世と考えられる。

S K437土坑およびS K P455・456・457・458柱穴様ピット (第146図、図版29)

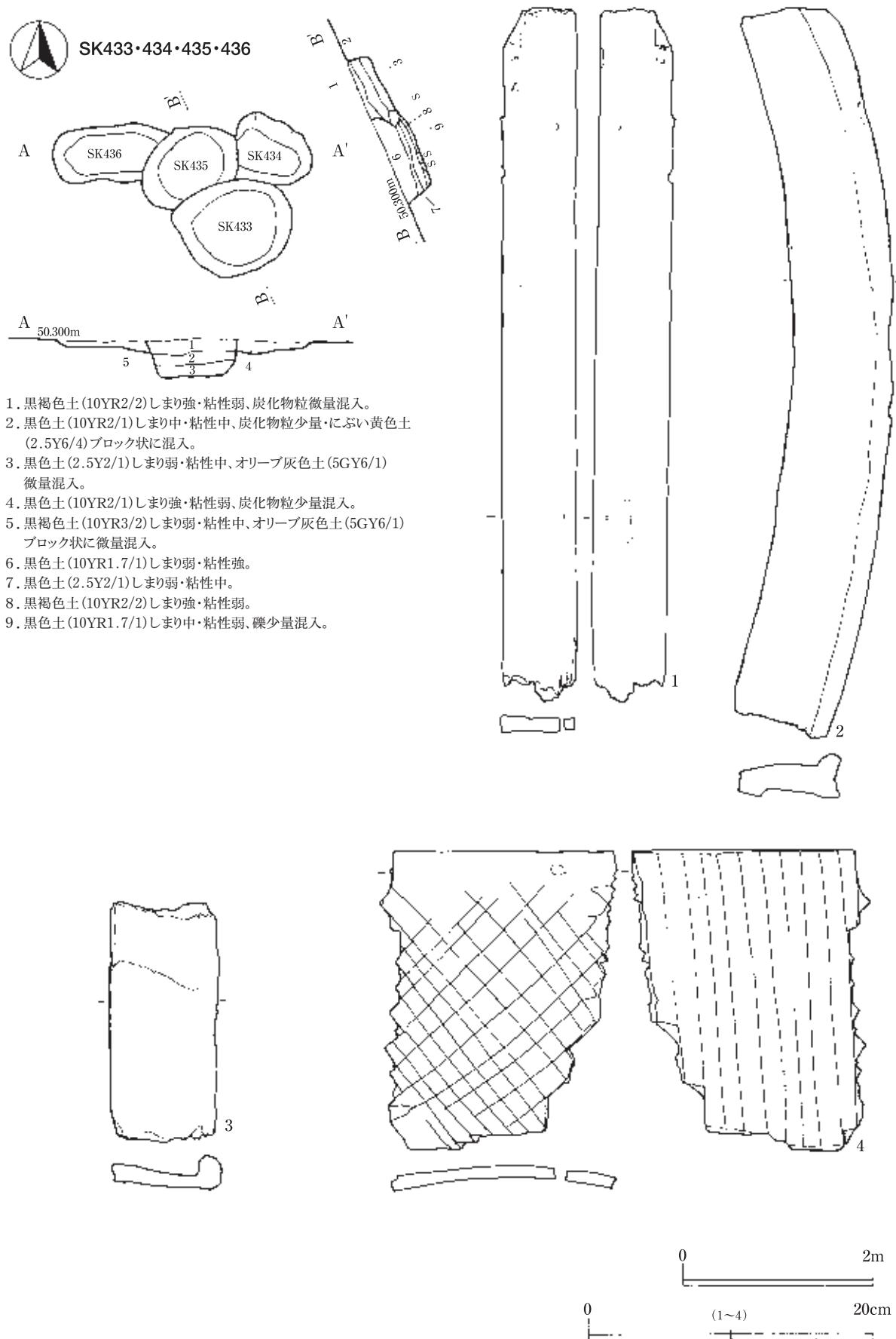
《位置と確認》MC48、MD48グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》S K437の規模は長軸1.49m×短軸1.19m、深さ0.53mで、平面形は略円形である。

S K P455の規模は長軸0.26m×短軸0.20mで、平面形は橢円形である。

S K P456の規模は長軸0.16m×短軸0.17mで、平面形は円形である。

S K P457の規模は長軸0.16m×短軸0.13mで、平面形は円形である。



第145図 SK433・434・435・436土坑・出土遺物

S K P 458の規模は長軸0.16m×短軸0.14mで、平面形は円形である。

- 《 重複 》なし。
- 《 土層 》3層に分層した。
- 《 壁・底面 》壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。
- 《 出土遺物 》なし。
- 《 時期 》中世と考えられる。

S K 439土坑 (第146図、図版29)

《 位置と確認 》 L R 51グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.86m×短軸1.43m、深さ0.29mで、平面形は略円形である。

- 《 重複 》なし。
- 《 土層 》3層に分層した。
- 《 壁・底面 》壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。
- 《 出土遺物 》なし。
- 《 時期 》中世と考えられる。

S K 443・491土坑およびS K P 488・495柱穴様ピット (第147図)

《 位置と確認 》 L R 43・44グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 S K 443の規模は長軸2.49m×短軸1.24m、深さ0.18mで、平面形は不整形である。

S K 491の規模は長軸0.80m×短軸0.77mで、平面形は隅丸三角形である。

S K P 488の規模は長軸0.18m×短軸0.18mで、平面形は円形である。

S K P 495の規模は長軸0.20m×短軸0.15mで、平面形は橢円形である。

- 《 重複 》 S K 443が S K 491に切られる。
- 《 土層 》 単層である。
- 《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は中央がくぼんでいる。
- 《 出土遺物 》なし。
- 《 時期 》 中世と考えられる。

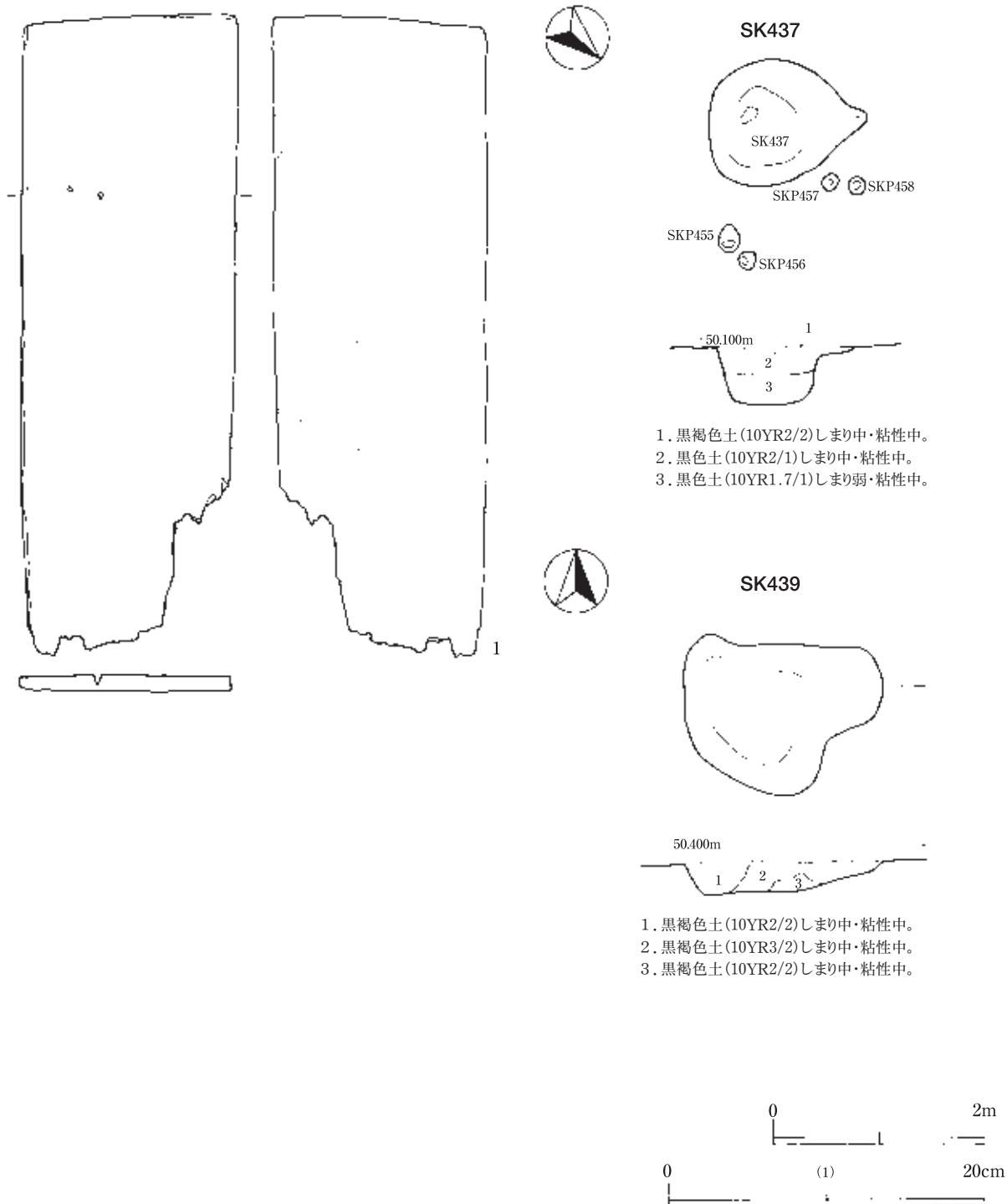
③ 井戸跡

S E 423井戸跡 (第147図、図版30)

《 位置と確認 》 L R 52グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.97m×短軸0.80m、深さ0.66mで、平面形は円形である。

- 《 重複 》なし。
- 《 土層 》3層に分層した。
- 《 壁・底面 》壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。
- 《 出土遺物 》なし。
- 《 時期 》中世と考えられる。



	番号	種別	器種	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
第145図	1	木製品	板材		SK435 RW	48.15	5.6	1.1		
	2	木製品	板材		SK435 RW 覆土	52.1	8.15	3.05		
	3	木製品	板材		SK435 RW 覆土	16.85	7.7	2.35		
	4	木製品	曲物		SK435 RW 覆土	—	—	—		
第146図	1	木製品	板材		SK435 RW	40.5	13.65	1.3		

第146図 SK435・437・439土坑・出土遺物



第147図 SK443土坑・SE423井戸跡・SN440焼土遺構・出土遺物

④ 焼土遺構

S N 440焼土遺構（第147図、図版30）

《位置と確認》ME 48グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.94m×短軸1.01m、深さ0.10mで、平面形は橢円形である。

《重複》なし。

《土層》3層に分層した。

《壁・底面》壁は浅く垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《出土遺物》2点を図示した（第147図1・2）。

《時期》中世と考えられる。

（2）北東調査区の検出遺構と遺物

① 掘立柱建物跡

S B 327掘立柱建物跡（第148図、図版32）

《位置と確認》L H71～73、L I 71～73グリッドのII層で確認した。当初、SKP柱穴様ピットとして検出したが、その配列から掘立柱建物跡と判断した。

《規模と平面形》規模は桁行4間×梁行2間、桁行総長は西側（P 14-10-8-4-1）で7.40m、東側（P 16-13-9-7・6-3）では7.20m、柱間距離は西側では南から1.52+2.32+2.32+1.24m、東側では南から1.28+2.31+2.33+1.28m、梁行は南側で6.02m、北側では5.88mの掘立柱建物である。平面形は長方形で南北両側に廂が付く。建物方位は西側でN-3°-Eを示す。

《重複》S B 308掘立柱建物跡に切られる。

《柱穴》P 1～16の計16基を確認した。各柱穴とも土層は単層で、黒褐色土または黒色土である。平面形はP 1・11・15などが円形、P 5・12・14などが略円形である。柱穴の重複関係はP 2がS B 308のP 15に切られるため、S B 327の方が古くS B 308の方が新しい。P 1～6は北側の廂となり、P 10～16は南側の廂となる。深さは浅いもので0.10m（P 3）、深いものでは0.46m（P 14）と差がある。

《時期》出土した遺物から中世（13世紀代後半）と考えられる。

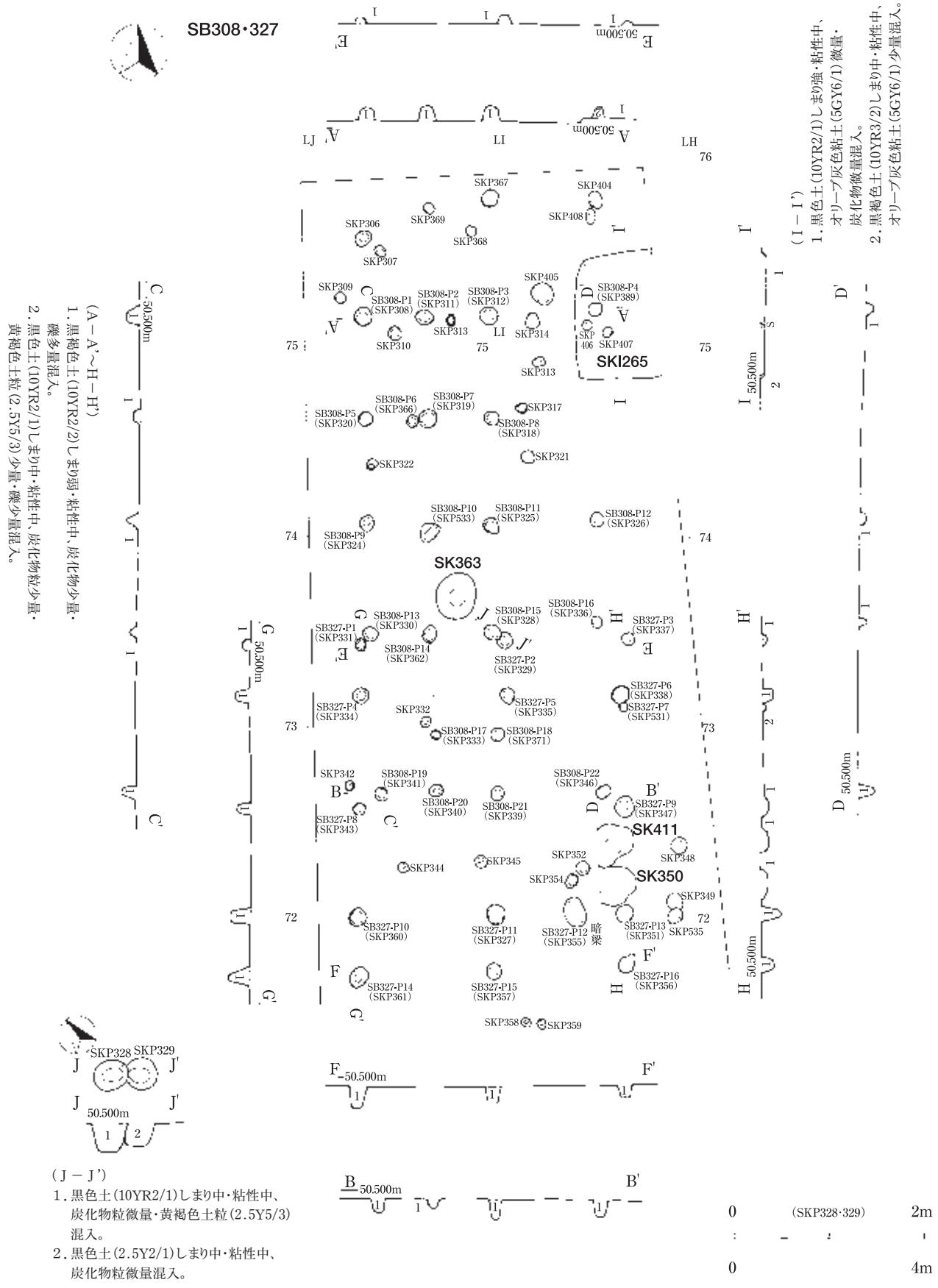
S B 308掘立柱建物跡（第148図、図版32）

《位置と確認》L H72～75、L I 72～75グリッドのII層で確認した。当初、SKP柱穴様ピットとして検出したが、その配列から掘立柱建物跡と判断した。

《規模と平面形》規模は桁行4間（東側は3間）×梁行3間、桁行総長は西側（P 19-13-9-5-1）で10.44m、東側（P 22-16-12-4）では10.48m、柱間距離は西側では南から3.56+2.40+2.24+2.24m、東側では南から3.72+2.20+4.56m、梁行は南側で4.98m、北側では5.22mの掘立柱建物である。平面形は南北に長い長方形である。建物方位は東側でN-4°-Wを示す。

《重複》S B 327掘立柱建物跡を切る。

《柱穴》P 1～22の計22基を確認した。各柱穴とも土層は単層で、黒褐色土または黒色土である。平面形はP 5～7などが円形、P 9～11などが略円形である。柱穴の重複関係はP 15がS B 327のP 2を切っているため、本遺構の方が新しい。桁行東側のP 22-16-12-4は他と間隔が異なる。



第148図 SB308-327掘立柱建物跡・SKI265竪穴状遺構・SK350・363・411土坑

深さは浅いもので0.12m（P 12）、深いものでは0.34m（P 2）と差がある。

《 時期 》出土した遺物から中世（13世紀代後半）と考えられる。

② 壺穴状遺構

SK I 265壺穴状遺構（第148図）

《 位置と確認 》 LH74・75グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸2.70m×短軸1.80m、深さ0.14mで、平面形は方形である。

《 重複 》 SB308掘立柱建物跡（P 4）を切る。

《 土層 》 2層に分層した。堆積土に小礫を含む。

《 壁・床面 》 壁は浅く、底面は平坦である。

《 時期 》 遺物が出土していないため不明であるが、SB308掘立柱建物跡よりも新しいことから、中世以降と考えられる。

③ 土坑

SK 303土坑（第149図、図版34）

《 位置と確認 》 LH66、L I 66グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸2.62m×短軸1.84m、深さ0.17mで、平面形は不整橢円形である。

《 重複 》 なし。

《 土層 》 3層に分層した。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 なし。

《 時期 》 中世と考えられる。

SK 304土坑（第149図、図版34）

《 位置と確認 》 LH65グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.71m×短軸0.62m、深さ0.29mで、平面形は円形である。

《 重複 》 なし。

《 土層 》 2層に分層した。

《 壁・底面 》 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 なし。

《 時期 》 中世と考えられる。

SK 350・411土坑（第148図）

《 位置と確認 》 LH72グリッドのⅡ層で確認した。

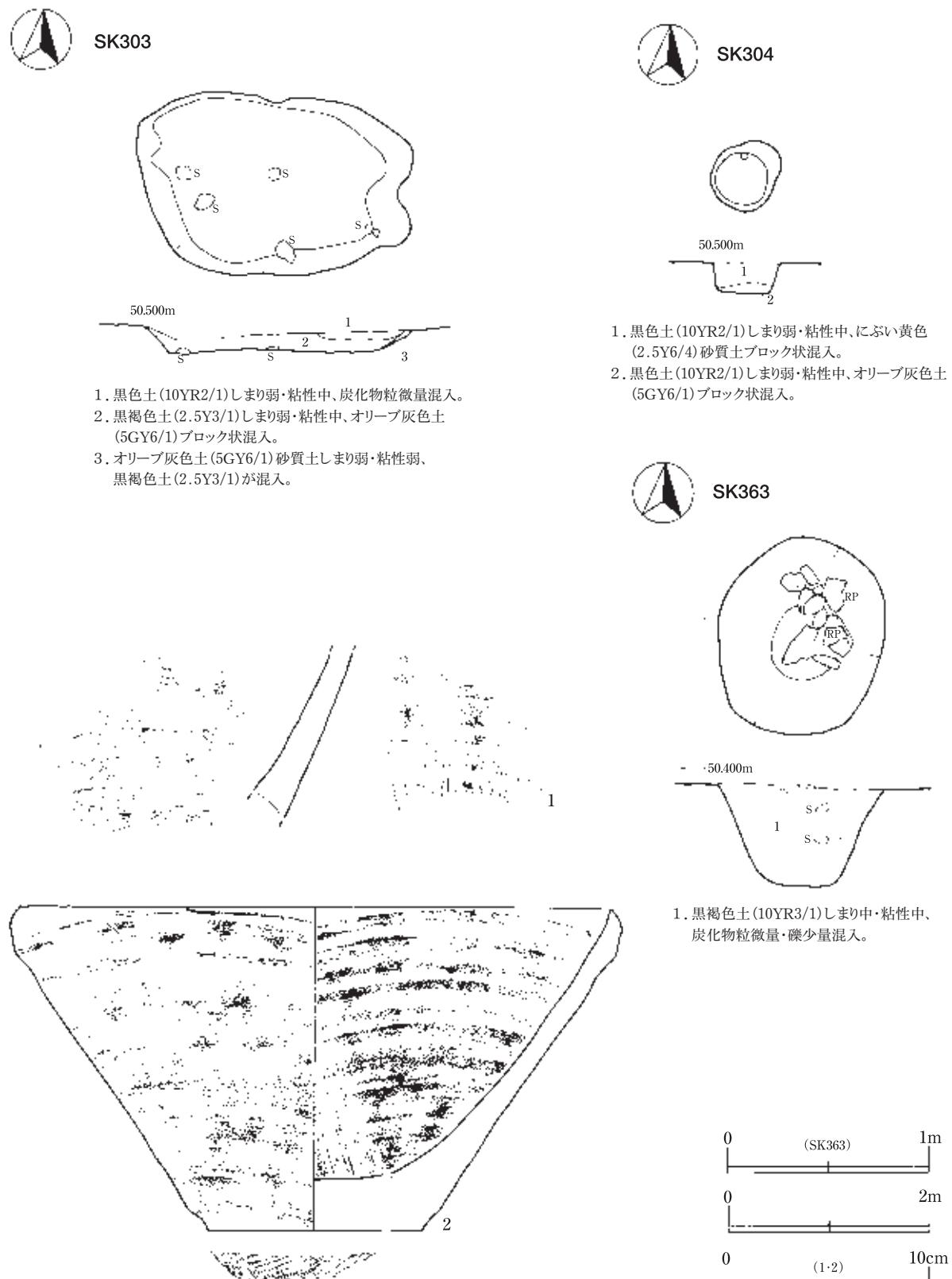
《 規模と平面形 》 SK350の規模は長軸0.84m×短軸0.76mで、平面形は略円形である。

SK411の規模は長軸1.02m×短軸0.80mで、平面形は略円形である。

《 重複 》 SK411がSK350を切る。

《 土層 》 各々単一の層である。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。



番号	種別	器種	遺構・層位	計測値			特徴	その他
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	中世陶器	擂鉢	SK363	—	—	—	13世紀初～前半	外面に布痕有り
2	須恵器 中世陶器	擂鉢	SK363 RP1・5	29.4	10.6	16.0	口ク口 13世紀初～前半	使用痕なし

第149図 SK303・304・363土坑

《 出土遺物 》なし。

《 時期 》中世と考えられる。

S K 363土坑 (第148・149図、図版34)

《 位置と確認 》 L I 73グリッドのⅡ層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.97m×短軸0.81m、深さ0.47mで、平面形は円形である。

《 重複 》なし。

《 土層 》 単層である。

《 壁・底面 》 壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 2点を図示した (第150図1・2)。

《 時期 》 中世と考えられる。

(3) その他の調査区の検出遺構と遺物

① 掘立柱建物跡

S B 209掘立柱建物跡 (第150図、図版33)

《 位置と確認 》 M E～M I 54・55グリッドのⅡ層で確認した。当初、S K P柱穴様ピットとして検出したが、その配列から掘立柱建物跡と判断した。

《 規模と平面形 》 規模は桁行6間×梁行2間、桁行総長は南側 (P 21-18-14-10-6-3-1) で16.04m、北側 (P 20-16・17-13-8-5-2) では12.16m、柱間距離は南側では東から4.02+2.40+2.28+2.28+2.48+2.58m、北側では東から2.55+2.31+2.31+2.47+2.52m、梁行は西側で1.64m、東側では1.76mの掘立柱建物である。平面形は東西に長い長方形となる。建物方位は南側でN-87°-Eを示す。

《 重複 》 S B 327掘立柱建物跡を切る。

《 柱穴 》 P 1～21の計21基を確認した。各柱穴とも土層は単層で、黒褐色土または黑色土である。P 18と20には柱材が遺存していた。柱穴の平面形はどれも概ね略円形である。柱穴同士の重複関係はP 3がP 4に、P 9がP 10に、P 11がP 12に、P 16がP 17にそれぞれ切られる。P 21のみ他の柱穴との間隔が異なり、対応する北側の柱穴を検出できなかった。深さは浅いもので0.12m (P 9・10)、深いものでは0.40m (P 12・14) と差がある。

《 時期 》 出土した遺物から中世 (13世紀代後半) と考えられる。

② その他の遺構

S X 305その他の遺構 (第150図)

《 位置と確認 》 M I 54・55グリッドのⅡ層で確認した。

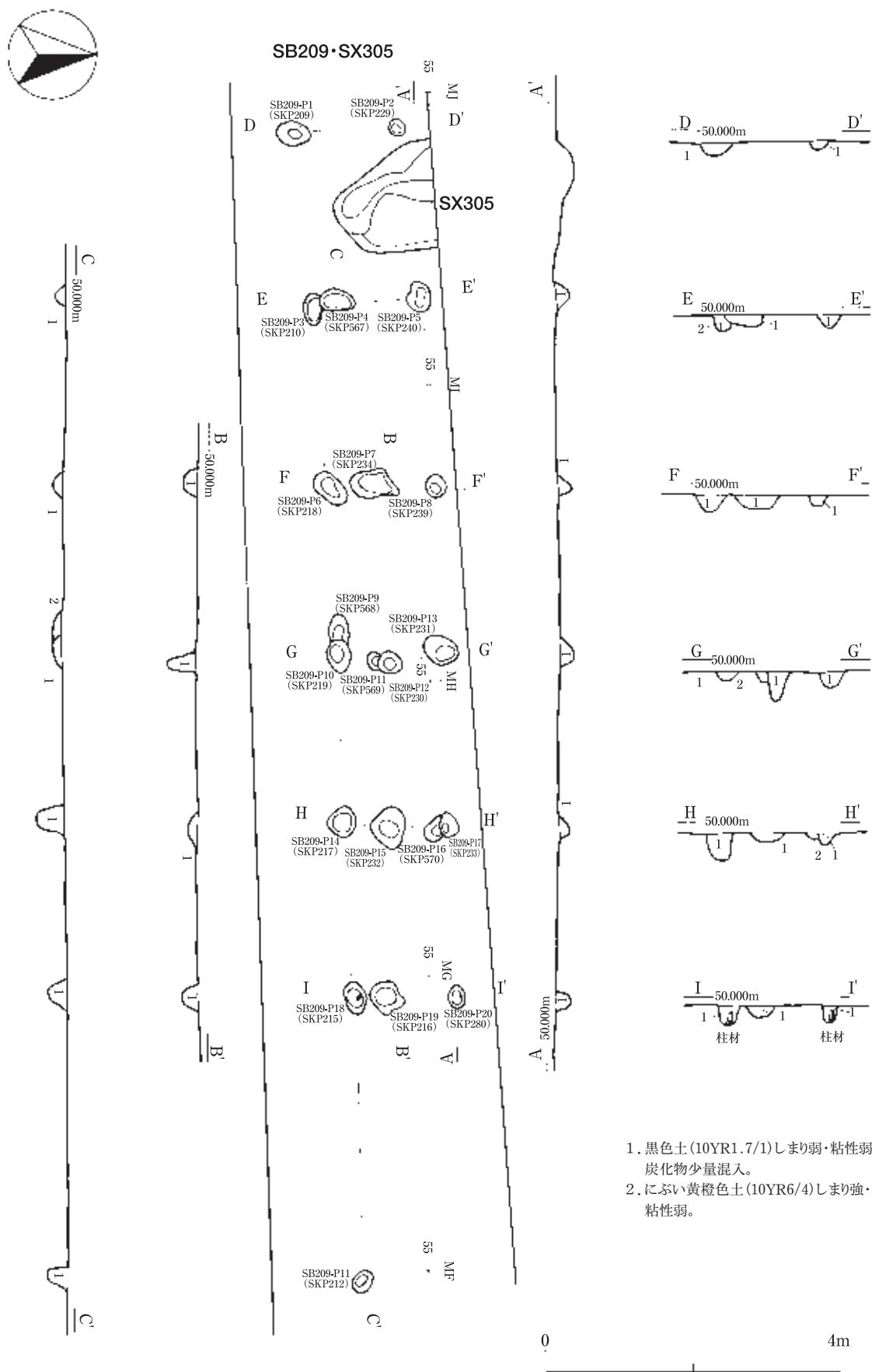
《 規模と平面形 》 規模は長軸1.50m×短軸1.38m、深さ0.28mで、平面形は略円形である。

《 重複 》なし。

《 壁・底面 》 壁は西に緩く傾斜して立ち上がり、底面は西側が丸みを帯びている。

《 出土遺物 》なし。

《 時期 》 中世と考えられる。



第150図 SB209掘立柱建物跡・SX305その他の遺構

第3節 遺構外出土遺物

本遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文時代、古代（平安時代）、中世（鎌倉～安土桃山時代）、近世（江戸時代）以降の4つに大別される。これらの遺物の8割以上は、平安時代に比定される時期のものであり、検出遺構の内部から出土した遺物の時期と合致する。この遺構外出土遺物を第151～159図に掲載した。第151図・152図1～8・153図・154図は縄文時代の遺物、第152図9～11・155図1～7図は平安時代の遺物、第155図8～10・156図は中世（鎌倉時代～室町時代）の遺物、第157図は近世（江戸時代）の遺物である。第158・159図には銭貨・鉄製品・木製品を掲載した。



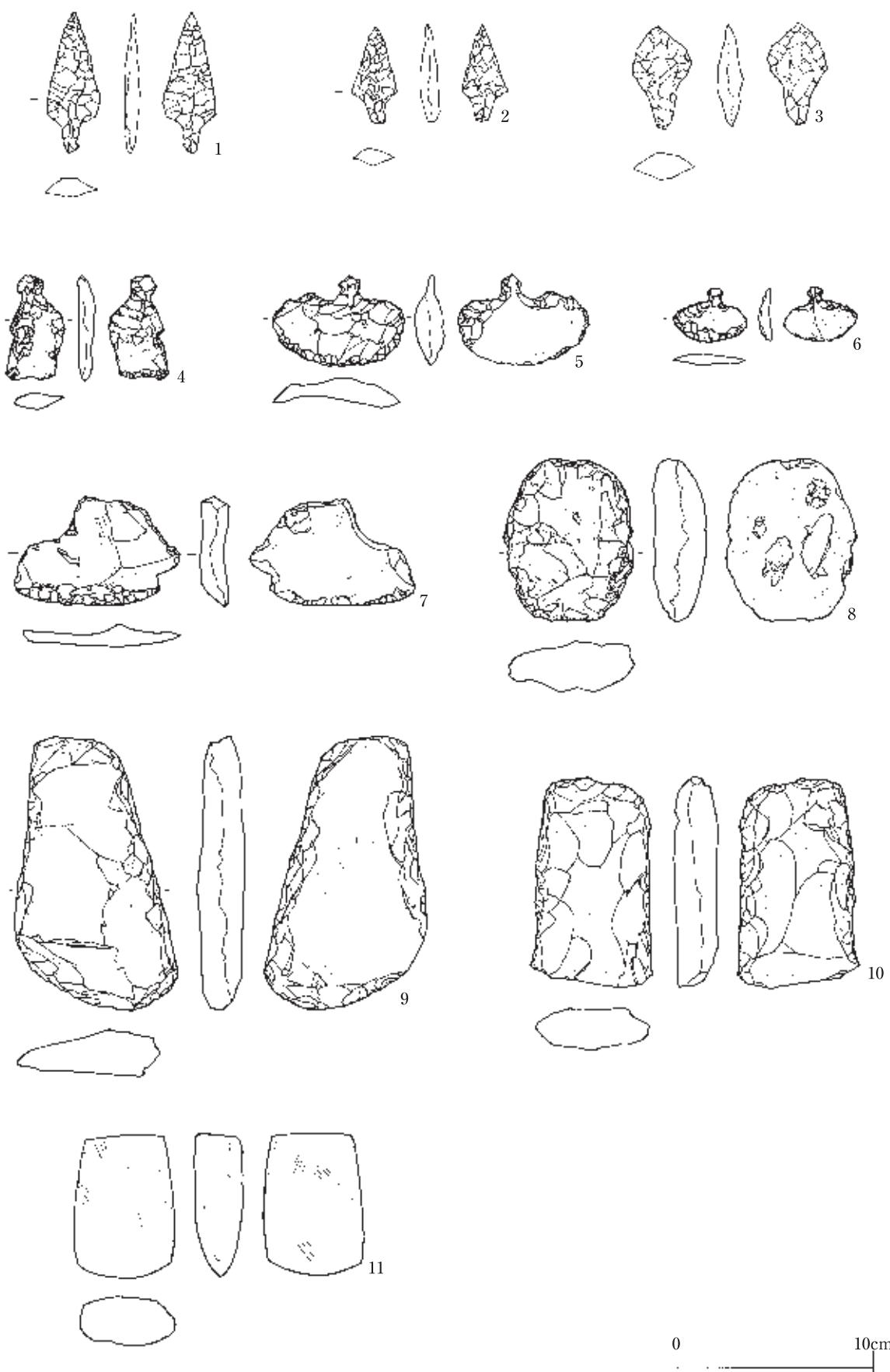
番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	深鉢	口縁部	NJ54 II層	—	—	—	口縁無文	
2	縄文土器	深鉢	口縁部	NP51 II層	—	—	—	炭化物付着(内面) 波状口縁	
3	縄文土器	鉢	口縁部～底部	NI54 II層	17.5	5.6	12.9		
4	縄文土器	鉢	胴部	Hトレンチ北側排土	—	—	—		(科析-98)
5	縄文土器	鉢	口縁部	NN54	—	—	—	工字文	
6	縄文土器	鉢	口縁部～底部	NH54 II層	10.0	3.7	5.5	大洞式	
7	縄文土器		口縁部	NI54 II層	—	—	—		(科析-97)
8	縄文土器		胴部	Hトレンチ北側排土	—	—	—		(科析-99)
9	縄文土器		胴部	NH54 II層	—	—	—		(科析-73)
10	縄文土器	鉢	胴部	NN54	—	—	—	工字文	
11	縄文土器	鉢	口縁部	LO51 IIb層	—	—	—		
12	縄文土器	深鉢	口縁部～底部	範確Rトレ南排土	21.2	—	—	炭化物付着(外)	
13	縄文土器	深鉢	底部	NE50 IIb層	12.0	5.4	6.4	炭化物付着(外)	
14	縄文土器	深鉢	口縁部	NO53 II層	—	—	—	カキ目あり 砂粒混じる	

第151図 遺構外出土遺物(1)

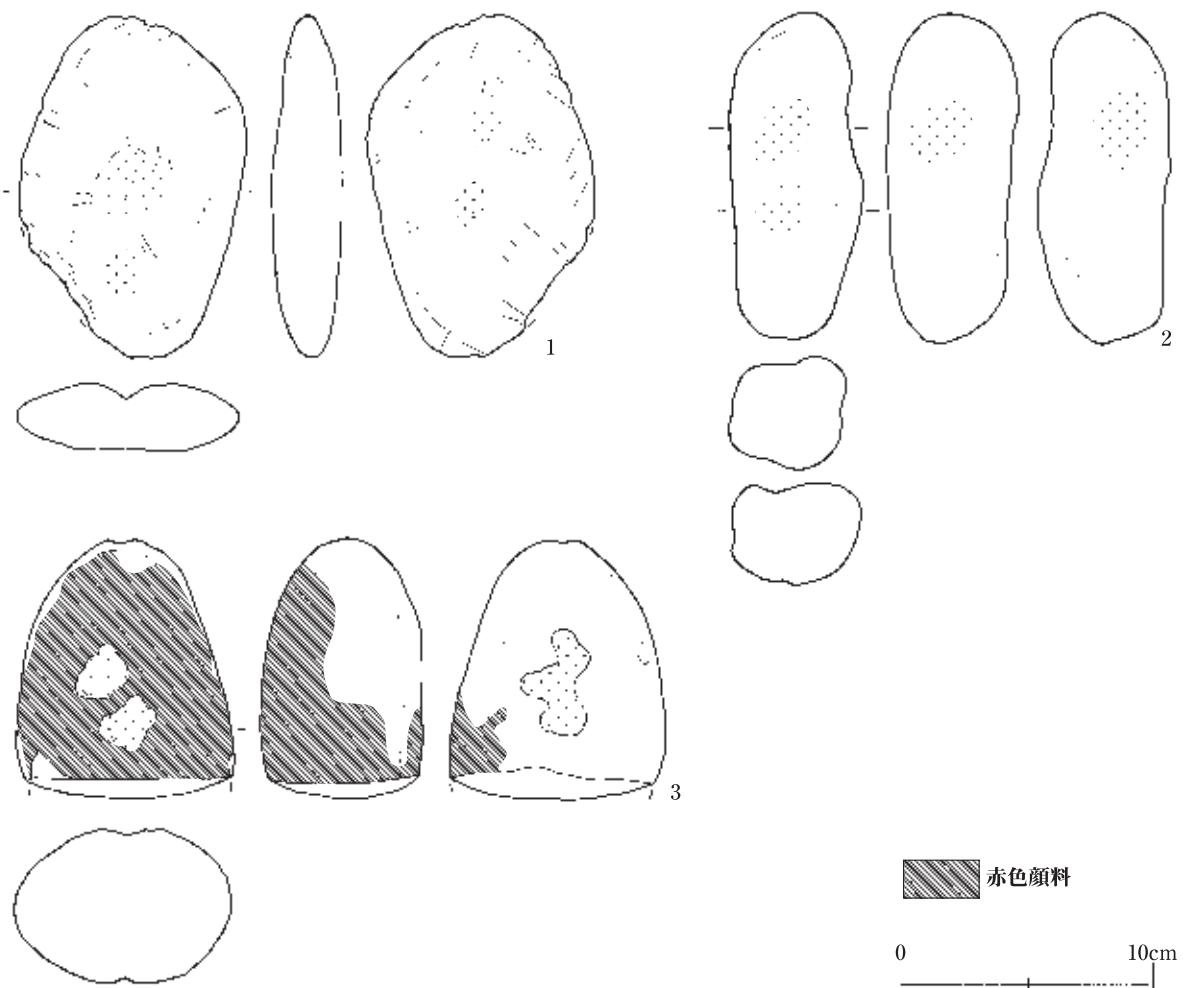


番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	縄文土器	口縁部突起		範確Rトレ南	—	—	—	口唇部に溝	
2	縄文土器	口縁部突起		NL54 III層	—	—	—	二又突起	
3	縄文土器	口縁部突起		NM54 II層	—	—	—		
4	縄文土器	浅鉢		範確Rトレ南排土	—	—	—	鉗状脚部	
5	縄文土器	壺	頸部	範確Qトレ排土	—	—	—	内外:漆塗り	
6	縄文土器	鉢	胴部	NM54 II層	—	—	—	内外:漆塗り 突起部あり	
7	縄文土器	鉢	胴部	NM54 II層	—	—	—	外:漆塗り	
8	縄文土器			NF53 IIb層	—	—	—	鉗状に沈線 内外:漆塗り	
9	土師器		胴部～底部	確認F-8(SK)埋土中	—	5.2	—	ロクロ 回転糸切り	
10	土師器	皿		確認Aトレンチ①	13.9	4.9	29.5	ロクロ 回転糸切り 墨書 口唇部外半	
11	土師器	甕	底部	範確Rトレ南排土	—	6.5	—	内外:炭化物付着 底面指あとか?	

第152図 遺構外出土遺物(2)

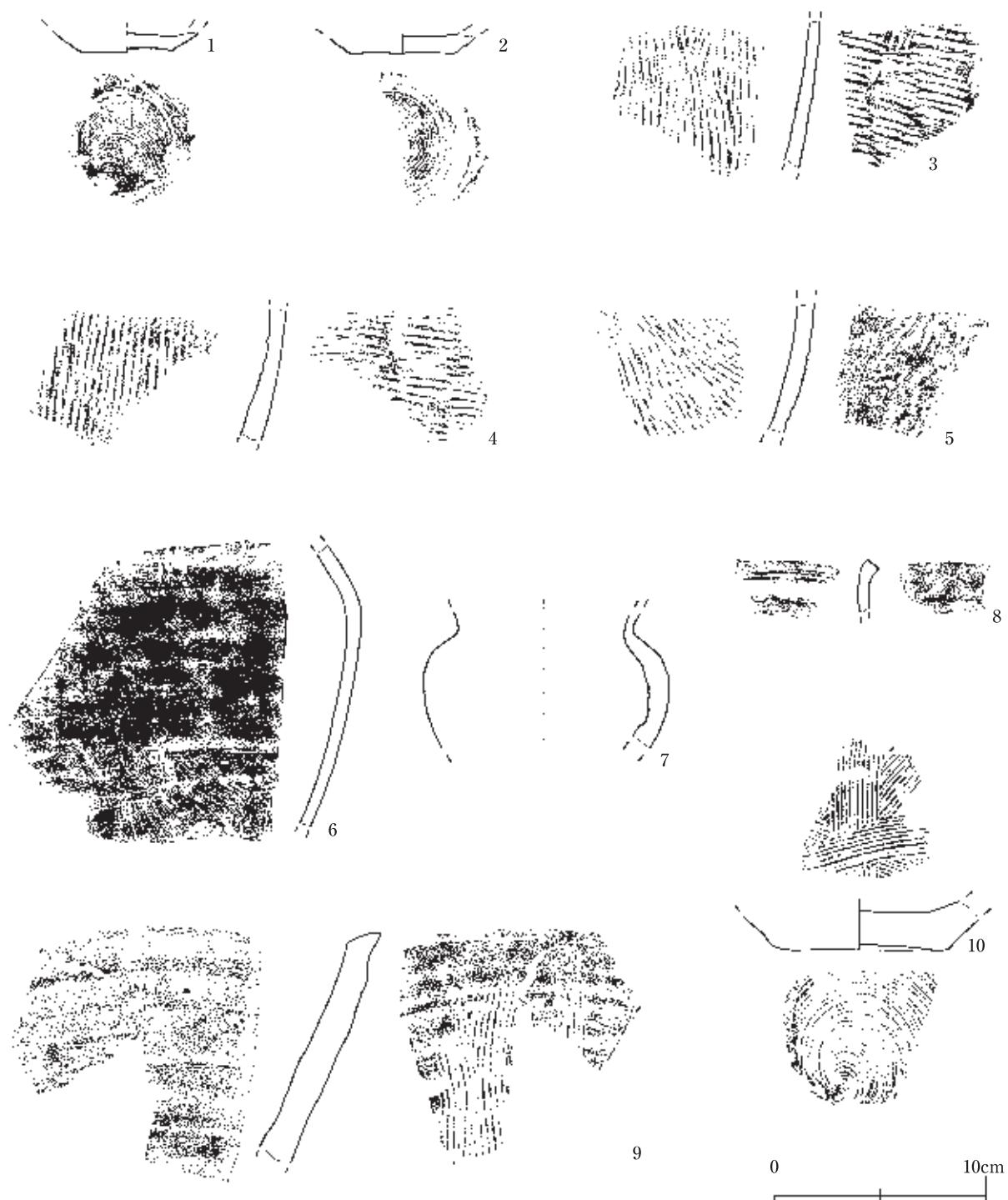


第153図 遺構外出土遺物(3)



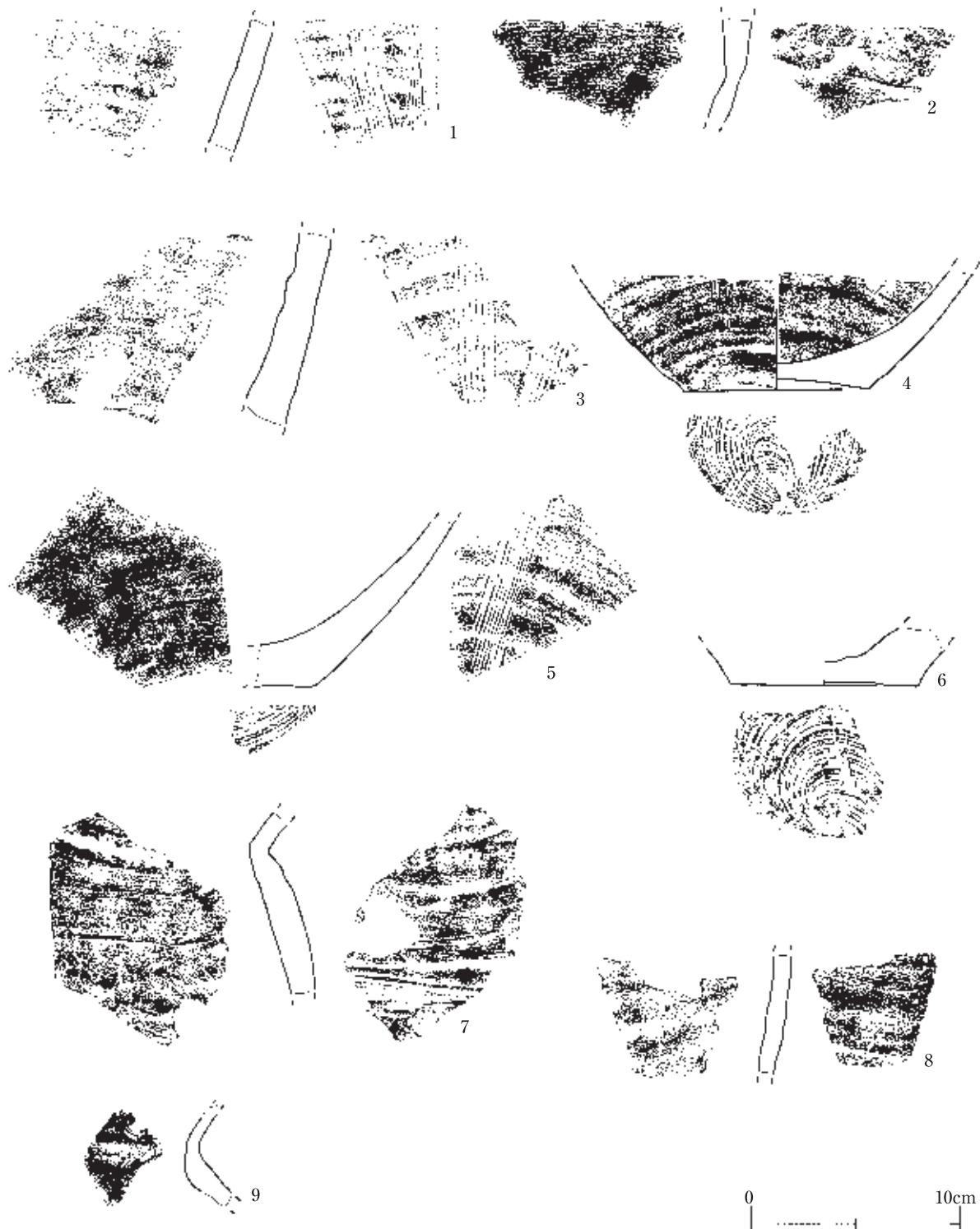
	番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
第153図	1	剥片石器	石鏃		不明	3.6	1.35	0.4		
	2	剥片石器	石鏃		NM54 II b層	2.5	1.2	0.5		
	3	剥片石器	石鏃		NL54 II b層	2.6	1.55	0.7		
	4	剥片石器	石匙		NN54 II b層	5.35	3.0	1.0	縦長石匙	
	5	剥片石器	石匙		NI54 II 層	4.6	6.75	1.55	横長石匙	
	6	剥片石器	石匙		NL54 II 層	2.7	3.75	0.7	横長石匙	
	7	剥片石器	ナイフ		NN54 II b層	5.5	8.45	1.5		
	8	礫石器	敲打器		NI54 II 層	8.3	6.6	2.7		
	9	礫石器	打製石斧		NG54	14.95	8.85	1.4	基部欠損	
	10	礫石器	打製石斧		LT46 II 層	10.7	6.2	2.3	刃部欠損	
	11	礫石器	磨製石斧		LT49 II 層	7.3	5.1	2.5	基部欠損	
第154図	1	礫石器	凹石		NN54	13.5	9.0	2.7		
	2	礫石器	凹石		NI54 II 層	13.0	5.25	5.05		
	3	礫石器	凹石		NN54 II 層	10.3	8.6	6.4	顔料(ベンガラ)付着	

第154図 遺構外出土遺物(4)



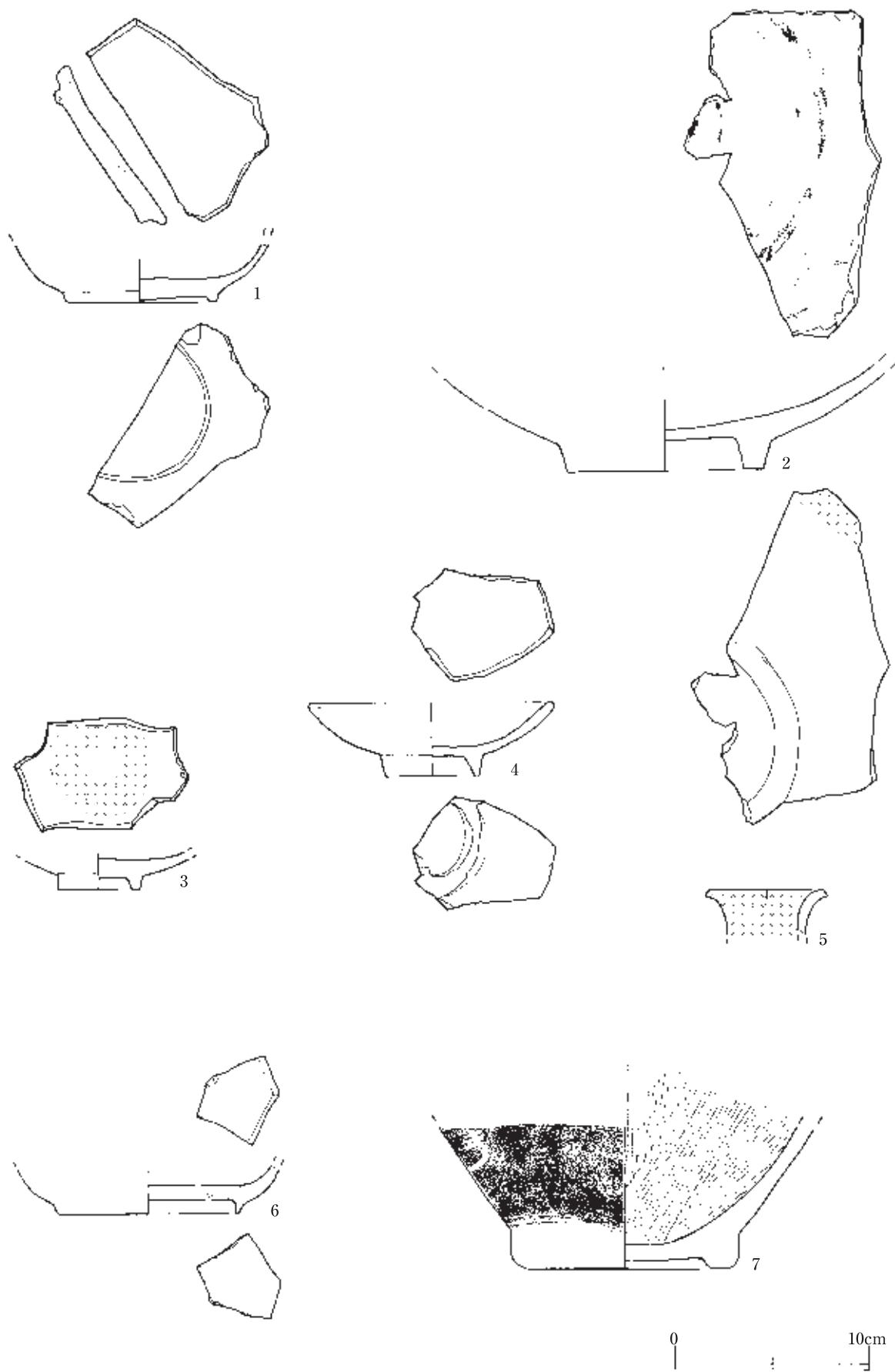
番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	須恵器	杯	底部	NT54 II b層	—	—	—		
2	須恵器	甕	底部	LT51 II層	—	—	—	口クロ 回転糸切り 台付	
3	須恵器	甕	胴部	NN54 II b層	—	—	—	口クロ 内外:タタキ目	
4	須恵器	甕	胴部	MC51 II層	—	—	—	口クロ 内外:タタキ目	
5	須恵器	甕	胴部	MA53 II層	—	—	—	口クロ 内外:タタキ目	
6	須恵器	水瓶	胴部	確認T5(SK内)	—	—	—		
7	須恵器	短頸壺	頸部~胴部	LI69 III層	—	—	—	口クロ 炭付着	
8	中世陶器	鉢	口縁部	LT45 II層	—	—	—	口クロ 内外:タタキ目 口縁内湾	
9	中世陶器	擂鉢	口縁部	MA48 II層	—	—	—	口クロ	
10	中世陶器	擂鉢	底部	MH54	—	8.2	—	口クロ 底面回転糸切り	

第155図 遺構外出土遺物(5)

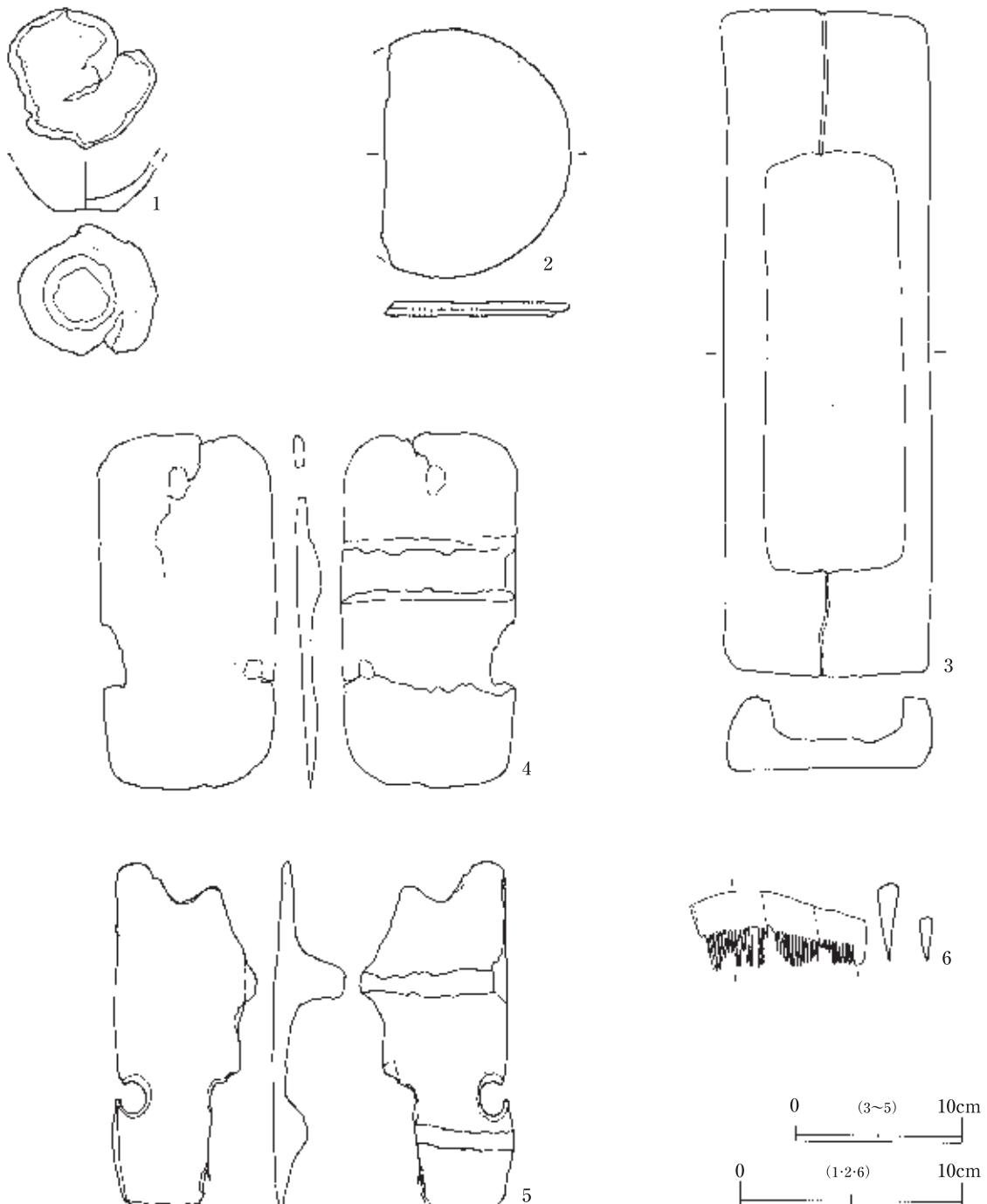


番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
1	中世陶器	擂鉢	胴部	MA48 II層	—	—	—	ロクロ	
2	中世陶器	擂鉢未製品	胴部	MQ54 II b層	—	—	—	骨針が入る 輪積み痕 13世紀前半 大畠窯跡II期	
3	中世陶器	擂鉢	胴部	LQ46 II層	—	—	—		
4	中世陶器	擂鉢	底部	MA43	—	9.0	—	ロクロ 骨針が入る 大畠窯跡II期	
5	須恵器系中世陶器	擂鉢	底部	確認0トレンチ	—	—	—		
6	中世陶器	壺	底部	LT53 II層	—	9.0	—	ロクロ 底面回転糸切り	
7	須恵器系中世陶器	壺	胴部	LT44 II層	—	—	—	ロクロ 13世紀初頭	
8	須恵器	甕	胴部	LI71 II b層	—	—	—	ロクロ	
9	中世陶器	壺	胴部	NS72 II層	—	—	—	ロクロ 内外:施釉	

第156図 遺構外出土遺物(6)

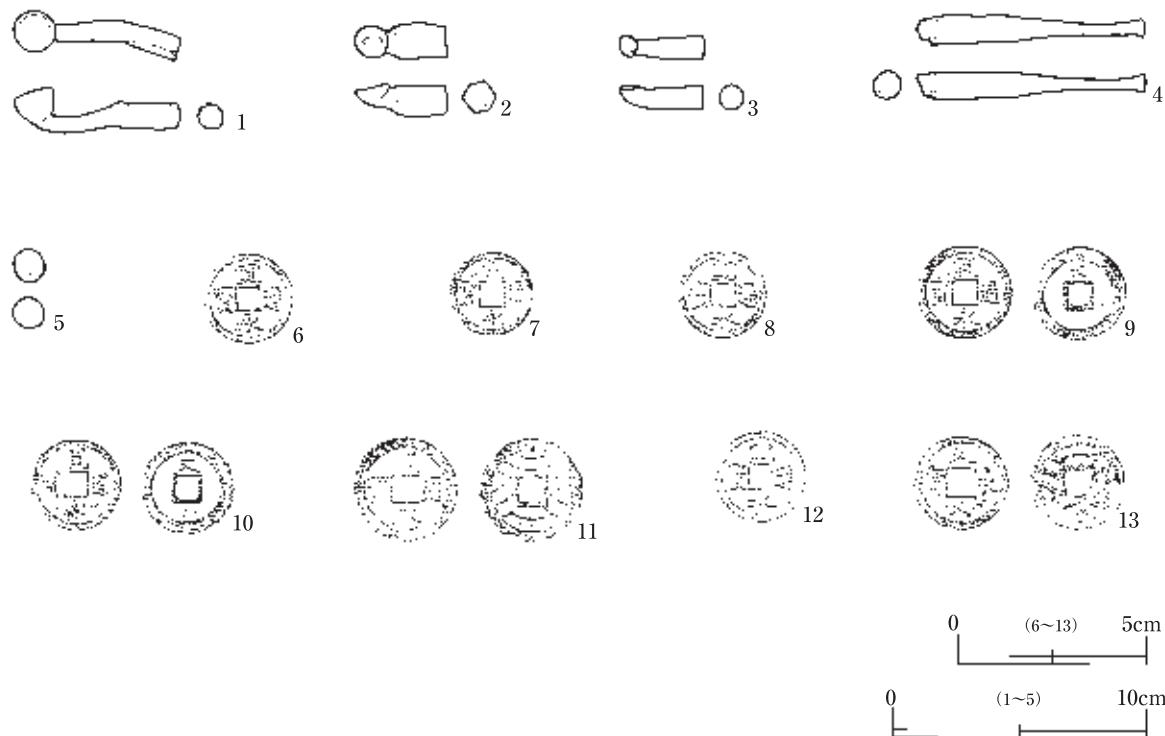


第157図 遺構外出土遺物(7)



	番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値		特徴	その他
						口径(cm)	底径(cm)		
第157図	1	陶磁器	皿	底部	NR70 II層	(6.2)	4.0	(3.0)	漆継ぎ
	2	陶磁器	鉢	底部	NP47 II層	—	10.0	—	肥前(唐津) 胎土目積み
	3	陶磁器	皿	底部	排土中	—	4.3	—	蛇の目高台 砂目積み 漆底面付着
	4	陶器		底部	NK54 II b層	5.4	(2.5)	(3.7)	なまこ釉(内面) 輪ハゲ 蛇の目 台部分欠損
	5	陶磁器	瓶	口縁部	表土中	5.8	—	—	内面に突起 江戸時代
	6	陶磁器		底部	LH71 III層	—	(9.3)	—	江戸時代前半 漆継ぎ
	7	陶磁器	擂鉢	底部	NI54 II層	—	5.7	7.2	胎土茶色・台部分欠損 江戸時代前半
第158図	1	木製品		Jトレ中央排土	—	3.4	—	鳥の絵入り	
	2	木製品	曲物	底板・板材	NL54 III層	—	—	—	
	3	木製品			確認Yトレ排土南端	40.0	12.6	4.5	
	4	木製品	下駄		確認Vトレンチ北側排土	21.5	10.3	1.6	
	5	木製品	下駄		NC54 II層	20.8	9.3	4.3	
	6	木製品	くし		NL54 II層	—	—	—	

第158図 遺構外出土遺物(8)



番号	種別	器形	部位	グリッド・層位	計測値			特徴	その他
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
1	鉄製品	煙管		NQ47 II b層	6.65	1.6	1.0	吹き出し口 重さ6.25g	
2	鉄製品	煙管		NH54 II b層	3.6	1.3	1.3	吹き出し口 重さ4.4g	
3	鉄製品	煙管		範確Bトレ	3.35	0.8	0.95	吹き出し口 重さ9.86g	
4	鉄製品	煙管		範確Iトレ	9.0	1.2	1.15	吸い口 重さ15.11g	
5	鉄製品	鉄砲玉		NL54 II層	1.35	1.3	1.25	重さ11.53g	
6	銭貨	寛永通宝		NS72 II層	2.4	—	0.12		
7	銭貨	寛永通宝		NL54 褐色土層	2.22	—	0.1		
8	銭貨	寛永通宝		NE45 II層	2.33	—	0.11		
9	銭貨	寛永通宝		範確Cトレ北側排土	2.46	—	0.12		
10	銭貨	寛永通宝		範確Qトレ南側排土	2.52	—	0.14		
11	銭貨	寛永通宝		範確Vトレ南側排土	2.47	—	0.11		
12	銭貨	寛永通宝		範確Hトレ南側排土	2.79	—	0.11		
13	銭貨								

第159図 遺構外出土遺物(9)

第3章 自然科学的分析

第1節 中屋敷II遺跡第2次調査出土土器付着物の¹⁴C年代測定

小林謙一¹⁾・坂本 稔¹⁾・尾寄大真¹⁾・新免歳靖¹⁾・松崎浩之²⁾・石澤宏基³⁾

1) 国立歴史民俗博物館

2) 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門

3) 秋田県埋蔵文化財センター南調査課

平成16年度に、秋田県仙北郡千畠町中屋敷II遺跡第2次調査出土土器付着物の¹⁴C年代測定を試みた。全部で103点の土器から炭化物を採取したが、このうち特に炭化物の付着が多い9点について測定した。このうち3点については、内面付着炭化物（aとする）と外面付着炭化物（bとする）を別々に測定したので、合計12測定例を得た。試料については第4表「測定試料一覧」に示す。

1 炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。（1）の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林・新免が、（2）と（3）は坂本・尾寄が行った。AKT0400-N24については、炭素量不足が予想され、（3）について、地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。

（1）前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

AAA処理は、土器付着物については、アセトンで洗浄し、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA処理として、80°C、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、1回目0.001N、4回目以降0.01N、7回目以降0.1N）でフミン酸等を除去する。7～8回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（240分以上）を2回行い中和後、水により洗浄した（4回）。

試料は、AAA前処理を行った量（処理量）、処理後回収した量（回収量）、二酸化炭素化精製に供した量（精製）、精製した二酸化炭素の炭素相当量（ガス）の重量（mg）を第5表「試料の重量と炭素含有率」に記す。処理した量に対するAAA処理後に回収された試料の重量による重量比を含有率1、二酸化炭素に精製した際の炭素含有率を含有率2、含有率1と2を掛けて求められるところの処理した量に対する炭素量の重量比を含有率3として第3表に付す。

（2）二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去する。

（3）グラファイト化：鉄（またはコバルト）触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換し、アルミ製カソードに充填する。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともにバイコールガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850°Cで3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・

精製した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともにバイコールガラス管に封じた。これを電気炉で650°Cで12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに60kgfの圧力で充填した。

2 測定結果と暦年較正

AMSによる¹⁴C測定は、AKT0400-N24は地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。AKT0400-N13,20,31ab,4b,13bは、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設(MALT、機関番号MTC)で、その他は加速器分析研究所(測定機関番号IAAA)に依頼して、標準試料とともに測定した。

年代データの¹⁴CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した¹⁴C年代(モデル年代)であることを示す(BPまたはyr BPと記すことが多いが、本稿では¹⁴CBPとする。¹⁴Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の¹⁴C/¹²C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した¹³C/¹²C比により、¹⁴C/¹²C比に対する同位体効果を調べ補正する。¹³C/¹²C比は、標準体(古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの¹³C/¹²C比)偏差値に対する千分率 $\delta^{13}\text{C}$ (パーミル、‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる¹⁴C/¹²C比によって補正する。補正した¹⁴C/¹²C比から、¹⁴C年代値(モデル年代)が得られる(英語表記ではConventional Ageとされることが多い)。

東京大学測定分、加速器分析研究所による $\delta^{13}\text{C}$ 値は、同位体効果補正のための加速器による測定であるが、これは試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値としては正確ではない。表には、加速器分析研究所による誤差を付して参考として記す。ベータアナリティック社の測定した試料は、¹³C用ガス試料を質量分析計により測定した¹³C/¹²C比の値であり、 $\delta^{13}\text{C}$ 値として正確である。

測定値を較正曲線INTCAL98(暦年代と炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版)(Stuiver,M.,et.al. 1998)と比較することによって実年代(暦年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BCで示す。()内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。

3 年代的考察

今回の測定結果から計算した暦年較正年代についてまとめておく。

まず、土器の内外面付着物をそれぞれ測定したAKT004-T4,T13,N31であるが、すべて誤差範囲内に収まり、今回の測定例では差がないといえる。今回の測定例では、内面・外面といつても外面付着物

も煤ではなく食物調理の吹きこぼれ状のものが多く、内面のお焦げと実質的に差がないことが予見される。低湿地遺跡のため、付着物の遺存がよく、食料残滓や調理の際の付着物が良好に残ったものと思われる。なお、AKT0400-T4とT13は、それぞれ内面付着物（a）をIAAA、外面付着物（b）をMTCと、異なる測定機関で計測し、一致した結果を得ている。

年代についてみていくと、土器が破片資料であるため、詳細な編年比定は難しいものもあるが、比較的古い時期に当たるものとして、N41がある。口頸部が直上するⅡc文様帶を持ち、羊歯状文を配し、小林圭一によれば大洞BC2式に比定されるN41は、前1190–995年に含まれる可能性が88%の確率であり、特に前1130–995年の中の年代である可能性が70%と最も高い。これは、大洞BC式が前1170–1030年頃の中に含まれる年代を持つとした、これまでの小林の想定と整合的である。

頸部文様帶が2段で構成され、体部に磨消文様をもち、大洞C1式に比定されるT13は、内外面付着物とも、おおむね同一の時期で、内面付着物は前1125–910年、外面付着物は前1045–890年の確率が最も高く、両者が重なる年代である前900年代頃の時期である可能性が考えられる。N31、T10も前者は紀元前1100–900年代前半、T10は前1050–890年の確率が高く、おおむね整合的である。

溝底の刺痕が特徴的で大洞C2式に比定されるAKT0400-N13は前825–755年の確率が高い。頸部に眼鏡状付帯文をもち、体部が磨消縄文で構成される可能性があることから大洞C2式の可能性があるT2は、前820–755年の確率が最も高い。

大洞A式古手に比定されるN20は前785–515年、体部文様帶に工字文がうかがわれ大洞A式に比定されるT4は外面吹きこぼれで前790–515年とほぼ一致した年代の確率が最も高く、やや測定誤差の大きいT4内面付着物も前795–495年と矛盾しない。波状の口唇形態で沈線が加えられ、頸部文様に工字文をもつことから（藤村1980）、大洞A式古手の可能性があるN24もT4とほぼ同じ測定値で、前785–500年の確率が最も高い。以上、大洞諸型式後半の土器型式の時期として、これまでの計測結果と整合的であるといえる（小林2004）。

この報告は、平成16年度文部科学省・科学研究費補助金 学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築ー」（研究代表 西本豊弘）の成果の一部である。土器型式の比定には、小林圭一氏の教示を得た。感謝します。

＜参考文献＞

- 今村峯雄 2000 「考古学における¹⁴C年代測定 高精度化と信頼性に関する諸問題」『考古学と化学を結ぶ』馬淵久夫・富永健編
UP選書 東京大学出版会
- 小林謙一2004 「東日本」『弥生時代の実年代』春成秀爾・今村峯雄編 学生社
- Stuiver,M.et.al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration,24,000–0 cal BP.Radiocarbon 40(3),1041–1083.
- 小林圭一 2003 「東北北半における縄文晩期前葉の注口土器」『研究紀要』創刊号 山形県埋蔵文化財センター
- 藤村東男 1980 「大洞諸型式設定に関する二、三の問題」『考古風土記』5

第4表 測定試料一覧

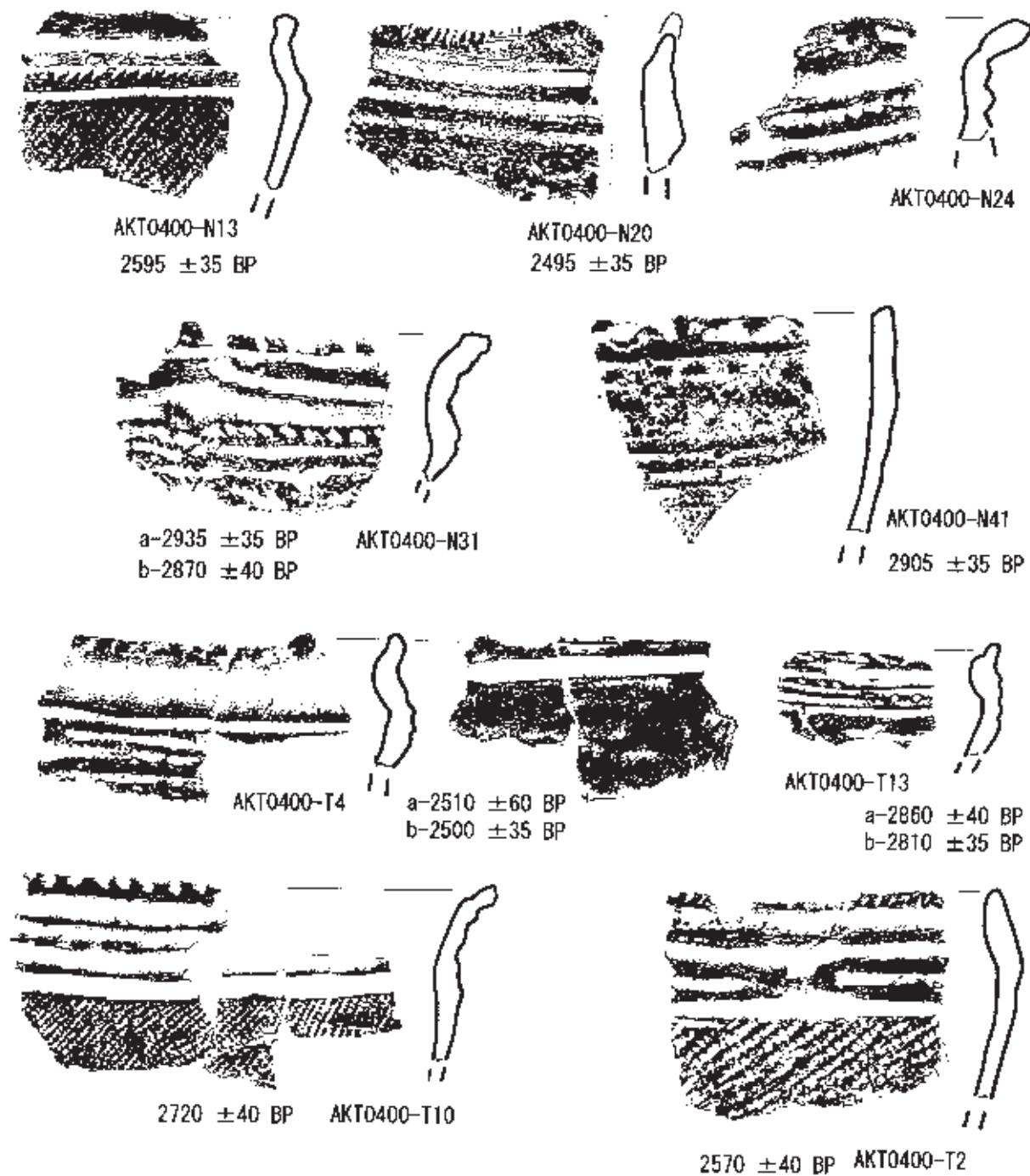
No.	図	種類	出土区	部位	時代	型式
AKT0400 N13	55	焦げ	NQ48 II層	胴内	縄文晚期	大洞C2 鉢
AKT0400 N20	63	焦げ	N051 II b層	胴内	縄文晚期	大洞A 鉢
AKT0400 N24	64	焦げ	NN54 II b層	胴内	縄文晚期	大洞A 鉢
AKT0400 N31a	73	焦げ	NH54 II層	胴内	縄文晚期	大洞C1 鉢
AKT0400 N31b		焦げ	NH54 II層	口縁外	縄文晚期	大洞C1 鉢
AKT0400 N41	83	吹きこぼれ	NS51	口縁外	縄文晚期	大洞BC2 鉢
AKT0400 T2	85	焦げ	N050 II b層	口縁内	縄文晚期	大洞C2 鉢
AKT0400 T4a	87	焦げ	NP49 II b層	口縁内	縄文晚期	大洞A 鉢
AKT0400 T4b		吹きこぼれ	NP49 II b層	口縁外 (沈線内)	縄文晚期	大洞A 鉢
AKT0400 T10	93	焦げ	NP51 II b層	口縁内	縄文晚期	大洞C1 鉢
AKT0400 T13a	96	焦げ	NP54 III層	口縁内	縄文晚期	大洞C1 鉢
AKT0400 T13b		吹きこぼれ	NP54 III層	口縁外	縄文晚期	大洞C1 鉢

第5表 試料の重量と炭素含有率

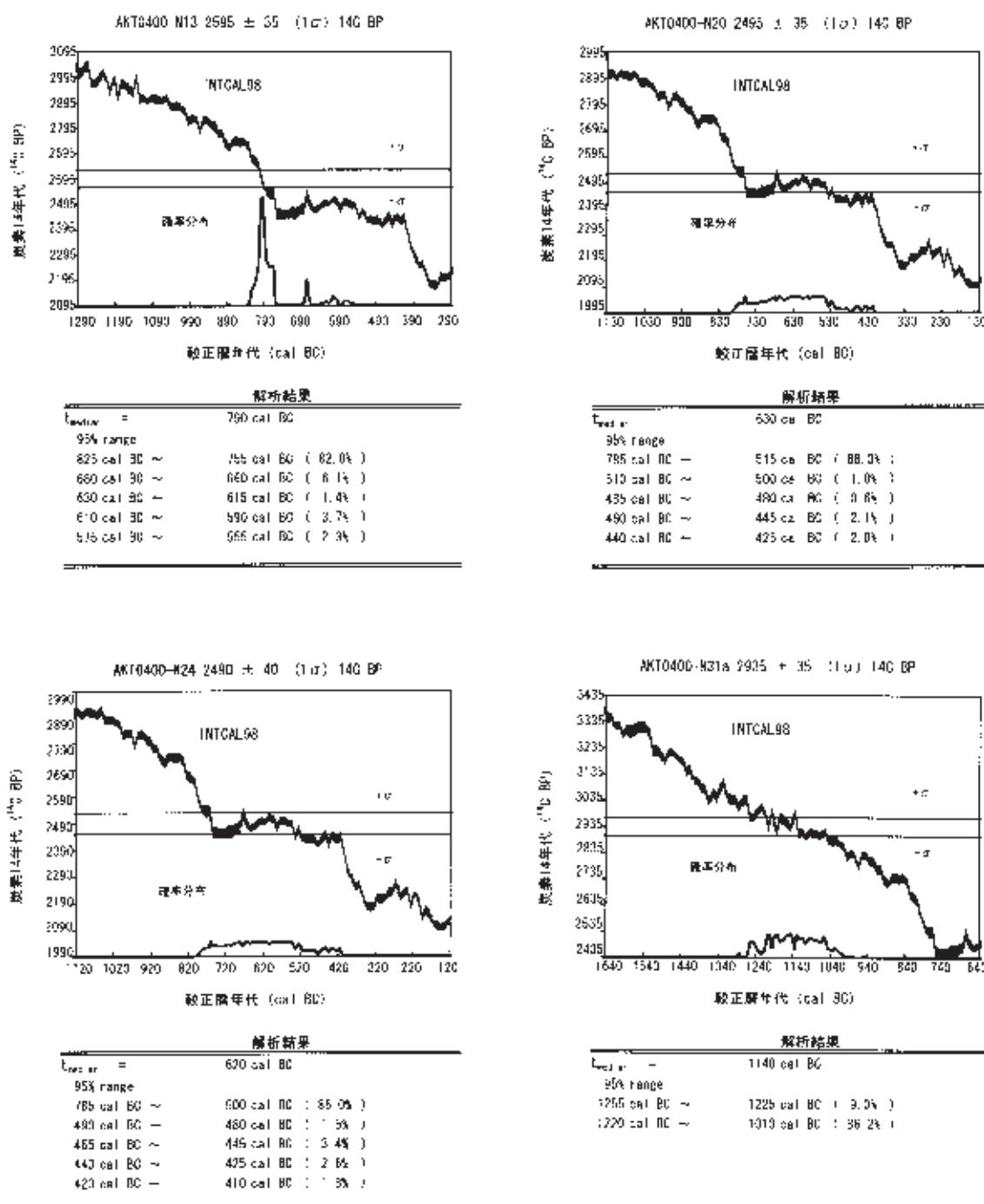
No.	採取量	処理量	回収量	含有率1	精製	ガス	含有率2	含有率3
AKT0400 N13	32.86	32.86	6.67	20.3	4.38	2.93	67.0	13.6
AKT0400 N20	40.31	40.31	13.38	33.2	4.24	2.43	57.4	19.1
AKT0400 N24	41.84	39.94	2.76	6.9	2.16	0.98	45.4	3.1
AKT0400 N31a	96.92	32.70	12.55	38.4	4.21	2.76	65.7	25.2
AKT0400 N31b	104.66	32.82	5.54	16.9	4.35	2.93	67.4	11.4
AKT0400 N41	539.22	32.05	15.03	46.9	4.00	2.79	69.9	32.8
AKT0400 T2	345.12	30.27	10.56	34.9	4.59	2.77	60.4	21.1
AKT0400 T4a	43.08	30.58	3.14	10.3	2.91	1.73	59.3	6.1
AKT0400 T4b	20.86	20.86	4.96	23.8	4.01	2.71	67.6	16.1
AKT0400 T10	62.96	33.00	7.57	22.9	4.38	2.97	67.8	15.6
AKT0400 T13a	90.36	41.08	6.36	15.5	4.44	2.77	62.3	9.6
AKT0400 T13b	160.45	37.20	12.07	32.4	4.04	2.56	63.3	20.5

第6表 測定結果及び較正年代

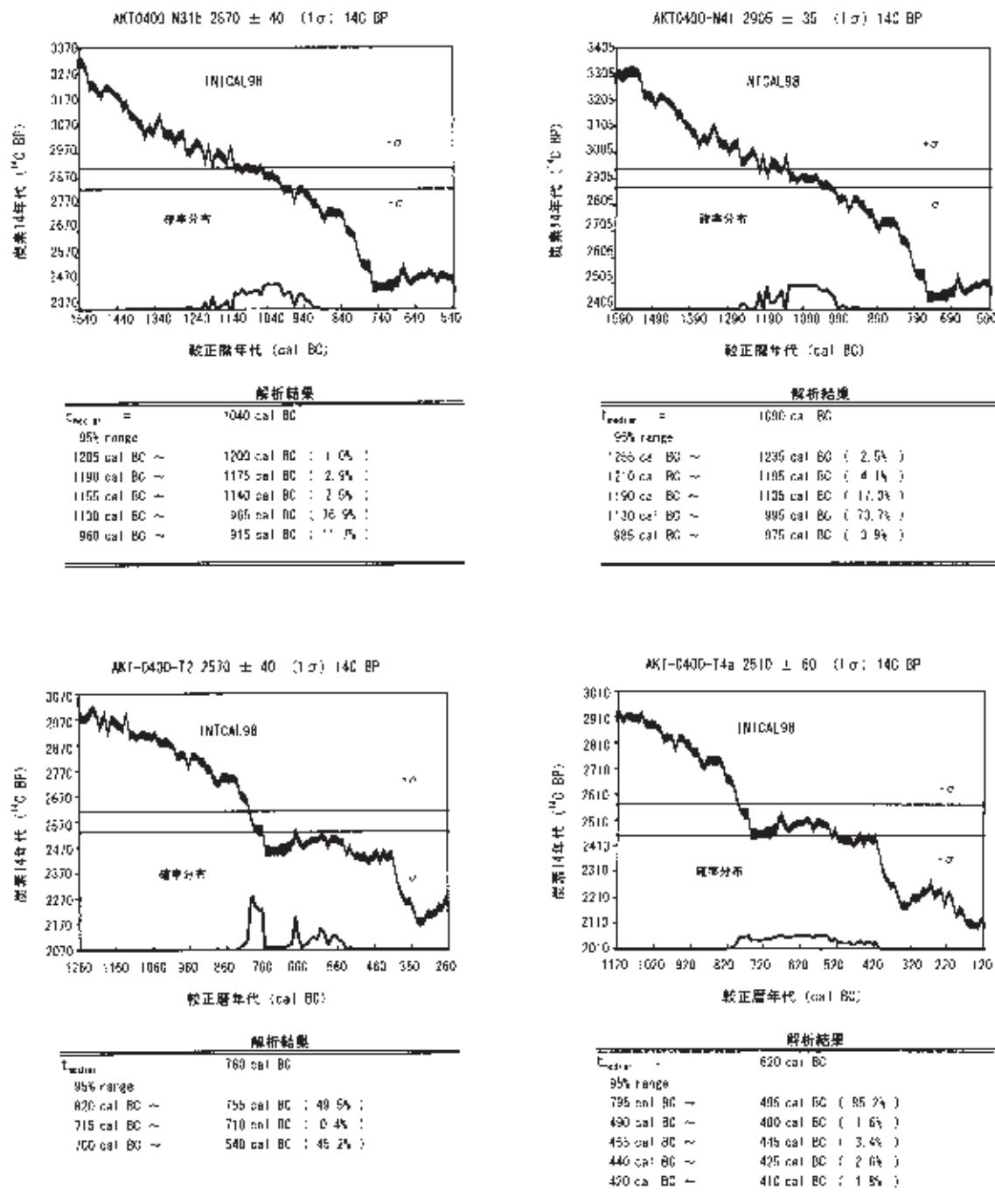
測定機関番号	No.	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	補正值14CBP	較正年代	cal BC %	%	%	%	%
MTC-05383	AKT0400 N13	-26.4	2595 ± 35	825-755	82	680-660	6.1	630-615	1.4
MTC-05384	AKT0400 N20	-27.4	2495 ± 35	785-515	88.3	510-500	1.0	485-480	0.6
Beta-198874	AKT0400 N24	-26.3	2510 ± 40	785-500	86.0	490-480	1.5	465-445	3.4
MTC-05385	AKT0400 N31a	-34.8	2935 ± 35	1255-1225	9.0	1220-1010	86.2		
MTC-05386	AKT0400 N31b	-39.4	2870 ± 40	1205-1200	1.0	1190-1175	2.9	1155-1140	2.5
MTC-05387	AKT0400 N41	-55.3	2905 ± 35	1255-1235	2.5	1210-1195	4.1	1190-1135	17
IAAA-41122	AKT0400 T2	-28.6 ± 0.7	2570 ± 40	820-755	49.5	715-710	0.4	700-540	45.2
IAAA-41123	AKT0400 T4a	-27.2 ± 0.6	2510 ± 60	795-495	85.2	490-480	1.6	465-445	3.4
MTC-05388	AKT0400 T4b	-25.4	2500 ± 35	790-515	90.3	485-480	0.5	460-445	1.8
IAAA-41124	AKT0400 T10	-27.2 ± 0.5	2720 ± 40	1110-1095	1.7	1085-1055	3.1	1050-890	85.4
IAAA-41125	AKT0400 T13a	-28.0 ± 0.6	2860 ± 40	1205-1200	0.7	1185-1175	1.8	1150-1140	1.3
MTC-05389	AKT0400 T13b	-30.4	2810 ± 35	1045-890	89.0	875-840	5.9		



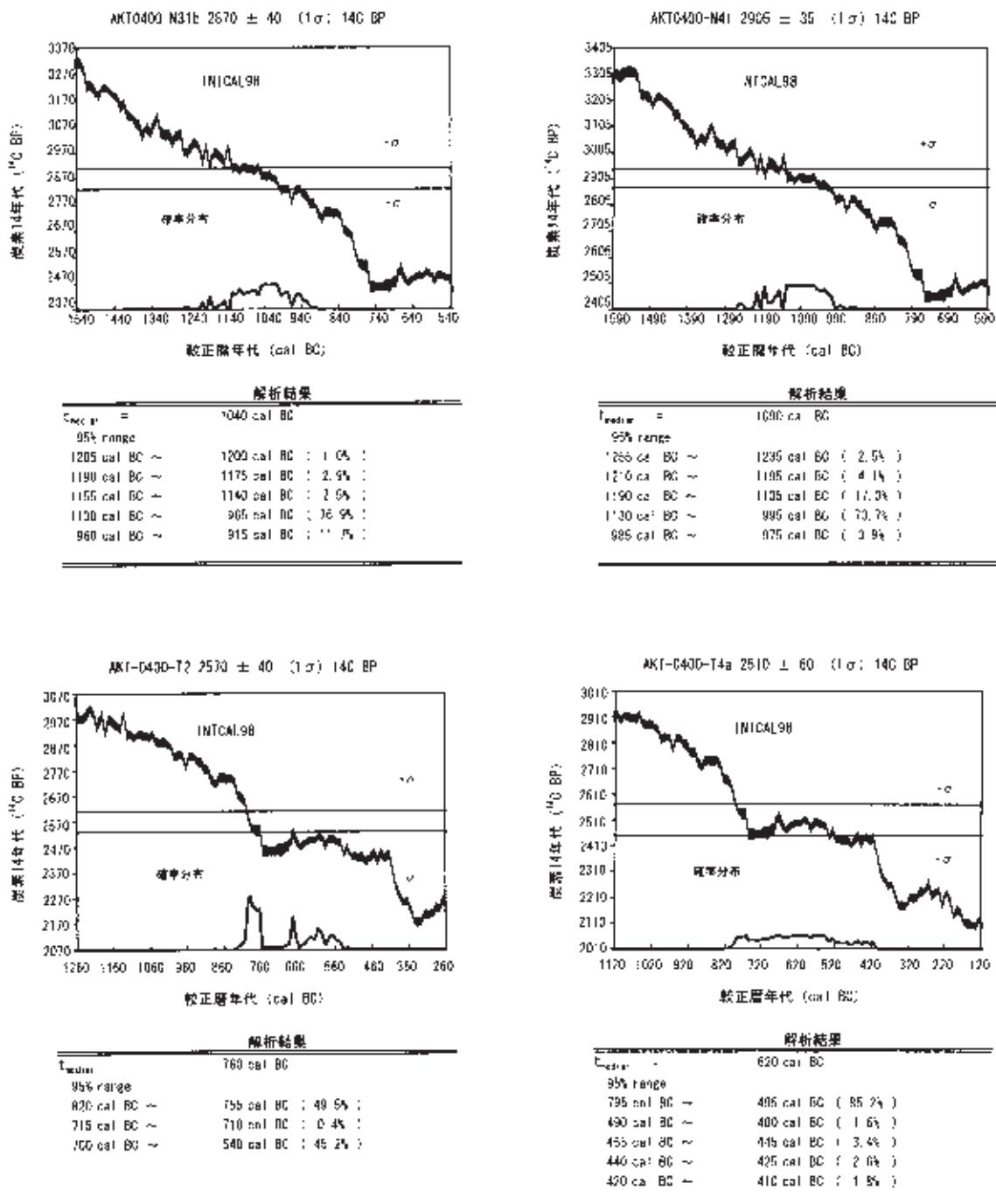
第160図 中屋敷Ⅱ遺跡(第2次調査)¹⁴C年代測定土器



第161図 曆年較正の確率分布(1)



第162図 曆年較正の確率分布(2)



第163図 暦年較正の確率分布(3)

第2節 放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

1 はじめに

中屋敷Ⅱ遺跡より検出された土器付着炭化物の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2 試料と方法

試料は、SK013-RP・1層から出土した土器の外側より採取した炭化物1点、SK024-RP13・1層から出土した土器の外側より採取した炭化物1点、SK152-RP7・2層から出土した土器の外側より採取した炭化物1点、SKP120-RP1・1層から出土した土器の外側より採取した炭化物1点、SX162-RP1・1層から出土した土器の外側より採取した炭化物1点の併せて5点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定した¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3 結果

第7表に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値（yrBP）の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

¹⁴C年代を曆年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、曆年代較正值は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の曆年代値であり、1σ曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ曆年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それより確かな年代値の範囲として示された。

《引用文献》

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.
- Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第7表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-2606 (AMS)	土器付着炭化物 (大洞式土器) SK013-RP 1層 No. 1	-26.1	$2,700 \pm 30$	cal BC 830	cal BC 895 - 875 (33.3%) cal BC 860 - 850 (11.5%) cal BC 845 - 810 (55.1%)
PLD-2607 (AMS)	土器付着炭化物 (大洞式土器) SK024-RP13 1層 No. 2	-26.5	$2,665 \pm 45$	cal BC 815	cal BC 890 - 880 (15.3%) cal BC 840 - 800 (84.7%)
PLD-2608 (AMS)	土器付着炭化物 (大洞式土器) SK152-RP7 2層 No. 3	-26.5	$2,490 \pm 30$	cal BC 760 cal BC 685 cal BC 665 cal BC 640 cal BC 590 cal BC 580 cal BC 545	cal BC 705 - 540 (89.9%)
PLD-2609 (AMS)	土器付着炭化物 (大洞式土器) SKP120-RP1 1層 No. 4	-26.3	$2,320 \pm 35$	cal BC 395	cal BC 405 - 375 (93.4%)
PLD-2610 (AMS)	土器付着炭化物 (大洞式土器) SX162-RP1 1層 No. 5	-27.0	$2,475 \pm 35$	cal BC 755 cal BC 690 cal BC 655 cal BC 650 cal BC 540	cal BC 760 - 680 (37.7%) cal BC 670 - 610 (27.6%) cal BC 595 - 520 (34.6%)

第3節 中屋敷Ⅱ遺跡の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

1 試料

花粉化石群集の検討は、以下に示す合計5試料（No.6～10）について行った。

No.6：SK400の4層下位より採取された。試料はオリーブ黒色～黒色の砂混じり有機質粘土でひげ根状の植物遺体や $\phi 10\text{mm}$ 程度の礫を含む。

No.7：SK428の4層下位より採取された。試料はオリーブ黒色～黒色の砂混じり有機質粘土で植物遺体を多く含む

No.8：SK430の3層より採取された。試料はオリーブ黒色砂混じり有機質粘土。

No.9：SK432の3層下位より採取された。試料は黒色砂混じり有機質粘土でひげ根状の植物遺体を含む

No.10：SK438の3層下位より採取された。試料はオリーブ黒色～黒色の砂混じり有機質粘土。

2 方法

花粉化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロビペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3 花粉化石群集の記載

同定された分類群数は、樹木花粉15、草本花粉15、形態分類で示したシダ植物胞子2である。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。なお、検討した試料のうち、No.8以外については、花粉化石分布図として示したが、これら4試料も花粉化石の産出個数・保存状態は十分に良好とは言えないので、花粉組成が幾分歪んでいる可能性が考えられる。

No.6（SK400/4層下位）：樹木花粉の占める割合は、約15%と非常に低率である。その中で、スギ属が約12%と圧倒的に高率であり、サワグルミ属ークルミ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、シナノキ属が1%以下で出現する。草本花粉では、イネ科が約47%と最も高率であり、次いで、ヨモギ属の約12%、クワ科の約6%、アブラナ科の約4%の順に高率である。他に、ソバ属、アカザ科ーヒユ科などが概ね1%以下で出現する。

No.7（SK428/4層下位）：樹木花粉の占める割合は、約16%と非常に低率である。その中で、スギ

属が約13%と圧倒的に高率であり、サワグルミ属ークルミ属、アカガシ亜属、トチノキ属が概ね1%以下で出現する。草本花粉では、ヨモギ属が約42%と最も高率であり、次いでイネ科が約20%である。他に、クワ科、アカザ科ーヒユ科、アブラナ科などが約2~4%で出現する。

No.8 (SK430/3層)：樹木花粉は、マツ属（不明）とスギ属が僅かに産出した。草本花粉は、イネ科、アカザ科ーヒユ科、ヨモギ属が僅かに産出した。

No.9 (SK432/3層下位)：樹木花粉の占める割合は、約23%と非常に低率である。その中で、スギ属が約18%と最も高率である。他に、ハンノキ属が約2%と若干目立ち、クマシデ属ーアサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属、ニレ属ーケヤキ属、トチノキ属、ブドウ属が1%以下で出現する。草本花粉では、イネ科が約20%と最も高率であり、次いで、ヨモギ属の約17%、クワ科の約9%、アカザ科ーヒユ科の約8%、アブラナ科の約3%の順に高率である。

No.10 (SK438/3層下位)：樹木花粉は、スギ属がやや目立つほかは、エノキ属ームクノキ属のみが僅かに産出した。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が比較的多産し、クワ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、セリ科が僅かに産出した。シダ植物胞子は比較的多産した。

4 考察

検討した結果、いずれの試料も花粉化石の産出個数や保存状態は、十分に良好ではなかった。しかし、多くの試料で針葉樹のスギ属が圧倒的に多産しており、花粉組成が幾分歪んでいるとしても遺跡周辺には、スギ林が卓越していたと考えて良いであろう。他に、落葉のサワグルミ属ークルミ属、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、エノキ属ームクノキ属、トチノキ属や常緑のアカガシ亜属などが僅かながらも混じっていたであろう。

草本類について見ると、明らかな水湿地性草本は出現せず、ヨモギ属、クワ科、アカザ科ーヒユ科、シダ植物など乾き気味の場所に生育する分類群が目立つ。このことから、各遺構付近には、これらを主体とした草地が形成されていたと予想される。多産するイネ科については、属まで絞り込むことは困難であるが、ススキ、シバなどの草地優占種を含む可能性が多分に考えられる。なお、No.6 (SK400/4層下位) では、ソバ属が出現しており、付近でソバ栽培が行われていた可能性が考えられる。上記分類群の一部は、このような畠地に雑草として生育していたとも考えられよう。

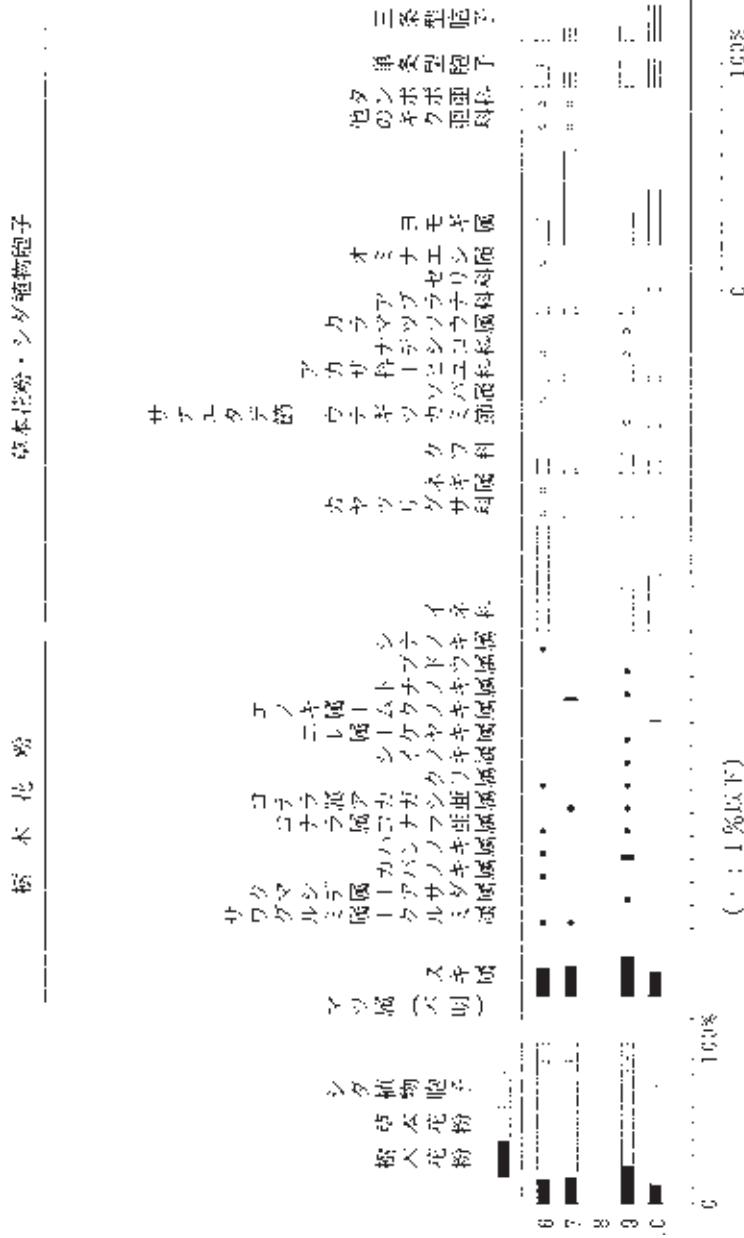
なお、検討した試料は、いずれも粘性の高い有機質粘土であり、肉眼観察では水成堆積物と予想された。花粉化石は、水成堆積物であれば良好に保存されるが、各試料は花粉化石の産出個数があまり良好ではなく、保存状態も非常に悪いものが目立った。また、プレパラート状況では、炭化物片が多く見られた。このことから、各遺構の堆積物は、あまり安定した滞水環境で堆積したものではなく、概ね黒色土であることからも土壤化作用を受けている可能性が考えられる。

第8表 花粉化石産出一覧表

和名	学名	6	7	8	9	10
樹木						
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-		1	-	
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	42	23	2	52	8
サリグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya</i> - <i>Juglans</i>	1	1	-	-	
クマンジ属-アサガ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	-	-	-	1	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	2			6	
コナラ属コナラ伸属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	1	-	-	2	-
コナラ属カガシ伸属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	1	-	2	-
クリ属	<i>Castanea</i>	3			1	
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	-	1	-
ニン属-クセキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	-	-		1	-
エノキ属-ハクノキ属	<i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	-	-	-	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>		2	-	1	
ブトウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	1	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	1	-	-	-	-
草本						
イネ科	<i>Gramineae</i>	130	34	6	56	19
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	2	2	-	3	-
ネギ属	<i>Allium</i>	2				
クワ科	<i>Moraceae</i>	22	5	-	25	4
セアエタデ属-ウカギツカミ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	-	1	1
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	-	-	-	-
アカザ科-ヒヨコ科	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	5	6	3	23	2
ナズシ科	<i>Caryophyllaceae</i>	2	-	-	2	-
カクマツヅクサ属	<i>Thlaspietrum</i>	-	-	-	2	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	12	5	-	16	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>					1
オオサニン属	<i>Patrinia</i>	1	-	-	-	
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	40	72	1	50	19
他のヨクボク科	other <i>Tubuliflorae</i>	1	1	-	-	-
タンポポ科	<i>Liguliflorae</i>	1	1	-	-	-
シダ植物						
单壁型胞子	Monolete spore	32	11	-	34	9
三壁型胞子	Trilete spore	3	9	1	20	12
樹木花粉						
草木花粉	ArboREAL pollen	51	27	3	68	9
シダ植物胞子	NunarboREAL pollen	249	124	10	172	46
花粉・胞子総数	Spores	41	20	1	54	21
	Total Pollen & Spores	341	171	14	294	76
不明花粉						
	Unknown pollen	4	3	0	6	3

T. C. は Taxaceae-Cephaelanthaceae-Cupressaceae を表す

(6: SK400/4層下位、7: SK428/4層下位、8: SK430/3層、9: SK432/3層下位、10: SK438/3層下位)



(柱凡て縦比例、胞子數を其数として百分率で示した)

(6: SK400/4層下位、7: SK428/4層下位、8: SK430/3層、9: SK432/3層下位、10: SK438/3層下位)

第164図 花粉化石分布

第4節 中屋敷II遺跡出土木材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1 はじめに

ここでは、縄文時代晩期と思われる土抗SK070・152、柱穴様ピットSKP153・269・270の5遺構から出土した木材の樹種同定結果を報告する。

2 方法

材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用いて各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、秋田県埋蔵文化材センターに保管されている。

3 結果

同定結果の一覧を、第9表に示した。

5遺構から出土した木材は、すべてクリであった。土抗SK152と柱穴様ピットSKP153からは各2点の材が出土しており接合しないので、それぞれにつき樹種を調査したが、いずれもクリであった。また、SKP269とSKP270は隣接する柱穴であるが、それぞれクリ材が使われていた。縄文時代の遺構からは、クリ材が多く出土し、特に柱材にはほとんどといっていいほどにクリが使われている事例が知られている。当遺跡においても、クリが使用されていた事が確認された。

以下に同定根拠を記載し、図版に光学顕微鏡写真を掲載した。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版45

年輪の始めに中型～大型の管孔が1～2層配列し、その後は非常に小型の管孔が火炎状や年輪幅が狭い試料では散在状に配列している環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性のみで、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。特に縄文時代では柱材にクリが使われていることが多い。

第9表 中屋敷II遺跡（第2次）水路部分調査区（コの字）出土材の樹種同定結果

樹種試料	遺構種類	遺構番号	層位	試料の種類	樹種	備考
No.11	SK	70	1層(单層)	土抗内出土材	クリ	芯含む分割材 側面と底面に加工痕
No.12-1	SK	152	1層(单層)	土抗内出土材	クリ	分割材 一部炭化
No.12-2					クリ	分割材
No.13-1	SKP	153	1層(单層)	柱穴内出土材	クリ	板目分割材
No.13-2					クリ	板目分割材
No.14	SKP	269	3層(底面)	柱穴内出土材	クリ	芯含む分割材 側面と底面に加工痕
No.15	SKP	270	3層(底面)	柱穴内出土材	クリ	芯持ち丸木

第5節 中屋敷Ⅱ遺跡出土の大型植物化石

新山雅広（パレオ・ラボ）

1 試料と方法

大型植物化石の検討は、No.16（SK428/4層（底面））、No.17（SK430・438/覆土中（重複））、No.18（SK432/覆土中）、No.19（SK416/4層（底面））、No.20（SK416/覆土中）の合計5試料について行った。各試料は、既に抽出済みであり、瓶に液浸保存されていた。これらを肉眼および実体顕微鏡下で観察し、同定・計数を行った。

2 出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の一覧を第10表に示した。以下に、各試料の大型植物化石について記載する。

No.16（SK428/4層（底面））：スモモ核の完形が2個、破片が1個、不明果実の破片が3個。

No.17（SK430・438/覆土中（重複））：スモモ核の完形が2個、半分（1/2）程度の破片が1個。

No.18（SK432/覆土中）：スモモ核の半分程度の破片が1個、モモ核の完形が1個。

No.19（SK416/4層（底面））：スモモ核の完形が8個、破片が1個、モモ核の完形が1個。

No.20（SK416/覆土中）：モモ核の完形が1個、半分程度の破片が2個。

第10表 出土した大型植物化石

数字は個数、（ ）内は半分ないし破片の数を示す。

分類群	部位	No.16	No.17	No.18	No.19	No.20
スモモ	核	2(1)	2(1)	(1)	8(1)	
モモ	核			1	1	1(2)
不明	果実？	(3)				

3 考察

検討した結果、同定されたのは栽培植物のスモモ、モモであり、いずれも果実が食用として有用である。付近にこれらの栽培地が存在していたか、あるいは生活の場で廃棄されたものが各遺構に流入したか直接投棄されたと予想される。

4 形態記載

スモモ *Prunus salicina* Lindl. 核

核は橢円形。表面はややざらつく程度でウメやモモのように明瞭な穴、溝といった窪みはない。

モモ *Prunus persica* Batsch 核

核は卵形で先端は尖り気味。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則な流れのような溝と穴がある。長さ22～27mm程度でNo.20にやや大きな核が混じる。

第4章まとめ

中屋敷II遺跡の第2次発掘調査では、3つの主要な発掘調査区（コの字状調査区・北東調査区・神社北側調査区）および水路部分から、第4章で述べたような遺構が検出され、秋田県埋蔵文化財センターが実施した第1次調査や、千畠町教育委員会が実施した発掘調査によって明らかになった「集落」としての性格を持つ遺跡であることが改めて判明した。しかし、第2次発掘調査範囲の時期・年代は、3つの発掘調査区によって大きく異なっており、集落は地点を変えつつ長期にわたって営まれていたことを示している。ここでは、その3つの発掘調査区の概要と検出・出土した遺構と遺物から、第2次調査の成果を簡潔に述べる。

コの字状調査区およびS T 37捨て場について

今回の第2次調査で最も多く遺構が検出されたコの字状調査区とS T 37捨て場（第94図）からは、第113～132図に示した遺物が出土した。出土した土器から遺構の時期は、概ね縄文時代後期後葉から晩期全般、特に晩期後葉から末葉が主体となり、僅かながら弥生時代初頭にまで及ぶ。検出された各土坑は「土坑墓」と判断できる要素が乏しく、S R 20土器埋設遺構のみが墓と認められる遺構である。柱穴様ピット5基（SKP 70・152・153・269・270）に残っていた柱材は、自然科学的分析（樹種同定）の結果、すべてクリ材であることが判明した。秋田県においても縄文時代の遺跡では柱材にクリが用いられる事例が多い。これら柱穴様ピットおよび柱材の規模から掘建柱建物が存在した可能性も考えられる。しかし、調査区の幅が4mと狭く明確な掘建柱建物跡を検出するには至らなかった。

掘立柱建物跡について

北東部分調査区および水路部分で検出された掘立柱建物跡は計3棟である。SB 308・327掘立柱建物跡は北東調査区の北端に重複して位置し、SB 327がSB 308に切られる。SB 308はSK I 265竪穴状遺構にも切られるため、新旧関係はSB 327→SB 308→SK I 265の順となる。このほか、水路部分から検出されたSB 209掘立柱建物跡は、調査区の狭さから全容を明らかにすることはできなかつたが、今次調査で検出した掘立柱建物跡の中で最も規模が大きい。掘立柱建物跡の時期はいずれも中世に属するものと考えられる。

神社北側調査区について

神社北側調査区は、古代・中世の遺構が検出され、出土遺物も古代・中世・近世期のものが多い。検出したSI 414・441竪穴住居跡およびSK I 442竪穴状遺構は、この調査区が古代から中世の時期に人々の居住地だったことを示しており、近接して存在するSE 423井戸跡や各土坑群もそのことを裏付けている。また、SD 490溝跡よりも西側になると検出遺構が少くなり、この溝跡が何らかの形で集落域を区切る性格を持っていたことが伺える。検出した土坑ではSK 400のように大型の木製品を出土したものもある。出土遺物では、古代（平安時代）の須恵器や中世陶器、近世陶磁器など、ほぼ連続する時代の遺物が各遺構および遺構外から出土しており、調査区南側の諏訪神社と板碑群の存在を考

慮すると古代から継続して集落が営まれたものと考えられる。

以上、簡略に第2次調査の概要をまとめたが、第1次調査および千畠町教育委員会調査の結果とあわせ、中屋敷Ⅱ遺跡の性格を総合的にみると、縄文時代前期から近世まで拠点を移しながら継続して営まれた集落遺跡であると言えよう。



1 SK12断面（北西→）



2 SK12完掘（北西→）



3 SK13断面（南→）



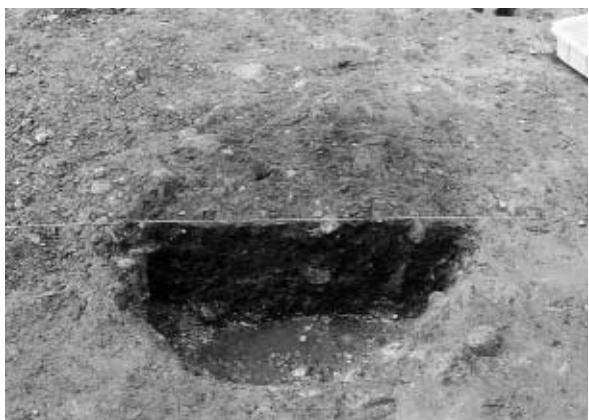
4 SK13完掘（南西→）



5 SK16確認状況（南→）



6 SK16完掘（東→）



7 SK19断面（東→）



8 SK19完掘（北西→）



1 SK 23遺物出土状況（西→）



2 SK 23遺物出土状況（南→）



3 SK 23断面（南→）



4 SK 23完掘（西→）



5 SK 23遺物出土状況（南→）



1 SK24遺物出土状況（北西→）



2 SK24・25・31、SKP26完掘（北西→）



3 SK29断面（北西→）



4 SK29、SKP30完掘（北西→）



5 SK35断面（西→）



6 SK35完掘（西→）



7 SK36断面（南→）



8 SK36完掘（西→）



1 SK 38断面（南→）



2 SK 38完掘（南→）



3 SK 39確認状況（北→）



4 SK 39断面（西→）



5 SK 41・162断面（南西→）



6 SK 47断面（北→）



7 SK 65断面（南西→）



8 SK 65完掘（南→）



1 SK69、SKP584断面（南→）



2 SK69、SKP71・180・584完掘（東→）



3 SK100断面（東→）



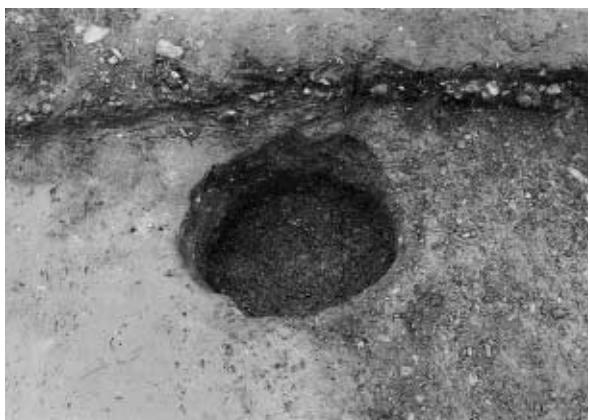
4 SK100完掘（東→）



5 SK110断面（南→）



6 SK110完掘（西→）



7 SK121完掘（東→）



8 SK140・141遺物出土状況（北東→）



1 SK 152遺物出土状況（西→）



2 SK 152断面（南西→）



3 SK 152完掘（北西→）



4 SK 152遺物出土状況（南西→）



5 SK 152遺物出土状況（南西→）



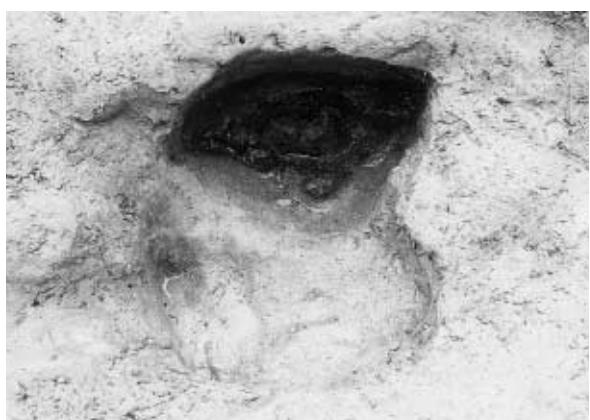
1 SK 140・141断面（北→）



2 SK 140・141完掘（北→）



3 SK 224断面（西→）



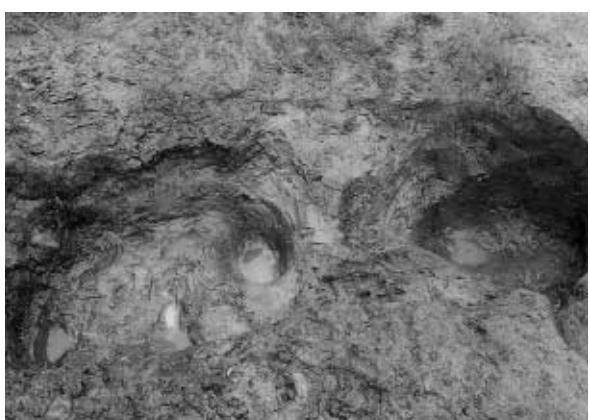
4 SK 224完掘（東→）



5 SK 243遺物出土状況（西→）



6 SK 243、SK P 258・259・260完掘（西→）



7 SK 393・409完掘（東→）



8 SD 18確認状況（東→）



1 SR 20断面（南→）



2 SR 20断面（南→）



3 SR 20断面（南→）



4 SR 20断面（南→）



5 SR 20断面（南西→）



1 SKP 22断面（南西→）



2 SKP 22完掘（北西→）



3 SKP 42・583完掘（北西→）



4 SKP 56・57断面（西→）



5 SKP 70遺物出土状況（南→）



6 SKP 115・199断面（西→）



7 SKP 220・221断面（北→）



8 SKP 220・221・250遺物出土状況（北東→）



1 SKP 269・270断面（北西→）



2 SKP 271断面（西→）



3 SKP 392・417・418断面（北西→）



4 SKP 392・417・418完掘（西→）



5 ST37石棒出土状況（南→）



1 S T 37土器出土状況（北西→）



2 S T 37土器出土状況（南→）



1 S T37土偶出土状況（北→）



2 S T37土偶出土状況（北→）



1 S T37土器出土状況（東→）



2 S T37土器出土状況（東→）



3 S T37土器出土状況（南西→）



4 S T37土器出土状況（西→）



5 S T37土器出土状況（西→）



6 S T37土器出土状況（西→）



7 S T37土器出土状況（北東→）



8 S T37磨製石斧出土状況（南→）



1 SK01・02断面（南→）



2 SK01・02完掘（南→）



3 SKP07断面（北東→）



4 SKP07完掘（北東→）



5 SKP11断面（南西→）



6 SKP11完掘（南西→）



7 SK187遺物出土状況（北→）



8 SK187断面（北→）



1 SK 205確認状況と
周辺のピット
(南→)



2 SX 245断面
(北→)



3 SX 245完掘
(北→)



1 SK I 414~416遺物出土状況（東→）



2 SK I 414~416完掘（東→）



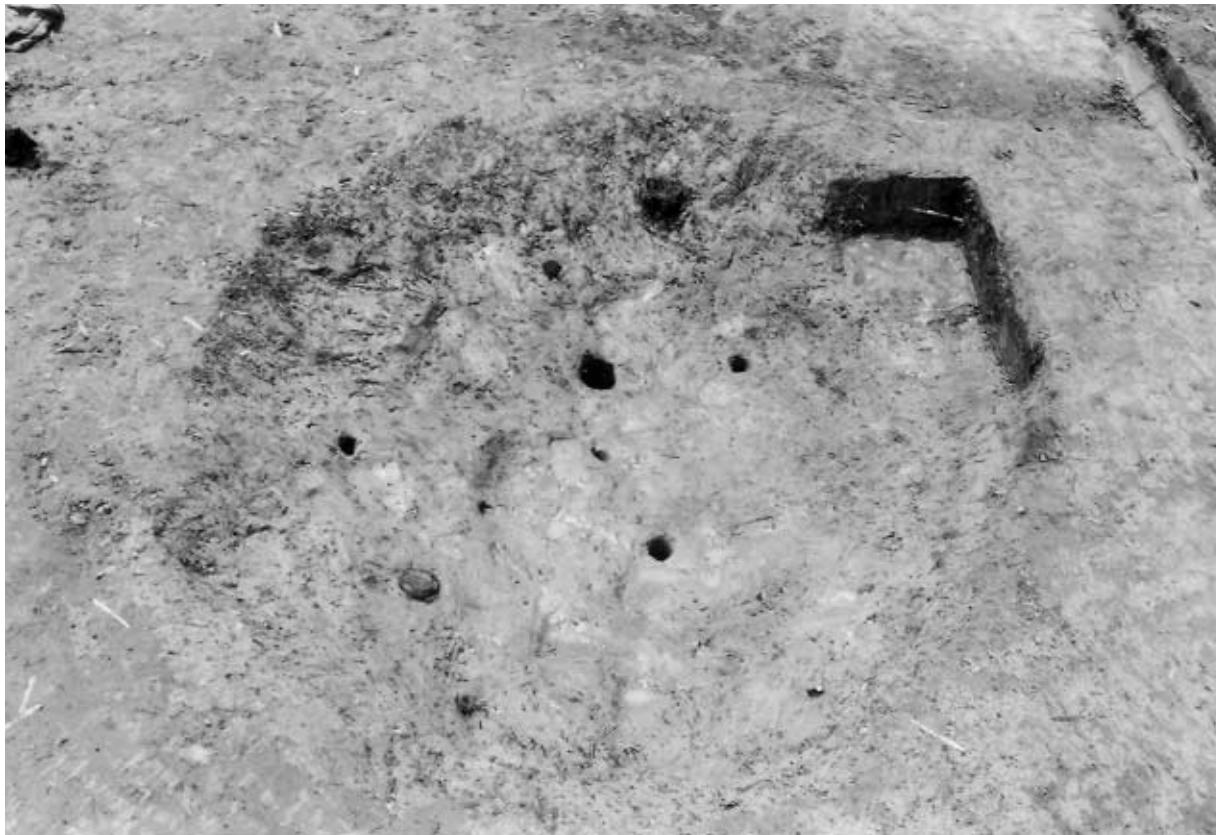
3 SK I 414~416確認状況（東→）



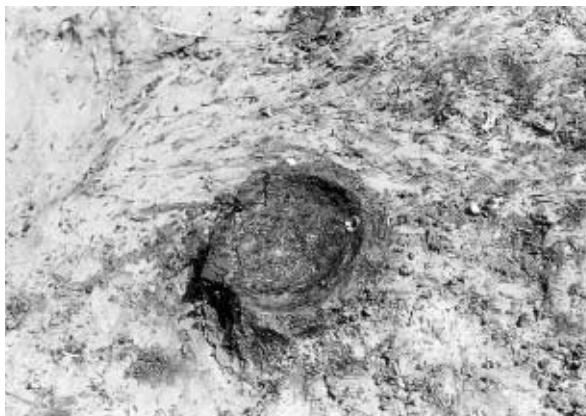
4 SK I 416断面（南→）



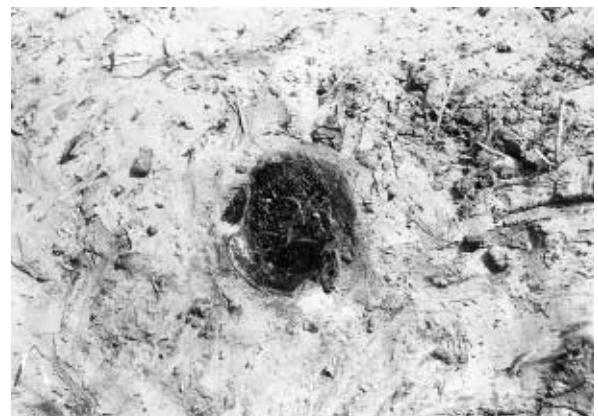
5 SK I 414~416断面（東→）



1 SK I 441完掘（北→）



2 SK I 441遺物出土状況（北→）



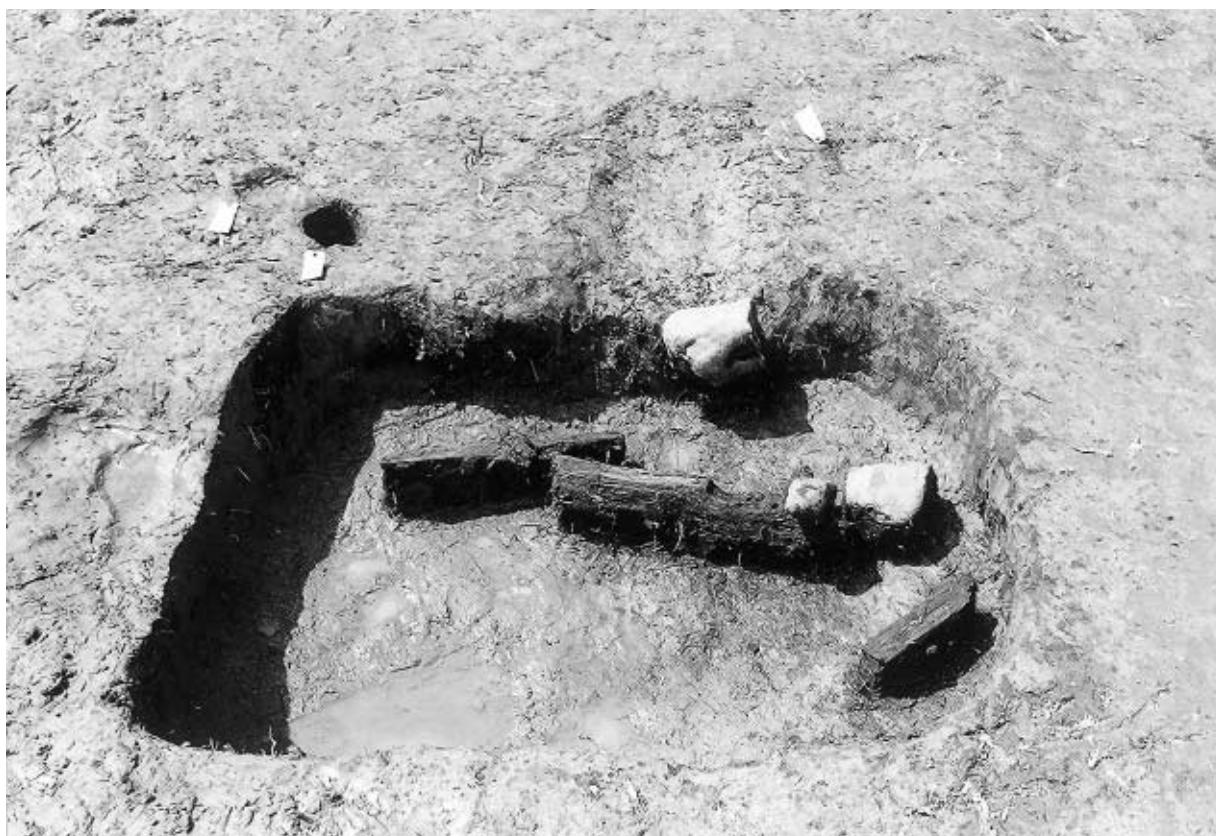
3 SK I 441遺物出土状況（北→）



4 SK I 441遺物出土状況（北→）



5 S I 441断面（東→）



1 SK I 442完掘（北→）



2 SK I 442断面（東→）



3 SK I 442断面（東→）



4 SK I 442断面（北→）



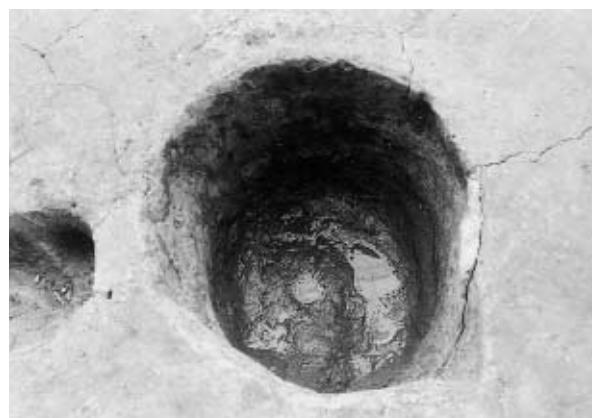
5 SK I 442断面（北→）



1 SK 370断面（西→）



2 SK 395遺物出土状況（西→）



3 SK 395完掘（北→）



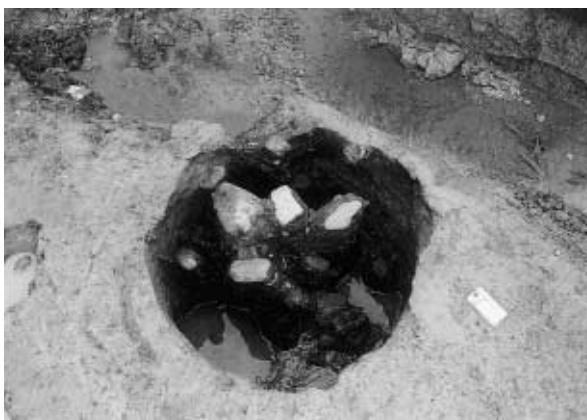
4 SK 396断面（北→）



5 SK 396完掘（北→）



1 SK 372・373確認状況 (北→)



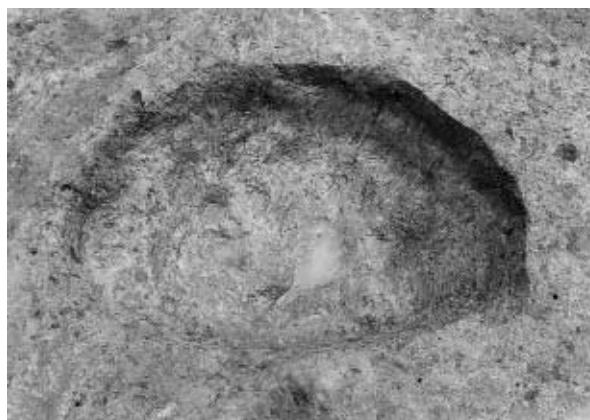
2 SK 372遺物出土状況 (西→)



3 SK 372完掘 (西→)



4 SK 373断面 (北→)



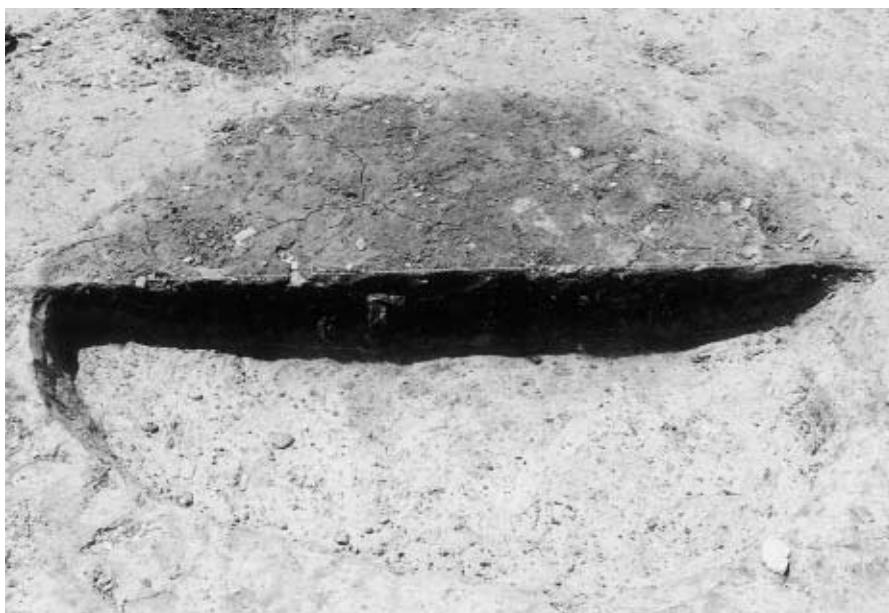
5 SK 373完掘 (北→)



1 SK 398断面
(南→)



2 SK 398完掘
(西→)



3 SK 399断面
(北→)



1 SK 400遺物出土状況（北東→）



2 SK 400遺物出土状況（東→）



1 SK 402・403遺物出土状況（北東→）



2 SK 402断面（北→）



3 SK 403断面（北→）



4 SK 400断面（東→）



5 SK 400完掘（東→）

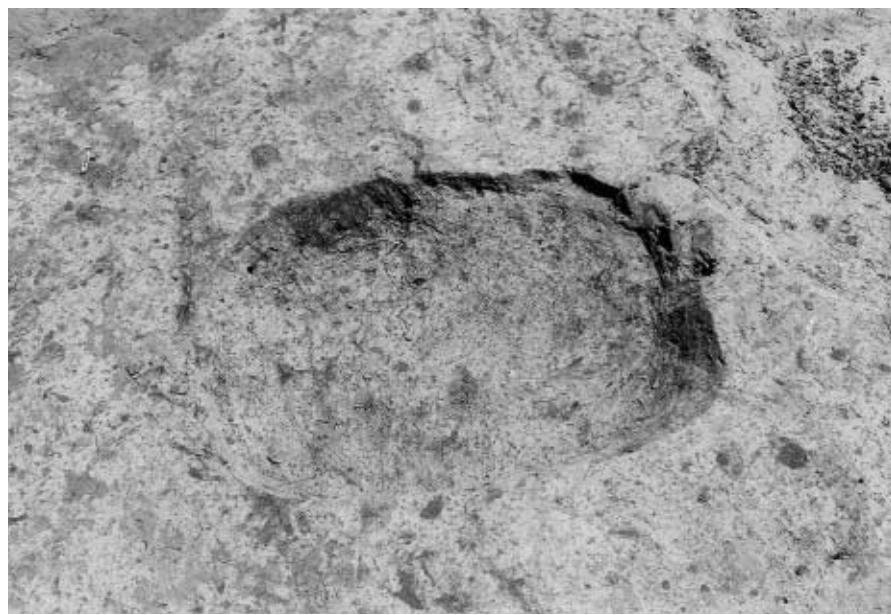
1 SK420・421断面
(南東→)

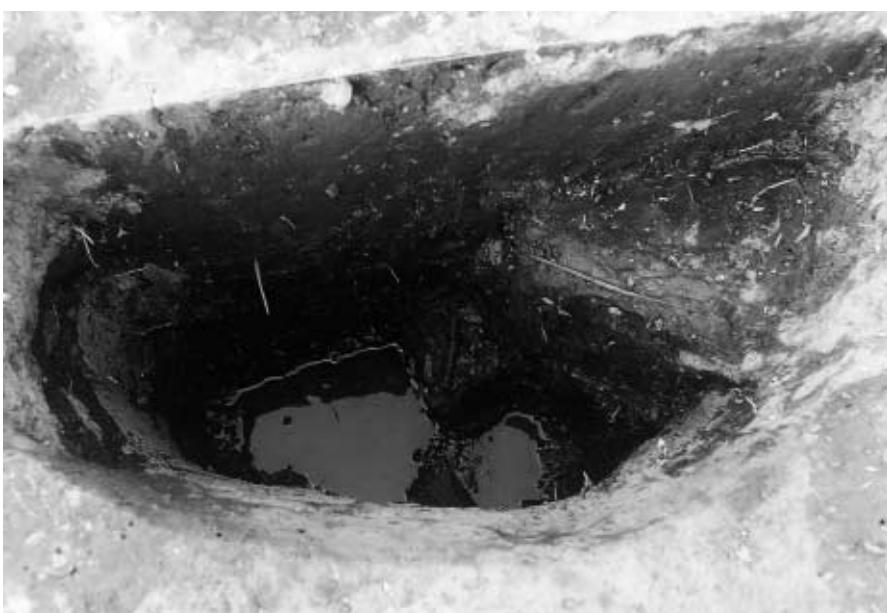


2 SK420・421完掘
(北→)



3 SK422完掘
(北東→)

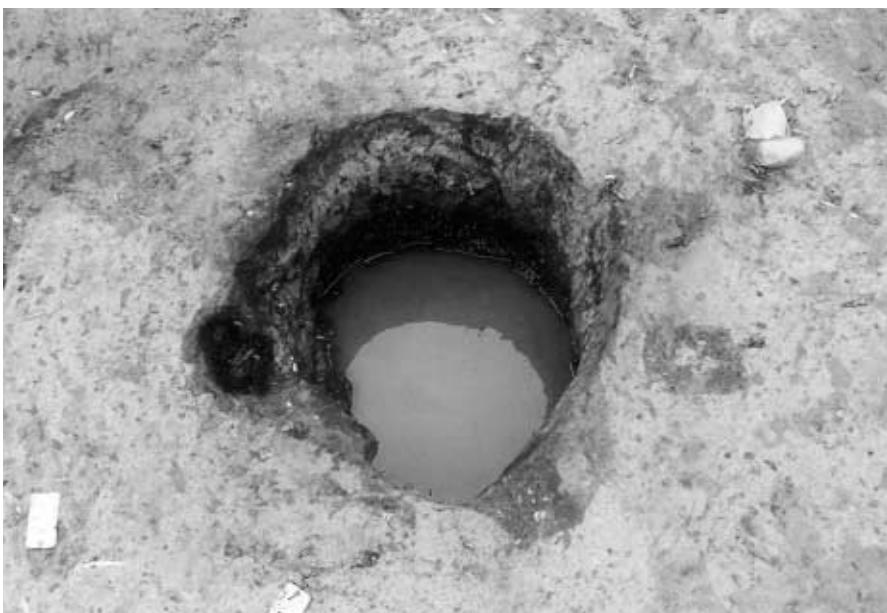




1 SK 428遺物出土状況
(南→)

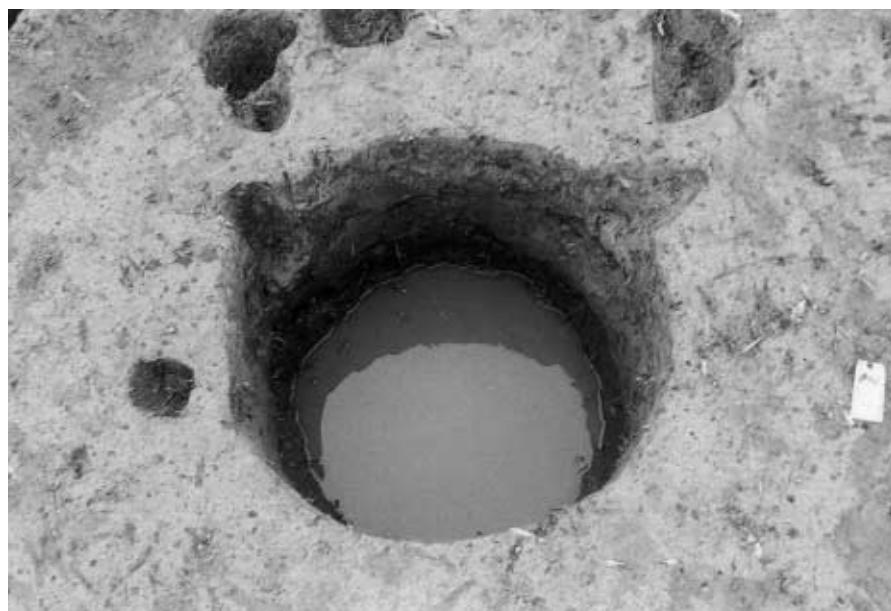


2 SK 428断面
(南→)



3 SK 428完掘
(西→)

1 SK429完掘
(西→)



2 SK430・438断面
(北→)

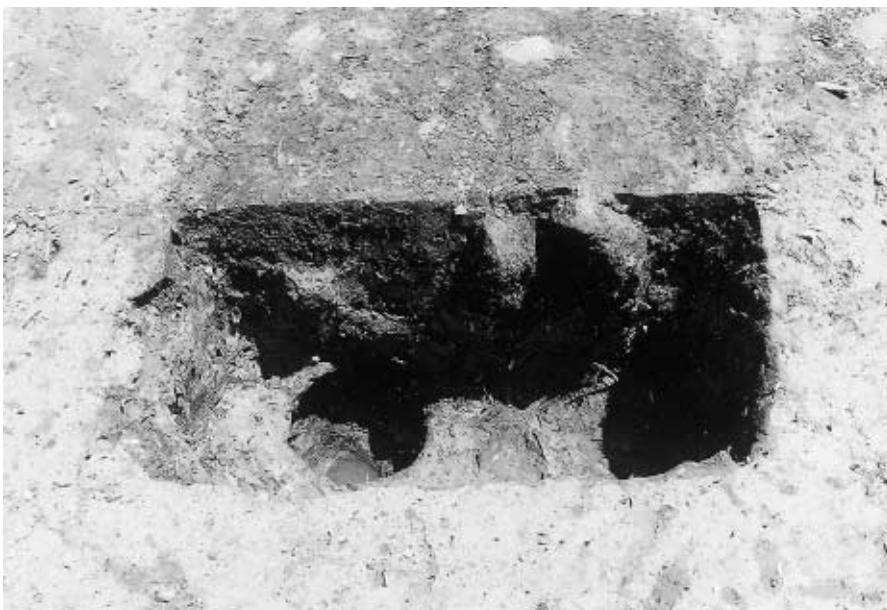


3 SK430完掘
(西→)

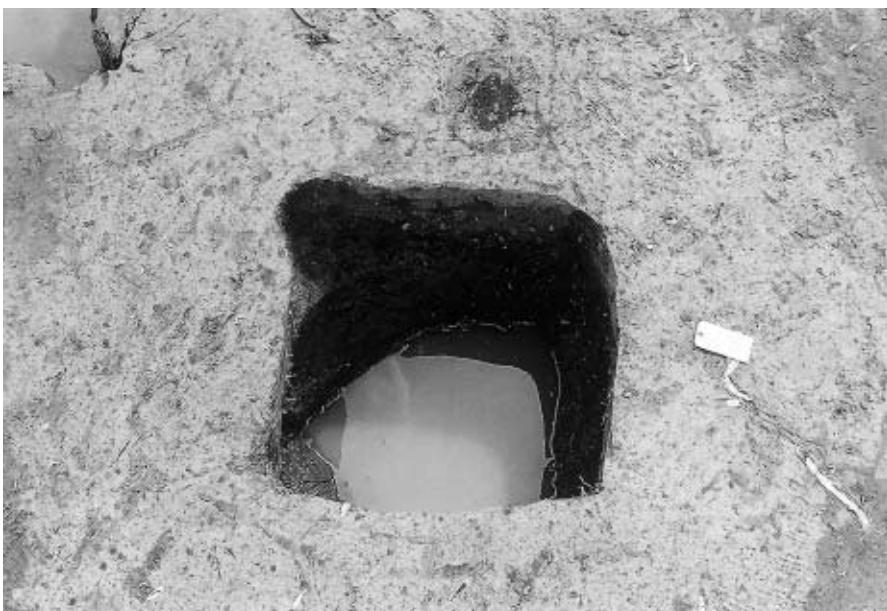




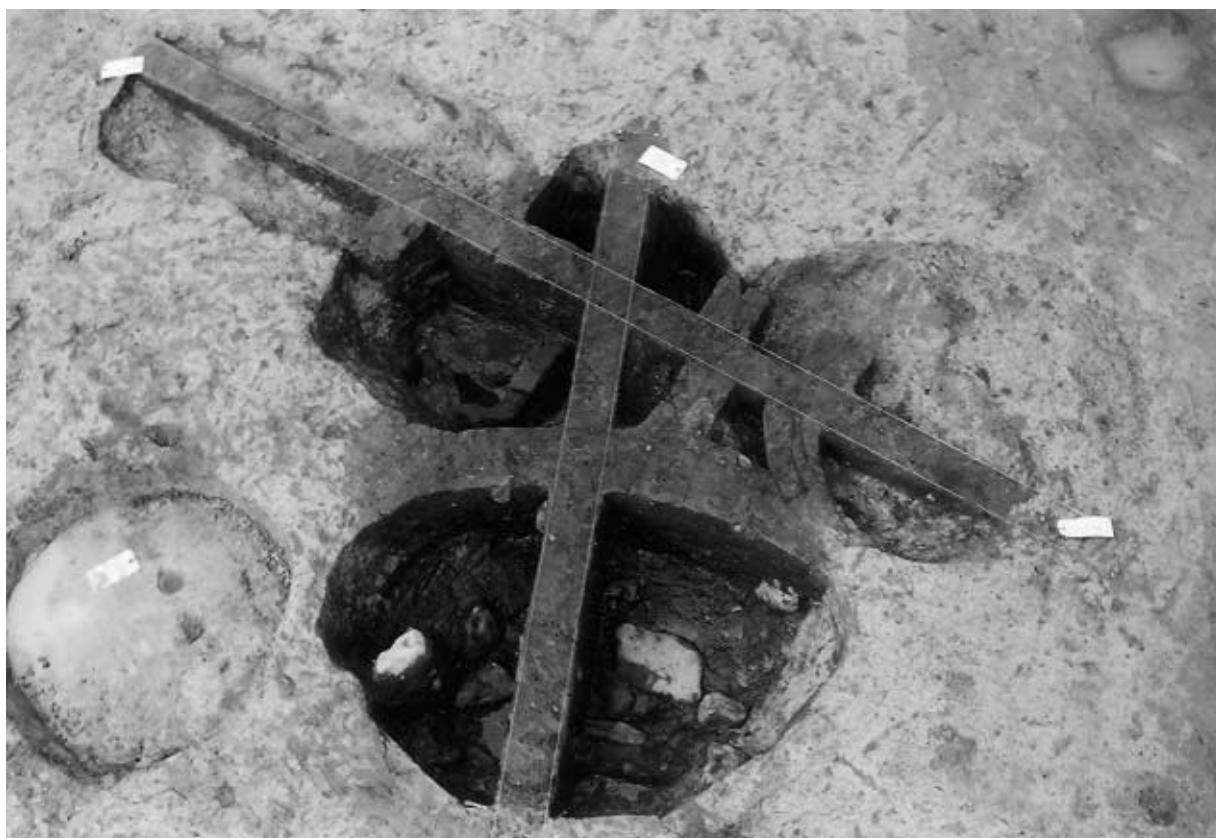
1 SK 431遺物出土状況
(南西→)



2 SK 431断面
(西→)



3 SK 431完掘
(西→)



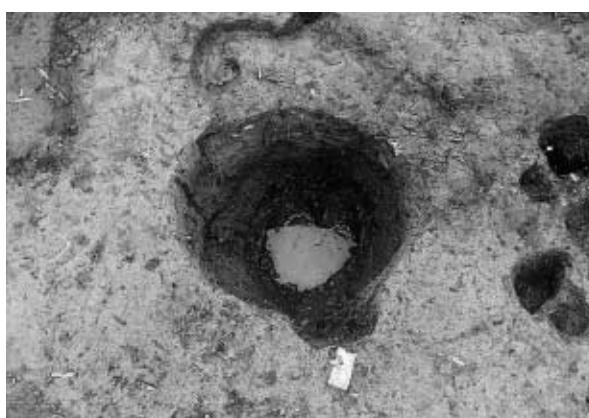
1 SK 433・434・435・436遺物出土状況（南東→）



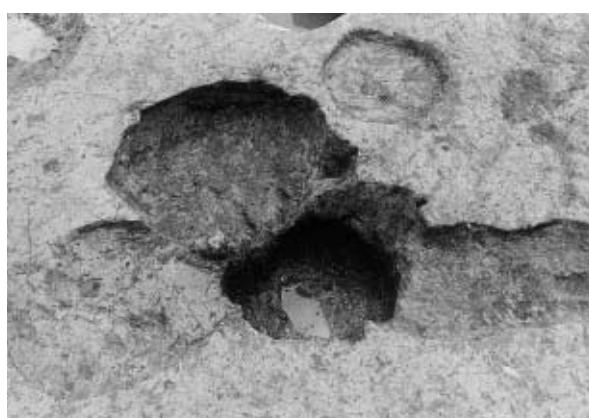
2 SK 432遺物出土状況（南→）



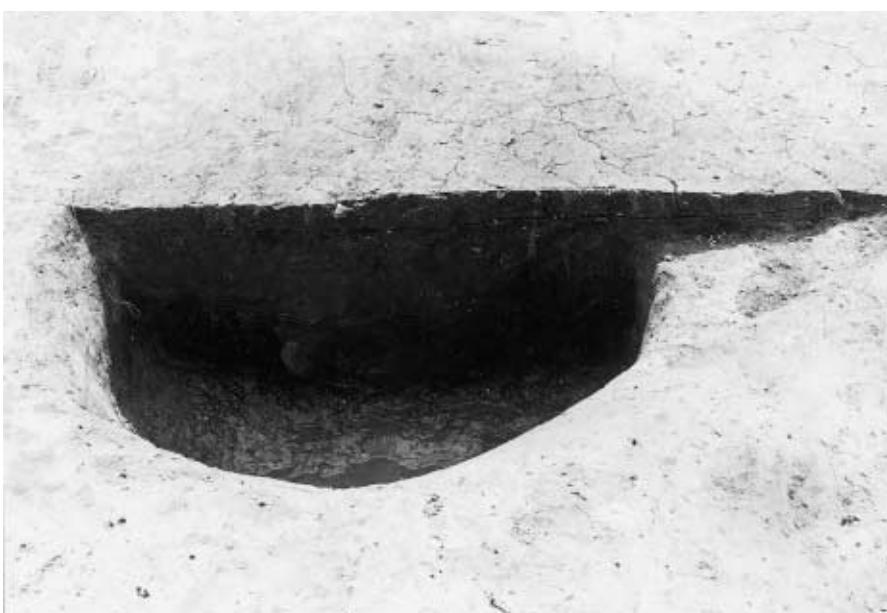
3 SK 432断面（北→）



4 SK 432完掘（北東→）



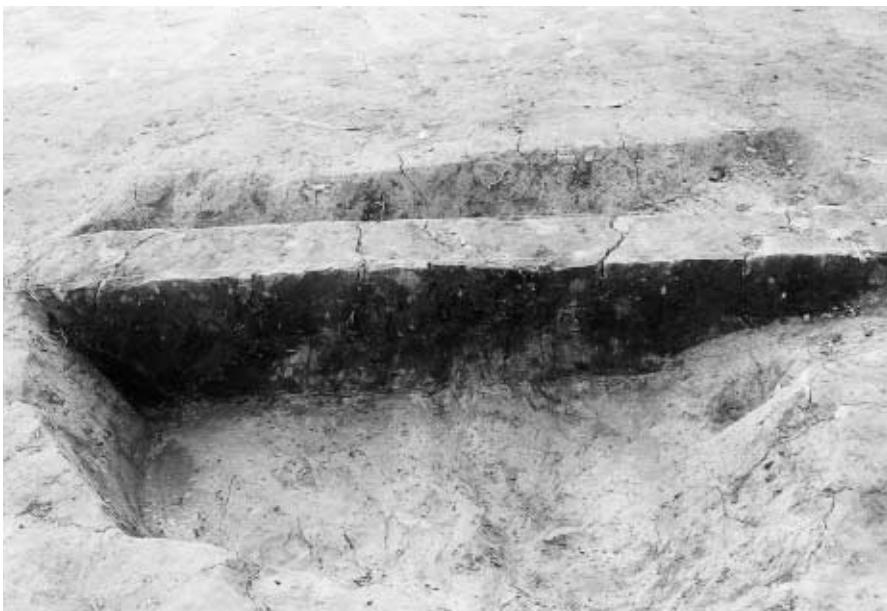
5 SK 433・434・435・436完掘（北→）



1 SK 437断面
(北東→)



2 SK 437、
SK P 455・456・457・
458完掘
(南西→)



3 SK 439断面
(東→)

1 SE 423断面
(北→)



2 SE 423完掘
(南→)



3 SN 440
遺物出土状況
(北→)

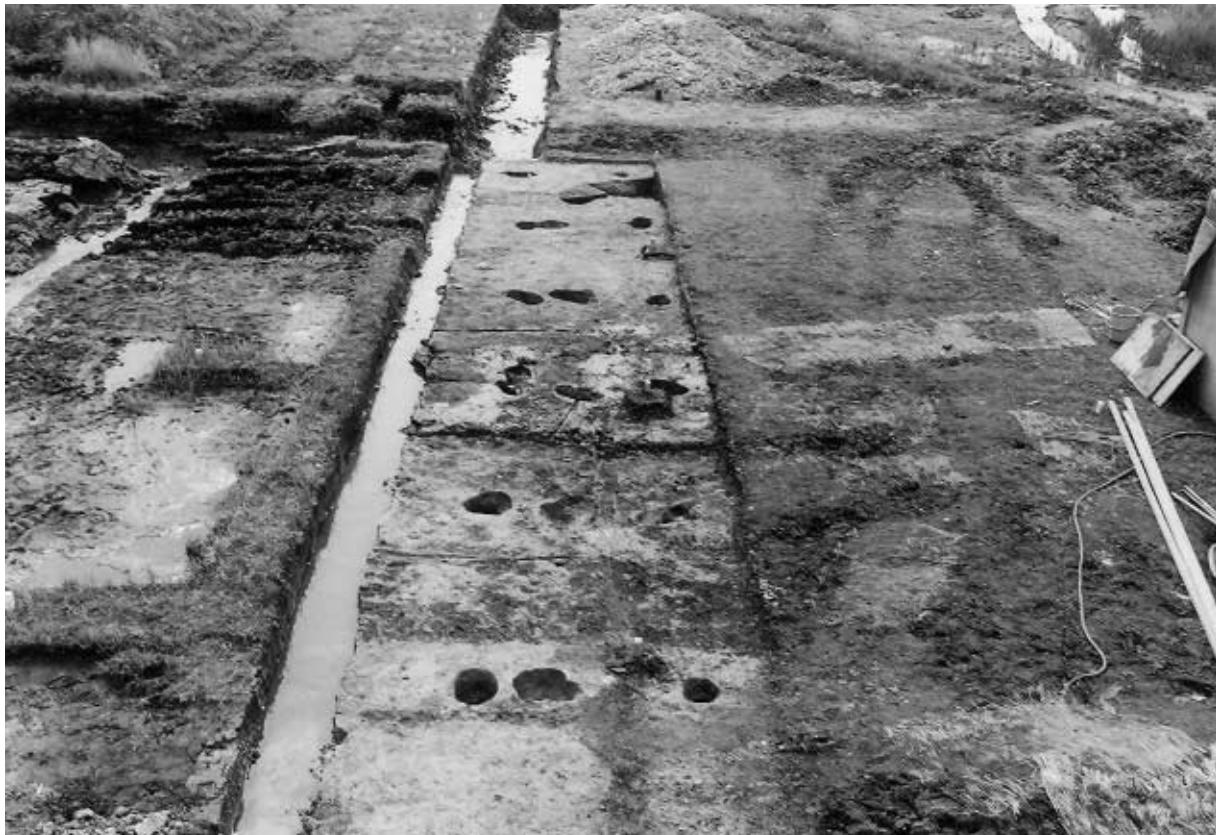




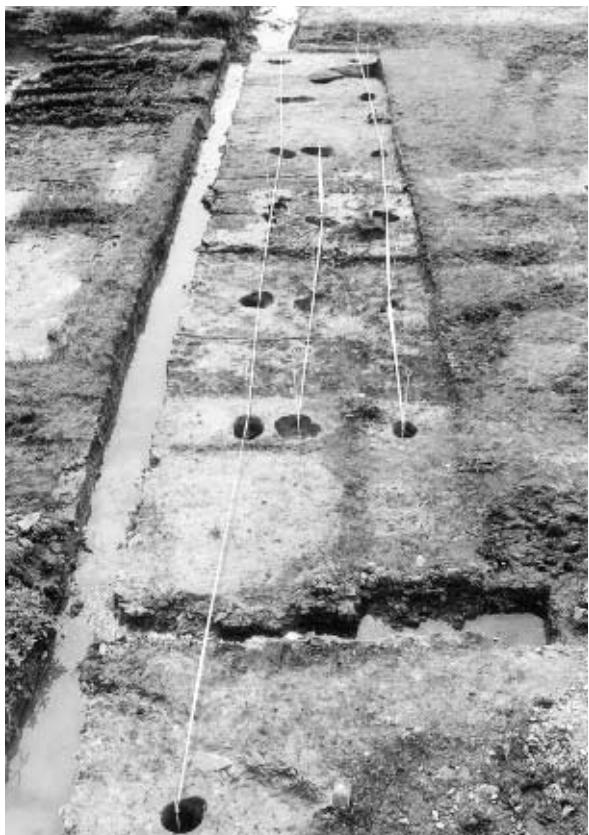
北東調査区全景（南→）

S B 308・327完掘（南西→）





1 SB 209完掘（東→）



2 SB 209完掘（東→）



3 SB 209完掘（東→）



1 SK 303断面（北→）



2 SK 303遺物出土状況（北→）



3 SK 304断面（北→）



4 SK 304完掘（東→）



5 SK 363断面（北→）



6 SK 363遺物出土状況（北→）



1 S T 37出土浅鉢 (1)



2 S T 37出土浅鉢 (2)



1 S T37出土 注口土器



2 S T37出土 台付鉢



1 S T 37出土 壺



2 SK 24出土 台付鉢



1 SK224出土 深鉢



2 ST37出土 深鉢



3 ST37出土 土偶(1)



4 ST37出土 土偶(2)



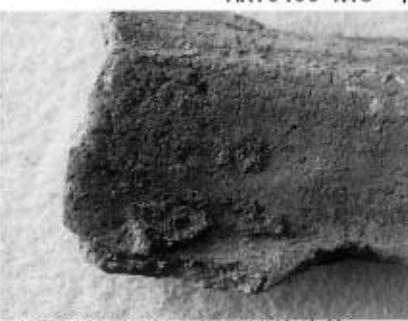
AKT0400-N13 測定土器



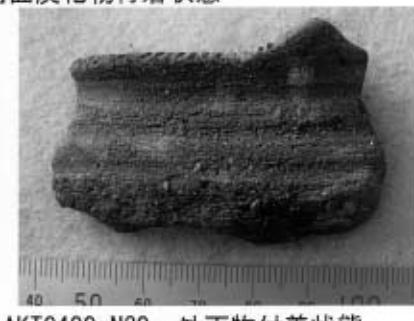
AKT0400-N13 内面炭化物付着状態



AKT0400-N20 測定土器



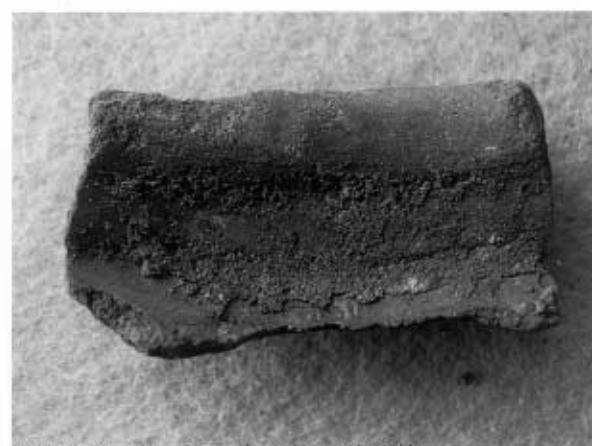
AKT0400-N20 内面付着状態



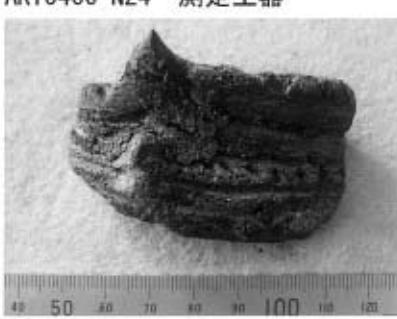
AKT0400-N20 外面物付着状態



AKT0400-N24 測定土器



AKT0400-N24 内面炭化物付着状態



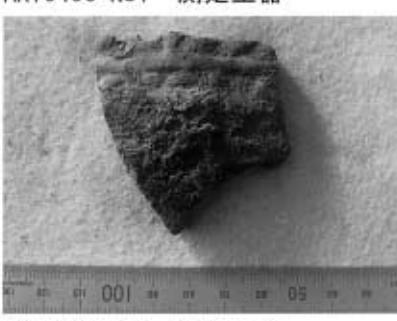
AKT0400-N31 測定土器



AKT0400-N31 内面付着状態



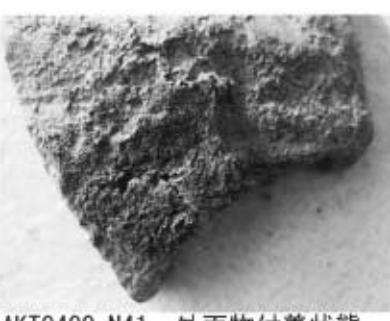
AKT0400-N31 外面物付着状態



AKT0400-N41 測定土器



AKT0400-N41 内面付着状態



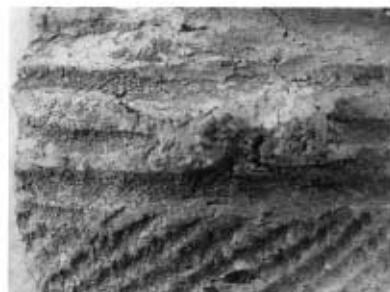
AKT0400-N41 外面物付着状態



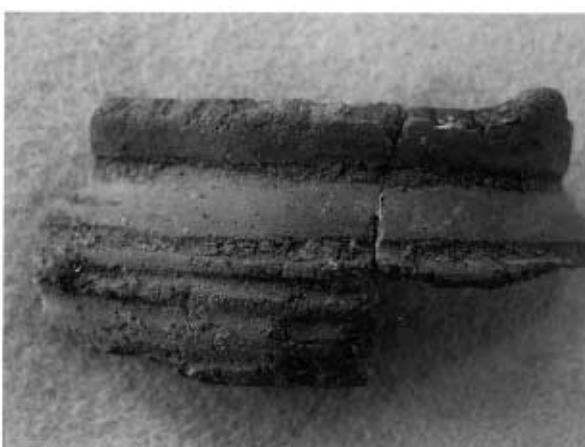
AKT0400-T2 測定土器



AKT0400-T2 内面付着状態



AKT0400T2 外面物付着状態



AKT0400-T4 外面物付着状態



AKT0400-T4 内面付着状態



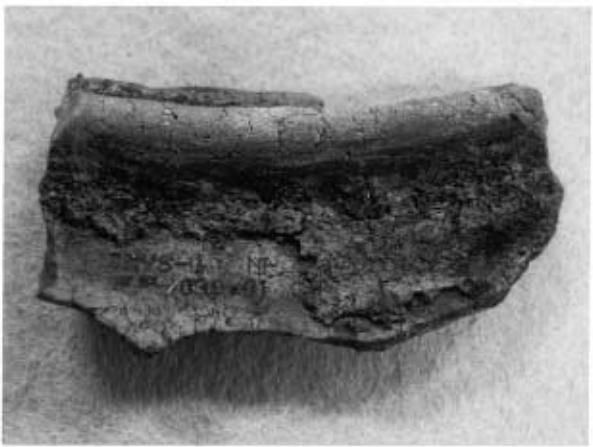
AKT0400-T10 外面物付着状態



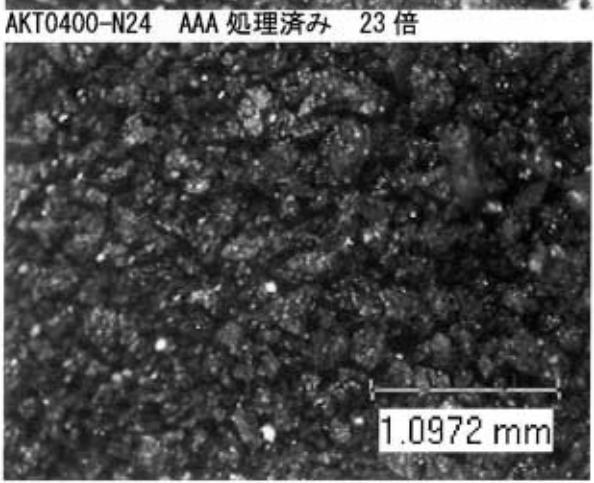
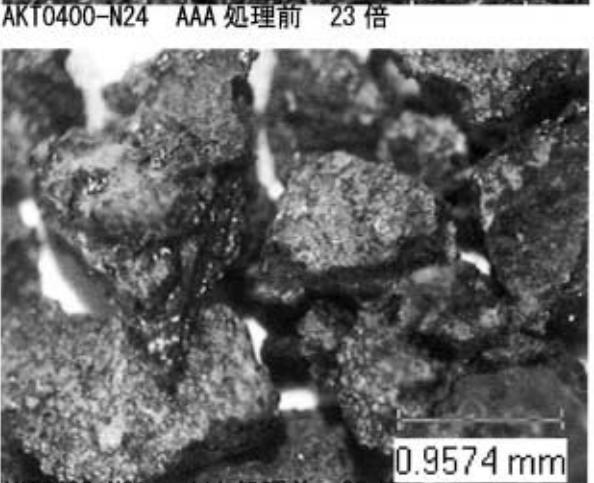
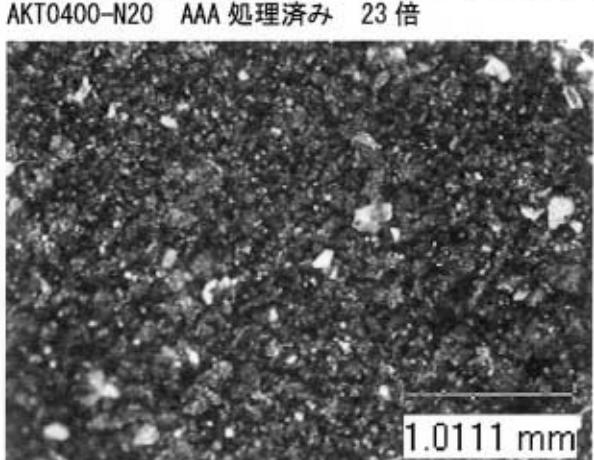
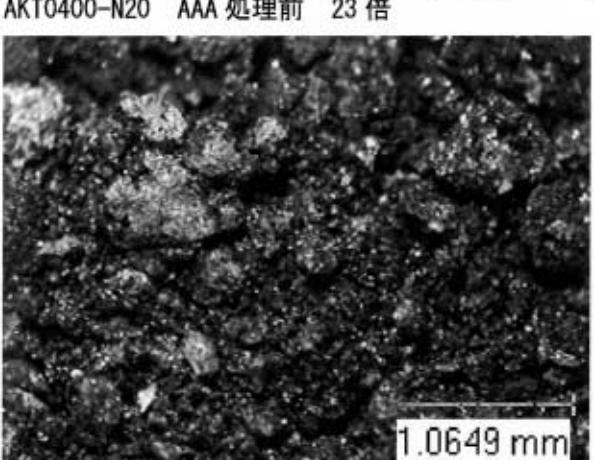
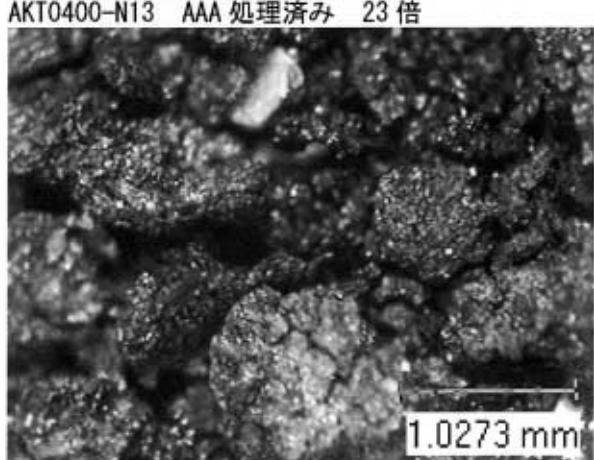
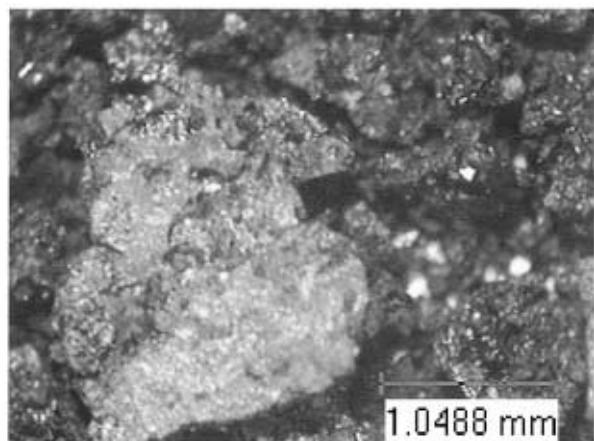
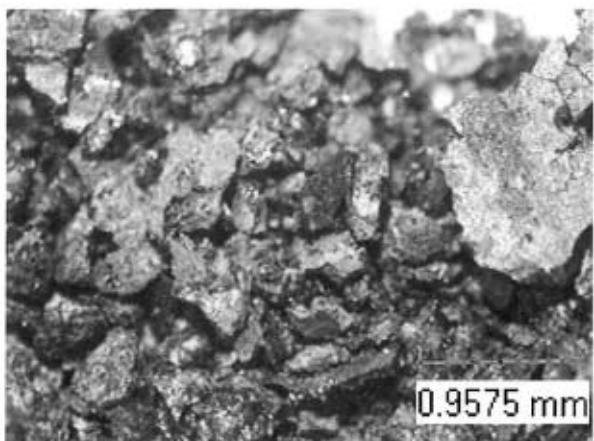
AKT0400-T10 内面付着状態

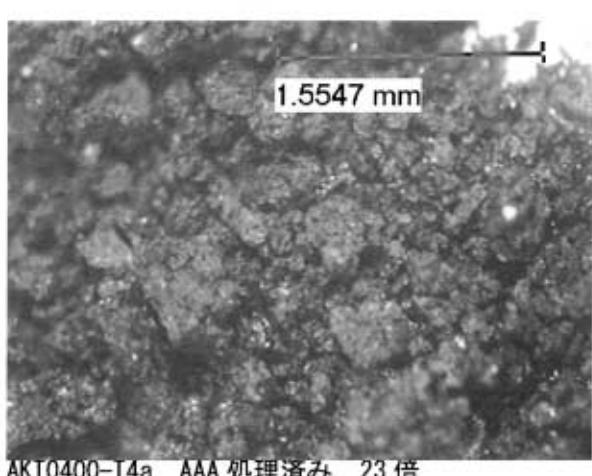
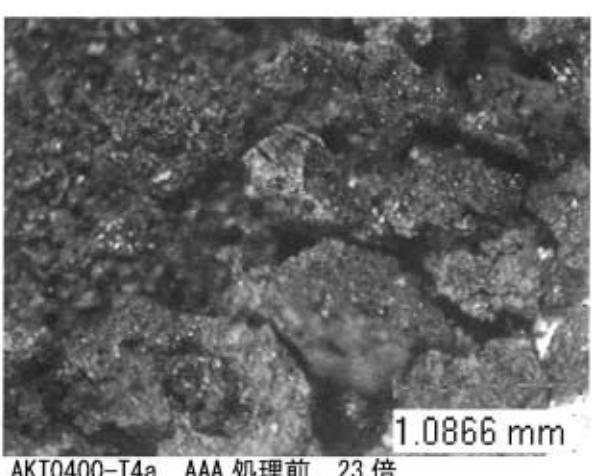
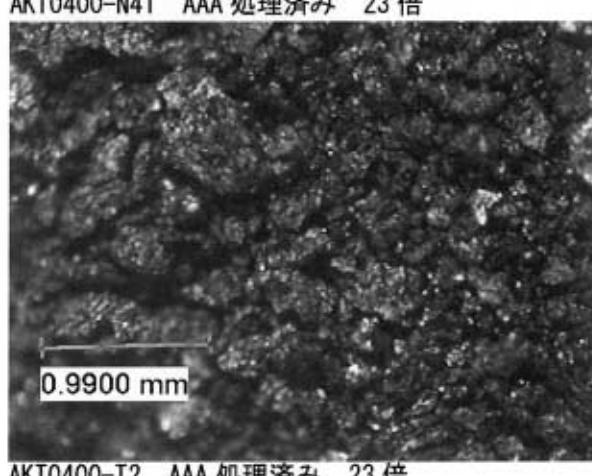
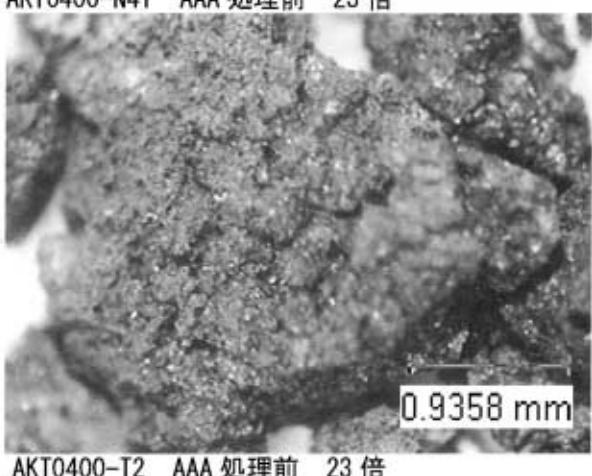
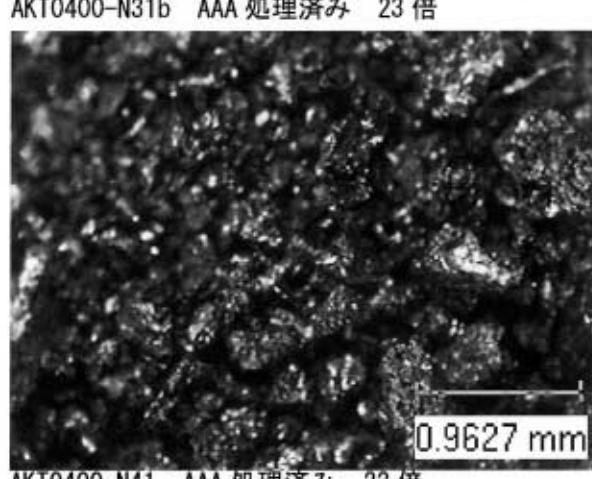
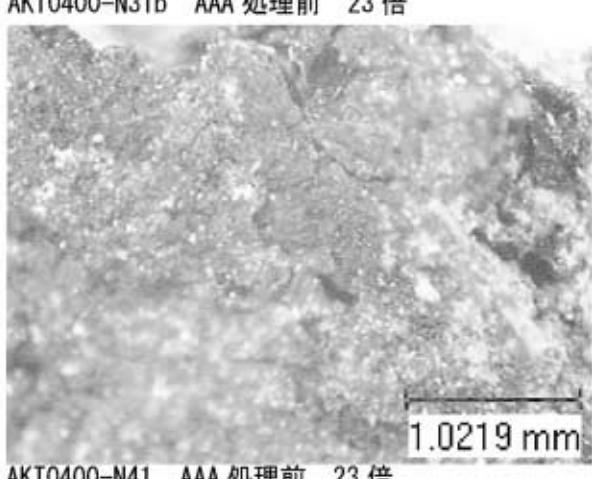
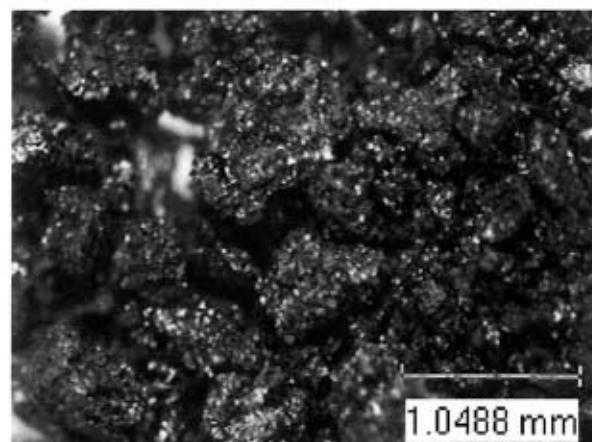
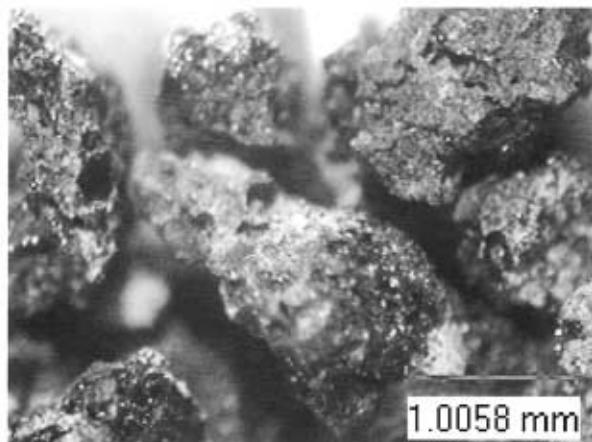


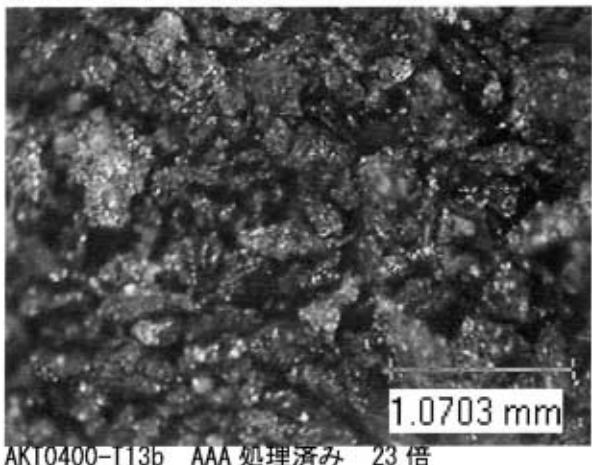
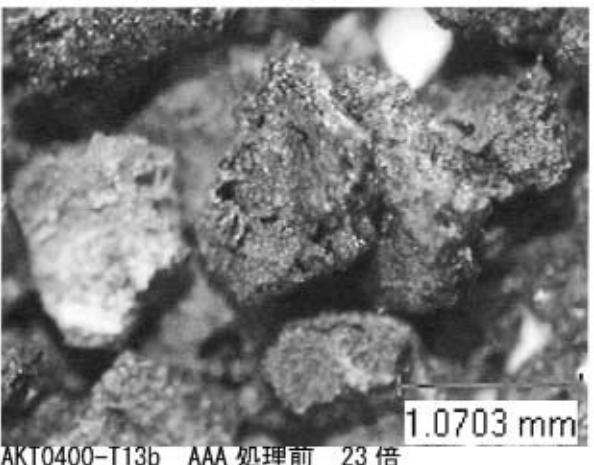
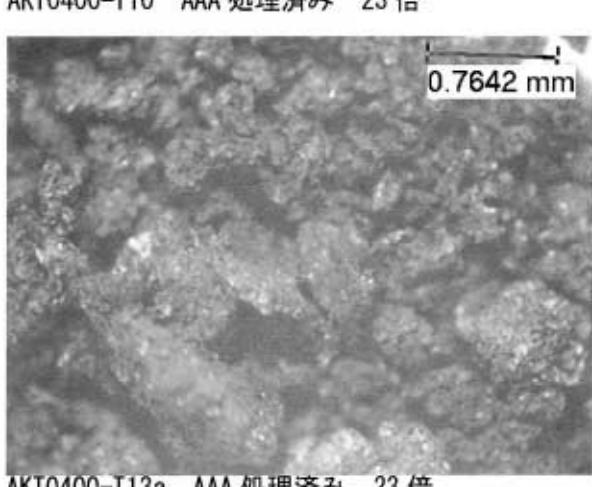
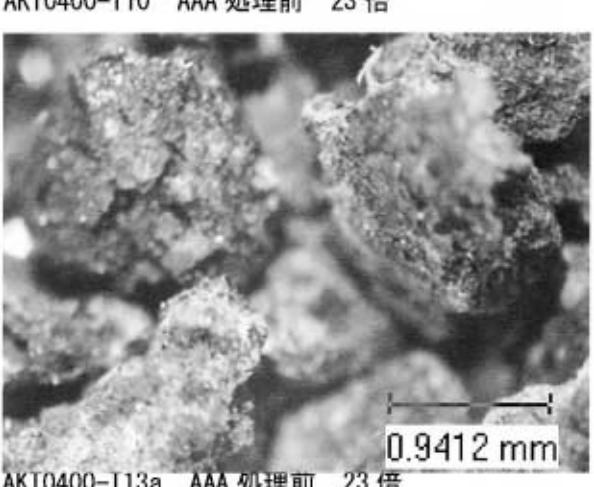
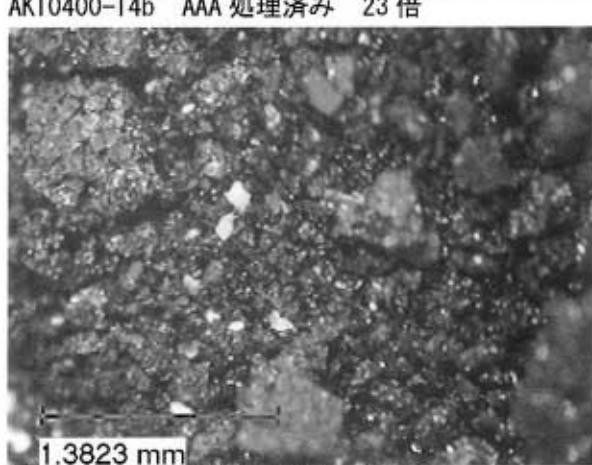
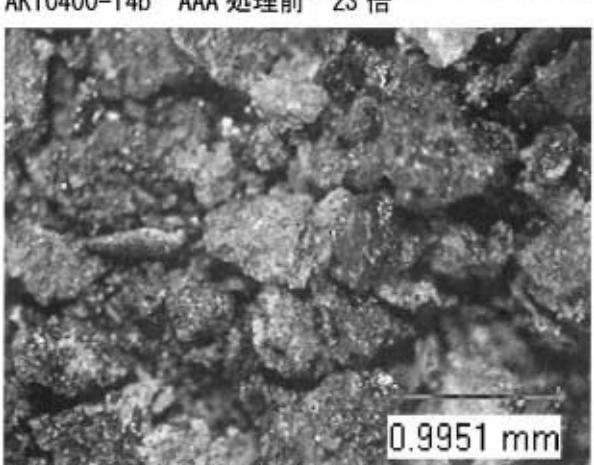
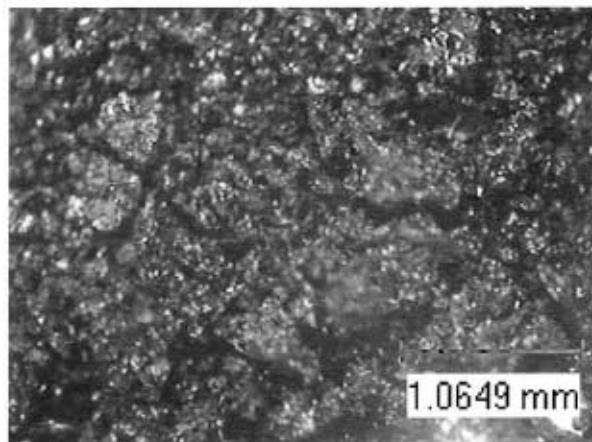
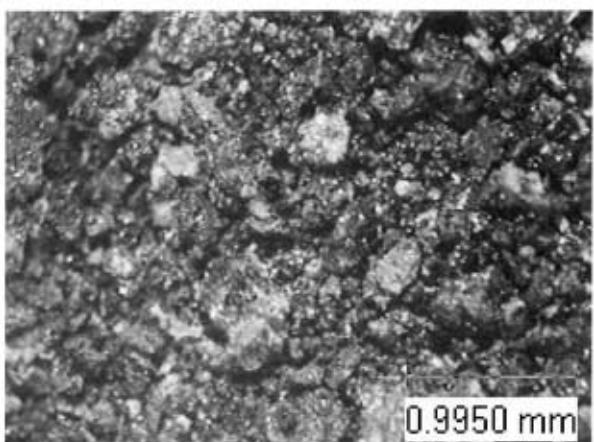
AKT0400-T13 外面物付着状態

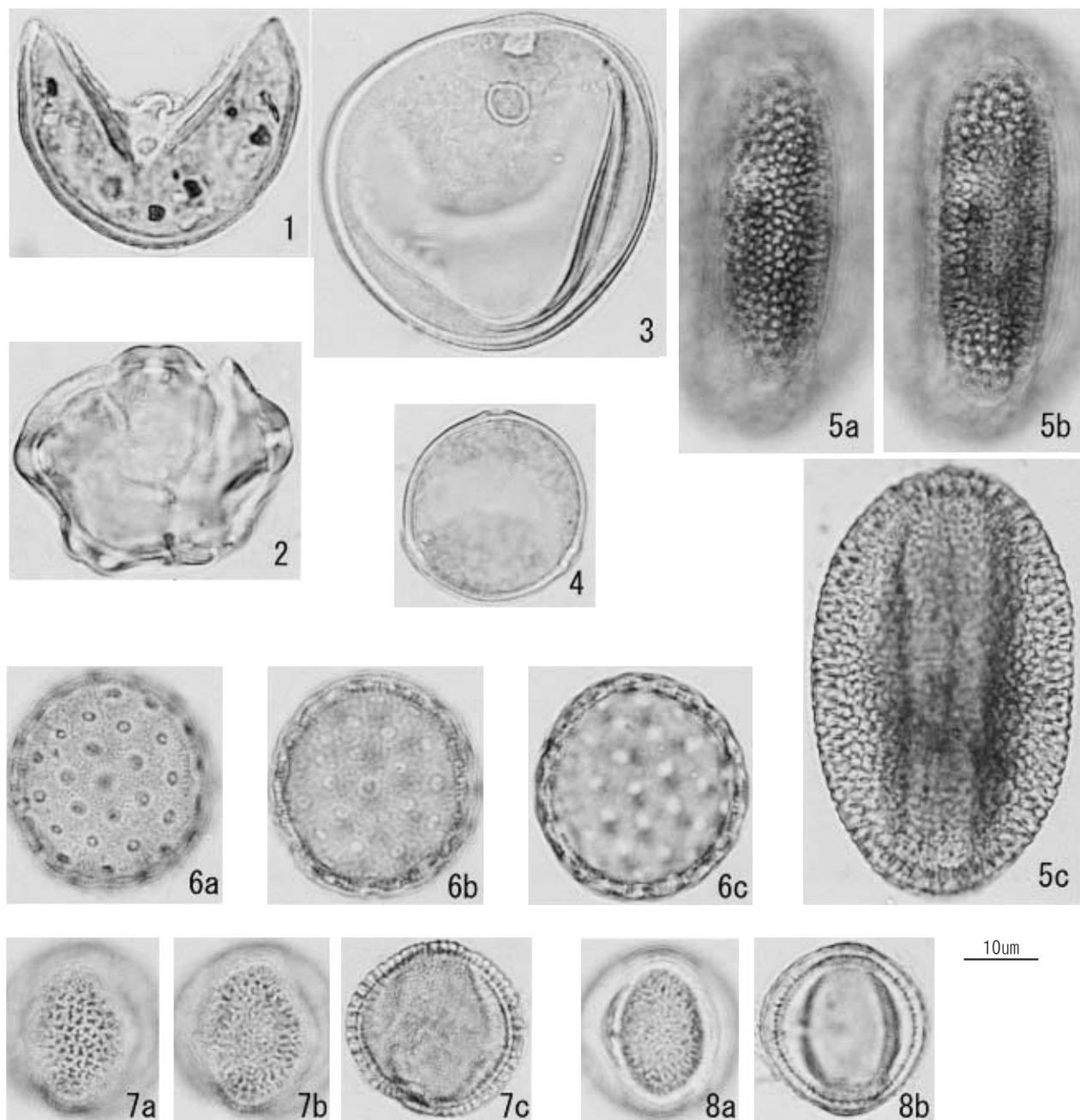


AKT0400-T13 内面付着状態

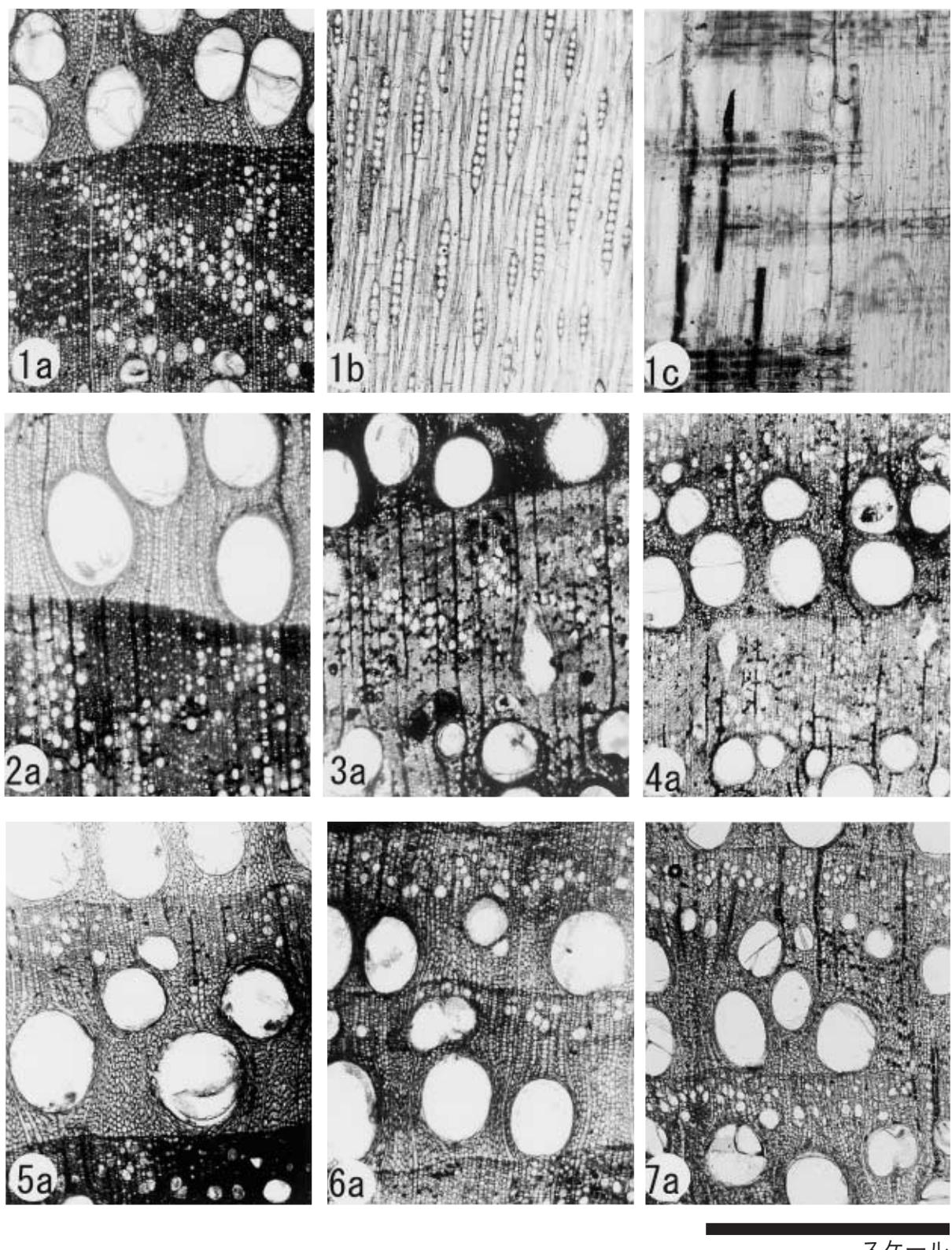








1. スギ属、試料6、PAL.MN 2097
2. ハンノキ属、試料9、PAL.MN 2099
3. イネ科、試料6、PAL.MN 2095
4. クワ科、試料6、PAL.MN 2098
5. ソバ属、試料6、PAL.MN 2094
6. アカザ科—ヒニ科、試料9、PAL.MN 2100
7. アブラナ科、試料6、PAL.MN 2096
8. ヨモギ属、試料7、PAL.MN 2101



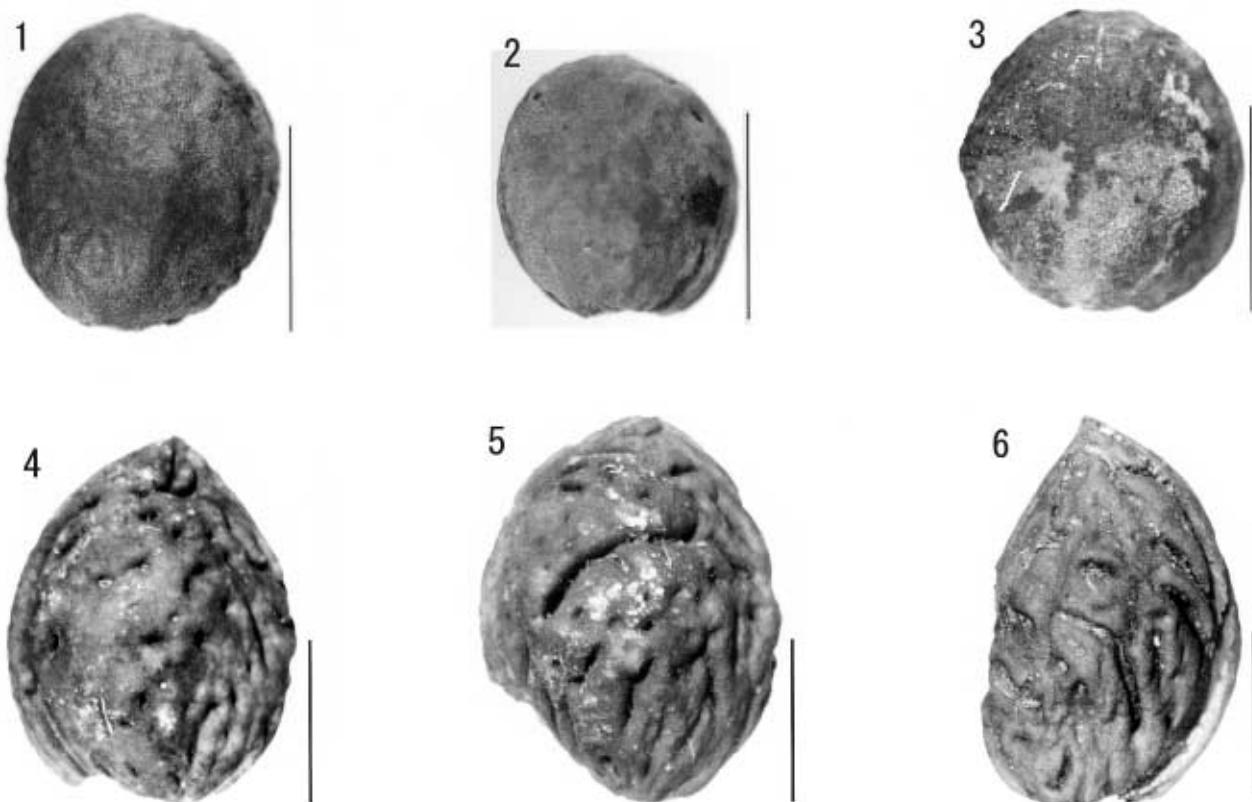
1a-1c:クリ (No.14, SKP269) 2a:クリ (No.11, SK070) 3a:クリ (No.12-1, SK152)

4a:クリ (No.12-2, SK152) 5a:クリ (No.13-1, SKP153) 6a:クリ (No.13-2, SKP153)

7a:クリ (No.15, SKP270)

a:横断面,スケール1.0mm b:接線断面,スケール0.4mm c:放射断面,スケール0.4mm

スケール



1.スモモ、核、No.16 2.スモモ、核、No.19 3.スモモ、核、No.17

4.モモ、核、No.18 5.モモ、核、No.19 6.モモ、核、No.20

(スケールは1cm)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかやしきにいせき							
書名	中屋敷II遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（土崎・小荒川地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	II							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第384集							
編著者名	伊藤伸吾・斎藤重隆・五十嵐一治・児玉 準・高安直美・本間與和・石澤宏基 打矢泰之・千葉史宏							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 電話 0187-69-3331							
発行年月日	西暦2005年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 。' "	東 経 。' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
なかやしきにいせき 中屋敷II遺跡	あきたけんせんばくぐん 秋田県仙北郡 せんはたまちちざきあざ 千畠町土崎字 なかやしき 中屋敷180-1外	市町村 05432	遺跡番号 54-5	39° 27' 38"	140° 34' 22"	第1次 20020513 20021004 第2次 20030513 20030729	第1次 10,000m ² 第2次 3,800m ²	県営ほ場整備事業（土崎・小荒川地区）
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
なかやしきにいせき 中屋敷II遺跡	集落跡	第1次 縄文時代	堅穴住居跡 12軒 土器埋設炉 2基 配石遺構 1基	縄文土器・土製品 石器・石製品	縄文時代中期後半および古代の集落跡。			
		弥生時代 古 代	土 坑 155基 土器埋設遺構 19基 捨て場 2か所 土 坑 1か所 堅穴住居跡 1軒 土 坑 1基					
なかやしきにいせき 中屋敷II遺跡	集落跡	第2次 縄文時代	捨て場 1か所 土器埋設遺構 1基 土 坑 43基 溝 跡 2条	縄文土器・土製品 石器・石製品	縄文時代中期から晩期および弥生時代初頭の集落跡。			
		古 代 中 世	堅穴状遺構 5軒 堅穴状遺構 1軒 掘立柱建物跡 3棟 堅穴状遺構 1軒 土 坑 34基 井戸跡 1基	土師器・須恵器 中世陶器・木製品 銭貨	古代～中世・近世の集落跡。北東調査区は中世の掘立柱建物跡、神社北側調査区は古代～中世の堅穴状遺構・土坑・井戸跡・溝跡が主体。			

秋田県文化財調査報告書第384集

中屋敷Ⅱ遺跡

—県営ほ場整備事業(土崎・小荒川地区)に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

印刷・発行 平成17年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号

電話(018)860-5193

印 刷 精巧堂印刷所